

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (106)

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ

(伊集院IC～市来IC)

ど びら がま あと
堂 平 窯 跡

(日置市東市来町)

第1分冊

2006年12月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
(106)

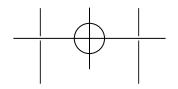
堂
平
窯
跡

二〇〇六年十二月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



鹿児島県



序 文

この報告書は南九州西回り自動車道鹿児島道路（鹿児島 I C ～市来 I C 間）の建設に伴って、平成10年度から平成11年度にかけて実施した日置市（旧日置郡東市来町）に所在する堂平窯跡の発掘調査の記録です。

堂平窯跡は「薩摩焼の里」美山にあり、この地域に17世紀初め、朝鮮陶工が開窯した2番目の窯跡といわれています。今回の発掘調査では、全長31m以上にも及ぶ単室傾斜窯と呼ばれる窯体のほか、雨水を防ぐ溝や作業場と想定される場所、焼き損じた陶器などを廃棄した物原などの遺構に加えて、この窯で焼かれた陶器類や窯道具など貴重な遺物も発見されました。

特に、今回発掘された窯の構造は全国的にも珍しく、一緒に出土した陶器類とともに、薩摩へ伝来した朝鮮的製陶技術や、薩摩焼の編年を考える上で重要な資料と考えられます。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及の一助になれば幸いです。

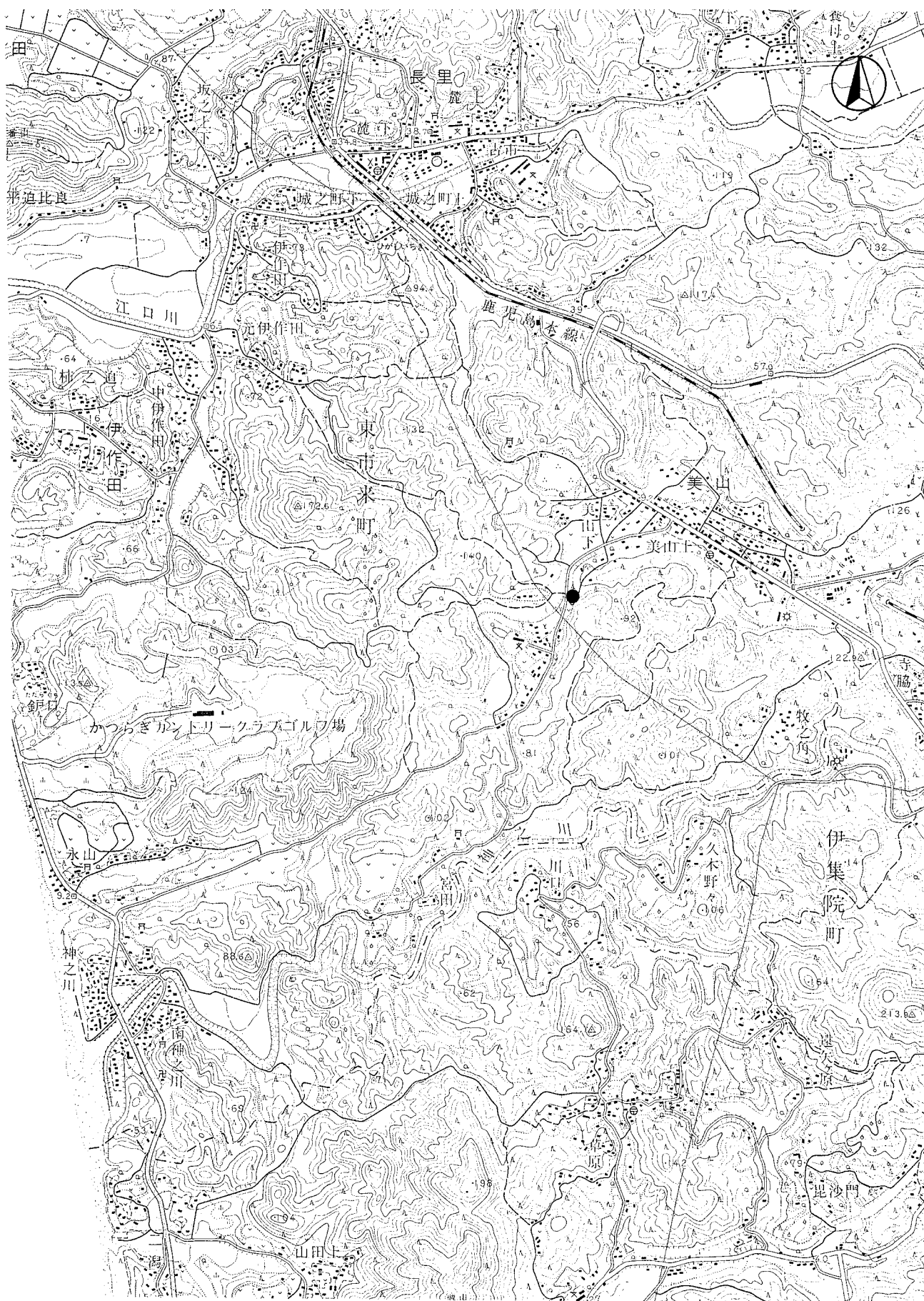
最後に、調査にあたりご協力いただいた国土交通省鹿児島国道事務所や東市来町教育委員会並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

平成18年12月

鹿児島県立埋蔵文化センター
所 長 宮 原 景 信

報告書抄録

ふりがな	どびらがまあと							
書名	堂平窯跡							
シリーズ名	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ							
シリーズ番号	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）							
編著者名	関 明恵・繁昌 正幸							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	平成18年12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
ど び ら か ま あ と 堂 平 窯 跡	か ご し ま け ん 鹿児島県 ひ お き し ひ が し 日置市東 いち き ち ゅ う み 市来町美 や ま あ ざ ど び ら 山字堂平	462161	29-91-0	31° 38′ 16″	130° 21′ 27″	本調査 19980804 ～ 19981217 道路部分 20000124 ～ 20000128	3500㎡	南九州 西回り 自動車道 鹿児島 道路建設
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
堂 平 窯 跡	生産遺跡	江戸時代(17世紀代)		単室傾斜窯 1基 粘土抗 掘立柱建物跡 1棟 柱穴 多数 排水溝 1基 石組み遺構 1基 物原 8か所		陶器 (碗・皿・蓋・水注 ・徳利・片口・播鉢 ・甕・壺等) 瓦(釉瓦) 窯道具		
要 約	本窯跡は、豊臣秀吉による文禄・慶長の役の際、島津義弘により連行された朝鮮人陶工らによって開窯された薩摩焼の古窯である。開窯年代ははっきりしないが、1620年代には稼働していたと考えられ、17世紀後半には閉窯したものと思われる。今回の調査では、窯跡1基をはじめとして上記のような遺構が確認され、物原からは大量の陶片が出土した。これらの陶片は、大きくⅠ期（17世紀前半）とⅡ期（17世紀後半）に分けることができ、Ⅰ期の陶片に色濃く残る朝鮮的陶技術の様相が、Ⅱ期になるにつれ次第に消失していく過程を見ることができる。							



例 言

- 1 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 I C ～市来 I C 間）建設事業に伴う堂平窯跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県日置市東市来町美山に所在する。
- 3 発掘調査は、国土交通省鹿児島国道事務所（当時は建設省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所）の受託事業として、平成10年度から平成11年度にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は、平成10年8月3日から平成10年12月17日及び平成12年1月24日から平成12年1月28日にかけて実施し、整理作業及び報告書作成事業は、平成15年度から平成18年度に実施した。
- 5 遺物番号は、遺構や物原通し番号とし、本文、挿図及び図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（当時は建設省九州建設局鹿児島国道工事事務所）が提示した工事計画図面に基づく。
- 8 発掘調査における図面の作成及び写真の撮影は、発掘調査担当者が行ったほか、空中写真の撮影を業者に委託した。
- 9 遺構実測図の浄書及び出土遺物の実測及び浄書は、整理作業員の協力を得て整理担当者が行った。

本報告書に使用した写真図版のうち、遺物撮影については、牛嶋茂氏（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所）に撮影の指導を受けたほか、鶴田静彦、西園勝彦、横手浩二郎及び吉岡康弘が行った。
- 10 本書の執筆は、関明恵及び繁昌正幸が行い、編集は関が担当した。年代測定及び科学分析等については委託した。
- 11 本遺跡の出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、活用する予定である。なお、本遺跡の遺物注記の略号は“ドビラ”である。
- 12 発掘調査に当っては、河口貞徳氏（鹿児島県考古学会会長）、上村俊雄氏（鹿児島大学助教授・現鹿児島国際大学教授）及び渡辺芳郎氏（鹿児島大学助教授・現教授）に現地指導をいただいた。
- 13 整理作業に当っては、渡辺芳郎氏（鹿児島大学助教授）、関一之氏（加治木町教育委員会）、沈寿官氏（第15代陶芸家）、池田榮史氏（琉球大学教授）、片山まび氏（大阪市立東洋陶磁美術館研究員）、大橋康二氏（九州陶磁文化館副館長）及び金尹姫氏（慶南文化財研究院学芸研究員）に遺物の指導をいただいた。

凡 例

- 1 本稿では、発掘調査時の調査地点及び物原の名称を一部下記のように変更して掲載した。

調査地点

(本 稿)	(調査時)
第1地点	1号窯
第2地点	2号窯

物 原

第1地点物原Ⅰ	物原1—Ⅰ
物原Ⅱ	物原1—Ⅱ
物原Ⅲ	物原1—Ⅲ
物原Ⅳ	物原1—Ⅳ
物原Ⅴ	物原1—Ⅴ
物原Ⅵ	物原1—Ⅵ
第2地点物原1	物原1—物 物原1—物原1
物原2	物原2—物原 物原2—物原1

- 2 第1地点と第2地点のグリッドは、それぞれで設定しているため、遺構実測図には、公共座標（座標系第Ⅱ系）を表示した。

3 遺物観察表

出土地点は、発掘調査時の表記ではなく、新しい表記で記入した。

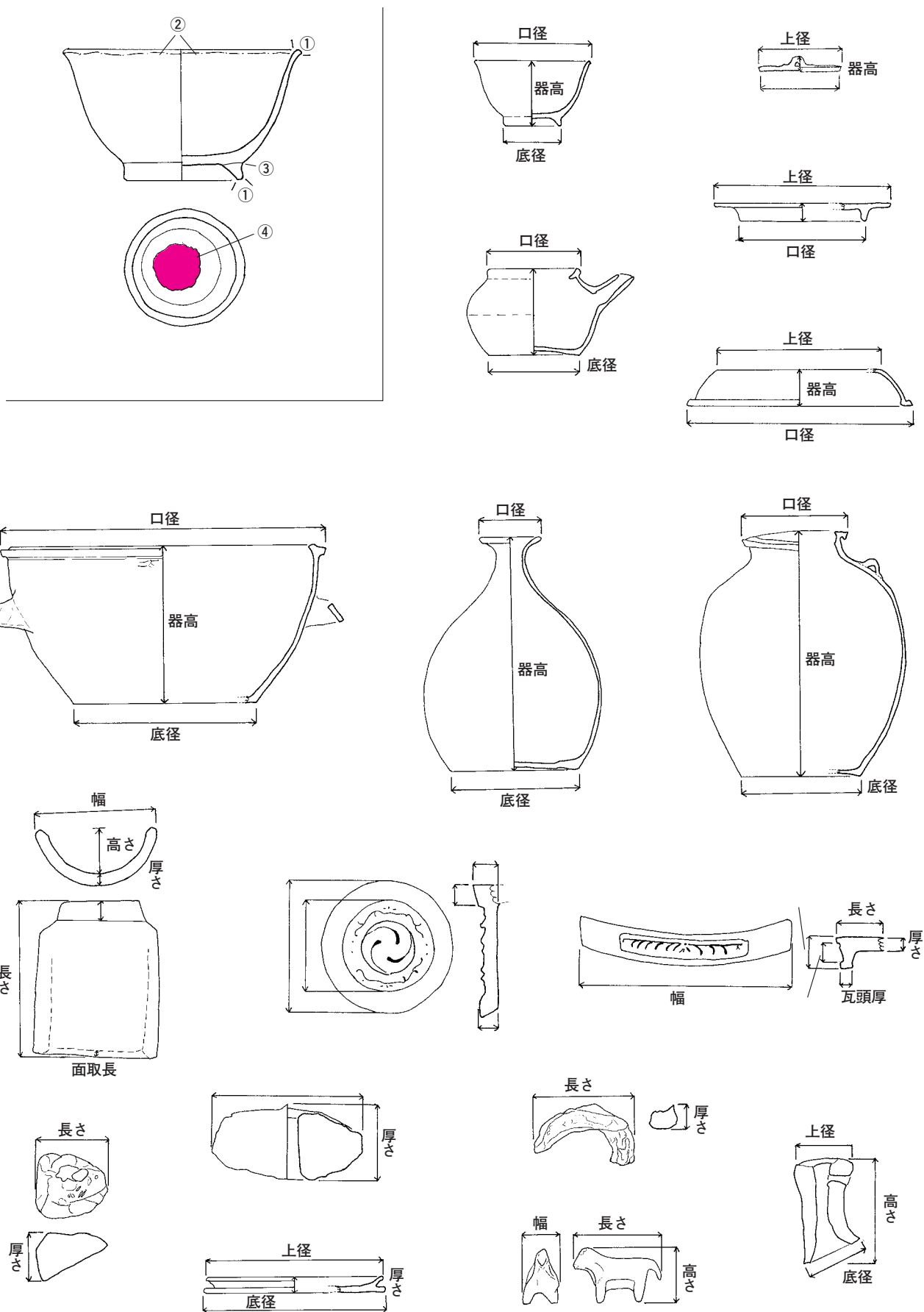
法量は、次頁の第2図に記載した部位を計測した。なお、焼き歪み等の変形がみられるものについては、口縁・底部は水平距離、器高は中心線部分で計測した。

胎土の色調や釉調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新訂 標準度色帳』（2001年度）を基準としながら、一般的な色調感も加えて表現した。

4 遺物実測図

実測図については、①～③のような表現を行った。（次頁第2図参照）

- ① 施釉ライン（一点破線）
- ② 口唇部及び高台畳付部等の釉剥ぎ位置
- ③ 製作時の粘土貼り付け部分・折り返し部分に観られるラインは、明確に確認できるものについては実線で表現し、観察できないものや不明瞭であるがラインが入ると思われるものについては、点線で表現した。
- ④ 陶器の底部等に看取される、黄色味がかったハマの痕跡と思われる目跡や、ハマの上面等に付着する白色砂粒については、朱色で表現した。



第2図 実測表現例及び測定位置図

目 次

〔第1分冊〕

序 文

報告書抄録

例 言

凡 例

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経緯…………… 1

第2節 遺跡の概要…………… 1

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯…………… 6

第2節 調査の組織…………… 7

第3節 調査の経過（日誌抄）…………… 9

第4節 移設保存の経過…………… 10

第5節 整理作業の経過…………… 12

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境…………… 14

第2節 歴史的環境…………… 14

第Ⅳ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法…………… 20

第2節 各地点の状況…………… 20

第3節 第1地点の調査…………… 24

〔第2分冊〕

第Ⅳ章 発掘調査の概要

第4節 第2地点の調査

第5節 表層の出土遺物

第6節 平成11年度の調査

第Ⅴ章 分析・同定

堂平窯跡の地磁気年代測定

堂平窯跡出土遺物の蛍光X線分析

堂平窯跡関連資料の蛍光X線分析

堂平窯跡から出土した炭化材の樹種

第Ⅵ章 まとめ

あとがき

〔第3分冊〕

写真図版

第1分冊 挿 図 目 次

第1図	堂平窯跡の位置	
第2図	実測表現例及び測定位置図	
第3図	南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財 発掘調査遺跡位置図	5
第4図	串木野窯実測図	15
第5図	日置市美山・苗代川窯跡群分布図	17
第6図	堂平窯跡周辺遺跡位置図 (1/25,000)	18
第7図	堂平窯跡調査範囲図 (1/1,000)	20
第8図	堂平窯跡グリッド配置図及び遺構配置図	21
第9図	堂平窯跡周辺地形図	23
第10図	第1地点遺構配置図	25
第11図	焚き口実測図	27
第12図	堂平窯実測図	29
第13図	窯体周辺コンタ図	32
第14図	7-D区窯側部西壁断面図	33
第15図	窯体北側遺構集中部分遺構配置図	36
第16図	7a-7A-6B区東壁土層断面図	37
第17図	8a-9a区北壁土層断面図	37
第18図	石組み遺構実測図	38
第19図	石組み遺構内出土遺物(1)	39
第20図	石組み遺構内出土遺物(2)	40
第21図	石組み遺構内出土遺物(3)	41
第22図	粘土坑出土状況図	43
第23図	粘土坑検出状況図	43
第24図	粘土坑出土遺物(1)	46
第25図	粘土坑出土遺物(2)	47
第26図	掘立柱建物跡実測図	49
第27図	溝 土層断面図	50
第28図	溝 実測図	51
第29図	溝内出土遺物(1)碗	52
第30図	溝内出土遺物(2)碗	53
第31図	溝内出土遺物(3)碗	54
第32図	溝内出土遺物(4)蓋	55
第33図	溝内出土遺物(5)蓋	56
第34図	溝内出土遺物(6)蓋	57
第35図	溝内出土遺物(7)水注	58
第36図	溝内出土遺物(8)水注	59
第37図	溝内出土遺物(9)德利	60
第38図	溝内出土遺物(10)德利	61
第39図	溝内出土遺物(11)片口	62
第40図	溝内出土遺物(12)片口	63
第41図	溝内出土遺物(13)播鉢	64
第42図	溝内出土遺物(14)播鉢	65
第43図	溝内出土遺物(15)播鉢	66
第44図	溝内出土遺物(16)播鉢	67
第45図	溝内出土遺物(17)播鉢	68

第46図	溝内出土遺物(18)蓋	69
第47図	溝内出土遺物(19)蓋	70
第48図	溝内出土遺物(20)蓋	71
第49図	溝内出土遺物(21)甕	72
第50図	溝内出土遺物(22)甕	73
第51図	溝内出土遺物(23)甕	74
第52図	溝内出土遺物(24)甕	75
第53図	溝内出土遺物(25)底部	76
第54図	溝内出土遺物(26)把手付甕	77
第55図	溝内出土遺物(27)壺	78
第56図	溝内出土遺物(28)壺	79
第57図	溝内出土遺物(29)壺	80
第58図	溝内出土遺物(30)壺	81
第59図	溝内出土遺物(31)その他	82
第60図	溝内出土遺物(32)窯道具	84
第61図	溝内出土遺物(33)窯道具	85
第62図	溝内出土遺物(34)窯道具	86
第63図	溝内出土遺物(35)窯道具	87
第64図	溝内出土遺物(36)堂平窯製品以外	88
第65図	物原Ⅰ土層断面図	89
第66図	物原Ⅰ・2D区土層断面	90
第67図	物原Ⅱ土層断面図	91
第68図	物原Ⅵ土層断面図	93
第69図	物原Ⅰ出土遺物(1)碗	94
第70図	物原Ⅰ出土遺物(2)蓋	95
第71図	物原Ⅰ出土遺物(3)德利	96
第72図	物原Ⅰ出土遺物(4)德利	97
第73図	物原Ⅰ出土遺物(5)德利	98
第74図	物原Ⅰ出土遺物(6)德利	99
第75図	物原Ⅰ出土遺物(7)水注	100
第76図	物原Ⅰ出土遺物(8)片口	101
第77図	物原Ⅰ出土遺物(9)播鉢	102
第78図	物原Ⅰ出土遺物(10)播鉢	103
第79図	物原Ⅰ出土遺物(11)播鉢	104
第80図	物原Ⅰ出土遺物(12)播鉢	105
第81図	物原Ⅰ出土遺物(13)播鉢	106
第82図	物原Ⅰ出土遺物(14)甕	107
第83図	物原Ⅰ出土遺物(15)甕	108
第84図	物原Ⅰ出土遺物(16)甕	109
第85図	物原Ⅰ出土遺物(17)把手付甕	110
第86図	物原Ⅰ出土遺物(18)底部	111
第87図	物原Ⅰ出土遺物(19)壺	112
第88図	物原Ⅰ出土遺物(20)壺	113
第89図	物原Ⅰ出土遺物(21)壺	114
第90図	物原Ⅰ出土遺物(22)壺	115
第91図	物原Ⅰ出土遺物(23)蓋	116
第92図	物原Ⅰ出土遺物(24)蓋	117
第93図	物原Ⅰ出土遺物(25)植木鉢	118

第 94 図	物原Ⅰ出土遺物(26)その他	119
第 95 図	物原Ⅰ出土遺物(27)その他	120
第 96 図	物原Ⅰ出土遺物(28)その他	121
第 97 図	物原Ⅰ出土遺物(29)窯道具	122
第 98 図	物原Ⅰ出土遺物(30)窯道具	123
第 99 図	物原Ⅰ出土遺物(31)窯道具	124
第100図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(32)碗・蓋	126
第101図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(33)片口	127
第102図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(34)播鉢・蓋	128
第103図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(35)蓋	129
第104図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(36)徳利・壺	130
第105図	物原Ⅰ(シラス下)出土遺物(37)壺	131
第106図	物原Ⅱ出土遺物(1)碗	132
第107図	物原Ⅱ出土遺物(2)皿	133
第108図	物原Ⅱ出土遺物(3)白色陶胎 碗	134
第109図	物原Ⅱ出土遺物(4)白色陶胎 皿	135
第110図	物原Ⅱ出土遺物(5)蓋	136
第111図	物原Ⅱ出土遺物(6)蓋	137
第112図	物原Ⅱ出土遺物(7)徳利	138
第113図	物原Ⅱ出土遺物(8)徳利	139
第114図	物原Ⅱ出土遺物(9)徳利	140
第115図	物原Ⅱ出土遺物(10)徳利	141
第116図	物原Ⅱ出土遺物(11)片口	142
第117図	物原Ⅱ出土遺物(12)片口	143
第118図	物原Ⅱ出土遺物(13)播鉢	144
第119図	物原Ⅱ出土遺物(14)播鉢	145
第120図	物原Ⅱ出土遺物(15)播鉢	146
第121図	物原Ⅱ出土遺物(16)播鉢	147
第122図	物原Ⅱ出土遺物(17)播鉢	148
第123図	物原Ⅱ出土遺物(18)播鉢	149
第124図	物原Ⅱ出土遺物(19)蓋	150
第125図	物原Ⅱ出土遺物(20)蓋	151
第126図	物原Ⅱ出土遺物(21)蓋	152
第127図	物原Ⅱ出土遺物(22)蓋	153
第128図	物原Ⅱ出土遺物(23)甕	154
第129図	物原Ⅱ出土遺物(24)甕	155
第130図	物原Ⅱ出土遺物(25)甕	156
第131図	物原Ⅱ出土遺物(26)甕	157
第132図	物原Ⅱ出土遺物(27)壺	158
第133図	物原Ⅱ出土遺物(28)壺	159
第134図	物原Ⅱ出土遺物(29)底部	160
第135図	物原Ⅱ出土遺物(30)底部	161
第136図	物原Ⅱ出土遺物(31)鉢	162
第137図	物原Ⅱ出土遺物(32)植木鉢	163
第138図	物原Ⅱ出土遺物(33)その他	164
第139図	物原Ⅱ出土遺物(34)その他	165
第140図	物原Ⅱ出土遺物(35)その他	166
第141図	物原Ⅱ出土遺物(36)瓦	167

第142図	物原Ⅱ出土遺物(37)瓦	168
第143図	物原Ⅱ出土遺物(38)瓦	169
第144図	物原Ⅱ出土遺物(39)窯道具	170
第145図	物原Ⅱ出土遺物(40)窯道具	171
第146図	物原Ⅱ出土遺物(41)窯道具	172
第147図	物原Ⅱ出土遺物(42)窯道具	173
第148図	物原Ⅱ出土遺物(43)窯道具	174
第149図	物原Ⅱ出土遺物(44)窯道具	175
第150図	物原Ⅱ出土遺物(45)窯道具	176
第151図	物原Ⅱ出土遺物(46)堂平窯製品以外	177
第152図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(1)碗	178
第153図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(2)皿	179
第154図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(3)白色陶胎 碗	180
第155図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(4)蓋	181
第156図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(5)蓋	182
第157図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(6)徳利	183
第158図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(7)片口	184
第159図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(8)把手付壺	185
第160図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(9)播鉢	186
第161図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(10)播鉢	187
第162図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(11)蓋	188
第163図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(12)蓋	189
第164図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(13)甕	190
第165図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(14)甕	191
第166図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(15)壺	192
第167図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(16)壺	193
第168図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(17)鉢・把手付甕	194
第169図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(18)その他	195
第170図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(19)その他	196
第171図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(20)動物型土製品	197
第172図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(21)大形製品	198
第173図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(22)瓦	199
第174図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(23)窯道具	200
第175図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(24)窯道具	201
第176図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(25)窯道具	202
第177図	物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(26)堂平窯製品以外	203

表 目 次

第 1 表	南九州西回り自動車道鹿児島道路 (伊集院ⅠC～市来ⅠC) 建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	4
第 2 表	日置市美山・苗代川窯跡群分布調査地点一覧	16
第 3 表	周辺遺跡地名表	19
第 4 表	石組み遺構 遺物観察表	42
第 5 表	粘土坑 遺物観察表	47
第 6 表	溝 遺物観察表 1	52

第7表	溝	遺物觀察表2	53	第55表	物原Ⅰ	遺物觀察表23	131
第8表	溝	遺物觀察表3	54	第56表	物原Ⅱ	遺物觀察表1	132
第9表	溝	遺物觀察表4	55	第57表	物原Ⅱ	遺物觀察表2	133
第10表	溝	遺物觀察表5	56	第58表	物原Ⅱ	遺物觀察表3	134
第11表	溝	遺物觀察表6	57	第59表	物原Ⅱ	遺物觀察表4	137
第12表	溝	遺物觀察表7	59	第60表	物原Ⅱ	遺物觀察表5	139
第13表	溝	遺物觀察表8	61	第61表	物原Ⅱ	遺物觀察表6	141
第14表	溝	遺物觀察表9	62	第62表	物原Ⅱ	遺物觀察表7	143
第15表	溝	遺物觀察表10	63	第63表	物原Ⅱ	遺物觀察表8	145
第16表	溝	遺物觀察表11	64	第64表	物原Ⅱ	遺物觀察表9	147
第17表	溝	遺物觀察表12	66	第65表	物原Ⅱ	遺物觀察表10	148
第18表	溝	遺物觀察表13	68	第66表	物原Ⅱ	遺物觀察表11	149
第19表	溝	遺物觀察表14	69	第67表	物原Ⅱ	遺物觀察表12	151
第20表	溝	遺物觀察表15	71	第68表	物原Ⅱ	遺物觀察表13	152
第21表	溝	遺物觀察表16	72	第69表	物原Ⅱ	遺物觀察表14	155
第22表	溝	遺物觀察表17	73	第70表	物原Ⅱ	遺物觀察表15	157
第23表	溝	遺物觀察表18	75	第71表	物原Ⅱ	遺物觀察表16	158
第24表	溝	遺物觀察表19	77	第72表	物原Ⅱ	遺物觀察表17	159
第25表	溝	遺物觀察表20	79	第73表	物原Ⅱ	遺物觀察表18	160
第26表	溝	遺物觀察表21	80	第74表	物原Ⅱ	遺物觀察表19	163
第27表	溝	遺物觀察表22	81	第75表	物原Ⅱ	遺物觀察表20	165
第28表	溝	遺物觀察表23	83	第76表	物原Ⅱ	遺物觀察表21	166
第29表	溝	遺物觀察表24	84	第77表	物原Ⅱ	遺物觀察表22	167
第30表	溝	遺物觀察表25	85	第78表	物原Ⅱ	遺物觀察表23	169
第31表	溝	遺物觀察表26	86	第79表	物原Ⅱ	遺物觀察表24	170
第32表	溝	遺物觀察表27	88	第80表	物原Ⅱ	遺物觀察表25	173
第33表	物原Ⅰ	遺物觀察表1	94	第81表	物原Ⅱ	遺物觀察表26	174
第34表	物原Ⅰ	遺物觀察表2	95	第82表	物原Ⅱ	遺物觀察表27	175
第35表	物原Ⅰ	遺物觀察表3	96	第83表	物原Ⅱ	遺物觀察表28	176
第36表	物原Ⅰ	遺物觀察表4	99	第84表	物原Ⅱ	遺物觀察表29	177
第37表	物原Ⅰ	遺物觀察表5	100	第85表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表1	179
第38表	物原Ⅰ	遺物觀察表6	101	第86表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表2	180
第39表	物原Ⅰ	遺物觀察表7	103	第87表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表3	181
第40表	物原Ⅰ	遺物觀察表8	195	第88表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表4	182
第41表	物原Ⅰ	遺物觀察表9	106	第89表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表5	185
第42表	物原Ⅰ	遺物觀察表10	109	第90表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表6	187
第43表	物原Ⅰ	遺物觀察表11	110	第91表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表7	189
第44表	物原Ⅰ	遺物觀察表12	111	第92表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表8	190
第45表	物原Ⅰ	遺物觀察表13	113	第93表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表9	192
第46表	物原Ⅰ	遺物觀察表14	115	第94表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表10	193
第47表	物原Ⅰ	遺物觀察表15	116	第95表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表11	194
第48表	物原Ⅰ	遺物觀察表16	117	第96表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表12	197
第49表	物原Ⅰ	遺物觀察表17	118	第97表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表13	198
第50表	物原Ⅰ	遺物觀察表18	119	第98表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表14	201
第51表	物原Ⅰ	遺物觀察表19	122	第99表	物原Ⅲ～Ⅵ	遺物觀察表15	202
第52表	物原Ⅰ	遺物觀察表20	125				
第53表	物原Ⅰ	遺物觀察表21	126				
第54表	物原Ⅰ	遺物觀察表22	129				

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至るまでの経過

建設省九州地方建設局(中央省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称)は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課(組織改革により平成8年度より文化財課に改称)に照会した。この計画に伴い、文化課が平成3年6月に伊集院ICと市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当事業区内には、27か所の遺物散布地及び確認調査の必要な地点が所在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課の協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事との間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・本調査が実施されることになった。

これを受けて、平成8年度から平成12年度にかけて、毎年度、計画的かつ継続的に各遺跡の確認調査及び本調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の遺跡の概要については、以下の通りである。

第2節 遺跡の概要

- 1 一ノ谷…伊集院町下谷口字一ノ谷の飯牟礼台地から西側へ延びた標高90～95mの丘陵端部に位置し、調査面積は1,250㎡である。中世～近世の古道・五輪塔及び染付や近世～近代にかけての掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピットが青磁・染付・土師器・薩摩焼などと一緒に発見された。
- 2 永迫平…伊集院町下谷口字下永迫の恋之原台地から延びた支脈が盆地状の水田地帯に落ちる直前の標高約150m程の小台地上に立地している。調査面積は14,000㎡で旧石器時代ナイフ形石器文化の2か所のブロックと細石刃文化期の細石刃が出土し、縄文時代早期前半の前平式期には9軒の住居跡を始め、3基の連穴土坑と9基の集石、多数の土坑を検出。その他、古墳時代から近世にかけての遺物も出土している。
- 3 下永迫A…伊集院町下谷口字下永迫の標高85～110mのやせ尾根に挟まれた谷間に立地する。調査面積は2,600㎡で、縄文時代後期の指宿式土器と石鏃、古墳時代の成川式土器、古代～中世では土坑・集石が検出され、青磁・白磁が出土した。
- 4 柳原…伊集院町下谷口の標高約90～100mの山間の谷間、傾斜地及び周辺のやや小高いテラス状の尾根部に立地する。調査面積は6,000㎡である。縄文時代早期の集石4基や後期の石匙、石鏃、古代の土坑、焼土跡と共に土師器・須恵器が発見された。
- 5 上山路山…伊集院町大田字上山路山の標高約130mのシラス台地上に位置する。舌状台地の端部にあたり、平坦面から続く緩やかな斜面と、谷頭を含んだかなり急な斜面とからなる。調査面積は6,000㎡である。旧石器時代細石刃文化の遺物と縄文時代(早期・後期)、弥生～古墳時代の遺物が発見された。主になるのは、縄文時代早期で遺構は、道跡や集石、遺物は岩本式・前平式・吉田式土器等が出土した。
- 6 大田城跡…伊集院町大田字下城山迫の標高約120mの台地上に所在する。調査面積は4,000㎡である。中世山城の可能性を指摘された遺跡であったが、山城の存在を示す遺構は検出されなかった。旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化の遺物と縄文時代早期の集石、土坑等の遺構と岩本式・前平式土器等の遺物が発見された。
- 7 堂平窯跡…東市来町美山の標高約85～92mの傾斜面にある江戸時代の薩摩焼の窯跡である。(本報告書)調査面積は3,500㎡で、窯、作業場、物原が発見された。窯は長さ約30m、幅1.2m、傾斜角17°の半円筒形をした単室傾斜窯である。陶器(甕・壺・德利・土瓶・こね鉢・播鉢・動物形土製品)、瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・のし瓦)や窯道具が多量に出土した。

- 8 池之頭…東市来町美山字池之頭にあり、美山池北西部の標高約80～100mのシラス台地の尾根状部分に立地し、調査面積は7,500㎡である。旧石器時代のナイフ・台形石器・スクレイパー・細石刃核・細石刃、縄文時代早期の集石8基・前平式・吉田式・石坂式土器や中期の春日式・並木式・阿高式土器、晩期の入佐式や黒川式土器が出土した。また古墳時代の成川式土器（甕・壺・高坏等）が多く発見された。
- 9 雪山…東市来町美山字雪山の標高約95mの台地東端に立地する。調査面積は2,700㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石2基と前平式・春日式土器・石鏃・石皿・磨石、古墳時代の成川式土器が出土したが、主体は近世～近代の薩摩焼の遺構・遺物で、炉跡・物原？・土坑等が薩摩焼（茶家・土瓶・搦鉢・瓶・碗）、染付（碗・皿）や窯道具と一緒に発見された。
- 10 猿引…東市来町長里字猿引の標高約110～115mの尾根状の台地に立地する。調査面積は800㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群1基と三稜尖頭器・ナイフ・台形石器・敲石や細石刃文化の細石刃核・細石刃と縄文時代前期の曾畑式土器・黒曜石片が出土した。
- 11 犬ヶ原…東市来町伊作田字犬ヶ原の標高約66mの独立丘陵のシラス台地に立地する。調査面積は、2,000㎡で、旧石器時代の細石刃核・細石刃、縄文時代の浅鉢・深鉢・石斧・石皿・石鏃・石匙、古墳時代の成川式土器（甕・壺・鉢）等が出土したが、主になるのは平安時代で、堀立柱建物跡（4間×4間・総柱）が製鉄に関する遺物（鑪羽口・鉄滓・鉄製品）・土師器・須恵器と共に多く発見された。
- 12 向栴城跡…東市来町伊作田の標高約50mの独立台地上に所在する。調査面積は14,000㎡である。旧石器時代ナイフ形石器文化の剥片尖頭器・ナイフ、縄文時代草創期の隆帯文土器が多量の石鏃と一緒に見つかった。また古墳時代の竪穴住居跡や中世～近世にかけての空堀・帶曲輪・堀切・竪穴状遺構・堀立柱建物跡・炉跡などが発見され、中世山城の遺構が検出された。
- 13 堂園平…東市来町伊作田の遠見番山から下る斜面の裾部にあり、標高約50mの平坦地に立地する。調査面積は2,000㎡で、旧石器時代のナイフ形石器文化の礫群9基と剥片尖頭器・ナイフ・台形石器と細石刃文化の細石刃核・細石刃、縄文時代の集石4基・吉田式・塞ノ神式土器や轟式土器等が発見されている。また古代の土師器・須恵器等も出土している。
- 14 今里…東市来町伊作田字今里の標高約65mの台地端の傾斜地に所在する。調査面積は14,000㎡で、旧石器時代ナイフ形石器文化の礫群、剥片尖頭器・ナイフ・台形石器や細石刃文化の細石刃核・細石刃・調整剥片が出土し、縄文時代の集石や前平式・深浦式・出水式・黒川式土器や石匙などの石器、古墳時代の成川式土器が発見された。
- 15 市ノ原…市来町大里字から東市来町湯田字市ノ原に至る標高約50m台地西側に所在する。調査面積は62,000㎡である。遺跡は第1地点から第5地点まであり、旧石器時代ナイフ形石器文化、細石刃文化、縄文時代（早期～晩期）、弥生時代の住居跡・壺棺、古墳時代の住居跡、古代～中世、近世の街道跡など多時期に渡り、多種多様な遺構・遺物が発見された。
- 16 上ノ原…市来町大里の東シナ海を望む標高40mの台地上に立地し、三方は急峻な傾斜面となっている。調査面積は2,000㎡で縄文時代の集石3基、土坑が検出され、塞ノ神式、轟式土器と石斧・石鏃・石匙などが出土した。古墳時代では竪穴式住居跡1基と土坑・成川式土器が、古代～中世は土師器・須恵器・青磁・滑石製石鍋が発見された。

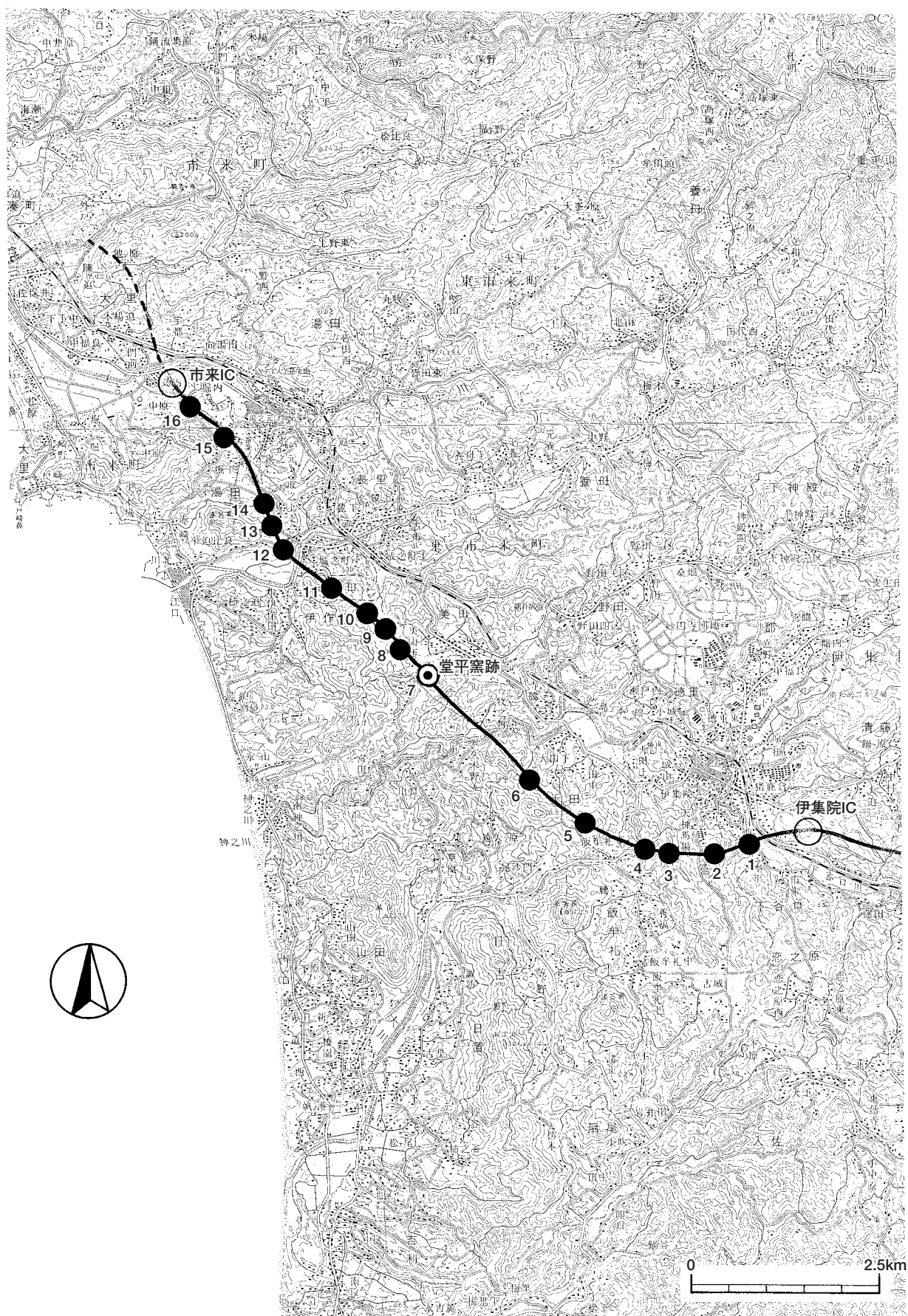
既刊の報告書

「一ノ谷遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（31）2001, 3
「池之頭遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（32）2002, 3
「今里遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）2003, 9
「市ノ原遺跡（第1地点）」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（49）2003, 3
「犬ヶ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（50）2003, 3
「雪山遺跡・猿引遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（53）2003, 3
「上ノ原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（62）2003, 3
「下永迫A遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（72）2004, 3
「永迫平遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（93）2005, 3
「柳原遺跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（94）2005, 3
「大田城跡」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（95）2005, 3
「山ノ中」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（103）2006, 3
「堂園平」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104）2006, 3
「市ノ原5地点」	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（105）2006, 3

第1表 南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	時代	備考
①	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認H 8. 10 全面H 8. 10～11	1, 250㎡	三垣・桑波田	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑 陶磁器 県埋文センター報告書31 2001刊行
②	永迫平	伊集院町下谷口	確認H 8. 10～12 全面H 8. 12～H10. 7	14, 000㎡	三垣・桑波田 繁昌・藤崎・三垣・中原 桑波田・川口・大窪	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩） 古代～近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・進穴土坑・前平式土器 土師器・青磁
③	下永迫A	伊集院町下谷口	確認H 9. 10 全面H10. 5～7	2, 600㎡	池畑・三垣・元田 上之園・栗林	古代 中世	土坑・集石・土師器・須恵器 青磁・白磁 県埋文センター報告書72 2004刊行
④	柳原	伊集院町下谷口	確認H 9. 11 全面H10. 7～10	6, 000㎡	池畑・三垣・元田 繁昌・中原・川口・大窪	古代～中世 中世～近世	土坑・焼土・土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構
5	上山路山	伊集院町大田	確認H 9. 2 全面H 9. 5～H10. 3	6, 000㎡	三垣・桑波田 寺原・桑波田	旧石器 縄文（早・後） 弥生～古墳	剥片・破片 道跡・集石・岩本式・前平式・吉田式 成川式
⑥	大田城跡	伊集院町大田	確認H 8. 12～H 9. 1 全面H 9. 12～H10. 3	4, 000㎡	三垣・桑波田 湯之前・橋口	旧石器 縄文（早）	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式・石鏃・磨石
⑦	堂平窯跡 本報告書	東市来町美山	確認H10. 2 全面H10. 8～12	3, 500㎡	池畑 池畑・繁昌・宮田洋一・ 森田・元田・川口・大窪	江戸	窯・柱跡・粘土溜まり・土坑・物原 陶器・瓦・窯道具
⑧	池之頭	東市来町美山	確認H9. 8 全面H10. 8～11 H12. 7～8	7, 500㎡	湯之前・橋口 宮田洋一・寺原 宮田洋一・三垣	旧石器（細石刃） 縄文（早・後・晩）	細石刃核・細石刃 集石・前平式・吉田式・石坂式 成川式土器 県埋文センター報告書32 2002刊行
⑨	雪山	東市来町美山	確認H12. 6 全面H12. 6～8	2, 700㎡	宮田洋一・三垣	縄文（早） 近世～近代	集石・前平式 陶磁器類・窯道具 県埋文センター報告書53 2003刊行
⑩	猿引	東市来町長里	確認H12. 5 全面H12. 5～6	800㎡	宮田洋一・三垣	旧石器 縄文（前）	礫群・ナイフ・台形石器・三稜尖頭器・剥片 骨製式 県埋文センター報告書53 2003刊行
⑪	犬ヶ原	東市来町伊作田	確認H 9. 2, H10. 6 全面H11. 12～H12. 2	2, 000㎡	池畑・三垣 牛ノ濱・橋口・大窪	旧石器・縄文（晩） 古代	細石刃核・細石刃・黒川式 掘立柱建物跡・鍛冶炉・土師器・硫黄・滑石 県埋文センター報告書50 2003刊行本報告書
12	向柵城跡	東市来町伊作田	確認H 8. 11～12 全面H 9. 4～H10. 3 H10. 7～8	14, 000㎡	池畑・西園 鶴田・勇 八木澤・横手	旧石器 縄文（草創・早・後） 古墳 中世～近世	剥片尖頭器・ナイフ 石鏃・隆帯文・前平式・市来式 竪穴住居・成川式 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・竪穴状遺構・掘立 柱建物跡・炉跡・土坑・青磁・備前焼
13	堂園平	東市来町伊作田	確認H 8. 11～12 全面H10. 5～11	2, 000㎡	池畑・西園 八木澤・横手	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・前・後） 古代	尖頭器・ナイフ・台形石器・蔽石 礫群・細石刃核・細石刃 集石・吉田式・塞ノ袖式・藁式 土坑・土師器・須恵器
⑬	今里	東市来町伊作田	確認H 8. 11 全面H 9. 4～11	14, 000㎡	池畑・西園 湯之前・橋口	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早・前・後・晩） 古墳	礫群・剥片尖頭器・ナイフ・台形石器 細石刃核・細石刃・フランク・調整剥片 集石・前平式・深浦式・出水式・黒川式・石匙 成川式 県埋文センター報告書33 2002刊行
15	市ノ原	東市来町湯田 市来町大里	確認H 8. 10～12 全面H 8. 12～H11. 7	62, 000㎡	繁昌・西園・宮田茂 池畑・繁昌・西園・寺師 ・前野・森田・宮田洋・八木 澤・中原・藤野・三垣・元田・ 西村・寺原・宮田茂・松村・松 崎	旧石器（ナイフ） 旧石器（細石刃） 縄文（早～晩） 弥生 古代～中世 近世	礫群・ナイフ・台形石器・尖頭器 細石刃核・細石刃 集石・石器・石器 竪穴住居跡・帯棺 竪穴住居跡・土坑・成川式 竪穴住居跡・焼土・溝状遺構・土師器・須恵器 街道跡・掘立柱建物跡・鍛冶炉 県埋文センター報告書49 2003刊行
⑯	上ノ原	市来町大里	確認H 8. 11 全面H10. 7～9	2, 000㎡	繁昌・宮田茂 上之園・栗林	縄文（早） 古墳 古代～中世	集石・土坑・塞ノ袖式 竪穴住居跡・土坑・成川式・貝殻土坑 土師器・須恵器・青磁 県埋文センター報告書62 2003刊行

○ 報告書刊行済



第3図 南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡位置図

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 調査の経緯

平成10年8月3日から発掘調査を開始した。

調査開始時の遺跡の状況は、谷への急傾斜面に竹や雑木、大小規模の草が全面にはびこっており、里道の北側にある耕作を中止した畑地には笹や草が生えるなど荒れていたほか、竹林も広がっているなど全体として荒撫地となっていた。

調査は、谷側の雑木や竹・草の伐採から開始した。その後、窯が谷に直交していることを想定して任意の場所を設定し、そこから谷と直交するようにほぼ東西及び南北方向へ4m毎のグリッドを設けた。ベルトとして残す場所を除いて表土剥ぎを行い、掘り下げを開始した。

当初、堂平窯跡2号窯跡と仮称して調査に入ったが、調査が進むにつれて、窯本体が存在せず、物原だけであることが判明した。

その段階で、本来の窯跡の所在の解明が課題として浮上した。この時、第14代沈 寿官氏や近くに畑を持つ人々たちから「里道の北側も窯跡があった。」との指摘を受けたため、今度は北側の伐採を行うことになった。

伐採の結果、里道と直交する傾斜面に、火熱を受けてガラガラになった土が確認されたことから、それを追いかけて検出していった。北側に向けて下るとともに、火熱を受けた土がガラス化していることが看取されたため、これが窯の本体であるとの確信を抱くようになった。

ただ、6、7mでつながりが切れたことから、これで窯は終息すると考えられた。

この時点で硬化した面が多数あったため、仮にA窯～E窯として、複数の窯が同一地で作り替えられながら所在しているものとして調査を行った。

ところが、焚き口が見当たらなかったことから、北側の表土剥ぎを継続して行ったところ、再び硬化した面が確認されたことから、それまでの窯とは異なったものと考え、F窯と呼称してさらに下方の検出を継続していった。

この段階で、これまでの窯とは別個の窯と考えたため、中心軸を若干変えて設定した。

掘り下げを継続したが、硬化面はさらに北側に続いていき、15～20m程下がった時点で角礫を用いた四角形の石組みが現れ、ほぼ平らになり、ここで火熱を受けた部分の終焉を迎えた。

この段階で全体が現れたことになる。これまでの窯の床面の角度を計測した結果、若干の差異は見られるものの、ほぼ17度という傾斜角に収束されることから、これらの複数と考えていた窯は、結果的に1基の窯であるこ

とが判明した。

窯の東側にはこの窯に沿って溝が掘られており、さらにその東側には柱穴群が見られ、2間×2間に庇を持つ掘立柱建物跡に復元されるなど、作業場と推定される一画を確認した。

また、窯の上方、南側に物原が確認されたのを始め、窯の周囲に数か所の物原を確認した。

窯の調査の最終段階として断ち割りを行ったが、調査後には壊されることになっていたことから、可能な限り多くのか所の断ち割りを行うことでより多くの情報を得る方針を立て、開始した。断ち割りを開始して半日後に、移設保存の方針が伝えられた。現場としては、半日前であれば、断ち割りに取り掛かっていなかったことから、検出時のような割合に面的な広がりを残した状態で移設できた可能性があったものの、実際は断ち割りを開始して半日経っていたことから、すでに切り刻まれた状態となっていた。

後悔先に立たずで、当初の予定通り多くの情報を得るべく、断ち割りを行ったすべての場所で詳細な図面を取ること徹底した構造の解明を目指すことにした。

調査の終了後、平成11年1月21日から3月31日にかけて移設を行い、現在では美山郵便局後方の公園の一角でその姿を披露している。

また、平成12年1月24日から1月28日まで里道部分の調査を行い、これをもって終了した。整理作業及び報告書作成作業は、平成15年度から平成18年度にかけて県立埋蔵文化財センターで行い、平成18年9月に報告書を刊行して堂平窯跡の調査のすべてを終了した。



第2節 調査の組織

本調査（平成10年度）

事業主体者 建設省鹿児島国道工事事務所
 調査主体者 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 吉 永 和 人
 調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 尾 崎 進
 調 査 課 長 戸 崎 勝 洋
 調 査 課 長 補 佐 新 東 晃 一
 主任文化財主事
 兼第三調査係長 池 畑 耕 一
 調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主任文化財主事
 兼第三調査係長 池 畑 耕 一
 文 化 財 主 事 繁 昌 正 幸
 文 化 財 主 事 宮 田 洋 一
 文 化 財 主 事 森 田 郁 朗
 文化財研究員 元 田 順 子
 文化財調査員 川 口 雅 之
 文化財調査員 大 窪 祥 晃
 調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化センター
 主 査 前屋敷 裕 徳
 主 査 政 倉 孝 徳
 主 事 溜 池 佳 子

本調査（平成11年度）

事業主体者 建設省鹿児島国道工事事務所
 調査主体者 鹿児島県教育委員会
 企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課
 調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 吉 永 和 人
 調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 黒 木 友 幸
 調 査 課 長 戸 崎 勝 洋
 調 査 課 長 補 佐 新 東 晃 一
 主任文化財主事
 兼第三調査係長 青 崎 和 憲
 調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 文 化 財 主 事 繁 昌 正 幸
 文化財研究員 三 垣 恵 一
 調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 政 倉 孝 弘
 主 査 今 村 孝一郎
 主 事 溜 池 佳 子

整理作業（平成15年度）

事業主体者 鹿児島県教育委員会
 調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 木 原 俊 孝
 調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 田 中 文 雄
 総 務 係 長 平 野 浩 二
 調 査 課 長 新 東 晃 一
 調 査 課 長 補 佐 立 神 次 郎
 主任文化財主事
 兼第三調査係長 牛ノ濱 修
 調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 文 化 財 主 事 関 明 恵
 文 化 財 主 事 繁 昌 正 幸
 調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 脇 田 清 幸

整理作業（平成16年度）

事業主体者 鹿児島県教育委員会
 調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 木 原 俊 孝
 調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 次長兼総務課長 賞 雅 彰
 総 務 係 長 平 野 浩 二
 調 査 課 長 新 東 晃 一
 調 査 課 長 補 佐 立 神 次 郎
 主任文化財主事
 兼第三調査係長 牛ノ濱 修
 調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 文 化 財 主 事 関 明 恵
 主任文化財主事 繁 昌 正 幸
 調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 主 査 脇 田 清 幸



整理作業（平成 17 年度）

事業主体者 国土交通省鹿児島国道事務所
 整理主体者 鹿児島県教育委員会
 整理責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所 長 上 今 常 雄
 整理企画者 次長兼総務課長 有 川 昭 人
 次長兼調査第一課長 新 東 晃 一
 調査第二課長 立 神 次 郎
 主任文化財主事兼調査第二課
 第二調査係長 牛ノ濱 修
 主任文化財主事 繁 昌 正 幸
 整理担当者 主任文化財主事 繁 昌 正 幸
 文化財主事 関 明 恵
 事務担当者 主幹兼総務係長 平 野 浩 二
 主 査 寄井田 正 秀

報告書作成検討委員会 平成18年 3 月28日
 上今所長ほか11名
 報告書作成指導委員会 平成18年 3 月25日
 新東次長ほか 3 名

報告書作成（平成 18 年度）

事業主体者 国土交通省鹿児島国道事務所
 作成主体者 鹿児島県教育委員会
 作成責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 所長（～7月31日）上 今 常 雄
 （8月1日～）宮 原 景 信
 作成企画者 次長兼総務課長 有 川 昭 人
 次長兼南の縄文調査室長
 新 東 晃 一
 調査第二課長 立 神 次 郎
 主任文化財主事兼調査第二課
 第二調査係長 牛ノ濱 修
 主任文化財主事 宮 田 栄 二
 文化財主事 関 明 恵
 作成担当者 文 化 財 主 事 関 明 恵
 事務担当者 総 務 係 長 寄井田 正 秀
 主 査 蒲 池 俊 一
 企画担当者 池畑耕一・繁昌正幸



第3節 調査の経過（日誌抄）

平成10年度

8月3日～8月7日

堂平窯跡の調査を開始する。伐採及び焼却。谷側（里道の南側）の崖面にある遺物の状況から窯ではないような印象を受ける。物原と考えられる。地形測量。谷部（小道の南側）に2か所のトレンチを設定して掘り下げを開始する。5日、東市来町教育委員会社会教育課長ほか2名来訪。7日、宮之城町教育委員会2名来訪。

8月10日～11日

重機により谷部の表土剥ぎ作業。清掃した結果、焼土に陶器の混じった層があり、物原と思われた。また、崖部（里道と小道の間の区域）を清掃して物原の範囲を確定する。幅は約6m程度である。

8月17日～21日

谷部の物原のライン確定。ベルトを設定して物原の掘り下げを開始。最下部から瓦、黒色土より管状土錘出土。長期研修生、調査に参加する。グリッドの杭打ち。1～6区、A～G区を設定する。D-5、6区は表土が厚い。陶器多量に出土する。文様のある甕、線刻のある鉢なども出土。E、F-5、6区は整地層が2枚見られる。下層に白薩摩もある。平板測量。土層の写真撮影及び実測。物原の広がり場所によりさまざまで、投棄（遺棄）された時期や段階がいろいろであるようだ。6-E区、西壁清掃、写真、実測。上段の地形測量。18日、美山小児童2名発掘体験。

8月24日～26日

5・6区とD・E区ベルト外し。同区、掘り下げ終了後の地形測量を行う。25cmコンタ。6-E区の物原2の掘り上げ。3-C・D区、表土剥ぎ。表土下はシラスとなり、東側は段となって落ちている。2～4-C～G区の表土を重機で剥ぐ。2・3-D区に焼土あり。4-E～G区、物原の掘り下げ。遺物が大量に出土する。

9月1日～4日

D・E-1～3区、表土剥ぎ。杭打ち。周辺地形図作成。E・F-2・3区、焼土層はあるものの、窯とは考えられない。牛形土製品など出土。窯体の確認を道路脇で試みるが、いずれにも確認されず。遺跡の遠景写真撮影。2日、文化財課内村課長、倉元文化財主事来訪。

9月7日～11日

E・F-2～4区、表土剥ぎ、掘り下げ。再度、窯体の確認を試みる。今回は、道路（里道）の閉鎖を公民館長に依頼し、3か所のトレンチで行ったが、物原の流れと思われる部分は確認したが、窯体は結局確認されなかった。同時に、里道北側の竹藪の中に窯があるとの情報があるため、公民館長の了解を得て翌週頃から調査を開始する予定。建設省へも連絡を行う。9日、知覧町・加世田市の埋蔵文化財担当者来訪。

9月16日～18日

崖部を全体的に清掃し、近景・遠景の写真撮影。3・4-E・F区、物原掘り下げ。出土品多量。瓦・陶器のほか、タタキの当て具や白薩摩、茶道具もある。遺物出土状況写真撮影。17日、伊集院町教育委員会梅北浩一氏来訪。NHK 森永記者取材。18日、台風接近により午後の作業を中止する。

9月21日～25日

3・4-E・F区、物原掘り下げ。土製品、窯道具など出土。3・4-B～D区のシラス上面の地形測量。2-F区より牛形土製品出土。21日、埋蔵文化財センター吉永所長来訪。22日、東市来町教育委員会谷山社会教育課長・徳重主事・文化財保護審議会委員4名来訪。25日、東市来町石神正明教育長、社会教育課長とともに来訪。

10月1日～2日

3・4-E・F区、掘り下げ、断面清掃、写真撮影。3-G区、掘り下げ。シラス混じりの層から火計り手碗出土。物原2に多くの陶器・瓦が含まれている。物原1より白磁系の窯道具出土。1日、沈 寿官先生（第14代）指導。白薩摩の素焼きは貴重との指摘を受ける。

10月5日～9日

E～G-2・3区、物原1掘り下げ。1号窯（本来の堂平窯跡）周辺の竹林伐採、物原の状況を概略つかむ。地表の地形測量。表土剥ぎ開始。2号窯（これまで調査の谷部の新しい呼称）F区北壁実測。6日、鹿児島大学本田先生・渡辺先生指導。串木野高校吉元校長来訪。9日、鹿児島大学上村先生、ラサール学園永山先生現地指導。美山小4～6年児童体験学習。

10月12日～16日

1号窯、道路東側部分の壁削り。C・D-3区、表土剥ぎ。3-D・E区、物原掘り上げ。4-D区、表土下に窯の床面が存在、4-C区にかけて長さが5m以上、幅は約50cm。単室傾斜窯である。2号窯、物原掘り下げ。軒丸瓦完形品出土状況写真撮影。白物碗、壺の破片など出土。道跡が幾層もある。シラス上面の地形測量。13日、鹿児島大学名誉教授五味克夫先生、現地指導。15日、センター所長視察。西日本新聞下村記者取材。16日、宮崎産業経営大学柴田先生指導。

10月20日～25日

1号窯、竹林の伐採、焼却。窯の前面に古い窯と思われる面が発見される。重機により表土剥ぎ。窯の傾斜角は16度。2号窯、物原1、2掘り下げ。断面実測。20日、県庁にて窯の略測及び保存について打ち合わせ。南日本新聞社園田記者、MBC 税所記者取材。22日、福岡大学小田富士雄先生・沈 寿官氏（第14代）指導。23日、KTS 今吉記者、朝日新聞社藤脇記者取材。24日、一般の見学者25名、25日は23名訪れる。

10月27日～29日

1号窯，地表面の地形測量。8～9区，表土除去。7－C区付近に粘土を敷き詰めた土坑らしきものを確認する。5－D区に南北及び東西に向く窯を確認する。窯道具に砂目のついたものあり。

29日，NHK 森永記者取材。

11月2日～6日

A～C－6・7区，清掃，遺構検出。道跡・粘土置き場の平板実測後，1／10で実測。粘土塊断ち割り。B～E－3～5区，遺構概略位置実測。1号物原，掘り下げ。推定東作業場，柱穴・土坑掘り下げ，完掘。1号窯，検出作業。2日，南日本文化部藤田記者取材。4日，上市来小発掘体験。南日本新聞写真部橋口記者，撮影を行う。佐世保市の方6名見学。黎明館学芸課山下課長ほか2名，見学。MBC 新名主ディレクター撮影。

11月9日～13日

推定作業場，ピット・土坑の平板実測。溝の断ち割りと掘り下げ。清掃，写真撮影。窯本体，床面検出。1号・2号物原，検出，断ち割り，掘り下げ。2号は断面実測も開始する。10日，MBC 新名主ディレクター撮影。串木野警察署長里駐在所平田巡查来訪。NHK 森永記者取材。MBC 撮影。黎明館牛ノ濱修氏，始良町歴史民俗資料館館長ら3名見学。

11月16日～20日

推定作業場，土坑完掘。A窯・F窯，軸決定及び平板実測。断ち割り場所決定，断ち割り。1号・2号物原，掘り下げ，清掃。溝，掘り下げ。19日，国立歴史民俗博物館平川 南先生，鹿児島大学渡辺芳郎先生，見学。文化財課内村課長，視察。

11月24日～26日

B～D－5～8区，溝掘り下げ，石組み検出。ピット・土坑，実測。窯，続き検出，断ち割り，実測。1号物原，掘り下げ。2号物原，土層剥ぎ取り（転写）作業開始。コンタ実測。地形，コンタ実測。24日，琉球大学池田栄史先生現地指導。25日，戸崎課長視察。

11月30日～12月4日

溝，掘り下げ，断面実測。1号物原，断面実測。物原1－V・VI，掘り下げ。窯，断ち割り部分の断面実測。石組み遺構，断面実測，掘り方検出。

12月7日～11日

1号物原，ベルト外し，コンタ計測，平板実測。物原1－V・VI，構築面掘り下げ，遺物採集。窯本体，中・下段，平面・断面実測。断ち割り。7日，竜門司焼陶芸家川原氏，加治木町教育委員会関氏見学。

12月14日～17日

窯，清掃，写真撮影。断ち割り，断面実測。溝，断面実測，遺物採集。道跡，検出。物原，構築部分掘り下げ。14日・15日，南日本新聞社園田記者，取材。15日・16日，

西日本新聞社記者，取材。堂平窯跡の調査は終了した。（この後，窯跡の移設作業が業者によって行われた。）

平成11年度

平成12年1月24日～28日

里道下の調査を開始する。重機によって舗装部分を除去した後，さらに物原の部分までを慎重に除去する。平面で3か所，断面で2層に分かれていることから，都合，4枚に分けられそうである。物原イ～ニとして図化と取り上げを行う。その後，2枚増えたため，計6枚で図化と取り上げを行い，写真撮影を行って調査を終了した。これをもって，堂平窯跡の調査をすべて終了した。

第4節 移設保存の経過

①平成10年12月7日

発掘調査の成果についての報告提出

調査の成果をまとめて，重要遺跡として県文化財課へ報告する。

② 平成10年12月17日

県文化財課調整

東市来町から移設保存を要望する意向が伝えられ，建設省からも「移設しても良い。移設に係る経費についても負担する。」旨が伝えられたため，町は県教委及び建設省に要望することになった。

③平成10年12月24日

町・町教委が移設保存の要望書を提出

東市来町長下茂孝一及び町教育長石神正明が建設省鹿児島国道工事事務所所長増田博行に「堂平窯跡（初期薩摩焼古窯）の保存・活用の要望書」を提出した。

④同日

工事費用の見積依頼

鹿児島県立埋蔵文化財センターから近畿ウレタンへ見積を依頼する。

⑤平成10年1月21日

移設工事着工

近畿ウレタン，移設工事に着工する。

手順としては，窯をいくつかの部分に分け，ウレタンを吹き付けた後に固定し，搬出する。同時に，移設地では設置する箇所を掘り下げ，コンクリートで床を造る。その後，ウレタンで固定された窯を図面に基づいて設置し，不足する部分は現場の土を補充し，全体を仕上げるという手順である。

⑥平成10年3月31日

移設工事竣工

完了検査を行い，移設工事をすべて終了した。

ウレタンによる
固定作業



固定した遺構の
吊り上げ作業



窯の据え付け枠



第5節 整理作業の経過

整理作業は、平成15年度4月～平成17年度3月にかけて行い、平成18年度に印刷製本を行った。おおまかな整理作業の内容については下記のとおりである。

平成15年度

4月～6月 遺物分類・選別・接合・注記・溝内出土遺物実測・トレース

7月～9月 遺物分類・選別・接合・注記・溝内出土遺物実測

10月～12月 遺物分類・選別・接合・注記・溝内出土遺物トレース

1月～3月 遺物分類・選別・接合・注記・溝内出土遺物実測・トレース

平成16年度

4月～6月 第1地点物原Ⅰ出土遺物実測・トレース・拓本・原稿執筆

7月～9月 第1地点物原Ⅱ出土遺物実測・トレース・拓本

10月～12月 復元

1月～3月 復元・第1地点物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物実測・トレース・レイアウト・写真撮影

平成17年度

4月～6月 遺構図作成・第1地点物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物実測・遺構内出土遺物実測・トレース・拓本・レイアウト・原稿執筆

7月～9月 遺構図作成・第2地点物原出土遺物実測・トレース・拓本、レイアウト・原稿執筆

10月～12月 平成11年度発掘調査分実測・トレース・拓

本・復元・レイアウト・原稿執筆

1月～3月 復元・写真撮影・レイアウト・遺物整理

平成18年度 印刷・製本

なお、発掘調査及び報告書作成において、次の団体・個人に指導・助言並びに御協力をいただいた。深く感謝申し上げたい。(五十音順・敬称略)

東市来町教育委員会（現在日置市教育委員会）

出光美術館・大阪市立東洋陶磁美術館・鹿児島大学法文学部人文学科異文科交流論研究室・鹿児島陶磁器研究会・堺市埋蔵文化財センター・根津美術館

荒川正明・有川孝行・家田淳一・上東克彦・枝元泰生・大武進・岡田章一・桑原田聡・重久淳一・下鶴弘・鈴木裕子・出口浩・所崎平・永井正浩・西田宏子・橋口亘・長谷川眞・深野信之・深港恭子・堀内秀樹・本田道輝・松村真希子・柳田晴子・山下廣幸・四元誠

発掘作業員

有村照雄・有村なるみ・有村ひろみ・石塚宗雄・楠原操・久保勇・早田妙子・武田末武・豊辻貞美・津守勉・中藺節子・畠中忠・平岡栄子・外園ミネ子・益山ヨリ子・三原和義

整理作業員

赤塚涼子・池之上真吾・井手康代・今村光子・藏元眞奈美・坂口裕子・新徳より子・末川七々恵・末原涼子・杉元夏美・中野由美・永田朋子・西清子・橋口小百合・林由美子・東国原ゆかり・福山京子・別府祐子・松平ひとみ・森川さとみ・若松香代子・和田まり子



移築保存された窯跡



指導風景及び整理作業風景

第Ⅲ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

堂平窯跡は、鹿児島県日置市美山堂平（旧日置郡東市来町）に所在する。日置市は平成17年5月に、伊集院町・東市来町・日吉町・吹上町の4町が合併して誕生した。薩摩半島の北西部に位置し、東は鹿児島市（平成16年11月、鹿児島市・吉田町・桜島町・喜入町・松元町・郡山町の1市5町が合併）、薩摩川内市（平成16年10月、川内市・樋脇町・入来町・東郷町・祁答院町・里村・上甕村・鹿島村・下甕村の1市4町4村が合併）、南は南さつま市（平成18年1月、加世田市・大浦町・笠沙町・坊津町・金峰町の1市4町が合併）、そして西は東シナ海に接している。

堂平窯跡の所在した旧東市来町は、北東部に重平山（523m）、北部に矢岳（410m）・大峰ヶ原など数百メートルの旧期火山岩山地が連なる。南西部の中生層の低山地以外は標高約50～180mの火山灰台地である。河川は、北東部の重平山・中岳に源を発する江口川・大里川が、これらの山地を浸食しつつ、町の中央部を貫流し、南端の旧町境および南端部を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。東シナ海に面する海岸線は、約6 kmあり、日本でも有数の砂丘で、総延長約30kmにもおよぶ吹上砂丘の一部となっている。また、これらの河川によって、火山灰台地が解析され、その流域は河岸段丘や谷底平野となり、現在は水田地帯が形成されている。

堂平窯跡は、美山集落から神之川に至る県道脇で、池尻の用水池を経て、美山小学校の手前の左側にある。付近は南京皿山等の古窯が数多く所在する窯平地区からのびる丘陵の一部で、窯尻を西側に向けて築窯されていた。

また、本釜の周辺には元屋敷窯や五本松窯など、苗代川焼の古窯跡も数多く存在するが、そのほとんどは畑や竹林、杉林等になっている。

第2節 歴史的環境

薩摩焼は、豊臣秀吉による朝鮮出兵（文禄・慶長の役1592～1598）の際、島津義弘が連れ帰った朝鮮人陶工により始まる。この出兵は「焼き物戦争」とも呼ばれ、九州の他の諸大名も、薩摩と同様に陶工集団を連れ帰ってきている。このような技術者移動は、それまで焼き物生産が発達していない九州各地に、産業としての焼き物生産が根付いていく契機となり、現代においても薩摩焼を始め、唐津焼、上野焼、高取焼、萩焼として引き継がれている。

薩摩への陶工集団渡来の年代については諸説があり、文禄年間説（1592～1596）と慶長年間説（1596～1615）

の両説がある。しかし、堂平窯が築かれた苗代川に陶工集団が居住を移し、この地において窯業生産が開始されたのは、慶長九年（1603年）以降のことであろうと思われる。これは、徳川家康による厳しい戦後処理の中、領地没収を逃れ本領安堵を望む島津氏にとって、連行した朝鮮人陶工を顧みる余裕がなかったためと考えられ、本領安堵が認められた1602年（慶長七）以降、苗代川に陶工集団を居住させ、様々な統制のもと、産業としての窯業を確率させていくのである。

次に、苗代川で窯業を始めた陶工集団は、朝鮮半島のどの地域から、どのようなルートを辿り渡来したのかについては、これも諸説が伝承されており、断言できるような決定的な史料は現在のところないが、ここでは、苗代川に伝わる『先年朝鮮より被召渡留帳』（以下『留帳』）をもとに述べておく。

「留帳」によると、1558年（慶長三）戊辰冬、朝鮮人渡来者は、串木野の内島平・市来の神之川・鹿児島の前之浜の三か所に上陸したと記されている。その他、加世田浦に上陸したという説もある。島平に上陸した者は、男女43人、「安・鄭・李・張・卞・朴・黄・林・東・朱・盧・羅・燕・何・陳・崔・丁」で、黄・羅・燕はその後断絶する。安・張の二姓は製陶技法の指導のため、琉球へ派遣された。串木野の島平に上陸した朝鮮人陶工は、1599年（慶長四）に串木野窯（いちき串木野市下名、旧串木野市）を開窯した。この窯跡については、昭和九年に東洋陶器研究所所長であった田沢金吾氏と文部省国宝保存会嘱託であった小山富士夫氏らにより発掘調査が行われ、朝鮮半島系の単室傾斜窯が確認された。出土品は、黒物とよばれる甕・壺等の日用雑器が中心で、碗・皿などの小物は少なかった。この成果については『薩摩焼の研究』の中に報告されている。（第4図参照）

その後、串木野窯を開窯した朝鮮人陶工らは、住民との摩擦があり、1603年（慶長八）にやむなく苗代川に移住すると記されている。

苗代川に移住した朝鮮人陶工は、その後3年ほどして島津家の保護が加わり、製陶を始め、元屋敷窯を開窯する。開窯の年代については「留帳」には明記されていないが、朝鮮国宗廟を祀った玉山神社の創建についての記述などとあわせて推察すると、慶長十年あるいは十一年頃に開窯されたものと考えられる。しかし、苗代川へ移住した朝鮮人陶工の中心人物であるとされる朴平意が、「慶長八年12月に苗代川へ移住し、慶長九年3月に再び窯を開き、その窯を元屋敷窯という」という説もある。いずれにせよ、17世紀初頭には開窯されたものと思われる。元屋敷窯についても、前述の田沢氏・小山氏らによ

り発掘調査が行われているが、窯体は発見されず、その正確な位置は不明である。

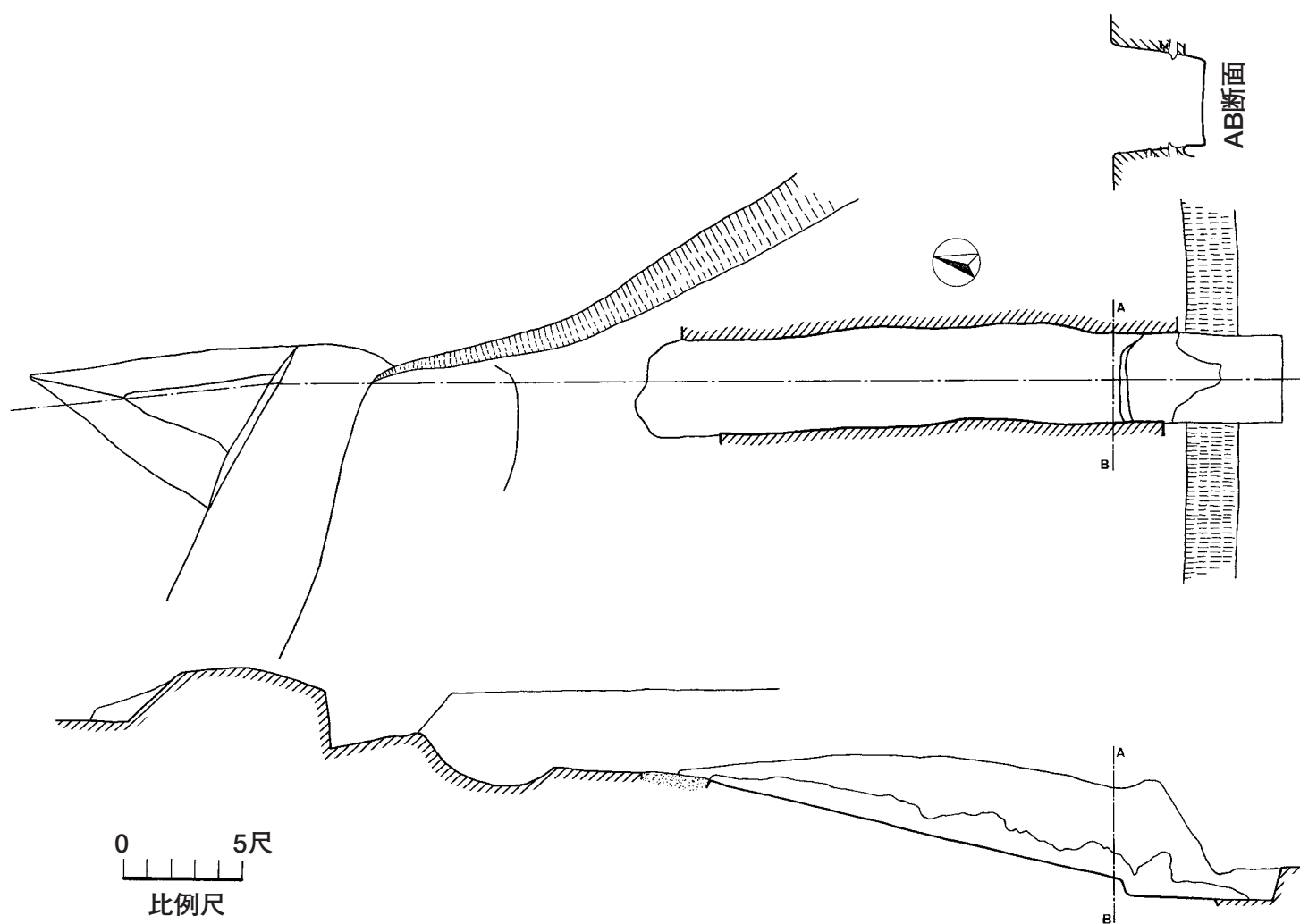
そして元屋敷窯の次に開窯されたとされる窯が、堂平窯である。今回の発掘調査で、串木野窯と同様の単室傾斜窯が確認され、製品も甕・壺等の日用雑器が中心に生産されている。製陶技法についても、内面に同心円状のあて具痕が残る非常に薄手の製品であることなど、串木野窯を開窯した朝鮮人陶工らが堂平窯を開窯したといえる共通点も多い。堂平窯の稼働時期やその詳細について伝える文献はなく、ただ伝承としてのみ伝えられているだけであったが、今回の発掘調査でその様相が明らかになった。

このようにして、苗代川に起こった焼き物は、その後発展を流付け現在に至る。朝鮮人陶工等により伝えられた製陶技術は、時代の影響を受けながらやがて変化し、在地化していくが、その様相は絶えることなく現代の「苗代川焼」の中にも受け継がれ、続いている。(註)

(註) 苗代川窯跡群の詳細な分布調査が、2006年2月末～3月にかけて、鹿児島大学法文学部人文学科異文化交流論研究室(代表：渡辺芳郎氏)により行われ、GPSを用いてその地点の北緯・東経が記録され、地形図上に表された。(渡辺2005 第2表、第5図)

《参考文献》

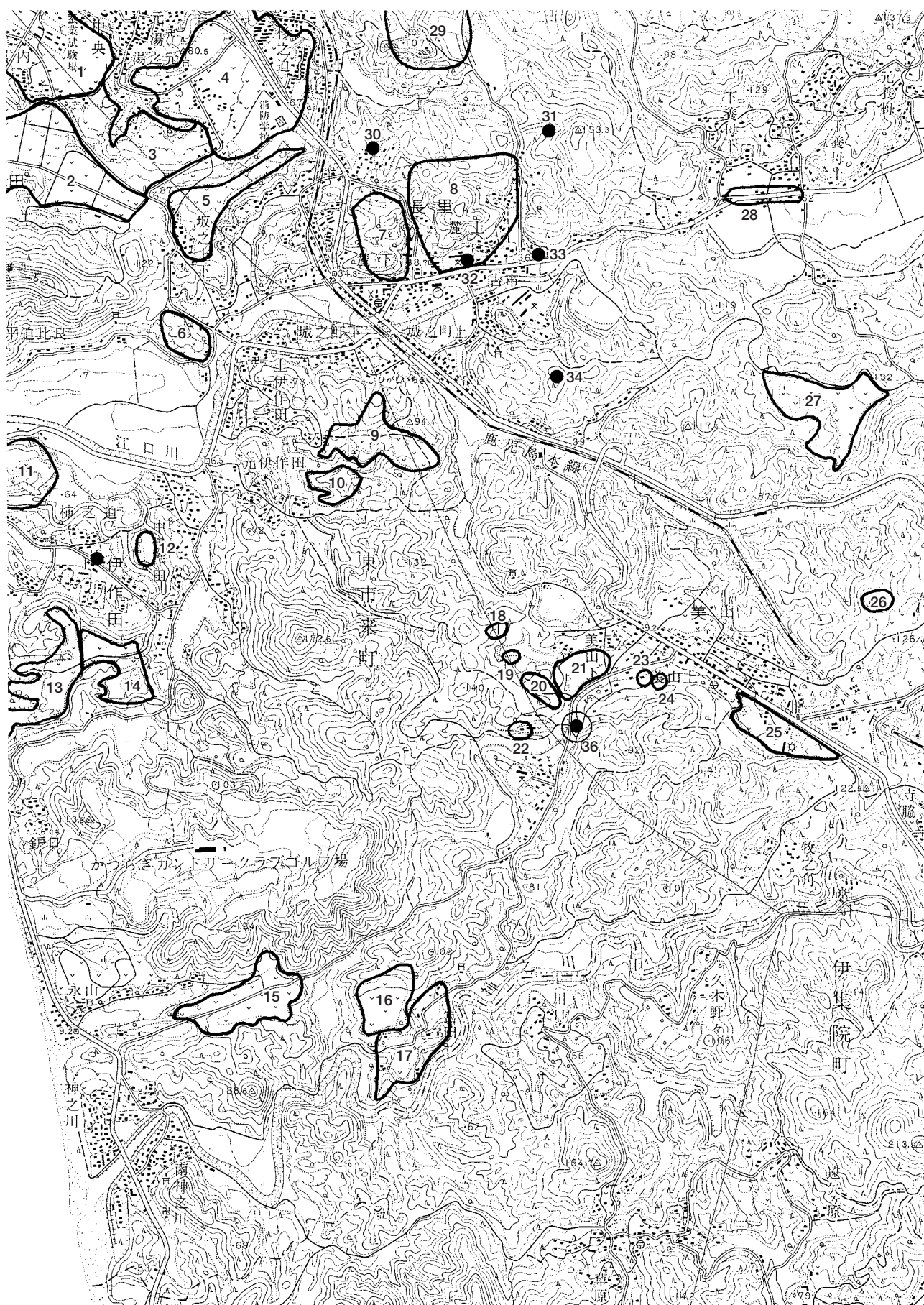
- 『東市来町誌』2005 東市来町誌編さん委員会
『東市来町郷土誌』1988 東市来町教育委員会
『薩摩焼の研究』復刻版 1987 田沢金吾・小山富士夫 国書刊行会
『日本のやきもの 薩摩』2003 渡辺芳郎 淡交社
渡辺芳郎 2006 『鹿児島県日置市美山・苗代川窯跡群分布調査概要』『からから第22号』鹿児島陶磁器研究会



第4図 串木野窯実測図

第2表 日置市美山・苗代川窯跡群分布調査地点一覧

地点	原図	窯 名	北 緯	東 経	状 況	窯構造・規模	時 代	備 考
A01	1 P	高山窯か？	3138334	13021057	窯体、製品・窯道具散布	連房式登窯（室数不明、全長約13m、南北方向）	近代	物原未確認、採集遺物にタコハマ・磁器あり（ただし融着資料なし）
A02	1 M	雪之山窯か？	3138400	13021148	窯体と東側に物原	連房式登窯（室数不明、全長約19m）	近代	周辺に地山整形した平坦面あり、居住跡か？ 鮫島佐太郎1987『苗代川のくらし』では6室で明治中期操業。
A03	2 J	五本松窯	3138254	13021987	窯体	単室登窯	近世	市指定。17世紀操業とする従来の見解は要再検討。
A04	1 L	観音山窯	3138418	13021228	窯体と窯体東西脇に物原	連房式登窯（燃烧室＋2室（＋ α ）、全長約17m）	近代	1室：縦3m、横2.9m、残高40-50cm。『苗代川のくらし』によれば8室で、明治末～昭和7年。
A05	1 A	御定式窯	3138306	13021291	窯体と物原	連房式登窯2基並列	近世～近代	市指定。2基の窯体間に物原。2基同時操業かどうかは要検討。
A05	1 a	御定式窯物原	3138306	13021291	陶器片・磁器片・窯道具・窯壁片が堆積		近世～近代	御定式窯物原（指定地内の物原とは別）
A06	2 A	南京皿山窯	3138296	13021301	窯体	連房式登窯2基並列	近世	市指定。2基同時操業かどうかは要検討。物原は窯跡背後の斜面。
A06	2 P	南京皿山窯物原	3138296	13021301	急斜面に磁器片・窯道具が多数散布		近世	南京皿山窯物原
A07	2 B	シンコク窯か？	3138297	13021309	窯体（天井部が残る）と物原。	連房式登窯（燃烧室＋5室残存。残長約8.3m、幅約3.7m）	近現代	西側に物原。背後が地山整形されており、A08窯を切断。もともと7～8室か？
A08	2 C	西打通窯か？	3138292	13021313	両側壁が部分的に残る。また崖面に切断された床面確認	単室登窯（残長6.9m、幅2.5m）	近世	西側に物原。A07窯構築の際に切断される。崖面に切断された窯床が見られる。
A09	3 J		3138431	13021332	窯体と窯の両側に物原、製品、窯道具散布	連房式登窯（室数不明、全長約12m）	近現代	
A10	1 Q	壽官陶苑窯	3138375	13021369	窯体	連房式登窯	近現代	現在も使用
A11	3 M		3138346	13021350	窯体	連房式登窯（室数不明）	近現代か？	十郎窯裏。周囲が柵で囲まれているため、規模など不明
A12	3 B		3138445	13021427	窯体の一部・製品・窯壁片散布	連房式登窯（室数不明）	近代	道路により寸断される。窯体上方の平坦地は作業場。明治の終わり頃、鹿兒島本線工事の際の土管焼成（聞き取り）。採集品に土管あり。
A13	3 A	アコク窯	3138417	13021449	窯体、製品・窯道具散布	連房式登窯（室数不明・全長約16m）	近現代	物原は窯背後の斜面にあったという（聞き取り）。現在道路。
A14	3 H	東郷窯	3138386	13021418	窯体（一部改変？）	連房式登窯（燃烧室＋4室、全長10m、幅3m）	近現代	1882年開窯。東郷記念館脇。
A15	3 C	大迫秀朋窯	3138367	13021437	窯体、製品・窯道具散布	連房式登窯（燃烧室＋4室、全長約7m、幅約4m）	近現代	荒木幹二郎氏が参加
A16	3 E		3138327	13021451	住宅庭に窯体が残る。	連房式登窯（1室のみ残存。長さ2.1m、幅2.5m）	現代？	本来連房式登窯であったが再後室のみ残し壊されている。
A17	4 A	シンババ窯	3138305	13021435	窯体がほぼ完全に残存	連房式登窯（燃烧室＋6室、全長約13m、幅約3.4m）	近現代	公民館に操業時の写真あり。
A18	4 G		3138284	13021423	窯体残存	連房式登窯（燃烧室＋4室、全長7.75m、幅2.85m）	現代	現在は使っていない
A19	3 F	荒木陶窯	3138343	13021519	窯体完形	連房式登窯（燃烧室＋4室、全長10m、幅2.3m）	現代	最近まで使用
A20	4 D	境田俊英窯	3138305	13021518	窯体ほぼ完形	連房式登窯（燃烧室＋5室、全長8.2m、幅2.8m）	近現代	境田家敷地内
B01	2 E		3138306	13021337	製品・窯道具・窯壁片が尾根状に堆積	窯体未確認		物原の可能性、窯跡候補地
B02	2 F		3138308	13021316	製品・窯道具・窯壁片が尾根状に堆積	窯体未確認		物原の可能性、窯跡候補地
C01	2 K	元屋敷窯	3138197	13021146	窯壁片・製品散布	窯体未確認		標柱の地点。苗代川最古の窯とされるが、窯体・物原未確認。要検討。
C02	1 G		3138340	13021349	製品・窯道具散布	窯体未確認		物原状に製品・窯道具が散布。窯跡候補地。
C03	1 H		3138333	13021353	窯道具・レンガ・窯壁片多数散布	窯体未確認		窯跡の可能性もあるが確定できない（2班2Hと同一地点）、窯跡候補地。
C04	4 F		3138277	13021438	製品・窯道具・窯壁片散布	窯体未確認	近現代	窯跡候補地
D01	3 N	仁王門窯？	3138319	13021262	痕跡全くなし	窯体未確認	近現代	「仁王門窯」および「鮫島佐太郎窯（あるいはその兄）」があったと伝えられる地点。『苗代川のくらし』に写真あり。観音山窯の後の窯。
D02	3 K	大迫宅榮窯	3138396	13021338	痕跡全くなし	4室くらいの連房式登窯（聞き取り）	近現代	大迫宅榮のお孫さんからの聞き取り
D03	3 G		3138352	13021448	トンバイ再利用の石垣	窯体未確認	現代？	聞き取り調査により窯があったというが、現在は不明
D04	4 E	松沢窯	3138300	13021528	痕跡全くなし	窯体未確認	現代	2005年9月に取り壊し。聞き取りにより燃烧室＋3室。勝目正範氏居宅。
D05	4 B	吉岡雅雄窯	3138309	13021573	痕跡全くなし	窯体未確認	近現代	聞き取り調査による。吉岡家敷地



第6図 堂平窯跡周辺遺跡位置図 (1/25,000)

第3表 周辺遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	地 形	時 代
1	市ノ原	日置市東市来町湯田上市ノ原ほか	台地	旧石器～近世
2	今里	日置市東市来町伊作田今里ほか	台地	古墳，中世，近世
3	森園平	日置市東市来町長里森園平ほか	丘陵	弥生，古墳，中世
4	諏訪原	日置市東市来町湯田諏訪原ほか	台地	古墳，中世，近世
5	浦田	日置市東市来町長里浦田（一）ほか	台地	古墳，中世
6	向梶城跡	日置市東市来町伊作田字上梶	台地	縄文，古墳，古代，中世，近世
7	平ノ城跡	日置市東市来町長里字平ノ城	台地	中世（南北朝～室町），近世
8	鶴丸城跡	日置市東市来町長里鶴丸小学校一帯	丘陵	平安～中世（室町）
9	犬ヶ原	日置市東市来町伊作犬ヶ原	丘陵	旧石器～近世
10	金木山	日置市東市来町伊作田金木山ほか	丘陵	古墳，近世
11	伊作田城跡	日置市東市来町伊作田字浜之丸	台地	中世（南北朝～室町）
12	梶城跡	日置市東市来町伊作田字梶原	台地	中世
13	老ノ原	日置市東市来町伊作田東老ノ原ほか	台地	旧石器，縄文，弥生，古墳，中世
14	後庵堀	日置市東市来町伊作田後庵堀	台地	古墳，奈良，平安
15	浜ノ丸	日置市東市来町神之川浜ノ丸	海岸段丘	古墳，中世
16	原	日置市東市来町宮田原ほか	丘陵	弥生，古墳，中世，近世
17	馬通	日置市東市来町美山馬通ほか	丘陵	弥生，古墳，近世
18	猿引	日置市東市来町美山字猿引	台地	
19	雪山	日置市東市来町美山字雪山	台地	
20	池ノ頭	日置市東市来町美山字池ノ頭	台地	
21	池ノ平	日置市東市来町美山池ノ平ほか	丘陵	古墳，近世
22	薩摩焼古窯，五本松窯跡一基	日置市東市来町美山 500-498-2	丘陵	近世
23	薩摩焼古窯，御定式窯跡二基	日置市東市来町美山 973-974	丘陵	近世（後）
24	薩摩焼古窯，南京皿山窯跡二基	日置市東市来町美山 975	丘陵	近世（後）
25	水溜	日置市東市来町美山上水溜ほか	段丘	中世，近世
26	大田原塁跡	日置市東市来町美山右谷山	台地	中世（室町後）
27	馬場ヶ原	日置市東市来町長里下馬場ヶ原ほか	台地	弥生，古墳，中世，近世
28	西牟田，四反田	日置市東市来町長里	段丘	
29	古城跡	日置市東市来町長里字古城原	台地	縄文（晩），弥生，古墳
30	番屋城跡	日置市東市来町長里字番屋城	丘陵	中世（南北朝～室町）
31	徳仏城跡	日置市東市来町長里字得仏城	丘陵	中世
32	大日寺跡	日置市東市来町長里本寺	台地	中世（鎌倉）
33	龍雲寺跡	日置市東市来町長里小字前田	丘陵	中世（鎌倉前）
34	総陣ヶ尾	日置市東市来町長里字陣之尾	台地	中世
35	前畑	日置市東市来町伊作田柿之迫	台地	縄文（晩），弥生，古墳，中世（室町～鎌倉）
36	堂平窯跡	日置市東市来町美山字堂平	丘陵・斜面	近世

第Ⅳ章 発掘調査の概要

第1節 発掘調査の方法

分布調査によって多量の陶器片が発見された、東側の谷に向かって大きく傾斜した斜面は、当初、堂平窯跡2号窯跡と呼称していた。本来の堂平窯跡に隣接して所在しているとの考えに基づいてである。対象となる調査面積は約1,000㎡であったが、途中に農道が通っていたことから農道を含めて上段と下段の3つの区に分け、下段、上段、農道の順に調査を行った。その結果、ここは窯跡ではなく物原であることが判明した。

調査の途中、近くの竹林にかつて窯があったとの情報を得たことから、一部竹林の伐採を行って確認調査したところ陶器の出土が見られたため、さらに範囲を広げて伐採した結果、窯跡を確認するに至った。そのため、周辺の伐採を行った上で11月から本格的な発掘調査を実施することとなった。

本格的な発掘調査に当たって、窯跡が確認された地域を第1地点、最初に調査を行った東側斜面を第2地点と呼称することとした。

第1地点の調査は窯跡の検出を最優先に行うと共に、周辺は北側の調査に続いて南側の調査を実施していった。

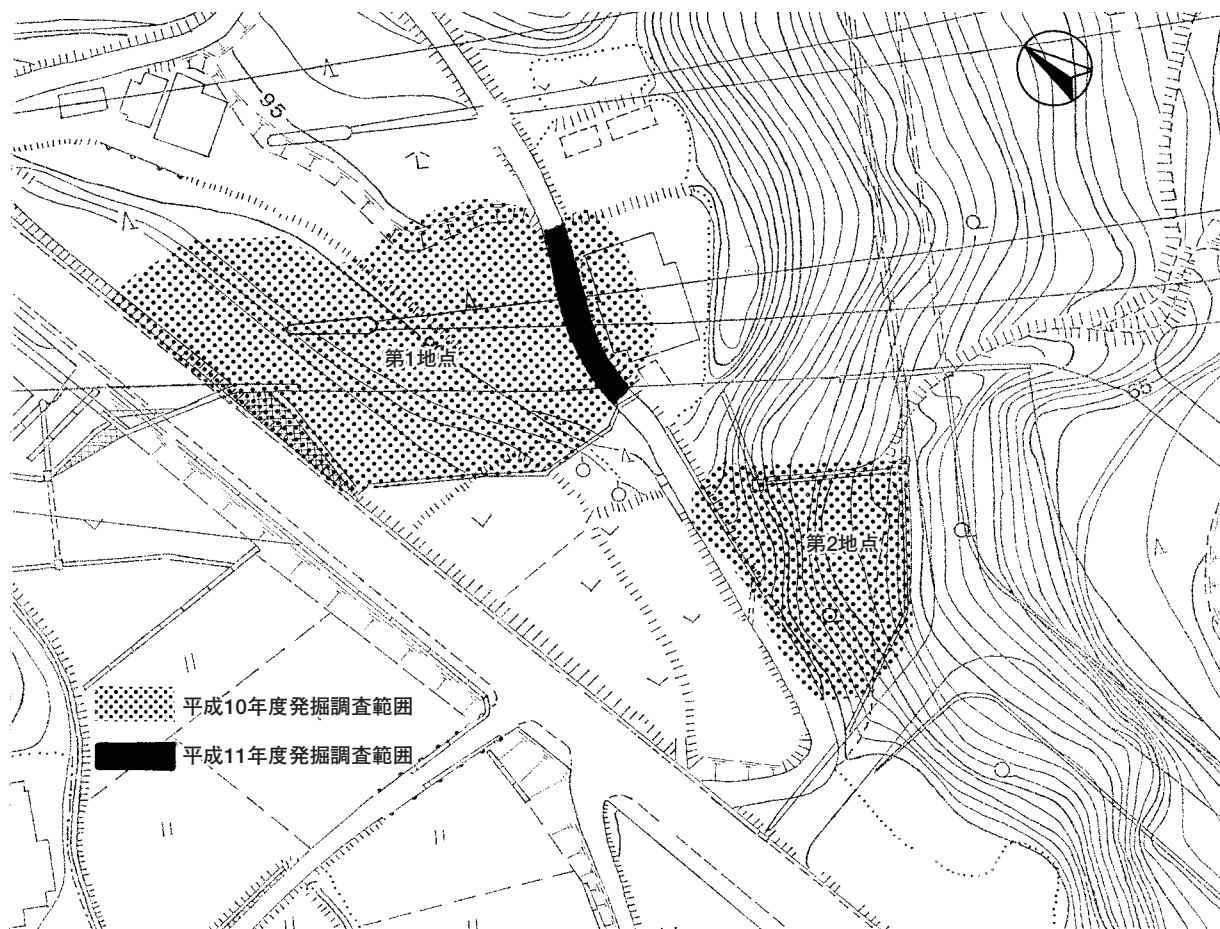
第2節 各地点の状況

(1) 第1地点

窯跡が確認された地域の中で、集落内の道路に面した窯尻の部分基準として、道路にほぼ直交する直線を任意に主軸として設定し、道路の西側部分をその軸と直交するように任意に設定して、5m間隔のグリッドを設けた。東西方向は、道路の東端より1区画東側を1区とし、西側に向けて2、3区とし、南北方向は交点の3区画北側をA区とし、B、Cとして、C3区などと呼称することとした。ただ、調査の進行により、北側に1区画分、また、東側にも1区画分拡張せざるを得なくなったことから、北側の拡張部分をa区、東側の拡張部分を0区と呼ぶこととした。

(2) 第2地点

分布調査で確認していた木の株を基準に、地形の傾斜方向に合わせた直線を任意に主軸とし、地形と直交する直線を軸として任意に設定して、5m間隔のグリッドを設けた。東西方向は基準より3区画東をAとしてB、C区とし、南北方向も基準から3区画北側を1として2、3区とした。ただ、調査の進行により、東及び北にそれぞれa、0区を拡張した。



第7図 堂平窯跡調査範囲図 (1/1,000)



第8図 堂平窯跡グリッド配置図及び遺構配置図



第9図 堂平窯跡周辺地形図

第3節 第1地点の調査

第Ⅲ章第1節でも述べたように、第1地点は当初は調査範囲からは外れていた。第2地点の2号窯跡が物原であることが確認される段階で、本来の窯跡を確認しようとして聞き取りを行い、大まかな窯跡の所在地を想定して調査を行った結果、窯跡と判明したものである。

竹林の伐採を行い、そこに任意のトレンチを入れて掘り下げたところ、陶器片が出土したことから窯跡の所在が考えられた。そこで、広域に伐採を行った結果、窯本体と想定される焼土とガラス化した硬化面のあることが確認されて窯跡の確認となった。この窯体は西側方向に、地形の傾斜に沿って下がっていることが予想されたことから、漸次、段階的に地形の低い方へ伐採と表土の剥ぎ取りを行った。

調査開始時の当地の状況は階段状の畑地となっていたことと、当時の窯の形態がそれほど規模の大きなものではないと考えていたこと、硬化面のすべてを窯の床面と考えていたことなどから、いくつかの窯が複雑に重複した状態と認識し、確認した順にA窯、B窯、としてF窯までを仮称としながらも付けていった。また、畑の段で窯が終わり、下の段に硬化面が所在する場合は別個の窯跡として認識していた結果、伐採や表土剥ぎも段階的な作業に終始した。

そのため、最終的にこれらが一つながりとなり、1基の窯跡と認識せざるを得ない状況となった時は、極めて強い衝撃を受けた。しかし、県道を隔てて西側には五本松窯跡が単室の傾斜窯であることをもう少し早い時点で認識していさえすれば、一気に全体を伐採し、表土の剥ぎ取りを行っていたのに、と後悔するばかりである。

窯尻から始まって焚き口までを確認することで窯本体の検出作業は終了することとなった。

しかし、これを広げて行くうちに、北側に溝状の掘り込みのあることが判明した。また、さらに北側には平らに造成されたエリアが広がり、直径20～30cm程度のピットや1m内外の土坑が多数存在することが事実となった。ある程度の幅で連続する硬化面が続くことや、粘土が集中する場所や瓦や陶器類が散在するところも確認された。組み合わせられた石もあった。また、南側にも造成された平らな場所があり、石や窯の壁片を並べて作ったような一角も確認された。

それ以外にも、窯の周辺と東側上方には陶器片が大量に出土するエリアも何か所か確認され、物原であることが判明した。

これらの遺構を個々に検出するとともに、平面及び断面の実測を行った。

焚き口の最も外側は、自然礫の中でも割合に小さな円礫が多く使われている。側壁に比べて高さ（厚さ）も低い（薄い）ことから、構造上堅固さを必要とするもので

はなかったらしいことが伺える。側壁は、煙道付近で高さ（厚さ）が床面から50cm程度あり、外側に向かっては漸次低くなっている。

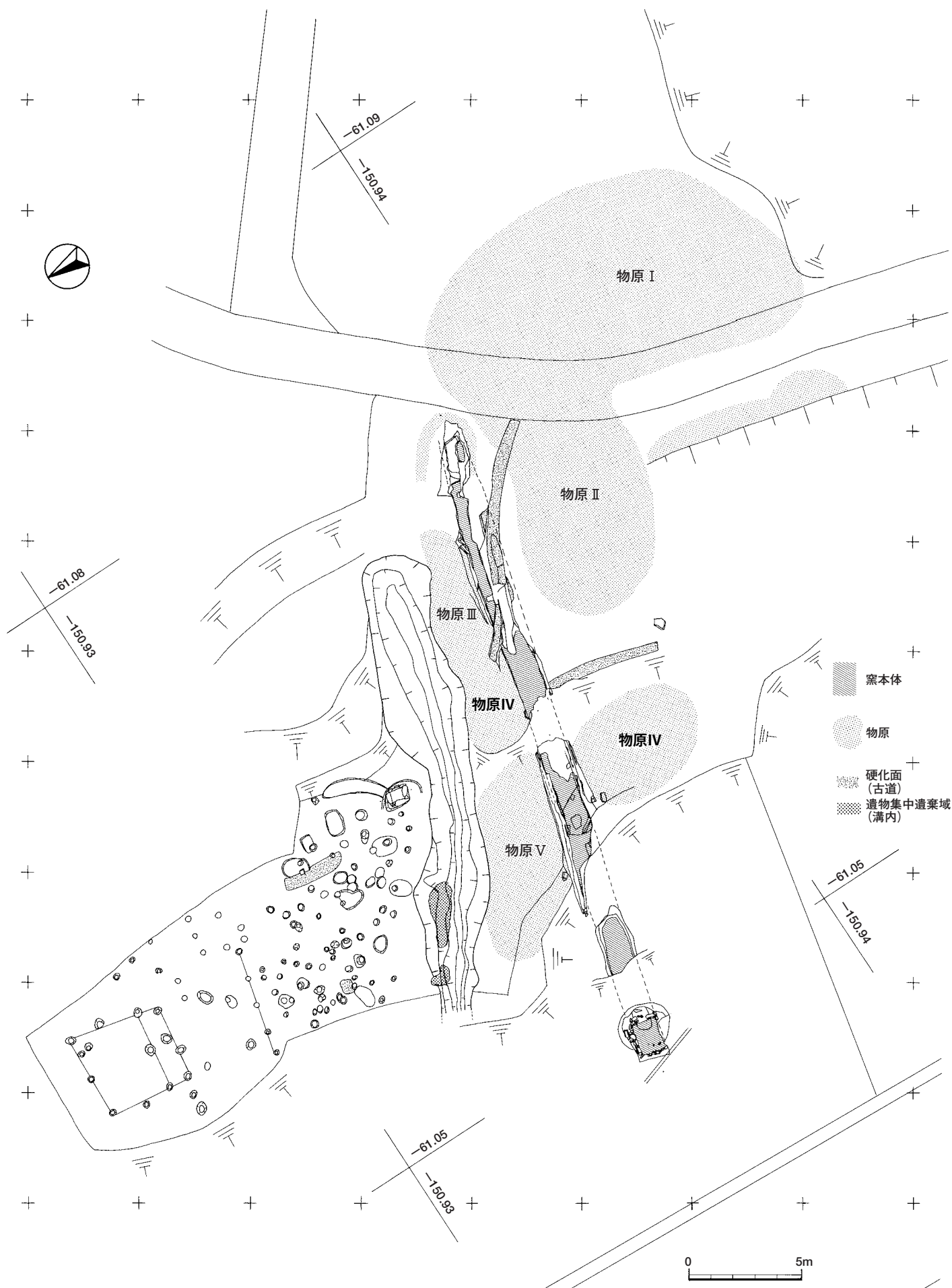
これに対して煙道方向の石は、幅が20cm程度、高さが30cm程度のものが使われている。中央部は煙道となっているために石は置かれていないが、その両脇は角礫が用いられているほか、北側は多数の石で固められている。南側の上部では確認されなかったが、下部には他にも石があったのかも知れない。

焚き口は全体的に石の置かれた面に揃えるように平らに作られていたが、焚き口のはほぼ中央部から煙道にかけては緩やかな傾斜が設けられており、火熱が効率よく焼成室に向かうように工夫がなされていた。床の全面と煙道への傾斜面は全体的にガラス化が進行している状況が見受けられた。これは、火熱が焚き口の全体に繰り返し与えられ続けたことを物語っていると言えよう。範囲は70cm×110cmに及んでいる。

床の下面は、上部から次のようになっていった。

- ① ガラス化されたガラガラの小礫層
- ② 黄白色の砂礫層
- ③ 黄色の砂礫層
- ④ 赤色の砂礫層
- ⑤ 暗赤褐色の砂礫層

この中で、⑤の暗赤褐色の砂礫層までが火熱によって変性した土層で、それ以下が暗褐色となることから、本来の地山の層と言えるであろう。



第10図 第1地点遺構配置図

1 窯本体の調査

最終的な窯跡の仕様は、確認された範囲内では以下の通りである。

形 態 単室傾斜窯

全 長 (31.2m)

焚き口から窯尻残存部までの計測値

幅 員 1.2m (最大時は1.4m)

傾 斜 角 17°

次に、各施設の状況の説明を行う。ただし、本窯跡は完全な形で残存していたわけではなく、後世の耕作等により数か所で破壊されていたことから完全な説明は望むべくもなく、概略的な説明に終始することを容赦願いたい。

(1) 焚き口

石を用いて幅1.0m、長さ1.5mの長方形に築かれている。石材は窯跡の周辺に普遍的に所在する安山岩が使われている。一般的に自然礫を用いており、角礫が多いものの、中には円礫が用いられている部分も見受けられる。焚き口の後部では石の幅は15～25cm程度と狭いが、前部つまり煙道に近い方では石が2列に並べられているため、幅は40cm程度と広がっている部分もある。

また、後部の北西隅には石が見られないが、内部に2個の石が見られることや、南側のほとんどの石が後世の

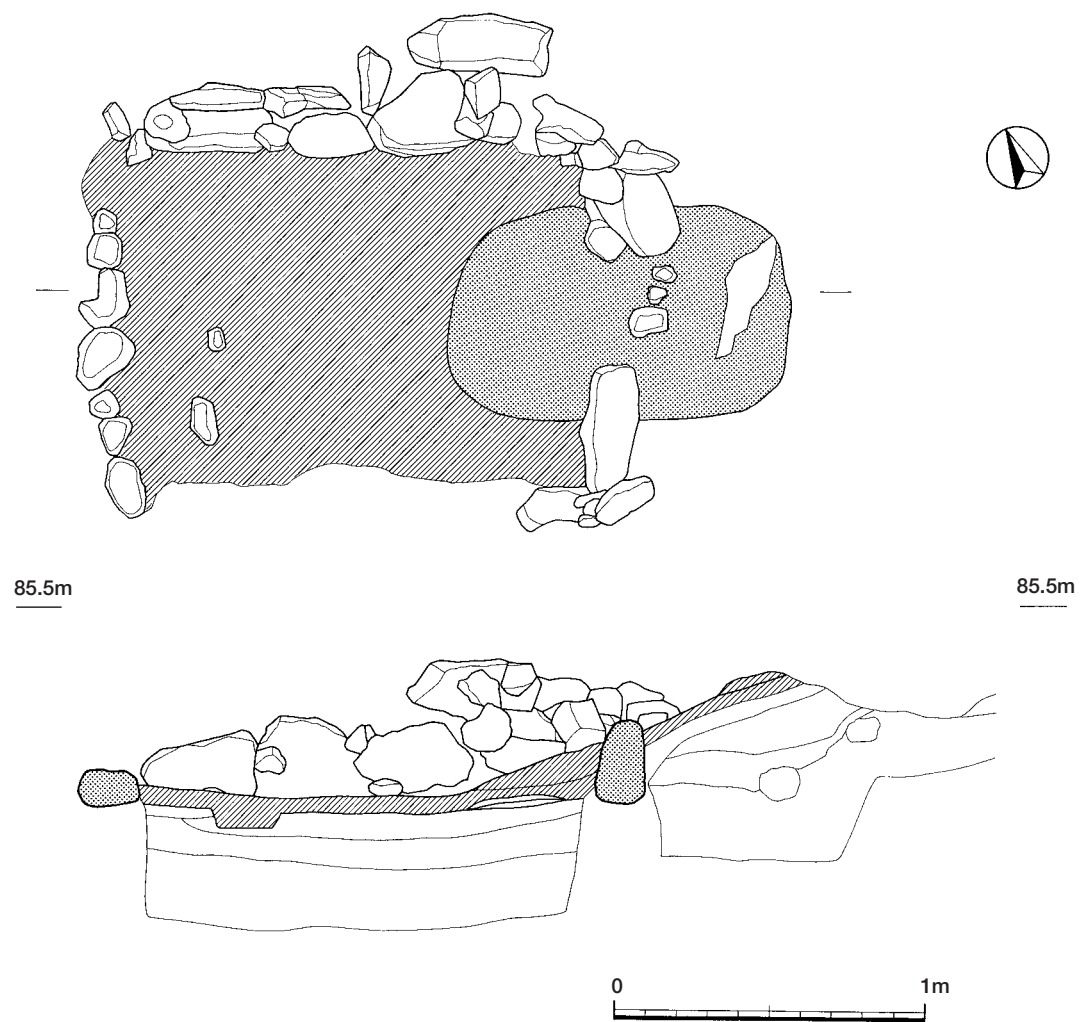
攪乱によって滅失していることなどから、本来はこの場所にも石が置かれていた構造であったものが、その後、動いたか取り除かれたかしたものとするのが妥当であろう。南側側縁の石は東端の数個を除いては全く見られないことから、後世に取り除かれていることは確実である。平面図及び断面図を見ても、南側側縁の石があるべき場所から南側は完全に攪乱を受けている状況が読み取れる。

石の中でも、少なくとも北側と南側の長軸方向のものは焚き口の内面に一直線に並ぶように丁寧に揃えて置かれている。また、石と石の間には土を入れることで固定してある。ただ、東側と西側の短軸方向については、裁ち割りを行っていないため構造の詳細は明確ではないものの、石を置く際に殊更に溝状の穴を掘っていることは考えらず、ただ並べるといった構造と思われた。

つまり、焚き口部分の造作の手順を推定すると、以下のようなことが考えられる。

- ① 焚き口とする場所に、1.0m×1.2mの長方形の穴を床面が平らになるように掘る。
- ② 石を内面が一直線になるように並べる。
- ③ 石を2個並べたり、大きさの違いなどで動きやすいところには土を詰める。
- ④ 石の外側を幅広く土で囲んで固定する。





第11図 炊き口実測図



(2) 焼成室

前述したように、本窯跡はいたるところで破壊されているために残存状態は良くない。床面自体が連続して残存しておらず、大きく見ると5か所で短軸方向が切られており、窯尻まで加えると6か所が切られていることになる。このことから現場ではより多くの情報を得るために、できるだけ多くの場所で裁ち割りを行った。窯構造の解明に期すると考えてのことであった。

裁ち割りを行ったか所は11か所に上るが、それを焚き口に近い部分から示すと次の通りである。

① 煙道の焚き口側から60cm程の、緩傾斜部分の終点付近

ここより上方は、畑の耕作により約180cm破壊されている。

② 残存部の下端から約130cm程の、残存部のほぼ中央部付近

ここより上方は、畑の耕作により約70cm～320cm被破壊。

③ 残存部の下端部付近

④ 残存部の下端から約60cm程の、北側の壁と床面の残存状態が良好な部分

⑤ 残存部の下端から約320cm程の、北側及び南側の双方の壁の残存状態が良好な部分

ここより上方は、畑の耕作により約220cm被破壊。

⑥ 残存部の下端部付近

⑦ 残存部の下端から約80cm程の、残存部のほぼ中央部付近

⑧ 残存部の下端から約150cm程の、残存部の最も安定した部分

ここより上方は、道の敷設により約140cm被破壊。

⑨ 残存部の下端から約100cm程の、北側の壁と床面の残存状態が良好な部分

⑩ 残存部の下端から約520cm程の、床面の残存状態が良好な部分

ここより上方は、畑の耕作によると考えられる段の造成により約80cm被破壊。

⑪ 残存部の下端から約50cm程の、残存部の中央部付近

ここより上方は、里道の開設により破壊されている。

以下、各部分を裁ち割りの結果に基づいて、概略、説明を行う。

i 焼成室最下部

①に当たる。煙道から緩傾斜で焼成室へと導かれる最初の部分であるが、床面の一部が残存しているのみで、壁は全く残っていない。ガラス化した床面が中央部で約2cm程の厚さで残り、壁方向へはそれも次第に薄くなることから、ほぼ全体的に削平されていることが分かる。ガラス化した床面の下部は、パミスの混じった淡黄白色

の砂で、その下は赤化した砂、淡い赤化した砂と続き、黄色パミスを挟んで黄白色の砂（おそらくシラス）に至っている。

ii 焼成室下部

②に当たる。灰色の5mm程のガラガラした粒子が残るのみで、ガラス化した部分は見られない。下部は黄色土塊で、その下は赤化した砂、黒色の粘質土、そしてシラスと思われる黄色砂となる。

iii 焼成室中央部下部

③～⑤に当たる。③では床面は少なくとも3枚あり、壁は北側だけではあるが1枚しか確認できない。これは、最終段階の壁が残存している状況と考えられ、少なくとも残りの2枚の壁は、いずれも最終段階の床面よりも低い位置の床面の延長上に立ち上がっていたものと思量される。また、④では床面が3枚、高低差をもって残存しているほか、壁が前後にずれて残存している状況が観察される。これは、最終段階の壁が少なくとも作り替えられた可能性を示唆していると考えられる。⑤では床面が最低2枚観察されるが、最終面の下部にもう1枚ある可能性も考えられる。壁は、1枚確認されるのみであるが、北側のものと南側のものとにレベル差があることから、2枚と考えるのが相応であろう。南側にずれ落ちたことも考えられなくはないが、さらに南側の層が安定していることからすると、その可能性は低いのではないかと。

iv 焼成室中央部中部

⑥～⑧に当たる。⑥では床面が4枚見られ、壁は北側で2枚、南側でも2枚の壁を想定できそうである。

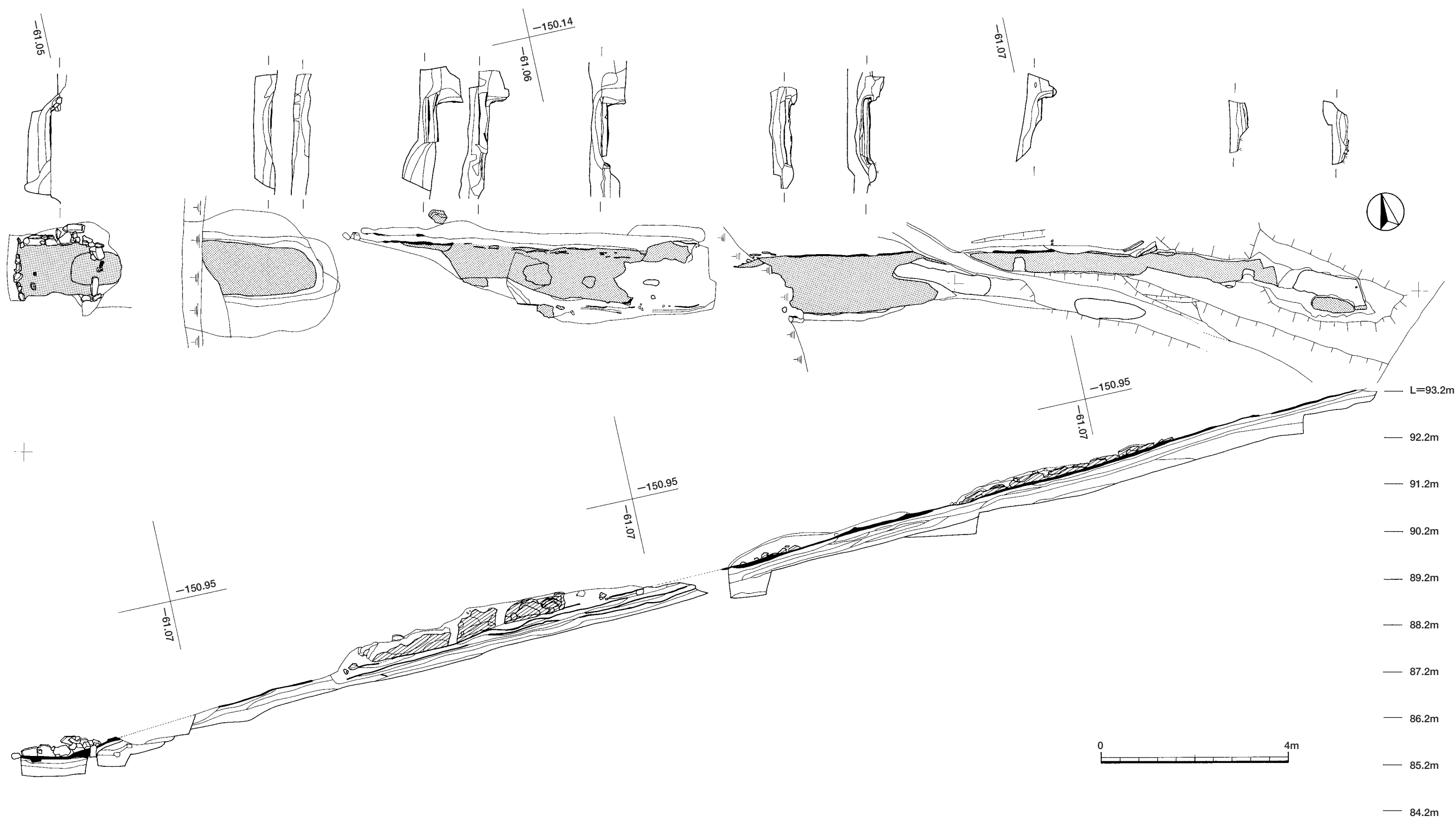
また、別方向の断面観察によると、床面が3枚、壁は最低でも2枚、最終面の床面に壁が立ち上がっていたことを考慮すると3枚あるいは4枚の可能性も考えられる。⑦では床面が2枚確認され、壁は北側・南側双方で2枚ずつを確認できる。別方向の断面図では、床面が3枚、壁は最低でも2枚は確認でき、多ければ3枚となることも考えられる。⑧では床面が最低でも2枚、多ければ3枚観察でき、壁は北側で最低でも3枚、多ければ4枚、南側では1枚が確認できる。

v 焼成室中央部上部

⑨・⑩に当たる。⑨では床面が1枚は明確に見られるが、壁の続きが最終面の床面よりも下に潜り込んでいる状況が看取されることから、2枚と考えてよいのではなかろうか。壁は、2cm程の厚さではあるが、前後に異なる方向を向いて2枚観察される。⑩では床面が1枚見られるのみである。

vi 窯尻

⑪に当たる。床面が1枚、壁は2枚が観察される。壁の下部にも床か壁の痕跡が見られるものの不明。



第12図 堂平窯実測図

(3) 窯構造

本窯は、西方向へ傾斜した地形を利用して造られている。基本的には焚き口から焼成室の中部辺りまでは傾斜面を切り込む形で、また、それより上部の窯尻の辺りまでは盛り土によって造成が行われている。

焚き口部分は、標高約86m付近で東西1.5m、南北1.0mほどの面積を平らに掘り下げ、周囲に自然の角礫を中心に方形に並べて焚き口としている。掘り下げはシラス面までであることから、調査当時の地形から考えたとき、表土からそれほど掘り下げない段階でシラス層に至ったと思われる。

焚き口から東側、焼成室の上部方向にかけては中央部を空けて石組みが造られ、中央部は窯の傾斜を揃えるように斜面が設けられている。それより上部、焼成室の最下部は一旦シラス面まで掘り下げた後に、別にシラスを盛っている。しかし、それも長く行うのではなく、せいぜい1～2m程度ではなかったかと考えられる。それ以降の部分は必要な窯の傾斜に合うように本来の地形を削って整えられている。焼成室の下部は基本的にシラス面まで掘り下げられ、それは煙道部分から約13m付近までと考えられる。

しかし、煙道から3.5m～6.5m付近にある黒色粘質土は、本窯跡周辺の一般的な土層ではシラス直上の第Ⅷ層の淡暗褐色粘質土と推定されるが、焼成室の中央部付近（煙道から約13mの地点）にあるアカホヤ層が傾斜を考慮しても相当下部に位置していることから、この傾斜が地形的に低い部分、つまり西側にたどっていったとき、位置関係としてアカホヤがシラスよりも下位になる可能性が出てくることから、第Ⅷ層ではないことも考えておかななくてはならないことになる。その際には、この黒色粘質土は第Ⅴ層の黒褐色粘質土に相当すると考えられることになるが、そうした場合、焼成室下部のシラス層が盛り土であるか、黒色粘質土から上部が盛り土である可能性が出てくることになる。そうであれば窯のほぼ全体が盛り土によって築造されたことになって来るのである。

ただ、現場での観察では、窯の床面より下部の赤ないしは黄色に変色した砂土はシラスであったことは間違いない事実である。窯跡の移設がなかったならば、つまり壊されるのであったならば、窯構造の解明のために自然堆積のシラス層まで確実に掘り下げを行ったのであるが、実際には調査の途中で移設保存が決定したために、調査を担当していた時点ではそれより下位の確認は、窯自体の崩壊を引き起こすことが自明であったことから、できなかったのである。また、移設に当たっての立ち会いも命ぜられなかったことから、窯跡移設後の下位の確認はなされないまま調査全体の終了を迎えざるを得なかったのである。

それでは、その床面以下のシラスは切られた残りのシラスなのか、それとも盛り上げられたシラスなのかという問題が出てくる。それについては、床面は全体として黒色粘質土よりも上位にあり、しかも、それはアカホヤが検出された位置よりも上位にあることから、盛り土であることは確実であろう。長軸方向の断面図で見ても、黒色粘質土の堆積は地形の傾斜に沿ってはならず、地形の傾斜とは逆の方向であることから、シラス層がこの黒色土層より上位に位置することは層の正規の堆積から考えたとき矛盾することは明らかである。よって、床面以下のシラスは盛り土ということになる。

つまり、周辺の地形から見ると、窯の築かれた部分は約1～2m程傾斜面を切り込んで大まかな形を整えた後に、シラスを盛って床面の傾斜を調整して築いたということである。それは、窯跡の北側ではシラス及びそれよりも上部の土層が、窯跡のレベルと同じかそれよりも高いにもかかわらず成層した状態で残存していることから判断されたのである。

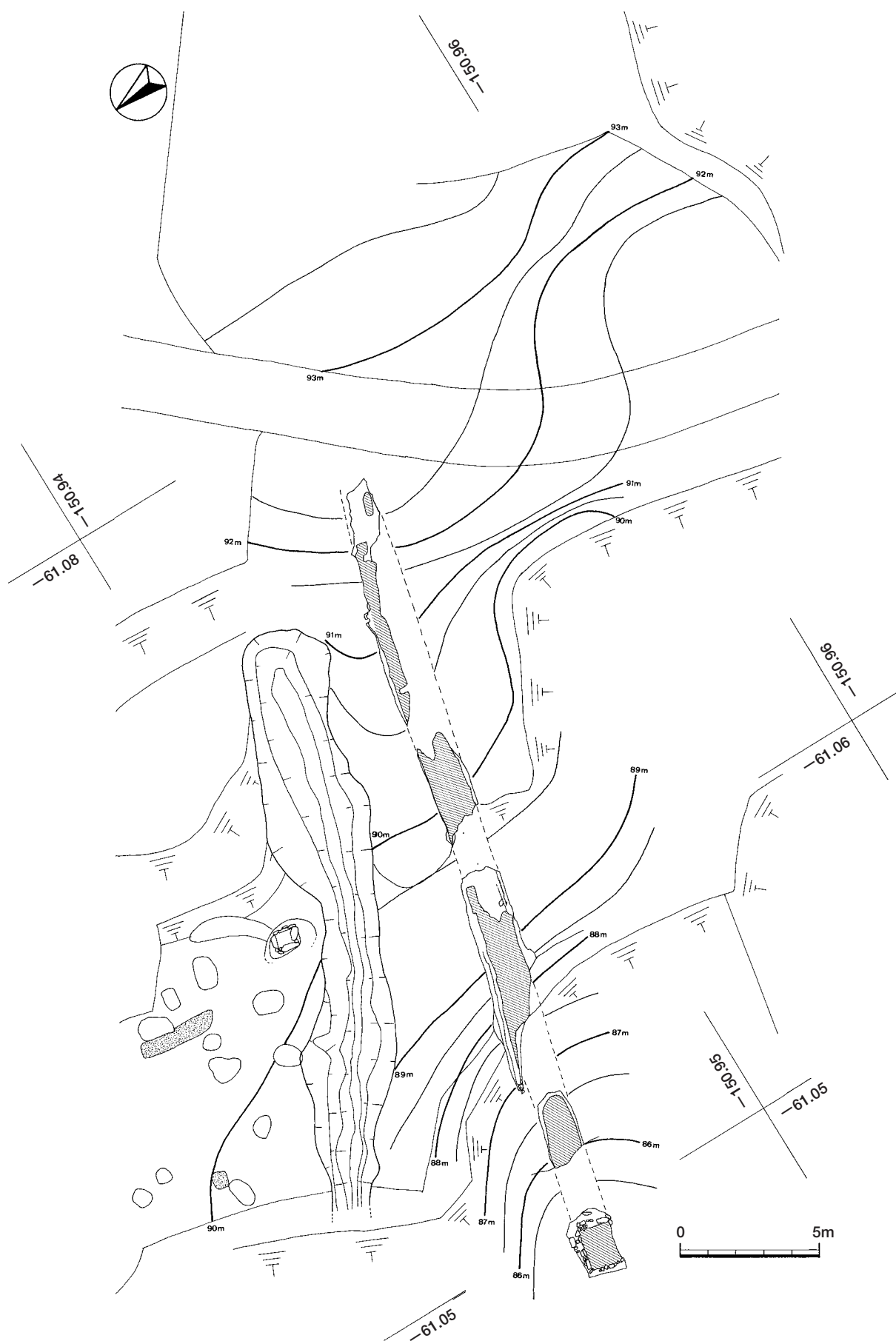
焼成室中部のアカホヤより上位の土層も濁った黄色砂であることからシラスを主体とする盛り土であることは間違いない。さらにその上部の床面までの層もシラスによる盛り土ということで、焼成室下部の構造と同様であると考えられる。

焼成室上部の煙道から約16m～24m付近には黒色土が見られ、その下位には黄色砂があることから、この砂がシラスである可能性も考えられる。このことは、煙道付近で黒色粘質土がシラスの上位に位置していることと同様な状況であることから、周辺の堆積土層の第7層とシラス層の関係として捉えることも可能であると思われるのである。ただ、先ほどと同様に、この黒色土が第5層の該当層であるとした場合には本層・黄色砂のいずれか、または双方とも盛り土である可能性も出てくるのである。ただ、そのいずれか、または双方であった場合でも、床面以下はシラスによる盛り土であるという構造自体には変わりはない。ただ、切り込みが行われたかそうでないかの違いだけである。

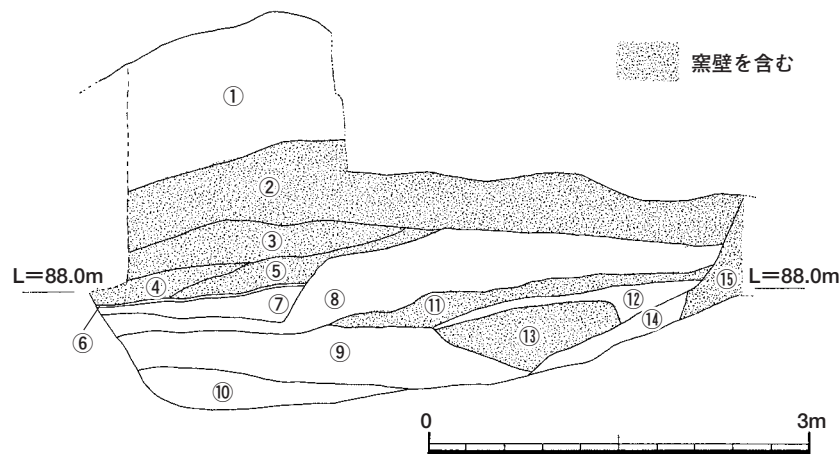
煙道から約24m付近の焼成室上部から上の部分は盛り土によって嵩上げが行われ、その上にシラスを盛ることで造られている。床面の下位がシラスであるという事実は焼成室全体を通して言えることであることから、格別目新しいことではない。しかし、ここで注目すべきことは、窯尻の辺りが窯壁や窯床などの窯体の一部を盛って造られていることである。

このことは、何を意味しているか。考え方は2つ。1つ目は、窯を延長して造ったという考え方。そして、もう一つの考え方は、別な窯（跡）から持って来たという考え方である。

1つ目の考え方は、開窯当時は短かったものを後で長

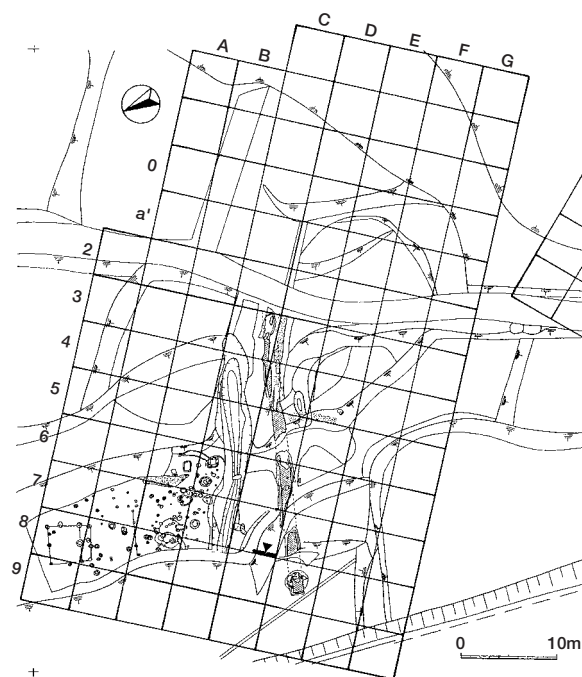


第13図 窠体周辺コンタ図



第14図 7-D区窯側部西壁断面図

- ① 淡黒色砂質土、表土
- ② 淡黒褐色砂質土 ①に似るがやや赤みがかかる 赤色の細かい窯壁片含む
- ③ 灰褐色粘質土 やや大きめの窯壁片を含む
- ④ 赤色構築物面 やや白みをおびる 砂質層としては硬い
- ⑤ 灰褐色土 ③に似るがより大きい赤色窯壁片を多く含む ③より更に硬質
- ⑥ 灰白色砂質土 川砂のようにざらざらする砂 もろい
- ⑦ 赤色 ④に比べてやや暗い赤 やや粘質 ④ほど硬くない
- ⑧ 暗褐色粘質土 右方向では②に良く似る
- ⑨ 濁った赤色 硬質 塊状の窯壁片をあまり含まない
- ⑩ 淡黒色粘質土
- ⑪ やや白みがかった赤色 細かい塊状を示す窯壁を含む
- ⑫ 灰黒色粘質土、周囲の土が少量まじる
- ⑬ 白みがかった赤色 粘質をもつ塊状片多し ①に似る
- ⑭ 炭化物 1.0×2.0径の小片が密集する
- ⑮ 明茶褐色 ②・⑧に比して明るい小さい赤色小片（窯壁）を含む



断面実測位置図

く延長したとする考え方である。これには、延長が1回の場合と、次第に延長していったという2つの考え方がある。

窯は使用により天井が落ちたり、壁が崩れたりして壊れるものである。その際は、廃窯しない限り、壊れた部分及びその周辺を最低限取り壊してその部分の補修を行うのが一般的であるとされる。その時に出た窯壁を使って窯自体を長くして行った可能性が考えられるのである。

事実、焼成室の断面で見たように、最低でも2回、多いところでは4、5回の造り替えが観察されることから、本窯の使用によって壊れた窯壁を用いて嵩上げを行ったことは十分に考えられる。

ただ、次第に延長していったという考え方については、窯壁による同様な嵩上げの部分がほかには見られないことから、可能性は低いのではないかと考えられる。

次に、2つ目の考え方は、開窯当時に廃窯となっていた窯跡の窯壁を築窯に用いたとする考え方である。そうしたとき、堂平窯に先行する窯は、文献等に依る限り元屋敷窯しかない。文献（『薩摩焼の研究』）によれば、元屋敷窯は堂平窯跡と美山小学校とのほぼ中間地点にあたる現水田中にあったとされる。距離としても、200m程であり、遠い距離ではない。運搬するのは可能と言えよう。



しかし、その位置は伝聞によるものであって、筆者が確認したものではない。また、現在の地形を見る限り、現地にある程度の傾斜と長さを持つ窯があったとは考えにくい。ましてや、現在は水田となっており、当時であっても周囲は水気の多い土地であったことは想像に難くない。本窯跡の北西に位置する美山池よりも標高は低い。このようなところに窯を築くことはとうてい考えられないのである。

そうしたとき、この堂平窯のあった場所がそのまま元屋敷窯のあった場所と考えようか。その場所という意味は、南九州自動車道の建設に伴って行った、この周辺の調査によっても窯跡はほかには確認されなかったのである。用地外も丹念に調べたが、窯壁のみならず陶器の1片すらも焼土とともに確認したところはないのである。

この場所が元屋敷窯が開窯された場所そのものであった可能性を指摘するゆえんである。そうすると、本窯の下部の遺構は元屋敷窯ということになる。

ところで、元屋敷窯・堂平窯共に鶴丸城の瓦を焼いたとの記録があることを考慮すれば、同時期に併存していた可能性が大きいことになり、堂平窯＝元屋敷窯との想定は成り立たないことになる。

しかし、それでも周辺に窯があったような場所を比定できないことから、元屋敷窯が完全に跡形もなく破壊されたと考えるか、そうでなければ堂平窯が元屋敷窯そのものとする考え方も（瓦の製作が同時併存でなく、元屋敷窯から堂平窯への製作主体の移動を考えるなど）考慮

すべきではないかと思われる。

また、本窯跡の嵩上げに使用されている窯壁等の少ないことに関しては、物原への投棄などを考えるべきであろう。特に窯操作の最初期に当たる物原1の中にある窯壁片の大量出土は、その傍証になることが考えられる。これら、窯尻への嵩上げと周辺に窯跡の所在する可能性の少ないことを考慮すれば、窯の延長を考えることが相応と言えるかも知れない。

次に上部構造について考えてみたい。

本窯跡は全体的に残存状態は良くないが、それでも床面はある程度までは残っていると言えよう。それに対して壁や天井の残存状態は悪く、殊に天井は皆無である。そのため、上部構造の復元には困難を極める。壁の残存状況を基に、短軸方向の断面を考えた場合に中心線を軸として対称になると考えて推定して行くことになる。

開窯当初の床の幅は約1.4mであったようであるが、最終段階では約1.2mになっていた。ここでは、最終段階の窯の上部構造として復元を試みたい。焼成室中央部で窯壁の立ち上がりは最大で30cmである。中心線を軸として対称な形態と考えると、推定される高さは80～90cm程となる。断面形状は半円形もしくはかまぼこ状と考えられる。

窯尻では急速にすぼまる形が考えられるものの、明確な端部は押さえられなかったことから、高さなどは不明とせざるを得ない。

また、焚き口についても、平面的な礫の並び以外には上部構造は全く不明である。



窯尻（正面）



窯尻（斜め後方より）



窯尻（横から）

2 北側遺構集中区の調査

窯跡の北側に遺構の集中している地区があり、仮に「北側遺構集中区」と名付けた。

この地区には、窯跡から北側に向けて、溝状遺構、石組み遺構、粘土坑、柱穴群、道跡、掘立柱建物跡などの遺構が見られた。また、溝状遺構の中には遺物が集中して廃棄されたものもあり、これを遺物集中廃棄遺構として窯跡に付随する1つの遺構として捉えている。以下、本地区の層位の説明を行った後、各遺構について概略を述べてみたい。

(1) 土 層

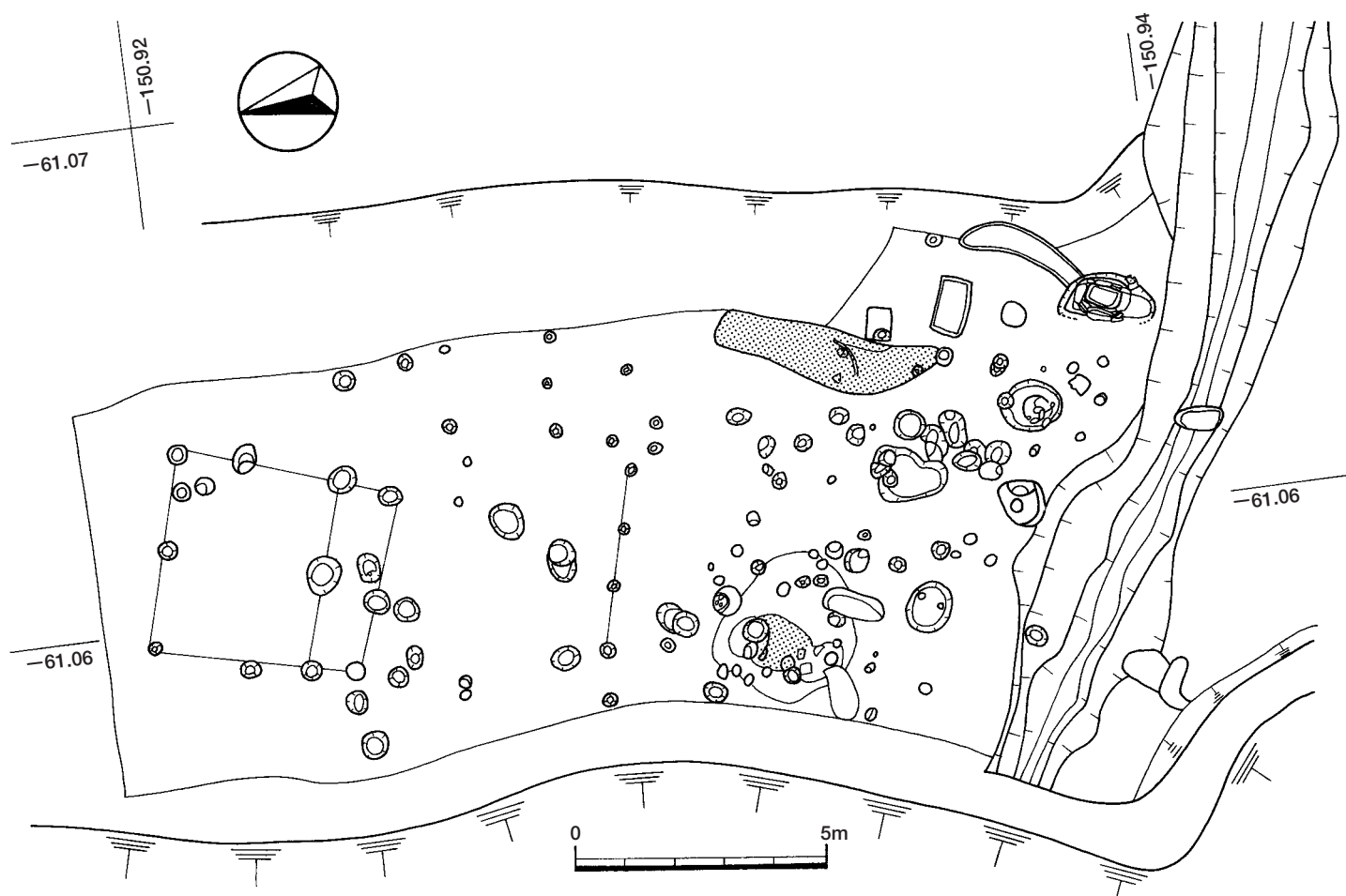
堂平窯跡の東側の土層は次の通りである。

- I 層 表土、耕作土。細かくは3層に分層できる。
- I a 層 茶褐色砂質土で現表土である。
- I b 層 褐色砂質土。
- I c 層 褐色砂質土。焼土や窯壁のブロックを所々に含んでいる。やや赤っぽく見える。
- II 層 褐色砂質土。締まりはあまり良くない。1cm大の礫をわずかに含む。
- III 層 黒褐色砂質土。遺物を所々に含む。西側にのみ

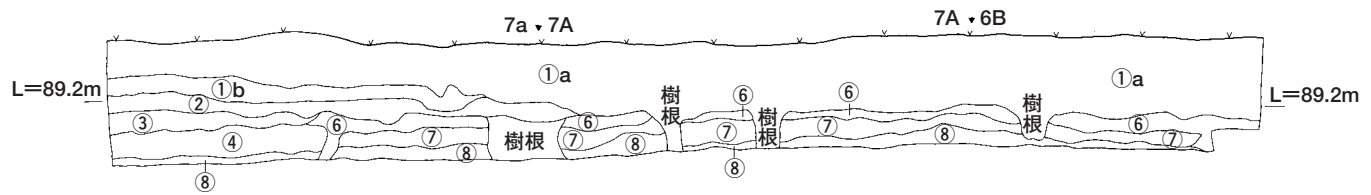
堆積する。

- IV 層 黄色砂質土。アカホヤの2次堆積。遺物はほとんど含まない。
- V 層 黒褐色粘質土。非常に固く締まっている。
- VI 層 灰褐色粘質土。締まりが良い。無遺物層。
- VII 層 淡暗褐色粘質土。非常に固く締まっている。無遺物層。
- VIII 層 黄色～白色砂質土。シラス2次堆積。

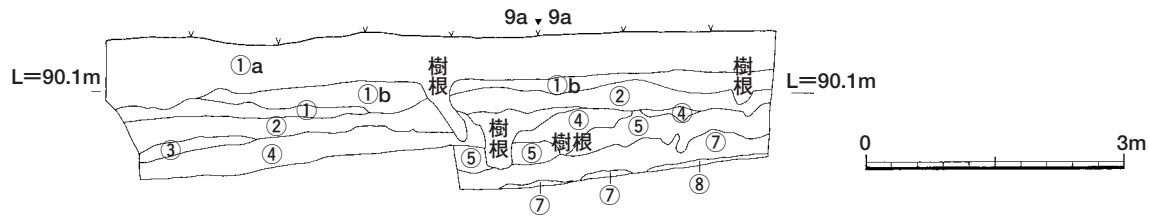
それぞれの層厚は10～20cm程度であり、発達した層とは言い難い。III層からは、縄文時代後期及び古墳時代の土器が出土したことからその時期の遺物包含層と言える。また、I c 層中に焼土や窯壁のブロックを含むことから、この層あるいはII層の時期に窯が築かれたものと考えられる。I c 層中への焼土や窯壁のブロックが、窯跡から離れた場所にまで割合に広域に見られることから、焼土や窯壁を用いた造成が広範囲に行われたことが考えられる。ただ、その由来するところは、窯の操業時とは考えにくいことから、廃窯後に草薺化したこの付近一帯を畑として切り開いた際に、窯本体や物原が破壊され、それが造成時に使用されたものと考えられる。



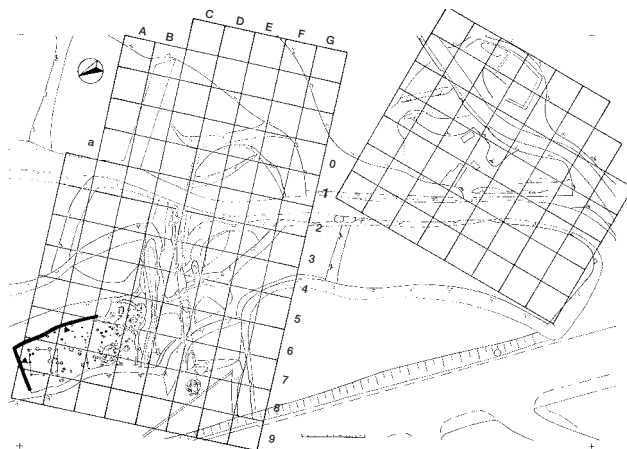
第15図 窯体北側遺構集中部分遺構配置図



第16図 7a-7A-6B 区東壁土層断面図



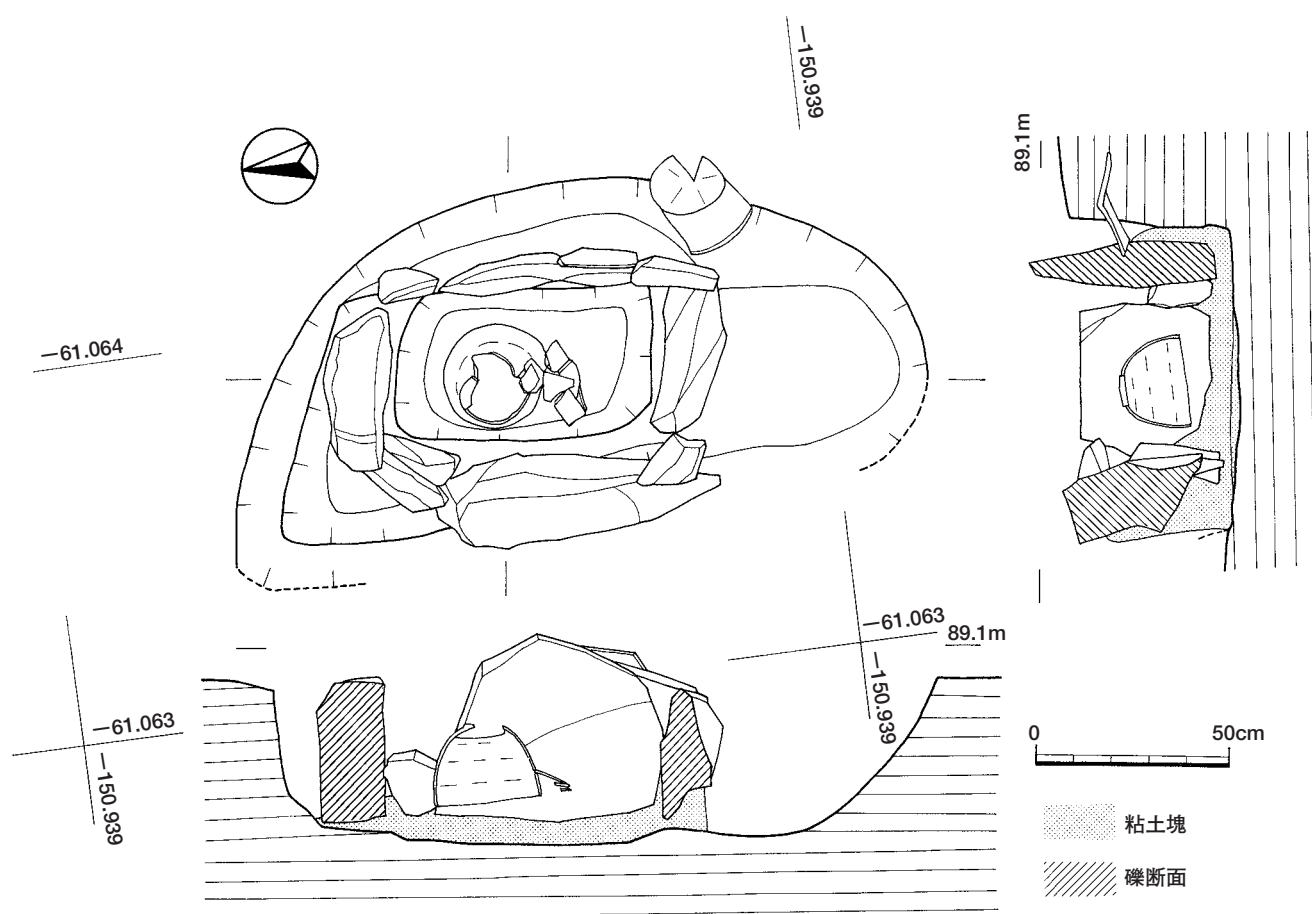
第17図 8a-9a 区北壁土層断面図



土層断面実測位置図

- ①a 茶褐色砂質土 現表土
- ①b 褐色砂質土
- ①c 褐色砂質土 焼土・窯壁のブロックを所々に含んでいる やや赤っぽく見える
- ② 褐色砂質土 しまりはあまり良くない 1cm 大の礫をわずかに含む
- ③ 黒褐色砂質土 遺物を所々に含む 西側にのみ堆積
- ④ 赤ホヤ 2次堆積, 遺物はほとんど含まない
- ⑤ 黒褐色粘質土 非常に固くしまっている 無遺物層
- ⑥ 灰褐色粘質土 しまりが良い 無遺物層
- ⑦ 淡暗褐色粘質土 非常に固くしまっている 無遺物層
- ⑧ シラス 2次堆積





第18図 石組み遺構実測図



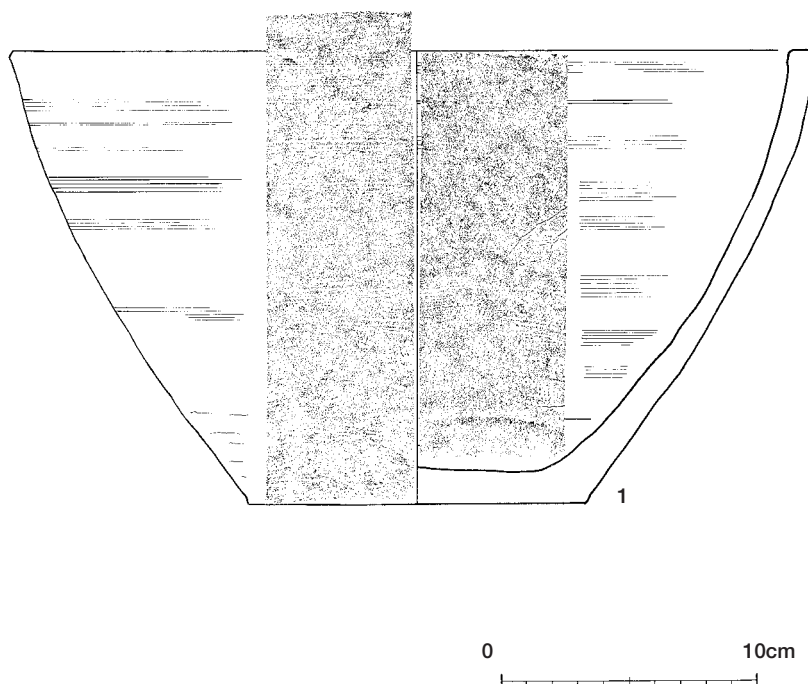
(2) 石組み遺構

北側遺構集中区の南東、溝状遺構から約2m離れた場所ではほぼ南北方向の石組み遺構が検出された。

掘り方は、長軸方向（南北）は354cmであるが、短軸方向（東西）は西側が削平を受けているために推定値ながら180cm程度と考えられる。掘り方の上面から最下面までは94cmで北側寄りに長方形の石組みを設ける。北と南にはそれぞれ大きな1枚の角礫を立て、東と西には中央部に大きく広い板状の石を立て、合計4枚の石の隙間に角礫を立てている。石組みの規模は、南北216cm、東西が159cmとなる。高さは最高で103cmでまた、この石組みは下部を粘土で固めており、石組みの内部にも厚さ12～18cmに粘土が敷かれている。石組みの内部には、南北137cm、東西84cm、深さ4～10cmの長方形の浅い穴が掘られており、この穴を中心に南北210cm、東西164cmの範囲に粘土を敷いて、石組みを行っていると考えられる。東西方向は掘り方いっぱいに粘土が敷かれ、本来は掘り方の規模に合わせて石組みが造られたものと推定される。

石組みの南側の掘り方は、石組みよりも1mほど広いが、これは本遺構の設置時からそうであったかと言え、そうではないと考えられる。その理由は、粘土の広がりや石組み遺構の規模とそれほど変わらない範囲に広がっており、一般的に掘り方との間隔は極めて狭いものに対して、南側のみ1mほどの間隔があり、異様に考えられるからである。また、石組みの南側の掘り方の形態が平らではなく、南側が深くなっていることから、本来石組み遺構と同程度の、つまり石組み遺構を構築するだけの掘り方を掘って石組みを造ったと考えられ、つまるところ南側の異様に広い掘り方は、本遺構の使用時に新たに掘られたか、またはそれ以降に遺構の使用とは無関係に掘られた攪乱によるものと推定されるのである。

この石組み遺構の内部には、素焼きの鉢が口縁部を下位に、底部を上に向けた状態で出土している。これの用途については、本遺構が粘土で囲繞されていることから水を貯めることが可能と考えられ、そのことから水槽的な施設であることが想定される。そのため、本遺構の機能として水簸の作業が行われたことを考えておきたい。石組みの内部で確認された埋土は完全な粘土ではなかったものの、北側の遺構集中区における一般的な埋土とは異なり、非常に粘質の強い褐色系の土であったことか



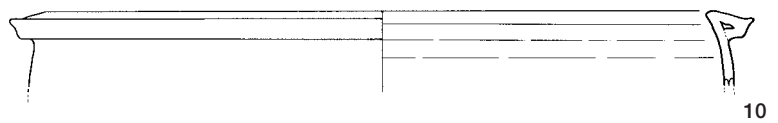
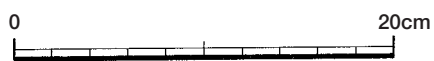
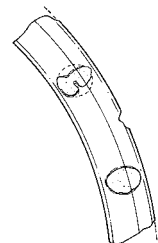
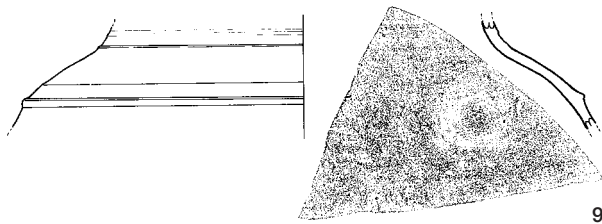
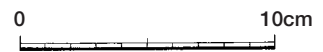
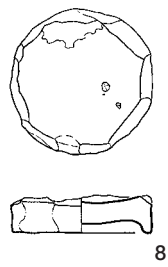
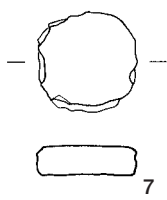
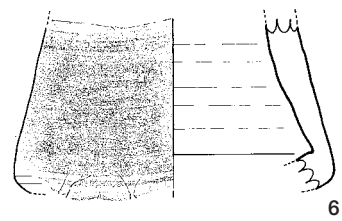
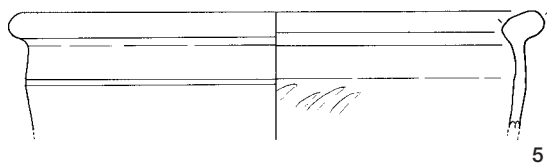
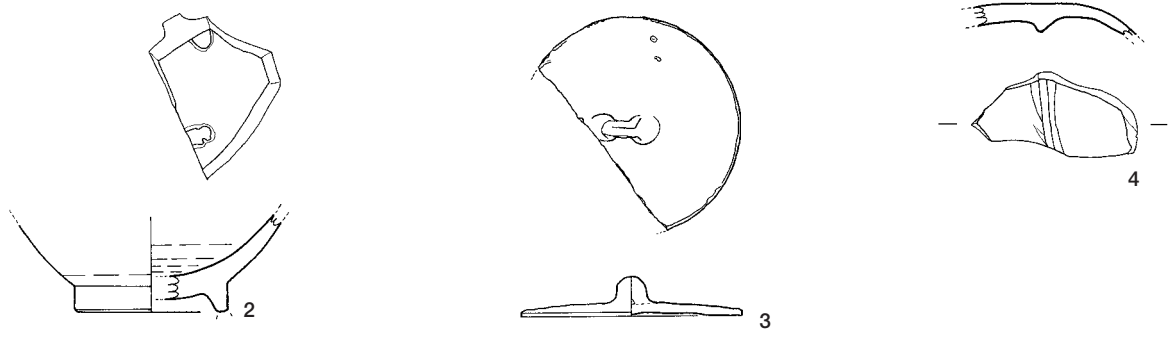
第19図 石組み遺構内出土遺物(1)

ら、その可能性が考えられるのである。

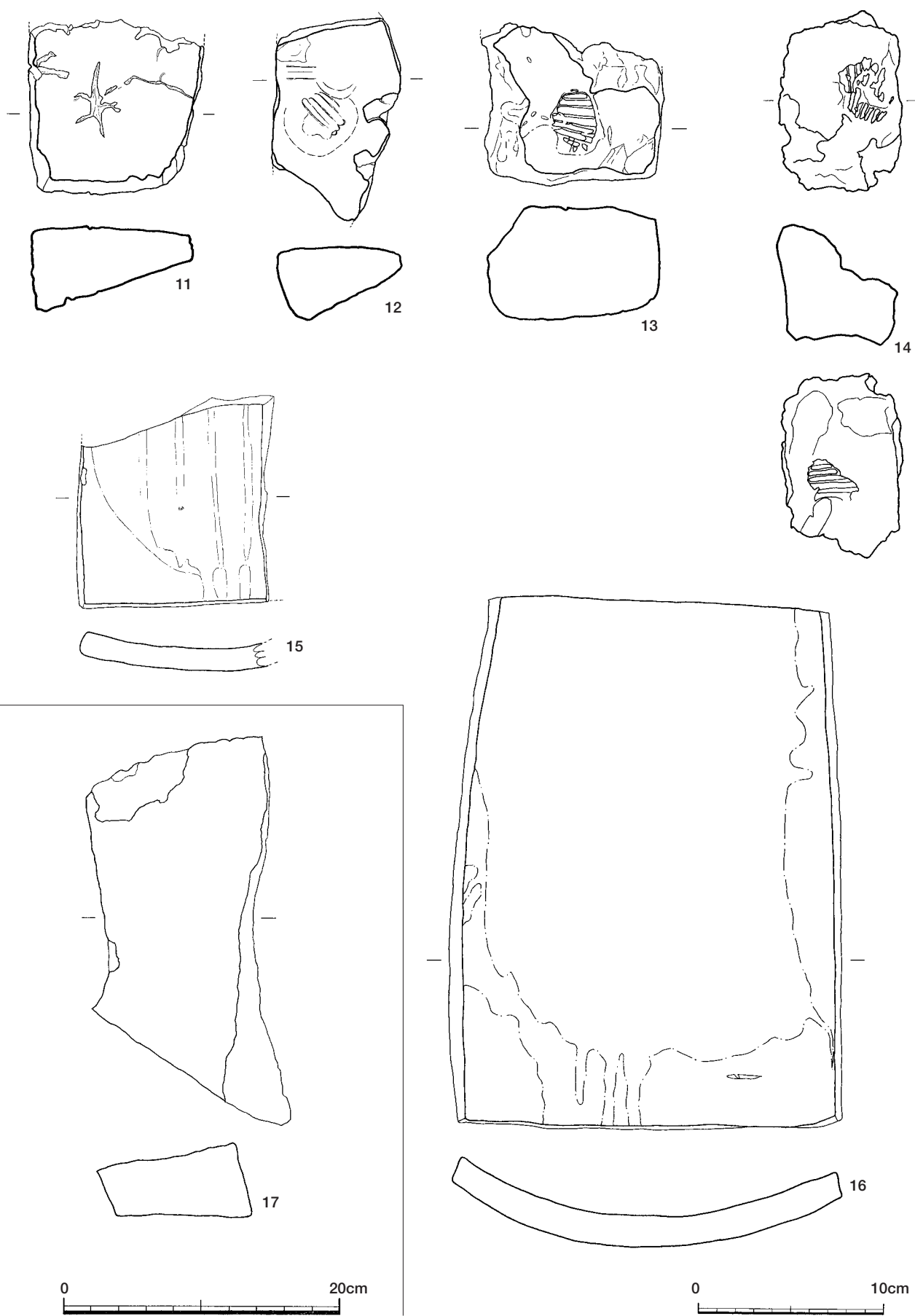
また、遺構の外側ではあるが東南の隅の上部にも同様な素焼きの鉢が、同様に伏せられた状態で出土しており、材質や形状などがほぼ同じであることから、この鉢の機能が水中に投入された粘土を攪拌する目的か、攪拌された粘土の液を入れて水分を除去することが考えられる。

石組み遺構内出土遺物

1は鉢である。胎土は橙色を呈する。内外面は横ナデの調整が施されている。遺構内より伏せたような状態で検出された。2は白色陶胎の碗である。焼成不良のため透明釉が緑がかっている。見込みに胎土目が看取される。3は蓋である。素焼きと思われる。4は蓋である。灰黒色の胎土で、焼き歪みが見られる。5は片口である。内面に同心円状のタタキ目が残る。6は白色陶胎である。仏花瓶であろうと思われる。7はメソコである。素焼きの鉢を転用したものと思われる。8は白色陶胎の碗の底部である。体部を打ち欠いて、他のものに転用したと思われる。9は壺である。外面にはヘラ状工具による横ナデ調整が施され、内面には同心円状のタタキ目が残る。10は甕である。口縁端部は外側に折り返して作られる。11～14はハマである。11・12は平面が長方形、断面が楔形を呈する。13・14は全体形は不明であるが、貝目が看取されることから、ハマに使用されたものと思われる。15・16は釉瓦で、平瓦である。17は石である。石組みに使用されたものと同じ石材である。



第20図 石組み遺構内出土遺物(2)



第21図 石組み遺構内出土遺物(3)

第4表 石組み遺構 遺物観察表

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	鉢	石組内埋土1	31.3	13.0	20.0	にぶい橙色	無釉	—	
2	碗	6 C 石組	—	6.0	—	灰白色	透明釉灰白色	量付以外残存部総釉	内底面に目跡
3	蓋	石組内埋土1	11.6	11.6	—	にぶい褐色	無釉	—	
4	蓋	6 C 石組	—	—	—	灰色	無釉	—	
5	片口	石組内埋土1	21.0	—	—	黄灰色	灰釉浅黄色	口唇部以外施釉	内底面にタタキ目
6	不明	石組内埋土1	—	12.6	—	灰白色	無釉	—	
7	メンコ	6 C 石組	幅3.9	—	厚さ1.1	橙色	無釉	—	
8	メンコ	6 C 石組	—	5.5	—	灰白色	透明釉灰白色	残存部全面施釉	碗からの代用品
9	壺	6 C 石組	—	—	—	褐色	灰釉褐色	残存部全面施釉	内底面にタタキ目
10	甕	石組内埋土1	37.2	—	—	灰褐色	灰釉緑黒色	口唇部以外施釉	口唇部に貝目
11	ハマ	6 C 石組	幅8.7	—	高さ4.6	橙色	無釉	—	
12	ハマ	6 C 石組	幅6.6	—	高さ4.0	灰色	無釉	—	上面に貝目
13	ハマ	6 C 石組	幅9.3	—	高さ6.2	褐色	無釉	—	両面に貝目
14	ハマ	6 C 石組	幅5.8	長さ9.4	厚さ5.8	褐色	無釉	—	両面に貝目
15	瓦	石組内埋土1	幅10.3	—	高さ2.1	橙色	灰釉にぶい黄色	上面のみ施釉	
16	瓦	6 C 石組	幅21.1	長さ28.6	厚み1.7	褐色	灰釉にぶい黄色	上面のみ施釉	
17	石	6 C 石組	幅10.2	長さ22.4	厚さ4.1	浅黄色	無釉	—	

(3) 粘土坑

北側遺構集中区の南部、溝状遺構に沿うように約8m×4mの範囲に粘土の見られる土坑が確認された。検出した順に粘土坑1号、粘土坑2号、…として粘土坑8号までと名称を付したほか、これらよりも若干離れたところに1か所確認されたことから粘土坑0号と名付けた。その結果、本粘土坑は合計9基を数えるに至った。以下、それぞれについて概略を述べる。

粘土坑1号

C-6区で確認された。長径110cm、短径90cmで、深さは16～26cmである。断面を長軸方向で見ると、南端から約85°、北端から約75°の角度で一気に20cm程度掘った後に、中心部へ向かって幾分浅くなるように全体的に掘っている。中央部の南側は長径50cm程にさらに掘り窪めているが、それが意図的になされたものであるか否かについては明確ではない。ただ、全体的に底面は平らではなく、うねったようになっている。主軸方向はN33°Eである。南側の底面には小さな石が2個含まれていたほか、北側の上面には当窯で焼かれたと考えられる淡褐色の平瓦の破片が2点出土している。埋土の粘土は青味を帯びた灰色の粘土が主体となっている。

粘土坑2号

C-7区で確認された。長径83cm、短径80cmで、深さは12～20cmである。断面を長軸方向で見ると、西側を約92°の角度で一気に15cm程度掘った後に、中心部へ向かって全体的に若干浅めに掘っている。中央部は約30cm

程度さらに掘り窪めており、意図的になされたものであるか否か明確ではない。この点も含めて粘土坑1号と類似していると言える。主軸方向はN71°Eである。上面には小さな石が2個と当窯で焼かれたと考えられる淡褐色の平瓦の破片が1点出土している。埋土の粘土は上部が淡橙色混じりの青灰色の小ブロックの粘土であり、下部は青灰色の粘土である。また、西側の下部は、赤色混じりの黄色主体の粘土である。

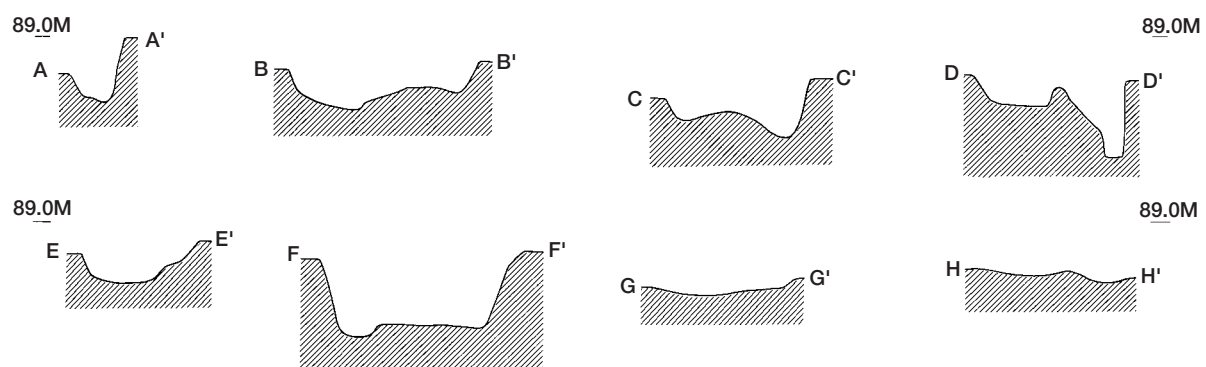
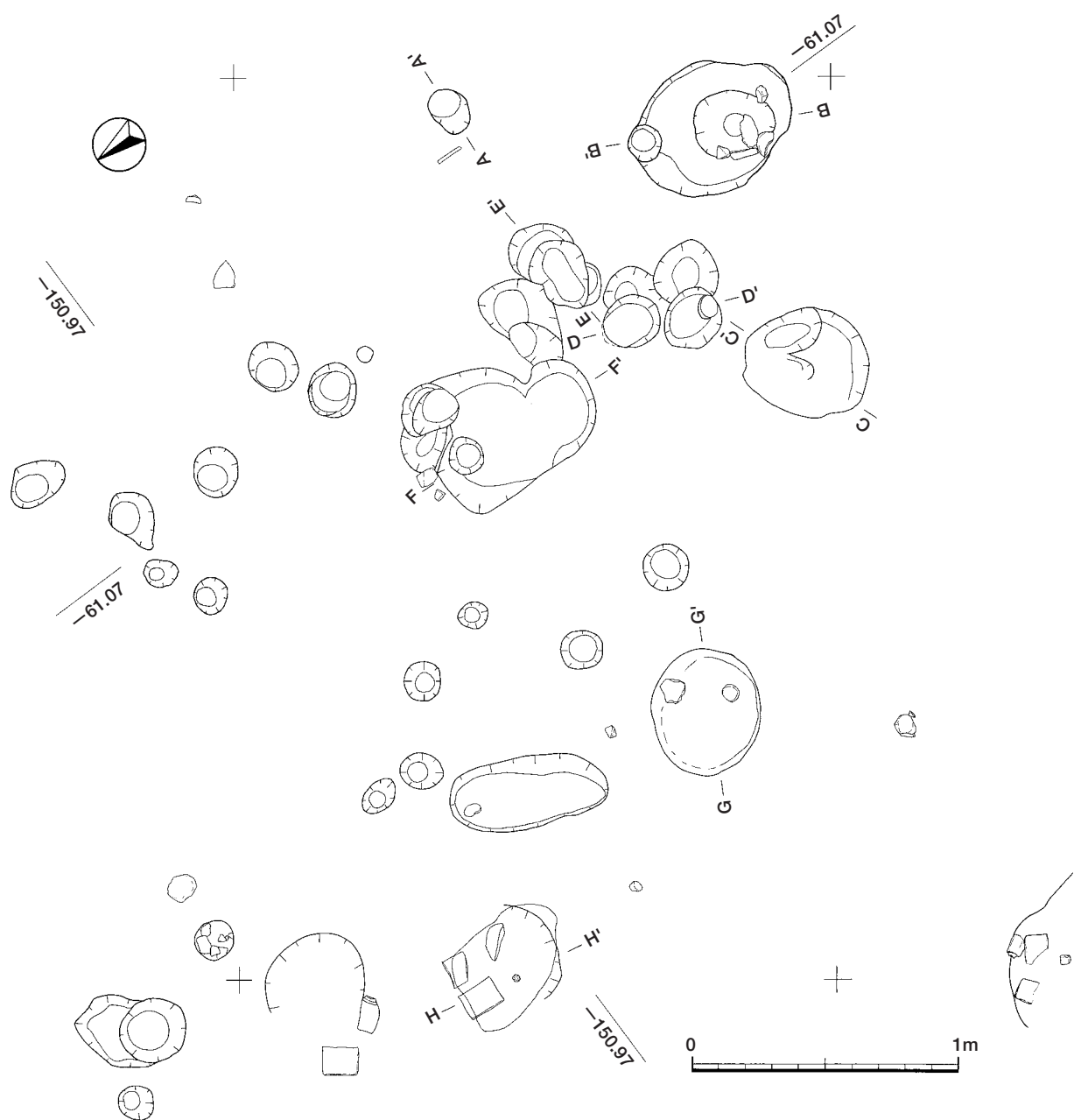
粘土坑3号

C-7区で確認された。長径96cm、短径53cmで、深さは6～11cmである。断面を長軸方向で見ると、北側を78°の角度で10cm程度一気に掘った後は、ほぼ水平に掘り窪めている。主軸方向はN15°Eである。上部には赤色の粘土が大小のブロック状になってあったほか白色の粘土塊も見られ、また、下部には淡橙色と青灰色の粘土が交互に若干層状となって存在していた。遺物は見られなかった。

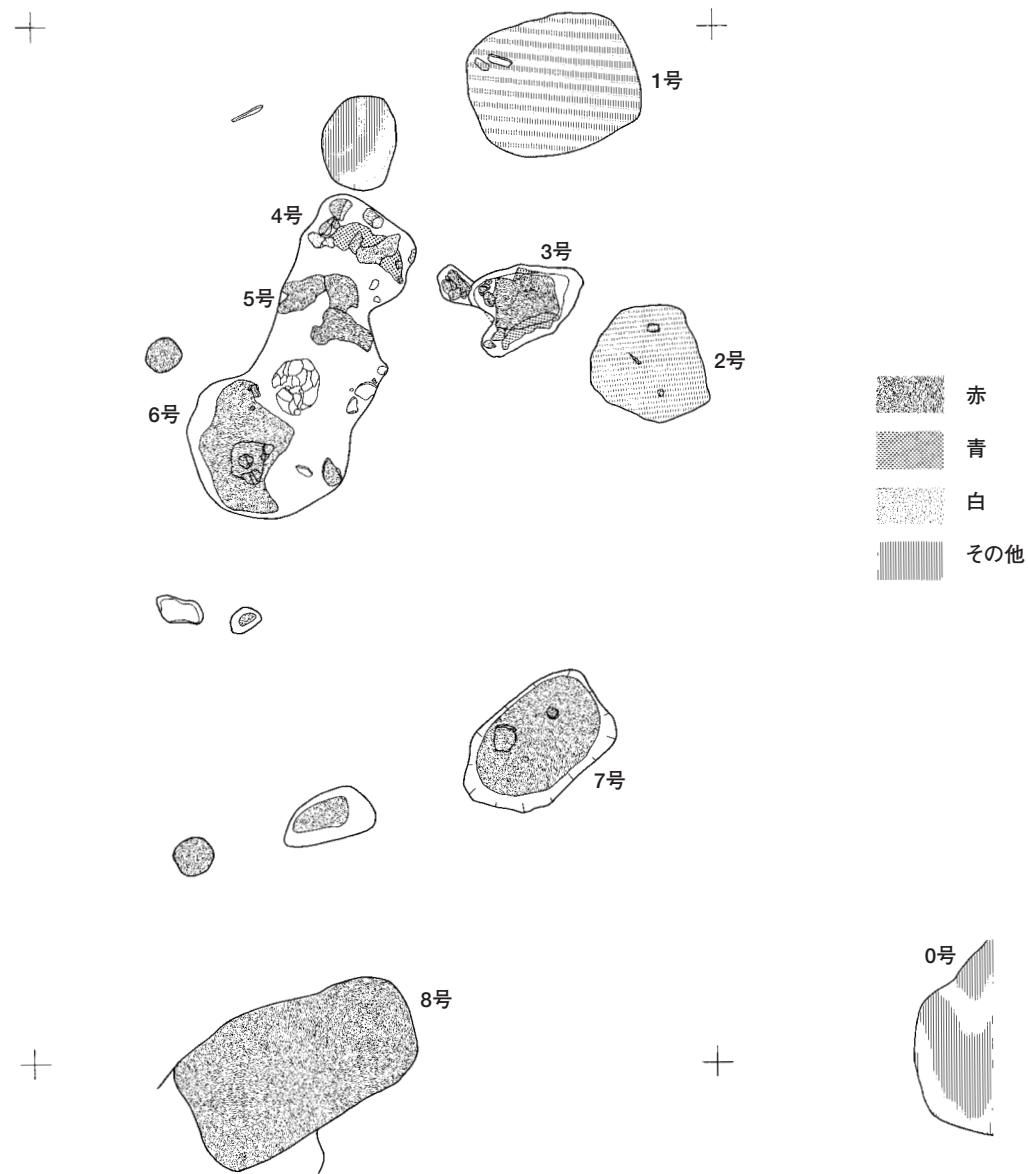
粘土坑4号

粘土坑4号から6号は、広い意味では大形の土坑中に包含されると見れなくもない。ただ、部分的に見た場合、小さなまとまりが3基あるものとして考えた方がよいとの判断に基づき、個別の遺構として捉えることにした。

粘土坑4号はB・C-6・7区の境界付近で確認された。長径96cm、短径75cmで、深さは23～26cmである。断面を短軸方向で見ると、南端から66°、北端からは62°の



第23図 粘土坑検出状況図



第22図 粘土坑出土状況図

角度で一気に30cm程度掘った後に、中心部に向けては平らになるように掘り窪めている。一旦、幅30cm程度掘り窪めを行わないまま、再度北側に南端で75°、北端で88°の角度で約25cm程度一気に掘った後に、中心部に向けて平らに掘り窪めている。これをまとめると、土坑自体は2基からなっているものの、上面観では略長方形を呈していることになる。そうしたとき、主軸方向はN27°Wである。上部には北側に赤色と白色の大きな粘土塊が見られる。また、東側には赤色と青色の粘土塊が大小織り交ぜて存在していたほか、西側に赤色と青色それに白色の粘土塊が存在していた。また、下部は赤色や白色の粘土塊が混ざった淡褐色の土が埋土となっている。

粘土坑5号

B-7区で確認された。長径38cm、短径32cmで、深さは8cmである。断面は北端から約32°、南端から約38°の角度で5cmほど掘った後に、そのまま弧を描くように、すくうように掘り窪めている。そのため、床面は円弧状となっている。主軸方向は粘土坑4号と同じくN27°Wである。遺物は見られず、埋土の粘土は赤色で、円形のもの小さくブロック状に割れている状況である。

粘土坑6号

B-7区で確認された。長径108cm、短径92cmで、深さは26~52cmである。断面を長軸方向で見ると、東端から約88°、西端から約72°の角度で一気に25~40cm掘った後に、東側に浅くなるように中心部が若干窪むものの、ほぼ平坦に掘り窪めている。主軸方向はN66°Eである。本粘土坑はすべての粘土坑中で最も深いものである。上面には西側で陶器片1点のほかに赤色の粘土塊があったほか、中央部から東側にかけての広い範囲には木炭混じりの赤色の粘土と、青灰色の粘土塊が見られた。掘り込みの埋土は西側は粘土混じりの暗褐色土、東側は木炭混じりの赤色粘土であり、中央部付近の東側は黒色土、西

側は木炭混じりの白色粘土と黒色土が混在したものであった。

粘土坑7号

C-7区で確認された。長径111cm、短径68cmで、深さは約15cmである。掘り方は、北端から約60°、南端から約75°の角度で15cm一気に掘った後は、ほぼ水平に掘り窪めている。主軸方向はN2°Eであり、ほとんど南北方向といえる。遺物が大きな礫1点と陶器の底部が1点出土した。この陶器の底部は極めて特徴的なものである。それは薩摩焼の黒物の碗の底部であるが、口縁部がまっすぐに整っているのに底部が打ち欠かれているものである。埋土は赤色粘土に木炭の混じった土である。

粘土坑8号

B・C-7・8にかけて確認されたもので、1基としては最大規模のものである。長径162cm、短径81cmで、深さは約20cmである。掘り方は、北端及び南端から約75°の角度で20cm一気に掘った後は、ほぼ水平に掘り窪めている。主軸方向はN17°Eである。遺物のはるか上面に本窯で焼かれたと考えられる完形の平瓦が出土したが、出土した位置がほかの粘土坑出土の遺物の位置と比べると上位過ぎるため本粘土坑に直接関連する遺物としては考えにくいように思える。埋土は赤色の粘土に若干木炭の混じった土である。

粘土坑0号

粘土坑1号~8号からは離れた地点、C-7・8区での確認である。溝状遺構の上面で検出されたものである。陶器片などと一緒に様々な色の粘土が混ざった状態で出土しており、割合に広域に広がってはいるものの、明確な土坑としては認識しにくい状況であった。そのため、ここでは0号として2次的な資料として提示しておくにとどめたい。



○粘土坑の性格等について

ここで、この粘土坑の性格及びその時期について少し考えてみたい。そこで参考となるのは、さまざまな色調を呈すること、単一の色調の粘土塊もあれば、いろいろな色の粘土が混ざり合ったものも見られること、深さはさまざまではあっても粘土坑0号以外は確実に人為的に掘られた中に埋められるか、または上部に置かれていたこと、埋土中には石や礫のほかには瓦や陶器などの破片が見られるものもあったことなどである。

まず、性格についてである。窯で用いられる粘土には、大別すると①製品を製作するための材料としてのものと、②窯の破損に伴って補修する材料としてのものがあると考えられる。

①の場合は、水簸され、精製された粘土であることが考えられ、また、②の場合にはそこまで精製されている必要はなく、砂礫混じりのものでも支障はないと考えられる。その視点で観察した場合、本粘土坑中から出土した粘土は、それほど砂礫を含んではおらず、どちらかといえば精製粘土に近い状態と言えるものであった。ただ、そのように製品を製作する材料として将来されたものであるならば、なぜこのような土坑に、ほとんどが単一色調の粘土塊ではあったものの、中には塊として混ぜられた状態で遺棄されたのであろうか。そうであれば、単に製品を製作するための材料として持ってこられ、最終的に遺棄されたものとは考えにくいようである。

その答え示唆していると考えられるものに、土や粘土中に木炭を含んだものも見られたことが挙げられる。つまり、窯の近辺で使用され、最終的に遺棄されたと考えられるのである。そうしたとき、当初は、精製粘土に近い状態の粘土塊として持ち込まれていることから、①の

ような、製品を製作するための材料であったものが、次第に本来の使用目的を失っていったことが想定される。つまり、②のような、窯の補修材料として転用されていったという考えである。そして、それもまた必要性を失って、最終的に掘られた土坑中に遺棄されたものということになる。土坑の上部に置かれた粘土は、それぞれ必要性が全く失われた結果、ただ土坑の上に漫然と遺棄されてしまったものであろう。

次に、その時期であるが、これは陶器及び瓦の製作年代を主に考えることで自ずと判明すると思われる。

陶器については後察に譲ることにして、ここでは瓦によって年代を考えてみたい。

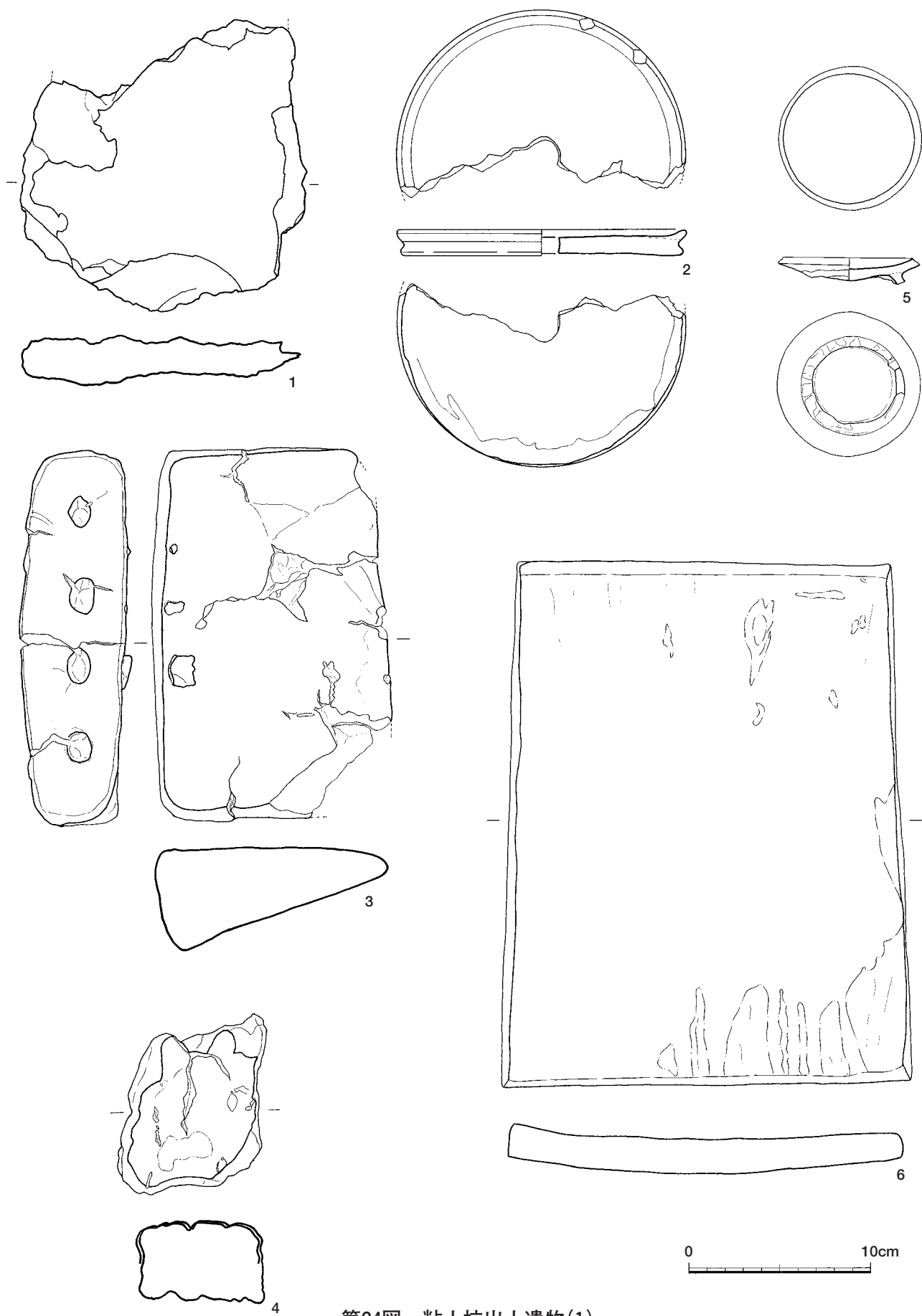
本粘土坑から出土した瓦は、淡褐色の平瓦である。当窯で鶴丸城の瓦の生産を行っていることから、鶴丸城創建当時のものと考えることができる。後は、窯の操業時期と考え合わせて、本窯の初期のものか、その後の時期のものかによって判断できるであろう。最終的な時期判断は、本書の編集者に一任することとしたい。

ただ言えることは、鶴丸城の創建時か、それほど遅れない時期のものであることだけは確実であろう。

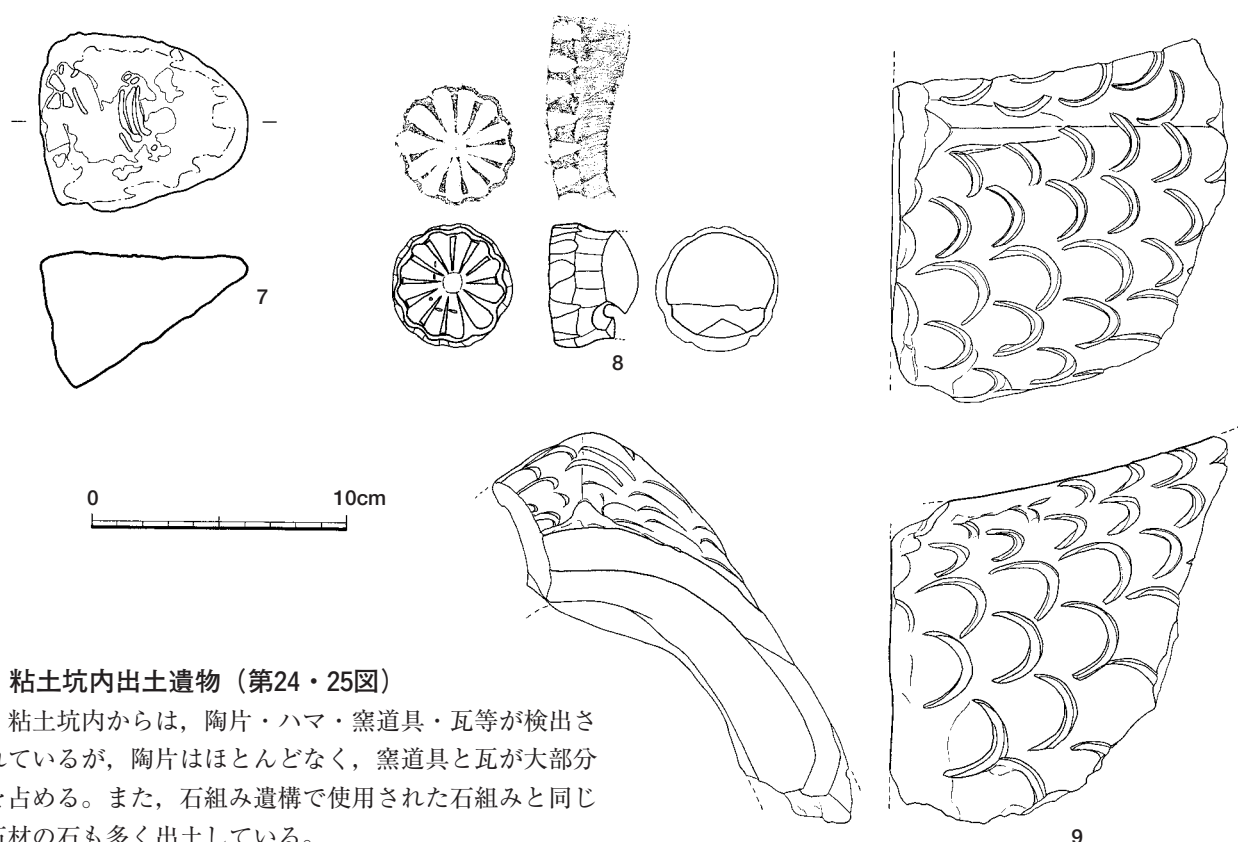
○粘土坑下部の状況について

粘土坑を完掘後の状況は第23図のようである。粘土坑が掘られる以前の状況であり、小さめのピットから割合に大形と言える土坑まで各種見られる。ピットや土坑の状態からは、建物として復元できるものは見られない。土坑の中には、石や陶器片と思われるものもあるが、粘土坑とはさほど時期的に離れているものではないと考えられる。





第24図 粘土坑出土遺物(1)



粘土坑内出土遺物（第24・25図）

粘土坑内からは、陶片・ハマ・窯道具・瓦等が検出されているが、陶片はほとんどなく、窯道具と瓦が大部分を占める。また、石組み遺構で使用された石組みと同じ石材の石も多く出土している。

1・2は、粘土坑1の出土遺物である。1は平たい安山岩である。2は、窯道具と思われるが、詳細な用途は不明である。胎土は粗く、1mm程度の白色砂粒を多く含む。中心部は穿孔される。下面には、黄白色の目跡がのこる。

3・4は、粘土坑2の出土遺物である。3は、ハマで、平面は長方形、断面楔形を呈し、側面には浅い穿孔が4か所施される。上面には陶片が熔着しており、また上面下面ともは白色砂粒が付着している。4はハマあるいは窯壁と思われるが、貝目等は見られない。

5は、粘土坑7の出土遺物である。碗の底部を加工しており、高台は打ち欠かれ、胴部は鋭利な工具で円形に刳り抜いたと思われるほど、シャープな割れ口である。

6は、粘土坑8の出土遺物である。釉瓦の平瓦である。

第25図 粘土坑出土遺物(2)

7は、粘土坑0の出土遺物である。平面が三角形で断面が馬蹄形をしたハマである。

8・9は粘土坑を検出する際出土した資料で、粘土坑内から出土したものではない。8は、陶製のスタンプである。植木鉢等の外面に花文を施す際、使用されたと思われる。持ち手の部分は欠損しているが、紐等を通したと思われる穴が看取される。9は、瓦質の瓦で、鴟尾の胴部分と思われる。堂平窯で焼かれたものであるかは不明であるが、物原から出土している朝鮮風の瓦と同じ胎土である。

第5表 粘土坑 遺物観察表

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	石	粘土坑1	長さ21.5	—	3.7	にぶい黄橙色	無釉	—	安山岩
2	窯道具	粘土坑1	土径16.0	—	1.4	にぶい赤褐色	無釉	—	下面に目跡
3	ハマ	粘土坑2	長さ20.4	幅12.8	5.7	灰褐色	無釉	—	下面に目跡・指痕、側面に浅い穿孔あり
4	ハマ	粘土坑2	長さ7.0	—	4.3	灰色	無釉	—	
5	メンコ	粘土坑7	—	—	—	灰褐色	灰釉 黄橙色	残存部全面施釉	碗の転用？
6	瓦	粘土坑8	長さ28.5	幅22.5	高さ2.8	橙色	灰釉, 灰褐色	上面のみ施釉	
7	ハマ	粘土坑0	長さ8.2	—	高さ5.4	褐灰色	無釉	—	上面に貝目
8	制作用具	粘土坑	幅4.8	—	—	浅黄橙色	無釉	—	スタンプ
9	瓦	ドビラ1B-5	—	—	厚さ2.4	灰色	無釉	—	

(4) 掘立柱建物跡

a・A-8・9区で検出された。それぞれのピットの計測値及びピット間の芯間の距離は下記の通りである。ただし、これらの数値は実測図による計測値であり、現場での計測値ではないことを断っておく。

①ピットの計測値

番号	長径cm	短径cm	深さcm	備考
1	30	28	50	
2	40	36	42	
3	40	31	58	
4	40	30	(54)	削平
5	54	46	35	二重
6	40	32	46	
7	72	70	58	
8	54	50	41	
9	42	35	34	
10	53	49	42	
11	50	34	31	

②ピット間の芯間距離

梁 間		桁 行	
ピット間	距離cm	ピット間	距離cm
1-3	404	1-9	404
1-2	202	1-4	204
2-3	200	4-6	116
6-8	394	6-9	94
6-7	198	2-10	435
7-8	198	2-7	320
9-11	368	7-10	126
9-10	146	3-11	434
10-11	218	3-5	144
		5-8	198
		8-11	112

主軸方向はN22°E。桁行がほぼ南北方向で、やや東寄りの造りとなっている。

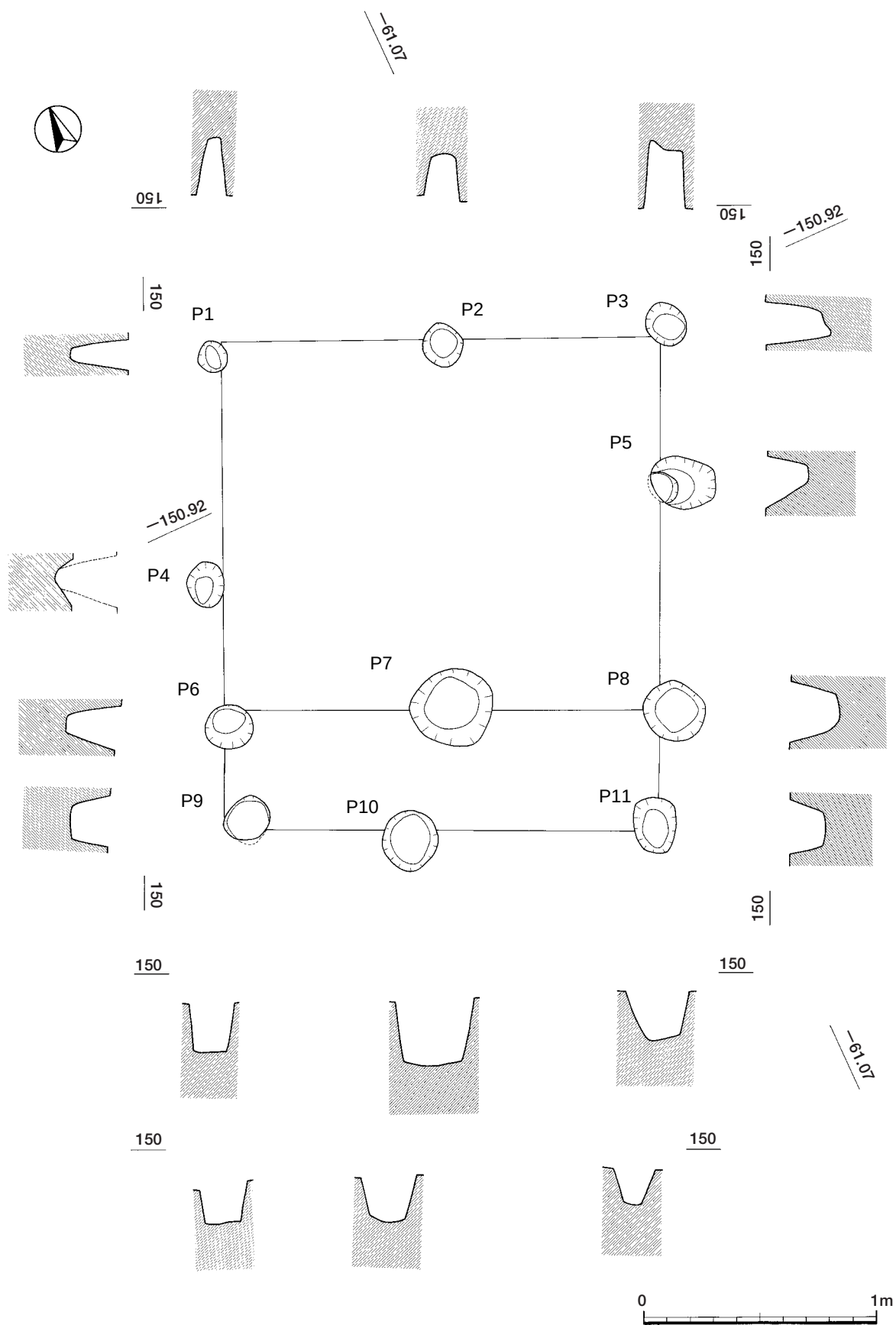
2間×2間の南側に半間の庇が取り付け構造である。柱穴は、主屋で直径が30～70cm程度、深さは35～60cm程度であり、庇部分は直径が35～50cm、深さは30～40cmとなっている。柱穴の大きさからすると、やはり主屋部分の方が規模が大きいことから柱自体も大きなものが用いられ、深さも深く掘られて家が建てられたものと考えられる。それに対して、庇部分は主屋に比べて柱穴の大きさが小さめで、深さも比較的浅いことから、このような庇のある構造と考えて間違いはないと思われる。

このほかにも、この区域からは多数のピットが検出されている。そのほとんどは直径が15～25cm程度、深さも20～40cm程度のもので、規則正しく並ぶことはなく、建物を復元することはできなかった。

ただ、A、B-7、8区に5個のピットが一行に並ぶ状況が確認され、堀の跡の可能性が考えられる。これは、本掘立柱建物跡の梁方向と柱筋を揃えてあることから、この建物に付随する目隠し堀的な意味合いが想定される。

また、B-6、7区とB-7、8区の2か所に硬化面が見られたが、これは本掘立柱建物跡に付随するものと考えられ、本建物へ至る通路であると想定される。





第26図 掘立柱建物跡実測図

(5) 溝

C, D-4～8区で確認されたものである。幅は3.9～7.8m, 深さは約1.5～2.7mで, 検出した部分の総延長は41.7mある。西側に延びる可能性はあったが, 調査時には段になっており, それ以上の調査は行わなかった。この溝は, 東側が高く, 西側に向けて急勾配で下っている。比高差は確認した範囲で5.6mある。基本的に2段掘りされて, 上部の傾斜は緩やかである。

C-7区の断面によって, 確認すると, 溝の形成以前に造成の形跡が見られる。それは溝の検出面から約130～220cmの部分, 黒色土や薩摩火山灰, 黄色シラスなどによって, 主に南側を中心に造成が行われている。そのような造成の後に, 上記の規模で溝が掘られていることになる。

溝の下部は黒色土や褐色土, シラス混じりの砂質土などが主に埋められている。中には遺物はほとんど含まれないことから, 近隣であっても窯近くからではなく, 逆の北側の高い部分から持ってきた土と考えられる。

これに対して, 溝の上部は, 遺物等を多量に含む淡褐色土や黒色土主体の埋土である。①は黄色っぽい淡褐色砂質土で, 陶器片や石などを多量に含む, ②は黒灰色砂質土で, 窯壁片, シラス, 陶器片などを含む。③は赤味かった灰褐色土で, 窯壁片が多く含まれる。

出土遺物の詳細は別項に譲って, ここでは出土遺物から考えられる溝の形成から廃棄までを考察したい。

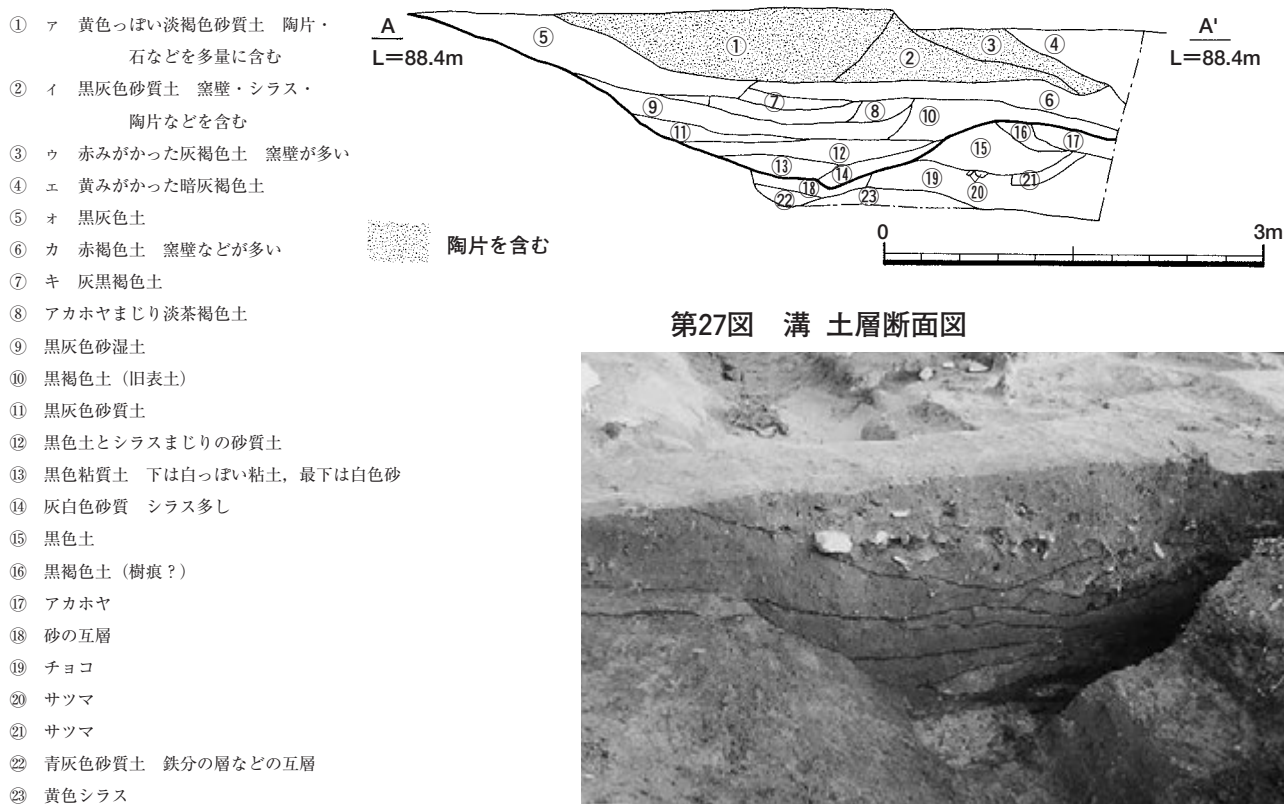
まず, 窯が造られる段階で, 溝が掘られる部分の南側を中心に, 全体的に2m程度の造成が行われる。これに用いられる土は, 当時畑あるいは荒地であったと思われる。北側の部分の土を用いて行われたと考えられる。

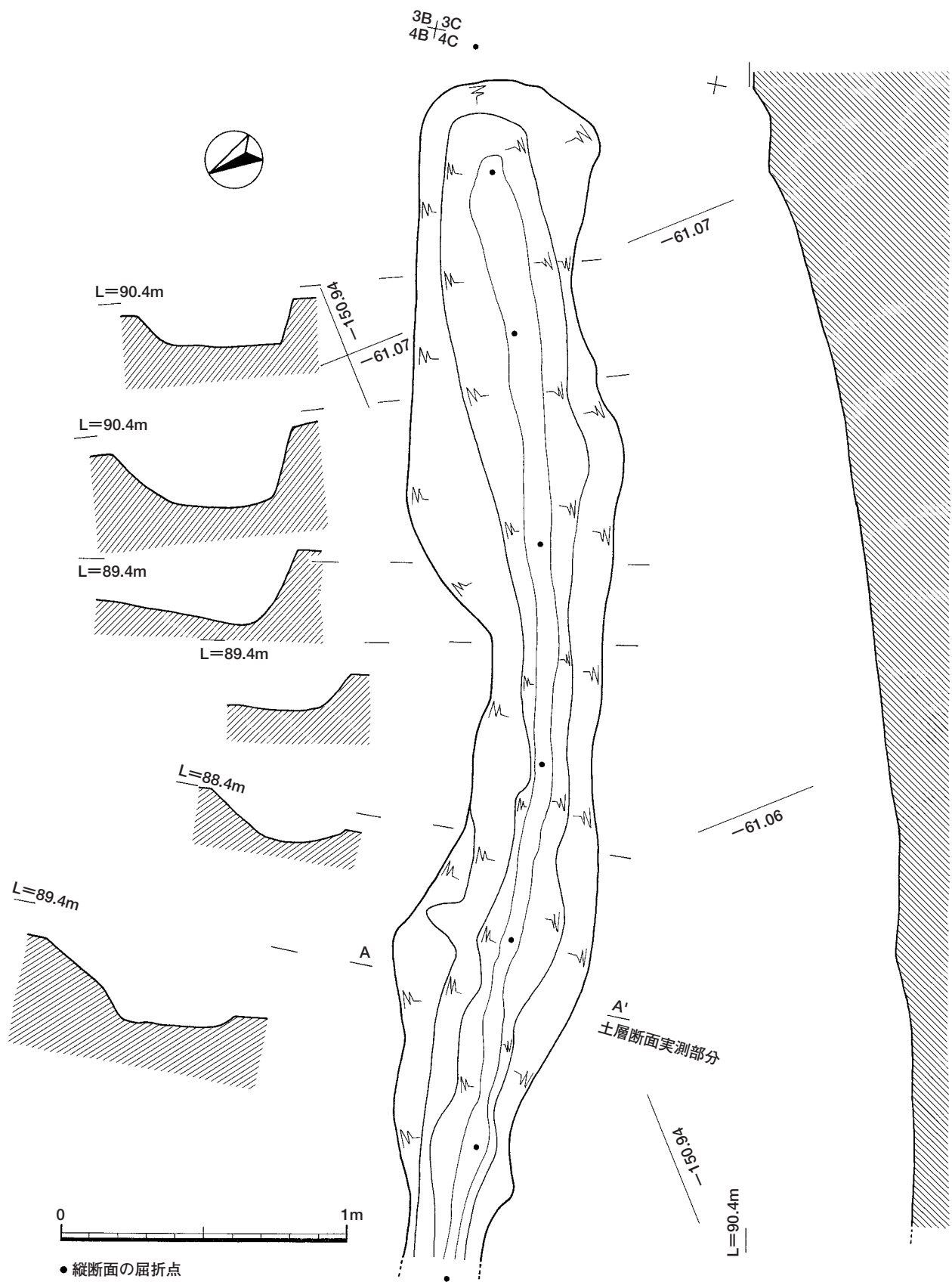
その後, 窯が築かれるが, この時に溝が掘られたと考えられる。理由は, このままでは地形的に高い北側に降った雨が窯を直接襲うことになるため, この水を窯に近寄せない必要が出てくる。溝を掘ることで北側に降った雨を窯に寄せずに流下させることができる。

そのようにして築かれた溝ではあったが, 建物を伴う主要な作業場を北側に設けたため, またはそうせざるを得なかったため, 窯と作業場との往来に不便な事態となった。そのため, ごく初期に埋めざるを得なくなって, 埋められたようである。その際に用いられた土は, 北側の土が主体であったと思われる。

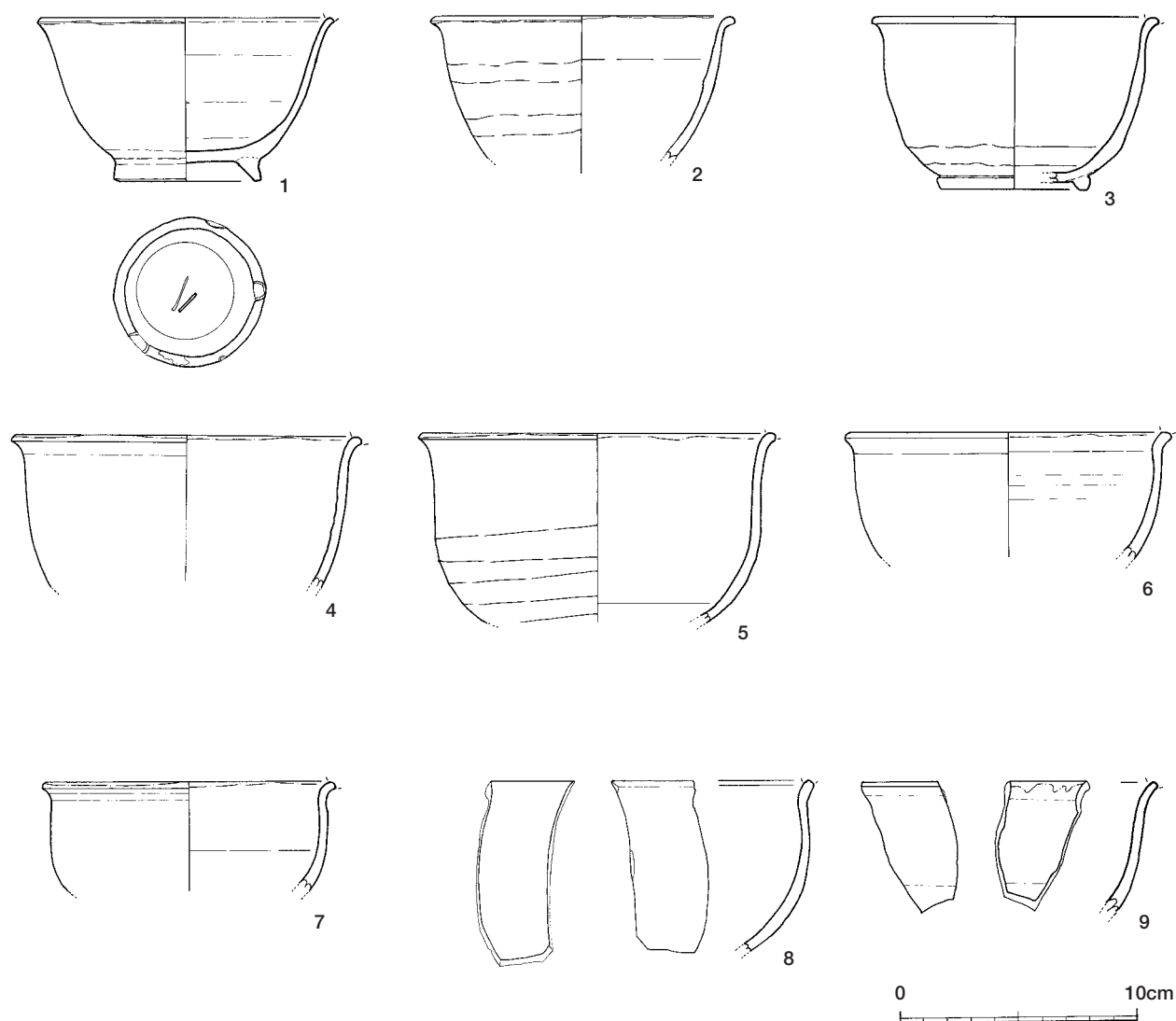
溝を埋めた後に自然に纏圧され, 西側に窪みを生じてきた。そのため, この窯でごく初期に焼かれたものの中で廃棄すべき陶器片や石などが遺棄された。それが, 溝の上部に厚く残された陶器片を伴う埋土となったものと想定される。

その後は, 溝の中央部及び残存する西側に, 北側の作業場と行き来する道も形成されて行ったものと考えられる。窯の作業が停止された後は, 割合に早い時期に畑や荒地と化したと考えられる。





第28図 溝実測図



第29図 溝内出土遺物(1)碗

溝内出土遺物

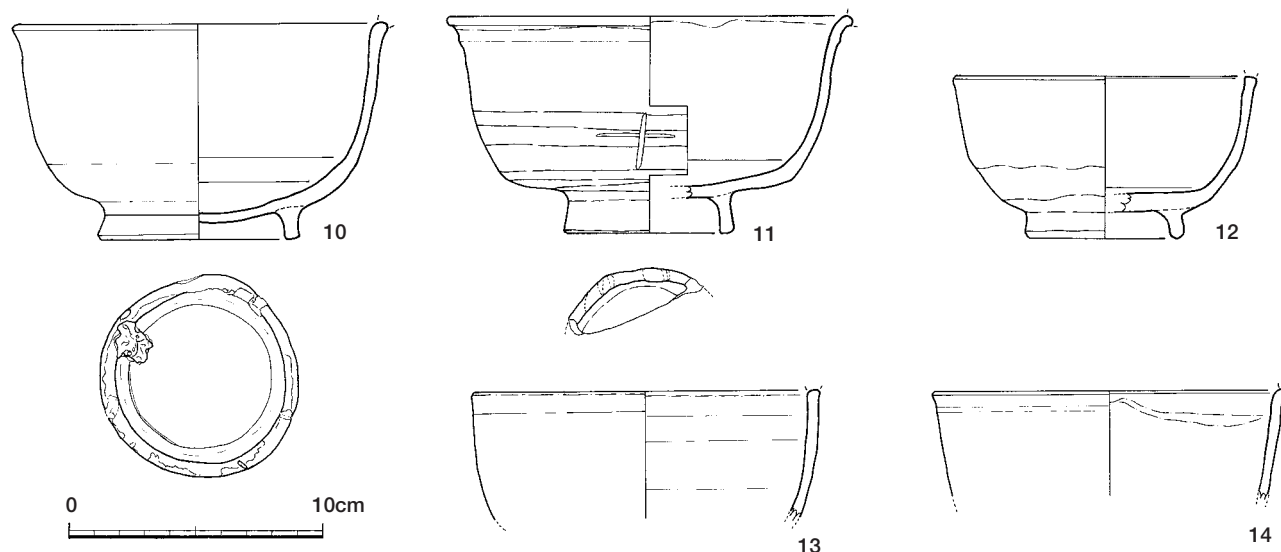
6・7-C区を中心に、大量の陶片が出土した。器壁が非常に薄く、作りもシャープであり、薩摩焼古窯址の中でもっとも古いとされる串木野窯跡から出土した陶片と類似していることから、堂平窯の製品の中でも初期の頃のものであろうと考えられる。

碗（第29～31図）

溝内出土遺物の中では、少ない出土量である。器形は個体により若干差があるものの、基本的には腰部が張り口縁部は外反するものが中心であるが、一部口縁部が直口するものも見られる。

第6表 溝 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	溝	12.4	6.3	6.9	黒褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	畳付に貝目 高台内面に釘彫り
2	碗	溝	12.8	—	—	灰褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
3	碗	溝	12.1	6.2	8.3	灰色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
4	碗	溝	14.6	—	—	灰褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	
5	碗	溝	14.8	—	—	灰褐色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	
6	碗	溝	13.6	—	—	灰色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	
7	碗	溝	12.4	—	—	灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
8	碗	溝	—	—	—	灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
9	碗	溝	—	—	—	黒褐色 灰褐色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	



第30図 溝内出土遺物(2)碗

製作方法は、粘土紐を輪積みにして轆轤で成形しているものと思われる。また、外面腰部以下は碗を伏せ削り出して成形しており、上位とは逆方向の削り痕が看取される。高台は削り出さず、粘土紐を輪にして外底面に貼り付けた「付け高台」であるため、シャープさに欠け、パチ状を呈する。

口縁部の形状から、口縁部が外反するものと外反しないものの2つに分けることができる。

1～12は、口縁部が外反するタイプの資料である。口唇部の釉薬を取っているためか、先端部の外側に稜が残る。体部のラインにより、さらに細分化することができる。

1・2は、腰部の張りが弱く、口縁部にかけて斜めに緩やかに立ち上がるタイプの資料である。1は高台内面に釘彫りが見られ、畳付には腹面の貝目が残る。2は外面下位に削り出しの痕跡が残る。また1・2の胎土の色調は、中心部は黒褐色、周辺部は灰褐色の3層を成す。

3～12は、腰部が張り、口縁部にかけて緩やかなSの字を描きながら立ち上がるタイプの資料である。3は、比較的低い高台が付けられている。中でも3～5は、腰部に削り出しの痕跡が残るものである。6は、内面にへ

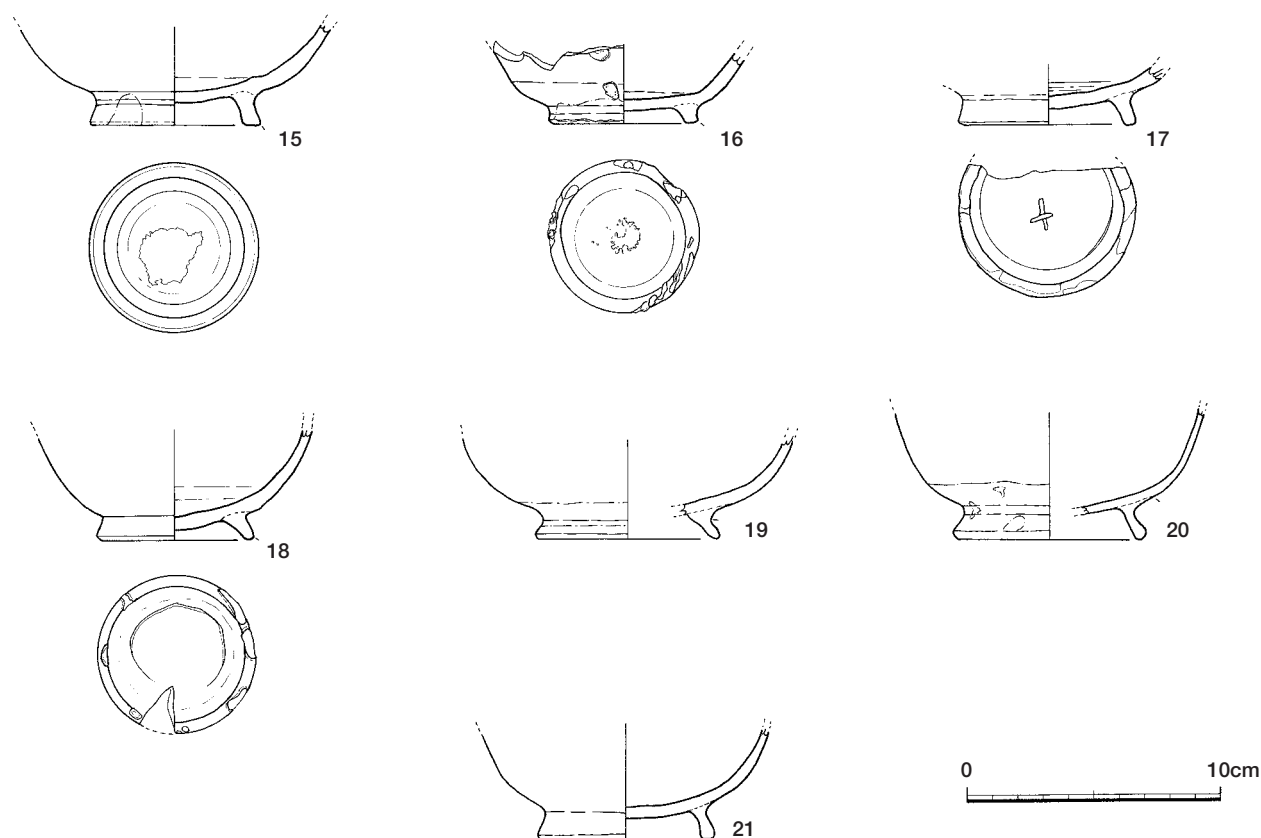
ラ状工具で調整した痕跡が残る。7は、内面にやや強い稜が入る。

10・11は腰部の張りが強く、体部がやや開きながら立ち上がり、口縁部で外反するタイプの資料である。10は、歪んだ高台の畳付に貝目残り、小片ではあるがハマの一部も熔着している。11は外面に「十」と思われる釘彫りが刻まれている。やや歪んだ畳付には、目跡残り、背面の放射脈が看取される。12は一部釉がかからず、内面口縁部下位に釉溜まりとなる箇所が見られる。

12～14は口縁部が外反しないタイプの資料である。12は施釉されているが、焼成不良のため釉薬の発色が悪く、素焼きのように見える。口唇部は平坦気味につくられ、外面下位には削り出しの痕跡が看取される。畳付には貝目残り。13は口唇部の釉が丁寧に拭き取られている。14は口唇部の釉を拭き取ったため、口縁部がやや外反気味になったものと思われる。内面口縁部下位に釉溜まりとなる箇所が見られる。

第7表 溝 遺物観察表2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
10	碗	溝・物原Ⅳ	14.6	8.0	8.5	黒褐色 灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	底部にハマ熔着
11	碗	溝	16.0	6.8	8.5	灰褐色	灰釉 灰緑褐色	口唇部以外全面施釉	外面に「十(?)」の釘彫り 畳付に貝目
12	碗	溝	12.0	6.0	6.4	灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	焼成不良 畳付に貝目
13	碗	溝	13.7	—	—	暗褐色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	
14	碗	7C・Dイ溝	14.0	—	—	暗褐色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	



第31図 溝内出土遺物(3)碗

15～21は碗の底部である。

15・16は、腰部の張りがやや弱いタイプの資料で、高台内面が露胎し、その中央に黄白色の目跡と思われる痕跡が残る。また、15は、底面と高台との接合部の調整が上手く処理されていないため、付け高台であることがよく観察できる。16は、畳付に貝殻背面の放射脈が貝目となって残り、外面腰部にも腹面の貝目が看取される。17は、胴部がほとんど欠損しているため腰部の張りの様子が不明である。高台内面に「十」と思われる釘彫りが刻まれているもので、畳付には貝目が残る。

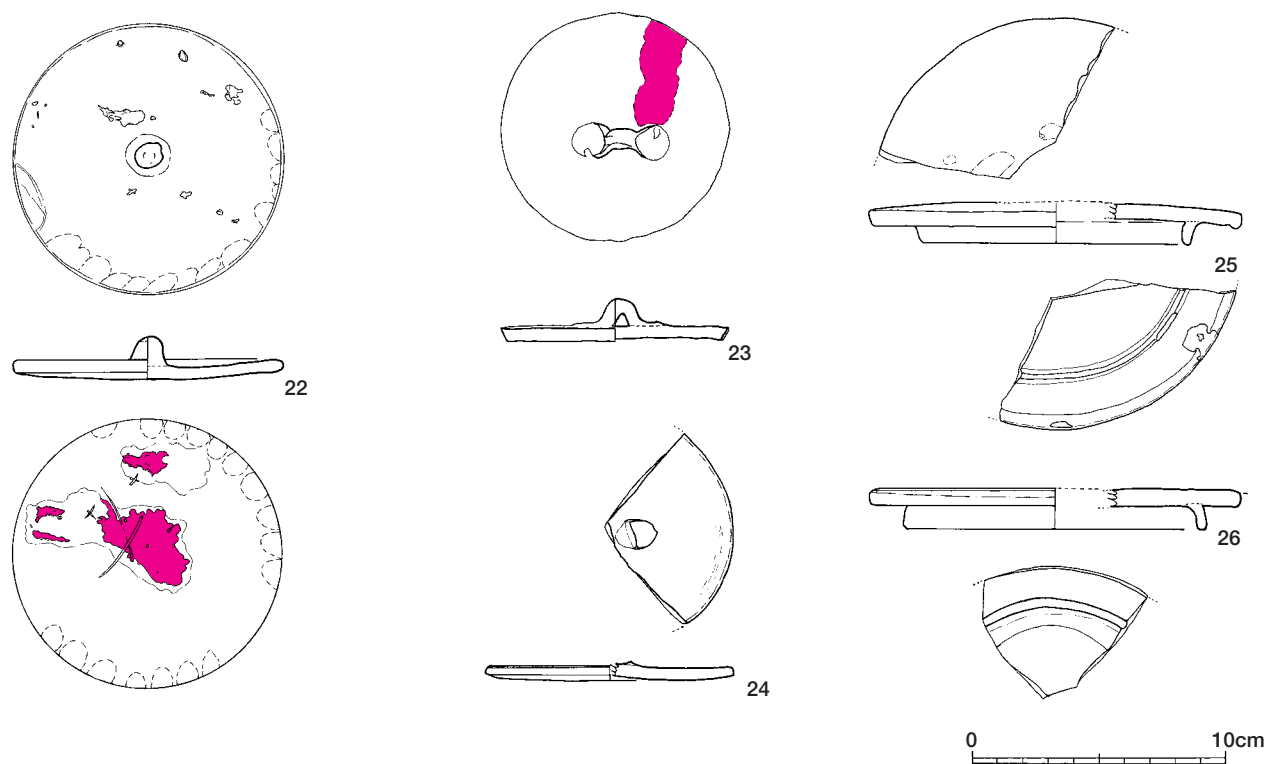
18は、腰部があまり張らないタイプのもので、底面と高台の接合部にヒビが看取される資料である。釉は、外

面腰部まで施釉されるものと思われるが、一部釉垂れのため高台脇までかかる。畳付には貝目がかすかに残る。

19～21は、腰部が張るタイプのものである。19・20は、どちらも外面腰部以下は露胎する。21は高台畳付も含め、残存部は総釉である。

第8表 溝 遺物観察表3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
15	碗	溝	—	6.6	—	灰褐色	灰釉 暗褐色	畳付と高台内面以外施釉	高台内面に目跡
16	碗	溝	—	5.9	—	灰褐色	鉄釉 暗褐色	畳付と高台内面以外施釉	畳付と外面に貝目 高台内面に目跡
17	碗	溝	—	7.0	—	灰褐色	鉄釉 暗褐色	残存部全面施釉	畳付に貝目あり高台内 面に「十」の釘彫り
18	碗	溝・物原V	—	6.2	—	灰褐色	鉄釉 緑黒色	畳付と高台内面以外施釉	底部に変形あり
19	碗	7C ア 溝	—	7.4	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	高台以外施釉	
20	碗	6C 溝	—	7.8	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	外面腰部以下露胎	
21	碗	7C ア 溝	—	7.0	—	淡褐色	灰釉 暗褐色	残存部全面施釉	



第32図 溝内出土遺物(4)蓋

蓋 (第32～34図)

蓋は、出土量も比較的多く、様々な形状のものが出土している。その大部分は、平坦な円板形の体部につまみを付けたもの、円板形の体部の下面に、輪状の粘土紐を貼り付け、身受け部をつくるものであるが、特殊な形状のものも見られる。それぞれ対応する器種があるものと思われるが、ここでは、甕・壺等に被せたとされる、浅鉢形の蓋以外のものを掲載した。

22～30のように、円板状の器形を呈する資料については、粘土を叩いて平坦に伸ばし、刃の鋭い工具で、円形に切り抜いて作られたものと思われ、蓋の端部がシャープな作りとなっている資料や上面にタタキ目が残る資料がみられる。

蓋の形状により、円板状のもの、円板状の体部に身受け部をつくるもの、その他のものの大きく3つに分けることができ、さらにそれぞれの中で細分化できる。

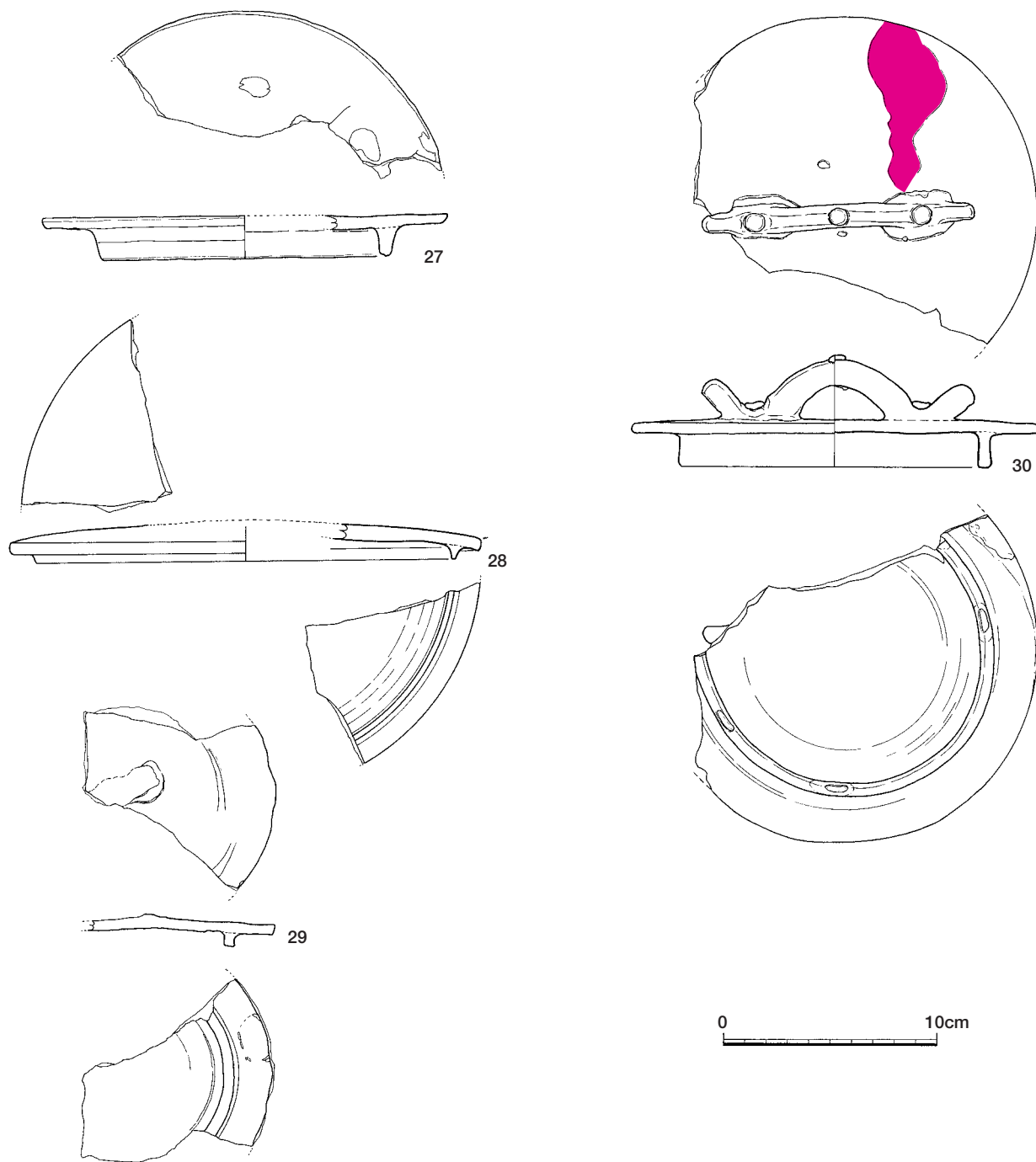
22～24は体部が円板状の形状を呈するもので、すべて

無釉である。水注等の蓋に使用されたのではないと思われる。つまみの形状によりさらに2つに分けることができる。22は上面中央に、円柱状のつまみが付けられたもので、この形状のつまみの出土量は、比較的少ない。下面部には黄白色の目跡と思われる痕跡が残る。端部を上下から指で挟んで調整を行ったためか、端部がやや丸みを帯び、指圧痕が残る。23・24はアーチ状のつまみが付くものである。23はつまみの中心がやや片寄っている。24は、下面の色調が黄白色を呈する部分が見られる。

25～30は下面に粘土紐を貼り付けて身受け高台をつくるタイプの資料である。25は胎土が灰色を呈し、上面に黄白色の灰がかぶる。26は、底部に貝目が残る。

第9表 溝 遺物観察表 4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
22	蓋	7C溝	—	10.6	1.7	褐色	無釉	—	両面に指跡、下面に目跡
23	蓋	6C溝	—	8.5	1.7	褐色	無釉	—	上面に指痕と目跡
24	蓋	溝	—	9.8	—	暗赤褐色	無釉	—	
25	蓋	溝断面7CDイ	10.6	14.6	1.6	にぶい褐色	無釉	—	身受け部に貝目
26	蓋	溝	11.9	14.6	1.6	暗灰色	灰釉 黄灰色	上面のみ施釉	



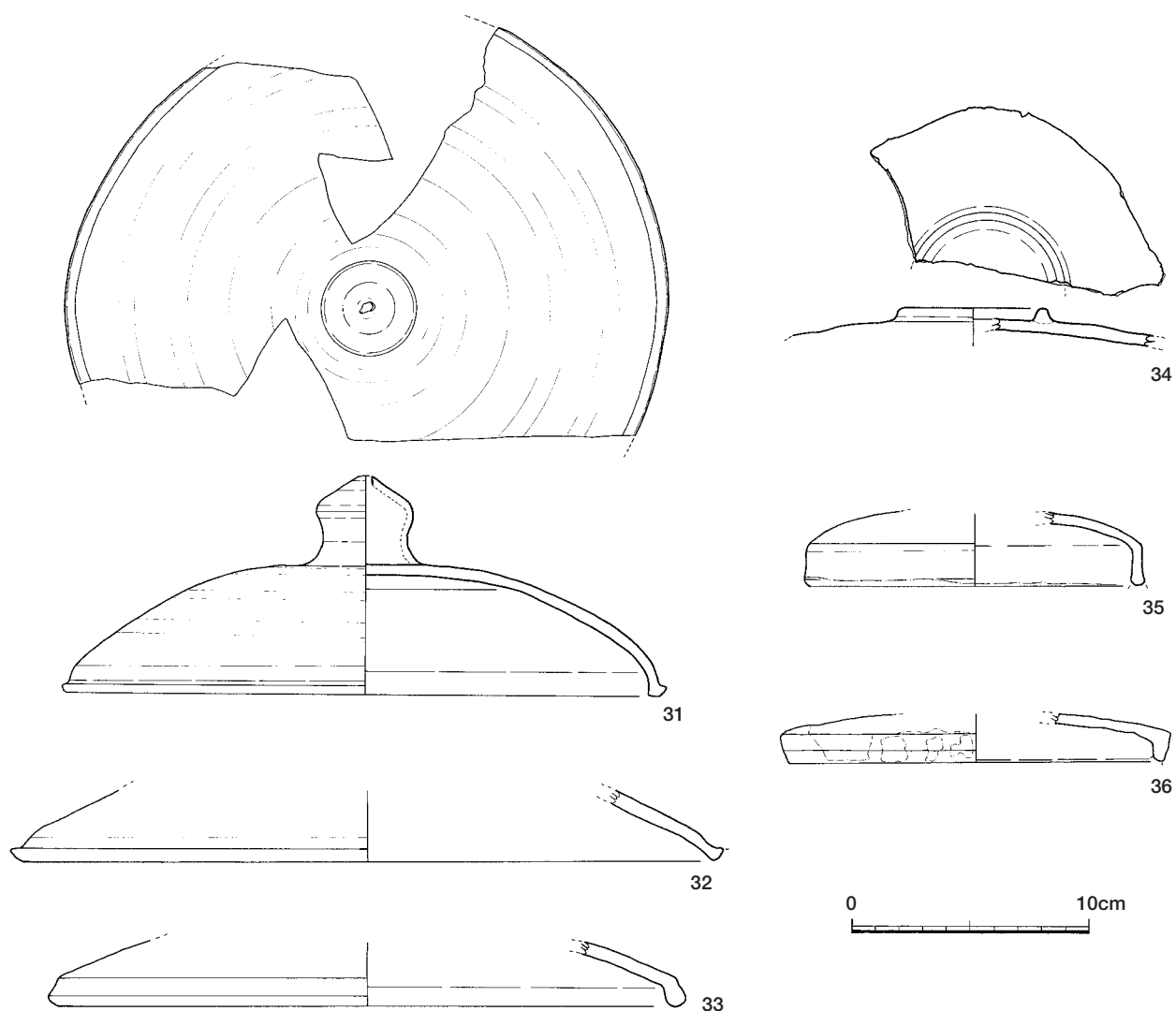
第33図 溝内出土遺物(5)蓋

27～30は、25・26に比べて大形のものである。27は底部にタタキ目が残る。28は上面にのみ黄緑色の灰釉がかかる。29は上面にアーチ状のつまみの痕跡が看取され

る。30は、金属器を模倣したものと考えられ、つまみを体部に固定する釘状のものまで表現されている。

第10表 溝 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
27	蓋	溝 7 C表	13.4	18.9	2.0	にぶい赤褐色	無釉	—	上部に貝目
28	蓋	溝	19.6	22.0	1.7	灰色	灰釉 黄灰色	上面のみ施釉	
29	蓋	溝	10.4	13.2	—	灰褐色	無釉	—	身受け部に貝目
30	蓋	7C溝の上	13.8	19.0	5.2	赤褐色	灰釉 緑黒色	上面のみ施釉	身受け部に貝目



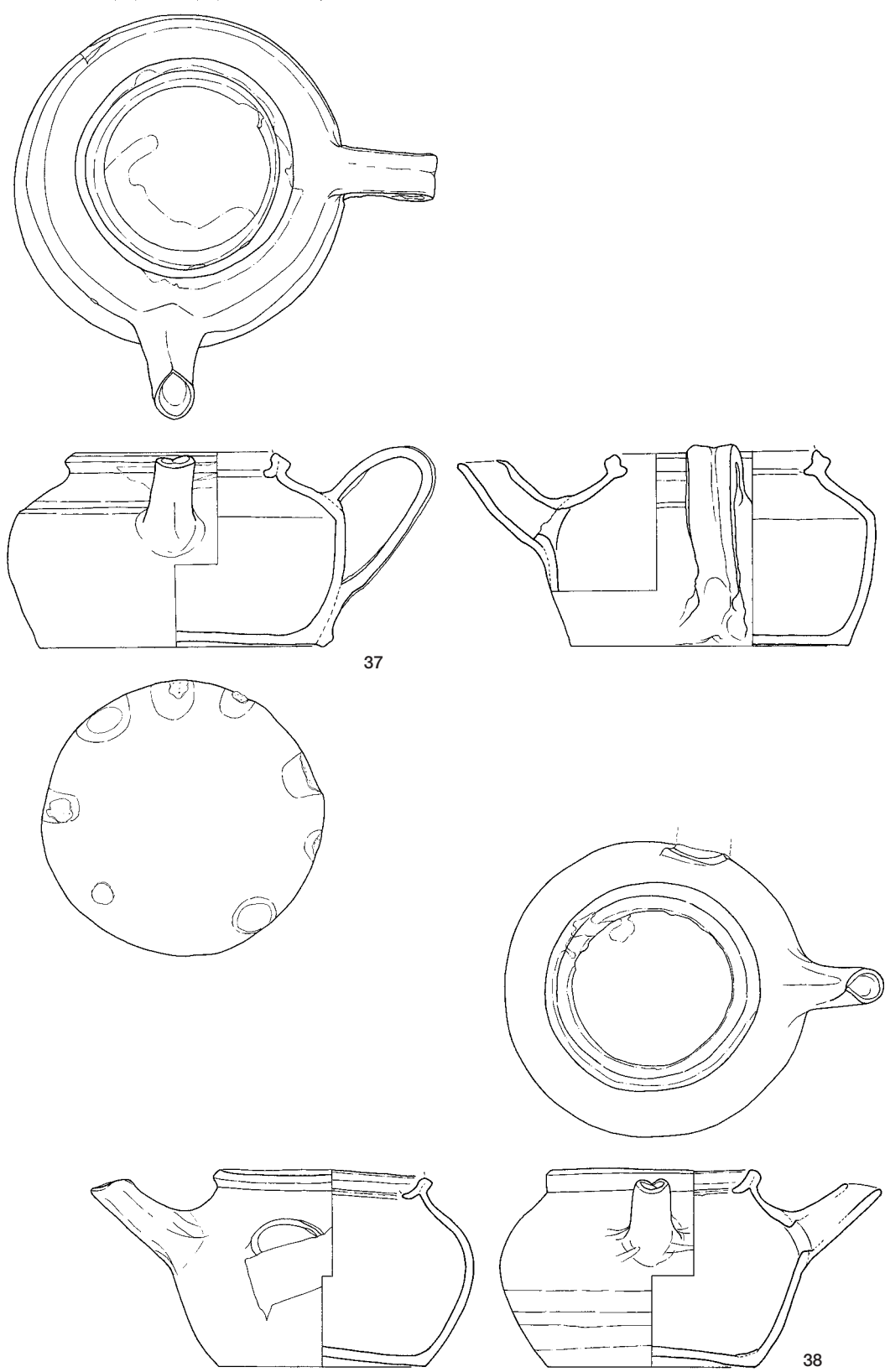
第34図 溝内出土遺物(6)蓋

31～36は、その他の特殊な形状をした蓋である。31は、宝珠状のつまみを有する。中は中空で、つまみ頂部に穿孔が看取される。焼き締めであり、上面には削り調整の痕跡が残る。口唇部には、腹面の貝目が見られる。32は、口縁部先端を僅かに外反させたものである。上面に黄緑色の灰釉がかかる。33は、口縁部先端を下方に屈曲させ、端部を丸くおさめる。焼き締めで、内面に黄白色の目跡が残る。34は、口縁部が欠損しているが、蓋と

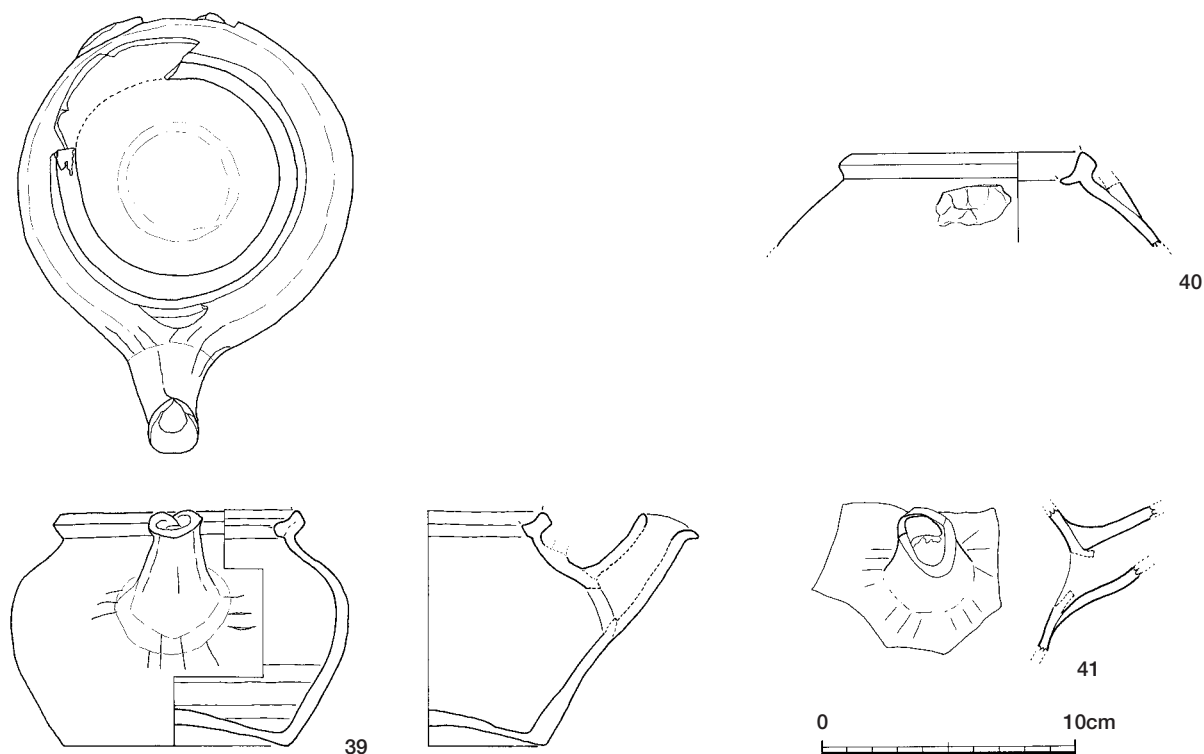
して掲載した。粘土紐を円形に貼り付けたつまみが付く。35・36は、肩部が屈曲する形状の資料である。残存部内外面には、黄褐色の灰釉がかかり、口唇部のみ釉が拭い取られる。

第11表 溝 遺物観察表 6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
31	蓋	溝	25.3	—	9.3	暗赤褐色	無釉		つまみ中央に穿孔口唇部に貝目
32	蓋	溝	30.0	—	—	赤褐色	灰釉 黄灰色	上面のみ施釉	口唇部に貝目
33	蓋	溝	26.8	—	—	赤褐色	無釉	—	内面に目跡
34	蓋	溝	—	—	—	褐色	灰釉 黄灰色	残存部全面に施釉	
35	蓋	溝	14.4	—	—	赤褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外施釉	
36	蓋	溝断面7CD イ	15.8	—	—	灰色	灰釉 黄灰色	口唇部以外施釉	



第35図 溝内出土遺物(7)水注



第36図 溝内出土遺物(8)水注

水注（第35・36図）

出土量は多くない。形状から、液体を注ぐ用途が考えられるため水注としたが、土瓶のように底面が露胎していないことから直火にかけるものではないと思われる。詳細な用途は不明である。

注口は巻口で、注口に向かって右側の端が上になるように巻かれている。注口と体部の接合は、体部に切り込みを入れ注口内部に折り曲げてなでつけており、接合部には段が確認できる。口唇部は蓋が被るものと思われ、蓋受け部は露胎する。

胎土は灰褐色系の色調を呈し、緻密であるが、黄白色のバミス粒をわずかに含む。

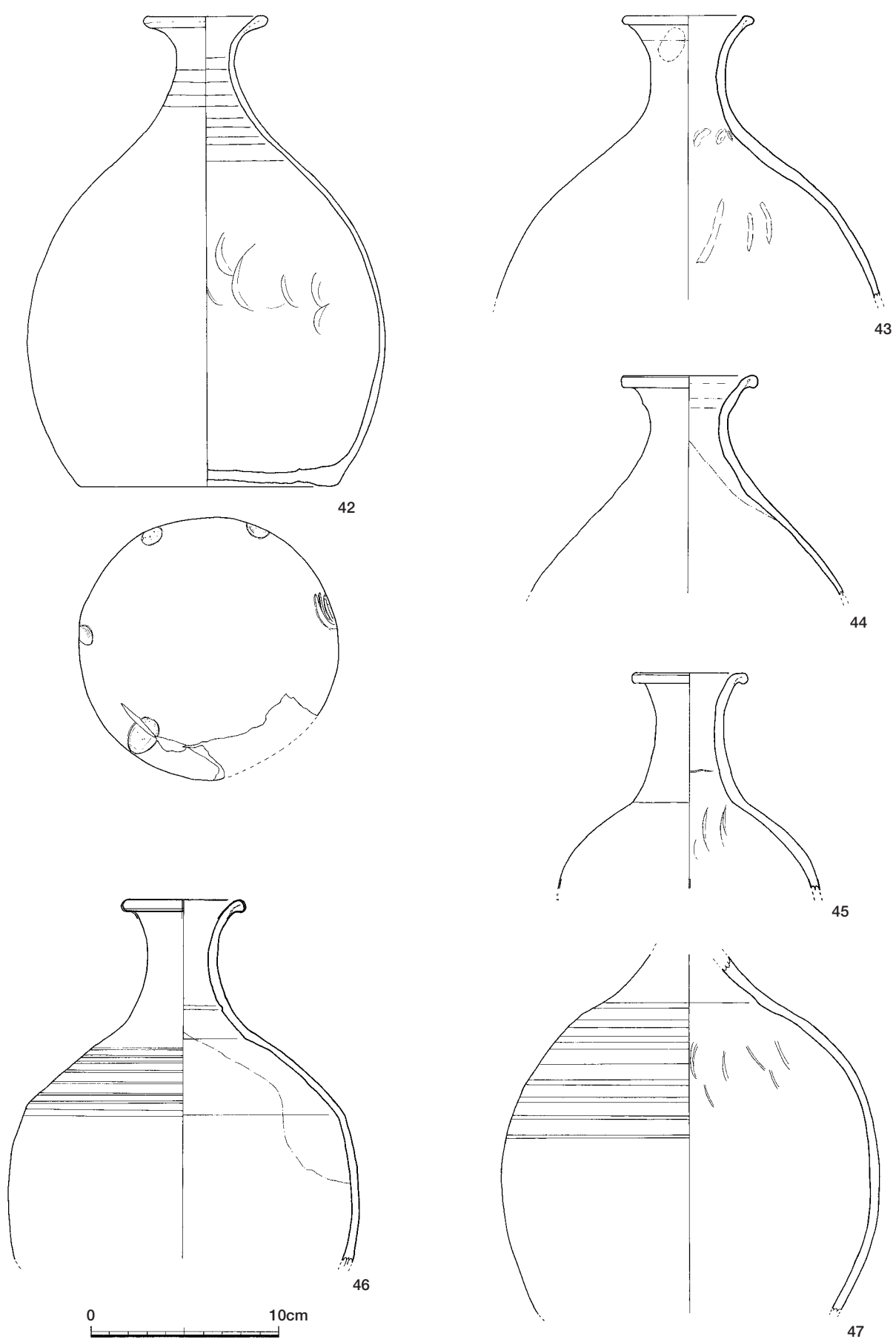
釉薬は灰釉が施され、緑褐色を呈する。施釉は外面と外底面に施され、内面は基本的に無釉であるが、一部に施釉時の釉だれが見られる。39のみ内面も施釉されている。把手が付けられる位置とその形状から、3つに分け

ることができる。

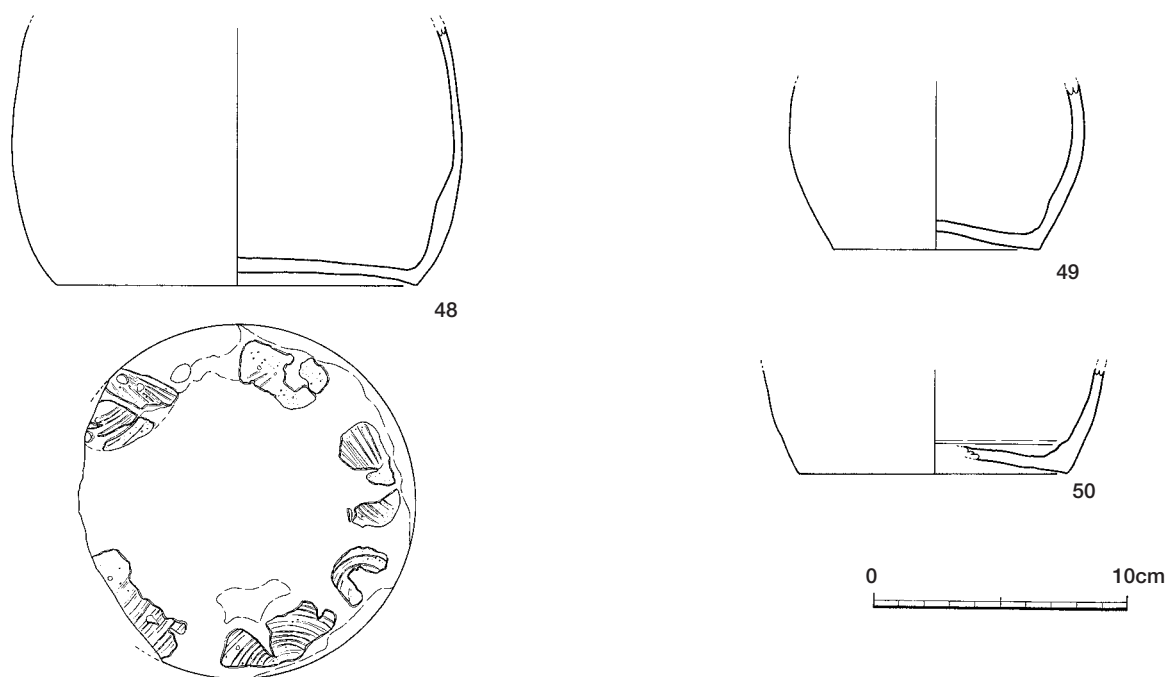
37は、把手が注口に対し90度右側に付く形状の資料である。把手と体部の接合部には、把手をなでつけた痕跡が看取される。また、外底面には貝目が残る。38は把手が欠損しているが、円筒形の把手が側面に付く形状の資料である。注口に対して約75度右の外肩部に、把手を接合していた痕跡が残る。39は、把手が欠損しているが、注口上部とその反対側をつなぐようにアーチ状に陶製の把手が付く形状の資料である。40は、39と同じ形状のものである。41は注口部のみで、先端は欠損している。

第12表 溝 遺物観察表 7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
37	水注	7 C 溝	9.0	13.0	9.3	灰褐色	灰釉 緑褐色	蓋受け部と内面は露胎	外底面に貝目
38	水注	7 C 溝	10.0	9.8	9.3	鈍い褐色	灰釉 緑褐色	蓋受け部と内面は露胎	
39	水注	6 C 溝	9.3	9.0	9.3	鈍い褐色	灰釉 にぶい黄色	蓋受け部のみ露胎	
40	水注	6 C 溝	10.2	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	蓋受け部のみ露胎	内面に同心円状のタタキ目
41	水注	7 C 溝	—	—	—	黒褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目



第37図 溝内出土遺物(9)徳利



第38図 溝内出土遺物(10)德利

德利（第37・38図）

頸部は細くくびれ、口縁部にかけてラッパ状に開き、端部は外側に折り返して断面三角形につくる。また、胴部下半部に最大径を有し、底径との差が小さく、「船德利」の形状を呈する。製作方法は、粘土紐を輪積みにし、叩き成形しており、内面には同心円状のタタキ目が残る。

肩部の沈線の有無により、2つに分けることができる。底部のみの資料は後に掲載した。

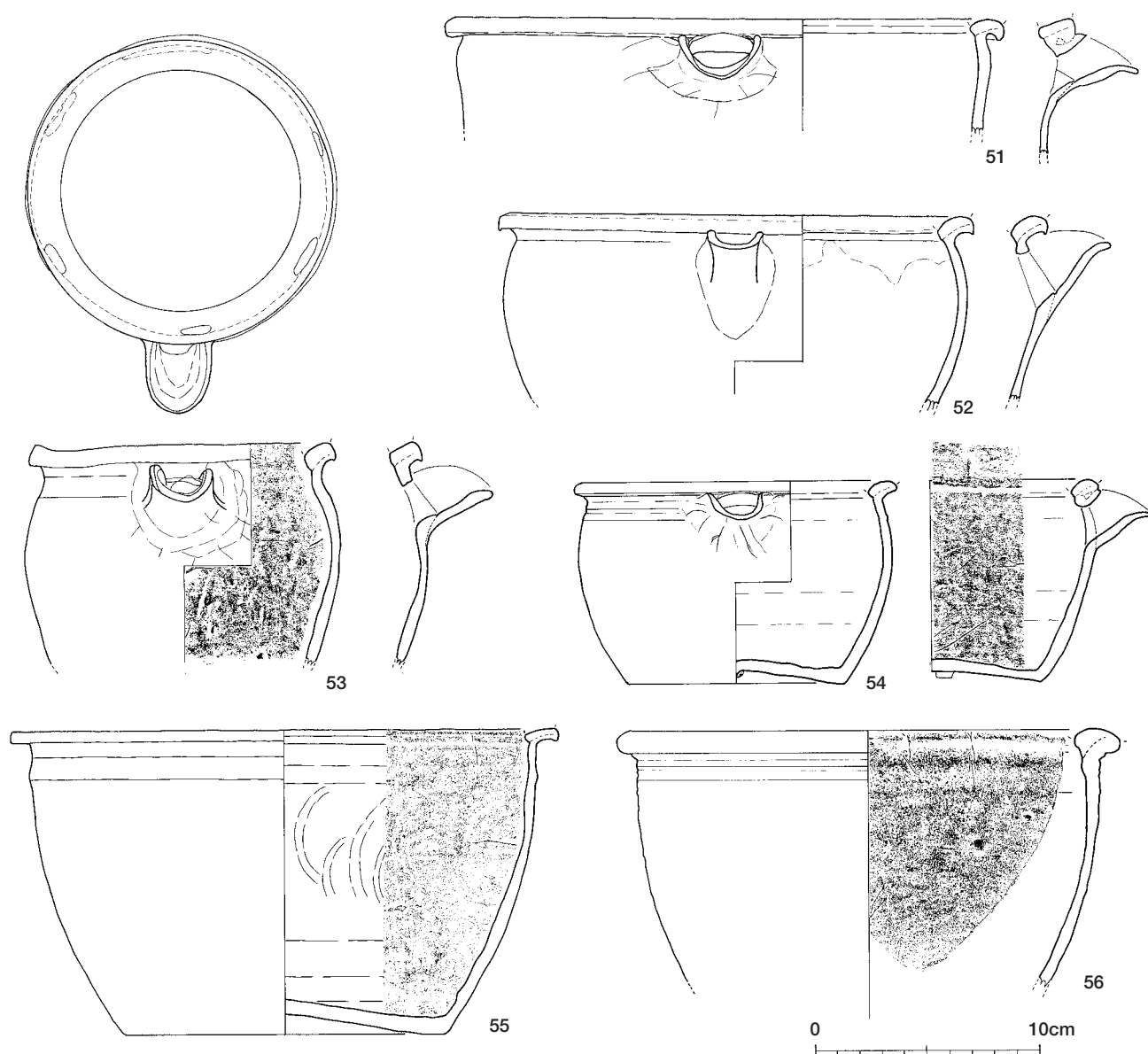
42～45は外面肩部に沈線がない資料である。42は頸部の内外面にヘラ状工具によると思われる調整痕が見られる。また、内面には同心円状のタタキ目が、外底面には貝目が看取される。43は焼成不良のため、釉薬の発色が悪く、口唇部の釉薬は一部に釉剥ぎが見られるが、残存

部は内面も施釉される。また内面肩部には、同心円状のタタキ目が強く残る。44は、基本的に内面が露胎する資料と思われるが、一部に釉だれが見られる。45はやや器壁が厚く、法量的にも小さめの資料である。外面頸部には胴部と接合した痕が残る、口唇部には貝の背面と思われる目が残る。

46・47は、外面肩部に8条の沈線を有するものである。46は、最大径を呈す胴部下半部と肩部の径の差が小さいもので、胴部から施釉し、次に肩部から上位を施釉したものと思われ、釉のかかり具合に差が見られる。47は、胴部のみの資料である。46に比べ肩部がなで肩を呈する48～50は底部である。48の外底面には貝目が看取される。49・50は法量的に小瓶に分類される資料である。49は内底面にタタキ目の痕跡が残る。

第13表 溝 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
42	德利	溝	6.6	13.7	25.0	灰褐色	灰釉 緑黄色	全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状のタタキ目
43	德利	7C・D 溝	7.0	—	—	灰褐色	灰釉 浅黄色	外面全体 内面頸部まで施釉	内面に同心円状のタタキ目
44	德利	7C 溝	7.2	—	—	鈍い赤褐色	鉄釉 褐色	外面のみ施釉	内面に同心円状のタタキ目
45	德利	7C 溝	6.2	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	外面全体 内面頸部まで施釉	内面に同心円状のタタキ目
46	德利	7C 溝	6.6	—	—	灰褐色	灰釉 緑黄色	外面全体 内面頸部まで施釉	外面肩部に数条の沈線 内面に同心円状の叩き目
47	德利	溝	—	—	16.0	灰色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	外面肩部に数条の沈線 内面に同心円状のタタキ目
48	德利	6C 溝	—	14.0	—	灰褐色	鉄釉 褐色	外面のみ施釉	外底面に貝目 内面に同心円状のタタキ目
49	德利	溝	—	8.0	—	鈍い褐色	鉄釉 緑黒色	外面のみ施釉	内面に同心円状のタタキ目 外底面に目跡
50	德利	溝	—	10.5	—	褐灰色	灰釉 褐色	残存部全面総釉	内面に同心円状のタタキ目



第39図 溝内出土遺物(11)片口

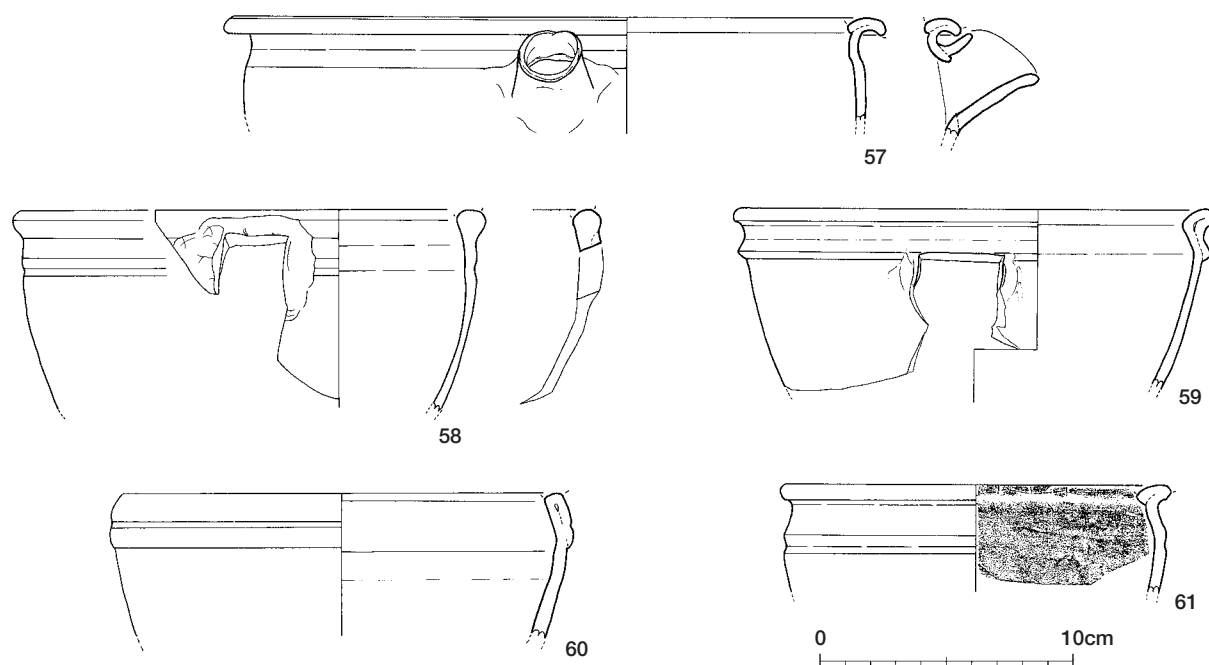
片口（第39・40図）

片口の出土量はそれほど多くない。法量は口径が20cm前後の大形のものと15cm前後の小形のものが見られる。

製作方法は、円板状の底面の上に粘土紐を輪積みにし、タタキ成形でつくられており、内面には同心円状のあて具痕が残る。口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に

第14表 溝 遺物観察表 9

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
51	片口	7C 溝断面ア	24.8	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	
52	片口	7C・D 溝	21.2	—	—	黒褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に合わせ口の痕跡
53	片口	7C 溝	13.9	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
54	片口	7C・D 溝	14.5	9.6	9.0	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に窯道具小片付着 口唇部に合わせ口の痕跡
55	片口	6C 溝	24.4	14.0	13.3	鈍い黄褐色	無釉	—	焼成不良 外底面に目跡痕 内面に同心円状タタキ目
56	片口	6C溝・7C溝	22.4	—	—	暗赤灰色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に合わせ口痕跡 内面に同心円状タタキ目



第40図 溝内出土遺物(12)片口

折り返しておさめるため、「T」字状を呈する。

釉薬は、褐色系の鉄釉や緑褐色系の灰釉がかけられ、口唇部のみ釉が拭い取られている。口唇部や外底面に貝目痕が残る資料もあり、窯詰め方法は合わせ口であったと思われる。

片口部の形状から大きく2つに分けることができ、さらに大きさにより大小に分けることができる。

51～54は、一般的な片口部を有する資料である。

口縁部直下に半円形の粘土板を貼り付けて片口をつくり、内面から横方向の切り込みを入れ、切り口の下半分は、外側に折り曲げて片口部と接合させ、上部分は外側上方に折り曲げ、口縁部に付けるが、切り口は調整しない。口縁部の形状からさらに細分化ができる。

51～53は外反した口縁部先端が、下方に垂れ下がるタイプの資料である。中でも52・53は垂れ下がった先端がシャープに仕上がりが、器形は口縁部直下にくびれを有するため、球状を呈する。53は、小形のもので、口唇部には貝目が残る。

54は、外反した口縁部先端が垂れ下がらないタイプの資料で、小形のものである。内外面にヘラ状の工具を使

用したと思われる調整痕が横方向に看取されるが、内面は上位に同心円状のタタキ目が残る。また器形は口縁部直下にくびれを有し、球状を呈する。

55・56は、片口部が欠損している資料であるが、前述の片口と同様の片口部が付くものと思われる。外反した口縁部先端は、シャープに仕上げられている。55は、内外面ともにタタキ成形の痕跡が残る、内面には大きめの同心円状のタタキ目残り、外面下位には、板状あて具の端部の痕跡が残る。54は、口縁部が比較的厚い。

57～59は片口部の形状が前述のような一般的な形状でない資料である。3点とも大形の片口に分類したが、他の器種の可能性も考えられる。57は、巻口の形状を呈する片口部が付けられたものである。58・59は片口を付ける位置を肥厚させ、方形に切り抜いたものである。58の口縁部は、端部を外側に折り返して密着させ、丸みを帯びた形状につくる。59の口縁部は、外側に折り返して肥厚させ、外面口縁部下位に1条の突帯を巡らす。

60・61は、口縁部のみの資料である。片口としたが他の器種の可能性も考えられる。

第15表 溝 遺物観察表10

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
57	片口	6C 溝	26.0	—	—	黒褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	片口部が巻口を呈する
58	片口	6C 溝	18.4	—	—	暗褐色	無釉	—	
59	片口	4C・7CD 溝イ	19.0	—	—	灰褐色	無釉	—	
60	片口	7C 溝	17.4	—	—	褐灰色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	
61	片口	溝	15.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目

播鉢（第41～45図）

溝全体のなかでは、出土量は多くない。

胎土は全般的に灰褐色系の色調で、微細な白色砂粒を含んではいるが緻密で焼き締まっている。

釉薬は68を除き、淡黄褐色の灰釉が薄くかかり、68は黒褐色の鉄釉がかかる。施釉は、一部器肌が露胎している箇所も見られるが、基本的には口唇部を除き全面にかけられ、口唇部の釉は拭い取られる。

外底面には貝目や黄褐色のハマの痕跡と思われる目跡が看取される。なお、口唇部には貝目等の目跡は見られない。

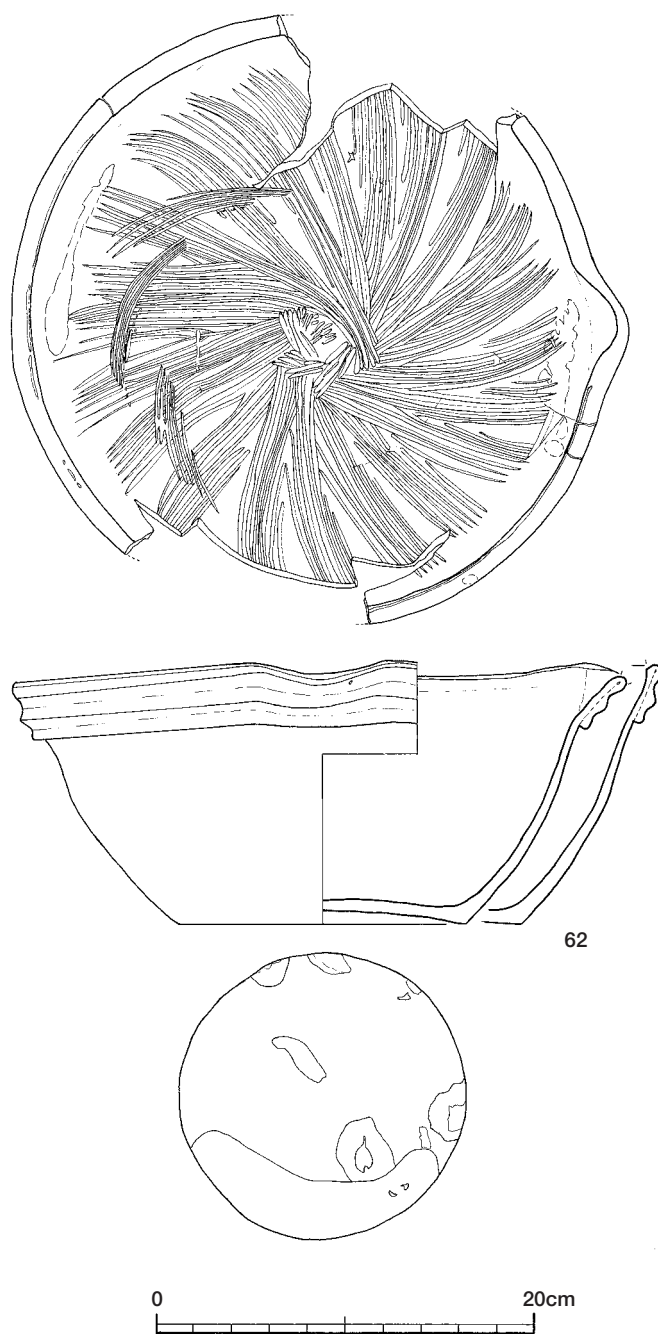
基本的な器形としては、体部は「逆ハ」の字に開き、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2～3条の突帯を作る。成形は轆轤の上で粘土紐を輪積みにしてタタキ成形を行っており、内面には同心円、外面には板状のあて具痕が残る資料も見られる。また、外面体部中位から下位にかけては削り調整も施されている。

口縁部の形状から大きく2つに分けることができ、播り目の形状から、さらに細分化できる。その他、若干ではあるが、2つのタイプに属さないその他の形状も見られたため、最後に掲載した。

62～64は、口縁部が斜め上方にまっすぐのびる形状のもので、口唇部は狭くやや丸みを帯びる。

62は、播り目が中心からやや斜め上方向に入り、その上から横方向の播り目が片口部対面側に3か所施される。内面には、上向きに重ね焼きする際に棒状の窯道具を製品と製品の間に挟んだと思われる目はあるが例外的な資料も見られる。

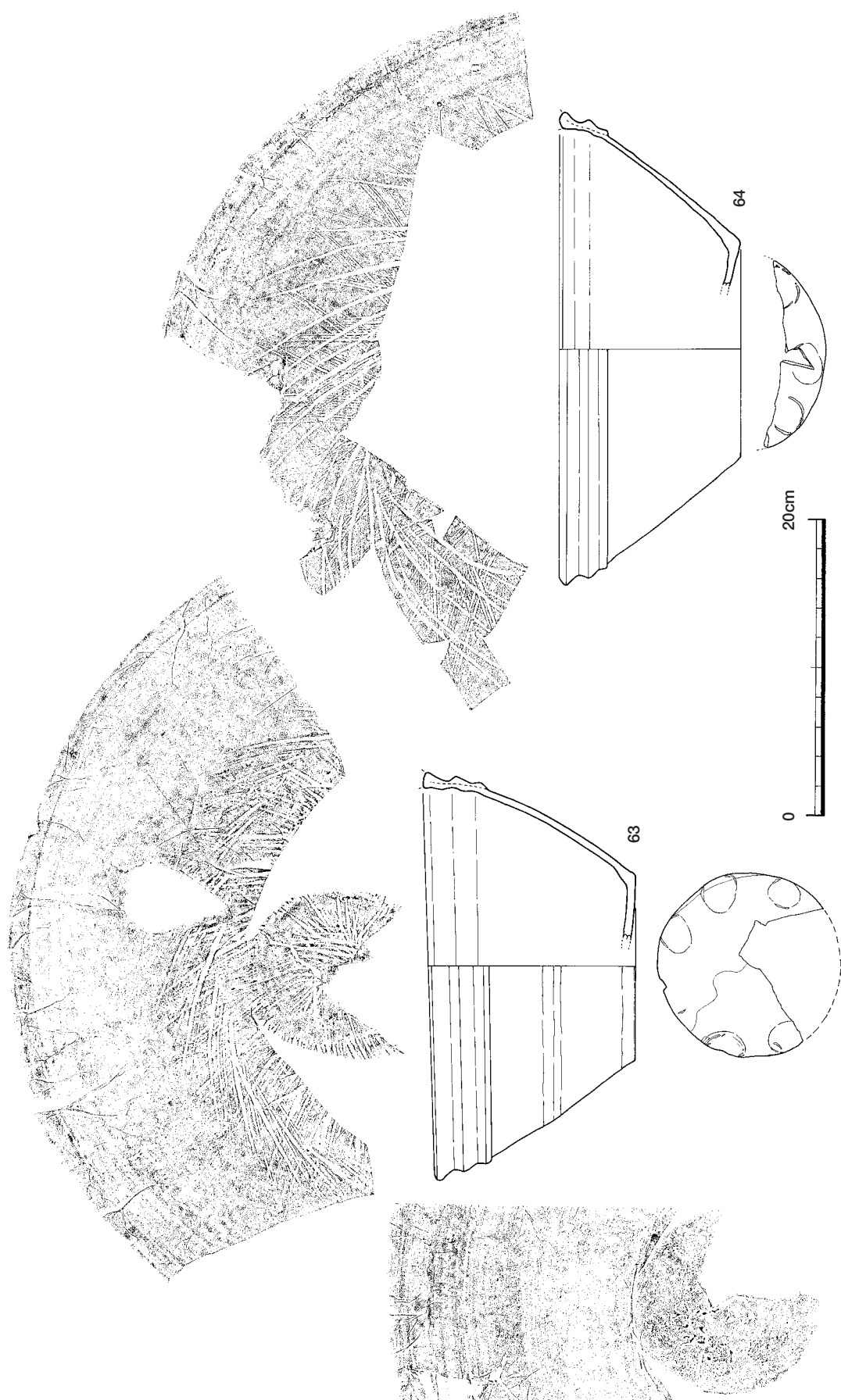
63は、播り目を内底面中心から口縁部付近まで一度に掻き上げるのではなく、内底面と内面を分けて施し、その上からやや太めの播り目を横方向にも施す。播り目の範囲は内面中位までと短い。外面胴部には、ヘラ状工具による削り調整の痕跡が筋状に残る。また、外底面には貝目やハマの痕跡が残る。64は、細い播り目が左斜め方向と右斜め方向に交差するように施され、さらにその上から、太い播り目が横方向に施されるものである。外底面には貝目が残る。



第41図 溝内出土遺物(13)播鉢

第16表 溝 遺物観察表11

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
62	播鉢	7C ア 溝	32.6	15.1	14.0	灰褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	内面上位に目跡2か所残る 外底面に貝目
63	播鉢	5C 溝 7CD	27.4	13.0	14.1	灰褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
64	播鉢	5C 溝 物1-VI	32.0	14.6	12.3	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目



第42図 溝内出土遺物(14)搦鉢

65～68は、口縁部がやや内湾し、端部でわずかに外反する形状のもので、口縁部から胴部へのラインが「S」字状を呈する。

口唇部は平坦面を持たず、緩やかに外反するため、口縁内側に稜は見られない。また、口唇部には貝目は見られない。

「S」字状を呈する口縁部から胴部にかけてのラインの屈曲度合いにより、さらに細分化することができる。

65は、「S」字状の屈曲が強いものである。

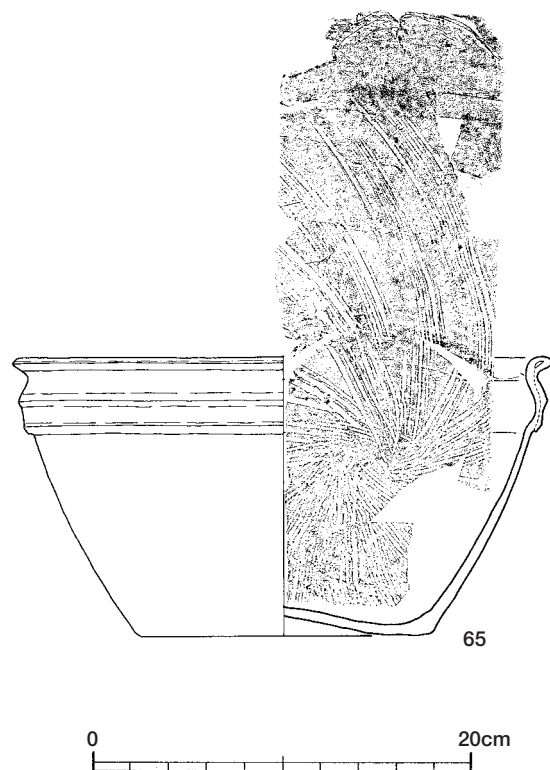
65は 鈍い褐色を呈する緻密な胎土で、釉薬は、灰釉が黄褐色に発色する。口唇部を除き、全面施釉される。口唇部の釉は、拭い取られる。播り目を内底面中心から口縁部に向けて、一気に続けて掻き上げるのではなく、まずは内底部分のみ播り目をいれ、次に、側面部分には左方向に流れる斜位の播り目を入れている。

66～68は、「S」字状の屈曲がなだらかなものである。播り目は粗く、内底面中心から口縁部に向けて放射状に伸び、さらにその播り目の間を埋めるように内面下位から口縁部に向けて播り目が施される。

66は、黒褐色の色調を呈する緻密な胎土に、黄褐色に発色した灰釉が薄くかかる。釉は、口唇部を除き全面に施釉される。口唇部の釉は、拭い取られる。また、内外面ともに、タタキ成形時のあて具痕が残る。外面は胴部に斜めの方向のタタキ目残り、内面は同心円状のタタキ目が播り目のない口縁部上位で看取される。外底面には、貝の腹面を使用した貝目が残る。一般的に外底面に残る貝目は、縁にのみ残るものが多いように思われるが、この資料は、中心部にも3か所看取される。

67は、鈍い褐色を呈する胎土に、淡い黄褐色の灰釉が、口唇部を除き全面に施釉される。口唇部の釉は、拭い取られる。外面の突帯下位には、タタキ成形時のあて具痕が残る。口唇部、外底面のどちらにも、貝目は見られない。

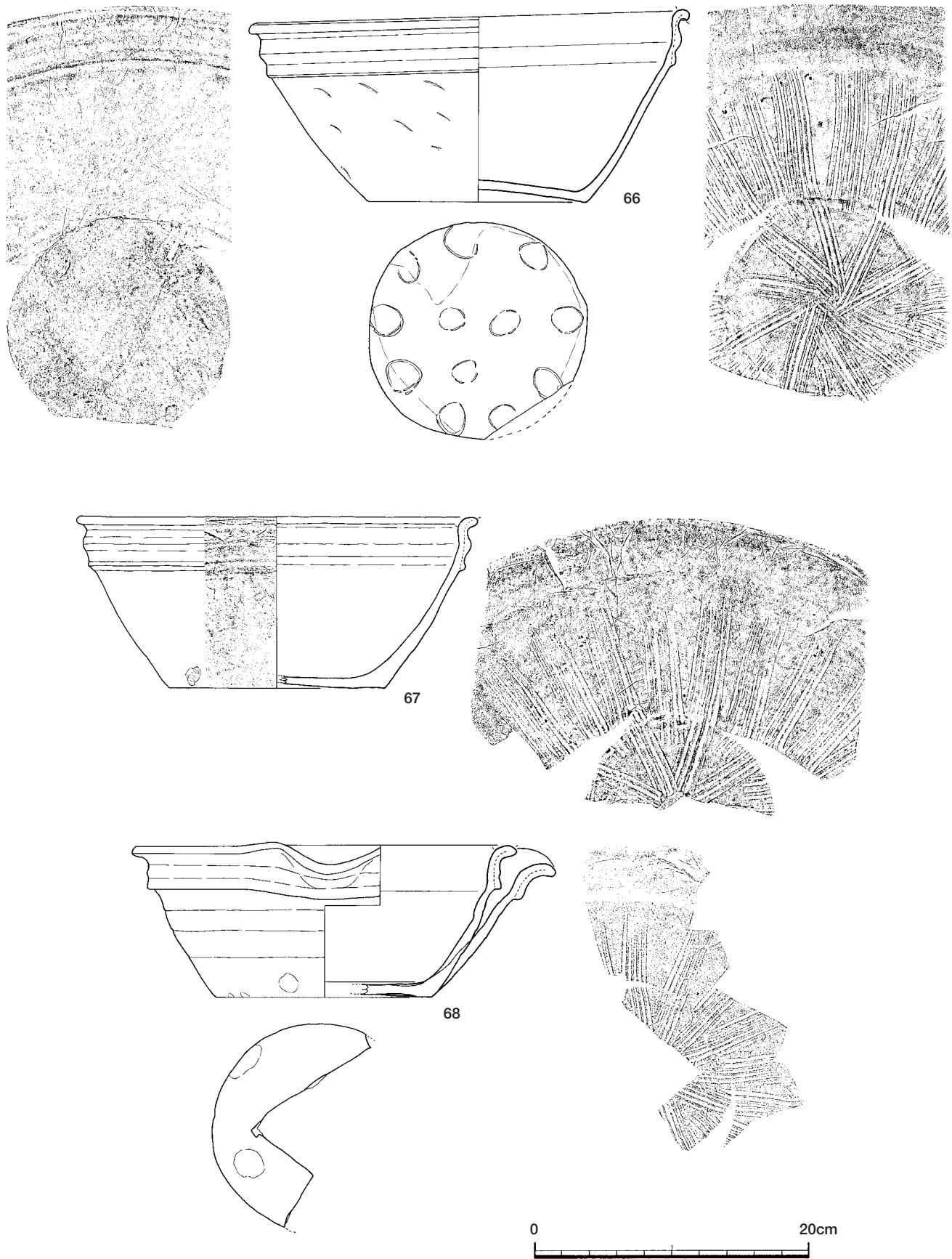
68は、やや小形の資料である。黒褐色の色調を呈する緻密な胎土に、黒褐色に発色した鉄釉が、口唇部を除き全面にかかる。外底面と腰部には、貝目が看取されるが、口唇部には見られない。粘土紐を輪積みにして成形した痕跡が、外面に段となって明瞭に残る。



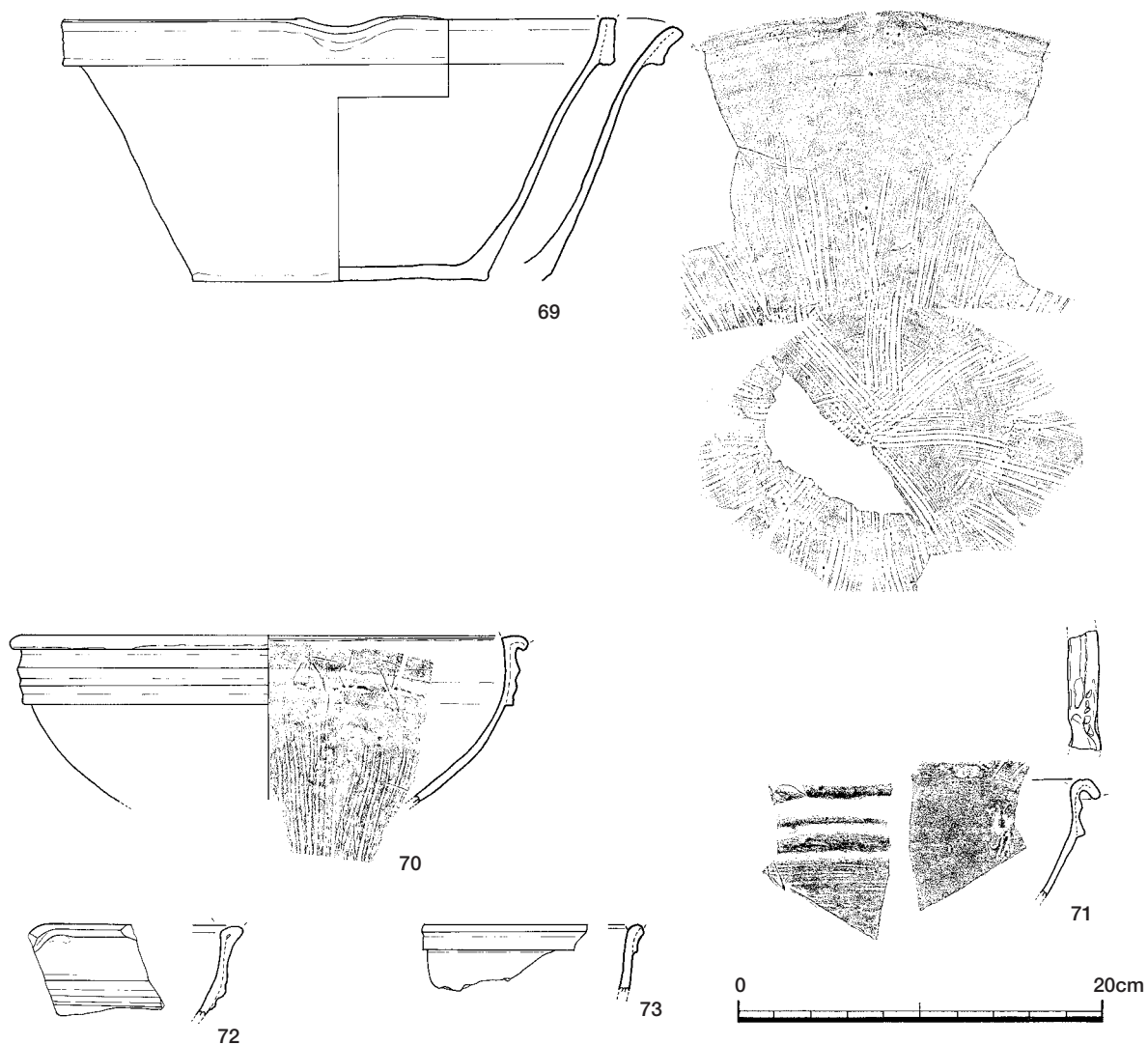
第43図 溝内出土遺物(15)播鉢

第17表 溝 遺物観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
65	播鉢	溝	28.6	15.6	14.7	鈍い褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
66	播鉢	溝	32.1	15.8	13.4	黒褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目 外面にタタキ目
67	播鉢	4C溝	27.6	15.4	15.5	鈍い褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	外面にタタキ目 外面下部に貝目
68	播鉢	7C・D溝	20.6	11.6	8.0	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目 外面下部に貝目



第44図 溝内出土遺物(16)擂鉢



第45図 溝内出土遺物(17)擂鉢

69～73は、前述の口縁形状に属さない資料で、出土点数も溝内では1点のみのものである。

69は口縁部を外側に折り返して肥厚させるが、複数の突帯を作らないものである。70は、やや焼け歪んでいるものと思われる。口縁部は外側に折り返して肥厚させ、3条の突起を作る。また、先端はわずかに外反し、口唇部はやや丸みを帯びるものの平坦で、内側に稜をつくる。口唇部には、貝目は見られない。71は、口縁部が外反し、先端は下方に垂れ下がるような形状を呈する。小片のため詳細は不明であるが、口唇部に、貝の背面を使

用した放射脈の貝目が残る。また、外面には平行のタタキ目、内面には同心円状のタタキ目が残る。72・73は、擂り目が、口縁部上位まで入らず、余白を残すもので、僅かに擂り目の先端が観察できたため、擂鉢と判断できた資料である。72は、口縁部から2条の突帯部分までの距離が比較的長いものである。73は、69と同様、口縁部を外側に折り返し肥厚させるが、突帯をつくらないものである。69に比べ小形のものである。

第18表 溝 遺物観察表13

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
69	擂鉢	6 C溝・物原V	30.2	16.0	13.3	鈍い褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
70	擂鉢	7C・D溝	28.4	—	—	赤褐色	灰釉 淡黄褐色	口唇部以外全面施釉	
71	擂鉢	7C溝表	—	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
72	擂鉢	7C溝表	—	—	—	灰褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	
73	擂鉢	7C溝	19.0	—	—	灰褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	

蓋（第46～48図）

溝内出土遺物の中で、甕・壺について出土量は多い。器形は浅鉢形で、口縁部を外反させ、さらに内側に折り返して肥厚させて、内側を丸くおさめる。胎土は、緻密であるが、1mm弱程度の黄白色パミス粒や白い砂粒が混じるものもある。施釉は、口唇部を除き、全面に施釉される。釉が拭い取られた口唇部には、貝目が残る資料が多い。この器形の蓋は、今まで、浅鉢として報告されていた例が多いが、基本的には甕・壺に被せて使用する蓋であろうと思われる。したがって、器種としては同じであるが、前述の水注等に使用する蓋とは区別して取り扱い掲載した。

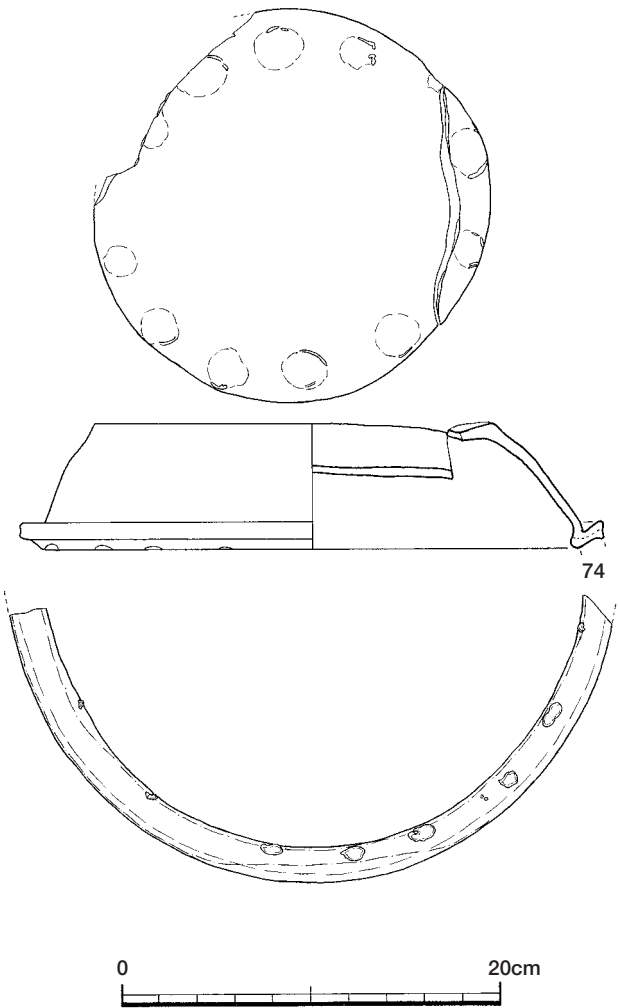
口縁部の形状から、4つに分けることができる。

74・75は、口唇部を平坦につくらず、内側を高くし、外側を溝縁状にした資料である。

74は、口縁部のつくりがシャープである。焼き歪みのためか、外側に強く折れ曲がる。口唇部の釉は拭い取られ、小さめの貝目が内側に残る。この貝目は、小形の貝の腹面に粘土を詰めて使用したものの痕跡と考えられ、通常、腹面を使用した貝目は楕円形の輪状の痕跡が残るが、腹面に粘土を詰めたものは、胎土目状の貝目が残る。本稿ではこの貝目を「胎土詰貝目」と呼称し報告する。外底面には、貝の腹面を使用した貝目が残る。75は、74と比較すると、全体的に大型のもので、口唇部の巾も広いが、口縁部のつくりはシャープである。また、口縁部断面には、三角形の隙間が看取され、これは口縁部を折り返して肥厚させたことを表す。残存部は、口唇部のみ釉を拭い取り、貝目は見られない。

76～78は、口唇部をほぼ平坦につくり、溝縁状にしないものである。外反させた口縁端部は、シャープにつくられる。76は、口唇部に胎土詰貝目が残る。体部内面にはヘラ状工具による横方向の調整が施される。77は、口縁部断面に、口縁部を折り返してつくった際の、三角形の隙間が看取される。また、口唇部には胎土詰貝目が、外底面には放射脈の貝目が残る。78は、焼成不良のためか、胎土が赤褐色を呈し、釉薬の発色も悪い。口唇部には、胎土詰貝目が残る。

79～83は、口縁端部を外反させ、内側に折り返して丸

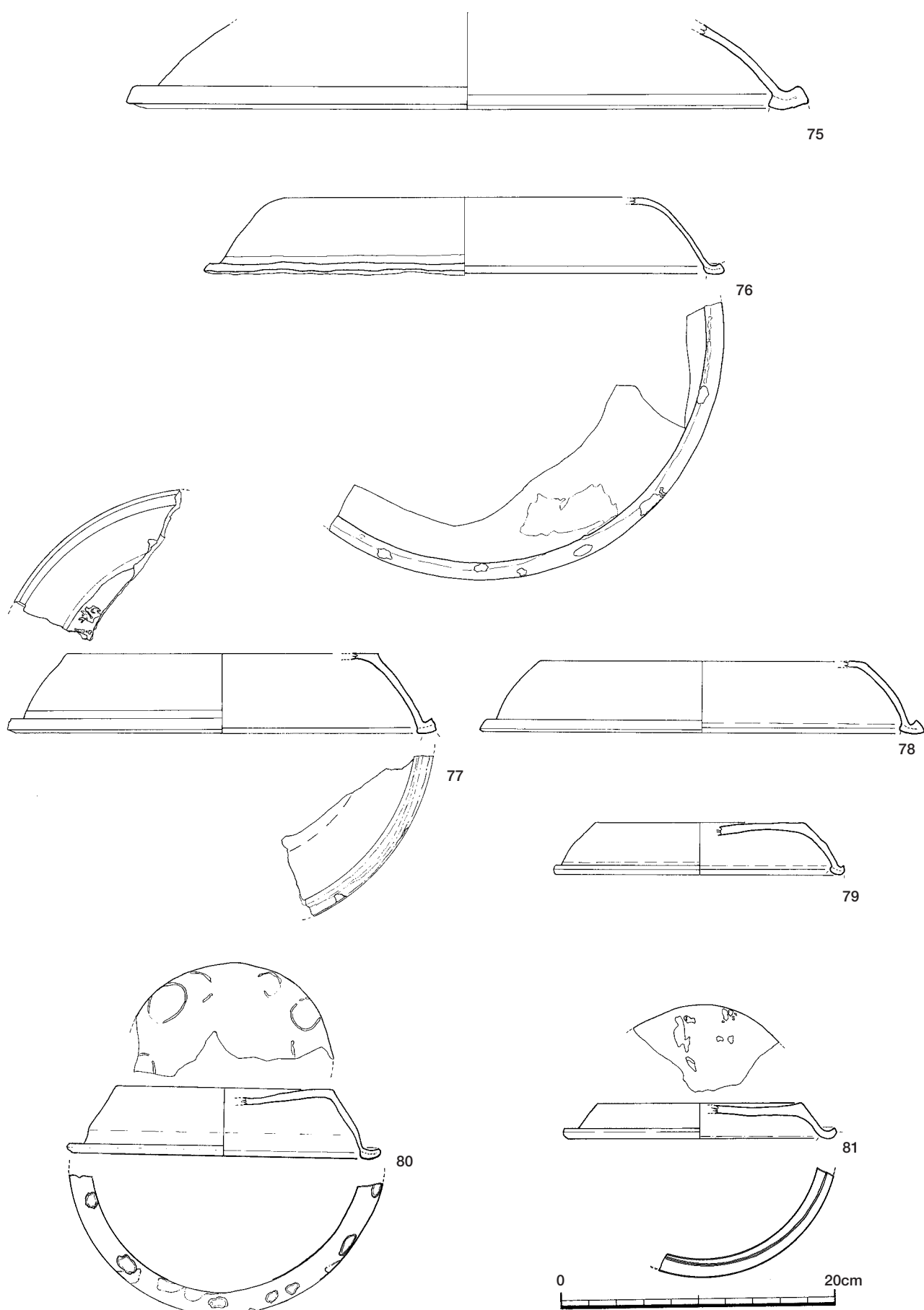


第46図 溝内出土遺物(18)蓋

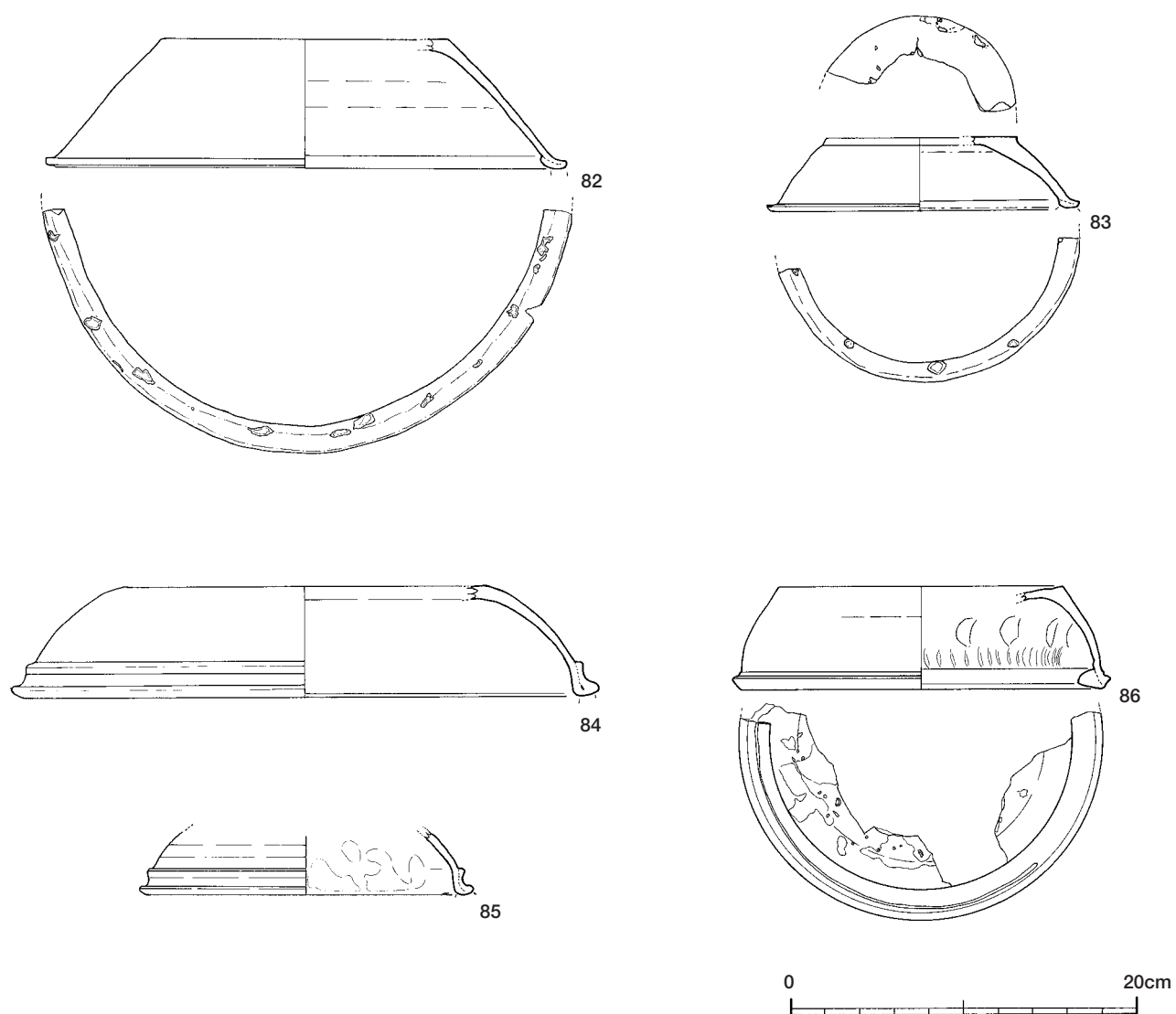
くおさめるが、あまり肥厚させないものである。また、口唇部も平坦にせず、丸くつくる。79は、外反させた口縁部の先端が、下向きに鋭く尖る。口唇部には、小形の貝を利用した、胎土詰貝目が看取される。80は、灰褐色の色調を呈する胎土に、黄褐色の灰釉が薄くかかる。口唇部の釉は拭い取られ、胎土詰貝目が残る。外底面は貝の腹面を利用した貝目が残る。81は、比較的深みの少ない資料である。外底面には釉溜まりが看取され、口唇部には、貝目は見られず、合わせ口にして焼成した際の他製品の口唇部の痕跡が残る。

第19表 溝 遺物観察表14

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
74	蓋	4C溝	31.0	21.0	6.6	褐色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部と外部上面に貝目
75	蓋	溝	49.8	—	—	灰褐色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に合わせ口の痕跡
76	蓋	溝	37.8	25.0	5.7	褐灰色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
77	蓋	溝	31.2	22.6	5.9	褐色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 口唇部に合わせ口の痕跡
78	蓋	7Cア溝	32.6	23.8	5.2	赤褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
79	蓋	溝	21.3	15.0	3.8	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
80	蓋	溝	23.0	15.8	5.0	灰褐色	灰釉 黄褐色	残存部全面施釉	口唇部と外部上面に貝目
81	蓋	溝	19.9	14.8	2.6	褐灰色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に合わせ口の痕跡 外部上面に他製品の痕跡



第47図 溝内出土遺物(19)蓋



第48図 溝内出土遺物(20)蓋

82は、深みの強い器形で、上径と口径の差が大きいものである。口唇部内側には、胎土詰貝目が残る。83は、82と同様の口縁部形態を呈するが、小形のものである。器壁が口縁部から上面に向かって肥厚していき、上面付近で最も厚くなる。口唇部の釉は拭い取られ、胎土詰貝目が残る。

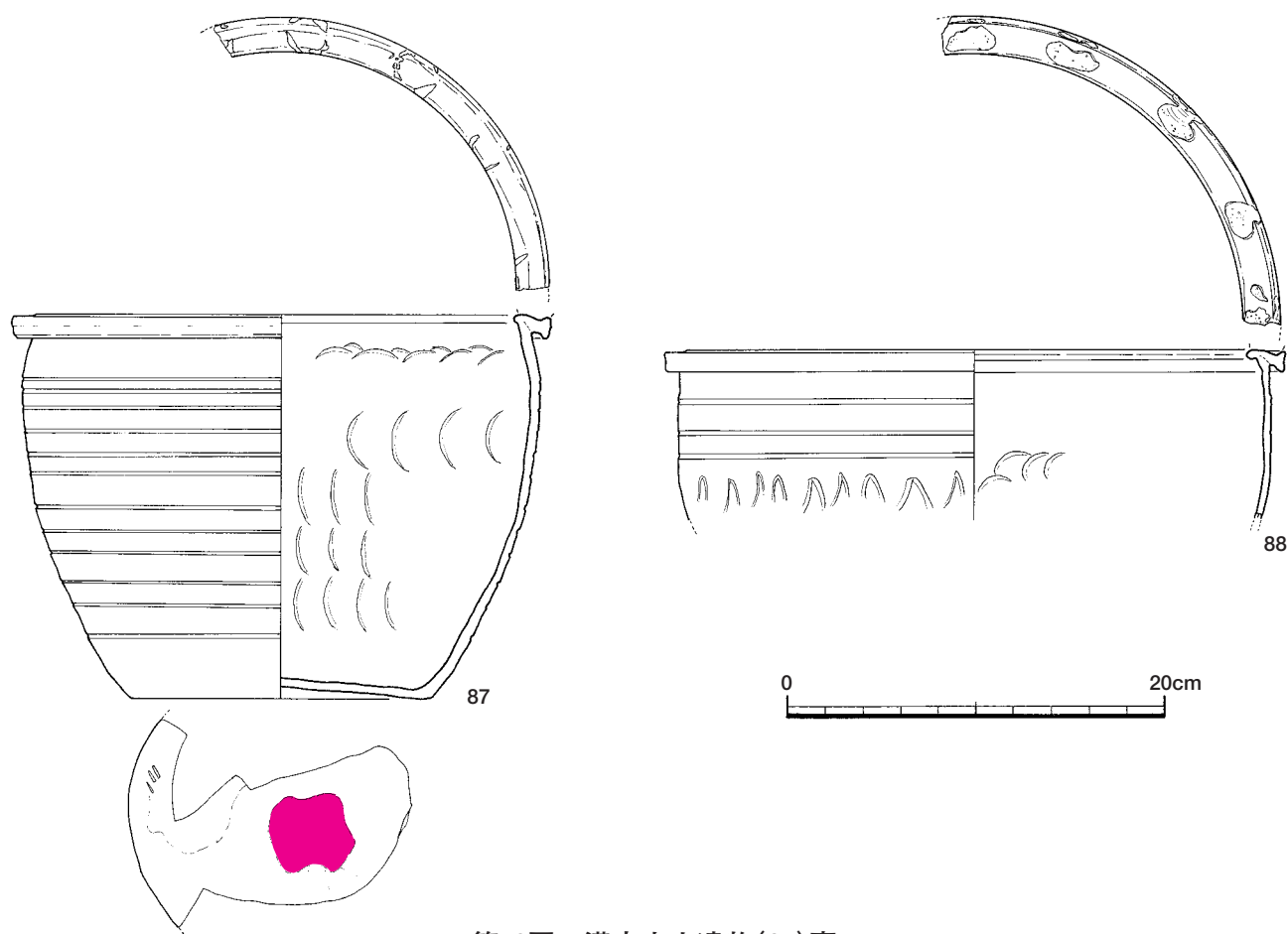
84～86は、特殊な口縁部の形状を呈する資料であるため、これらの形状の蓋の出土数は非常に少なく、数点である。

84・85は、口縁端部を外側に折り返して肥厚させ、1条の突帯をつくるものである。どちらも、口唇部の釉は拭い取られており、貝目は見られない。85は、内面に指跡と思われる痕跡が残る。

86は、口縁部が厚くつくられるものである。内面口縁部下位には、同心円状のタタキ目が残る。胎土は灰褐色を呈し、素焼きである。蓋として掲載したが、他の蓋は全て施釉されていることから、蓋ではない可能性も考えられる。

第20表 溝 遺物観察表15

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
82	蓋	溝	30.0	14.0	7.5	暗灰褐	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
83	蓋	溝	18.0	11.0	4.3	褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
84	蓋	7Cア	33.8	20.6	6.4	にぶい赤褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
85	蓋	7Cア	19.0	—	—	灰色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	
86	蓋	溝	21.0	16.4	5.9	灰褐色	無釉	—	口唇部に合わせ口の痕跡 内面に同心円状タタキ目



第49図 溝内出土遺物(21)甕

甕（第49～52図）

溝内出土遺物の中で、壺に並んで出土量が最も多い器種である。胴部の形状から、バケツ型を呈するものと、胴部が丸みを帯びて膨らむものの、大きく2つに分けることができる。残存部が底部のみで全体的な器形が不明なものは、これらの後に掲載した。

製作方法は、粘土を叩いて平らにし、轆轤回転を利用して円板状に切り取り、その上に粘土紐を巻き上げて胴部を作る。また、タタキ成形を行っており、胴部内面には同心円状のあて具痕が残り、器壁も非常に薄くつくられる。しかし若干ではあるが、タタキ目がはっきり観察できない資料も見られる。また、胴部外面には、平行のあて具痕が看取される資料もあるが、殆どの資料では、ナデ消しているためか観察できない。

口縁部は先端を外側に折り、さらに内側に折り返して肥厚させ丸くおさめ、「T」字状の形状をつくる。折り返

しの部分が、三角形の隙間となる資料もある。口唇部は、平坦につくらず、内側を高くし、外側を溝縁状にする。また、口唇部の釉は拭い取られ、貝目が残る。

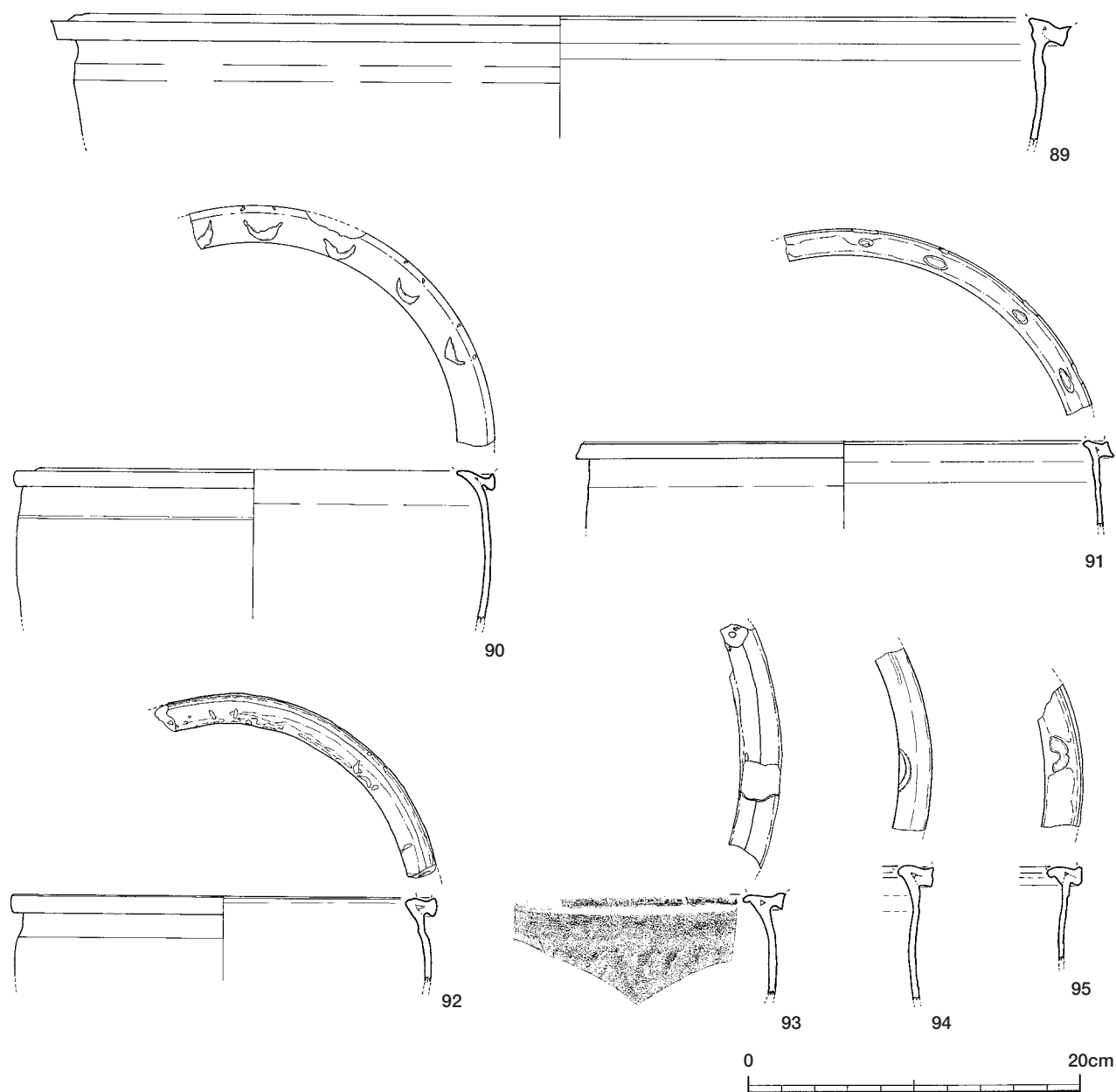
胎土は、比較的緻密で、細かい砂粒等も殆ど看取されない。色調は灰色がかった褐色を基調とし、よく焼き締まっているためか、叩くと高い金属音がする。

釉薬は、鉄釉や灰釉が薄くかかり、口唇部のみ釉が拭い取られ、他は外底面も含め全て施釉される。施釉された外底面には、貝目やハマの目跡が付く。

87～95は、バケツ型の器形を呈するものである。87は、外面全体に12条の沈線を有し、内面にはタタキ成形時のあて具痕が、同心円状に残る。口唇部には貝目があり、外底面にはハマの痕跡と思われる黄白色の目跡が残る。88は、外面口縁部下位に3条の沈線と波状文を有する。

第21表 溝 遺物観察表16

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
87	甕	7 C 溝	28.6	15.9	20.5	灰褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外底面に貝目と目跡 内面にタタキ目
88	甕	6 C 溝	33.0	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	外面口縁部下位に沈線・波状文 口唇部に貝目と内面にタタキ目



第50図 溝内出土遺物(22)甕

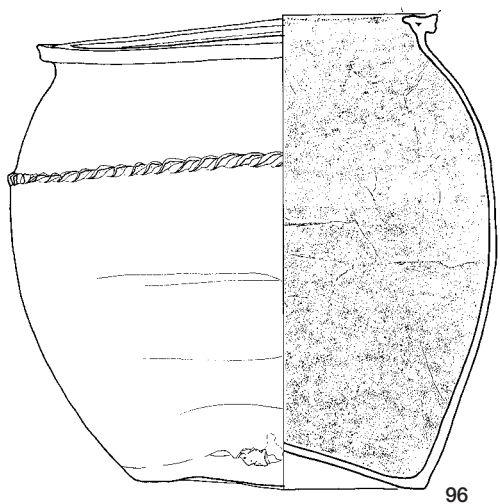
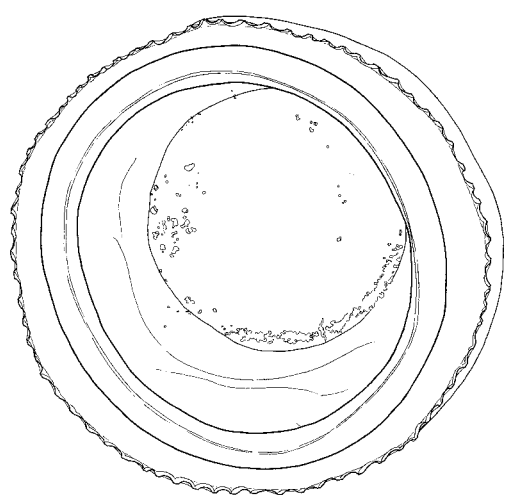
89は、口径の大きいものである。90は、口縁部が下方に垂れ歪んでおり、口唇部には貝目が残る。

91～93は、外面口縁部下位に段を有するもので、91は、口唇部に胎土詰貝目残り、93は、内面にタタキ成

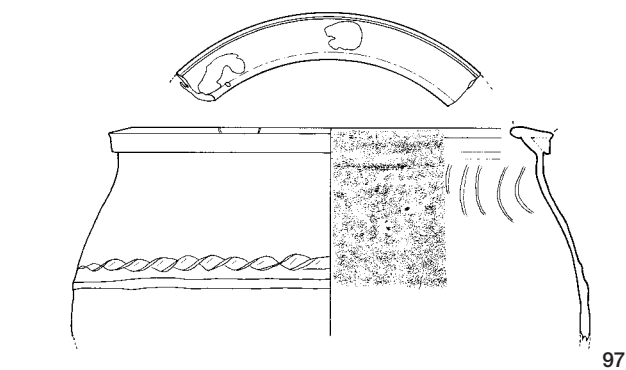
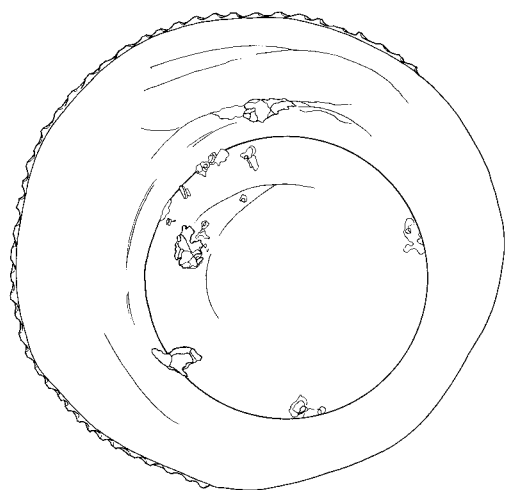
形時のあて具痕が同心円状に強く残る。94・95は外面に沈線を有するもので、94は口唇部に、貝目と重ね焼きを行い合わせ口にした時の他製品の口縁部の痕跡が看取される。

第22表 溝 遺物観察表17

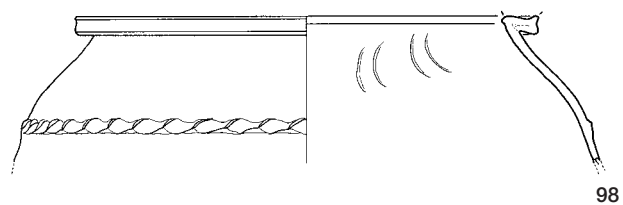
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
89	甕	6 C 溝	46.0	—	—	褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
90	甕	6 C 溝	29.0	—	—	褐灰色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
91	甕	溝	31.8	—	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
92	甕	溝	25.6	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
93	甕	6 C 溝	40.0	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
94	甕	7 C ア溝	33.4	—	—	灰褐色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
95	甕	5 C 溝	32.0	—	—	灰褐色	鉄釉 暗緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



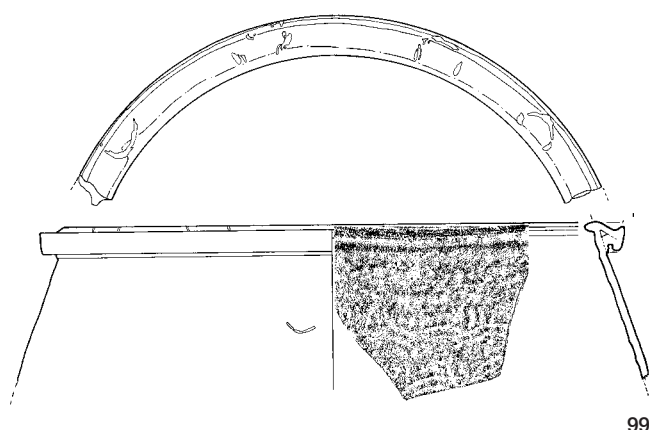
96



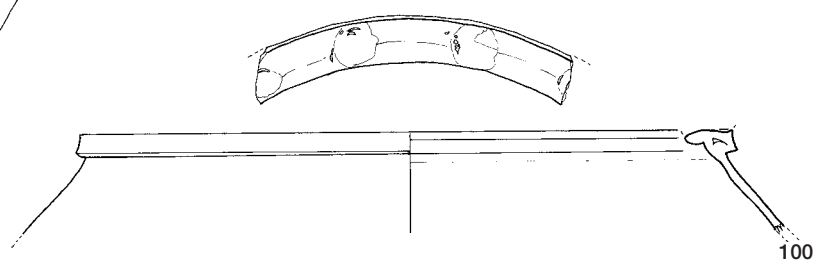
97



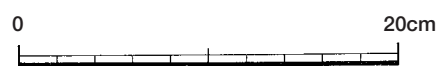
98



99



100



第51図 溝内出土遺物(23)甕

96～100は、胴部が丸みを帯び膨らむ器形を呈するものである。外面肩部の縄状突帯の有無によりさらに2つに細分化することができる。

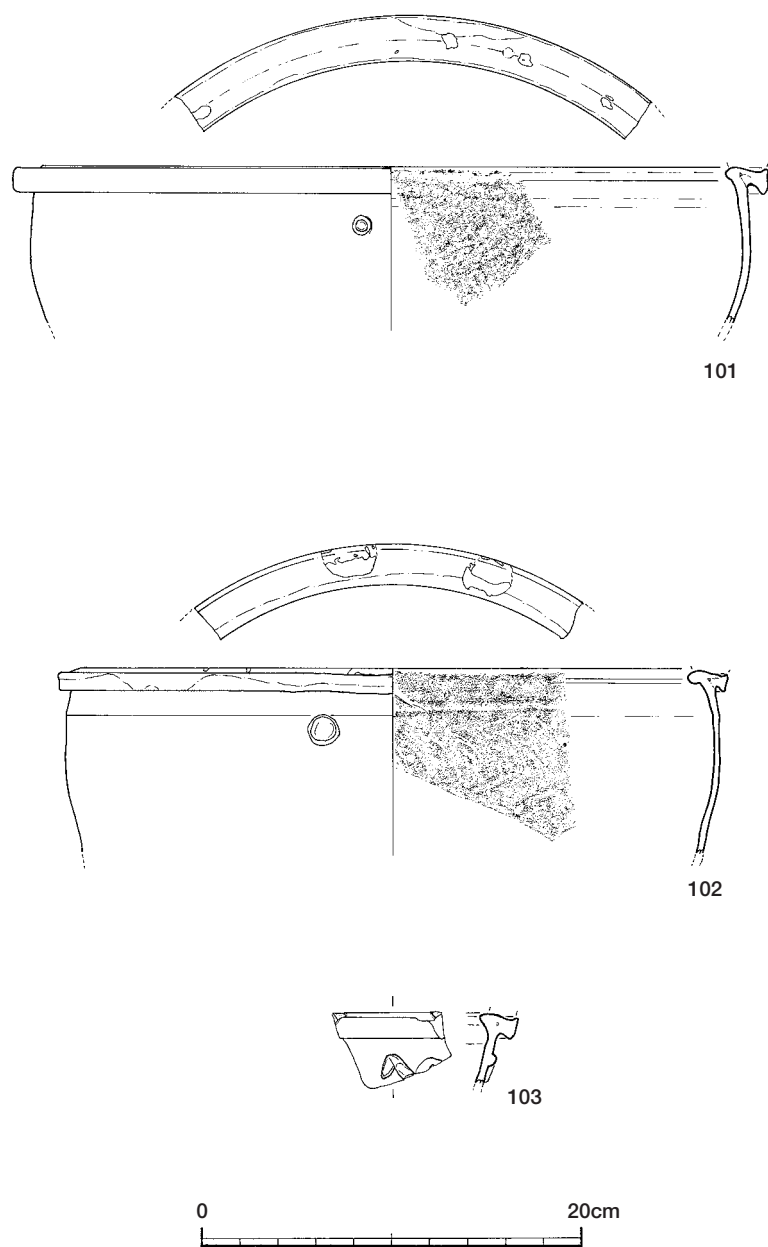
96～98は、肩部に貼り付けの縄状の突帯を有するものである。

96は、焼き歪みが見られる資料であるが、一個体に復元することができた。口径と器高の差が約3cmとあまりなく、ずんぐりとした丸みを帯びた器形である。釉が拭き取られた口唇部には、貝目は見られない。外底面にも貝目は見られず、ハマと思われる一部が熔着している。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残るが、外面には平行タタキ目の痕跡は観察できない。97は、縄状の突帯の下に1条の低い突帯を有するものである。焼成が良好なせいか、釉の光沢が強い。98は、口唇部に貝目が付かないものである。

99・100は縄状の突帯を有しないものであるが、突帯部分が欠損している可能性も考えられる。

99・100は、比較的口径が大きいものである。99は、外面に貝目の一部と思われる目跡が残る。100は、釉がやや厚く掛かるため分かりにくいですが、内面に同心円状のタタキ目が僅かに看取される。

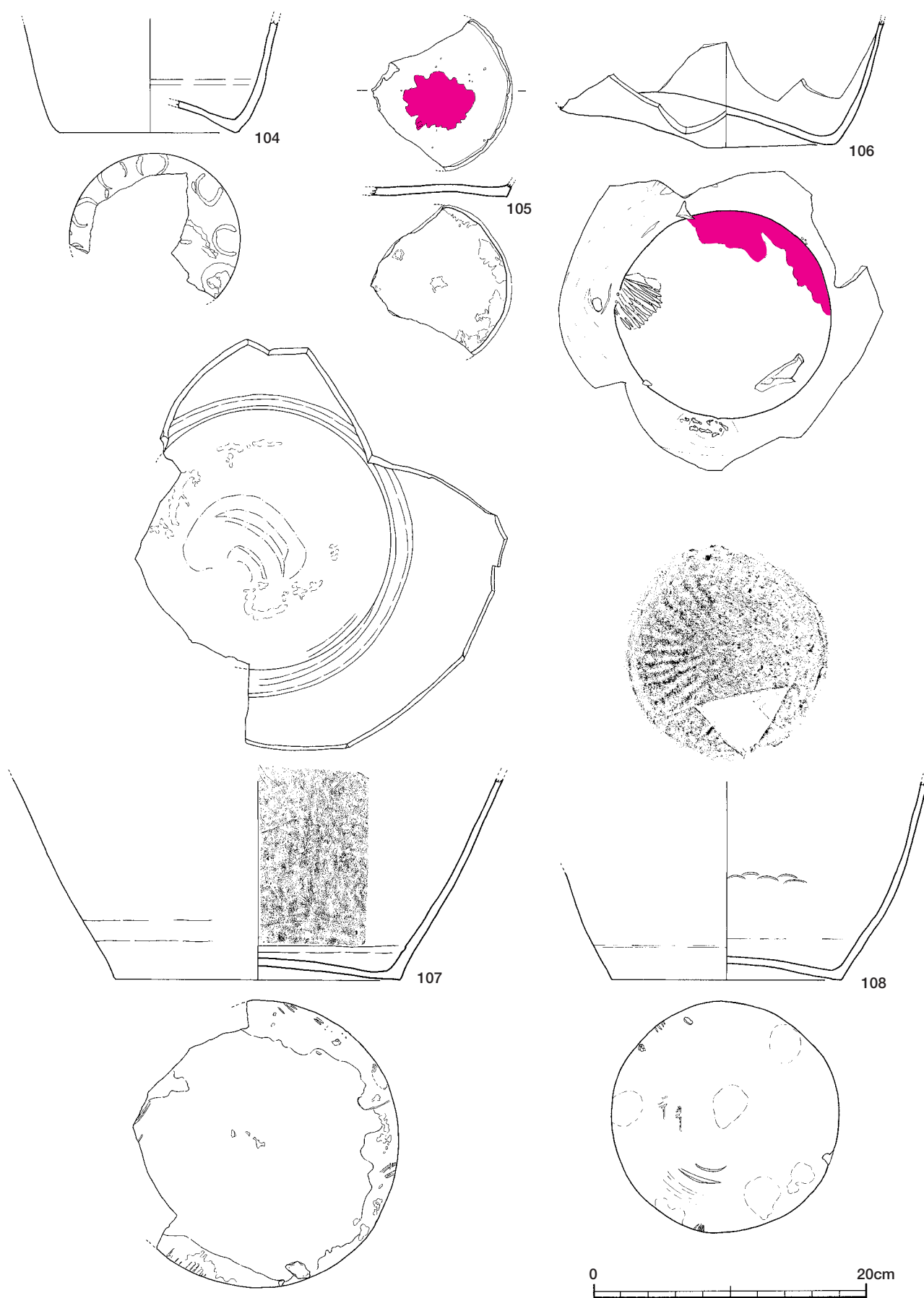
101・102は、外面口縁部下位に円形の突起が、103は波状の突起が付くものである。これらは、金属器の金具や装飾等を模倣して付けられたのではないと思われる。101は、102と比較すると大きめの突起が付く。内面には、同心円状のタタキ目が強く残る。102は、小さめの突起が付く。口唇部には、胎土詰貝目が残る。103は、小片のため波状の突起の全形等の詳細は不明である。



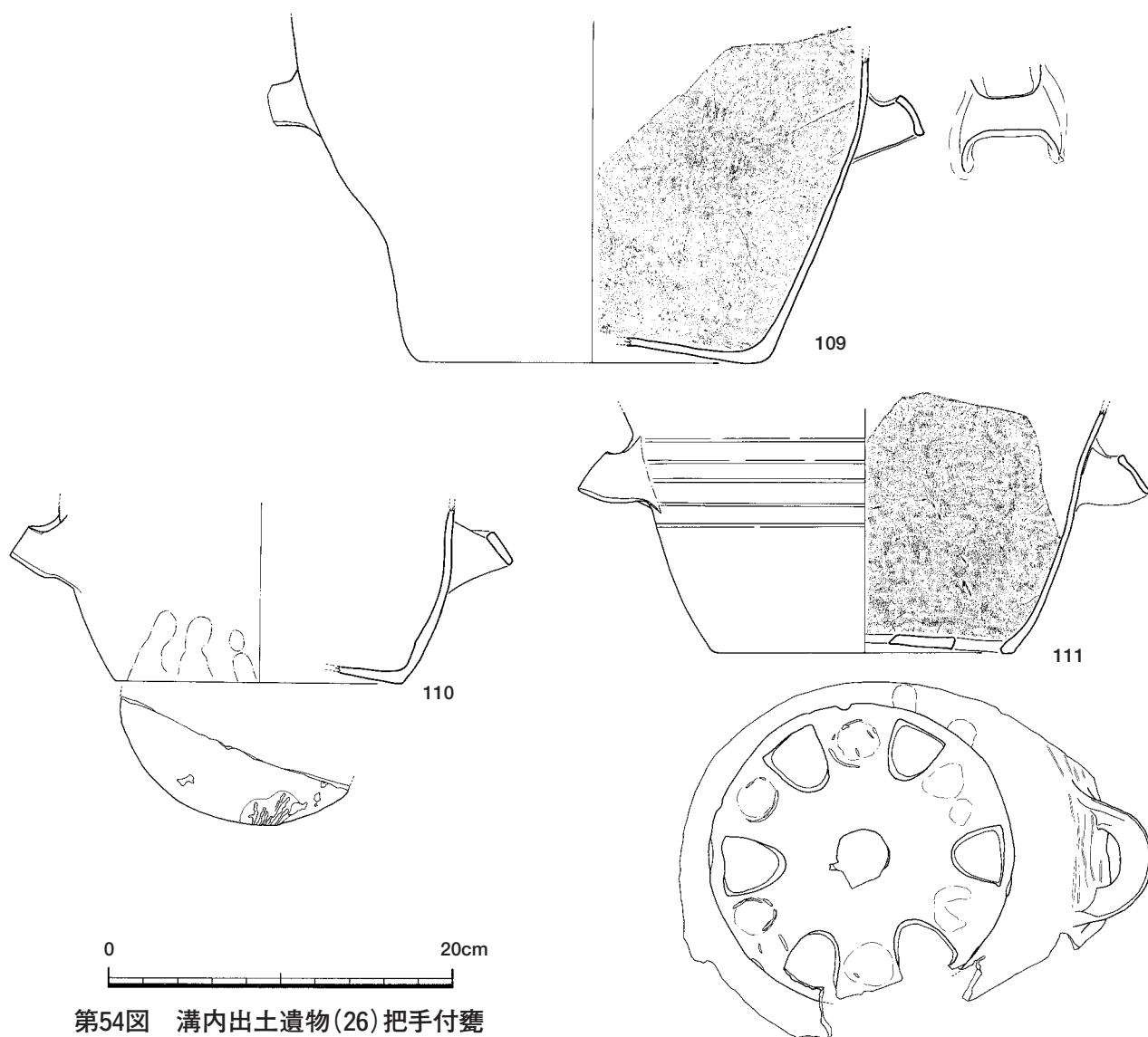
第52図 溝内出土遺物(24)甕

第23表 溝 遺物観察表18

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
96	甕	溝	22.1	14.7	25.0	褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	
97	甕	溝	23.4	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
98	甕	溝	24.2	—	—	灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
99	甕	溝	30.8	—	—	褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
100	甕	溝	34.4	—	—	赤褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	
101	甕	5 C 溝	40.0	—	—	灰褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
102	甕	溝	35.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
103	甕	溝	26.0	—	—	灰赤色	灰釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目



第53図 溝内出土遺物(25)底部



第54図 溝内出土遺物(26) 把手付甕

104～108は底部を一括して掲載した。

104は徳利の底部，105は片口の底部と思われる。104は，外底面に貝目が残る。105は，内底面に黄白色のハマ跡と思われる目跡が残る。106は外底面に一か所だけ貝目残り，焼き歪みが強い。107・108は外底面にハマ跡が残る資料で，107の内底面には釉を拭い取った跡があり，108には，成形時のタタキ目が残る。

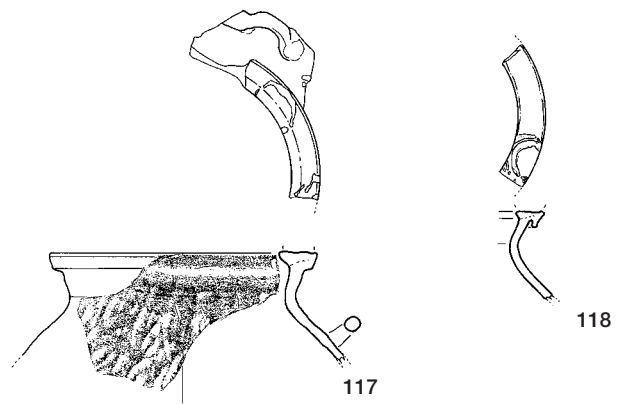
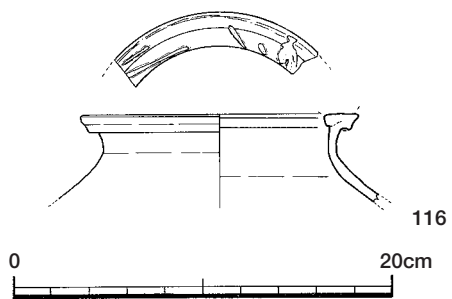
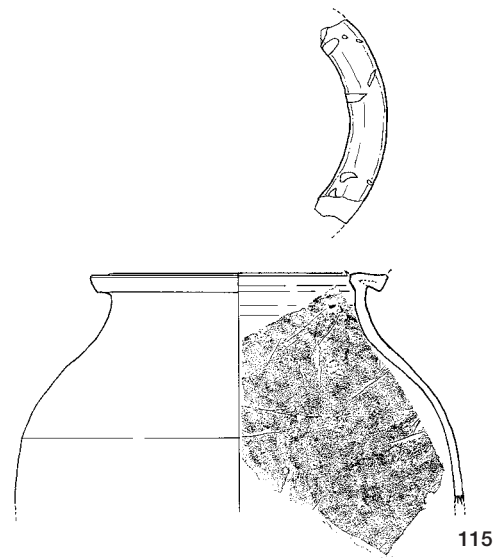
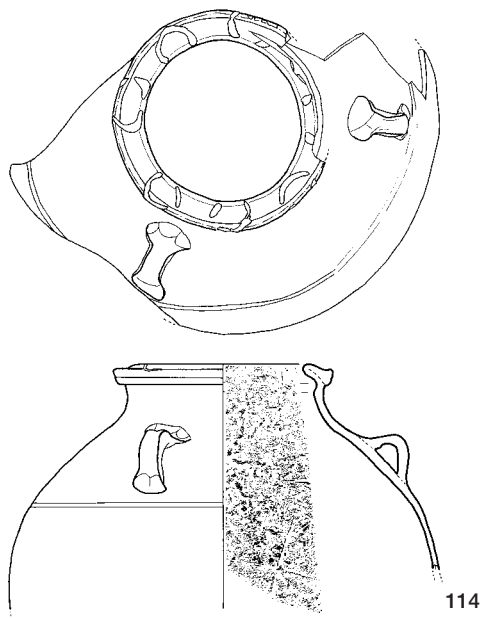
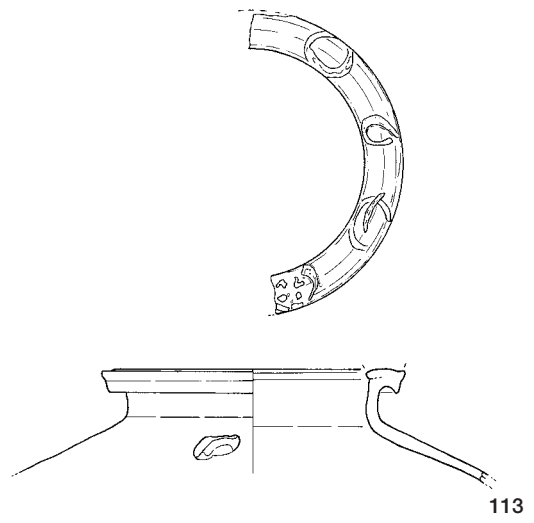
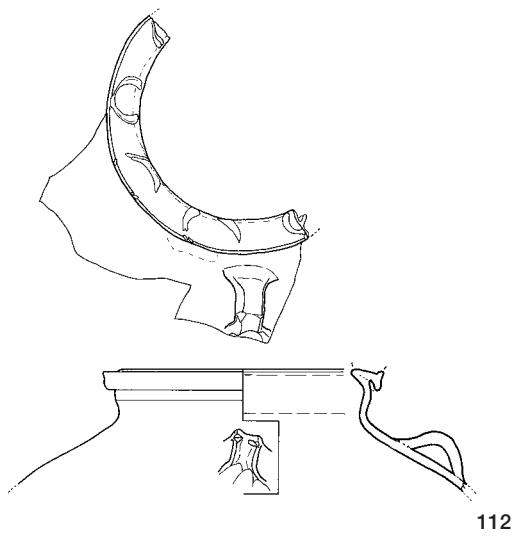
109～111は，胴部に2か所把手が付くものである。

109は，胴部に焼き歪みが見られる。110は，外面下位に施釉時の指跡が残る。

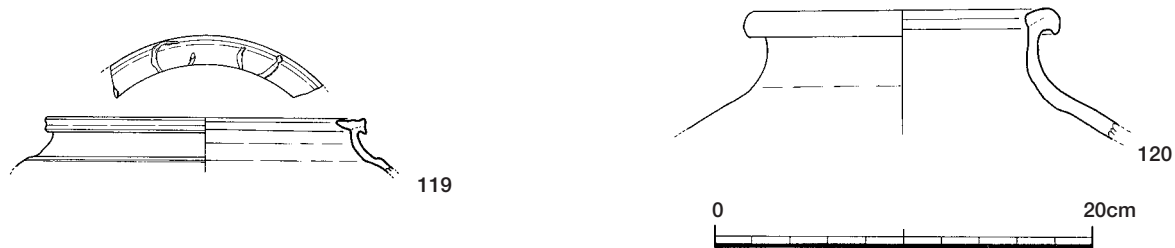
111は，甑である。溝内出土遺物では，1点のみの出土である。胴部に2か所把手が付くためここに掲載した。把手の下位は，胴部がやや窪んでおり，持ちやすくしたと思われる。

第24表 溝 遺物観察表19

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
104	徳利	7 C 溝	—	12.4	—	灰褐色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目
105	片口	溝	—	11.8	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	内外底面にハマの目跡
106	甕	7 C 溝	—	15.7	—	灰褐色	灰釉 暗褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
107	甕	9 C 溝	—	20.8	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰色	残存部全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
108	甕	7 C D ア 溝	—	16.8	—	褐色	鉄釉 暗赤褐色	残存部全面施釉	外底面にハマの目跡 内底面に状タタキ目
109	甕	溝	—	20.0	—	赤褐色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	
110	甕	溝	—	16.6	—	灰黄色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
111	甑	7 C 溝	—	17.6	—	鈍い褐色	灰釉 灰黄色	残存部全面施釉	



第55図 溝内出土遺物(27)壺



第56図 溝内出土遺物(28)壺

壺 (第55～58図)

甕と同様に出土量の多い器種である。基本的な器形としては、頸部が縮まり肩部にかけて丸みを帯びながら膨らむ形状であるが、口縁部の形状や全体の大きさ、器形等様々なバリエーションが見られる。

口縁部の形状により、大きく4つに分けることができる。

112～119は、口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返して肥厚させたのち、端部を丸くおさめるものである。口唇部は、平坦に作らず内側を高くつくり、外側を溝縁状に仕上げる。

甕と同様の口縁部形態を呈するもので、本窯跡の最も古い時期に相当する遺物の中で、一般的な器形の壺である。胎土は、緻密で微細な砂粒等も殆ど観察されない資料が多い。施釉は、全面施釉後口唇部の釉を拭い取り、口唇部に貝目が残る

112～115は、肩部に縦耳が付くものである。また、外反した口縁部の下部が垂れ下がる。

112は、肩部に縦耳がつくものである。口唇部には貝目が残る。113は耳部が欠損しているが、痕跡から縦耳が付くものと思われるものである口唇部には貝目が残る。114・115は、肩部に付く耳の下位に、1条の沈線を有するものである。114は、残存する耳の付き方のバラ

ンスから考えて、三耳壺になるものと思われる。釉を拭い取った口唇部には、腹面を利用した貝目が8か所付く。胴部外面の一部には、黄褐色の灰かぶりが見られる。二面には、タタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。115は、114と同器形であるが、耳の有無について残存部からは判断できない。内面には同心円状のタタキ目が残る。

116は、口唇部にイタヤガイ貝と思われる貝目が付く資料である。イタヤガイを貝目に使用した資料は、溝内出土遺物の中では少なく、遺跡全体もそれほど多くはない。耳の有無については不明である。

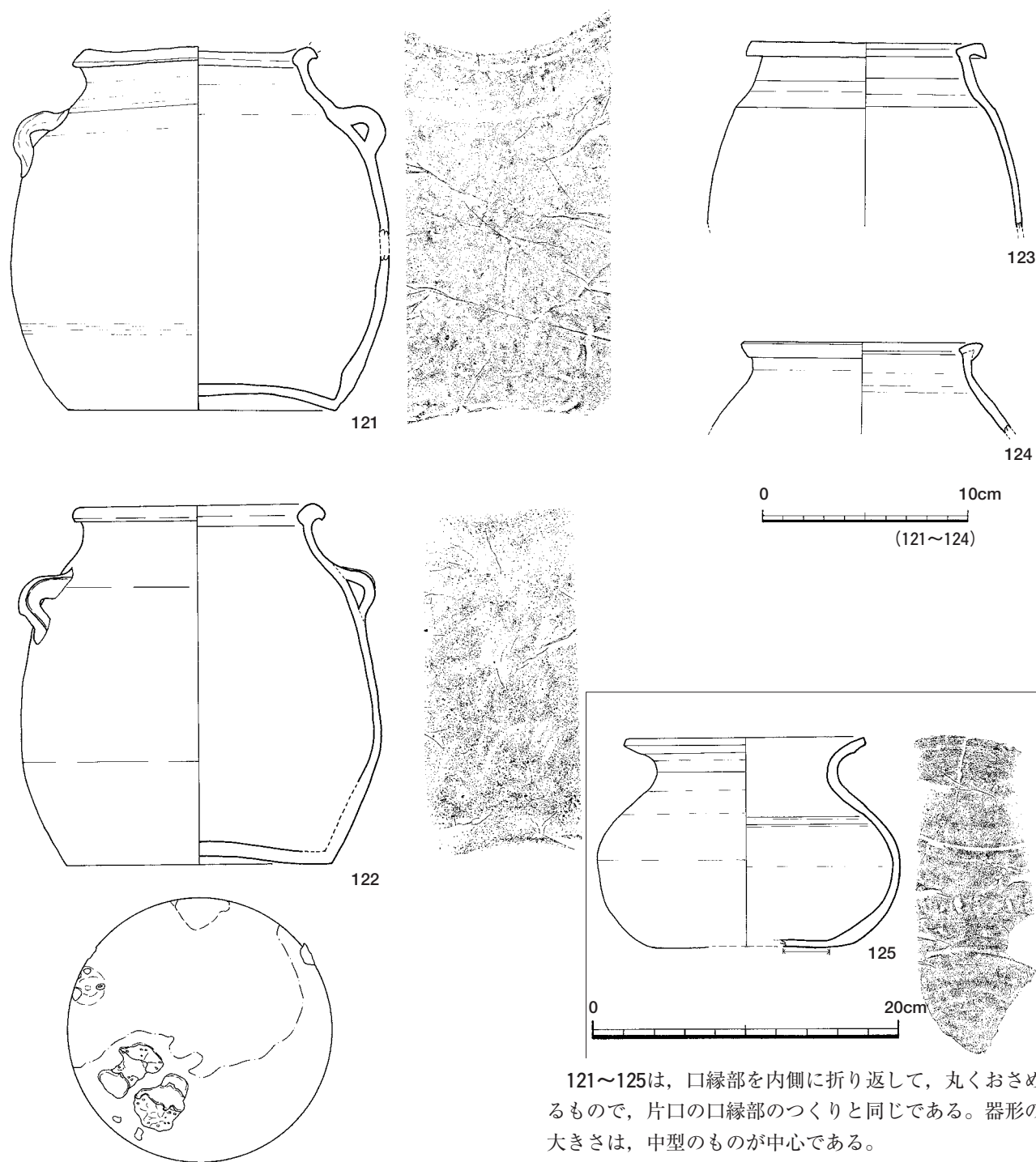
117は、肩部に丸みを帯びた耳が付くものである。内面は口縁部付近まで、タタキ目が強く残る。

118は、外反した口縁部の下部が垂れ下がるものである。

119は、口縁部が内側にも張り出し、「T」字状を呈し、頸部に段を有するものである。

第25表 溝 遺物観察表20

レイアウト 番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)				胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	最大径	器高				
112	壺	5C溝	14.8	—	—	—	褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
113	壺	7Cア溝	16.0	—	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
114	壺	4C溝	8.8	—	—	—	赤褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
115	壺	7C溝	15.7	—	—	—	赤褐色	灰釉 暗灰黄	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
116	壺	7Cア溝	14.6	—	—	—	褐灰色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部にイタヤ貝の貝目 内面に同心円状タタキ目
117	壺	7C溝	14.0	—	—	—	灰黄褐色	鉄釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
118	壺	6C溝	12.8	—	—	—	灰褐色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面にタタキ目
119	壺	7C溝	17.0	—	—	—	褐色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	口唇部に貝目
120	壺	7C溝	16.0	—	—	—	褐灰色	鉄釉 暗褐色	残存部全面施釉	



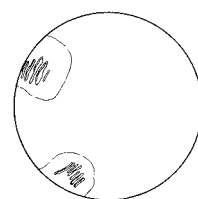
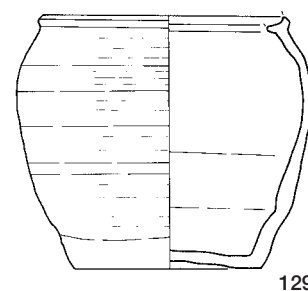
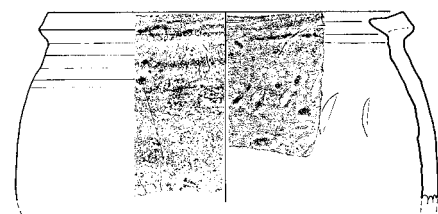
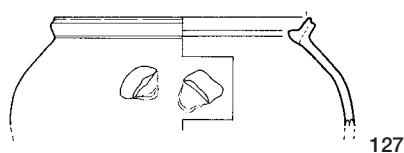
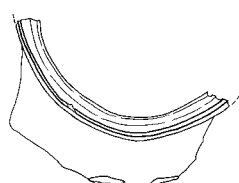
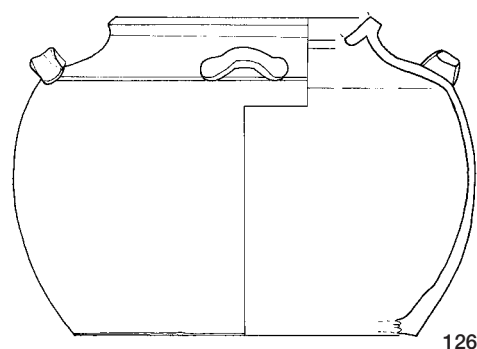
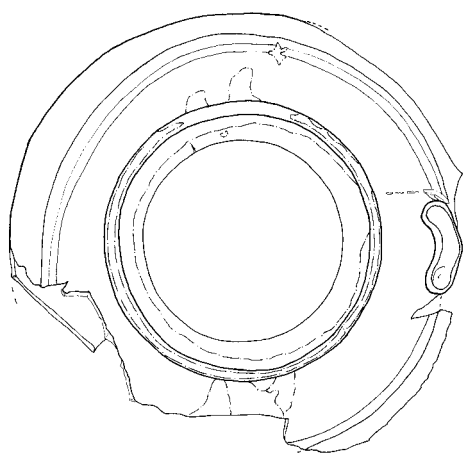
第57図 溝内出土遺物(29)壺

121～125は、口縁部を内側に折り返して、丸くおさめるもので、片口の口縁部のつくりと同じである。器形の大きさは、中型のものが中心である。

121・122は、同器形の双耳壺である。同じ陶工により製作されたものと思われる。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。121は、胴部に削りの痕跡が看取される。釉は、口唇部を除き灰釉が全面施釉され、

第26表 溝 遺物観察表21

レイアウト 番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)				胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	最大径	器高				
121	壺	7C溝	11.9	12.8	18.3	17.7	褐色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目 外底面に貝目
122	壺	7C溝	12.2	12.9	—	17.4	黒褐色	鉄釉? 緑黒色	全面施釉	外底面に目跡
123	壺	7C断面ア	11.2	—	15.2	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	
124	壺	7C溝	11.6	—	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
125	壺	6C溝	15.8	10.8	19.6	13.6	くすんだ赤褐色	無釉	—	外底面に黄白色の目跡



第58図 溝内出土遺物(30)壺

口唇部の釉は拭い取られる。122は、外底面にハマの痕跡と思われる目跡が看取される。釉は、鉄釉が全面に施釉され、口唇部にもかけられる。123・124は、小片であるため、耳部の有無については不明である。どちらも口唇部を含め、残存部は全面施釉される。

125は、素焼きのもので、東南アジア系のハンネラ壺を模倣したものと思われる。外底面には、黄白色のハマ痕が残る。器壁は比較的厚く、胎土も緻密ではあるが他の

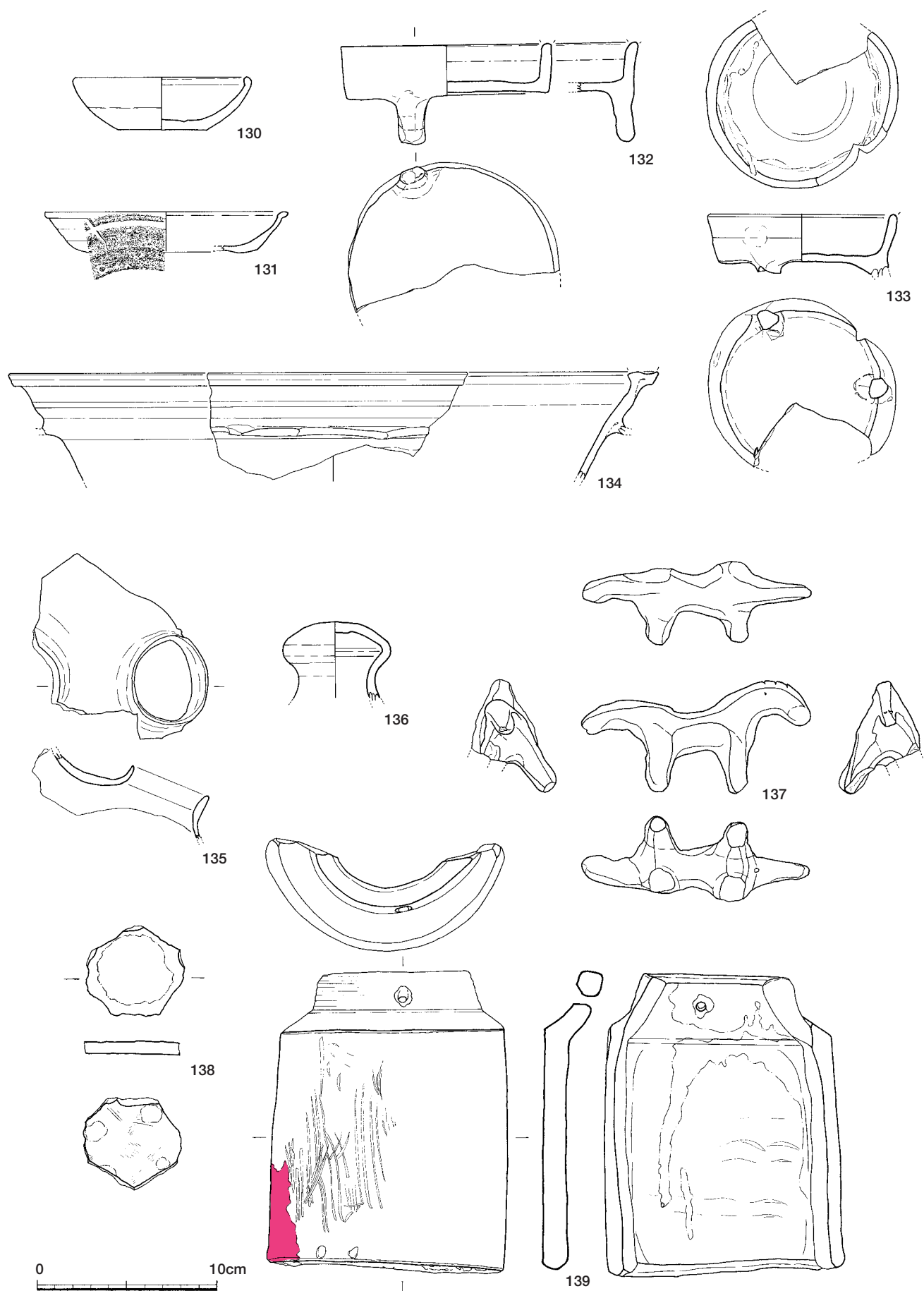
壺と比較すると、微細な砂粒やパミスが目立つ。

126～129は、口唇部に蓋受け部を有する資料である。

126は双耳壺で、肩部に1条の沈線を有する。127は、耳部が欠損しているが、痕跡から肩部に横耳が付くものである。128は、内面に同心円状のタタキ目が強く残り、外面には平行タタキ目が残る。129は、胴部に、ヘラ状工具による調整痕が残る。

第27表 溝 遺物観察表22

レイアウト 番号	器 種	出土地点	法 量 (cm)				胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	最大径	器高				
126	壺	7C断面ア	10.0	13.6	18.2	12.5	赤褐色	灰釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	
127	壺	溝	10.0	—	—	—	灰色	灰釉 黄褐色	外面のみ施釉	
128	壺	6C溝	14.0	—	—	—	赤褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
129	壺	7C溝	9.8	7.2	11.6	10.0	赤褐色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目



第59図 溝内出土遺物(31)その他

その他（第59図）

本窯の製品と思われる資料のうち、出土数が1点若しくは数点のものを一括して掲載した。

130は、皿としたが正確な用途は不明である。口縁部は先端で内湾し、胴部と見込みの境には段を有する。胎土は灰褐色を呈し、無釉であると思われる。外底面には貝目残り、その部分に釉垂れが見られる。窯道具の可能性も考えられる。

131は、皿であるとしたが、蓋の可能性も考えられる資料である。口縁部は外側に折り返して丸くつくり、口唇部の釉を拭い取る。

132・133は、香炉である。どちらも外底面に三つの脚がつくものと思われる。内面は無釉である。

134は口縁部下位に羽部がつくもので、羽釜のような器形を呈するものと思われるが、詳細は不明である。口

唇部の釉は拭い取られる。

135は漚瓶である。全体的な器形は不明であるが徳利の肩部に口縁部がくるような器形になるものと思われる。136は漚瓶の把手である。外面のみ施釉される。

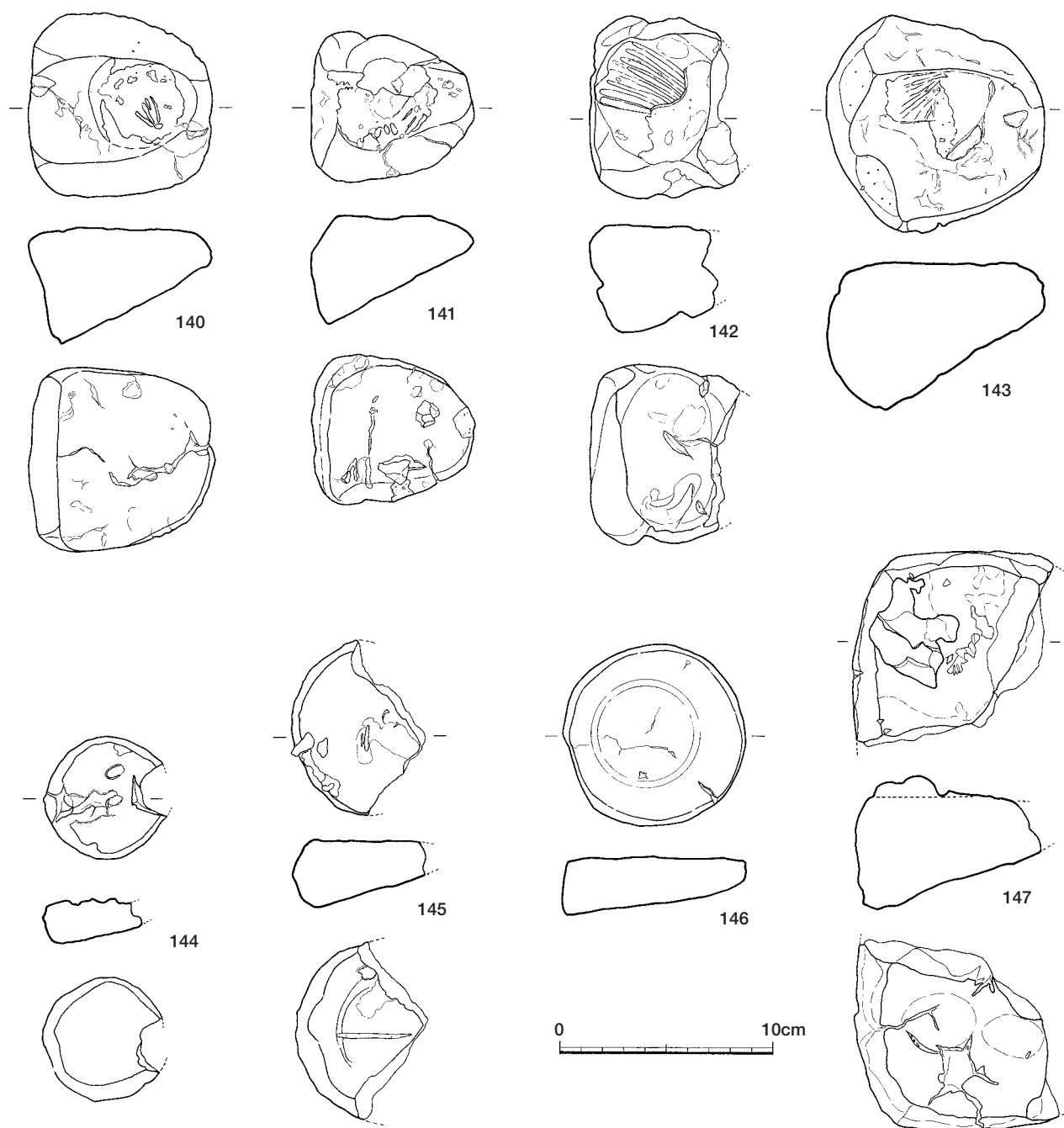
137は動物型土製品である。馬を形取ったものと思われる。総釉である。

138はメンコであると思われる。他の器種を転用して作られており、側面を打ち欠いて円形に作る。上面には、黄灰色の目跡が残る。下面には、黄灰色の目跡が四か所残る。

139は丸瓦である。玉縁部には、一か所穿孔が施される。ヘラ状工具による調整痕が看取される。施釉は上面のみ施される。成形は粘土紐を巻き上げタタキ成形で作ったもので、内面に同心円状のタタキ目が残る。

第28表 溝 遺物観察表23

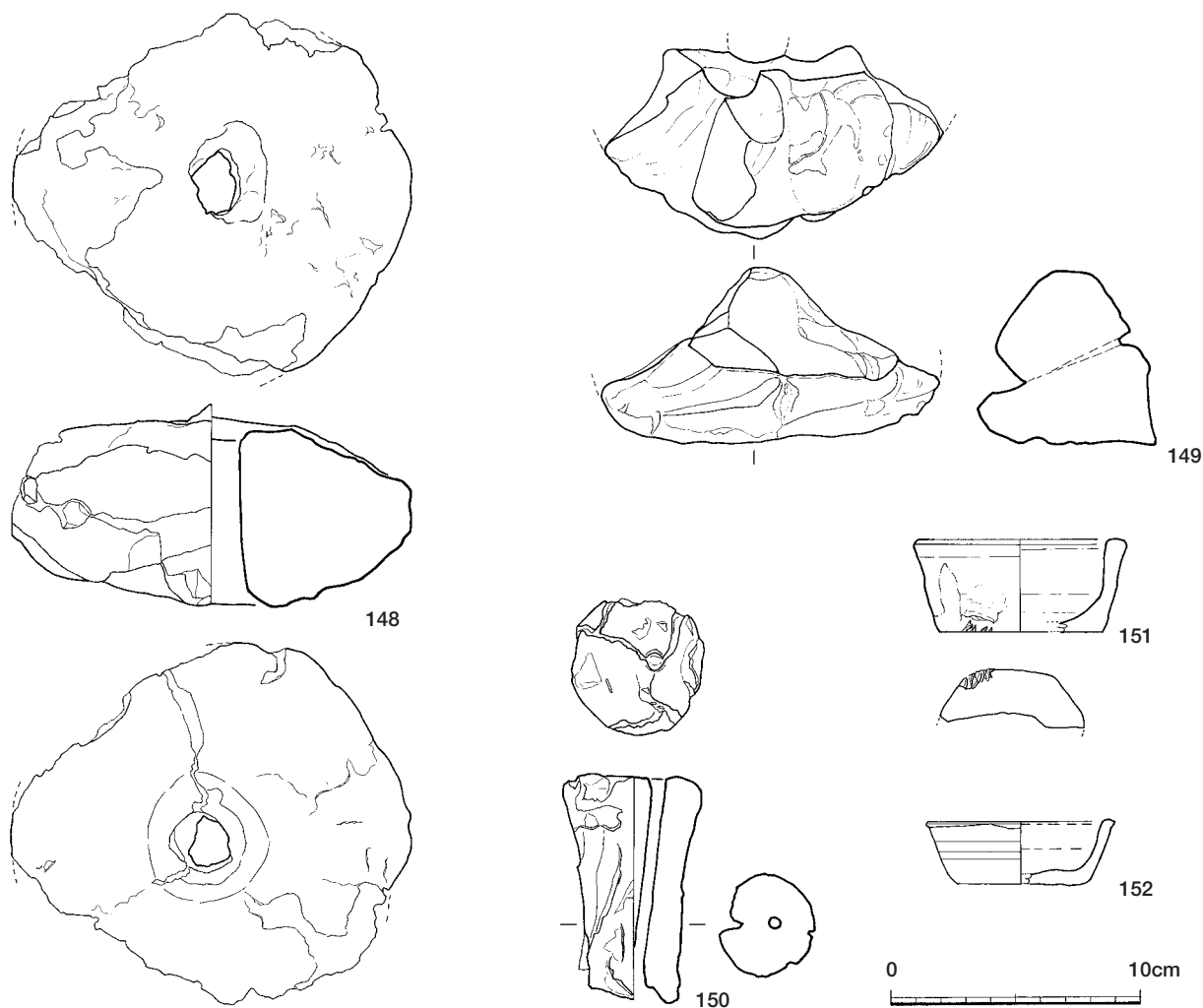
レイアウト 番 号	器 種	出土地点	法 量 (cm)				胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	最大径	器高				
130	皿	7C D溝断面	10.0	5.0	3.0	—	灰緑色	無釉	—	
131	皿	6C溝	13.6	9.0	2.2	—	褐灰色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	
132	香炉?	7C D溝	11.8	—	5.5	—	灰褐色	灰釉 褐色	外面全部と内面中位まで施釉	
133	香炉?	溝	10.7	—	—	—	黒褐色	灰釉 緑色	内面以外施釉	内底面に高台痕
134	不明	7C溝	36.2	—	—	—	灰褐色	灰釉 黄褐色	口縁部以外施釉	
135	漚瓶	6C溝	—	—	—	—	黒褐色	灰釉 灰褐色	外面全体と内面の一部施釉	
136	漚瓶	溝	—	—	—	—	灰褐色	灰釉 黄灰色	外面全体と内面の一部施釉	
137	馬型土製品	7C溝		長さ12.7	6.3	—	暗赤褐色	灰釉 緑黄色	全面施釉	
138	メンコ	7C D溝ウ	幅5.5	—	—	0.8	赤褐色	灰釉 黄灰色	上面のみ施釉	外面に胎土目跡4ヶ所
139	丸瓦	溝	幅13.2	長さ16.5	高さ6.0	0.5	赤褐色	灰釉 にぶい黄色	上面のみ施釉	



第60図 溝内出土遺物(32)窯道具

第29表 溝 遺物観察表24

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)		胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	厚さ				
140	ハマ	溝	8.6	5.5	明黄褐色	無釉	—	上面に貝目
141	ハマ	溝	7.7	2.1	黄橙色	無釉	—	上面に貝目
142	ハマ	6C溝	7.0	5.1	にぶい黄褐色	無釉	—	上面に貝目
143	ハマ	6C溝	10.2	7.0	にぶい黄褐色	無釉	—	上面に貝目
144	ハマ	溝	5.6	2.2	にぶい赤褐色	無釉	—	
145	ハマ	溝	6.3	3.2	にぶい褐色	無釉	—	上面に貝目 下面に目跡
146	ハマ	溝	8.5	2.8	にぶい褐色	無釉	—	上面に高台痕
147	ハマ	7CD溝	9.4	6.3	浅黄色	無釉	—	上面に貝目



第61図 溝内出土遺物(33)窯道具

窯道具（第60～63図）

溝内出土遺物からは、製品を焼成する際使用した窯道具も大量に出土している。形状から大きく7つに分けることができる。

140～147は断面が馬蹄形をしたハマである。平面の形状によりさらに3つに細分化できる。140～143、平面が三角形を呈するものである。窯使用時には上面に貝を置いて使用したと思われる、上面に貝の背面の放射脈痕が残る。144～146は、平面が円形を呈するもので、146は、上面に黄白色の高台痕が残る。147は、全体的な形状は不明であるが、平面が長方形を呈するものと思われ

る。上面には貝目残り釉垂れも付着する。

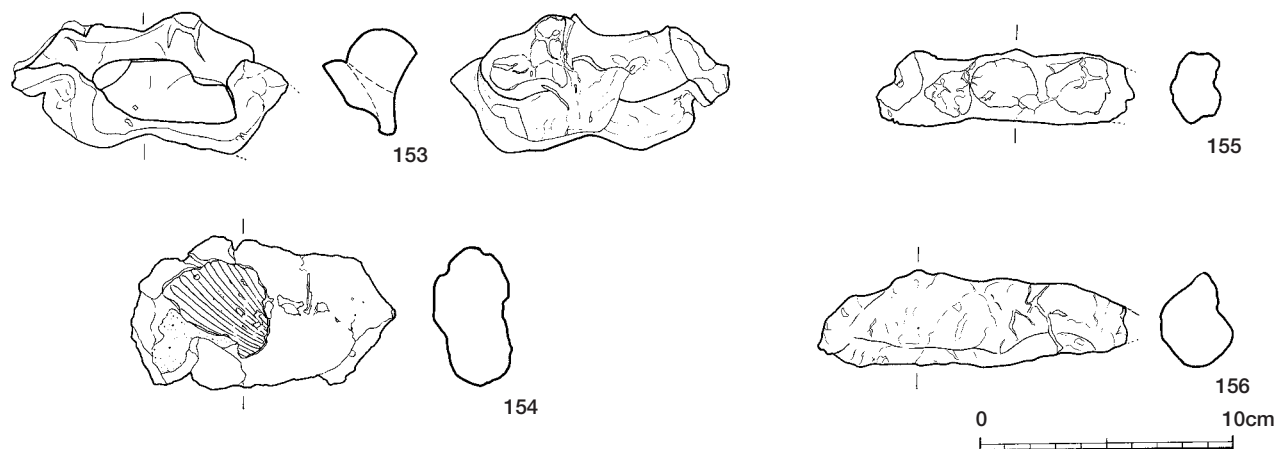
148・149は、ドーナツ型を呈するもので、色見孔の蓋をハマに転用した資料である。149は、ドーナツ型のハマが二個体熔着したものである。

150は、用途不明であるが、窯道具であると思われる。中心付近には、上部から下部まで穴が貫通している。

151・152は、窯道具ではない可能性も考えられるが、ここに掲載しておいた。151は、外面胴部に黒褐色の鉄釉がかかる。内面と外底面は、無釉である。外底面には、貝目が残る。152は、口唇部を除き、全面に黄褐色の灰釉がかかる。

第30表 溝 遺物観察表25

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
148	ハマ	溝	(長さ)16.0	(厚さ)8.0	—	橙色	無釉		—	
149	ハマ	溝	(長さ)13.5	(厚さ)7.2	—	にぶい橙色	無釉		—	上面に貝目
150	トチン	6C溝	上経5.2	—	—	灰黄褐色	無釉		—	
151	不明	溝	8.5	6.5	3.7	褐灰色	灰釉	灰色	外側面のみ施釉	脚部の痕跡
152	不明	7Cア溝	7.6	5.0	2.6	にぶい黄色	灰釉	浅黄色	口唇部以外全面施釉	



第62図 溝内出土遺物(34)窯道具

153～156は、棒状の形状を呈するものである。主に、140～147のような、断面が馬蹄形を呈するハマの高さを微調整するために使用されたものと思われる。製作方法は簡単で、粘土を手の中で棒状に握ってつくっており、大きさや太さ、長さ等は均一でなく、表面には指跡が看取される。

153は、棒状のハマが二個体熔着したものである。154は、上面に貝の背面の放射脈が残る。

157～165は、用途不明の資料であるが、全面無釉で貝目等が残るものが多いため、窯道具ではないかと判断し、ここに掲載した。法量的に大小の差はほとんどなく、16～18cmのものが中心である。他の物原から完形のもので出土していることから、器形は次のようになるものと思われる。まず平面は円板状の形状で、上面端部に粘土紐を斜め上方に貼り付けるため、体部の端が二股に分かれる。中心部には、穿孔が施され、その周辺に三か所突起が付けられる。

157は、下面に小形の貝を利用した、胎土詰貝目が残る。159は、下面にイタヤガイの貝目が残る。160は、下面に貝目が残る。162・164・165は、中央の穿孔部周辺に付く突起が観察できる資料で、これらの突起は穿孔した後、上面に貼り付けられている。

166・167は、全体的な器形は不明であるが、円板状になるものと思われる。用途も不明であるが、挟み板等の可能性も考えられるため、窯道具に掲載した。両者ともハマを置いたと思われる痕跡が見られる。

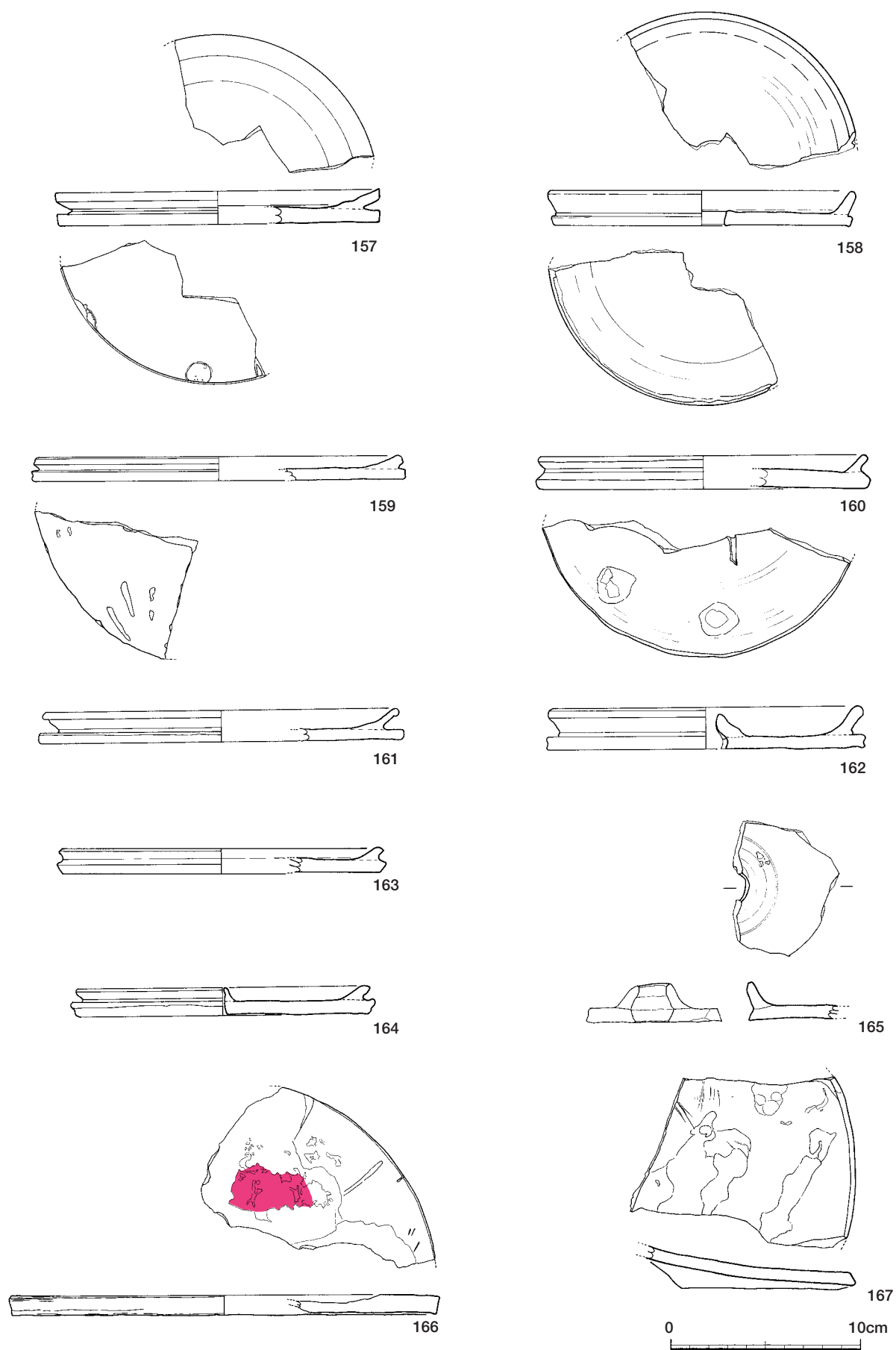
堂平窯製品以外（第64図）

堂平窯の製品ではないと思われる資料である。

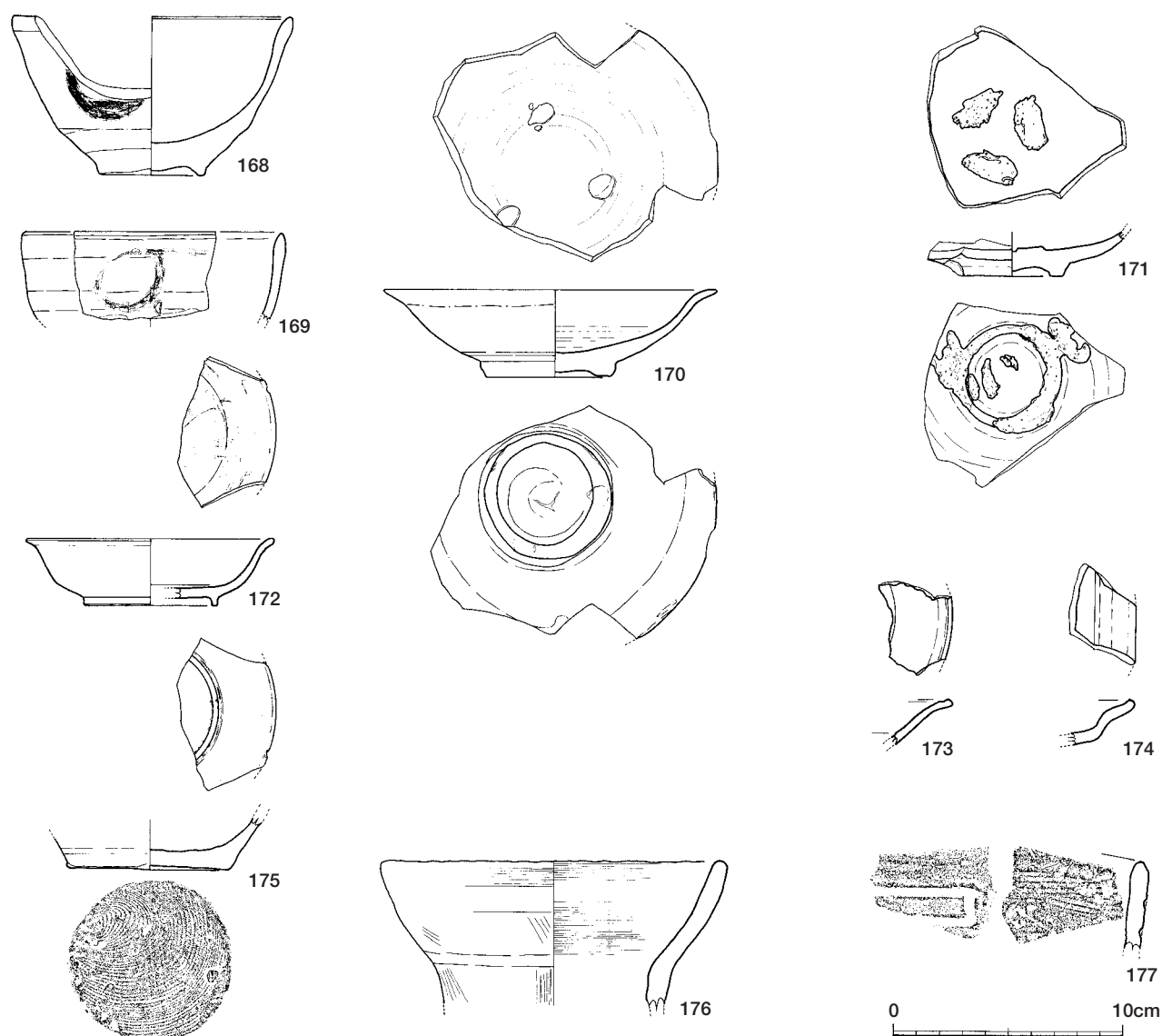
168～171・173・174は、肥前系陶器である。168は、鉄絵唐津の碗である。169も、鉄絵唐津碗の口縁部である。170・171は、皿である。170は見込みに、胎土目が3か所残る。171は畳付に砂目が3か所付着し、見込みにも3か所砂目が残る。173は、溝縁皿の口縁部である。

第31表 溝 遺物観察表26

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
153	ハマ	6C溝	(長さ)11.0	(厚さ)4.0	—	橙色	無釉	(長さ) —	
154	ハマ	6C溝	(長さ)10.5	(厚さ)3.1	—	灰褐色	無釉	—	上面に貝目
155	ハマ	溝	(長さ)10.2	(厚さ)2.0	—	橙色	無釉	—	指跡
156	ハマ	6C溝	(長さ)12.1	(厚さ)2.9	—	にぶい橙色	無釉	—	指跡
157	窯道具	溝	17.0	17.0	1.8	褐灰色	無釉	—	底部に貝目
158	窯道具	溝	16.2	15.8	1.8	灰褐色	無釉	—	
159	窯道具	6C溝	19.4	19.8	1.3	灰褐色	無釉	—	底部に貝目
160	窯道具	6C溝	17.6	17.0	1.9	にぶい黄色	無釉	—	底部に貝目
161	窯道具	6C溝	18.8	19.4	1.7	にぶい赤褐色	無釉	—	
162	窯道具	6C溝	16.6	16.8	2.2	褐灰色	無釉	—	
163	窯道具	溝	17.2	17.5	1.4	にぶい黄褐色	無釉	—	
164	窯道具	6C溝	15.6	16.0	1.5	にぶい黄褐色	無釉	—	
165	窯道具	溝	—	—	2.0	灰褐色	無釉	—	上面に目
166	窯道具	溝	—	22.7	1.1	暗赤褐色	無釉	—	上面に目
167	窯道具	7Cア溝	—	—	—	暗赤褐色	無釉	—	



第63図 溝内出土遺物(35)竈道具



第64図 溝内出土遺物(36)堂平窯製品以外

174は、鉄絵唐津の折れ縁皿の口縁部である。
 172は、中国青花である。口縁部は先端で外反し、畳付には僅かに砂粒が付着する。
 175～177は、中世・古墳・縄文時代の遺物である。本窯が築窯された際に、上がってきた遺物と考えられるが、参考のためここに紹介しておく。175は、土師器の坏である。176は、成川式土器の壺の口縁部である。177は、指宿式土器である。

第32表 溝 遺物観察表27

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
168	碗	6C溝	12.3	4.5	6.9	橙色	灰釉 暗灰黄色	外面下部以外施釉	
169	碗	溝	11.2	—	—	灰黄色	灰釉 灰色 鉄釉 暗灰黄色	残存部全面施釉	外面に鉄絵 唐津焼
170	皿	6C溝	14.5	5.5	3.8	赤褐色	灰釉 緑色	内面と外面上位のみ施釉	見込みに目跡
171	皿	7CD イ溝断面	—	4.6	—	灰白色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	見込みと畳付に砂目3ヶ所
172	皿	溝	10.7	6.7	2.9	白色	透明釉	残存部全面施釉	中国青花 畳付に砂目付着
173	皿	溝	—	—	—	白色	透明釉	残存部全面施釉	
174	皿	溝	—	—	—	褐色	灰釉 灰白色	残存部全面施釉	
175	土師器	溝	—	7.0	—	にぶい黄色	無釉	—	内底側面部指ナデ痕 外底面に糸切り
176	土器	7C溝	15.0	—	—	赤褐色	—	—	
177	土器	7C表	—	—	—	にぶい褐色	—	—	

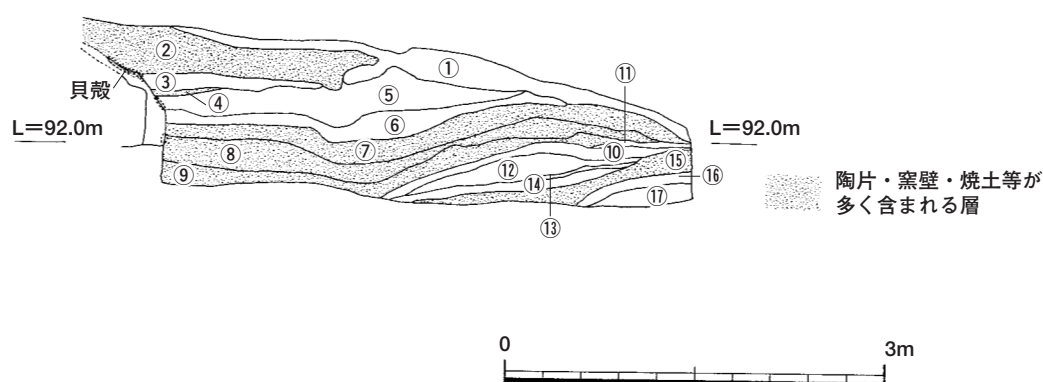
3 第1 地点物原の調査

(1) 物原Ⅰの調査

物原Ⅰは窯の上部，窯尻の南東側の地形的に高い部分に造られた物原である。一部は北側の集落に至る里道に潜り込んでいた。

この物原が造られた場所には，後世に民家が建てられた。物原の北東部にシラスで造成を行って建てられていた。この造成土の下部には陶器片や窯壁などの遺物等が若干見られるものの，物原の広がりとはそれほど広くはなく，検出した範囲を大きく超えるものではなかったと思われる。規模は17m×9mである。

物原が造られる以前の地形は，北東部から南西側の里道に向かって割合に大きな傾斜で下っており，南側は壁状となっていたことから，結果的には直径15mほどの窪地となっていたと考えられる。そのために，窯で焼かれたものの破損品や使用された窯壁などを遺棄する場所として選ばれたものと想定される。なお，里道は後世，おそらくは窯の廃棄後に設けられたものと思われる。それを証明する事象として，里道下に物原が埋まる形で一部残存していたほか，窯尻の最後尾部分が破壊され，残っていなかったことが挙げられる。土層の観察は2か所で行った。物原の北側の端と，ほぼ中央の部分である。



第65図 物原Ⅰ土層断面図

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| ① 暗茶褐色土 遺物の混在は少ない | ⑩ 濁灰白色 やや粘土質 層の混在あり |
| ② 赤色 上方の①が混在し，図中央では⑤もまざる 特に窯壁などが多い | ⑪ 黒色 ⑧よりも黒い 窯壁等多し |
| ③ 赤色 極めてもろい砂質 無遺物 | ⑫ 赤色 貝を少数含む |
| ④ 黒色 ほぼ窯壁等で形成されている 貝を少量含む ③・⑤が混在 | ⑬ 灰黒色 一部⑭が混在 |
| ⑤ 赤色 赤色を中心とするが黒色も混在する 炭化物もある | ⑭ 灰白色 粘土質 |
| ⑥ 黒色 図中央付近では⑤と混在する 炭化物あり | ⑮ 赤色 窯壁 遺物多し
図中右では⑭が混在する |
| ⑦ 赤色 焼土・窯壁等を含む 一部粘土質 | ⑯ 黒色 特に炭化物多し |
| ⑧ 黒色 炭化物含む 窯壁含む やや濁る | ⑰ 赤色 若干白みがかかる |
| ⑨ 赤色 下方では粘土層が混在する 特に遺物多し | |



北側端部では下位にシラスを主とした黒～黄色味を帯びた褐色土の堆積が見られたが、これは自然堆積及び民家建設以前の造成に起因するものと考えられる。上部は陶器片を多く含む埋土が3枚見られることから、これらがこの物原の主要部分と考えられる。調査時点で上部から順にア、イ、ウとして取り上げを行った。

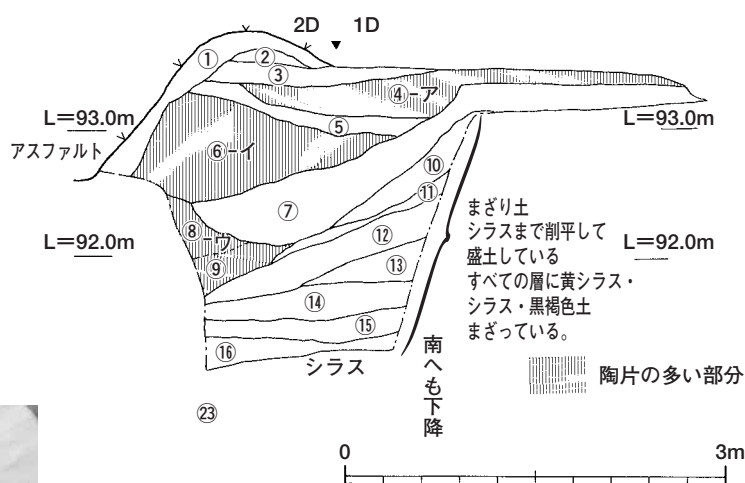
アは陶器片を大量に含む、純粋に近い物原である。それに比べて、イは炭や灰が多く含まれ、下端には細かな

焼土や窯壁が多く、堅い。また、ウはアと同様に純粋に近い物原であるが、下部には焼土や窯壁はほとんど見られない。

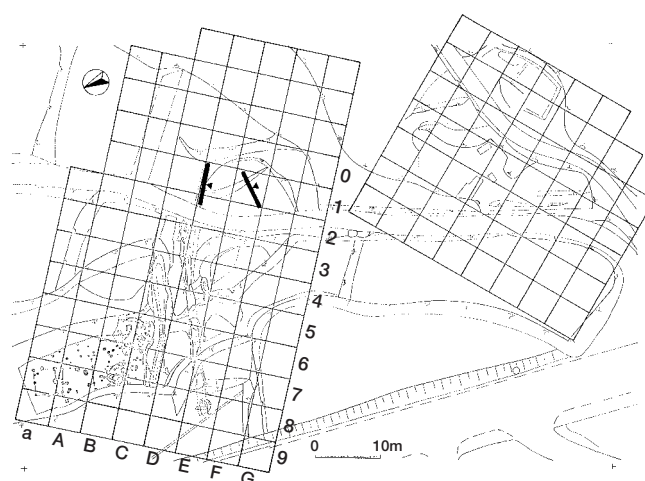
中央部では、陶器片や窯壁、焼土などが多く含まれる層が6枚見られる。上位から順に概略を述べる。1枚目は赤色で、窯壁が特に多い。2枚目は黒色で、ほぼ窯壁等が多く、貝殻も少量含んでいる。3～5枚目は間層を含まず、順に堆積している。3枚目は赤色で、焼土や窯壁等を含み、一部には粘質土も含んでいる。4枚目は黒色で、窯壁を含み、炭化物も見られる。全体的にやや濁っている。5枚目は赤色で、下部では粘土塊が混在している。特に遺物が多く見られる。6枚目は赤色で、窯壁や遺物が多い。里道側では灰白色粘土質が多く見られる。

この物原Ⅰは、窯作業時に窪んでいた場所を遺棄する場として利用したものと言える。恐らく北東部と同程度の高さとなった時点で終息を迎えたであろう。

- ① 黒褐色土 表土
- ② 灰白色粘質土
- ③ 茶褐色土
- ④ 物原ア
- ⑤ 暗茶褐色土
- ⑥ 物原イ 炭・灰多し
下端はこまかい焼土や窯壁で固い
- ⑦ 茶灰色土 シラス・アカホヤ・表土のまざり
- ⑧ 物原ウ
- ⑨ 焼土・窯壁がほとんどない
- ⑩ 茶白色土 アカホヤ・黒色土が少ない
シラスの多いまざり土
- ⑪ 黒色土が多い アカホヤも黒褐色土
- ⑫ 黄みの多い淡褐色土
- ⑬ 淡黄褐色土
- ⑭ 淡褐色土
- ⑮ 白っぽい淡褐色土 シラスが多い
- ⑯ 黄褐色土



第66図 物原Ⅰ・2D区土層断面



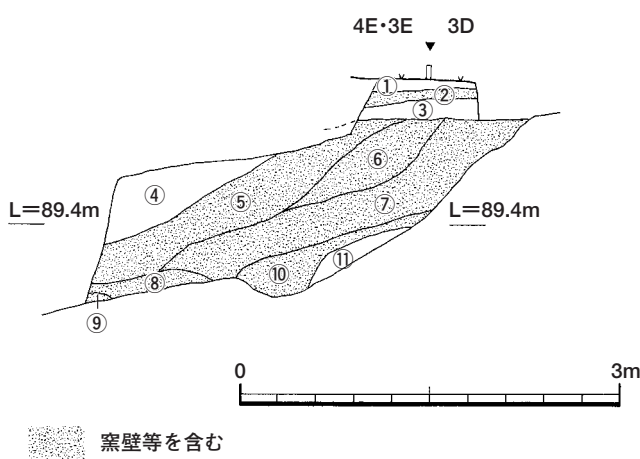
物原Ⅰ 土層断面位置図

(2) 物原Ⅱの調査

物原Ⅱは窯の上部の南側、焼成室上半部の南側にある程度の傾斜を持って下る部分に造られた物原である。一部は北側の集落に至る里道に潜り込んでいる。

この物原は窯本体の南側に、ほとんど接するような形で造られていた。物原Ⅰと同様に、窯から南側に傾斜している部分に陶器片や窯壁などを遺棄することによって形成されたと考えられる。規模は、10m×6mである。

土層の断面の観察は1か所で行った。ほぼ中央部で、

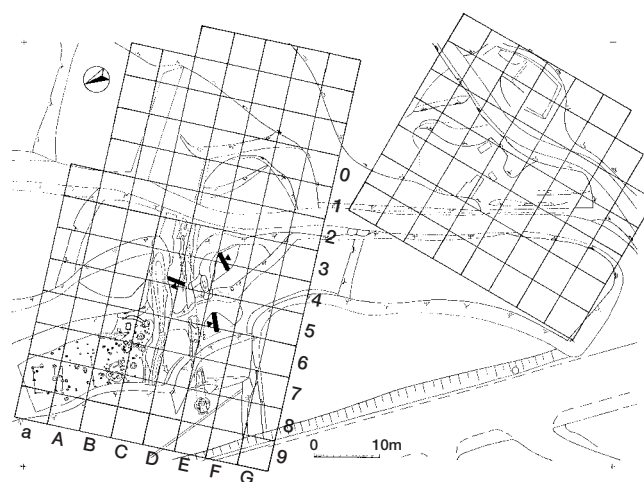


- ① 明褐色 粘土塊まじり
- ② 明褐色土 窯壁等まざる
- ③ 黄色砂質土
- ④ 赤褐色土 窯壁等まじり
- ⑤ 赤褐色土 窯壁等まじり
- ⑥ やや明るい赤褐色土 窯壁等・山石まじり

地形の傾斜に沿った方向である。

この物原には陶器片が割合に多く、窯壁や粘土塊、山石なども割合に多く見られた。物原としての埋土は7枚確認した。全体的に明褐色あるいは赤褐色土を呈する。含まれる遺物は窯壁を主体としているが、1枚目は粘土塊が混じり、断面の中央部には山石も混じる。

この物原は、遺棄する物が窯本体と同程度の高さに達した段階で終焉を迎えたと考えられる。



- ⑦ 赤色土 窯壁等・山石を含む
- ⑧ 暗褐色 窯壁等・山石まじり
- ⑨ アカホヤ
- ⑩ やや濁った暗褐色土 窯壁等まじり
- ⑪ 黒褐色土



(3) 物原Ⅲの調査

物原Ⅲは窯の上部の北側、焼成室上半部の北側に接して造られた物原である。物原Ⅱとは窯を挟んで対峙する位置関係にある。窯本体と溝とに挟まれた狭い範囲の物原で、細長い形状に造られたものである。規模は6 m×2.5 mである。

物原とはしたものの、物原Ⅰ、Ⅱのようにまとまった遺物が層をなしているものではなく、褐色を主体とした一般的な廃土の中に、窯壁や石などをごく一部に含むものである。断面で観察しても、明確な‘層’としては区分できない。

この物原は、窯と溝の間で、窯本体と同程度の高さに達した段階で終息したと考えられる。



物原Ⅲ

(4) 物原Ⅳの調査

物原Ⅳは窯の中部の南側、焼成室中央部辺りの南側に接して造られた物原である。規模は、6 m×4.5 mである。

断面を観察すると、窯壁あるいは赤色の粘土塊（または火熱を受けた赤色の土塊と言うべきか）の混じった褐色の粘質土が埋土となっている。ただ、この粘質土中に窯壁あるいは粘土塊、火熱を受けた土塊を含んだものが範囲内に明確な‘層’を成すことなく一様に堆積している状況であることから、これを物原と呼称してよいのかという疑念は残る。

これについては、この物原とした範囲の北西部に窯に極めて近い位置に、窯の方向と同一の向きに、それぞれ並行する位置に2個の大小の石が並んで置かれ、また、南側に長さ約4 m程にわたって窯壁と思われるものが窯と並行に置かれ、その間が物原とした成分で充填されている状況であり、さらにその地域が全体的にほぼ平らであった。このように、北側の作業場と推定した地域とほぼ同じようなレベルにあり、しかも、ほぼ平らになっていたことから、建物を伴ってはいないものの作業場であった可能性もあると思われるのである。2個並んだ石や、1列に並べられた窯壁で区画されていた起伏の少ない地域ということで、何らかの造作がなされたことは確実である。

ただ、そうしたとき、物原としての遺構の認定はどうか、という問題が残ることになる。これに対しては、物原Ⅵの上部の堆積と成分が同一であることから、やはり物原とするのがよいのではないと思われる。つまり、‘遺棄’の場としての物原があって、その後、窯壁や石を並べ、ほぼ平らにするなどの整地を行い、作業場として使用したのではないかと考えられるのである。



物原Ⅳ



窯壁の並置状況

(5) 物原Ⅴの調査

物原Ⅴは窯の中部の北側、物原Ⅳとは窯を隔てた反対側に造られた物原である。窯の北側に接して造られ、溝までの間の物原である。規模は、9 m×3.5 mである。

断面観察によると、下部に黒～暗褐色土が窯から溝に向かって傾斜しており、その上部に窯壁や石などの少量の遺物が含まれる。褐色を主体とした土が、明確な‘層’を成すことなく堆積している。

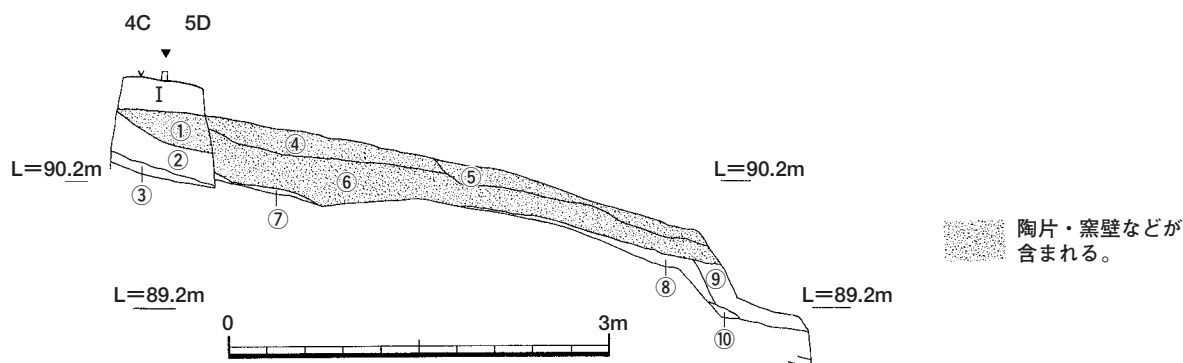
この物原は、窯と溝との間で、窯より幾分低い高さに達した段階で物原の形成が終焉を迎えている。

断面を観察すると、下部が黒～暗褐色土が窯から溝に向けて傾斜した状況で堆積しており、その上部に窯壁あるいは赤色の粘土塊（または火熱を受けた赤色の土塊と言ふべきかもしれない）が同様な傾斜で溝の方向に堆積している状況が見られる。

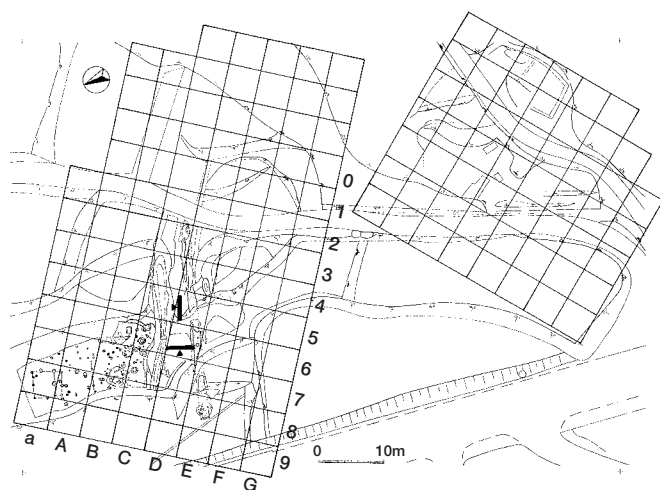
この物原は、窯と溝との間で、窯本体と同程度の高さに達した段階で物原の形成を終えている。



物原Ⅴ

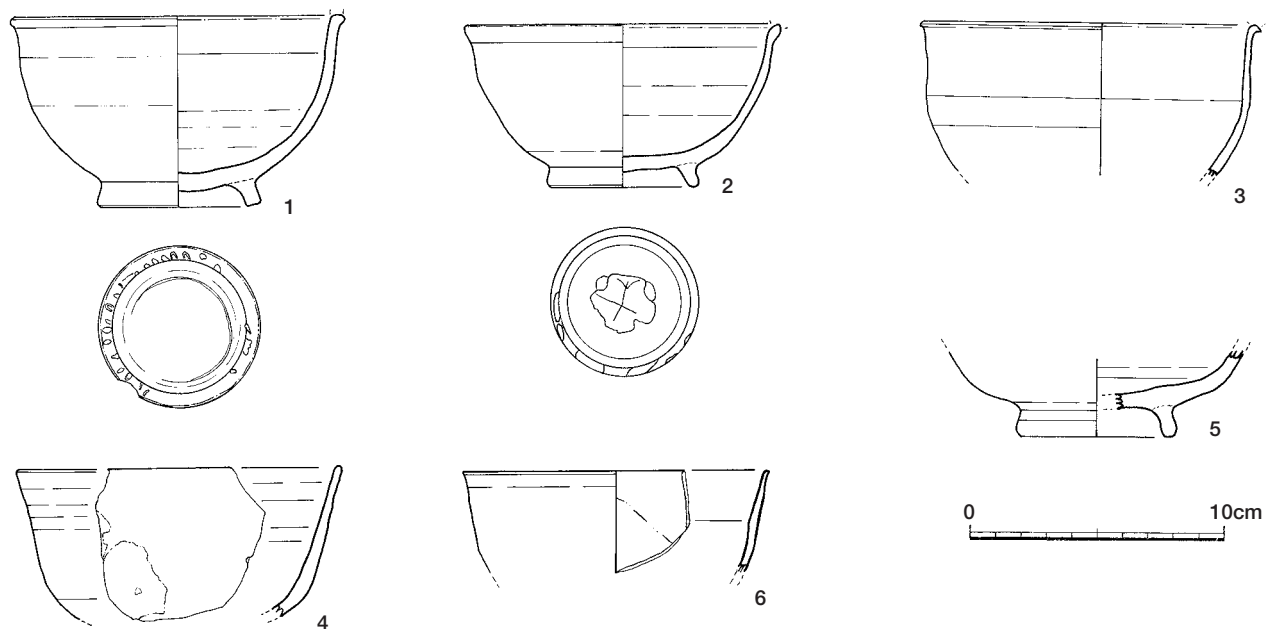


第68図 物原Ⅵ土層断面図



物原Ⅴ・Ⅵ土層断面位置図

- ① 褐色土 赤色塊まじり
- ② 赤色土
- ③ 黒色土
- ④ 褐色土 窯壁等含む
- ⑤ 褐色土 窯壁・陶片含む
- ⑥ 赤色土 窯壁含む
- ⑦ 黒色土
- ⑧ シラス
- ⑨ シラス混土
- ⑩ 黒色土



第69図 物原Ⅰ出土遺物(1)碗

物原Ⅰ内出土遺物

物原Ⅰからは、碗・蓋・水注・徳利・片口・播鉢・甕・壺・貝殻等が出土している。貝殻は特に図化しなかったが（第3分冊写真図版102参照）、窯詰め時に使用するものと考えられる。出土遺物の器壁は薄く仕上げられ、内面に同心円状のタタキ目が残る資料が目につく。また、甕・壺等の口唇部には貝目が残る。胎土は緻密でよく焼き締まっている。釉薬は緑褐色系の発色する灰釉や褐色系に発色する鉄釉がかけられている。物原Ⅰ内の出土遺物も朝鮮の様相を残す遺物である。

しかしながら、本窯跡で初期に生産されたと考えられる溝内出土遺物と比較すると、若干器壁が厚くなる傾向が見られ、甕・壺等の口縁部のつくりもややシャープさに欠ける。法量的にも大きくなり、さらに植木鉢等の溝内出土遺物の中では見られなかった製品も確認され、器種が増え始める傾向が見られる。

物原Ⅰ内の出土遺物は、溝内出土遺物に引き続く時期の製品と考えられる。

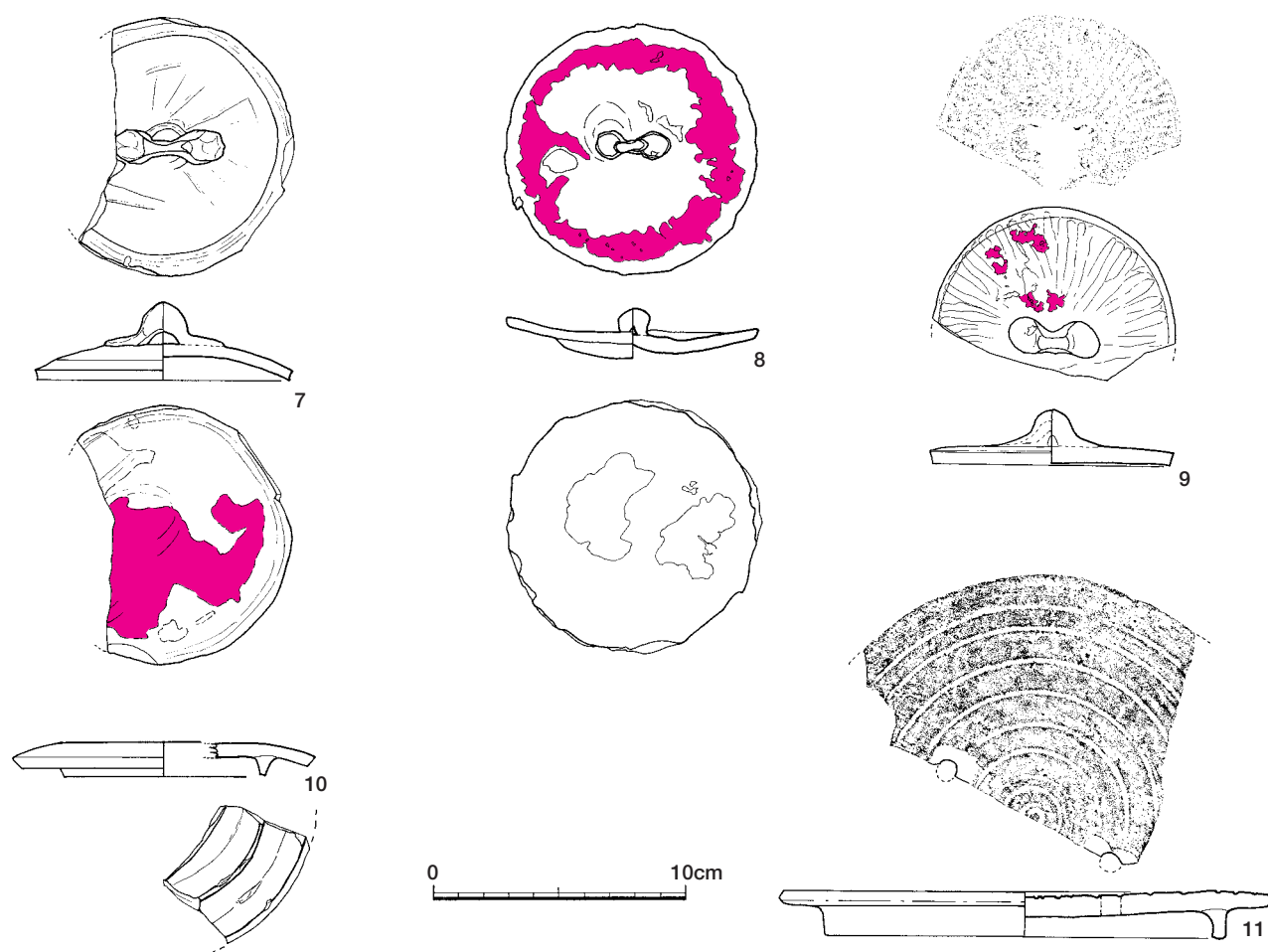
碗（第69図）

1・2は、腰部はやや膨らみ、口縁部で僅かに外反する器形を呈する。高台は付け高台である。釉は口唇部を除き全面施釉され、口唇部の釉は、拭い取られている。1は畳付に貝目が残る。2は、高台内面には、白色の目跡のような痕跡と細い「十」字状の釘彫りが看取され、畳付には貝目が残る。3・4は、口縁部のみの資料である。3は、内外面に暗褐色に発色する灰釉がかかり、口唇部の釉は拭い取られる。4は、焼成不良のため釉も灰緑色を呈する。胴部外面に、一部釉がかからない部分が見られる。5は、腰部の屈曲がやや強いタイプの碗の底部である。残存部は畳付を含め、総釉である。

6は、白色陶胎の碗の口縁部である。透明釉が内外面に掛かるが、一部淡緑色に発色する部分があり、ここは良品であれば褐色に発色する碗の「景色」の部分であると思われる。

第33表 物原Ⅰ 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	物原ⅠIE	13.2	6.4	7.5	褐灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	畳付に貝目
2	碗	物原Ⅰイ	—	5.9	6.4	黒褐色	灰釉 暗緑色	口唇部以外全面施釉	高台に貝目 高台内面にハマの目跡・釘彫り
3	碗	物原Ⅰ	12.4	—	—	暗赤色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
4	碗	物原Ⅰ	12.8	—	—	にぶい赤褐色	灰釉か？ 灰緑色	残存部全面施釉	焼成不良
5	碗	物原Ⅰ2D	—	6.3	—	灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
6	碗	物原Ⅰ	12.0	—	—	灰白色	透明釉 緑黄色	残存部全面施釉	



第70図 物原Ⅰ出土遺物(2)蓋

蓋（第70図）

甕・壺に被せる逆浅鉢型の器形以外のものを、一括して掲載する。円板状の器形を呈し、上面中央につまみを付けるものと、円板状の体部の下面に、粘土紐を輪状に貼り付けて、身受け部をつくるものとの、2種類に分けることができる。

7～9は、円板状の器形を呈し、上面中央につまみを付けるものである。粘土を叩いて平坦にのぼし、轆轤を使い先の鋭い工具で、円形に切り抜いて作られたものと思われる。そのため、蓋の端部はシャープな作りとなり、上面には、タタキ目が残る。全て無釉である。

7は、上面端部が一段低く削り取られている。下面に

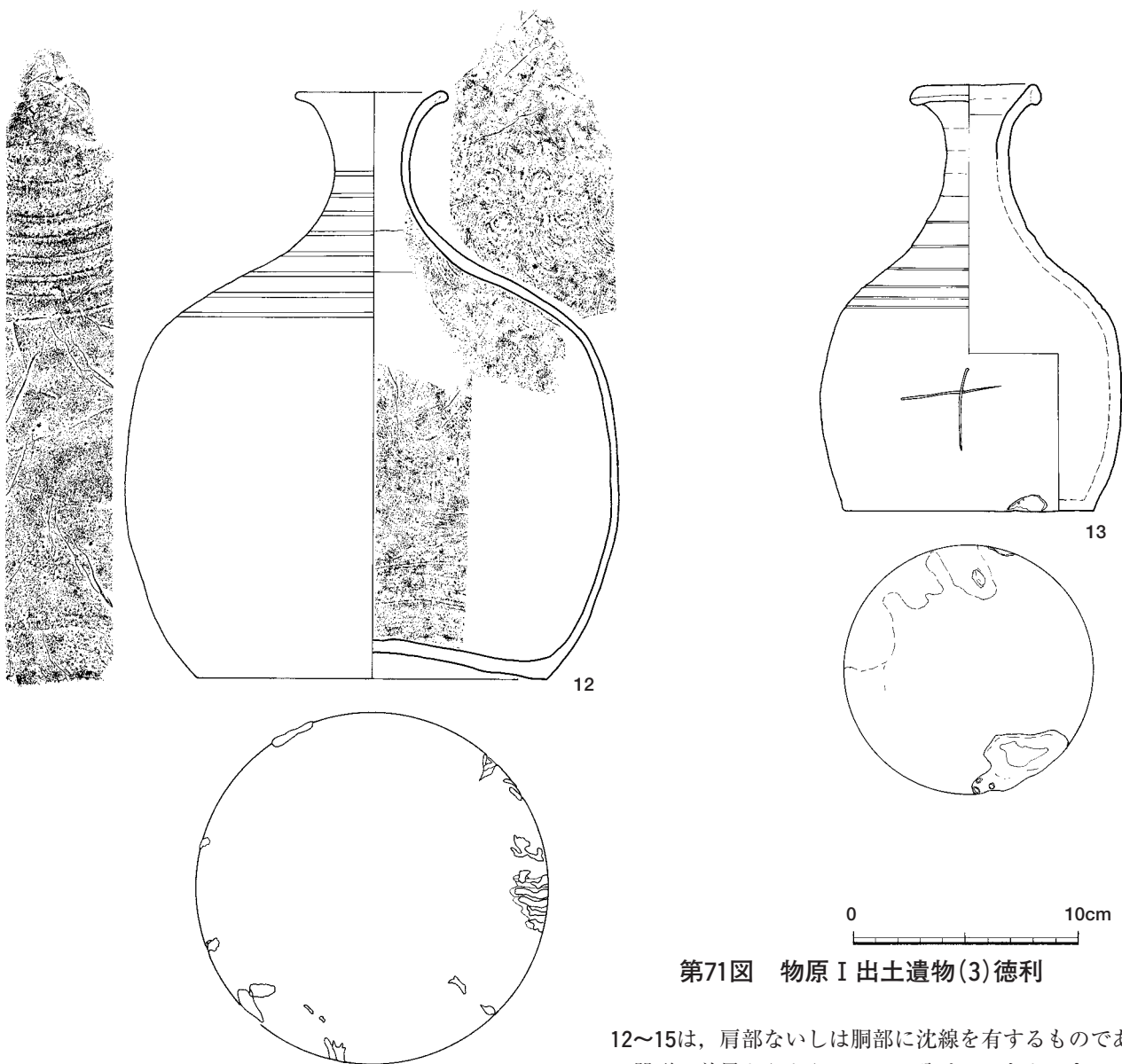
は、黄褐色の目跡が残る。8は、焼き歪みが見られる資料で、上面下面ともに濁った白色の目跡が見られる。9は、上面のタタキ目が、明瞭に看取される資料である。上面には、濁った白色の目跡が残る

10・11は、下面に輪状の粘土紐を貼り付け、身受け部をつくるものである。

10は、上面に黄褐色の目跡が、下面の身受け部に貝目が残る資料である。無釉である。11は、大型のものである。上面のみ黒色の鉄釉が掛かり、同心円状の沈線が9条施される。また、上面中心部付近に、紐等を通すためか、2か所穿孔が施される。

第34表 物原Ⅰ 遺物観察表 2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	つまみ径	器高				
7	蓋	物原Ⅰイ	10.0	4.8	0.5	にぶい赤褐色	無釉	—	下面に黄白色の目跡
8	蓋	物原Ⅰ2Dウ	10.0	2.9	0.4	にぶい赤褐色	無釉	—	上面に白色の目跡
9	蓋	物原Ⅰ	9.6	3.5	0.5	黒褐色	無釉	—	上面にタタキ目・目跡
10	蓋	物原Ⅰ	12.0	—	0.4	黒褐色	無釉	—	
11	蓋	物原Ⅰイ	19.4	—	0.8	にぶい褐色	鉄釉 緑褐色	上面のみ施釉	上面に沈線有す



第71図 物原Ⅰ出土遺物(3)德利

德利（第71～74図）

大・小2種類の大きさが見られるが、そのほとんどはいわゆる「舟德利」と呼ばれる器形で、胴部下半に最大径を有する。粘土紐を巻き上げてつくられており、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。口縁端部は外側に折り返して丸くおさめる。玉縁のように断面三角形状におさめるものも見られる。

肩部ないしは胴部の沈線の有無により、大きく2種類に分けることができる。

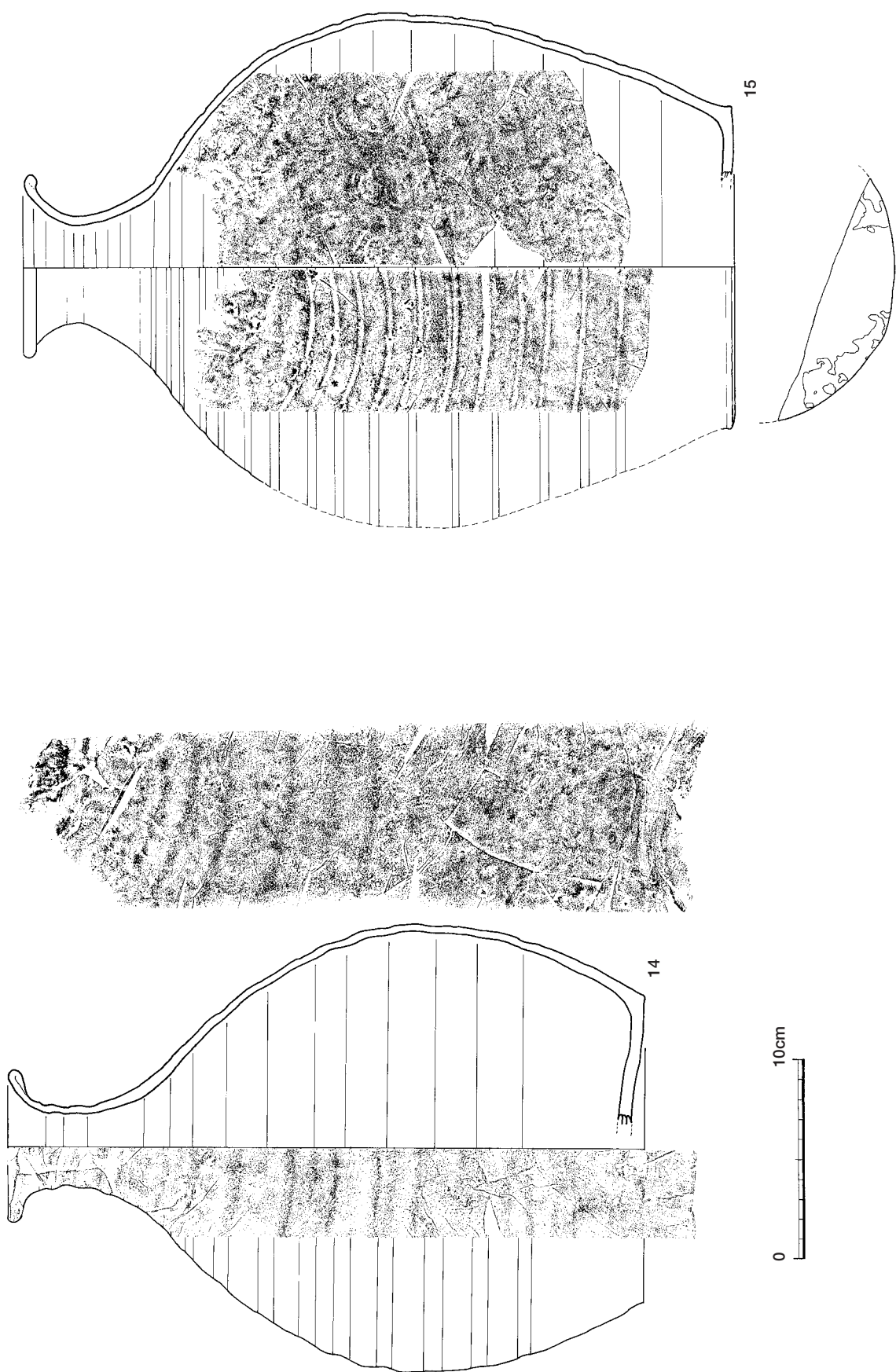
12～15は、肩部ないしは胴部に沈線を有するものである。器形の差異からさらに2つに分けることができる。

12はやや張った肩部に、8条の沈線を有するものである。外底面には貝目が残る。13はやや張った肩部に、7条の沈線を有するものである。外面胴部には「十」字状の釘彫りが施されている。

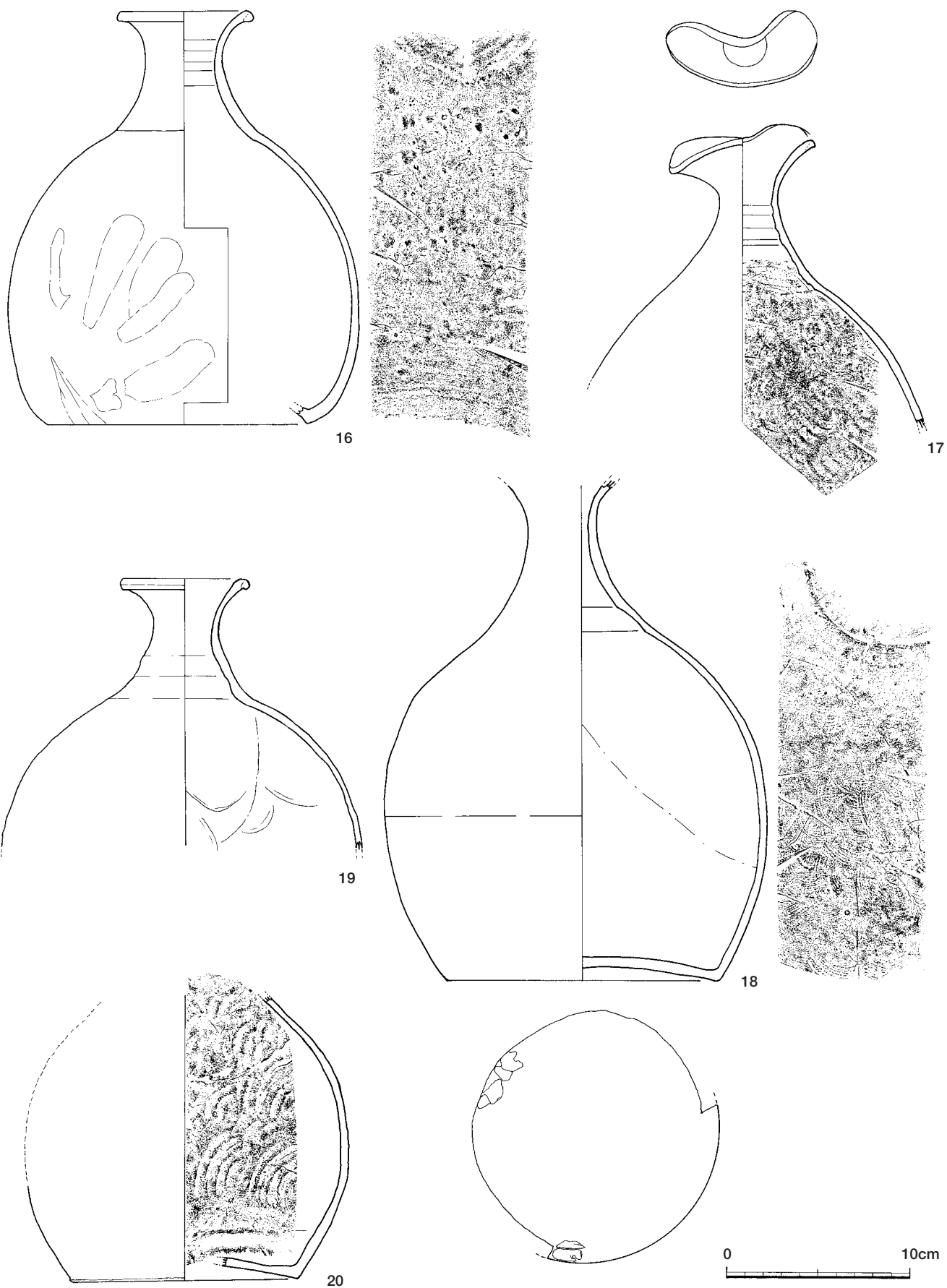
14・15は大形で、胴部中位に最大径を有するものである。12・13と比べて胴部が縦長の形状を呈する。14は、粘土紐を巻き上げて製作した痕跡が、胴部に段状になって残る。15は、胴部全体に沈線を有するもので、外底面にはハマの目跡と思われる痕跡が残る。

第35表 物原Ⅰ 遺物観察表 3

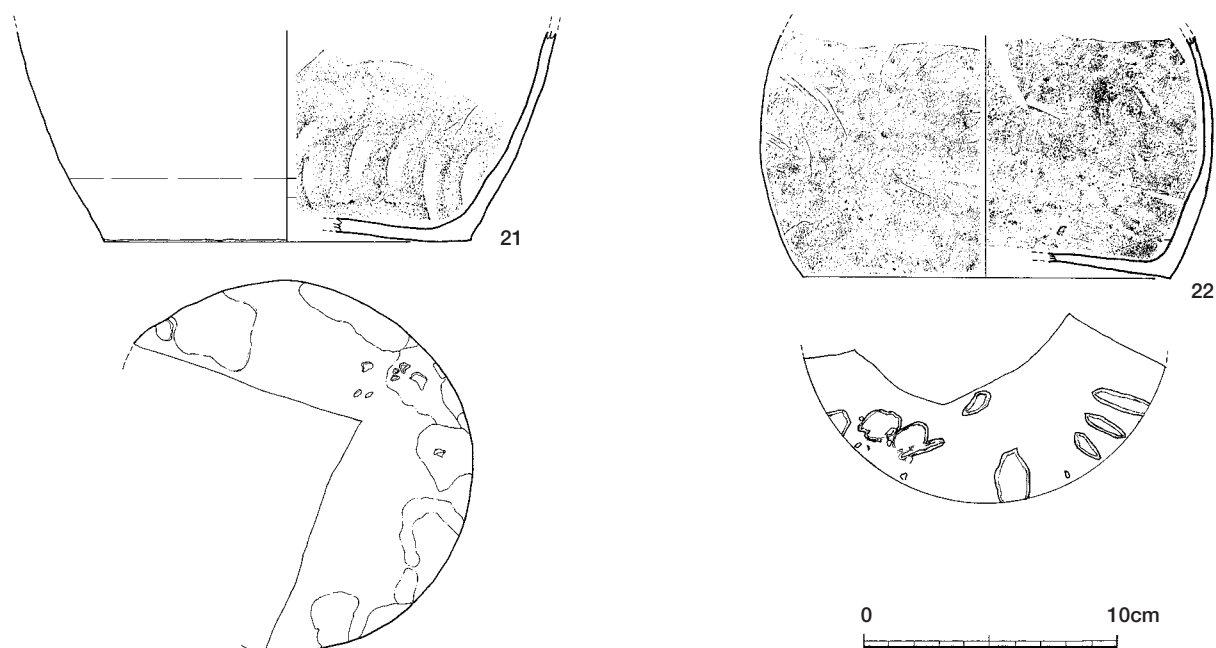
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
12	德利	物原Ⅰイ	6.6	15.5	26.0	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 内面同心円状タタキ 外底面に貝目
13	德利	物原ⅠID	5.0	11.2	18.9	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 胴部に釘彫り
14	德利	物原Ⅰウ	7.0	15.4	32.0	灰褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
15	德利	物原Ⅰイ	11.2	16.2	35.5	灰褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目



第72図 物原 I 出土遺物(4)徳利



第73図 物原 I 出土遺物(5)德利



第74図 物原Ⅰ出土遺物(6)徳利

16～22は、肩部ないしは胴部に沈線を施さないタイプの資料である。

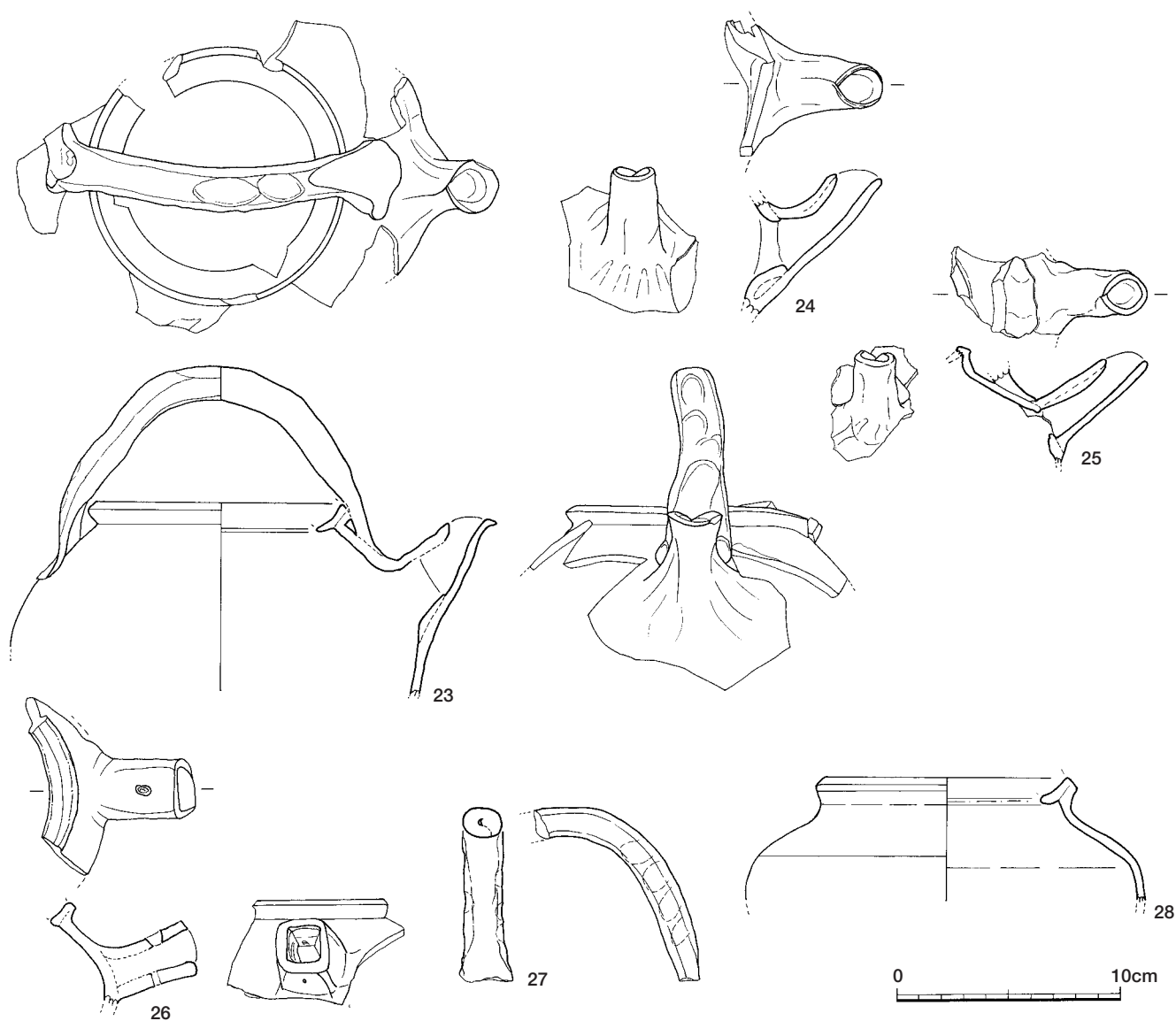
16は、黒褐色の鉄釉がかけられた外面胴部に手形の痕跡が残る資料である。施釉時に胴部にふれたため残ったものと思われる。外面の胴部と頸部の境には強い稜線が入る。17は、口縁部に焼き歪みが見られる。残存部は内外面とも、黒褐色の鉄釉がかかる。内面には、タタキ成形による同心円状のあて具痕が強く残る。18は、口縁端部が欠損している資料である。内面頸部付近に一部釉垂れが見られるものの、基本的には施釉されておらず、粗くない同心円状のタタキ目が残る。外底面には貝目と思われる痕跡が残る。19も18と同様に、内面は施釉されていないものである。

20～22は、胴部から底部にかけての資料である。

20は頸部以上が欠損する資料で、内面はタタキ成形による同心円状のあて具痕が強く残り、無釉である。21は胴部中位から底部にかけて残存するものである。内面下位には同心円状のタタキ目が強く残る。釉は、内外面ともに黒褐色の鉄釉がかけられる。また、外底面には置台の痕跡と思われる黄白色の痕跡が残る。22は、外底面にイタヤガイを使用した貝目が残る。残存部内面は施釉されない。

第36表 物原Ⅰ 遺物観察表 4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
16	徳利	物原Ⅰウ	6.7	14.0	22.5	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	外面胴部に手形の痕跡 内面に同心円状タタキ目
17	徳利	物原Ⅰ2Dウ	8.0	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	口縁部変形 内面に同心円状タタキ目
18	徳利	物原Ⅰアイ	—	14.8	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	外面全面と内面 上部に施釉	内面に同心円状 タタキ目
19	徳利	物原Ⅰイ	7.0	—	—	黒褐色	灰釉 緑褐色	外面全面と内面 上部に施釉	内面に同心円状 タタキ目
20	徳利	物原Ⅰウ	—	12.4	—	灰褐色	灰釉 黒褐色	外面全面と内面 上部に施釉	内面に同心円状 タタキ目
21	徳利	物原Ⅰ2C	—	14.5	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目 外底面に貝目
22	徳利	物原Ⅰ2E	—	14.5	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	外面に平行タタキ目 内面に同心円状タタキ目 外底面イタヤガイの貝目



第75図 物原Ⅰ出土遺物(7)水注

水注（第75図）

出土量は多くない。液体を注ぐ用途にもちいられたものと思われる。注口は巻き口で、体部との接合は、胴部に切り込みを入れ注口内部に折り曲げ、なでつけており、接合部には段が確認できる。口唇部には蓋受け部を有す。把手の形状により2つに分けることができる。

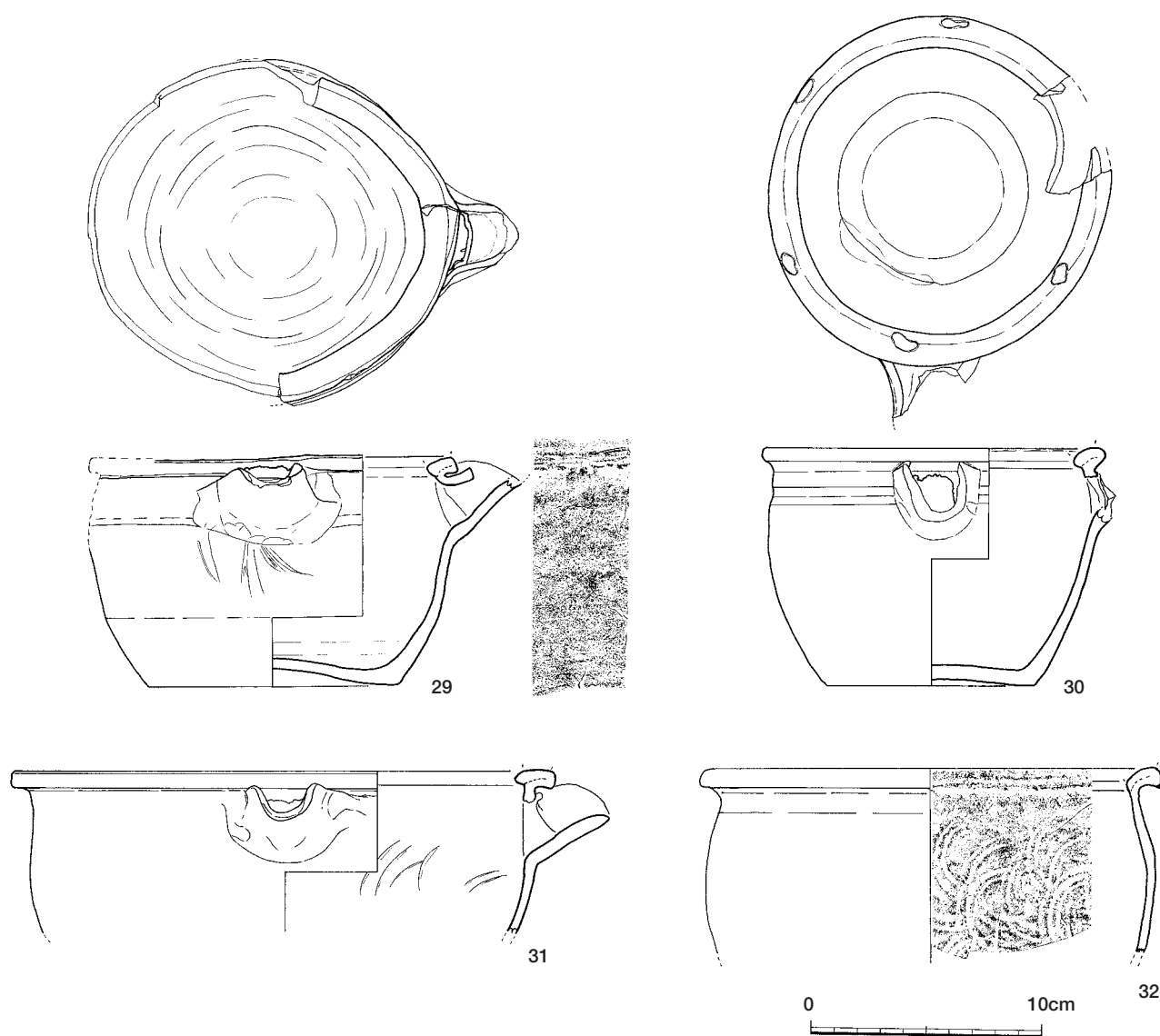
23～25は、陶製の把手が注口上部とその反対側にアーチ状に付くものである。注口接合部の外面には、ヘラ状工具で撫でつけた痕跡が残る。

26は、胴部外面に方形で筒型の把手が付く資料である。把手は握って使用するには、やや短めであるため、木製の棒などを差し込んで柄を長くして使用したものと思われる。把手の中央には差し込んだものを釘等で留めるための穿孔が施されている。

27は、把手部分である。粘土を「の」の字状に巻いて製作しているものと考えられ、中心部に隙間が見られる。28は、水注に分類したが、壺の可能性も考えられる。

第37表 物原Ⅰ 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
23	水注	物原Ⅰイ	11.0	—	—	褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
24	水注	物原Ⅰ	—	—	—	にぶい橙	鉄釉 赤褐色	外面のみ施釉	注口部分
25	水注	物原Ⅰウ	—	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	注口部分
26	水注	物原Ⅰ	—	—	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	口唇部の一部のみ無釉	把手部に穿孔あり
27	水注	物原Ⅰウ	—	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	把手部のみ
28	水注	物原ⅠイF	11.6	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	



第76図 物原Ⅰ出土遺物(8)片口

片口（第76図）

片口の出土量はそれほど多くない。口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に折り返して丸くおさめる。

口径の大きさにより、2つに分けることができる。

29・30は口径が15cm以下の小形の資料である。口縁部にやや歪みが見られる。外底面には黄白色のハマの目痕と思われる痕跡が残る。29は、内面に同心円状のタタキ目が看取され、釉は暗緑褐色の灰釉が口唇部以外全面に

かかる。30は、口唇部に胎土詰貝目が残る。釉は、黒褐色の鉄釉が口唇部を除き全面にかかる。

31・32は、口径が20cmを超える大形の資料である。どちらも小形のものと比べて器壁が薄手である。31は、胴部と片口部の接合部の仕上げが丁寧である。32は、内面にタタキ成形による同心円状のあて具痕が明瞭に残るものである。片口部は欠損している。

第38表 物原Ⅰ 遺物観察表 6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
29	片口	物原Ⅰ2E	—	10.8	9.9	灰褐色	灰釉 暗緑褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に目跡
30	片口	物原Ⅰ	14.9	9.1	10.3	にぶい橙	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
31	片口	物原Ⅰウ	23.5	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
32	片口	物原Ⅰウ	20.0	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	

播鉢（第77～81図）

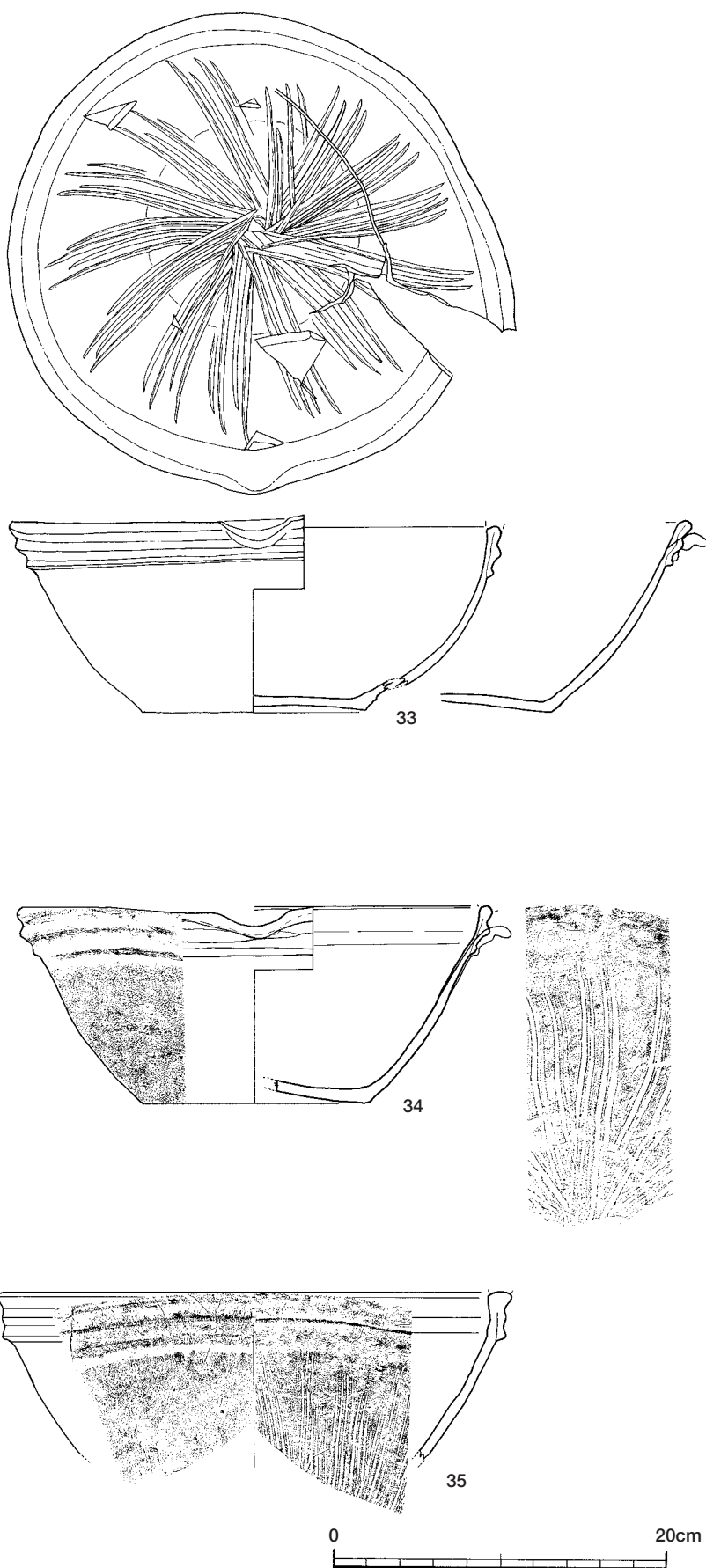
一般的な器形としては、体部が「逆ハの字」に開き、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2～3条の突帯をつくる。口唇部は、丸くつくるものや、やや丸みを帯びるが平坦なものがあり、丸くつくられるものには貝目は見られない。平坦なものには、貝目が残るものと残らないものが見られる。外底面には、貝目や黄褐色のハマの目跡と思われる痕跡が看取される。

成形は、轆轤の上で粘土紐を輪積みにして巻き上げ、タタキ成形を行っているが、内外面ともにあて具痕は見られず、ヘラ状工具による削り調整を施したため消されているものと思われる。

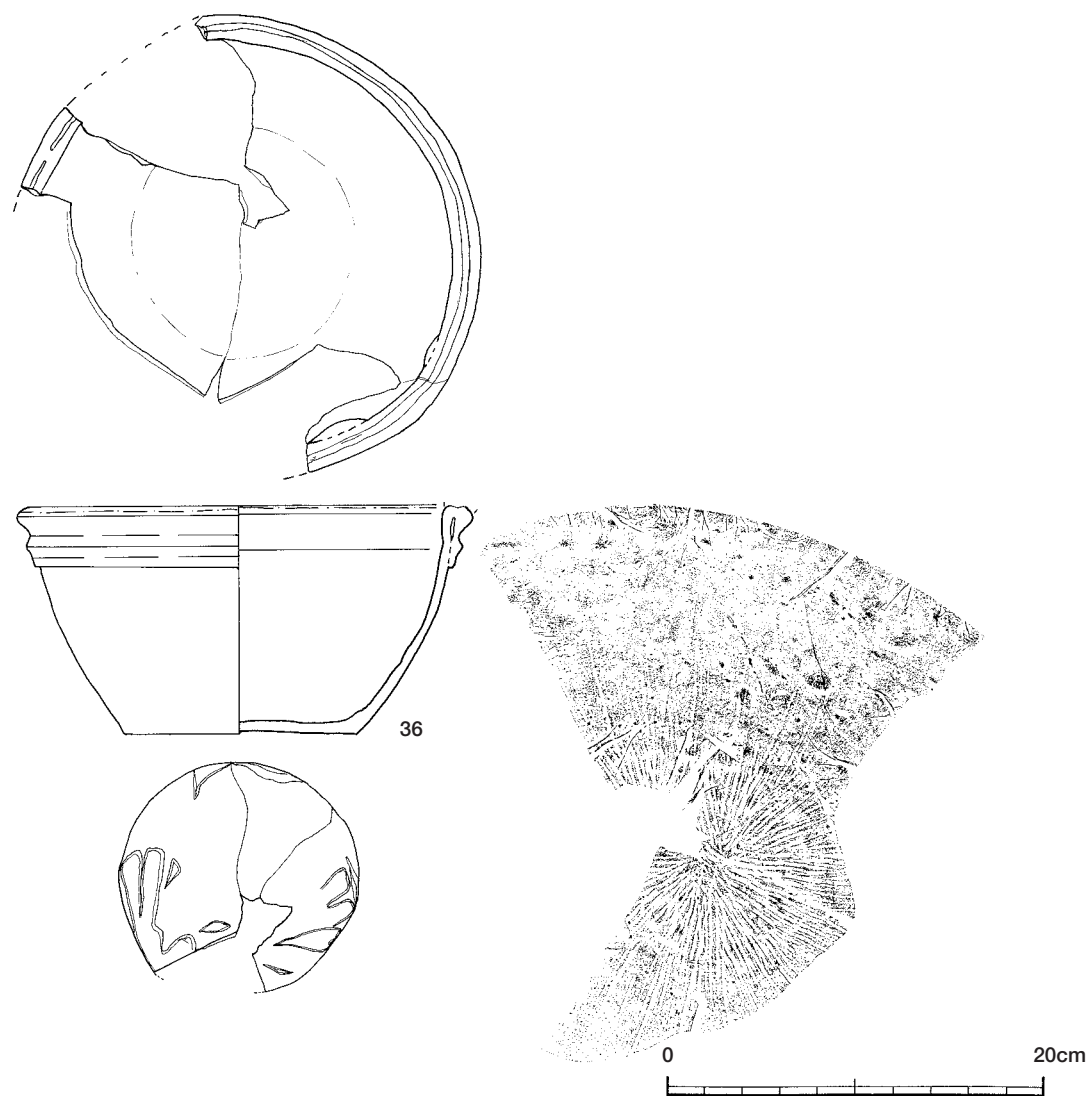
口唇部の形状から、口唇部が丸くつくられるものと、やや丸みを帯びるが平坦につくられるもの、ほぼ平坦につくられるものの3つに分けることができる。

33・34は、口唇部丸くつくられるものである。どちらも器壁は薄手であるが、焼成は不良で釉の発色も悪く焼き歪みも激しい。釉は、灰黄色に発色した薄い灰釉が口唇部を除き全面に施釉される。播り目は、粗く雑に施されており、内底面中心からやや左方向に流れるように放射状に掻き上げられ、口縁下位には余白を残す。播り目の形状等から同じ工具を使用したものと思われ、大きさの規格やつくり癖も同じであることから同一の陶工が製作した製品の可能性が考えられる。34は、外面にタタキ成形時のあて具痕が看取される。

35～37は、口唇部がやや幅広になり、丸みを帯びるものである。



第77図 物原 I 出土遺物(9)播鉢

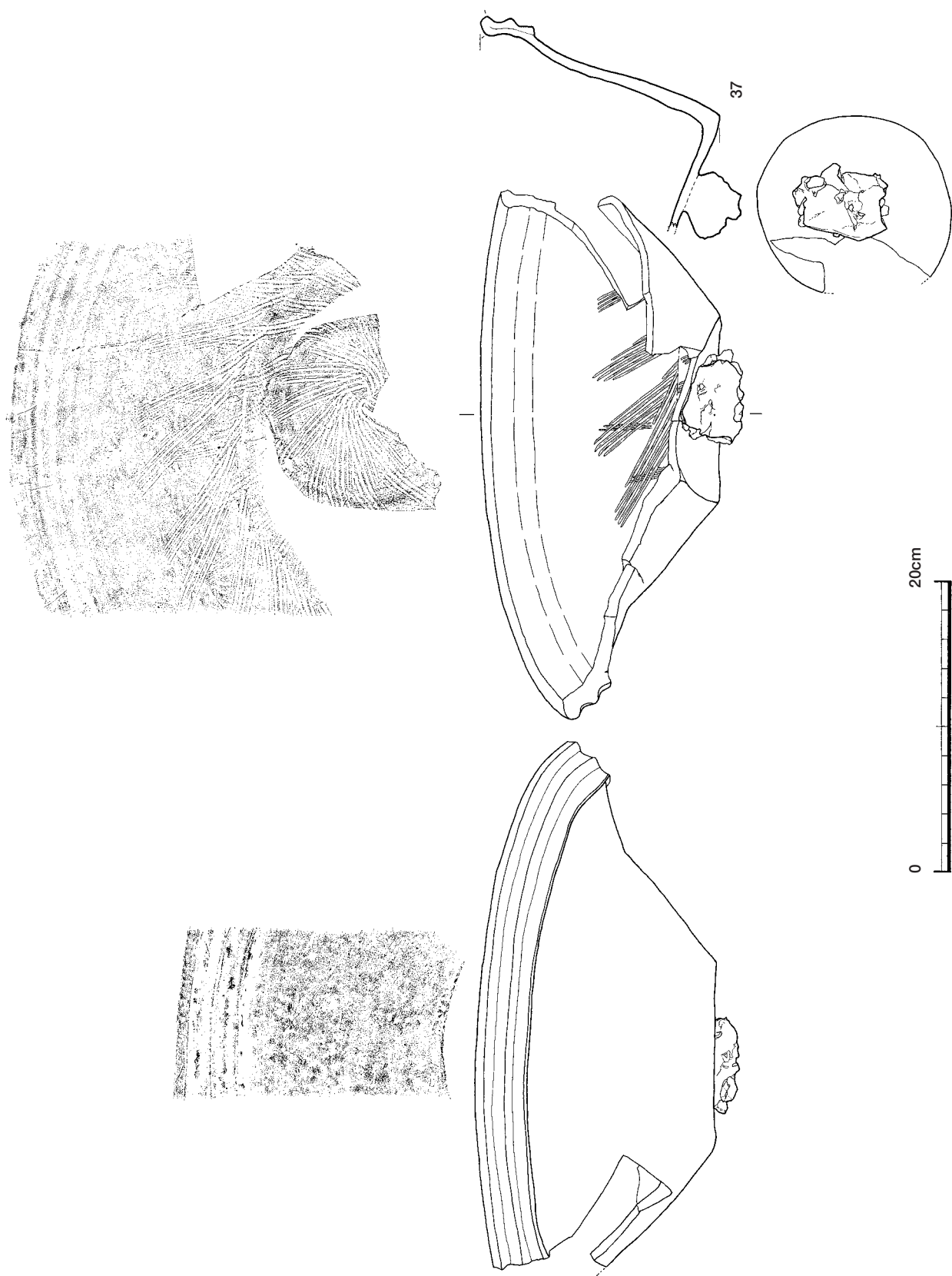


第78図 物原Ⅰ出土遺物(10)播鉢

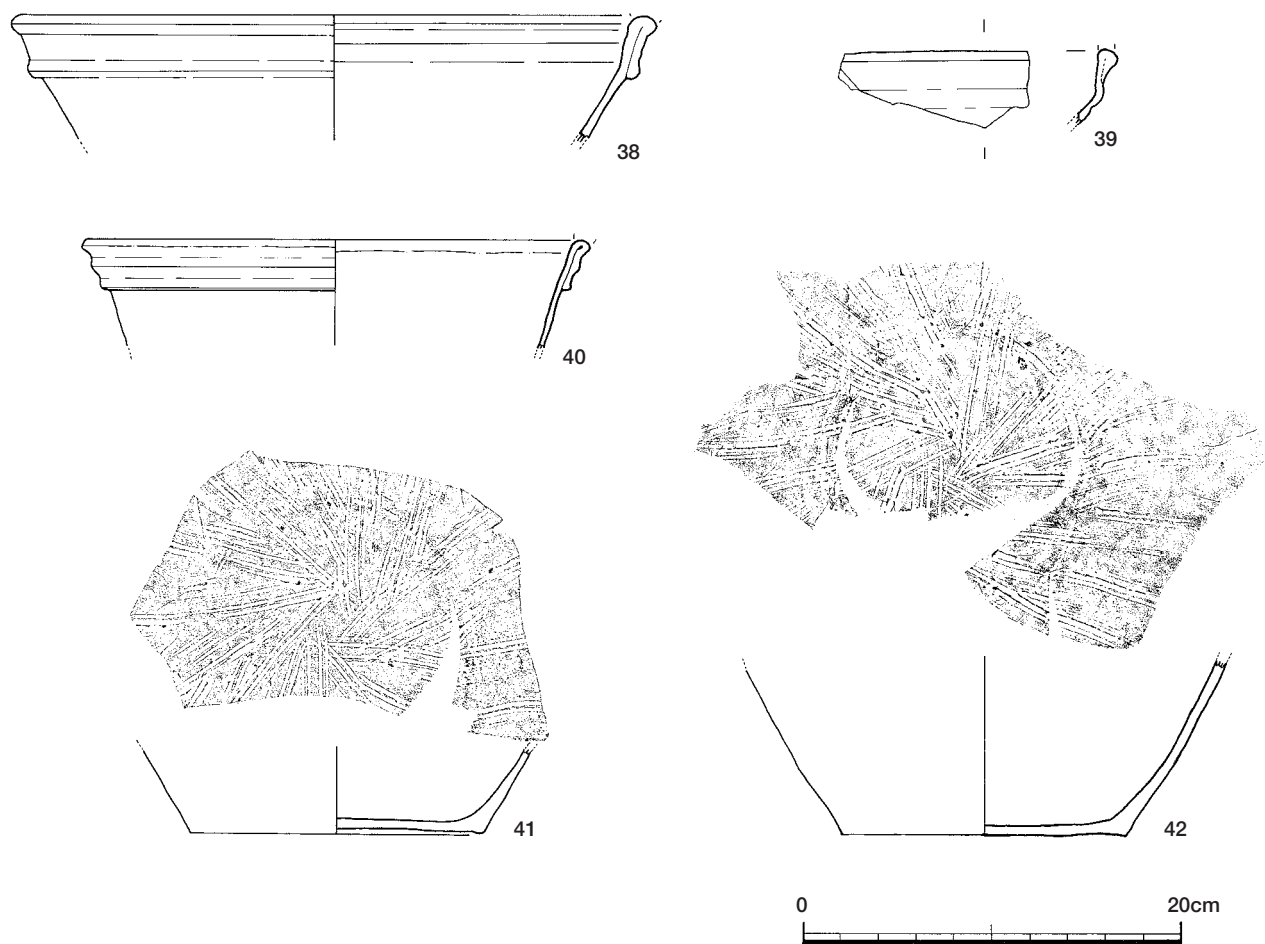
35は、口縁部がやや内湾するもので、口唇部には貝目は見られない。播り目は粗く入れられるが、太さは細くシャープである。口唇部以外残存部全面に施釉される。
36は、光沢の強い黒褐色に発色した鉄釉が、口唇部を除き全面にかかる資料である。焼き歪みも見られる。焼成は合わせ口で窯詰めしたものと考えられ、口唇部に、他の製品の口唇部痕が残る。外底面にはイタヤガイと思われる貝目が看取される。

第39表 物原Ⅰ 遺物観察表 7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
33	播鉢	物原Ⅰイ	29.4	13.3	—	にぶい黄色	灰釉	灰黄色	口唇部以外全面施釉	
34	播鉢	物原Ⅰ2C	—	13.6	—	褐灰色	灰釉	灰黄色	口唇部以外全面施釉	
35	播鉢	物原Ⅰテスト トレンチ	30.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	黄褐色	口唇部以外全面施釉	
36	播鉢	物原Ⅰ2D E	—	12.5	—	赤褐色	鉄釉	黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面イタヤガイ貝目



第79図 物原 I 出土遺物(11)播鉢



第80図 物原 I 出土遺物(12)擂鉢

37は、器壁が厚手で、焼き歪みの激しい資料である。釉は、黒褐色に発色した鉄釉が口唇部を除き全面にかけられる。口唇部には貝目は見られない。外底面には断面が楔形で平面が三角形の形状をしたハマが熔着する。擂り目は、まず内底面に中心から放射状に施し、次に側面下位から斜め上方向に掻き上げ、口縁部の下には余白を残す。

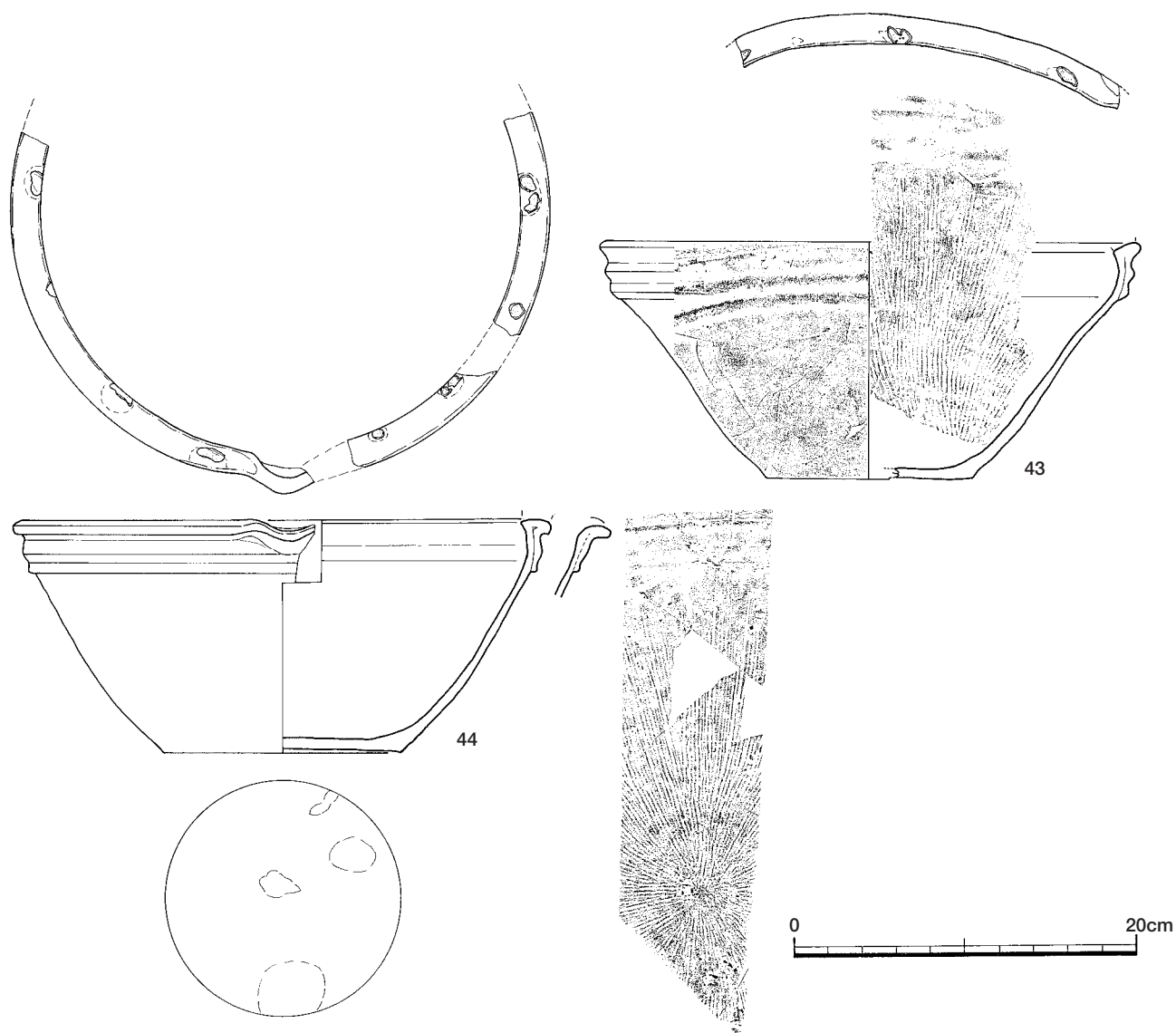
38～40は、口縁部の資料である。内面の擂り目は上位で余白を残すタイプのものであるため、先端の一部が看

取される。3点とも口唇部の釉は拭い取られており、口唇部には貝目は見られない。38・39は外面口縁部下位の突帯が、1条のものである。40は、口唇部が丸くつくられるものである。

41・42は底部のみの資料である。どちらもやや焼成不良のため、釉の発色が悪く、施釉されていないように見える。擂り目は粗く雑に入れられている。外底面には、黄白色のハマの目跡と思われる痕跡が看取される。

第40表 物原 I 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
37	擂鉢	物原 I ウ	—	—	—	黒褐色	鉄釉	黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面にハマ熔着
38	擂鉢	物原 I イ	—	—	—	灰黄褐色	鉄釉	黒褐色	口唇部以外全面施釉	
39	擂鉢	物原 I ウ	—	—	—	褐灰色	灰釉	褐灰色	口唇部以外全面施釉	
40	擂鉢	物原 I	26.8	—	5.7	褐灰色	灰釉	黒褐色	口唇部以外全面施釉	
41	擂鉢	物原 I ウ	—	15.4	—	灰色	灰釉	褐灰色	残存部全面施釉	内面に白色の目跡
42	擂鉢	物原 I ウ VI	—	15.0	—	にぶい黄褐色	灰釉	緑黒色	残存部全面施釉	



第81図 物原 I 出土遺物(13)播鉢

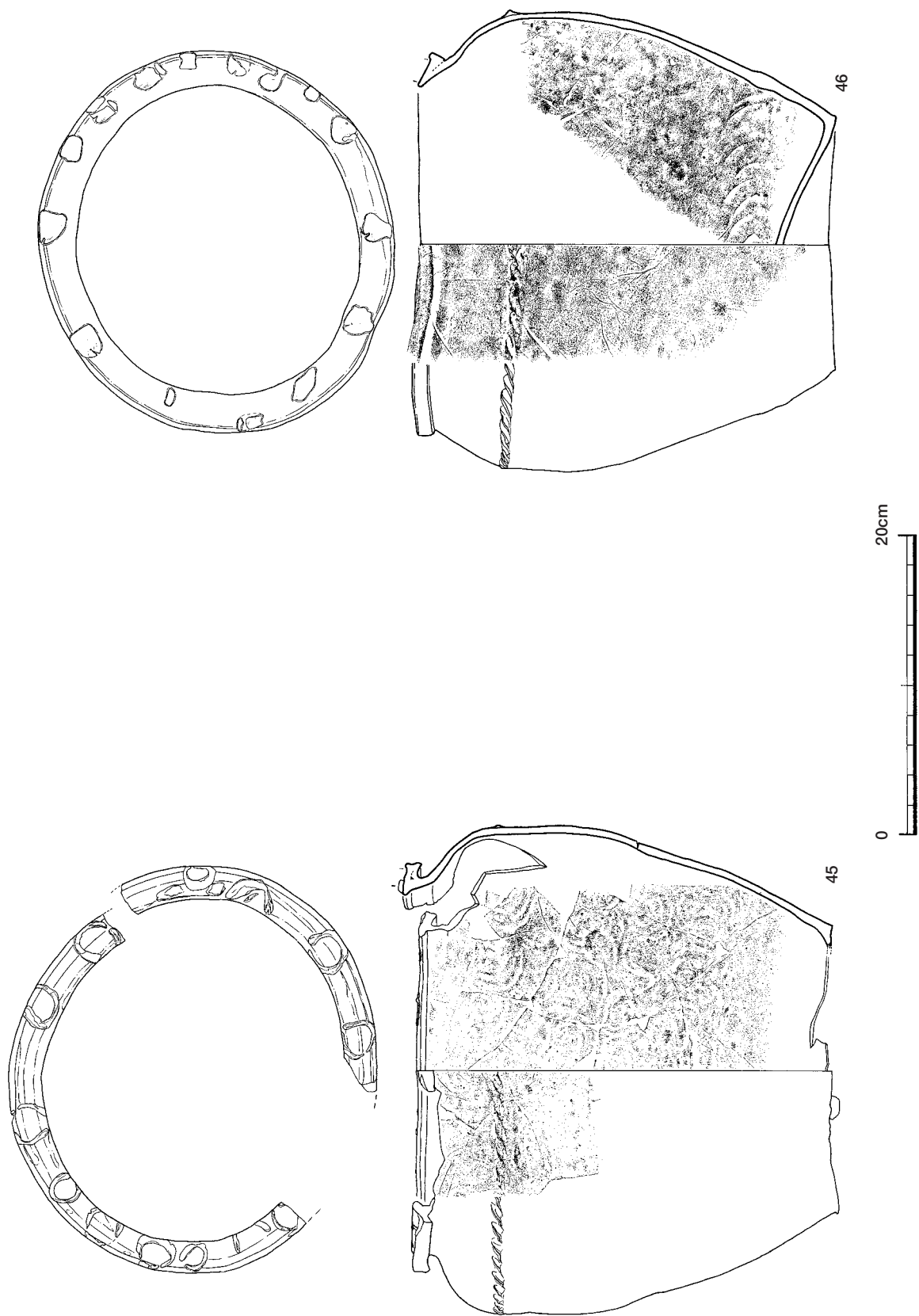
43・44は、口唇部に平坦な部分を有するものである。釉が拭い取られた口唇部には、小形の貝の内面に胎土を詰めて使用した胎土詰貝目が残る。口縁部は突帯を有する部分からやや内湾するため、内側に弱く窪んだ稜線が入る。播り目は細くシャープで、丁寧に密に施され、口縁部下位に余白を残す。

43は、光沢の強い褐色に発色した鉄釉が、口唇部を除

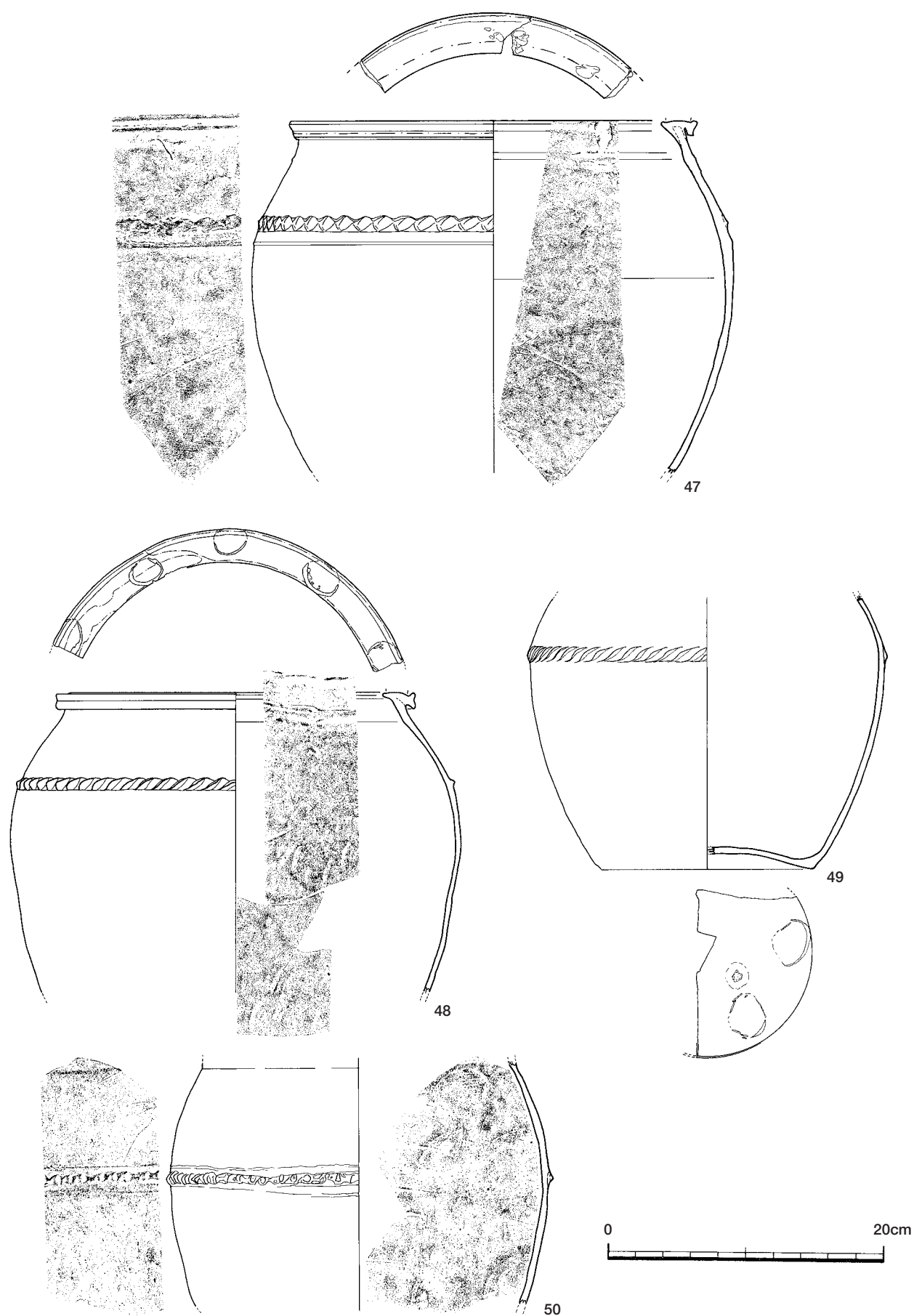
き全面に厚めにかかる。外面は厚くかかった釉のため分りにくい、ヘラ状工具により削り調整が施されており、その痕跡が胴部下位に看取される。44は、黒褐色に発色した灰釉が、口唇部を除き全面に施釉される。外底面には、黄白色のハマの目跡と思われる痕跡が残る。

第41表 物原 I 遺物観察表 9

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
43	播鉢	物原 I	31.4	13.8	13.4	暗赤褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外面胴部下位に削り調整痕
44	播鉢	物原 I ウ	16.6	12.0	13.8	にぶい黄橙色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外底面にハマ痕跡



第82図 物原 I 出土遺物(14)甕



第83図 物原 I 出土遺物(15)甕

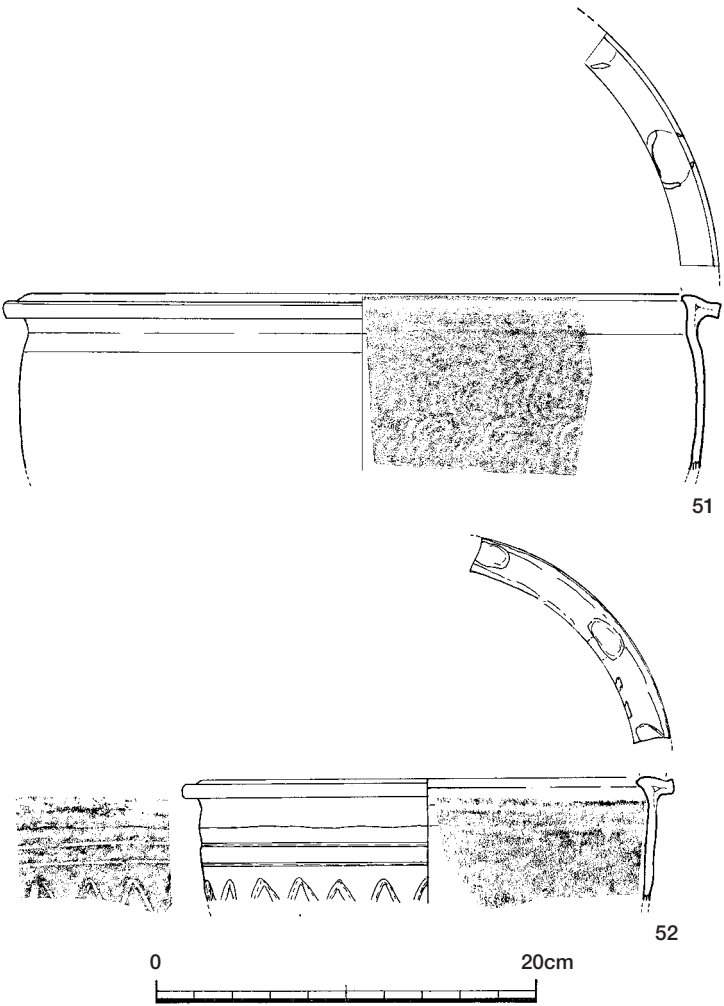
甕（第82～84図）

45～52は甕である。形状より肩部が張り、縄状の突帯を有するものとそれ以外の2つに分けることができる。

45～50は、肩部が張り、縄状の突帯を有するものである。45・46は、ほぼ完形に接合復元できた資料である。器壁が非常に薄く、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。溝内より出土した甕（第51図96）と比較すると、一回り大きく肩部の張りも強い。釉は、褐色の鉄釉が内外面とも厚めにかかり、口唇部のみ拭い取られる。また45の口唇部には、腹縁の貝目残り、46には胎土詰貝目が残る。

47は、縄状の突帯の下位に、さらに1条の突帯が巡るタイプのものである。口唇部には貝目が見られない。タタキ成形で製作されているが、内外面ともにナデ調整が施されているためか、タタキ目ははっきりしない。内面下位に同心円状のタタキ目がわずかに看取される。48は、器壁が薄く、内面に同心円状のタタキ目が強く残るものである。縄状の突帯もシャープで規則的に貼り付けられている。釉は薄くかかり、光沢はほとんど見られない。49は、口縁部が欠損している資料であるが、45と比べるとやや小形のものである。器壁が薄く、内面には同心円状のタタキ目がかすかに残るが、釉薬が厚くかかっているため明瞭ではない。突帯は、45と同様シャープで規則的なつくりである。また、外底面にも貝目が残る。50は胴部のみであるが、肩部があまり張らず、なで肩となるものである。縄状突帯の形状が不規則につくられ、上下には突帯を貼り付けた際についたと思われる痕跡が筋状に残る。

51・52は、胴部にふくらみを持たず、縄状の突帯も付かないタイプの資料である。口縁部付近のみの資料であるため全体的な器形は不明であるが、バケツ型を呈する



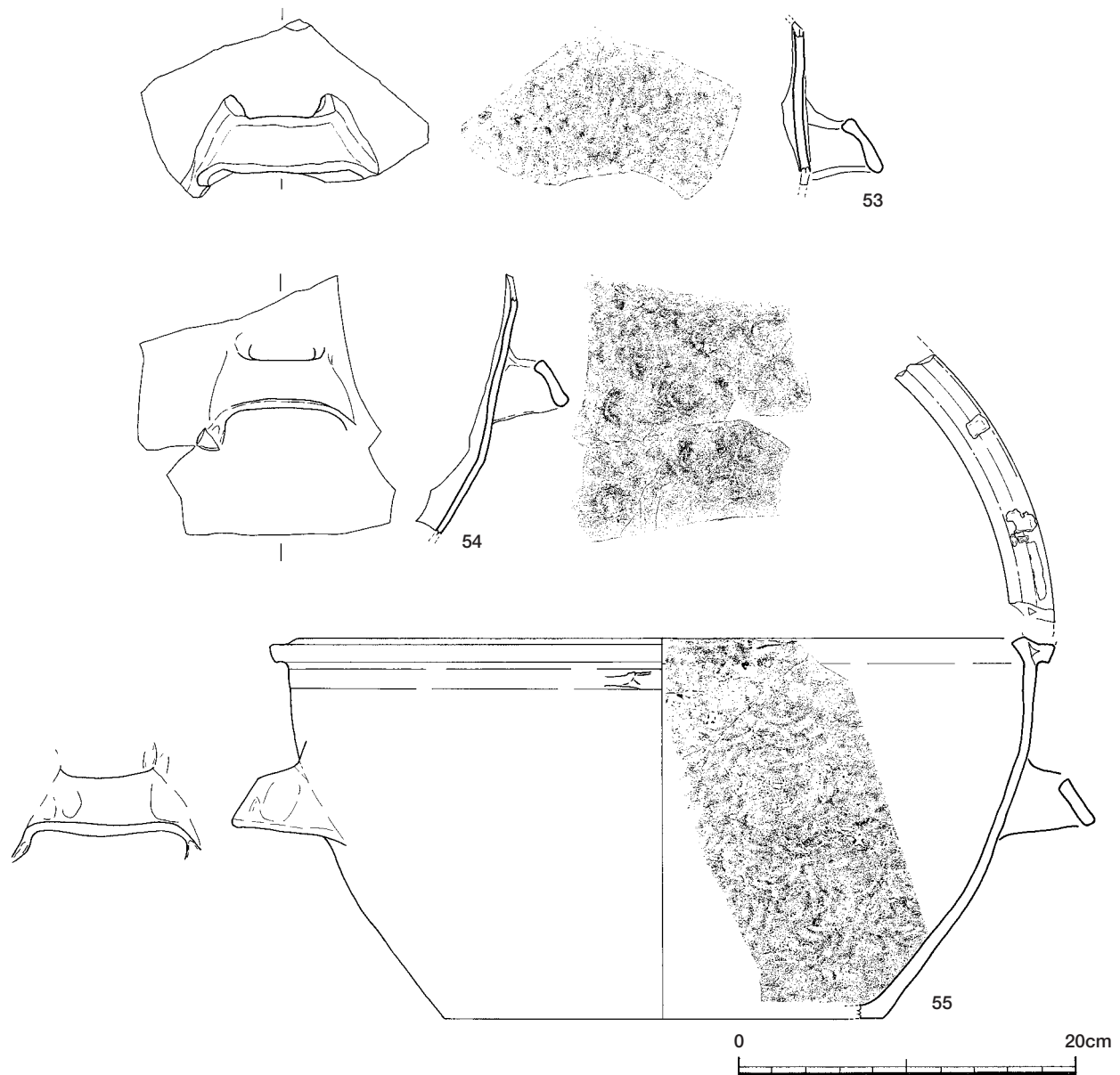
第84図 物原 I 出土遺物(16)甕

ものと思われるため、甕として分類した。どちらも口縁部は、外側に折り返して肥厚させ「T」字状につくる。折り返し部分には三角形の空間ができる。

51は、内面に同心円状のタタキ目が看取されるもので、甕としたが把手付甕の可能性も考えられる。52は、外面に2条の沈線と波状文が巡るものである。内外面には鉄釉がかかり、口唇部の釉は拭い取られ胎土詰貝目が残る。内面には同心円状のタタキ目が残る。

第42表 物原 I 遺物観察表10

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
45	甕	物原 I ウ	27.2	19.0	29.5	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目 口唇部に貝目
46	甕	物1ー I 2D	25.4	—	27.8	暗赤褐色	鉄釉 赤褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目 口唇部に貝目
47	甕	物原 I	29.4	—	—	灰褐色	灰釉 暗緑褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
48	甕	物原 I 2C	26.2	—	—	赤褐色	灰釉 暗緑褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
49	甕	物原 I ウ	—	15.4	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目
50	甕	物原 I	—	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
51	甕	物原 I イ	37.6	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
52	甕	物原 I	26.0	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外面に波状文 口唇部貝目



第85図 物原Ⅰ出土遺物(17) 把手付甕

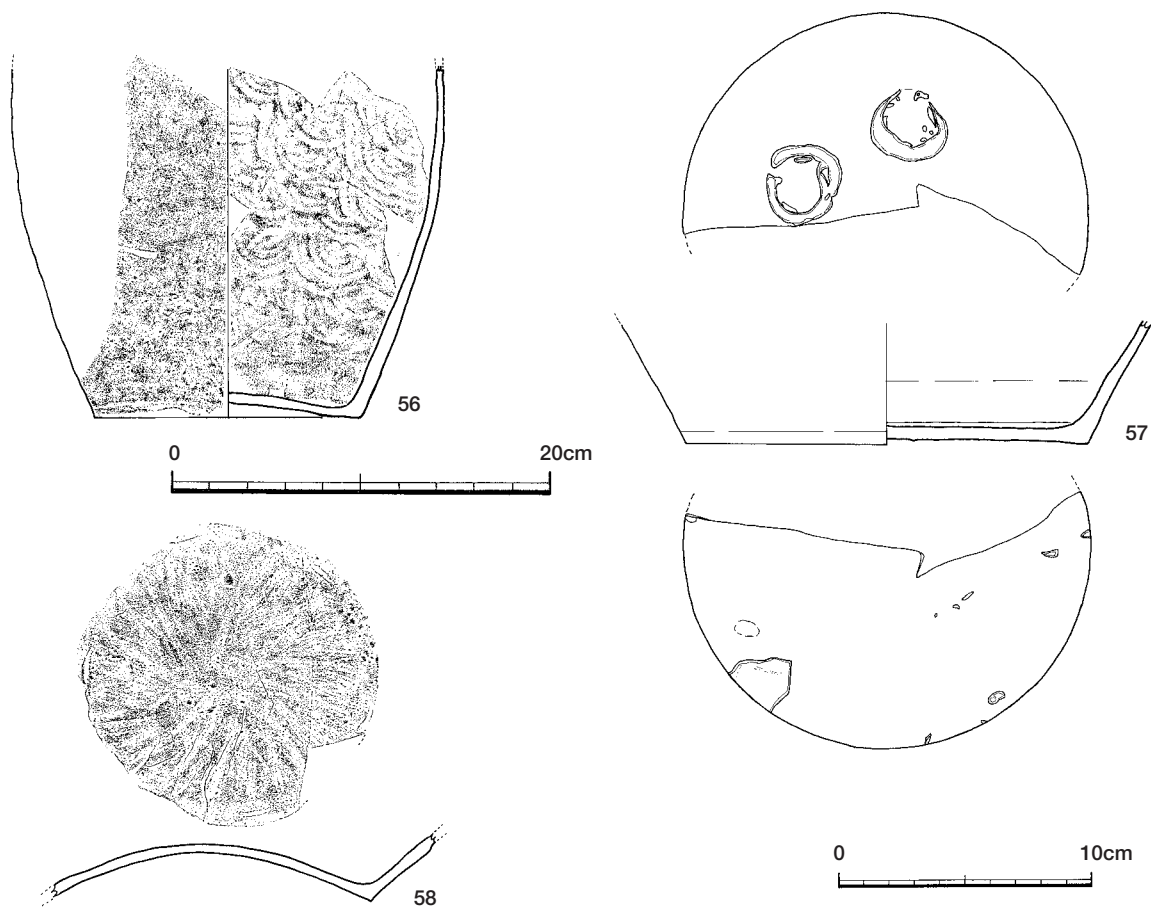
把手付甕（第85図）

53～55は、把手付甕である。53・54は把手部分である。上部が狭く下部が広くつくられている。53の内面には、やや大きめの同心円状のタタキ目が残る。55は胴部中位に2カ所把手が付く資料である。口縁部は、外側に折り

返して肥厚させ「T」字状につくあり、折り返し部分には三角形の隙間が看取される。釉は口唇部を除き全面に施釉され、口唇部には胎土詰目目が残る。

第43表 物原Ⅰ 遺物観察表11

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
53	甕	物原Ⅰウ	—	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	把手部 内面同心円状タタキ目
54	甕	物原Ⅰ2C	—	—	—	黒褐色	灰釉 暗緑褐色	残存部全面施釉	把手部 内面同心円状タタキ目
55	甕	物原Ⅰ2D	46.4	26.0	22.5	赤褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状タタキ目



第86図 物原 I 出土遺物(18)底部

底部（第86図）

56～58は、甕または壺の底部であると考えられる資料である。

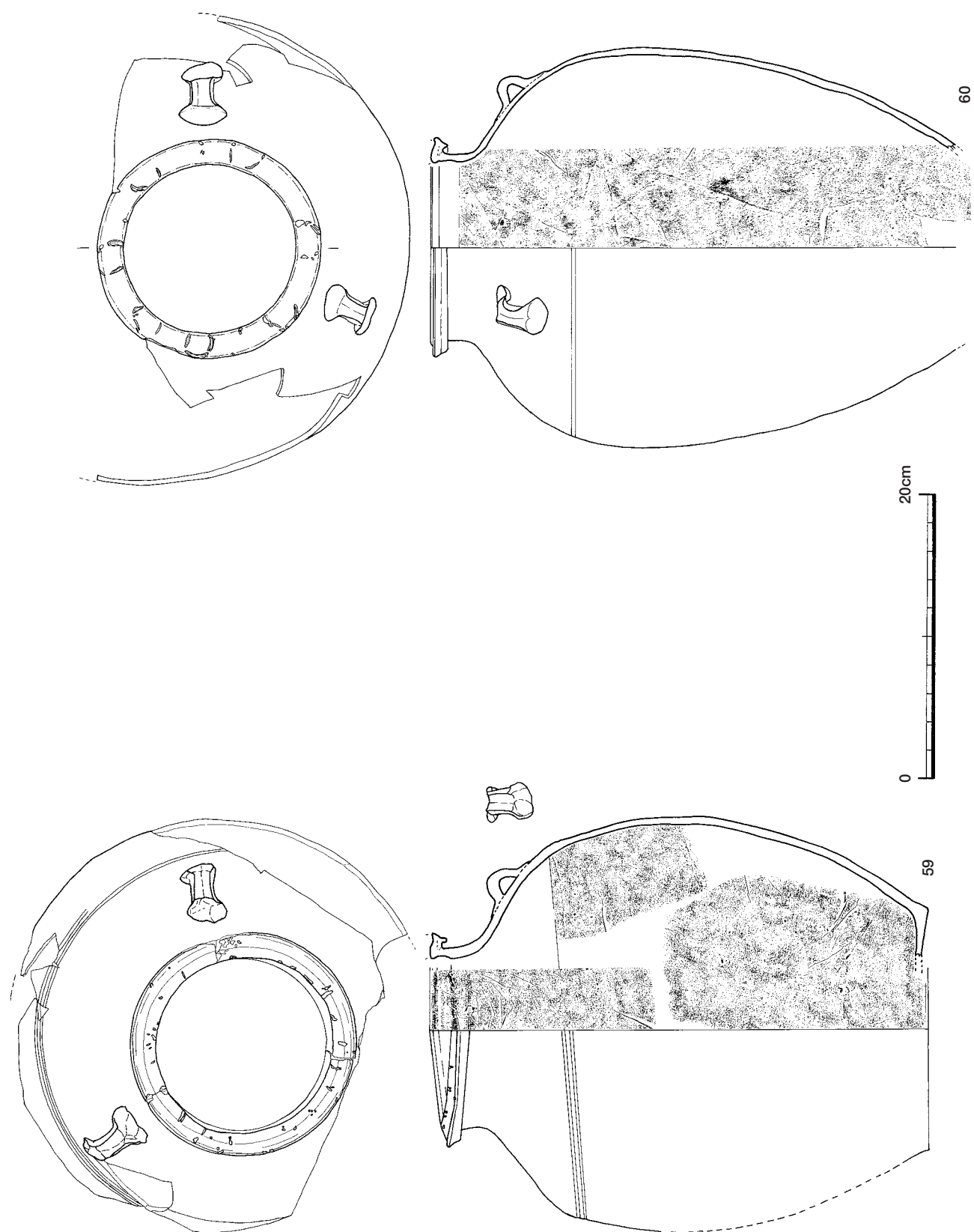
56は、内面には同心円状のタタキ目が鮮明に残り、外面には平行タタキ目が残る。釉は、暗緑褐色に発色した薄い灰釉が、残存部全面にかかる。

57は、内底面に腹縁の貝目が残る資料である。内面に他の製品を入れて焼成した物と考えられる。甕または片口であろう。外底面にも胎土詰貝目が残る。釉は、光沢がある赤褐色に発色した鉄釉が、残存部全面に厚くかかる。

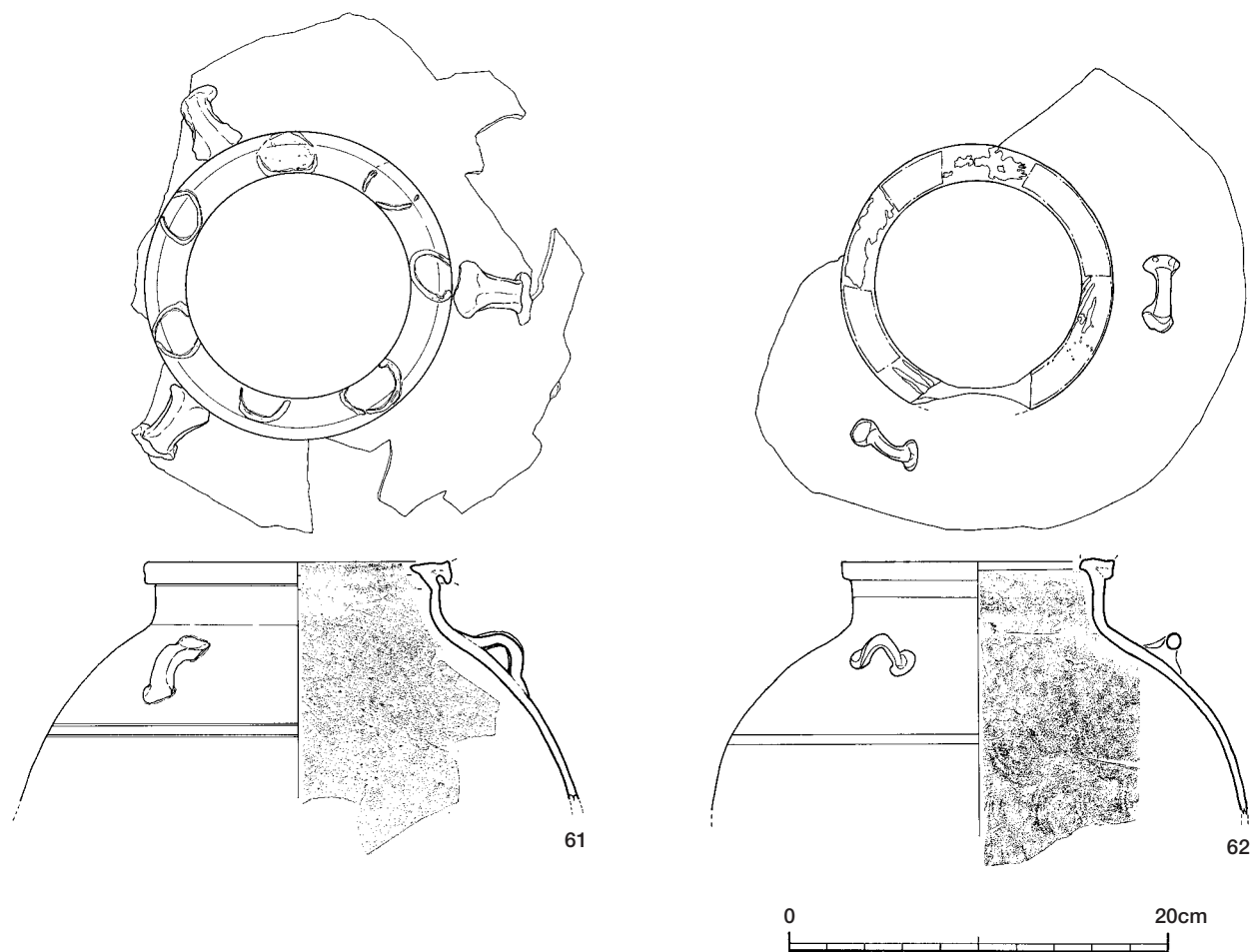
58は、焼き歪みがみられる資料である。製品の底部は、粘土をタタキ成形により平らにのぼし、円形に切り取ってつくられており、その際のタタキ目が内底面に明瞭に残る。釉は、光沢のある褐色に発色した鉄釉が、残存部全面に厚くかかる。

第44表 物原 I 遺物観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
56	底部	物原 I	—	14.0	—	褐灰色	灰釉 暗緑褐色	残存部全面施釉	外面に平行タタキ目 内面同心円状タタキ目
57	底部	物原 I 2C	—	15.8	—	褐灰色	鉄釉 赤褐色	残存部全面施釉	内外底面に貝目
58	底部	物原 I ウ	—	—	—	黒褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	内面にタタキ目



第87図 物原 I 出土遺物(19)壺



第88図 物原 I 出土遺物(20)壺

壺（第87～90図）

59～70は壺である。大形で、口縁部を外側に折り返して肥厚させて「T」字状につくり、口唇を内側は高く外側は溝縁状につくるタイプのものと、小形で、口縁を内側に折り返して丸くおさめるタイプのものの2つに大きく分けることができる。大形のタイプは、さらに細分化することができる。

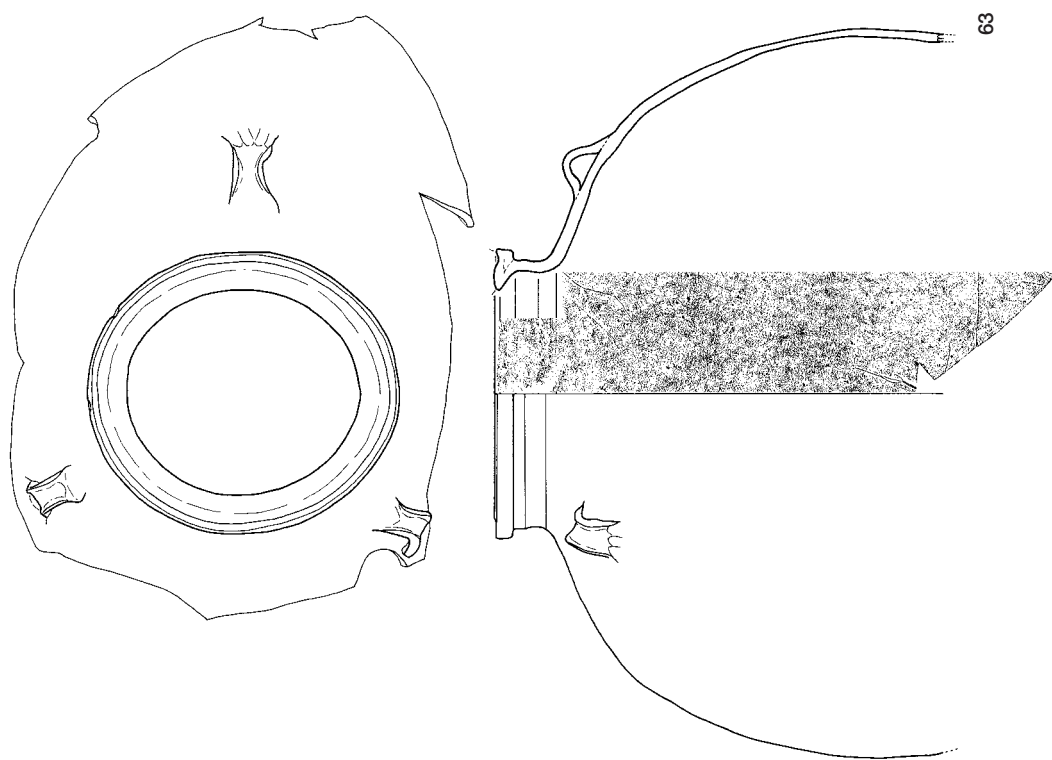
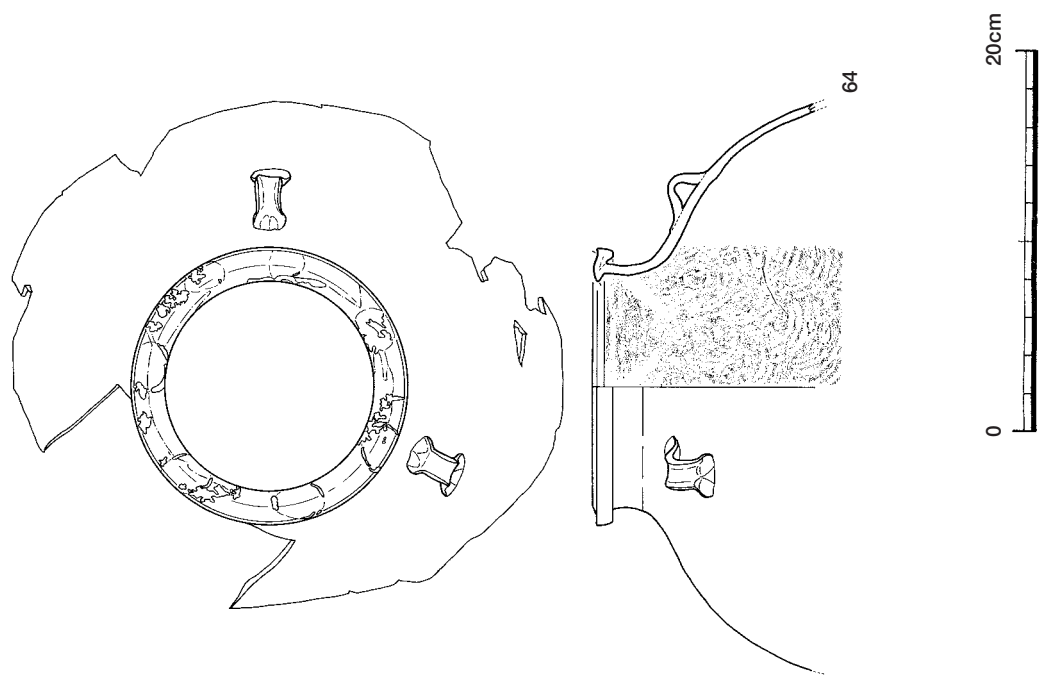
59～64は大形のタイプのもので、口縁部を外側に折り返してつくり、口唇部の内側は高く外側は溝縁状につくる。釉は、口唇部を除き全面に施釉され、口唇部の釉は

拭い取られる。肩部はあまり張らず、なで肩である。肩部の沈線の有無によりさらに2つに分けることができる。

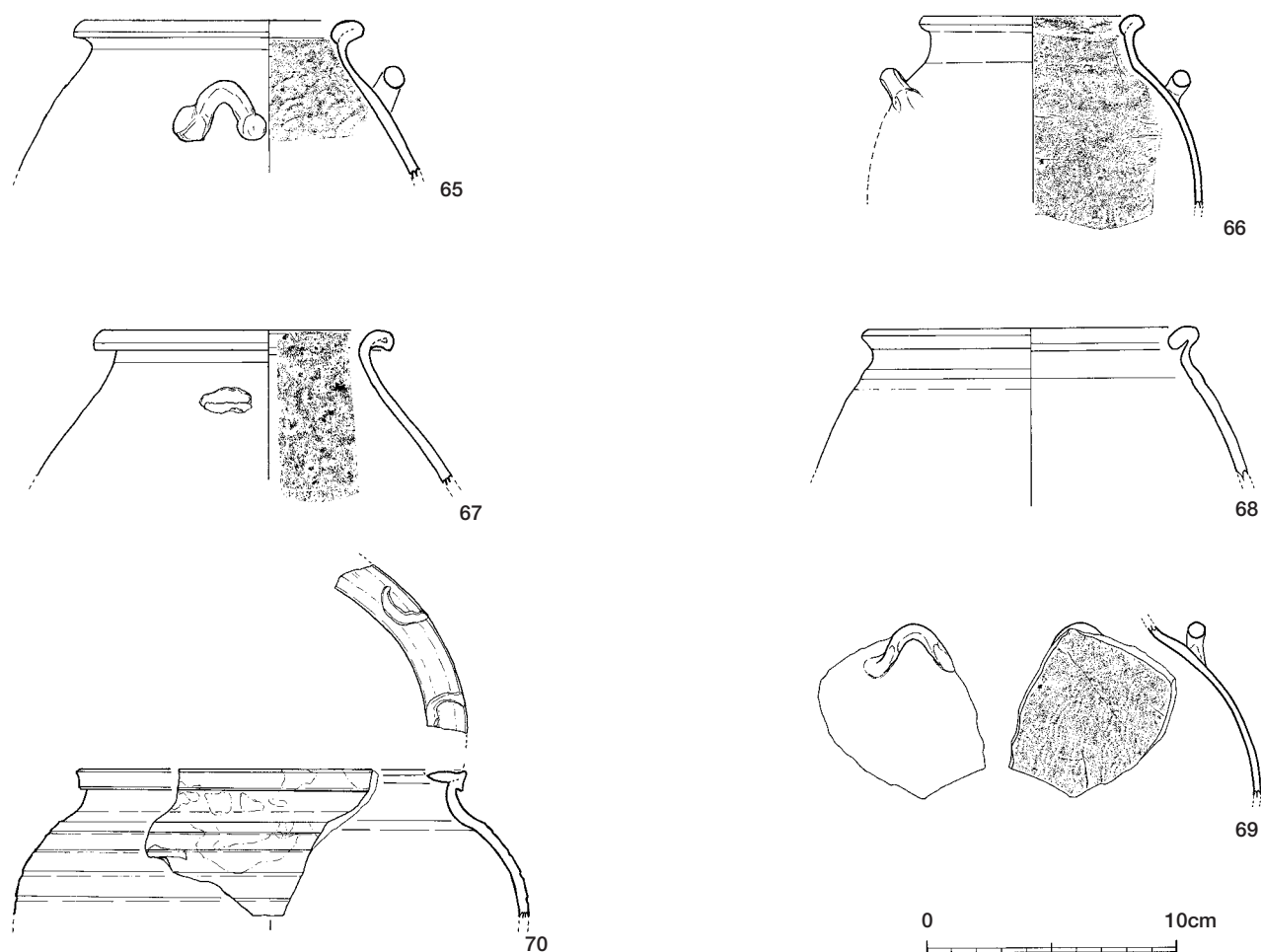
59～62は、外面肩部に2条の沈線を有するものである。耳は、残存している耳とのバランスから三耳になるものと考えられる。4点ともほぼ大きさは同じである。そのうち59～61は縦耳で、口唇部には貝の腹縁を使用した貝目が残る。62は丸みを帯びた横耳で、口唇部にイタヤガイの貝目が残る。

第45表 物原 I 遺物観察表13

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
59	壺	物原 I	15.2	19.2	35.2	赤褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺縦耳 口唇部貝目内面に同心円状タタキ目
60	壺	物原 I アイ	15.5	—	37.0	黒茶	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺縦耳 口唇部貝目内面に同心円状タタキ目
61	壺	物原 I イ	16.0	—	—	にぶい褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺縦耳 口唇部貝目内面に同心円状タタキ目
62	壺	物原 I 2D	15.4	—	—	黒褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺横耳 口唇部貝目内面に同心円状タタキ目



第89図 物原 I 出土遺物(21)壺



第90図 物原 I 出土遺物(22)壺

63・64は外面肩部に沈線を有しないタイプのものである。耳はすべて縦耳の三耳である。また、64の口唇部には貝目が残っているが、63には見られない。

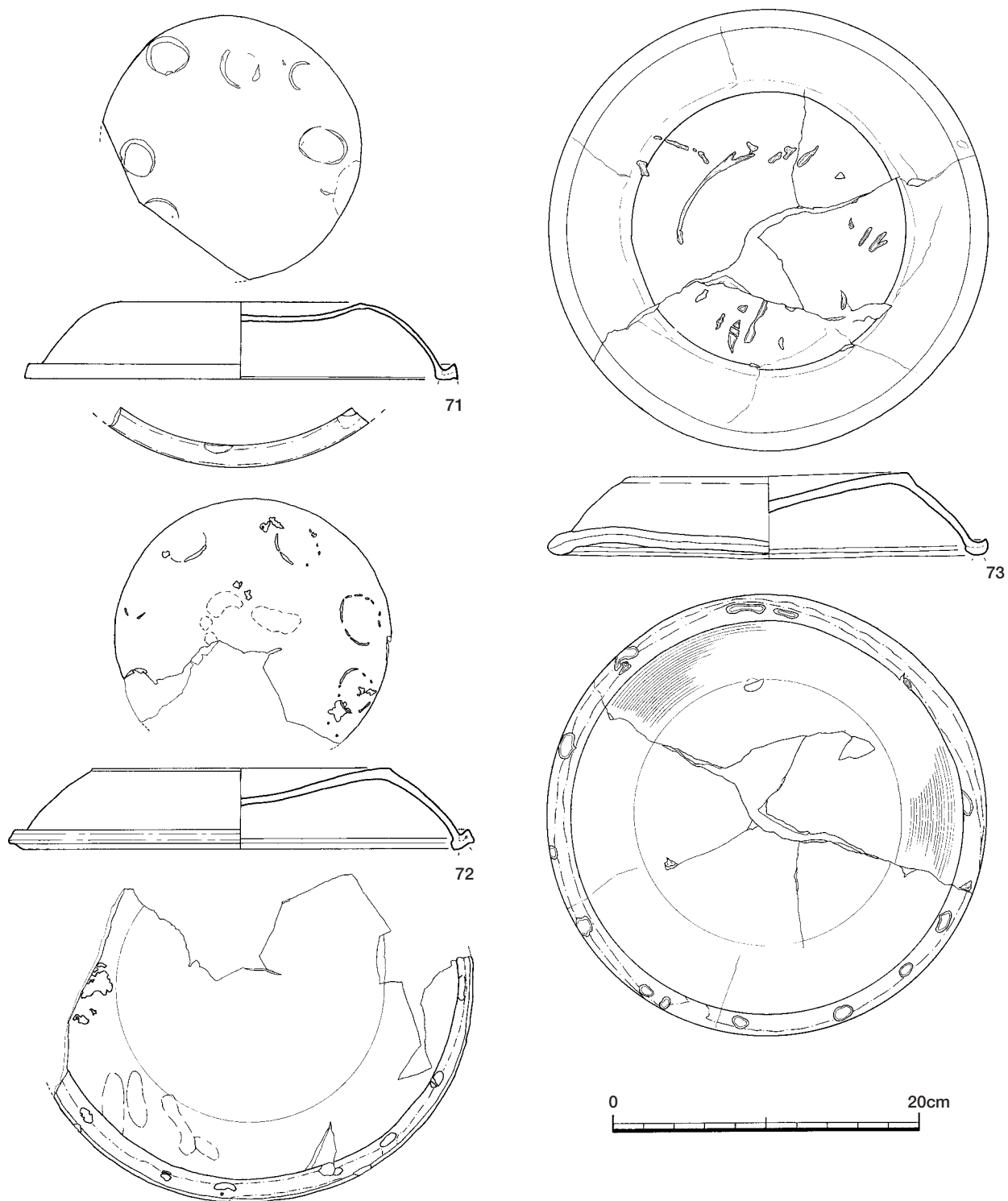
67を除き65～69は、小形で、口縁を内側に折り返して丸くおさめるタイプの資料である。65～68は、口唇部を含め残存部は全面施釉される。65は二耳壺で、内面には同心円状のタタキ目が鮮明に残る。66・68は横耳であるが、破片のため耳の個数は不明である。67には縦耳が付

くものと思われるが、欠損していて接合部の一部のみが看取される。

70は、小形の壺として掲載するが、水注である可能性もある。口縁部は外側に折り返してつくり、口唇を内側は高く外側は溝縁状につくるもので、口唇部の釉は拭い取られ貝目が残る。外面には数条の沈線が確認される。

第46表 物原 I 遺物観察表14

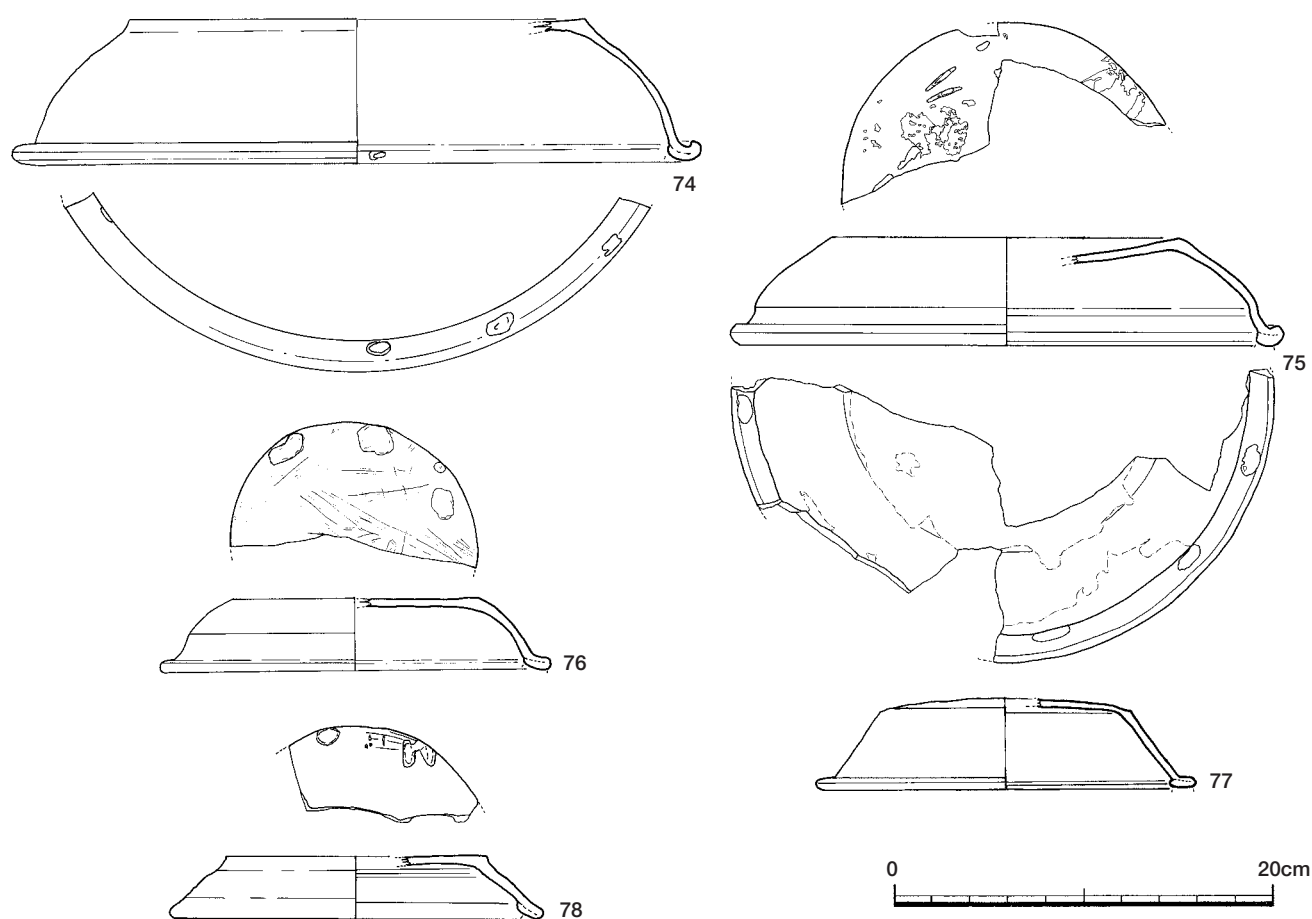
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
63	壺	物原 I 2Dウ	15.0	—	—	黒褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺縦耳 内面に同心円状タタキ目
64	壺	物原 I	14.6	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	三耳壺縦耳 内面に同心円状タタキ目
65	壺	物原 I	12.0	—	—	赤褐色	鉄釉? にぶい褐色	残存部全面施釉	内面同心円状のタタキ目
66	壺	物原 I イ下	12.0	—	10.2	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面同心円状のタタキ目
67	壺	物原 I イ	12.0	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状のタタキ目
68	壺	物原 I イ下	13.4	—	—	赤褐色	灰釉灰緑色	残存部全面施釉	
69	壺	物原 I イ	—	—	—	明黄褐色	灰釉 暗緑褐色	内面無釉	内面に同心円状のタタキ目
70	壺	物原 I	15.5	—	—	茶褐色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外面に沈線



第91図 物原 I 出土遺物(23)蓋

第47表 物原 I 遺物観察表15

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
71	蓋	物原 I 2C	28.4	16.0	5.0	赤褐色	灰釉	灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部と上面に貝目
72	蓋	物原 I イ	30.6	18.0	5.3	茶褐色	鉄釉	緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部と上面に貝目
73	蓋	物原 I 2D	28.6	18.2	5.7	暗赤褐色	灰釉	にぶい黄	口唇部以外全面施釉	口唇部と上面に貝目



第92図 物原 I 出土遺物(24)蓋

蓋 (第91・92図)

物原 I から出土した浅鉢型の蓋は、甕・壺等の蓋として使用されたものと思われる。器形の大きさから2つに分けることができ、さらに口縁部の形状から細分化することができる。

71～75は、大形の資料である。

71・72は、口唇部を内側は高く外側は溝縁状につくり、胎土詰貝目が残るものである。どちらも外底面には、貝の腹縁を利用した貝目が残る。

73～75は、外反させた口縁部の縁を上方にやや引き延ばした形状を呈するもので、口唇部は丸くつくられる。73は、焼き歪みが激しいが、ほぼ完形品である。口唇部のみ釉が拭い取られ、胎土詰貝目が残る。内面には、へ

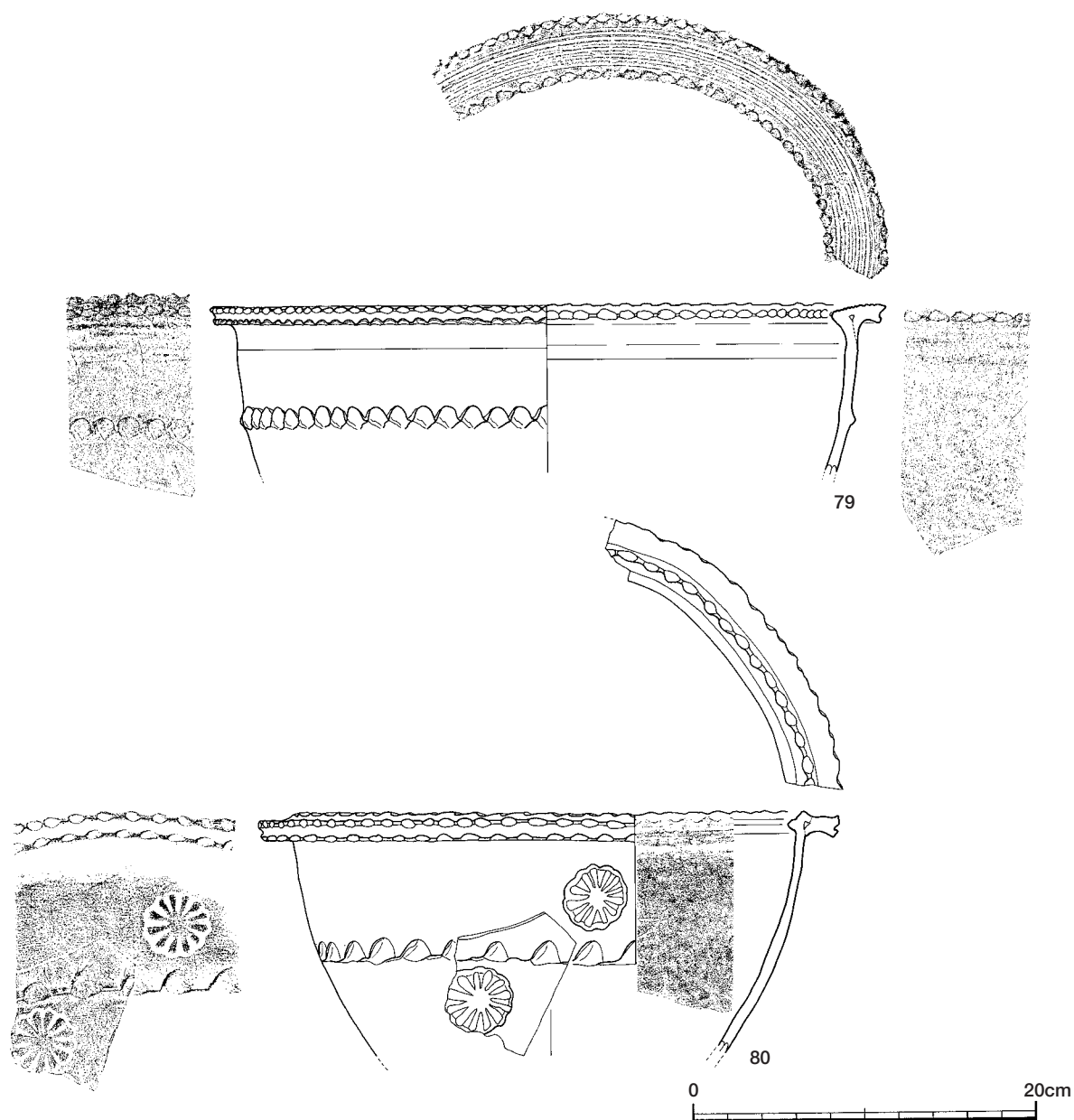
ラ状工具による調整痕が、横スジとなって看取される。

74・75は、胴部が口縁部上位でやや膨らみ丸みを帯びる形状を呈する。74は、口唇部に胎土詰貝目が残る。75は、口唇部に胎土詰貝目残り、上面にはイタヤガイの貝目が残る。

76～78は、小形の資料である。口縁部は、外側に折り、更に内側に折り返して肥厚させ、丸くつくるものである。76は、外底面に、胎土詰貝目残り、また、余分な釉薬を拭い取ったと思われる痕跡が見られる。77は残存部には、貝目等見られない。78は、上面に胎土詰貝目が残る。

第48表 物原 I 遺物観察表16

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
74	蓋	物原 I アイ	36.4	24.0	7.6	暗赤褐色	灰釉 灰褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
75	蓋	物原 I ウ	29.2	18.2	5.7	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部と上面に貝目
76	蓋	物原 I ウ	20.6	13.0	3.8	暗赤褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目
77	蓋	物原 I ウ	20.0	13.2	4.8	黒褐色	鉄釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
78	蓋	物原 I イ下	19.8	13.6	3.3	暗赤灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目



第93図 物原 I 出土遺物(25)植木鉢

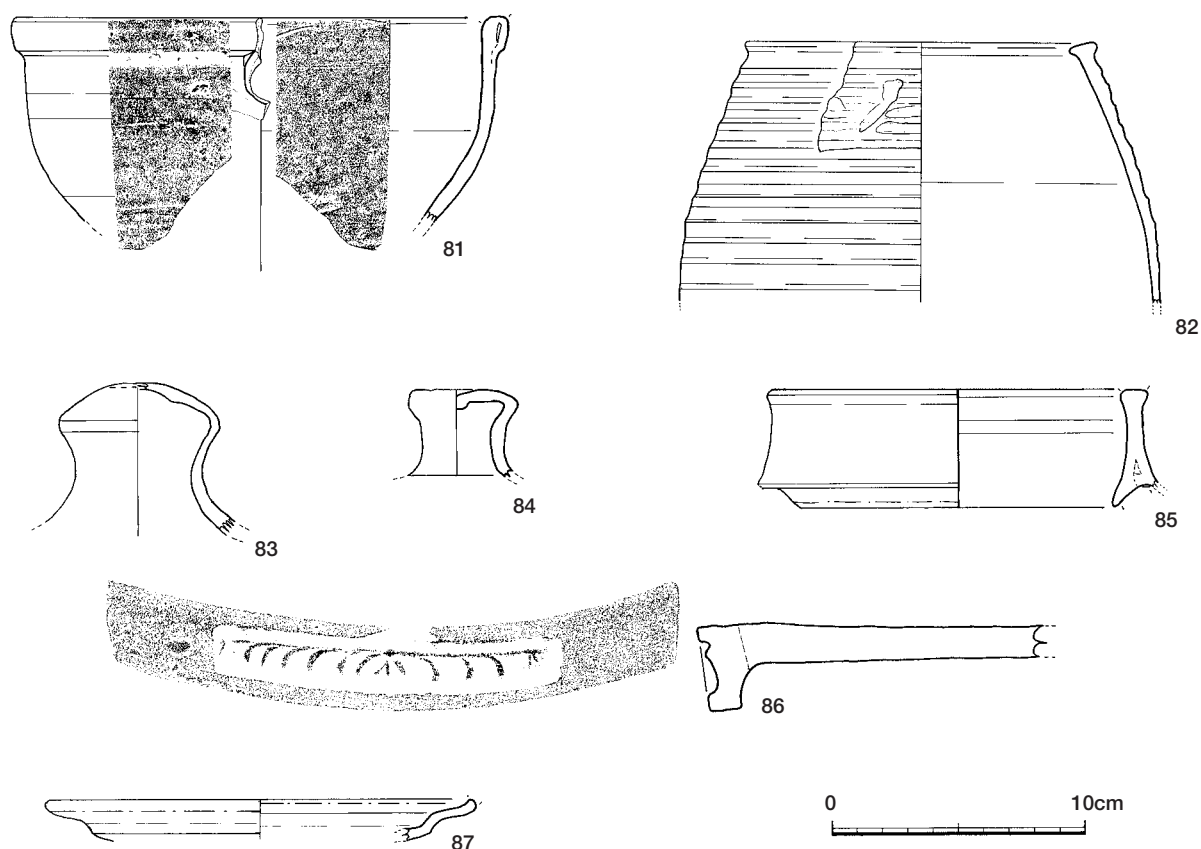
植木鉢（第93図）

79・80は、底部が欠損しているが植木鉢と思われる資料である。どちらも大形のもので、素焼きである。内面にはタタキ成形時の同心円状のあて具痕が残る。79は、外側に折り返した口縁部の先端と内側に装飾を施し、口唇部はヘラ状工具により筋状の装飾を施す。また、胴部

外面にも粘土紐を貼り付け装飾している。80は、外側に折り返した口縁部の先端と内側、さらに口唇部にも同様の装飾を施し、また、胴部外面には、粘土紐を貼り付け、その上下に花文のスタンプを押印している。残存部が少ないため全体の詳細は不明であるが、花文は上下にほぼ等間隔で巡るものと思われる。

第49表 物原 I 遺物観察表17

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
79	植木鉢	物原 I	39.6	—	—	赤褐色	無釉	—	口唇部ヘラ状工具による調整 内面に同心円状タタキ目
80	植木鉢	物原 I 2E	34.4	—	—	赤褐色	無釉	—	外面にスタンプの花文 内面 に同心円状のタタキ目



第94図 物原 I 出土遺物(26)その他

その他の出土遺物（第94・95図）

81～89は、出土点数の少なかった資料や一点しか確認できなかった資料を掲載した。そのうち81～87・89～97は、堂平窯の製品と考えられるもので、88は、堂平窯以外の製品である。

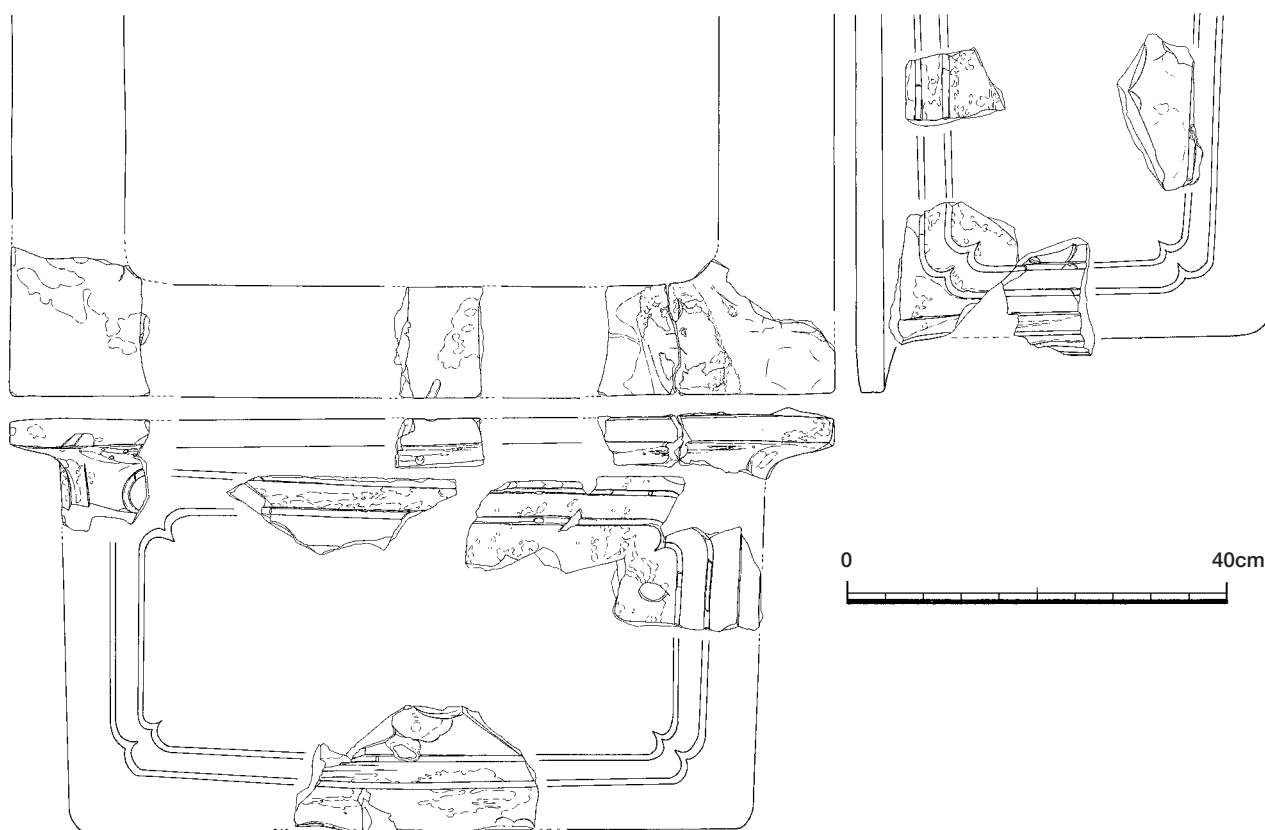
82は、全面無釉で、外面に数条の沈線を有する資料である。器形・用途の詳細は不明である。83・84は、甕瓶の把手部と思われる資料である。どちらも内面は無釉である。84は上部が陥没して変形している。85は羽釜の底部を除いた一部のような形状を呈する資料である。羽部は欠損しており、器形・用途等は不明である。86は、釉瓦の軒平瓦である。上面はヘラ状工具による調整が施さ

れており、細い櫛目が看取される。釉は、上面の端を1 cm 程度除いた部分と瓦頭部全面にかけられる。

87は、肥前陶器の皿の口縁部である。

第50表 物原 I 遺物観察表18

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
81	片口?	物原 I イ下	19.6	—	—	褐灰色	灰釉 灰黄色	口唇部のみ釉剥ぎ	
82	壺?	物原 I イ下	13.8	—	—	暗赤褐色	無釉	—	
83	甕瓶	物原 I 2C	径6.5	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	甕瓶のつまみ部分
84	甕瓶	物原 I	径4.3	—	—	褐色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	甕瓶のつまみ部分
85	不明	物原 I	15.0	12.4	4.6	赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部・羽部下位は無釉	
86	軒平瓦	物原 I	—	—	—	明赤褐色	灰釉? 灰黄色	上面と瓦頭部のみ施釉	
87	皿	物1ー I	17.0			赤褐色	灰釉 乳白色	口唇部以外全面施釉	唐津溝縁皿

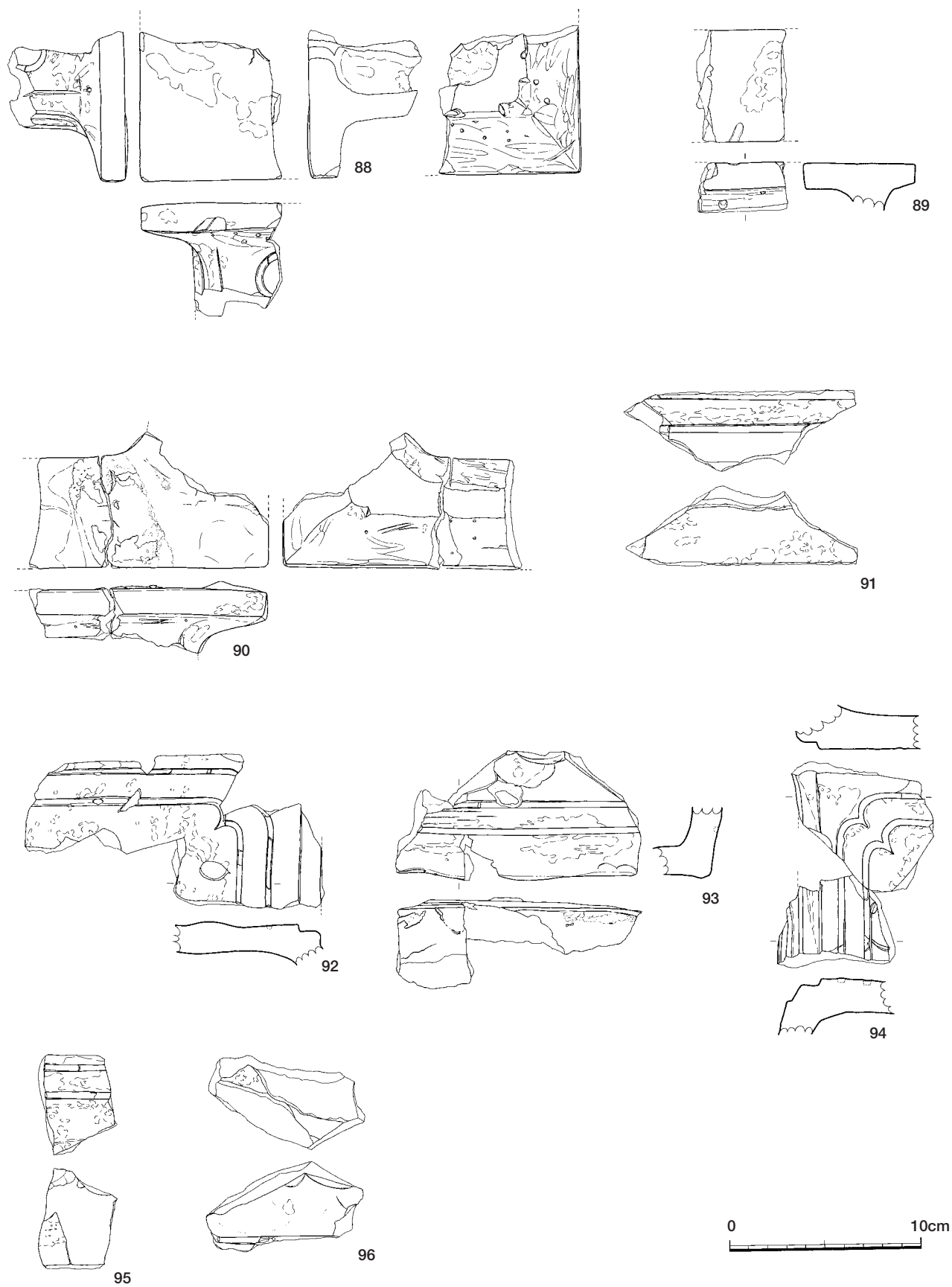


第95図 物原 I 出土遺物(27) その他

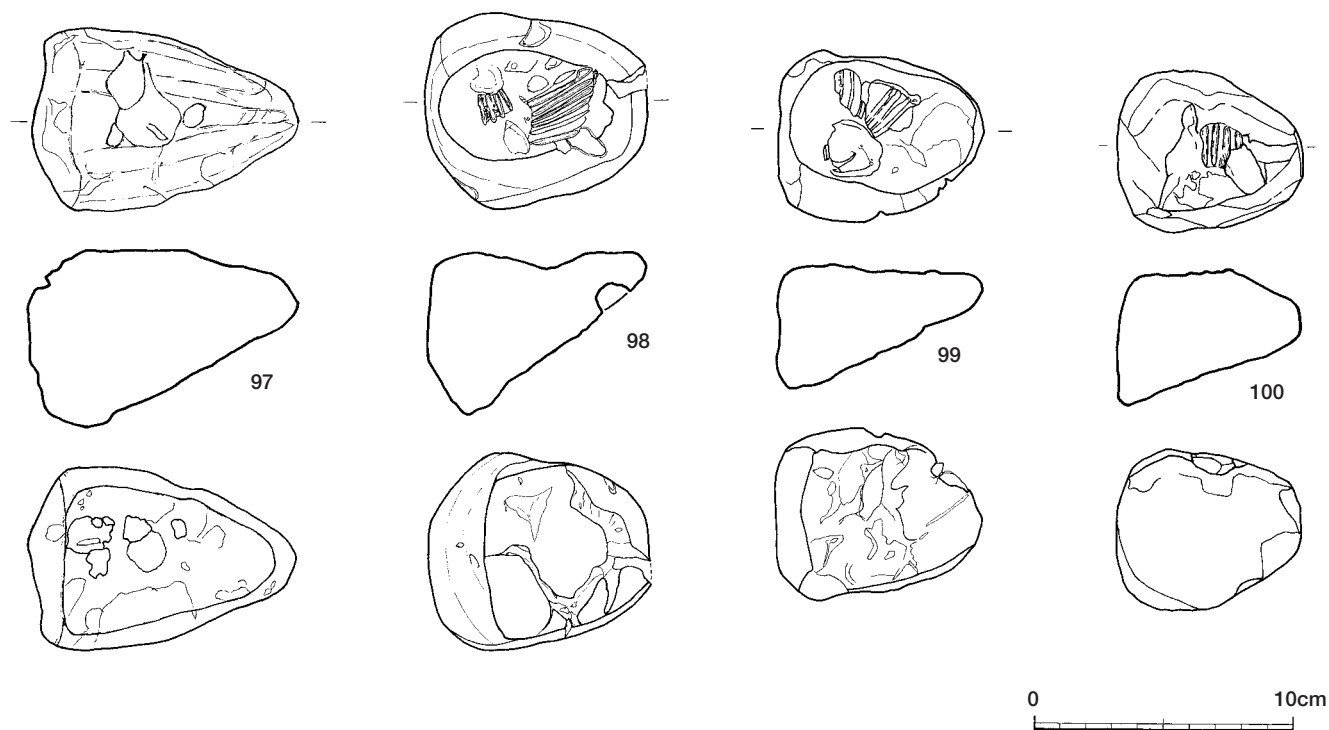
88～96は同一個体である。

堂平窯の製品と考えられるが、接合できた部分の一部で、他は図上復元を試みた。非常に大形でがっしりとした重みのある製品で、植木鉢もしくは水盤になるのではないかとされるが、詳細な器形や用途は不明である。側面には、白色陶胎の象嵌が装飾として周囲を巡るように施されている。白色陶胎は、堂平窯で生産された胎土が白色の碗や皿（これを薩摩では「白薩摩」と呼ぶ）に使用された白色粘土と同様のものを利用していると考えられる。釉は、側面に灰緑色の灰釉を刷毛のような道具を使い薄く塗布していると思われるが、上手く塗られていないためか、または釉が熔けきっていないためか、無釉のように見える箇所もある。内面は無釉である。





第96図 物原 I 出土遺物(28)その他



第97図 物原 I 出土遺物(29)窯道具

窯道具（第97～99図）

物原 I の窯道具からは、様々な形状を呈するハマが出土している。平面が三角形・円形・長方形で、断面が馬蹄形を呈するハマ、窯壁や粘土塊を転用した大形のハマ、本来は窯の内部の様子を見るための色見孔の蓋として使用されたものを転用した平面ドーナツ型状のハマ、粘土を棒状に握って使用したハマがある。また、瓦と瓦の間に挟んで使用したのではないかと考えられる窯道具も出土している。その他、詳細な用途は不明であるが、その形状等から窯道具ではないと思われる資料もあり、大きく6つに分けることができる。

97～104は、断面が馬蹄形を呈するもので、馬蹄形ハマと呼ばれる資料である。上面の形状からさらに3つに細分化することができる。

97～100は、上面が三角形を呈するハマである。97は、上面をヘラ状工具でなでて成形した痕跡が看取される。

98～100の上面には、貝目が残る。

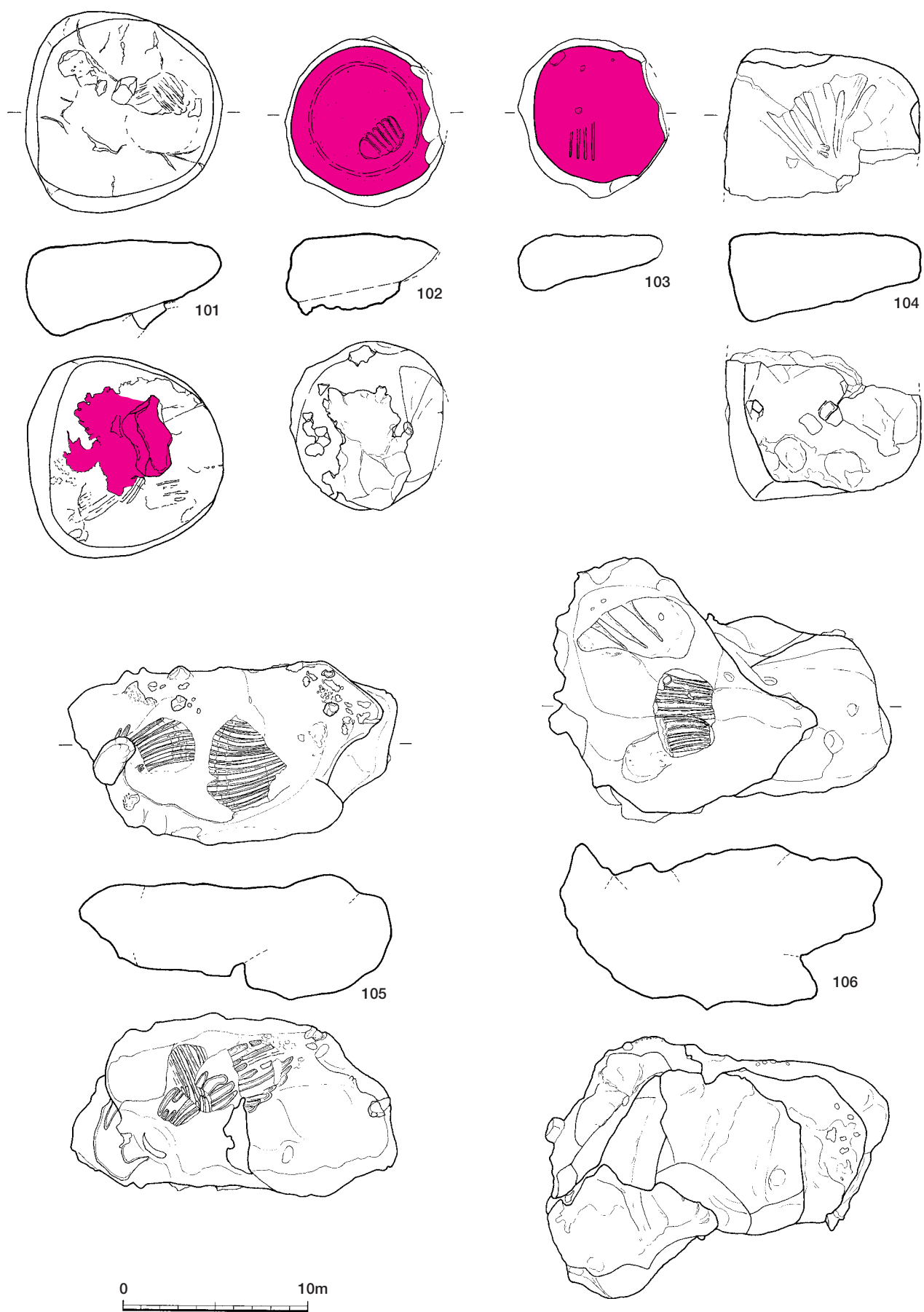
101～103は、上面が円形を呈するハマである。101は上面に貝目残り、下面には他のハマの一部が熔着し、また貝目も残る。102・103は、上面に白色の粗い砂質土が塗布された資料で、その上に貝目が残る。また、102の下面には、他のハマの一部が熔着している。

104は、一部欠損しているが長方形になるとと思われるハマである。上面には、イタヤガイの貝目が残る。このタイプのハマは、一点のみの出土である。

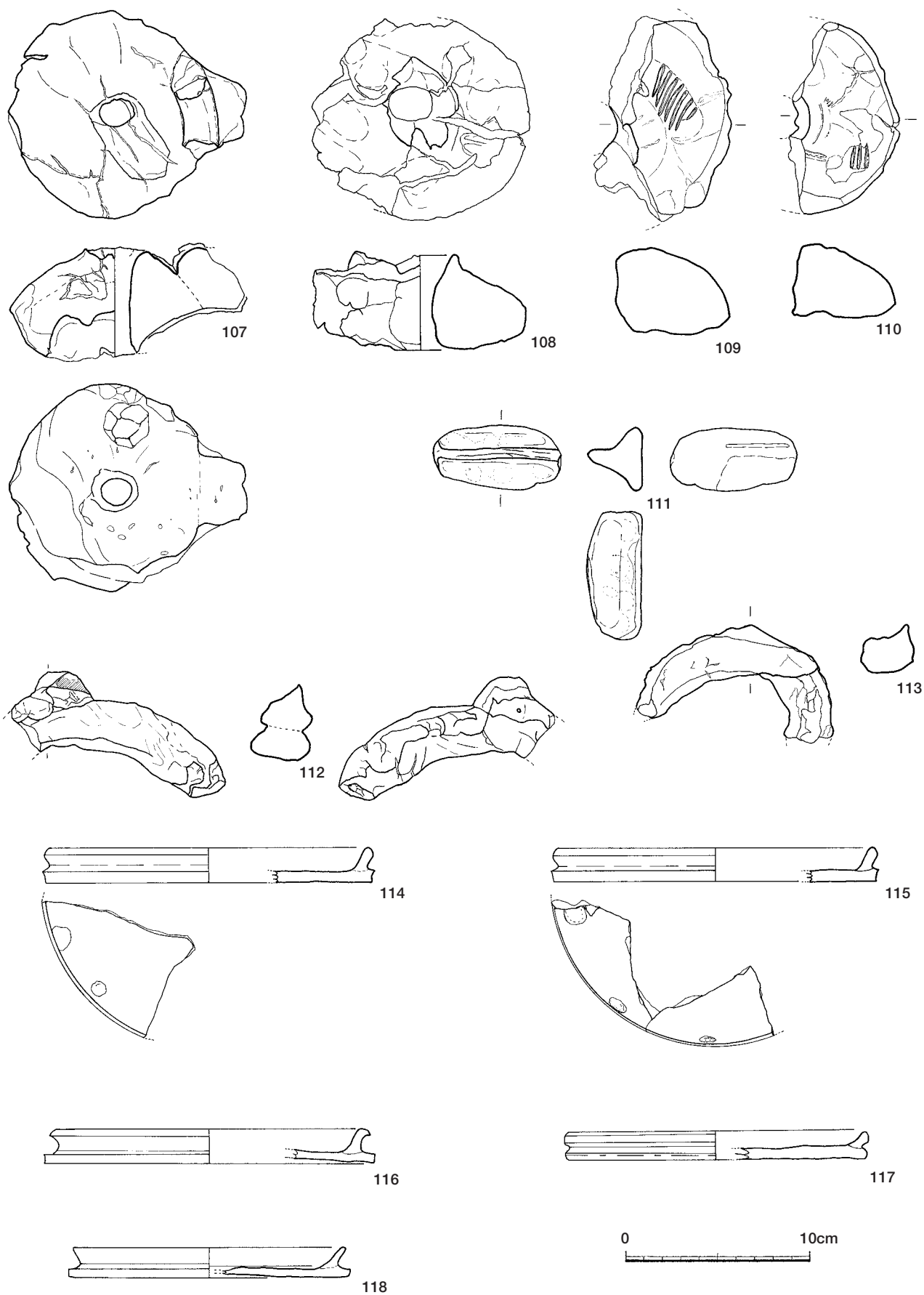
105・106は、窯壁を転用もしくは不定型の粘土塊をハマとして代用したと考えられる資料である。数個の塊が熔着しているものと思われるが、表面に釉垂れが付着しているため、詳細は不明である。105は貝目が上面下面の両面に残り、106は上面にのみ残る。

第51表 物原 I 遺物観察表19

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)		胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	厚さ				
97	ハマ	物原 I	10.2	6.9	にぶい橙色	無釉	—	
98	ハマ	物原 I	8.5	6.1	黒褐色	無釉	—	上面に貝目
99	ハマ	物原 I	7.9	4.6	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目
100	ハマ	物原 I	7.1	4.8	にぶい橙色	無釉	—	上面に貝目
101	ハマ	物原 I	10.5	4.7	褐色	無釉	—	上面に白色の目跡 貝目
102	ハマ	物原 I	8.1	4.0	暗褐色	無釉	—	上面白色砂粒付着 貝目
103	ハマ	物原 I	7.6	2.8	暗赤褐色	無釉	—	上面白色砂粒付着 貝目
104	ハマ	物原 I	10.2	4.7	黒褐色	無釉	—	上面に貝目
105	ハマ	物原 I	17.0	7.0	にぶい褐色	無釉	—	上面に貝目
106	ハマ	物原 I	17.7	8.2	明褐色	無釉	—	上面に貝目



第98図 物原 I 出土遺物(30)窯道具



第99図 物原 I 出土遺物(31)窯道具

107～110は、平面がドーナツ状の形状を呈する資料で、色見孔の蓋であるが、転用してハマとしても使用している資料が数多く確認されるため、ここではハマの中に分類して掲載した。本来の用途は窯体の一部で、窯体内の様子を観察するための色見孔をふさぐ蓋であり、中央の穴は、開閉するために棒状のものを差し込む穴である。107・108は、上面に貝目等が見られないことから、本来の用途である色見孔の蓋として使用された資料であろう。窯道具ではないがここに掲載しておく。107は、両面とも黒く焦げているが、108は片面（下面）のみが黒く焦げ、もう片面（上面）は橙色である。109・110は、ハマとして転用された資料で、ドーナツ状をした形状の一部分である。全面灰褐色を呈し、上面には貝目が残る。

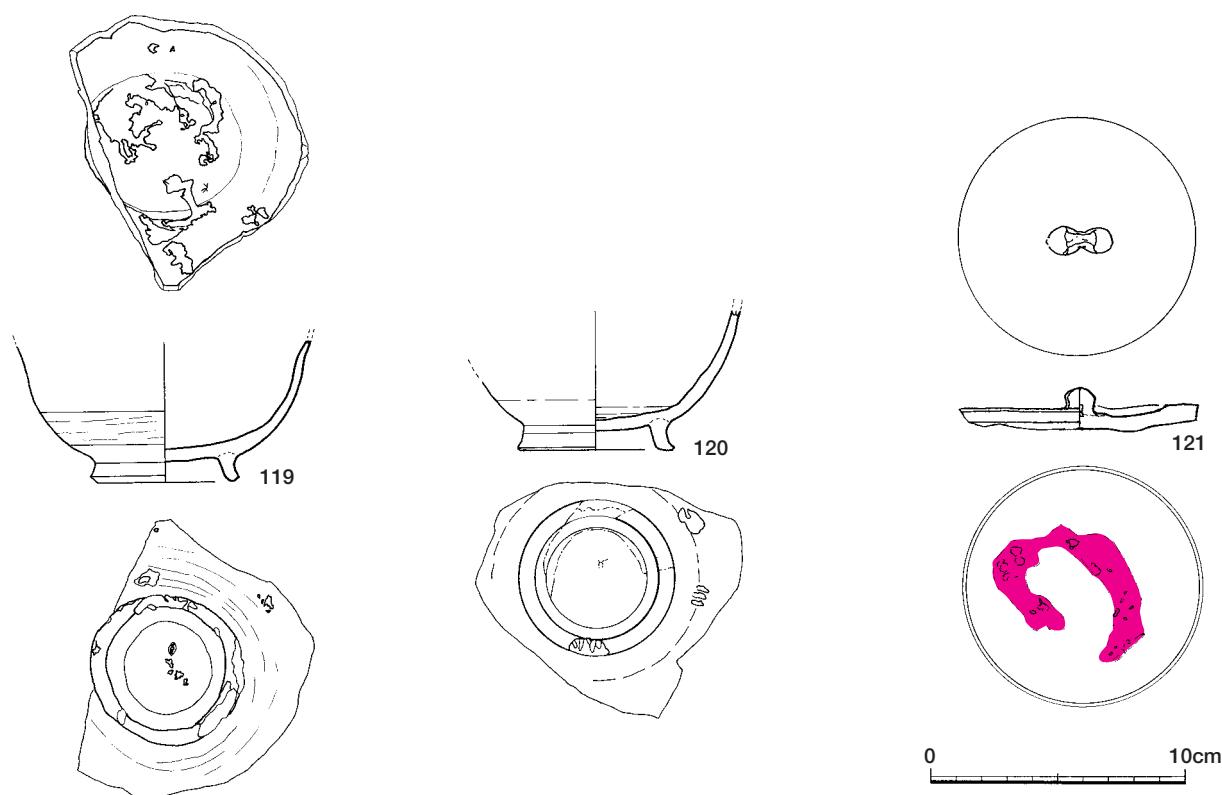
111は、他の物原で瓦に熔着して出土している資料が見られることから、瓦に使用した窯道具と思われる。全面無釉である。物原Ⅰからは1点のみの出土であり、堂平窯の製品ではあるが、他の物原からの混入品である可能性も考えられる。

112・113は、粘土を手の中で棒状に握り、製品の底部の形状に合わせて丸く曲げて、水平に据える微調整のために使用した窯道具であると考えられる。その場で簡単に作られ使用されたものと思われ、表面に握って作った際の指跡が看取される。112は、棒状のハマが2本熔着した資料である。

114～118は、用途が不明の資料である。全面無釉で、下面には貝目残り、大きさも大小の差が見られずほぼ一定である。挟み板の可能性も考えられるため、窯道具に分類して掲載した。これらの資料からは詳細な形状は不明であるが、他の物原から出土した同種類の資料を参考にとすると、平面は円板状で、中心に穴が穿孔され、その周囲に大豆粒大の大きさの突起が付く。上面の縁に斜め上方に立ち上がるように粘土紐を貼り巡らす形状を呈する。

第52表 物原Ⅰ 遺物観察表20

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)		胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	厚さ				
107	ハマ	物原Ⅰ	11.2	5.9	橙色	無釉	—	
108	ハマ	物原Ⅰ	11.6	4.7	橙色	無釉	—	
109	ハマ	物原Ⅰ	10.7	4.5	灰褐色	無釉	—	上面に貝目
110	ハマ	物原Ⅰ	10.2	3.9	灰褐色	無釉	—	上面に貝目
111	窯道具	物原Ⅰ	9.4	2.7	黒褐色	無釉	—	
112	ハマ	物原Ⅰ	12.3	4.1	にぶい褐色	無釉	—	
113	ハマ	物原Ⅰ	6.8	2.9	にぶい橙色	無釉	—	
114	窯道具	物原Ⅰイ下	18.0	—	赤灰色	無釉	—	下面に貝目
115	窯道具	物原Ⅰイ下	17.8	—	暗赤灰色	無釉	—	下面に貝目
116	窯道具	物原Ⅰイ下	18.2	—	暗赤褐色	無釉	—	
117	窯道具	物原Ⅰイ下	16.6	—	にぶい黄褐色	無釉	—	
118	窯道具	物原Ⅰウ	15.2	—	褐灰色	無釉	—	



第100図 物原 I（シラス下）出土遺物(32)碗・蓋

物原 I（シラス下）出土の遺物

物原 I の北東側の一部には、かつて家屋と思われる建物が存在した。建物は物原の上にシラスで盛土をし、その上に建てられていたと思われる。以下に掲載した遺物はこのシラス下から出土したもので、製作技法の特徴などから同時期に廃棄された資料であると思われるが、攪乱の可能性も完全に否定できないため、物原 I と別にして参考として紹介しておく

碗・蓋（第100図）

119・120は碗である。畳付も含め残存部は、黒褐色の鉄釉が総釉でかかる。119は畳付に貝目残り、内面には灰白色の目跡のような跡が看取される。120は畳付と外面腰部にも貝目が残る。

121は蓋である。下面中央に灰白色の目跡のような痕跡が残る。

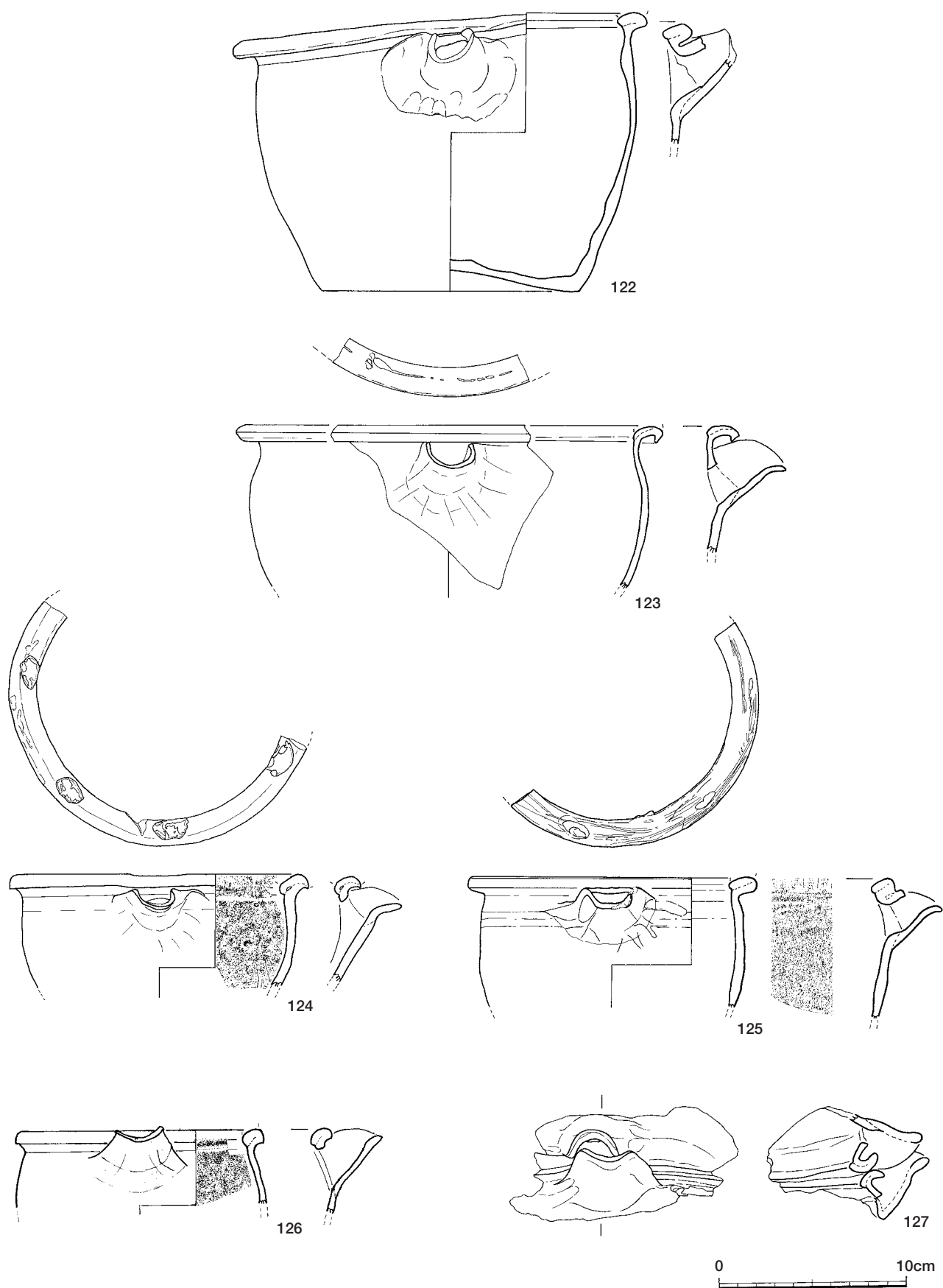
片口（第101図）

122～127は片口である。122・123は、比較的大形の資料である。口唇部を除き、黒褐色の鉄釉が全面にかかり、口唇部には貝目は見られない。122は、外底面にはイタヤガイを使用した貝目が一部残る。全体的に焼き歪みと火ぶくれが激しい。124～126は、比較的小形の資料である。口唇部を除き、黒褐色系の鉄釉がかかる。126を除き、口唇部には胎土詰貝目が残る。

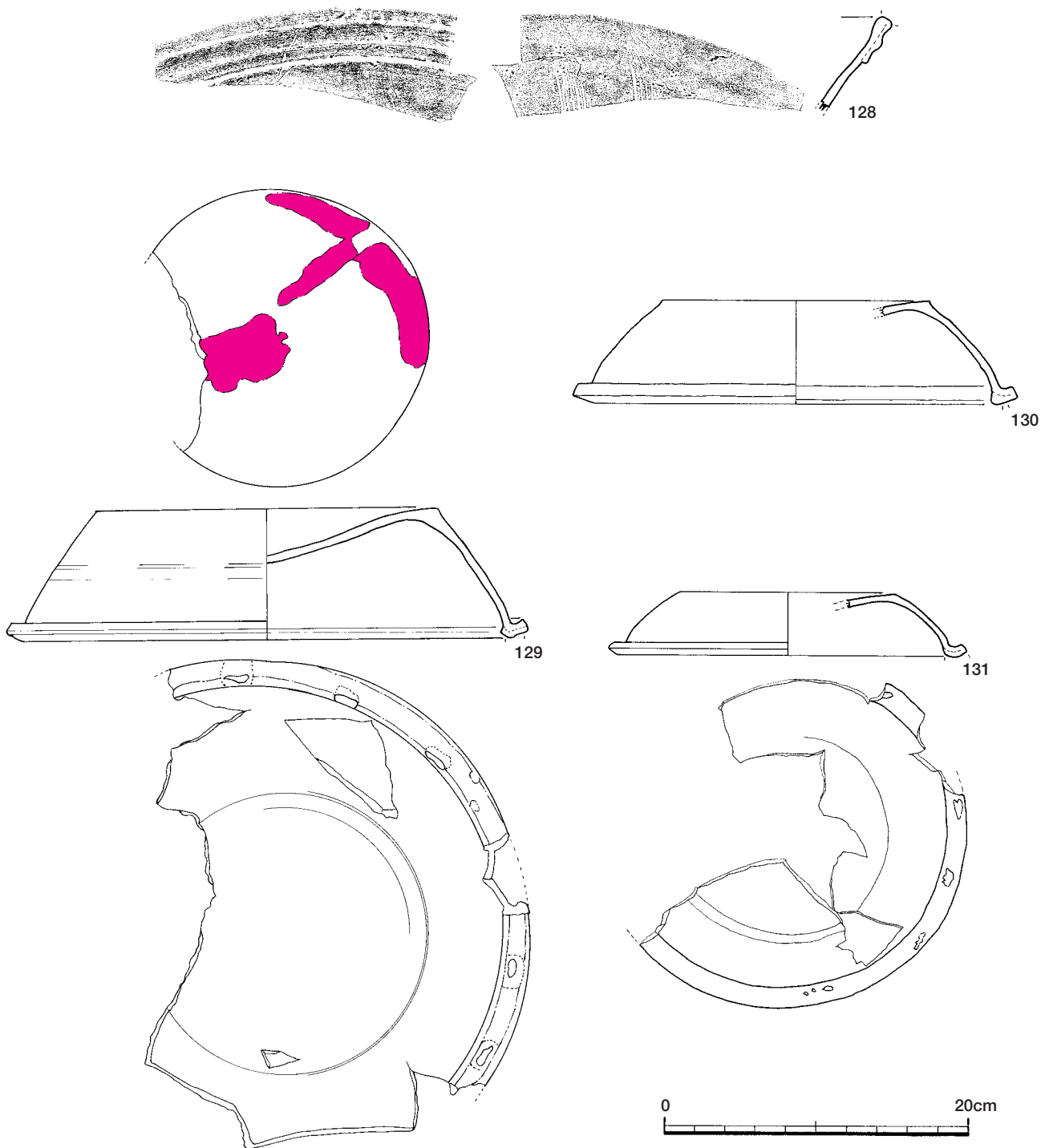
127は、合わせ口にして焼成した際に、口唇部が熔着した資料である。片口部を合わせて焼成していたことが窺える。

第53表 物原 I 遺物観察表21

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
119	碗	シラス下	—	6.0	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部は全面施釉	畳付きに貝目
120	碗	シラス下	—	6.1	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部は全面施釉	畳付きと外面腰部に貝目
121	蓋	シラス下	9.3	2.6	0.6	茶褐色	鉄釉 黒褐色	総釉	白色の目跡
122	片口	シラス下	21.0	13.8	14.9	にぶい黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
123	片口	シラス下	22.8	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状のタタキ目
124	片口	シラス下	16.0	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状のタタキ目 口唇部に貝目
125	片口	シラス下	15.4	—	—	灰褐色	鉄釉 緑色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状のタタキ目 口唇部に貝目
126	片口	シラス下	12.9	—	—	灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	内面同心円状のタタキ目
127	片口	シラス下	—	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	



第101図 物原 I (シラス下) 出土遺物(33)片口



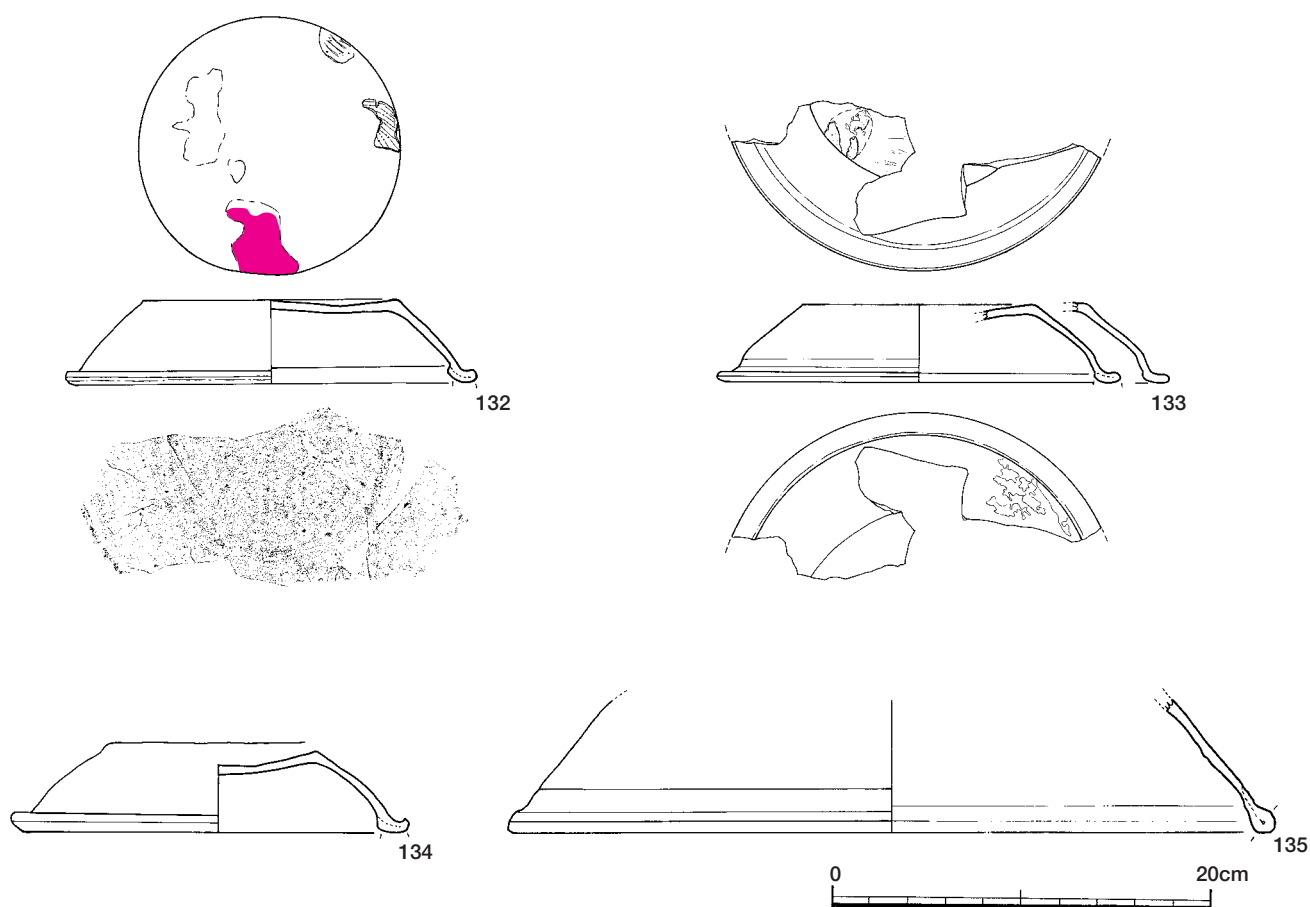
第102図 物原 I (シラス下) 出土遺物(34) 播鉢・蓋

播鉢・蓋 (第102・103図)

播鉢は小片が数点出土している。

128は、播鉢である。器壁は薄く、口唇部は折り返して肥厚させ外側に2条の突帯をつくる。口唇部は丸みを帯び幅は狭くつくられ、貝目は見られない。播り目が内面

に施されるが、口縁部下位に余白を残すため、播り目の先端が僅かに看取できる程度で、細くシャープな播り目が粗く入れられるものと思われる。釉は、褐色の鉄釉が口唇部を除き残存部全面にかけられる。



第103図 物原 I（シラス下）出土遺物(35) 蓋

129～135は、蓋である。

129・130は、大形で口唇部が内側は高く外側は溝縁状を呈するものである。129は焼き歪みが強く、口唇部には胎土詰貝目、上面には黄白色のハマの痕跡が残る。釉は口唇部のみ拭い取られ、そのほかは緑褐色に発色した鉄釉が全面に施釉される。130は、図化しなかったが上面に貝目が僅かに看取される。

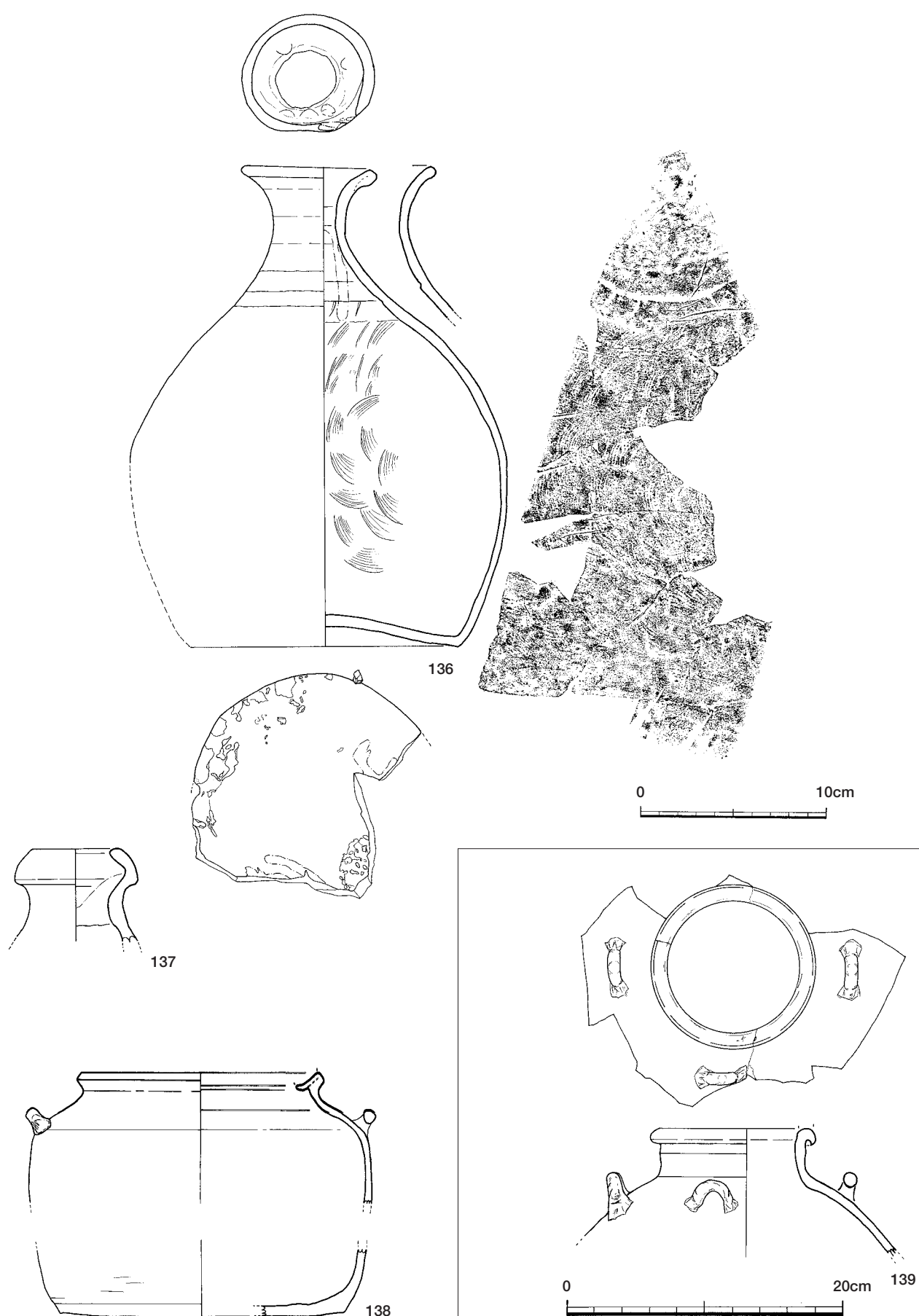
131～134は、口縁部を外反させた後、内側に折り返しおさめるもので、口唇部は丸みを帯びる。131は、上面に

イタヤガイの貝目がわずかに残り、口唇部には胎土詰貝目が残る。132は、上面にハマの痕跡が看取され、天井部に成形時のタタキ目が残る。133は、内面に目跡のような痕跡が残る。

135は、口縁部を外側に折り返して丸くつくった後、その端部を胴部になでつけておさめるもので、外面口縁部下位には、その痕跡が看取される。

第54表 物原 I 遺物観察表22

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
128	擂鉢	物Ⅰ-I下	—	—	—	褐灰色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	
129	蓋	シラス下	34.4	11.2	8.5	赤褐色	鉄釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	上面にハマの痕跡 口唇部に貝目
130	蓋	シラス下	29.4	17.6	6.8	にぶい褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目
131	蓋	シラス下	23.6	14.2	4.1	橙色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	口縁部に貝目 上面にイ タヤガイの貝目
132	蓋	シラス下	21.8	13.8	4.4	灰褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目・目跡 天井部にタタキ目
133	蓋	シラス下	21.4	12.2	4.1	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目 内面に目跡か?
134	蓋	シラス下	21.0	10.9	4.3	灰褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	焼き歪みが強い
135	蓋	シラス下	40.2	—	—	褐灰色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	蓋以外の可能性もあり



第104図 物原 I (シラス下) 出土遺物(36)徳利・壺

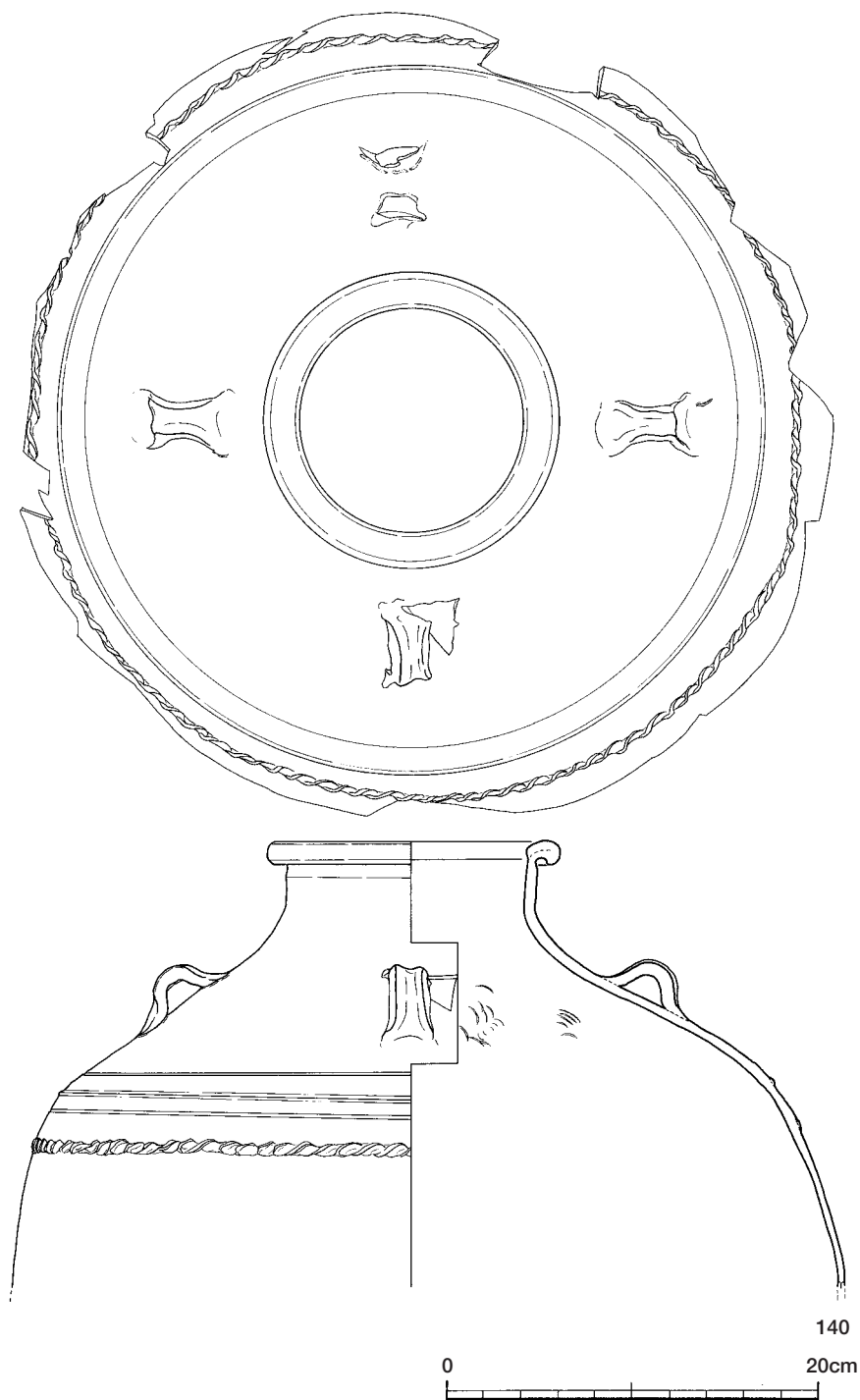
徳利・壺（第104・105図）

136・137は徳利である。136は焼け歪みが見られるものの完形に復元できた資料である。器形は「船徳利型」である。内面にはタタキ成形のあて具痕が同心円状に残るが、同心円の幅が狭く密である。外底面には、ハマの痕跡が残る。

137は、口縁部が「く」の字形に内傾する資料である。口縁部はこの形状を呈する徳利はこの一点のみで、徳利としたが他の器種の可能性も考えられる。また、胎土や釉薬の様子から堂平窯の資料として掲載したが、そうでない可能性も考えられる。

138～140は壺である。138は、図上復元を行ったもので、水注に似た器形を呈するが、耳が付くタイプであったため壺に分類した。口縁部は、内側に折り返され蓋受け部をつくり、釉は拭い取られる。耳は、肩部に横耳が2か所付く。139は、横耳が付く四耳壺である。口縁部は、外側に折り返され口唇部を丸くつくるものである。

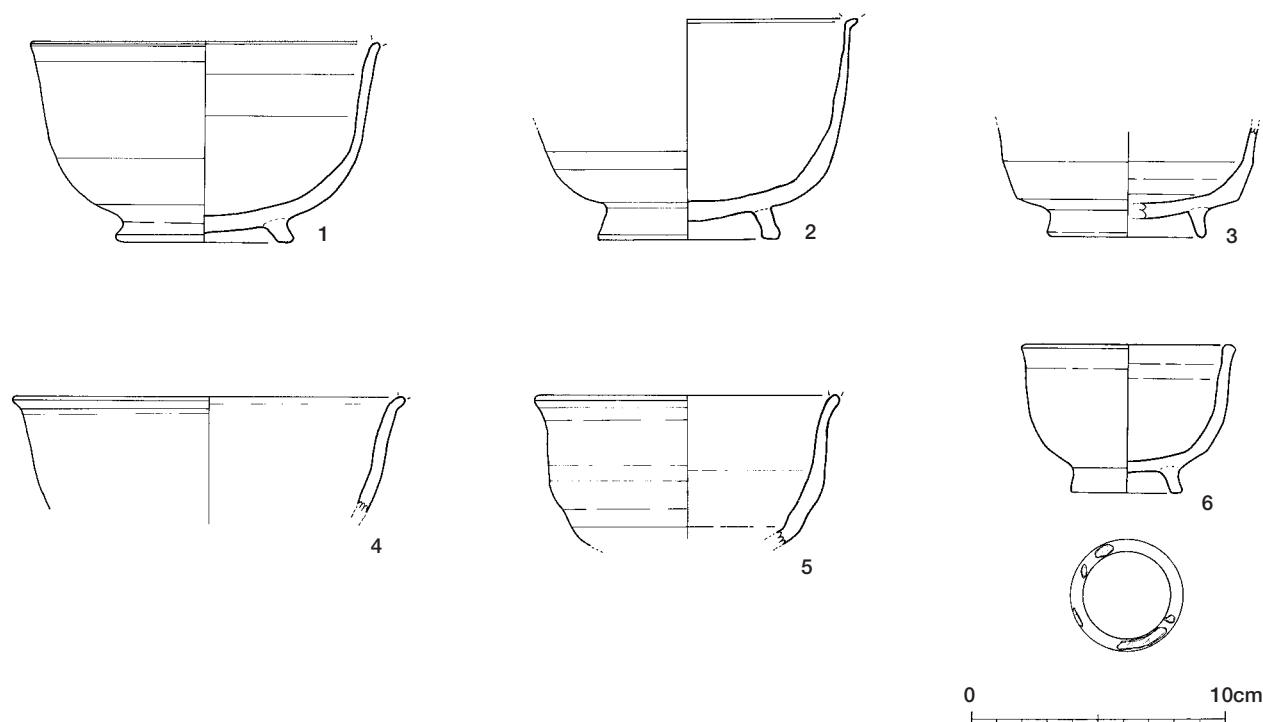
140は大形の資料である。縦耳がつく四耳壺である。口縁部は外側に折り返され、口唇部を丸くつくる。外面肩部には、縄状の突帯が1条貼り付けられ、その上位には微少な突帯2条と沈線1条が看取される。



第105図 物原 I（シラス下）出土遺物(37)壺

第55表 物原 I 遺物観察表23

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
136	徳利	シラス下	7.2	14.3	25.5	明褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	外底面にハマの痕跡 内面に同心円状のタタキ目
137	徳利	シラス下	4.8	—	—	にぶい黄橙色	鉄釉 黒褐色	外面と内面一部に施釉	
138	壺	シラス下	12.8	15.6	—	にぶい黄橙色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	横耳2か所と思われる
139	壺	シラス下	12.0	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	外面のみ施釉	四耳壺 横耳
140	壺	シラス下	15.7	—	—	黒褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	四耳壺 縦耳 内面に同心円状のタタキ目



第106図 物原Ⅱ出土遺物(1)碗

物原Ⅱ内出土遺物

物原Ⅱからは、碗・蓋・水注・德利・片口・播鉢・甕・壺・窯道具等が出土している。また、その他に、植木鉢・素焼きの鉢・瓦など、溝内出土遺物や物原Ⅰ内出土遺物にはほとんど見られなかった遺物が多く出土している。器形的にも、甕壺の蓋や甕、ハマなどで新しい器形の資料が見られる。製作技法としては、タタキ成形を行い、内面に同心円状のあて具痕が看取され、口唇部にも貝目残り、朝鮮的な様相は残しているものの、器壁はやや厚くなり、口縁部の形状等に肥前的な影響を受けた製品も見られ始めている。

さらに、特に甕・壺においては法量が大きくなる傾向が見られ、様々なバリエーションの製品が作られる。

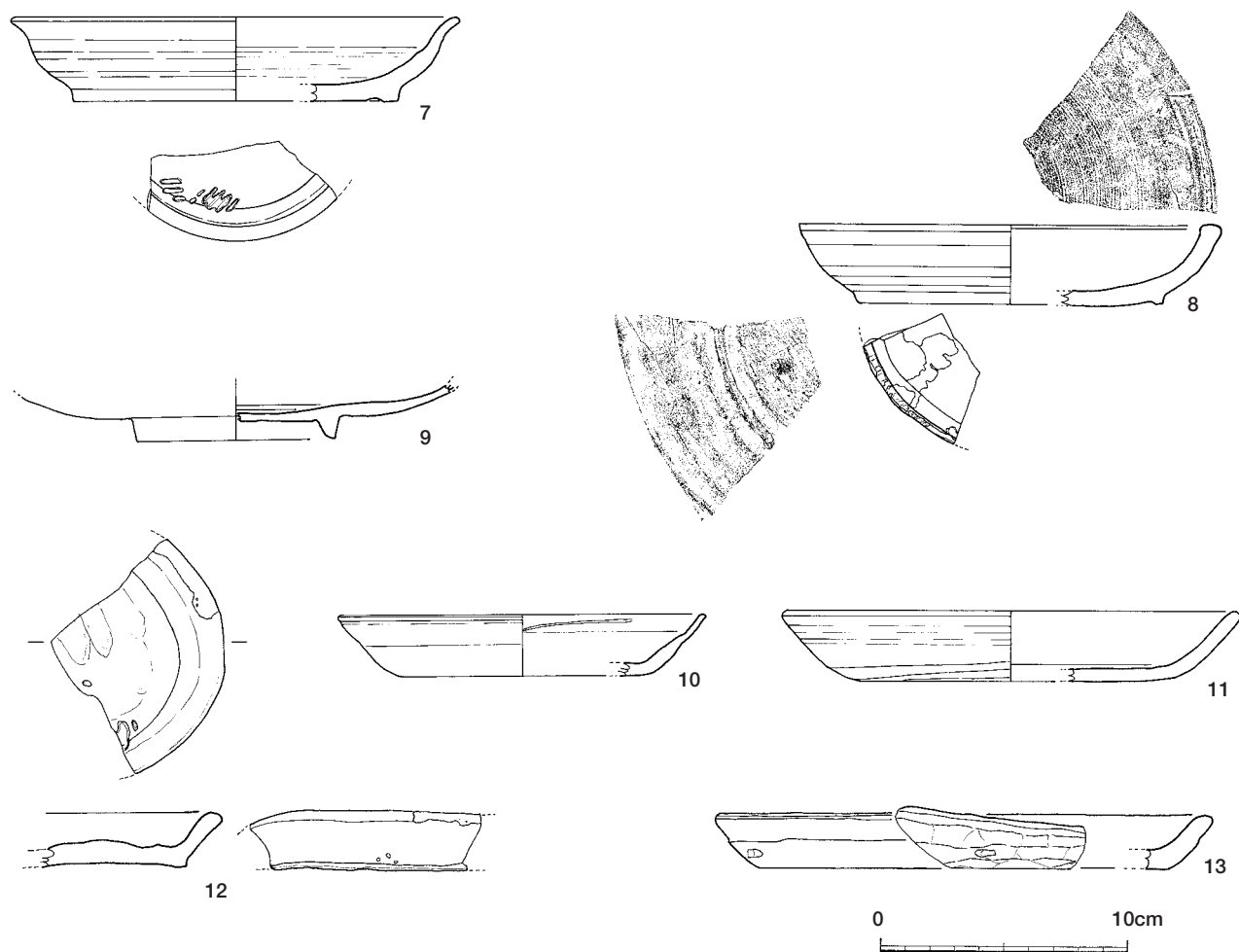
物原Ⅱ内の出土遺物は、溝内出土遺物や物原Ⅰ内出土遺物とはやや異なった様相を呈し、物原Ⅰに続く時期の製品と考えられる。

碗（第106図）

1・2は、腰部はやや膨らみ、口縁部で僅かに外反する器形を呈する資料である。高台は付け高台である。釉は口唇部を除き全面施釉され、口唇部の釉は、拭い取られている。また、外面腰部には削り調整の痕跡が残る。2は、口縁部先端が非常に薄くつくられる。3は、底部のみの資料である。胴部上位は欠損しているが、腰部で強く屈曲する形状を呈する。総釉である。4は、口縁部のみの資料である。口縁部先端の外反が強い。口唇部以外全面施釉される。5は、高台が欠損している資料である。口唇部の釉は拭い取られる。6は、小形の資料で、碗としたが他の用途に用いられた可能性も考えられる。釉は、総釉で、畳付には貝目が残る。

第56表 物原Ⅱ 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	物原Ⅱ 3.4DE	—	7.0	7.9	褐灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
2	碗	物原Ⅱ 下	—	7.2	8.7	黒褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	
3	碗	物原Ⅱ 中	—	6.3	—	灰色	灰釉 灰色	残存部全面施釉	
4	碗	物原Ⅱ 3.4DE	15.0	—	—	褐色	鉄釉 褐色	口唇部以外全面施釉	
5	碗	物原Ⅱ 下	6.0	—	—	黒褐色	灰釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	
6	碗	物原Ⅱ 上下	8.5	4.3	5.9	灰褐色	灰釉 灰緑色	総釉	畳付に貝目



第107図 物原Ⅱ出土遺物(2)皿

皿（第107図）

7～13は、皿である。皿という器種は溝内出土遺物や物原Ⅰ等には見られなかった器種である。本窯の出土遺物の中でも、皿類の出土は、ほとんど見られない。7～13の資料においてもバリエーションがあり、様々な器形のものが見られる。

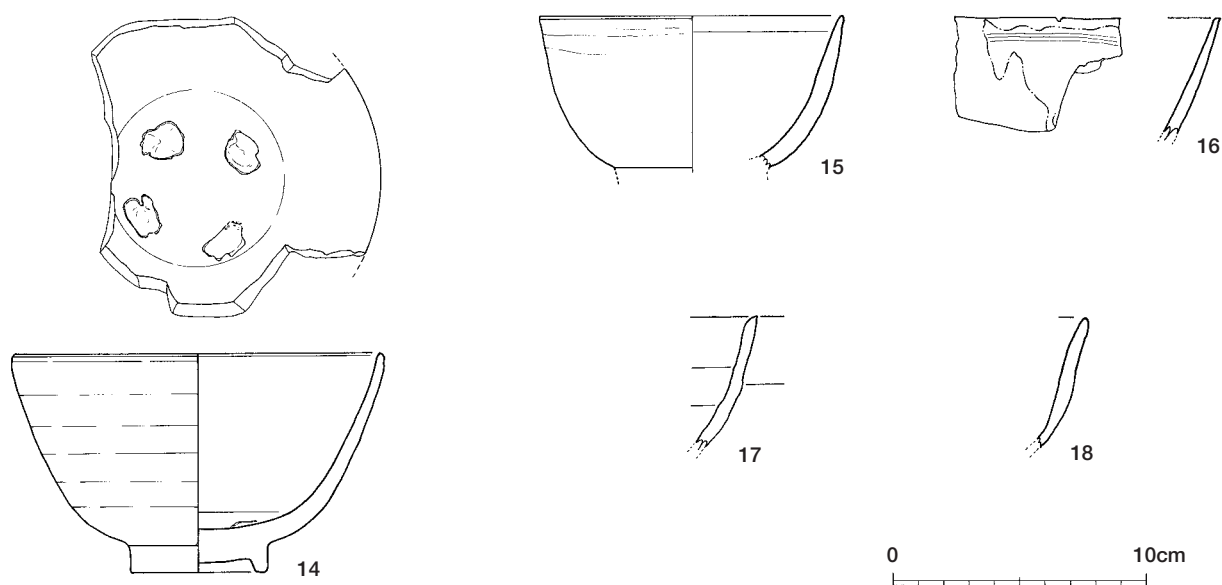
7・8は、高台を削り出してつくるもので、口縁部は、7は外反し、8は平坦につくられる。どちらも、外面胴部には削り調整の痕跡が残る、内面には筋状の調整痕が残る。また、畳付と高台内面には、貝目が残る。釉は、

薄い灰釉が総釉でかかる。9は、胎土が非常に緻密なもので、堂平窯の製品でない可能性もある。高台は削りだしてつくられる。

10～13は、皿として分類したが、皿ではない可能性も考えられる。10は素焼きである。器壁は薄くつくられる。11も素焼きのもので、高台はつくられない。外面腰部には削り調整の痕跡が残る。12は、焼き歪みなのか、歪な形状を呈するものである。鉄釉が外底面を除き厚くかかり、外底面にはハマの痕跡が残る。13は、厚手で素焼きの使用である。外面には削り調整の痕跡が残る。

第57表 物原Ⅱ 遺物観察表 2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
7	皿	物原Ⅱ中下	18.2	13.2	3.4	褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	畳付と高台内面に貝目
8	皿	物原Ⅱ下	17.0	12.4	3.2	灰緑色	灰釉 黄灰色	残存部全面施釉	畳付と高台内面に貝目
9	皿	物原Ⅱ 3.4DE	—	8.0	—	灰褐色	鉄釉 褐色	高台内面無釉	
10	皿	物原Ⅱ 3.4DE	15.0	9.5	2.5	にぶい赤褐色	無釉	—	
11	皿	物原Ⅱ下	18.6	13.0	2.9	明赤褐色	無釉	—	
12	皿?	物原Ⅱ上	—	—	2.3	黄灰色	鉄釉 緑褐色	底面無釉	高台内面に灰白色砂粒付着
13	皿	物原Ⅱ下	20.2	16.6	2.2	灰色	無釉	—	外面削り調整痕



第108図 物原Ⅱ出土遺物(3)白色陶胎 碗

白色陶胎碗（第108図）

物原Ⅱからは、薩摩で「白薩摩」と呼ばれる白色の胎土に透明釉をかけた陶器が出土した。これらは、溝内や物原Ⅰからは出土しておらず、物原Ⅱ・第2地点の物原でのみ出土している。

白色陶胎は一般的に上手の製品で、本窯でも正面にあたる部分に鉄釉で景色をつくった碗や皿が出土している。しかし、同時期に白色陶胎を生産していた堅野系冷水窯の製品と比較すると、作りは雑でシャープさにかける。

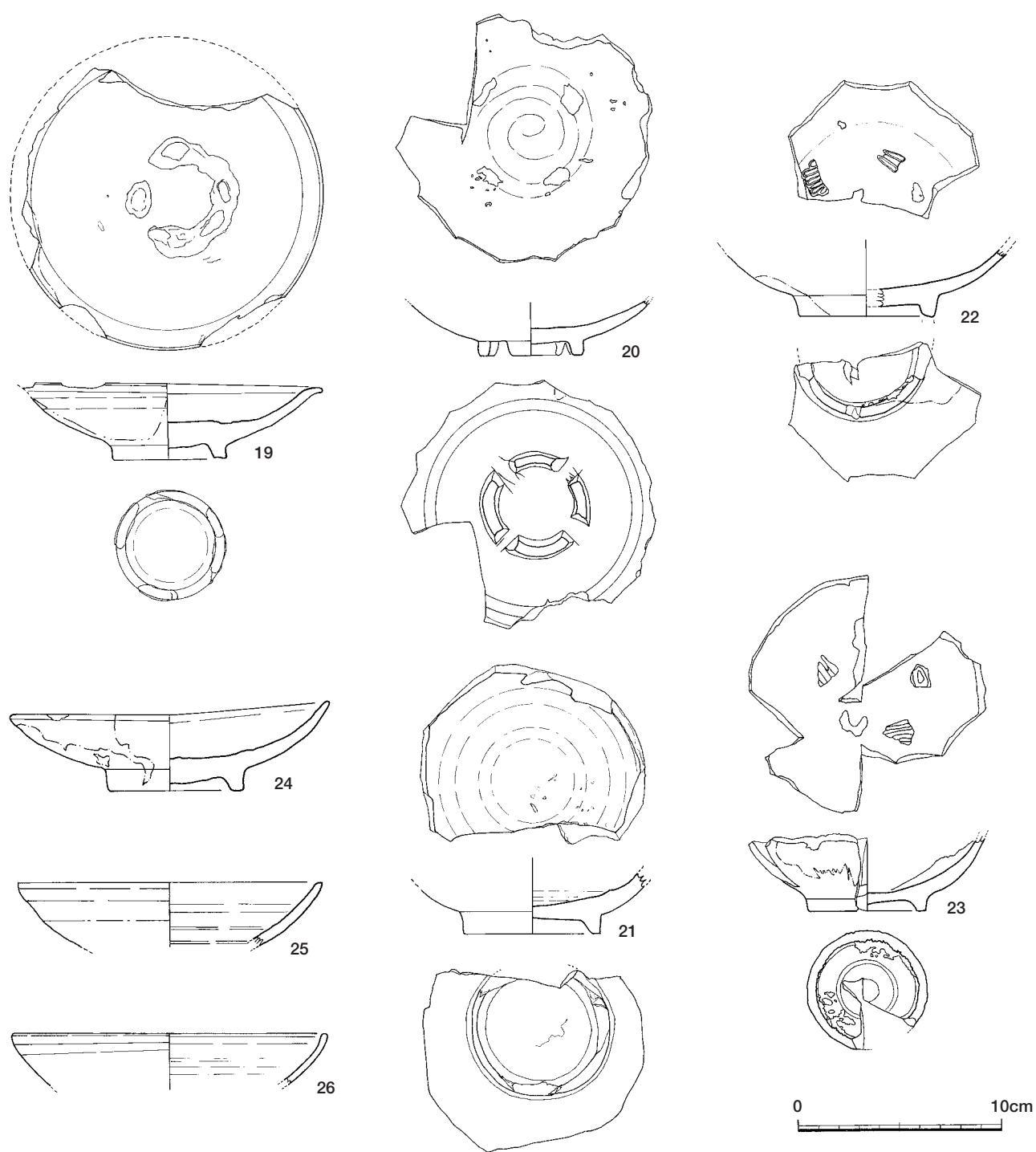
胎土は、白色又は黄白色で緻密ではあるが粘性にやや

欠ける。釉は、やや白濁した透明釉が、畳付を除き総釉でかかる。

14～17は、白色陶胎の碗である。口縁部は外反せず、まっすぐに伸びる。14は、高台が削り出しでつくられており、高台の高さに対して、高台内面の削りは半分程度である。畳付と高台内面には砂粒を含む白色の胎土目が付着している。内面に目跡が器面を挟るように4か所残る。15は、高台部が欠損したものである。外面口縁部下位に筋状の調整痕が残る。16～18は、16は外面に、鉄釉で景色が施される。17・18は、胴部が中位でやや屈曲する。

第58表 物原Ⅱ 遺物観察表 3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
14	碗	物原Ⅱ 3.4E	14.6	5.4	8.6	淡黄色	透明釉	全面施釉	見込みに目跡 畳付・高台内面に白色砂粒を含む胎土付着
15	碗	物原Ⅱ下 3.4DE	12.0	—	—	浅黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	鉄釉で景色をつくる
16	碗	物原Ⅱ 3.4DE	—	—	—	浅黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	
17	碗	物原Ⅱ	—	—	—	黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	
18	碗	物原Ⅱ 3.4E	—	—	—	浅黄橙色	透明釉	残存部全面施釉	
19	皿	物原Ⅱ 3.4DE	15.2	5.4	3.6	浅黄橙色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに高台痕
20	皿	物原Ⅱ 3.4E	—	5.1	—	灰白色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに目跡 切り高台
21	碗	物原Ⅱ 3.4E	—	6.6	—	浅黄橙色	透明釉	全面施釉	
22	皿	物原Ⅱ 3.4E	—	6.7	—	浅黄橙色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに貝目 畳付高台内面に砂粒を含む粘土
23	皿	物原Ⅱ 3.4E	—	5.8	—	浅黄橙色	透明釉	畳付以外全面施釉	見込みに貝目 畳付高台内面に砂粒を含む粘土 鉄釉で景色をつくる
24	皿	物原Ⅱ	15.7	6.4	4.4	白色	透明釉？ 黄褐色	畳付以外全面施釉	鉄釉で景色をつくる
25	皿	物原Ⅱ 3.4E	14.9	—	—	淡黄色	無釉	—	
26	皿	物原Ⅱ 3.4E	15.4	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全面施釉	



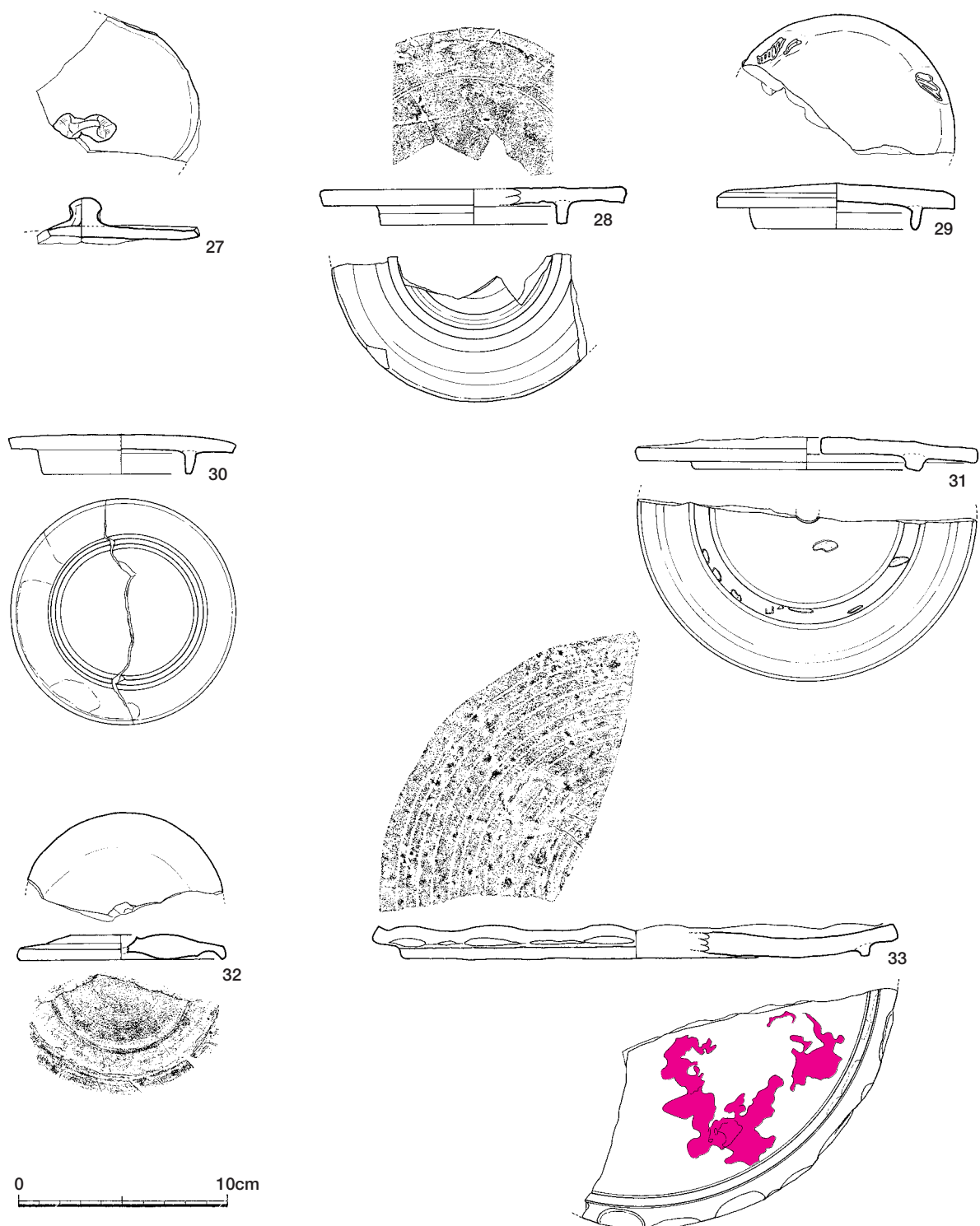
第109図 物原Ⅱ出土遺物(4)白色陶胎 皿

白色陶胎皿（第109図）

19～26は、白色陶胎の皿である。高台は削り出しでつくられている。胎土は、白色で緻密である。釉は透明釉がかかり、鉄釉が景色として1か所かけられるものも見られる。また、外面には、削り調整の痕跡が筋状に見られる。

19は、口縁部が強く外反する器形を呈する。見込みに

は、他製品の高台痕が残り、一部畳付が熔着する。外底面にも目跡が4か所残る。20～24は、口唇部が欠損しているものである。20は、切り高台である。内面には、かすかに目跡が残る。21は、見込みに目跡がないものであるが、灰が被っている。畳付には目跡が残る。22・23は見込みに貝目の残る資料である。畳付から高台内面にかけて砂粒混じりの白色胎土が付着する。



第110図 物原Ⅱ出土遺物(5)蓋

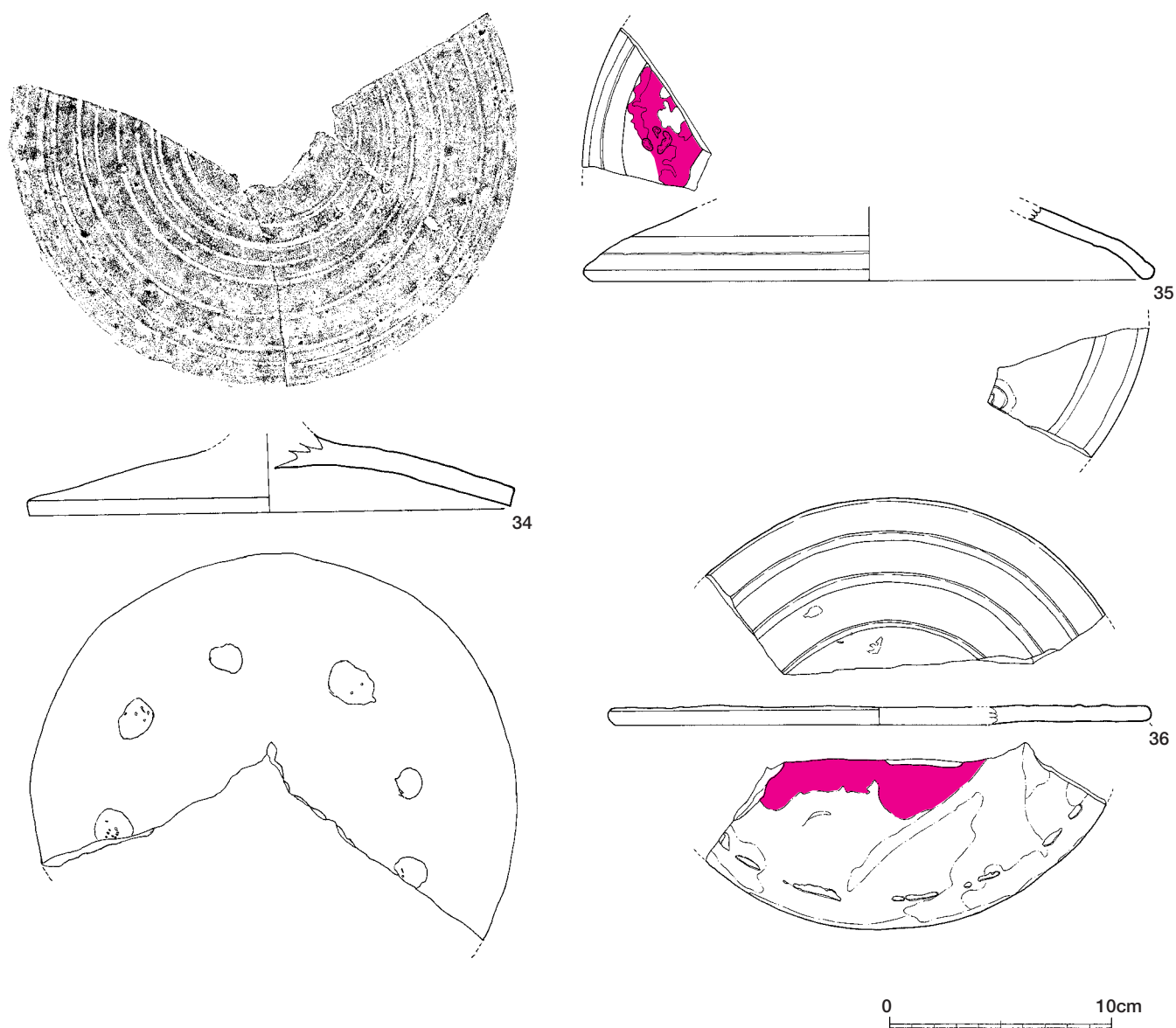
蓋 (第110・111図)

甕・壺に被せる、浅鉢型の器形以外のものを掲載する。形状から、大きく3つに分けることができる。

27は、平面が円板状を呈し、上面中央にアーチ状のつまみを有す。

28～31・33は、下面に粘土紐を丸く貼り付けて、身受

け部をつくるものである。28は、上面に筋状の調整痕が残る。29は、上面に貝目が残る。30は、完形に接合できた資料である。31は、中心部に穿孔が施される。33は大形で、上面に細い沈線が巡る。下面には、ハマの目跡と思われる痕跡が残る。



第111図 物原Ⅱ出土遺物(6)蓋

32・34～36は、特殊な形状のものであり、蓋でない可能性も考えられる。32は、上面に沈線が巡り、つまみは欠損している。下面には貝目が残る。34は、焼き締め

で、上面にハマの目跡と思われる痕跡が残る。36は、上面に沈線が巡り、下面には、ハマの痕跡と他製品の口縁部と思われる一部が熔着する。

第59表 物原Ⅱ 遺物観察表 4

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	つまみ径	器高				
27	蓋	物原Ⅱ 3.4DE	10.6	3.0	0.4	褐灰色	無釉	—	
28	蓋	物腹Ⅱ 中3.4DE	8.9	—	1.8	灰褐色	鉄釉	—	底径14.6cm
29	蓋	物原Ⅱ 中3.4DE	7.8	—	2.0	黒褐色	無釉	—	底径11.4cm 上面に貝目
30	蓋	物原Ⅱ 中3.4DE	6.6	—	1.8	灰褐色	無釉?	—	底径11.0cm 上面に目跡
31	蓋	物原Ⅱ 中	10.8	—	1.4	灰褐色	無釉	—	底径16.3cm 上面に目跡 下面に貝目
32	蓋	物原Ⅱ 下3.4DE	10.0	—	0.6	灰褐色	無釉	—	
33	蓋	物原Ⅱ 中	22.4	—	1.6	黒褐色	灰釉 緑褐色	全面施釉	底径25.1cm 下面に貝目
34	蓋	物原Ⅱ 中3.4DE	21.9	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	下面に貝目
35	蓋	物原Ⅱ 中3.4DE	25.0	—	—	褐灰色	無釉	—	下面に貝目
36	蓋	物原Ⅱ 中3.4DE	24.5	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	上面の全部と下面の一部に施釉	下面中央に目跡 口唇部に他製品一部が熔着



第112図 物原Ⅱ出土遺物(7)德利

德利（第112～115図）

「舟德利」型を呈する資料が中心であるが、「鶴首」型と呼ばれる頸部が細長く、肩部がなで肩の形状のものも見られるようになる。このタイプは、物原Ⅱ以前の時期に相当する製品の中には見られず、この時期になって初めてつくられる製品と考えられる。肥前系時磁器の德利を模造したものと思われる。その他に、器壁が厚く、口縁部もぼつりとした形状の資料もみられる。

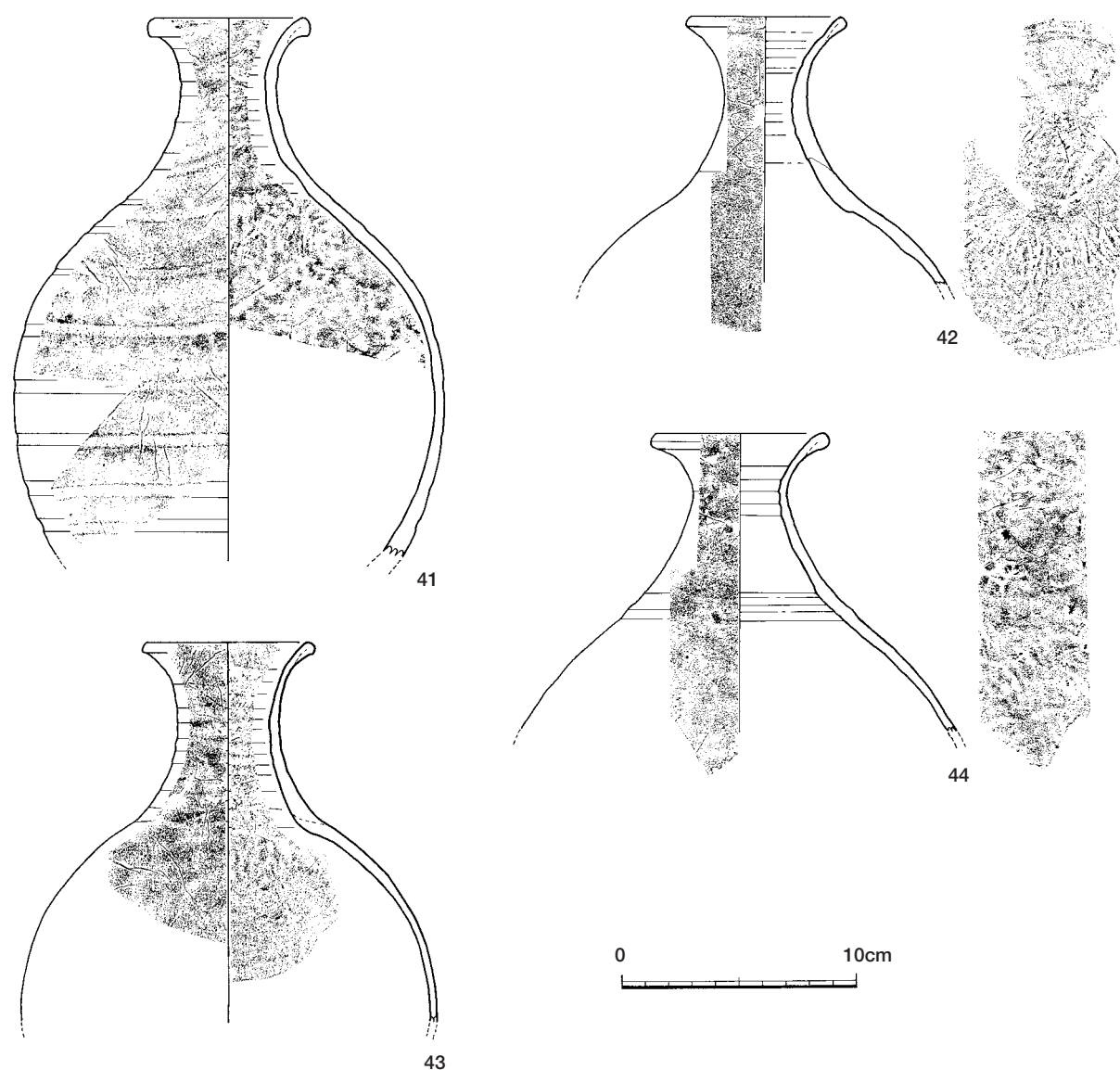
器形や口縁部の形状により、大きく3つに分けることができる。また、その跡に胴部から底部のみの資料を掲載した。

37～44は「舟德利」と呼ばれる形状を呈するもので、外面の沈線の有無により、さらに3つに細分化できる。

37～39は、外面肩部に沈線を有する資料である。口縁部は端部で外反し、丸くおさめるが、38のみ玉縁状を呈する。内面には同心円状のタタキ目残り、頸部には筋状のナデ調整の痕跡が残る。

41は、外面胴部全体に沈線が巡る資料である。口縁部は、玉縁状を呈する。内面には同心円状のタタキ目が残る。

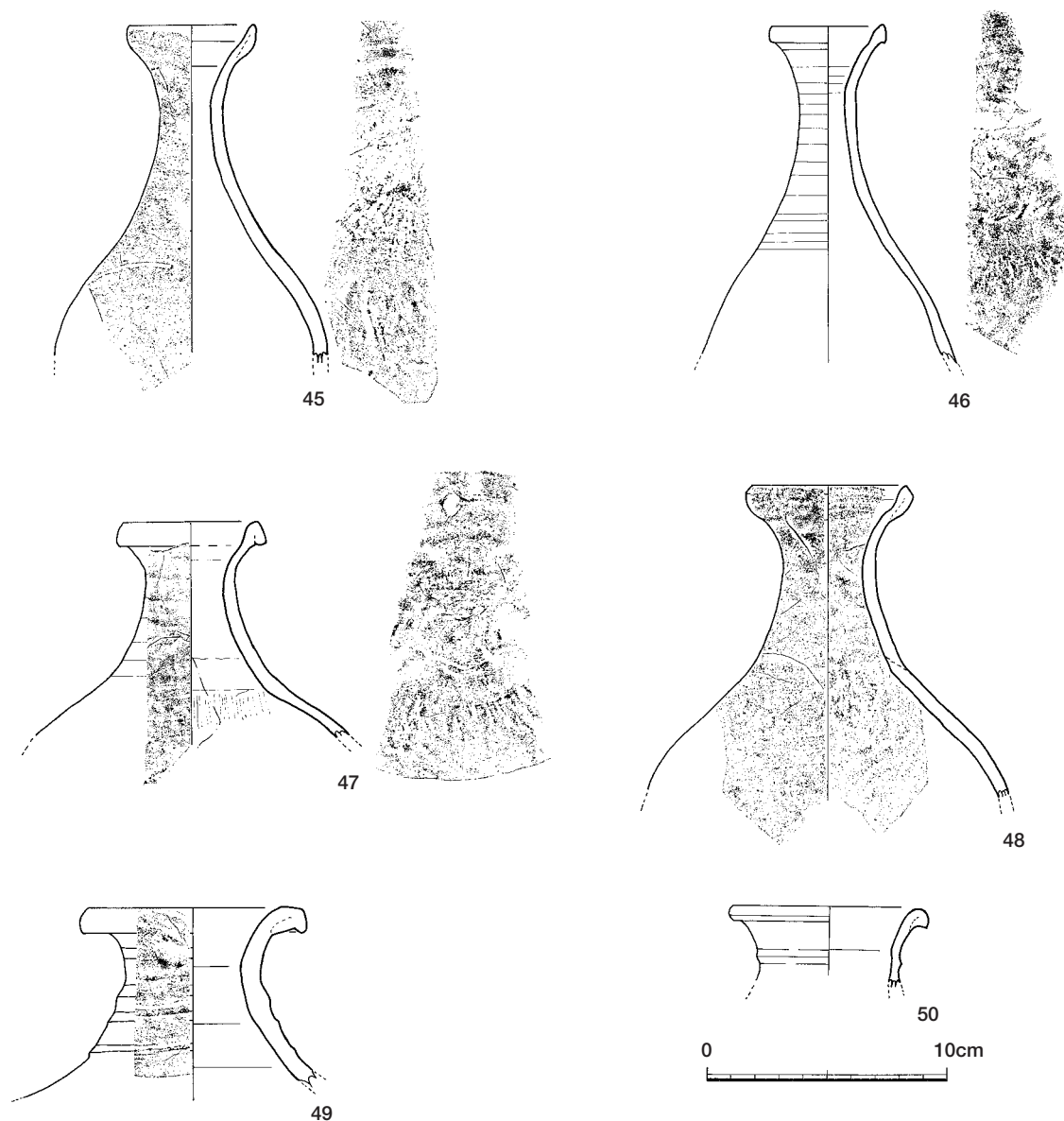
42～44は肩部に沈線を有さない資料である。口縁端部は、外反せず丸くおさめる。



第113図 物原Ⅱ出土遺物(8)徳利

第60表 物原Ⅱ 遺物観察表 5

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
37	徳利	物原Ⅱ	6.4	—	—	灰褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 内面に同心円状タタキ目
38	徳利	物原Ⅱ中	6.4	—	—	にぶい褐色	灰釉 灰白色	外面全部施釉 内面一部無釉	肩部に沈線 内面に同心円状タタキ目
39	徳利	物原Ⅱ下	5.7	—	—	にぶい黄褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 内面に同心円状タタキ目
40	徳利	物原Ⅱ	5.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 黄灰色	外面残存部全面施釉	肩部に沈線 内面に同心円状タタキ目
41	徳利	物原Ⅱ下	6.3	—	—	にぶい橙色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 内面に同心円状のタタキ目
42	徳利	物原Ⅱ下	7.4	—	—	褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
43	徳利	物原Ⅱ下	6.8	—	—	にぶい橙色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
44	徳利	物原Ⅱ下	7.6	—	—	褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目



第114図 物原Ⅱ出土遺物(9)徳利

45・46は、「鶴首」型と呼ばれる頸部が細長く、肩部がなで肩の形状のものである。

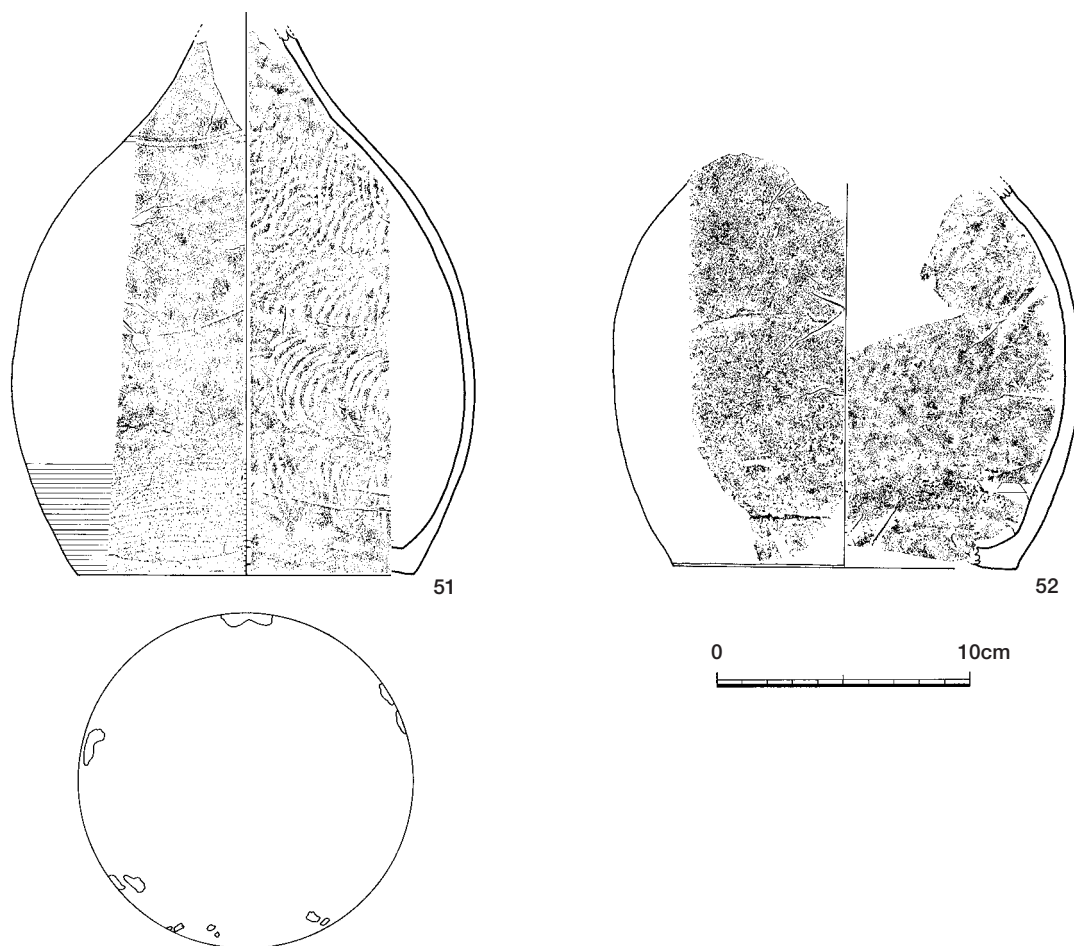
45は、口縁端部を上方へ引き延ばすようにつく。外面には、横方向の筋状の調整が施され、内面には同心円状のタタキ目が残る。46は、口縁端部が玉縁状につくられるものである。外面頸部には、細い筋状の稜線が入る。内面は、同心円状のタタキ目が残る。

47～50は、器壁が厚く、口縁部がぼってりとした形状の資料である。

47は、口縁端部が玉縁状につくられる。外面は、ヘラ状工具による横方向の調整痕が残る、内面は同心円状のタタキ目残り、頸部付近は特にタタキが密に残る。48は、口縁端部がやや内碗気味につくられる。内外面の調

整痕は、47と同様である。

49・50は口径も他に比べて大きく、器壁も厚い。口縁部はどちらも外反し、端部が下垂するようにつくられる。49は、外面頸部は、轆轤を回転させながら指で器面調整を行ったと思われ、緩い稜が看取される。釉は、薄い灰釉がかかり、内面は無釉である。50は、49に比べて器壁は薄手であるが、口縁径は大きく大形の徳利になるものと思われる。残存部には灰釉がかけられる。



第115図 物原Ⅱ出土遺物(10)徳利

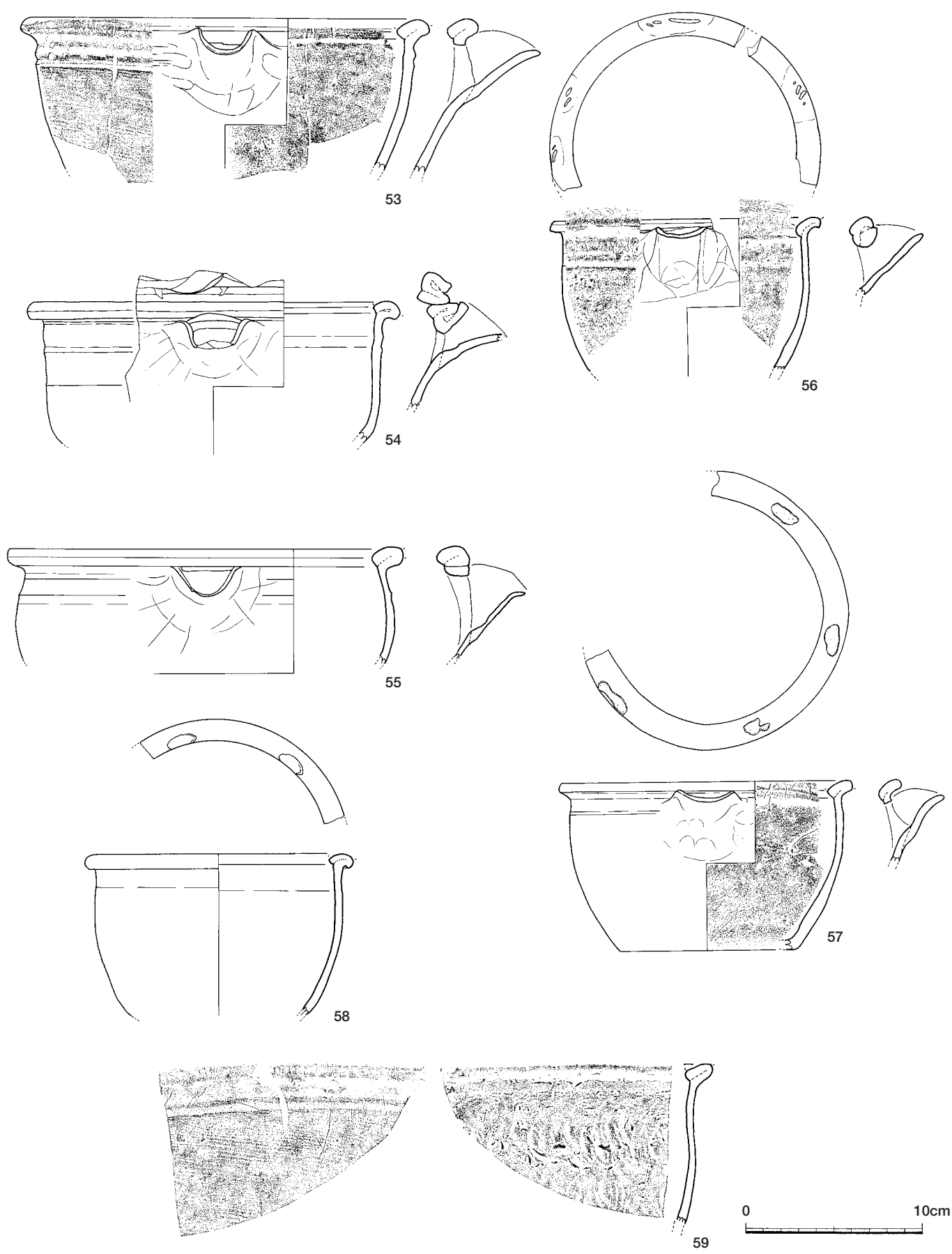
51・52は、「舟徳利」型を呈する資料で、胴部から底部にかけてのものである。

51は、肩部に弱い沈線が1条巡る。内面胴部全面には、同心円状のタタキ目が明瞭に看取される。外面は、胴部下位にのみヘラ状工具による横方向の調整が施され

る。外底面には、貝目が残る。残存部全面に灰釉がかかる。52は、やや焼成不良である。内面は同心円状のタタキ目が残るが、明瞭でない。外面胴部下位に、削り調整の痕跡が残る。

第61表 物原Ⅱ 遺物観察表 6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
45	徳利	物原Ⅱ中3.4DE	5.4	—	—	褐色	灰釉 暗灰黄色	外面の全部と内面の上部に施釉	内面に同心円状のタタキ目
46	徳利	物原Ⅱ中3.4DE	5.1	—	—	灰黄褐色	灰釉 黒褐色	外面の全部と内面の上部に施釉	内面に同心円状のタタキ目
47	徳利	物原Ⅱ	6.2	—	—	にぶい黄橙色	鉄釉 黒褐色	外面の全部と内面の上部に施釉	内面に同心円状のタタキ目
48	徳利	物原Ⅱ中3.4DE	6.4	—	—	褐灰色	灰釉 黄褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
49	徳利	物原Ⅱ D E	9.4	—	—	褐色	灰釉 浅黄色	外面の全部と内面の口縁部に施釉	
50	徳利	物原Ⅱ中	8.2	—	—	褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	
51	徳利	物原Ⅱ 3.4DE	—	13.2	—	灰褐色	灰釉 緑褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目 外底面に貝目
52	徳利	物原Ⅱ下	—	6.8	—	にぶい黄橙色	灰釉 鈍い黄褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状のタタキ目



第116図 物原Ⅱ出土遺物(11)片口

片口（第116・117図）

口径が20cm程度の大形のものと15cm程度の小形のものが見られる。

製作方法は、円板状の底面の上に粘土紐を輪積み上げ、タタキ成形でつくられており、内面には同心円状のあて具痕が残る。口縁部は端部で外側に折り、さらに内側に折り返して丸くおさめる。「T」字状を呈する資料もある。釉薬は、褐色系の鉄釉や緑褐色系の灰釉がかけられ、口唇部のみ釉が拭い取られている。口唇部や外底面に貝目が残る資料もあり、また、窯詰め方法は、熔着資料から合わせ口で行われたことが分かる。

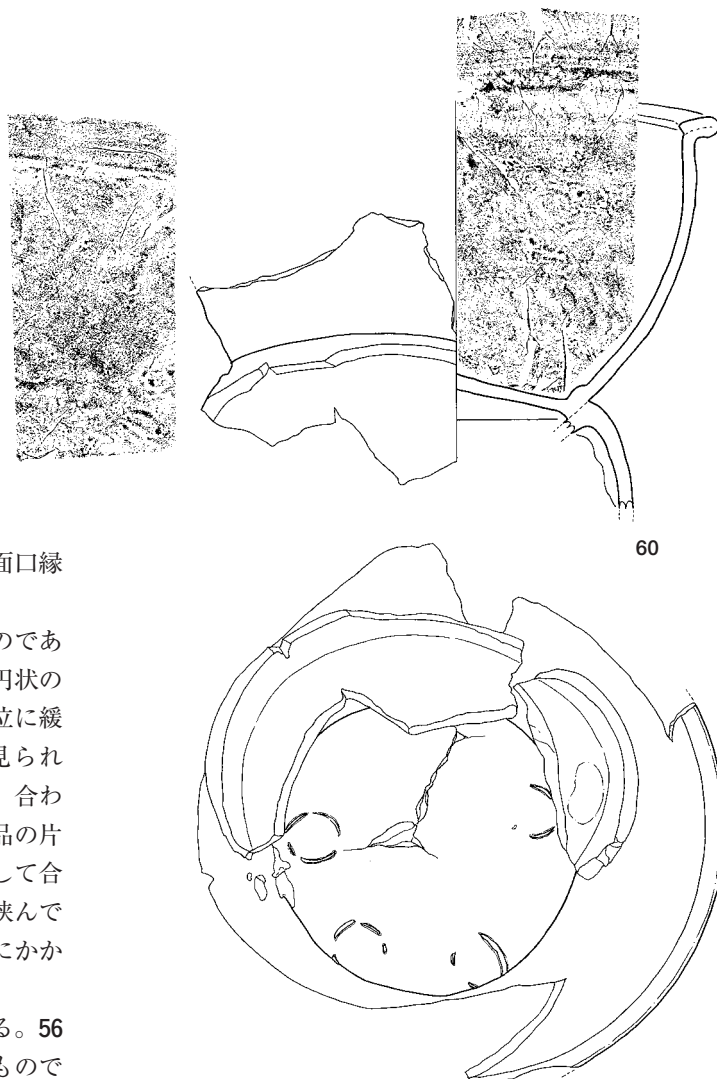
口径の大きさにより、2つに分けることができる。

53～55は、口径が20cm程度の大形の資料で、外面口縁部下位には、緩い稜が1条巡る。

53は、外面に平行タタキの痕跡が明瞭に残るものである。内面は、ナデ調整が施されているため、同心円状のタタキ目はほとんど残っていない。外面口縁部下位に緩い1条の稜を有する。54は、胴部に焼け歪みが見られる。口唇部には、他製品の口唇部が熔着しており、合わせ口で焼成したものであると思われる。その際、下の製品の片口部と上の製品の片口部が同じ位置になるようにして合わせている。また、口唇部と口唇部の間に、貝が挟んでいない。55は、口唇部を除き、灰釉が残存部全面にかかる。内面には同心円状のタタキ目が残る。

56～58は、口径が15cm程度の小形の資料である。56は、口唇部に貝殻の背面を利用した目跡がのこるものである。57・58は、口唇部に胎土詰貝目残り、釉は、口唇部を除き残存部全面に施釉される。57は、内面に同心円状のタタキ目が残るが、ナデ調整が施されているため明瞭でない。58は、鉄釉が厚くかかるため、内面の同心円状タタキ目の痕跡が不鮮明である。

59は、外面に平行タタキ目の痕跡が強く残るもので、内面は釉が厚くかかるため同心円状のタタキ目は不鮮明である。

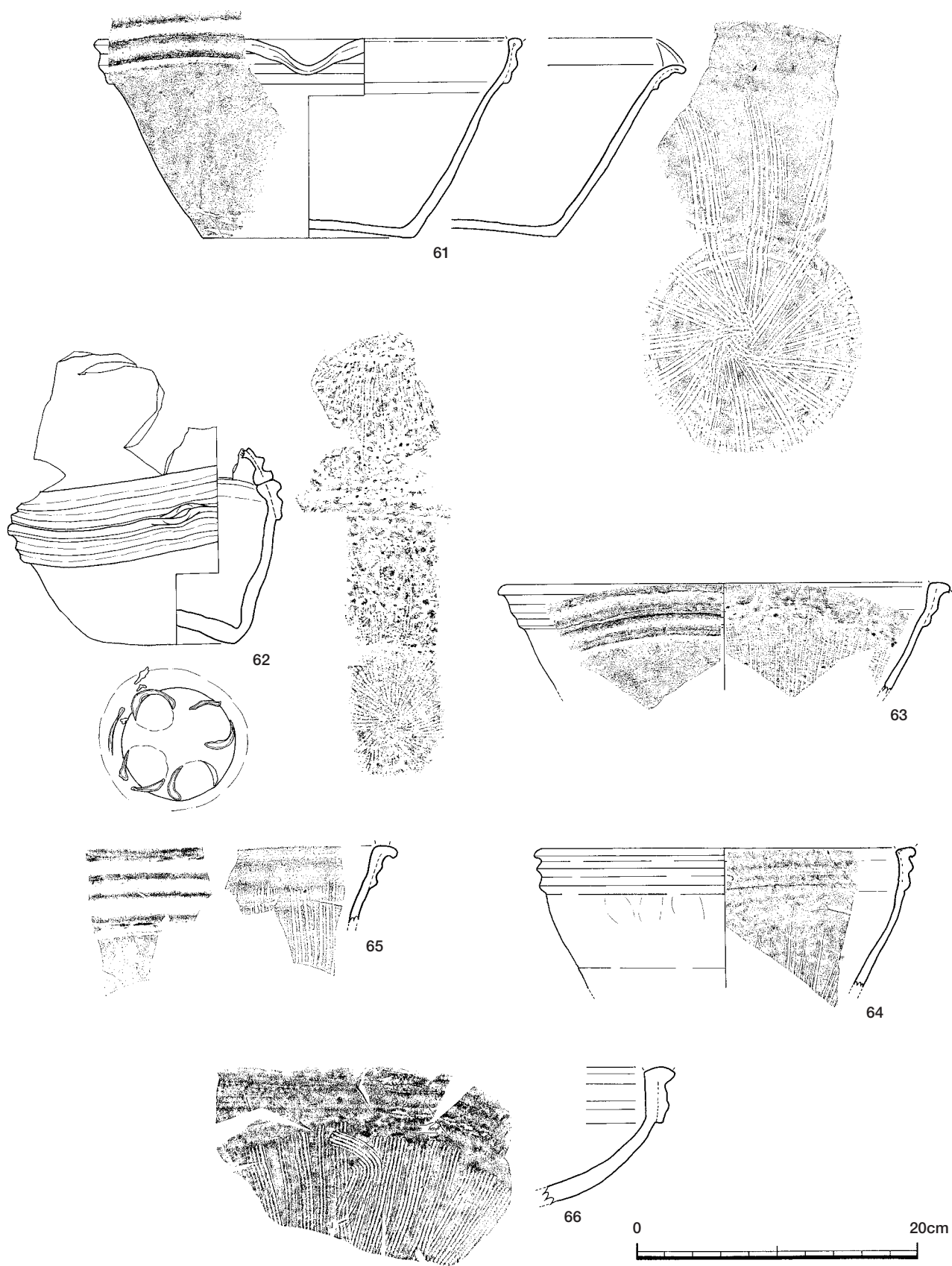


第117図 物原Ⅱ出土遺物(12)片口

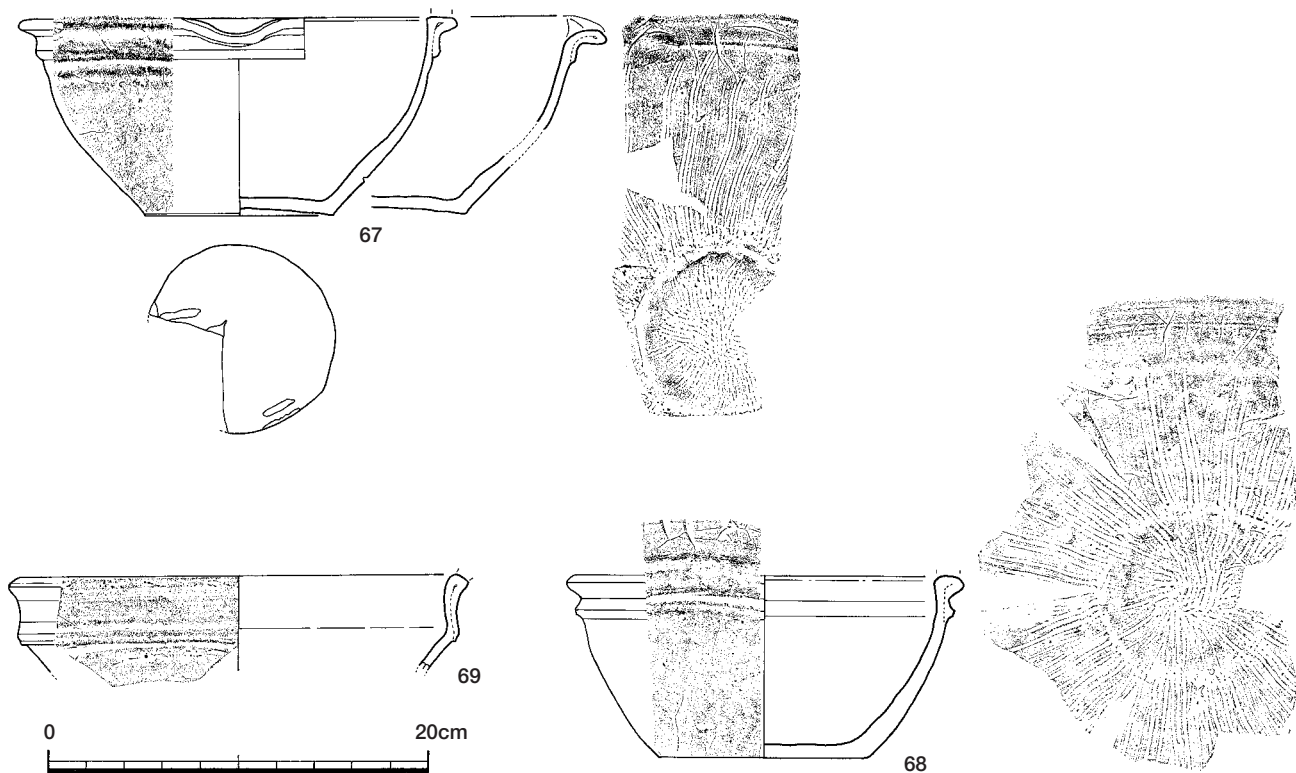
60は、底部同士を合わせて焼成したものが熔着した資料である。下部の製品の内面は施釉されていないことから、徳利や壺等の片口以外の製品である可能性も考えられる。徳利であれば、片口が下になるものと思われる。また、片口の口唇部には、合わせ口をした痕跡も残る。

第62表 物原Ⅱ 遺物観察表 7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
53	片口	物原Ⅱ	22.8	—	—	褐色	灰釉	暗緑褐色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
54	片口	物原Ⅱ下	21.2	—	—	にぶい褐色	鉄釉	暗褐色	口唇部以外全面施釉	他製品口唇部熔着
55	片口	物原Ⅱ	22.2	—	—	にぶい黄褐色	灰釉	黄褐色	口唇部以外全面施釉	
56	片口	物原Ⅱ	15.2	—	—	灰褐色	灰釉	灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面に同心円状のタタキ目
57	片口	物原Ⅱ下	16.4	—	—	灰褐色	灰釉	緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
58	片口	物原Ⅱ	15.2	—	—	黒褐色	鉄釉	黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
59	片口	物原Ⅱ 3.4	23.4	—	—	褐灰色	灰釉	灰黄色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
60	片口	物原Ⅱ下	—	—	11.9	黒褐色	灰釉	黄褐色	口唇部以外全面施釉	底部熔着 外底面に貝目 内面に同心円状のタタキ目



第118図 物原Ⅱ出土遺物(13)播鉢



第119図 物原Ⅱ出土遺物(14)擂鉢

擂鉢（第118～123図）

物原Ⅱの擂鉢は、一般的な器形としては体部が「逆ハ」の字に開く形状を呈する。大きさは大形のもの小形のものさまである。口縁部は外側に折り返して肥厚させ、2～3条の突帯をつくる。口唇部は、丸くつくるものや、やや丸みを帯びるが平坦なものがあり、丸くつくれるものには貝目は見られない。平坦なものには、貝目が残るものと残らないものが見られる。外底面には、貝目や黄褐色のハマの目跡と思われる痕跡が看取される。

口唇部の形状から、口縁部の幅が狭く丸くつくれるものと、幅が広く平坦気味につくれるものの大きく2つに分けることができる。

61は、口唇部が丸くつくれるものである。擂り目は太く粗いもので、内底面中心から口縁部下位に向けて放

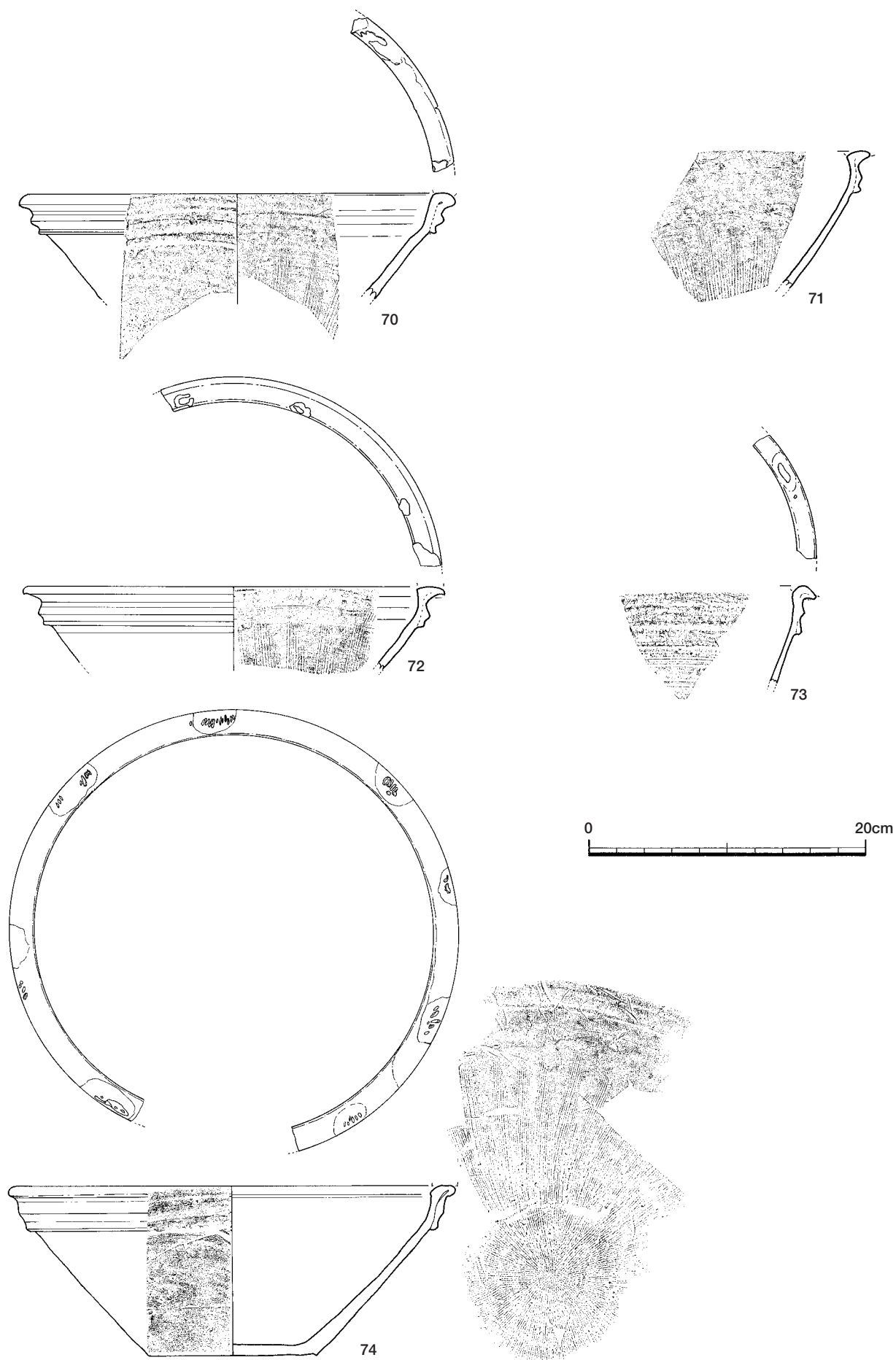
射状に施され、口縁部下位には余白を残す。

62～81は、口唇部の幅が広く平坦気味につくれるものである。擂り目は、細くシャープである口唇部の貝目の有無により、さらに細分化することができる。

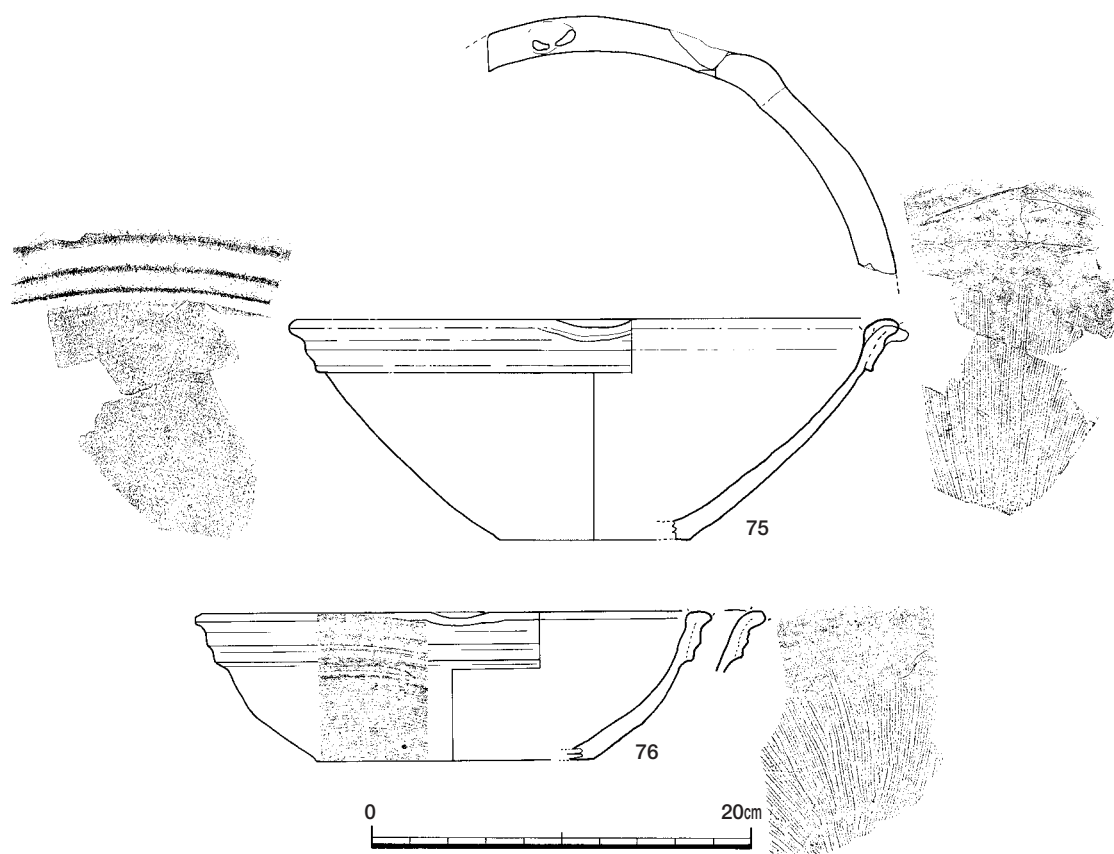
62～69は、口唇部に貝目が残らないものである。62は、2固体分の擂鉢が合わせ口で熔着した資料である。上下関係ははっきりしないが、片方の擂鉢の外底面には貝目が残ることから、さらに重ね焼きをしたものと考えられる。65は、器壁が厚く、焼き歪みも見られるものである。67・68は、中型で法量もほぼ同じ資料である。口縁部外面に突帯は、1条のみである。下位には削り調整の痕跡が僅かに残る。67の外底面には、貝目が残る。小形のイタヤガイと思われる。69は、口縁部外面に突帯が1条巡ものである。口唇部には合わせ口の痕跡が残る。

第63表 物原Ⅱ 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
61	擂鉢	物原Ⅱ中	30.5	14.8	14.0	茶褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
62	擂鉢	物原Ⅱ中・ 下・1E	—	8.0	—	にぶい橙色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目 焼成不良
63	擂鉢	物原Ⅱ下	32.0	—	—	灰色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	
64	擂鉢	物原Ⅱ	27.0	—	—	灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
65	擂鉢	物原Ⅱ下	—	—	—	灰色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	焼成不良
66	擂鉢	物原Ⅱ	—	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
67	擂鉢	物原Ⅱ下	23.2	10.0	10.4	茶褐色	灰釉 黄橙色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
68	擂鉢	物原Ⅱ下	21.0	10.5	9.5	褐色	灰釉 黄橙色	口唇部以外全面施釉	
69	擂鉢	物原Ⅱ	24.2	—	—	にぶい橙色	灰釉 黄橙色	口唇部以外全面施釉	



第120図 物原Ⅱ出土遺物(15)鐻鉢



第121図 物原Ⅱ出土遺物(16)擂鉢

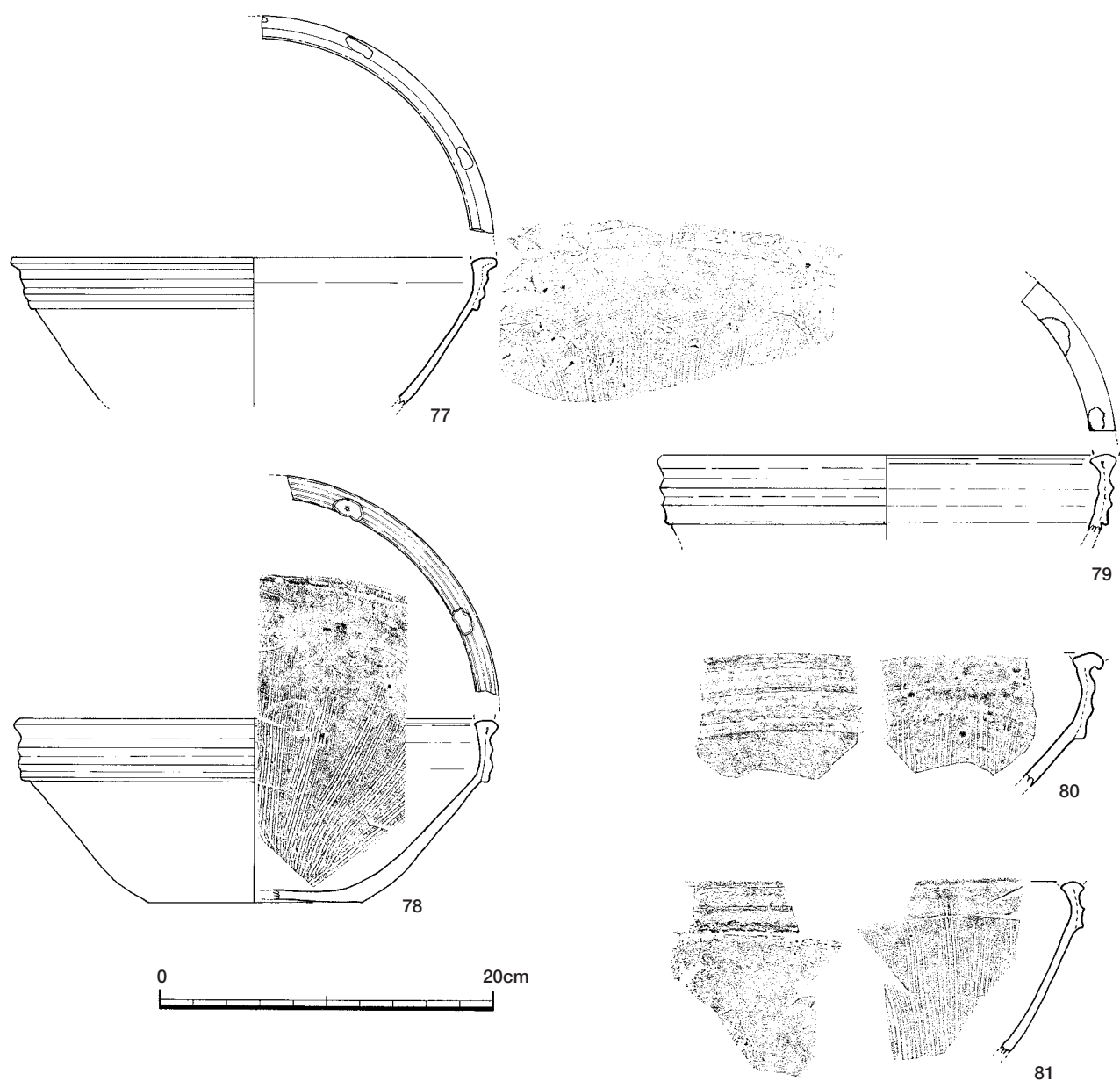
70～76は、口唇部の幅が広く平坦気味につくられるもので、貝目が残る資料である。擂り目は、細くシャープである。

70は、器壁がやや厚い。外面は平行タタキの痕跡であろうか、調整痕が看取されるが、釉が厚くはっきりとしない。71は、内面上位に、同心円状のタタキ目が残るものである。72・73は、口縁端部が外側に伸びるものである。73は、外面にヘラ状工具による横方向の調整痕が施される。74・75は、口径と底径の差が大きい資料である。細くシャープな擂り目が、内底面中心から放射状に施さ

れ、口縁部下位には余白を残す。外面には横方向の筋状の調整痕が残る。釉は、口唇部以外全面に灰釉がかけられる。74は、口唇部に貝殻の背面を利用した貝目が残る。75は、腹縁を利用した貝目が残る。76は、焼き歪みの激しい資料で、74・75の擂鉢の器高を低くした形状を呈する。内面口縁部下位の擂り目が施されない部分には、横方向の筋状の調整痕が看取される。一部、上から擂り目がかかる箇所もある。外面は、ヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。また、口唇部に貝目は見られない。

第64表 物原Ⅱ 遺物観察表 9

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
70	擂鉢	物原Ⅱ	31.6	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
71	擂鉢	物原Ⅱ上	—	—	—	灰色	灰釉 にぶい黄橙色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面 に平行タタキ目
72	擂鉢	物原Ⅱ	30.0	—	—	赤褐色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
73	擂鉢	物原Ⅱ	—	—	—	褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
74	擂鉢	物原Ⅱ	32.2	12.2	12.3	赤褐色	灰釉 灰白色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
75	擂鉢	物原Ⅱ	32.4	10.2	11.6	にぶい赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
76	擂鉢	物原Ⅱ	27.2	—	7.8	にぶい赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	



第122図 物原Ⅱ出土遺物(17)播鉢

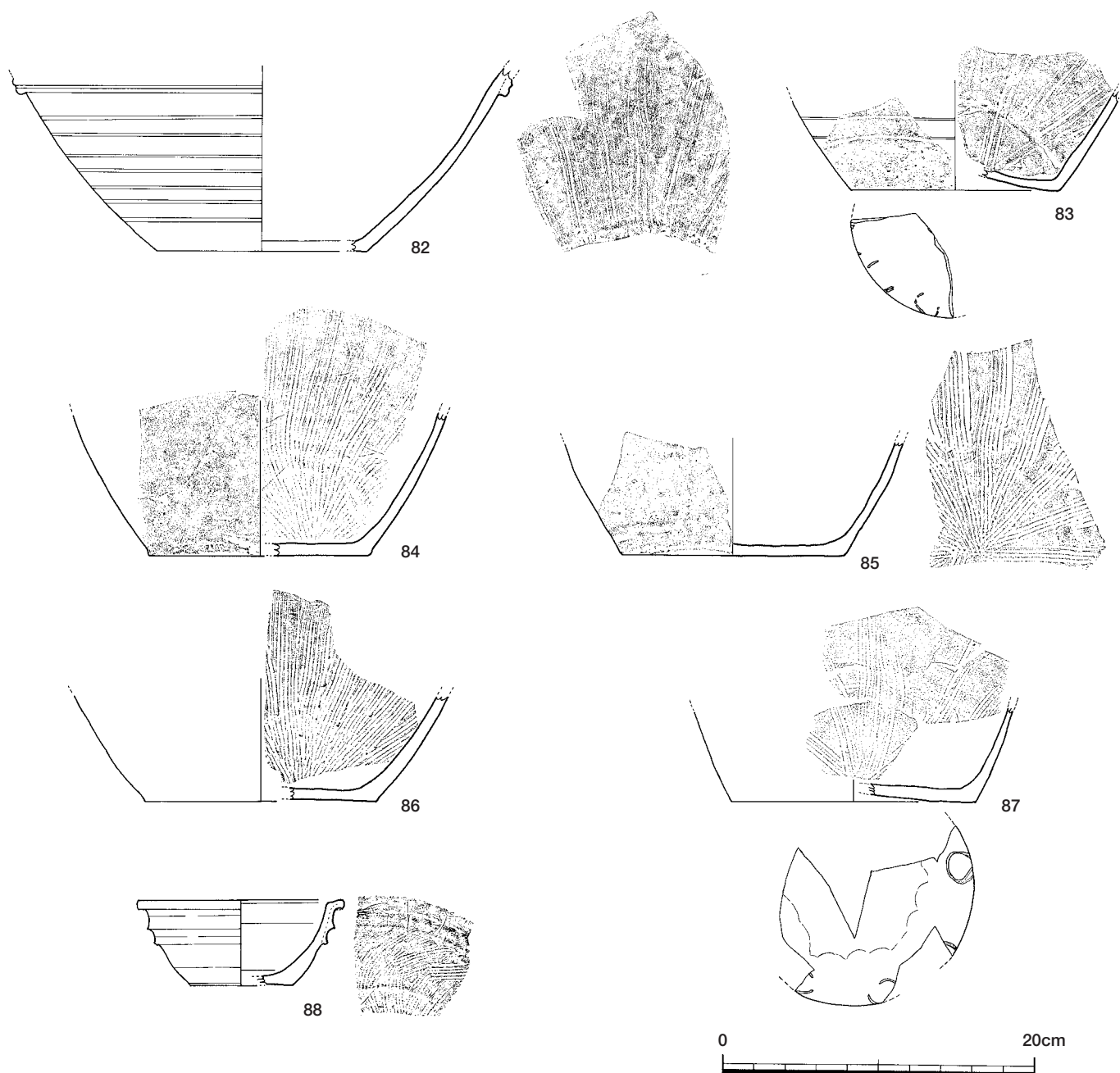
77～81は、外面口唇部下位につくられる突帯が、3条巡るものである。折り曲げて肥厚させた部分も長くつくられ、内湾する資料である。釉は、口唇部は拭い取られ、残存部は外底面も含め全面施釉される。

77は、口唇部の胎土詰貝目が残る。播り目の端部付近に、横方向の短い播り目が施される。78は、やや器高の

低いものである。内面には同心円状のタタキ目が看取されるが、ナデ消されているためはっきりしない。口唇部には胎土詰貝目が残る。79は、口縁部のみである。80は、口唇部に貝目は見られない。81は、外面口縁部下位の突帯は2条である。口唇部が焼成不良のため、貝目の有無ははっきりしない。

第65表 物原Ⅱ 遺物観察表10

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
77	播鉢	物原Ⅱ	29.0	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
78	播鉢	物原Ⅱ	29.0	12.8	11.0	褐色	灰釉	灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
79	播鉢	物原Ⅱ	27.5	—	—	にぶい褐色	灰釉	にぶい黄橙色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
80	播鉢	物原Ⅱ	—	—	—	褐色	灰釉	浅黄色	口唇部以外全面施釉	
81	播鉢	物原Ⅱ下	42.4	—	—	褐色	灰釉	緑褐色	口唇部以外全面施釉	



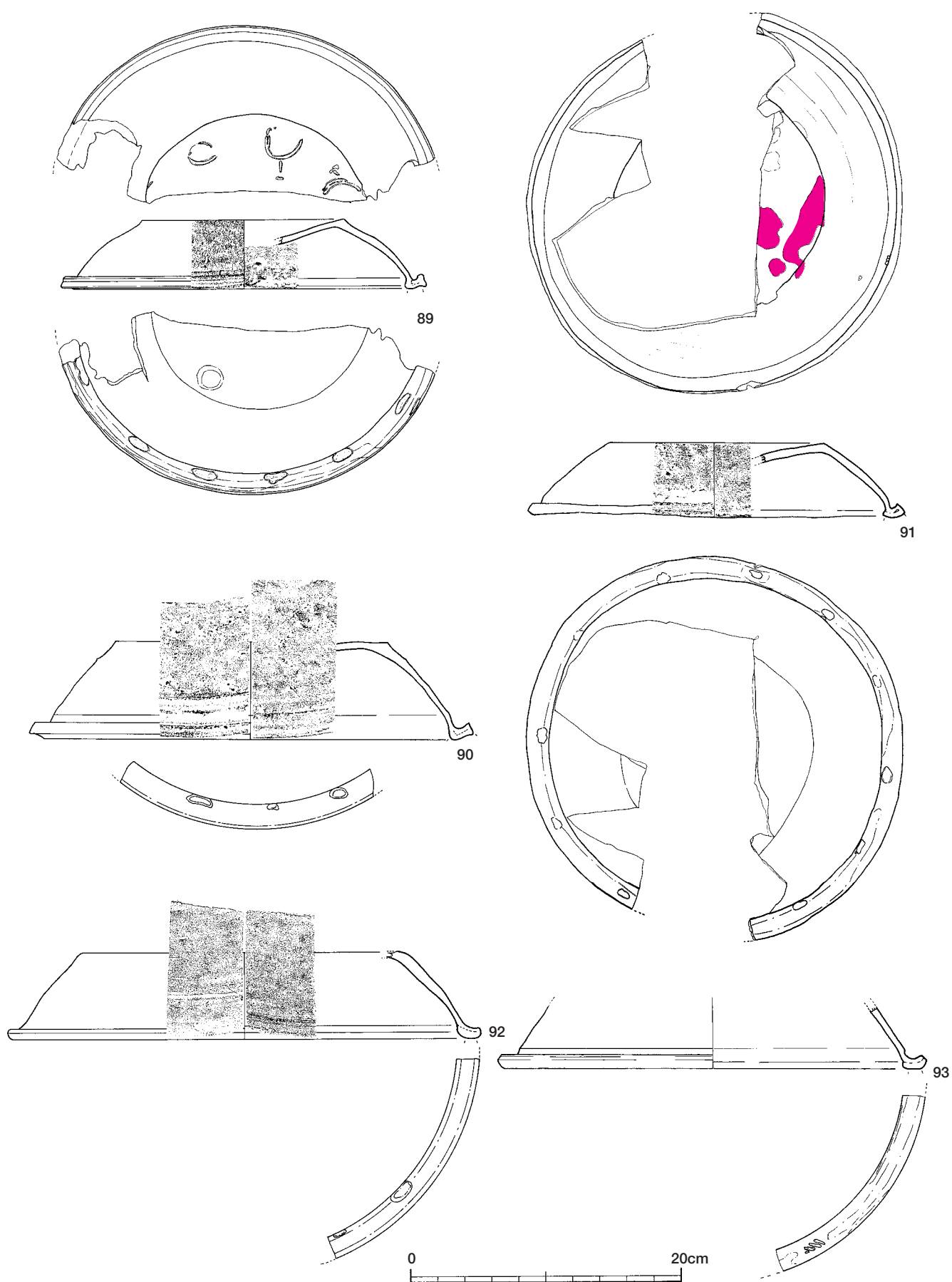
第123図 物原Ⅱ出土遺物(18)擂鉢

82～87は、胴部から底部にかけての資料である。82・83は、外面胴部に沈線が巡る。84は、外面に筋状の調整痕が看取される。85は、外面腰部に粘土紐巻き上げの痕跡が残る。86は、外底面にハマの目跡と思われる灰黄色

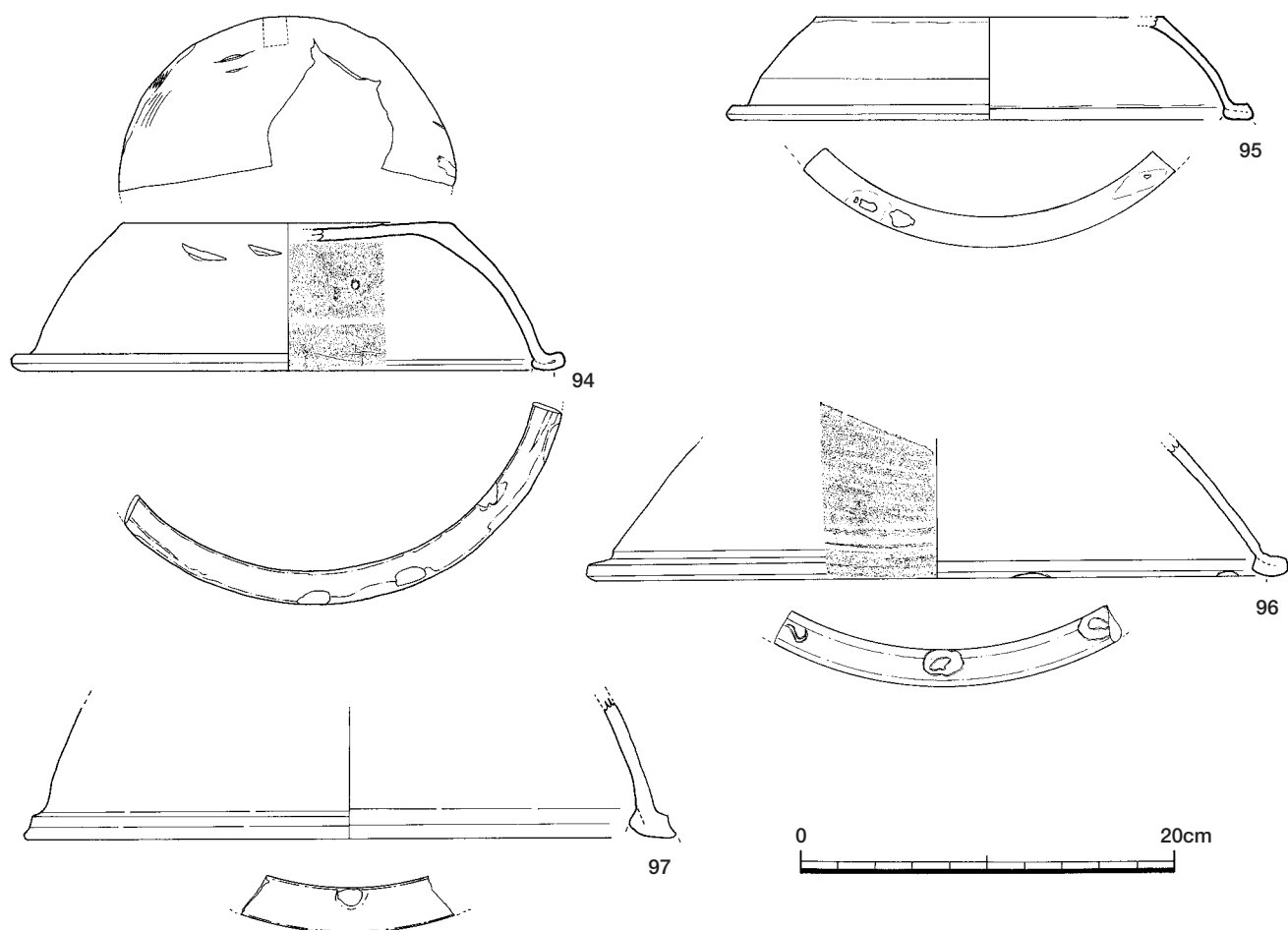
の目跡が残る。87は、外底面に貝目が残る。88は、小形の擂鉢で、餌擂鉢の可能性も考えられる。擂り目は、内底面を入れた後に側面を施す。

第67表 物原Ⅱ 遺物観察表11

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
82	擂鉢	物原Ⅱ	—	13.4	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	外底面に貝目 外面に沈線
83	擂鉢	物原Ⅱ下	—	13.4	—	灰褐色	灰釉 暗灰黄色	残存部全面施釉	外底面に貝目 外面に沈線
84	擂鉢	物原Ⅱ下	—	13.6	—	褐色	無釉	—	—
85	擂鉢	物原Ⅱ下	—	14.2	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	外面胴部下位にタタキ目
86	擂鉢	物原Ⅱ	—	14.8	—	にぶい橙色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	—
87	擂鉢	物原Ⅰイ下	—	15.6	—	褐灰色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	外底面に貝目
88	擂鉢	物原Ⅱ 3.4DE	13.2	—	—	赤褐色	無釉	—	—



第124図 物原Ⅱ出土遺物(19)蓋



第125図 物原Ⅱ出土遺物(20)蓋

蓋（第124～127図）

浅鉢型の蓋は、甕・壺等の蓋として使用されたものと思われる。口縁部の形状から大きく3つに分けることができ、さらに口唇部の形状や大きさから細分化できる。

89～97は、口縁部を外側におりさらに内側に折り返してつくる資料で、大形のものである。

89・90は、口唇部を内側は高く外側は溝縁状につくるものである。どちらも口唇部には胎土詰貝目が残る。89は、上面と内底面に貝目が残る。

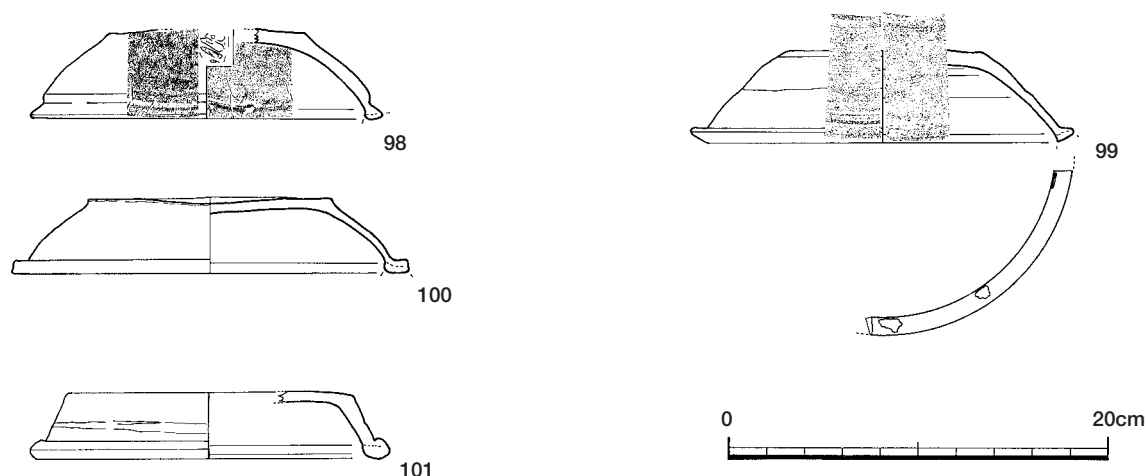
91は、口唇部が丸みを帯びるもので、外側に折り返して口縁部先端には角をつくる。口唇部には、胎土詰貝目が残る。上面にハマの痕跡と思われる黄褐色の目跡が残る。

92～96は、口唇部も口縁部先端部も丸みを帯びるものである。93を除き、口唇部には胎土詰貝目が残る。93は、背面を使用した貝目が残る。96は、外面胴部中位に平行タタキ目が明瞭に看取される。

97は、蓋としたが鉢の可能性も考えられる。

第67表 物原Ⅱ 異物感観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上部径	器高				
89	蓋	物原Ⅱ	27.0	15.0	5.1	灰褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外面上部・口唇部に貝目
90	蓋	物原Ⅱ	33.0	10.2	7.2	にぶい橙色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
91	蓋	物原Ⅱ	27.9	16.0	5.6	暗赤褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
92	蓋	物原Ⅱ	35.2	24.0	6.4	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
93	蓋	物原Ⅱ	31.8	—	—	明赤褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
94	蓋	物原Ⅱ下	27.9	17.7	7.9	にぶい赤褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
95	蓋	物原Ⅱ	28.2	18.6	5.5	灰褐色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
96	蓋	物原Ⅱ	37.6	—	7.2	褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外面に平行タタキ目
97	蓋	物原Ⅱ	35.0	—	—	灰褐色	灰釉 緑黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第126図 物原Ⅱ出土遺物(21)蓋

98～101は、口縁部を外側に折り さらに内側に折り返してつくる資料で、小形のものである。

98は、口縁部上位にくびれを有する。内面には、横方向の筋状の調整痕が残る、外面には削り調整痕が残る。また、外面胴部上位には、背面を使用した貝目が残る。

99は、内外面ともにヘラ状工具による横方向の調整痕が看取されるもので、口唇部には胎土詰貝目が残る。100は、口唇部以外全面に鉄釉が厚くかかる資料で、口唇部には貝目は見られない。焼き歪みが強い

101は、蓋としたが、その他の器種の可能性も考えられる。外面胴部にヘラ状工具による削り調整痕が見られる。素焼きである。

102・103は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、口縁部下位に1条の突帯を巡らせるものである。102は、大形のもので、光沢の強い鉄釉が口唇部を除き、厚くかかるため明瞭でないが、内外面ともヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される。口唇部には、胎土詰貝目と背面を利用した貝目が残る。103は、胴部に焼き歪みが見られる資料である。口唇部には、他製品の口唇部の痕

跡が残ることから、合わせ口にして焼成したものと思われる。

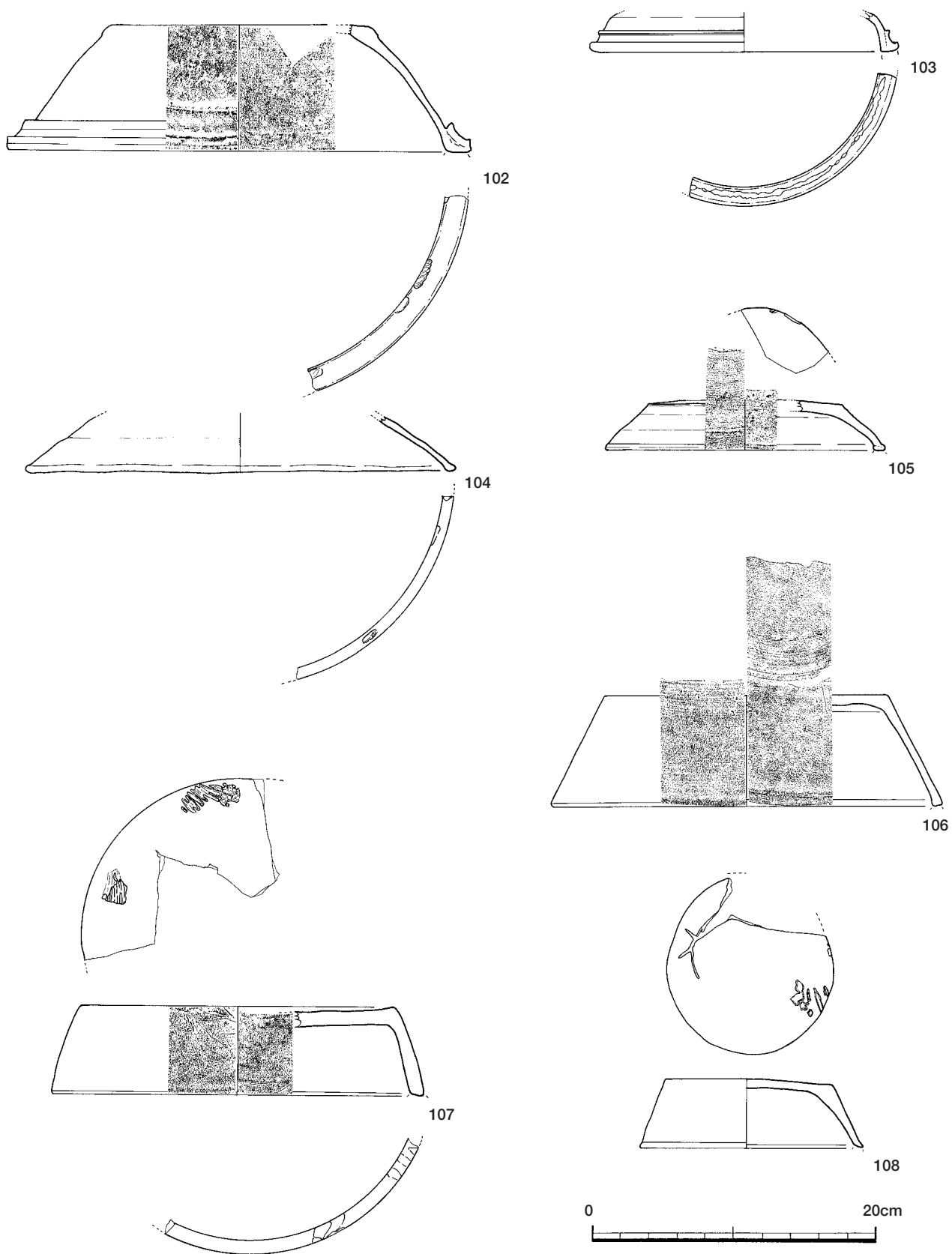
104・106～108は、口唇部を折り返さない資料である。

104は、口唇部を丸くつくるもので、胎土詰貝目が看取される。残存部は全面に鉄釉がかかる。105は、口縁部を折り返し「T」字状におさめるもので、外面にはヘラ状工具による横方向の調整痕が残る。上面には貝目が残るが、口唇部には見られない。

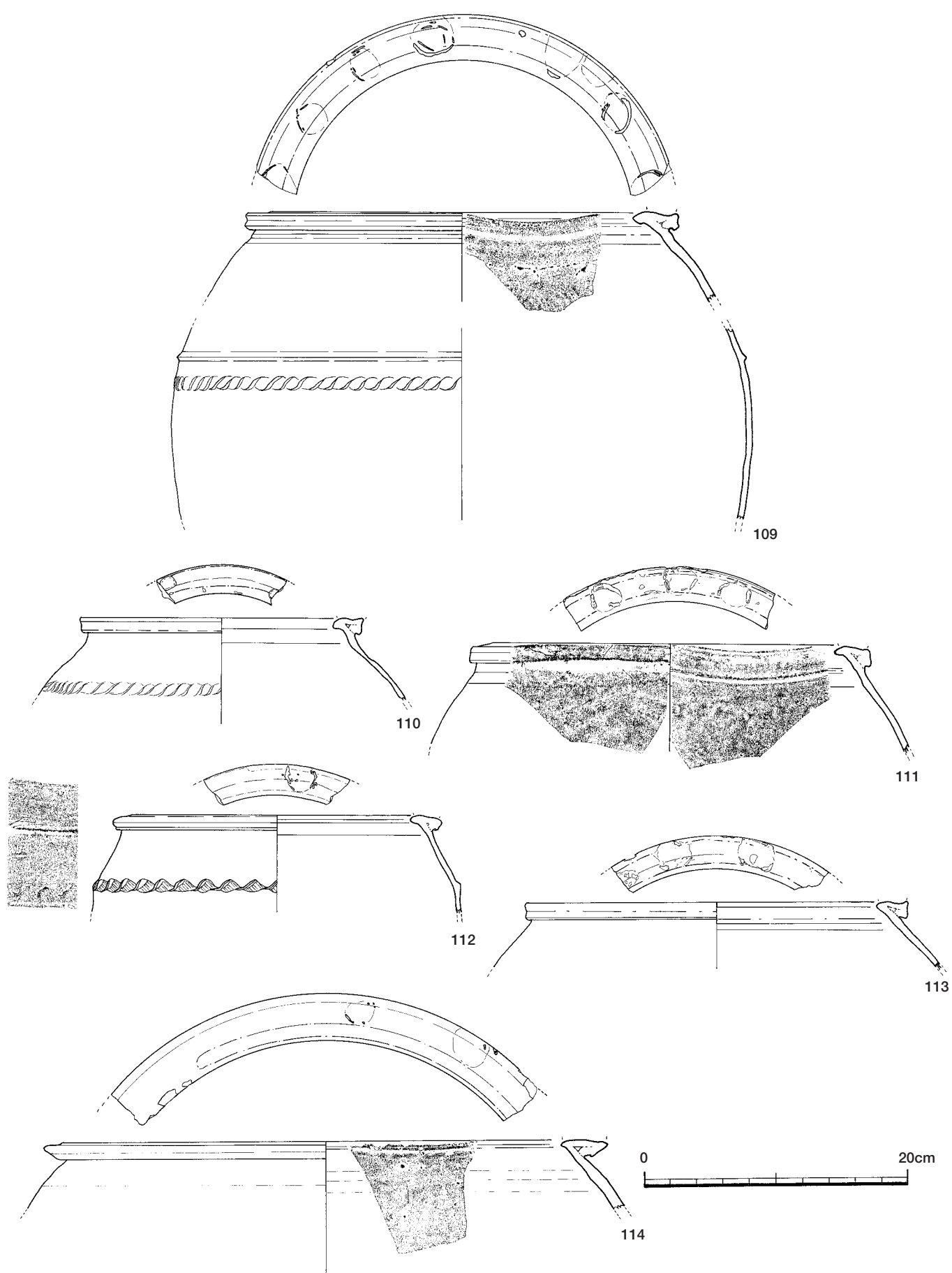
106～108は、口唇部が平坦につくられ、胴部のラインが直線的に開く形状を呈するものである。全体的に器壁が厚くつくられる。106・107は、大形のもので、106は器高が高く、107は低い。内外面には、ヘラ状工具による横方向の調整痕が明瞭に残る。107は、上面と口唇部に貝目が残る。108は、小形の資料で、焼き歪みが見られる。上面に貝目が見られる。

第68表 物原Ⅱ 遺物観察表13

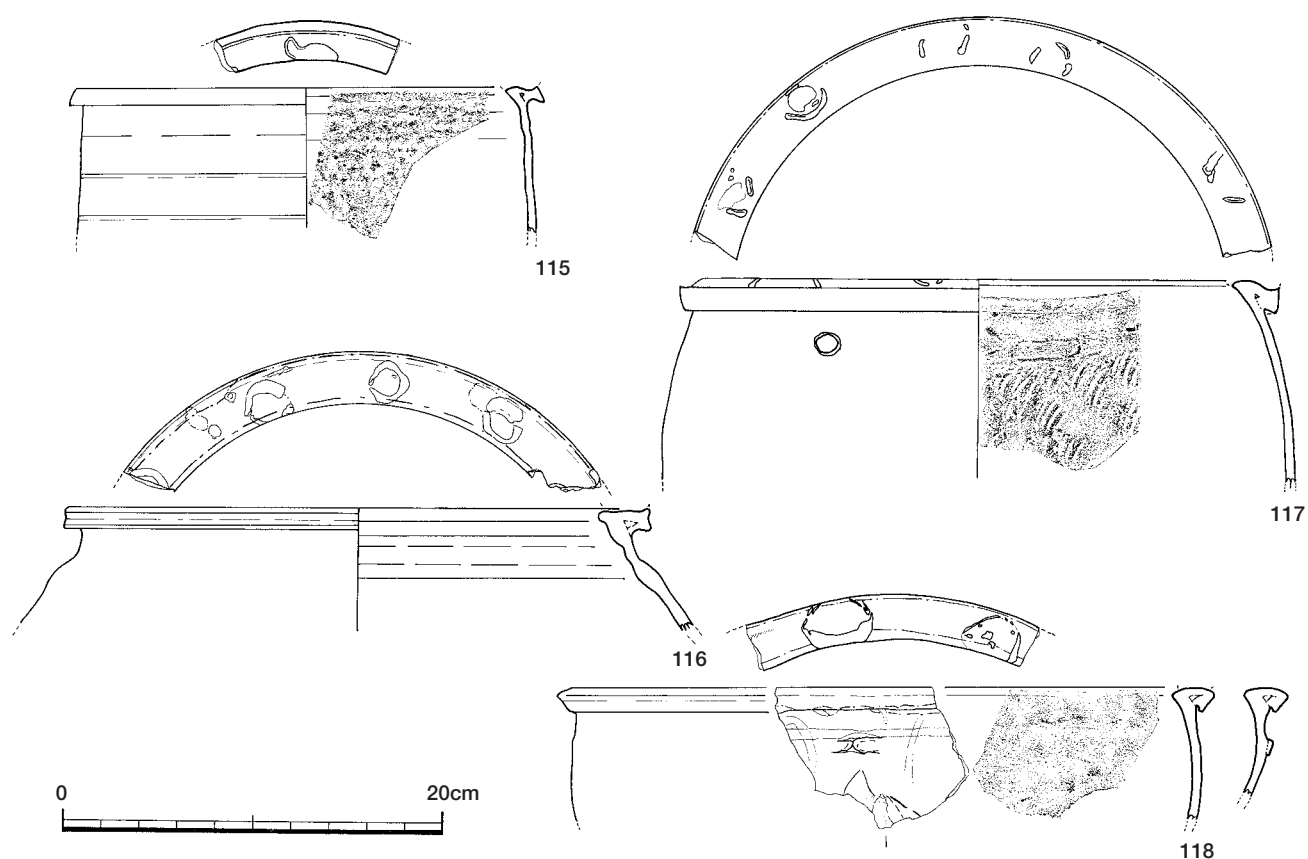
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上部径	器高				
98	蓋	物原Ⅱ	18.6	10.2	4.5	にぶい赤褐色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	外面上部に貝目
99	蓋	物原Ⅱ	20.2	10.4	4.9	赤褐色	灰釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
100	蓋	物原Ⅱ	21.0	12.8	3.9	にぶい赤褐色	鉄釉 暗緑灰色	口唇部以外全面施釉	
101	蓋	物原Ⅱ	19.0	15.0	3.5	にぶい赤褐色	無釉	—	
102	蓋	物原Ⅱ 3.4 D E	32.4	17.8	8.9	灰褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
103	蓋	物原Ⅱ	21.8	—	—	灰黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に合わせ口の痕跡
104	蓋	物原Ⅱ 3.4 D E	30.2	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	口唇部に貝目
105	蓋	物原Ⅱ	19.7	13.7		にぶい褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	外面上面に貝目
106	蓋	物原Ⅱ	25.2	18.0	8.1	黒褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	口唇部に貝目
107	蓋	物原Ⅱ	22.0	26.2	6.2	にぶい赤褐色	灰釉 緑黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
108	蓋	物原Ⅱ	15.7	11.8	4.4	灰褐色	灰釉 緑黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第127図 物原Ⅱ出土遺物(22)蓋



第128図 物原Ⅱ出土遺物(23)甕



第129図 物原Ⅱ出土遺物(24)甕

甕（第128～131図）

口縁部の形状により、大きく2つに分けることができ、さらに胴部の形状や縄状突帯の有無により細分化できる。

109～118は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、断面を「T」字状につくるものである。口唇部は、内側は高く外側は溝縁状で、幅広につくる。釉は、拭い取られ貝目が残る。器壁はやや厚めである。

109・110・112は、胴部が張り肩部に縄状突帯を有するものである。109は、内面口縁部下位に幅1cm程度の

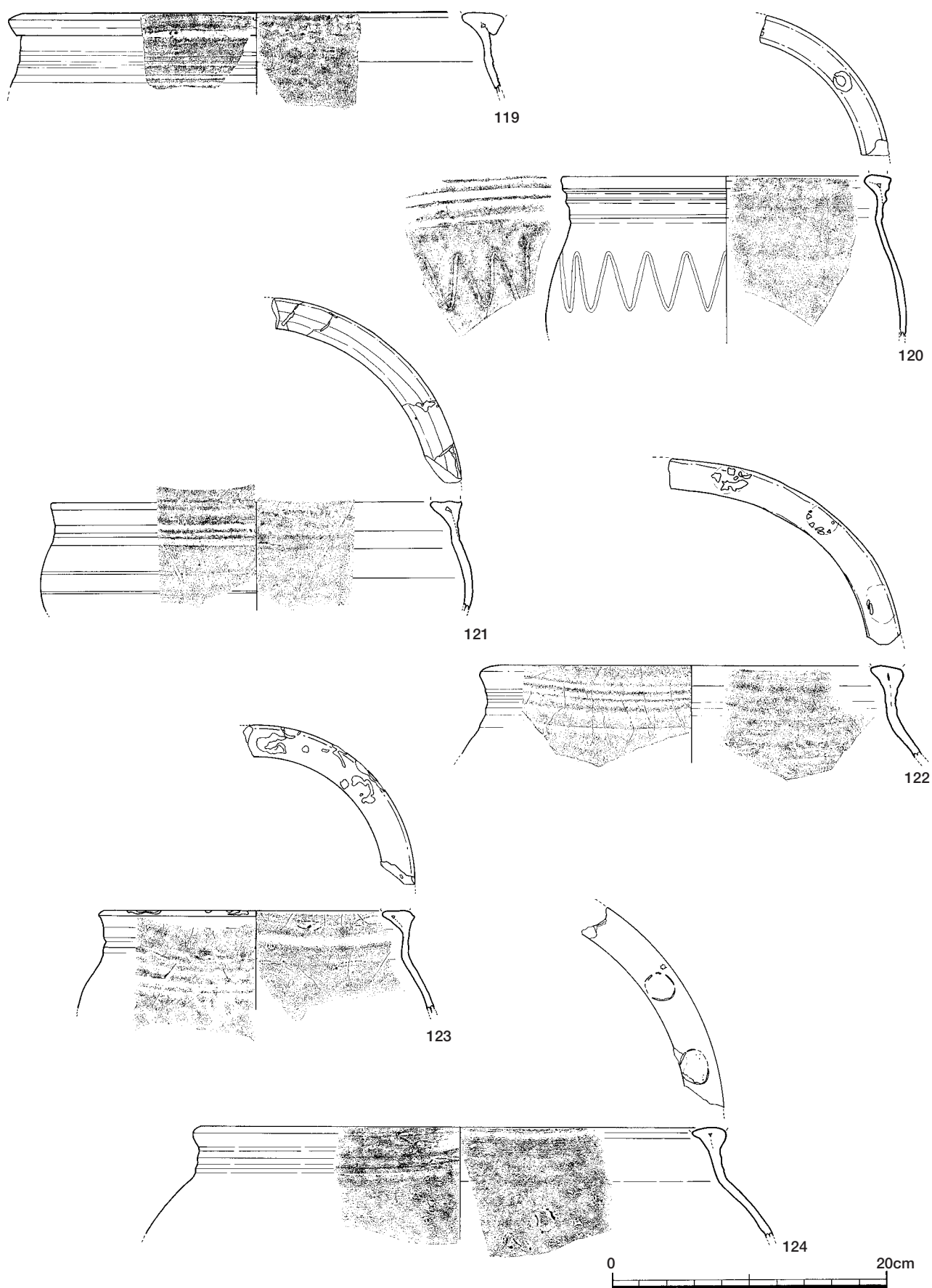
釉剥ぎを施す。112は、縄状突帯を貼り付ける際、小形の貝殻の背面を押し当てており、放射脈の痕跡が看取される。

111・113・114・116は、胴部が張り肩部に縄状突帯を有しないものであるが、突帯部が欠損している可能性もある。

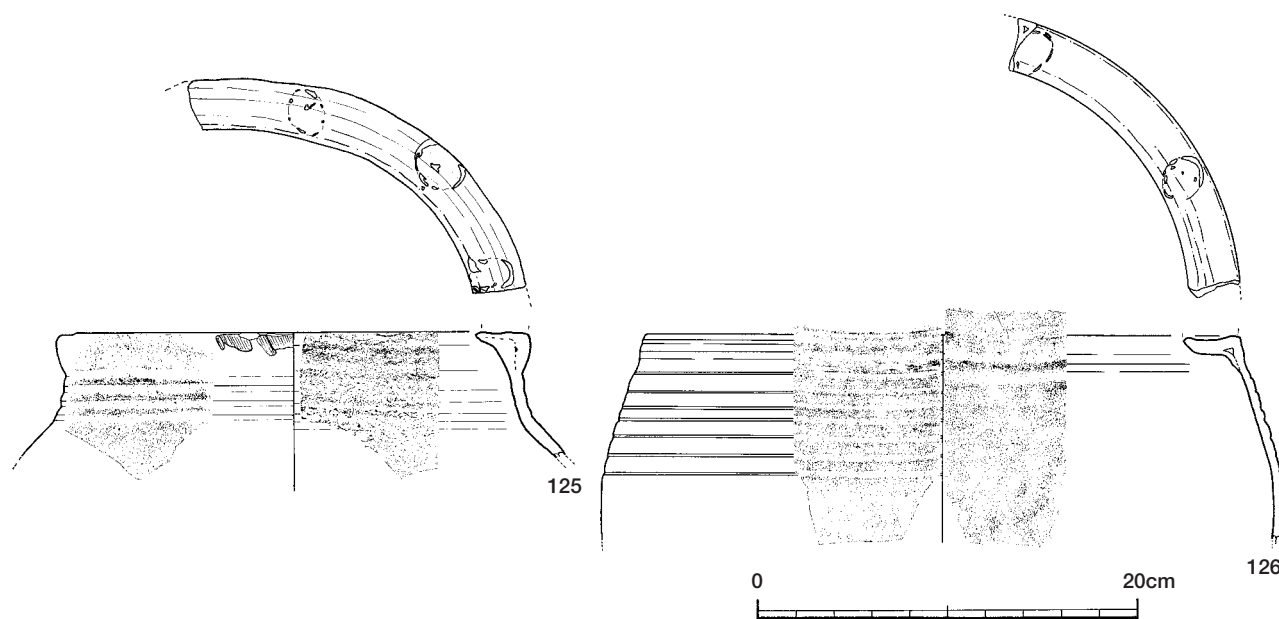
115は、胴部が張らないもので、バケツ型の形状を呈する。外面胴部に沈線が巡る。117・118は、胴部があまり張らないもので、外面口縁部下位に、金属器の留め具等を模造したと思われる突起が付く。

第69表 物原Ⅱ 遺物観察表14

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
109	甕	物原Ⅱ	32.6	—	—	赤褐色	灰釉 暗緑灰色	口唇部釉剥ぎ 口縁部内下位釉剥ぎ	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
110	甕	物原Ⅱ	21.2	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
111	甕	物原Ⅱ	25.0	—	—	灰黄褐色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
112	甕	物原Ⅱ	30.1	—	—	黒褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
113	甕	物原Ⅱ	29.0	—	—	褐色	灰釉 褐灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
114	甕	物原Ⅱ下	42.6	—	—	明赤褐色	鉄釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
115	甕	物原Ⅱ	25.2	—	—	灰褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
116	甕	物原Ⅱ	30.6	—	—	灰黄色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
117	甕	物原Ⅱ下	31.4	—	—	褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
118	甕	物原Ⅱ下	34.6	—	—	暗赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目



第130図 物原Ⅱ出土遺物(25)甕



第131図 物原Ⅱ出土遺物(26)甕

119～125は、口縁部を外側に折り返して、断面三角形につくるものである。口唇部はほぼ平坦につくられ、貝目が残る。内面には、同心円状のタタキ目が看取される資料が多い。このような口縁部形態の甕は、物原Ⅱの時期以降出現するようである。

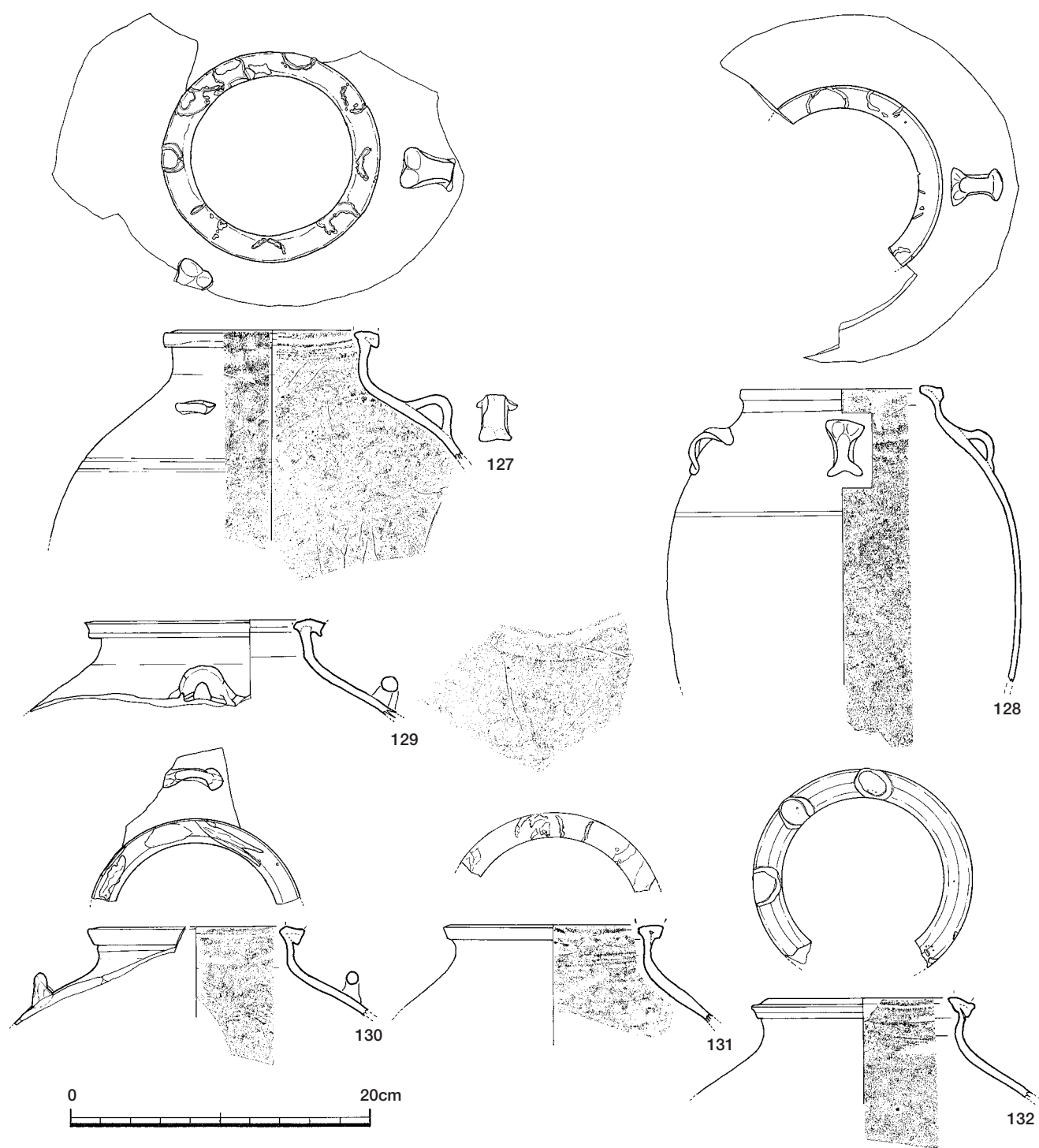
119は、外側に折り返した口縁部を、胴部に押し当てた形状を呈する。外面口縁部下位には、数条の沈線が巡るものと思われる。120は、外面にヘラ状工具により、横方向の調整が施され、その上から波状の沈線が入れられる。121は、外面口縁部下位に微高な稜を2条と、胴部に沈線を有するものである。122・123は、内面にやや径の大きいあて具痕の痕跡が、同心円状に残る。124は、内外面とも横方向の調整痕が残る。

125は、外面口縁部下位に微高な突帯が3条巡るもので、内面頸部付近や外面には、ヘラ状工具による横方向の調整が施される。

126は、口唇部が内側に張り出した形状を呈するもので、口唇部内側はやや低めにつくられる。外面口縁部下位に、7条の沈線を有する。

第70表 物原Ⅱ 遺物観察表15

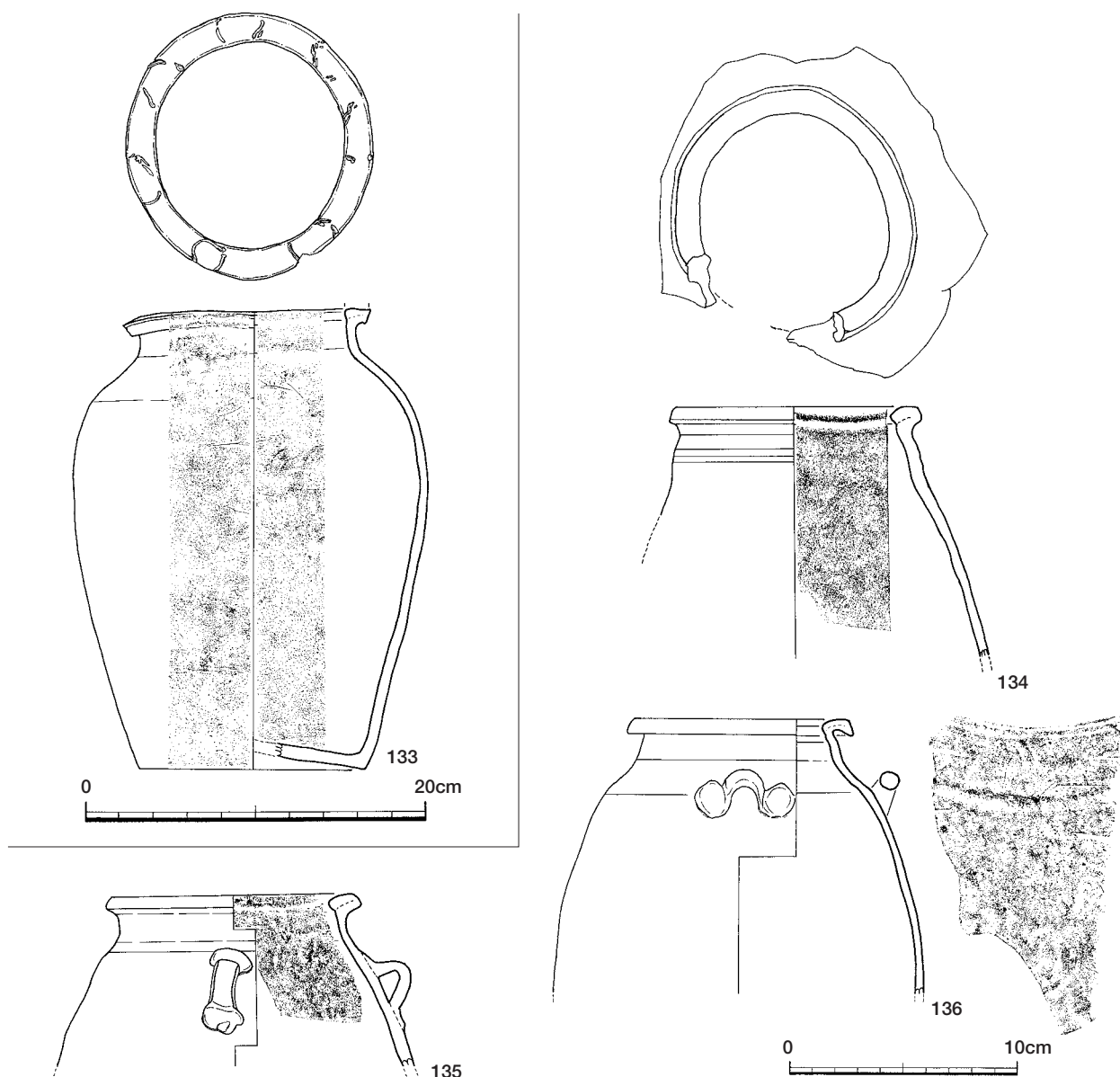
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
119	甕	物原Ⅱ	36.0	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 暗黄灰色	口唇部以外全面施釉	
120	甕	物原Ⅱ	24.0	—	—	褐灰色	灰釉 褐灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目 胴部上位に波状文
121	甕	物原Ⅱ	29.6	—	—	灰黄色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面に同心円状のタタキ目 外面に沈線
122	甕	物原Ⅱ	30.8	—	—	赤灰色	灰釉 灰褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
123	甕	物原Ⅱ	22.8	—	—	灰赤色	灰釉 灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状のタタキ目
124	甕	物原Ⅱ下	38.6	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
125	甕	物原Ⅱ	25.0	—	—	黄灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
126	甕	物原Ⅱ下	31.4	—	—	にぶい橙色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面に同心円状のタタキ目 外面に沈線



第132図 物原Ⅱ出土遺物(27)壺

第71表 物原Ⅱ 遺物観察表16

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
127	壺	物原Ⅱ下	14.4	—	—	にぶい褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
128	壺	物原Ⅰ	14.6	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面 同心円状タタキ目 外面に沈線
129	壺	物原Ⅱ下	16.0	—	—	褐色	灰釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	内面に同心円状タタキ目
130	壺	物原Ⅱ	14.6	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
131	壺	物原Ⅱ	14.0	—	—	黄褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
132	壺	物原Ⅱ	14.8	—	—	黒褐色	鉄釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第133図 物原Ⅱ出土遺物(28)壺

壺（第132・133図）

127は、肩部に縦耳が付く資料で、三耳壺と思われる。外面に沈線が2条巡る。128は、物原Ⅰの出土遺物である。形状や大きさ等は127と類似するが、器壁が薄い。

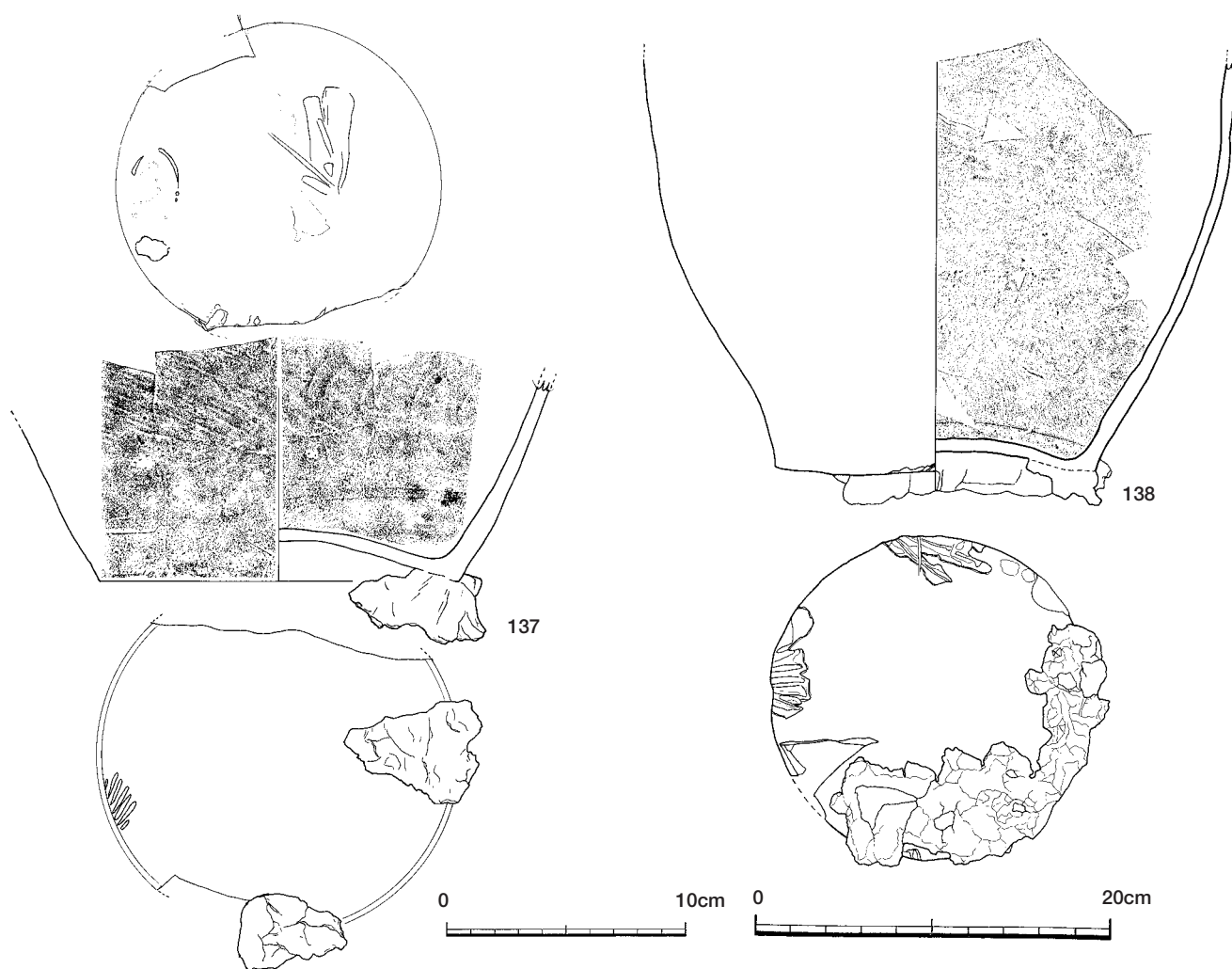
129・130は、丸みを帯びた横耳が付くものである。全体の個数は不明である。内面には同心円状のタタキ目が残し、外面にはヘラ状工具による調整痕が看取される。130は、口唇部にイタヤガイを使用した貝目が残る。

第72表 物原Ⅱ 遺物観察表17

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
133	壺	物原Ⅱ	14.5	13.2	27.0	灰色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目 外底面に目跡
134	壺	物原Ⅱ 3.4 D E	11.0	—	—	褐灰色	灰釉 緑黄色	全面施釉	内面に同心円状 のタタキ目
135	壺	物原Ⅱ	10.7	—	—	明赤褐色	鉄釉 黒褐色	残存部は全面施釉	内面に同心円状のタタキ目
136	壺	物原Ⅱ	10.0	—	—	黒褐色	鉄釉 黒褐色	残存部は全面施釉	内面に同心円状のタタキ目

131・132は、外面にヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される資料である。133は、ほぼ完形に復元することができた資料であるが、口縁部に歪みが見られる。器壁は厚く、平坦につくられた口唇部には貝目が7か所残る。外底面には、ハマの痕跡と思われる目跡が残る。

134～136は、小形の壺である。肩部は張らず、釉は口唇部も含め残存部全面にかかる。134は、外面口縁部下に2条の突帯を有する。



第134図 物原Ⅱ出土遺物(29)底部

底部（第134・135図）

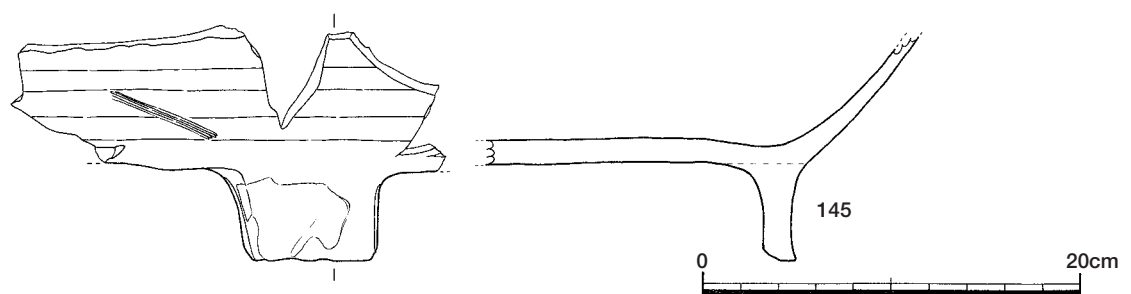
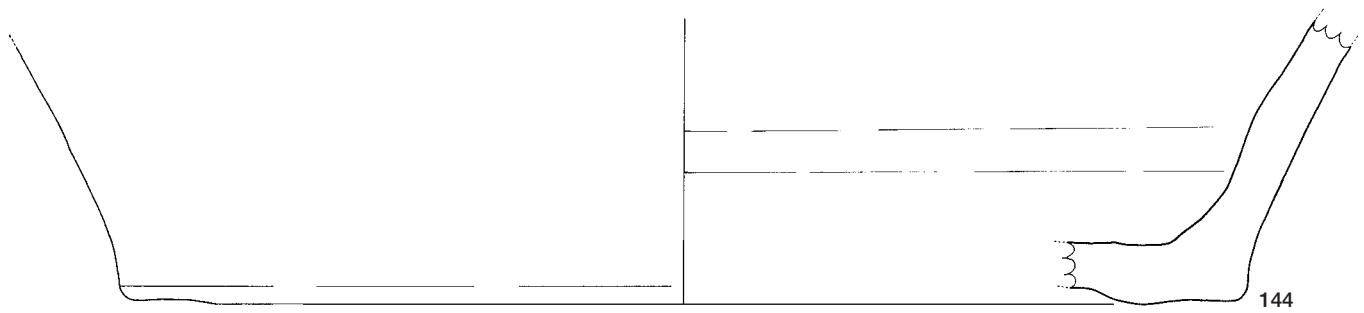
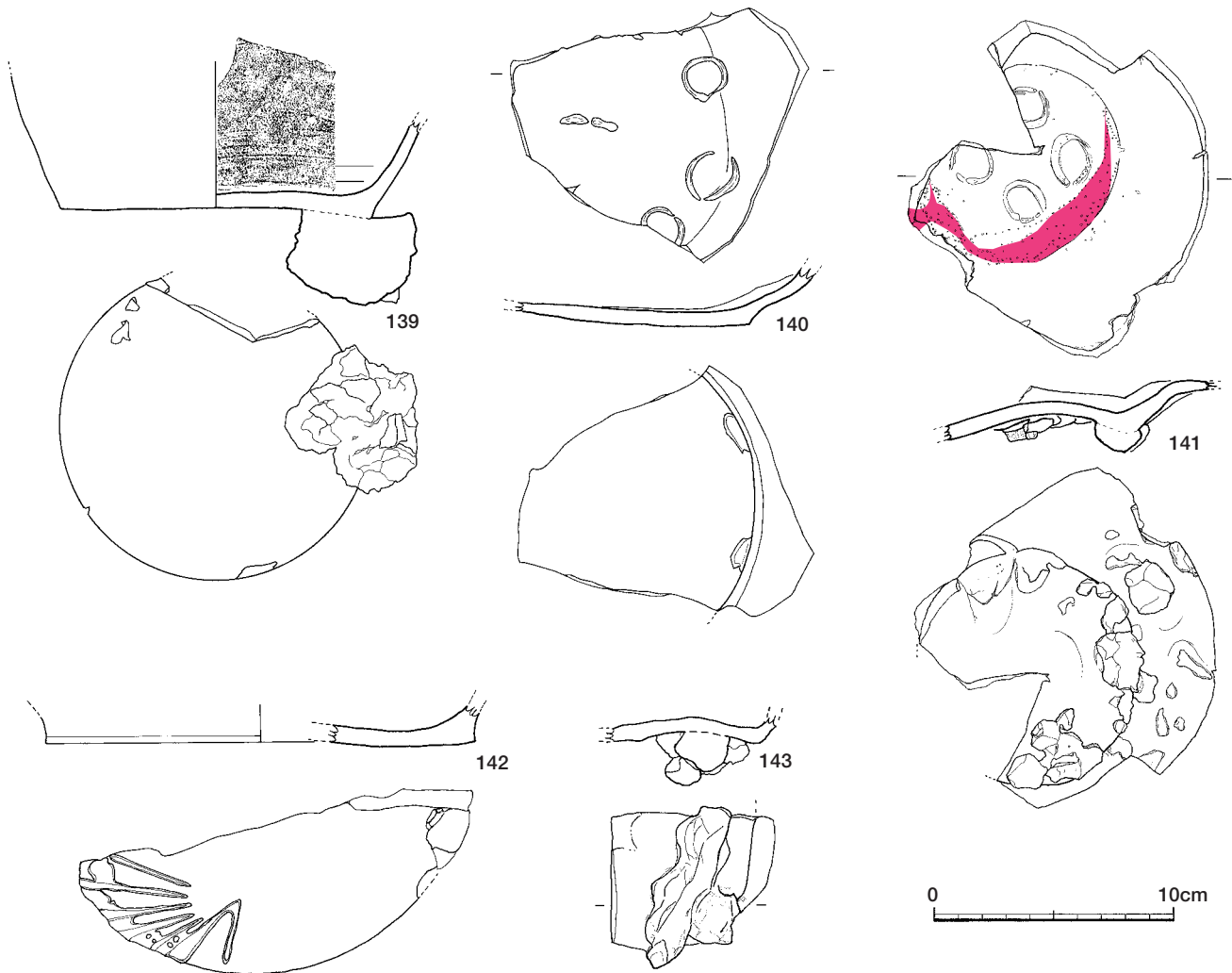
137～143は、甕・壺の底部である。137～139は外底面にハマや粘土塊が熔着するもので、137・138には貝目も残る。138はイタヤガイを使用している。140・141は、内底面に貝目が残る資料である。製品の中に他の製品を入れて焼成したものと思われる。141には、白色砂粒も付

着し、外底面にはハマ等の一部が熔着している。142は、外底面にイタヤガイの目跡が残る資料である。143は、外底面に棒状のハマが熔着している。

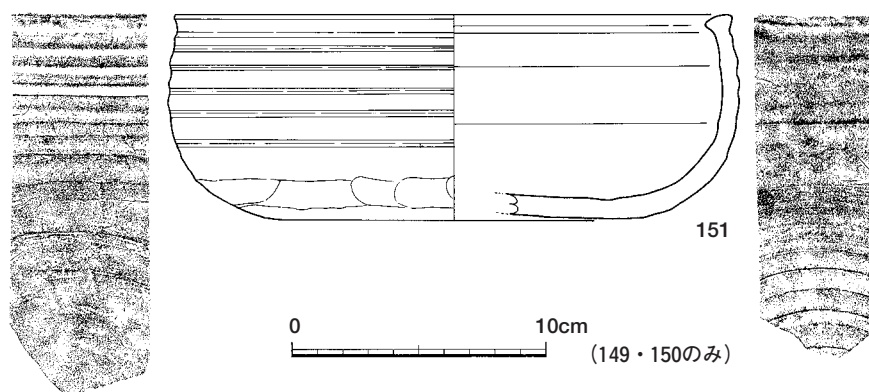
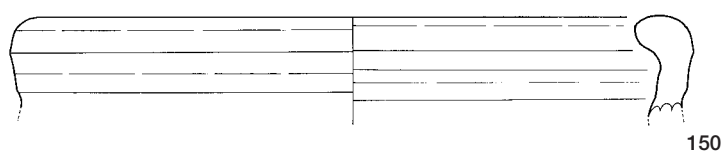
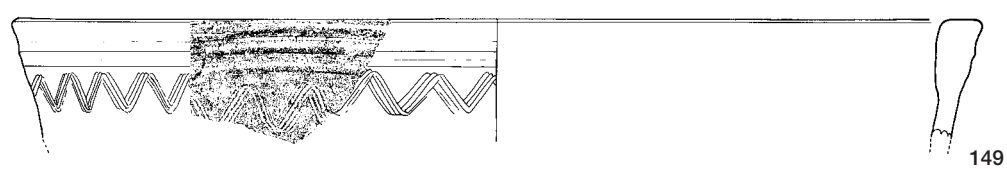
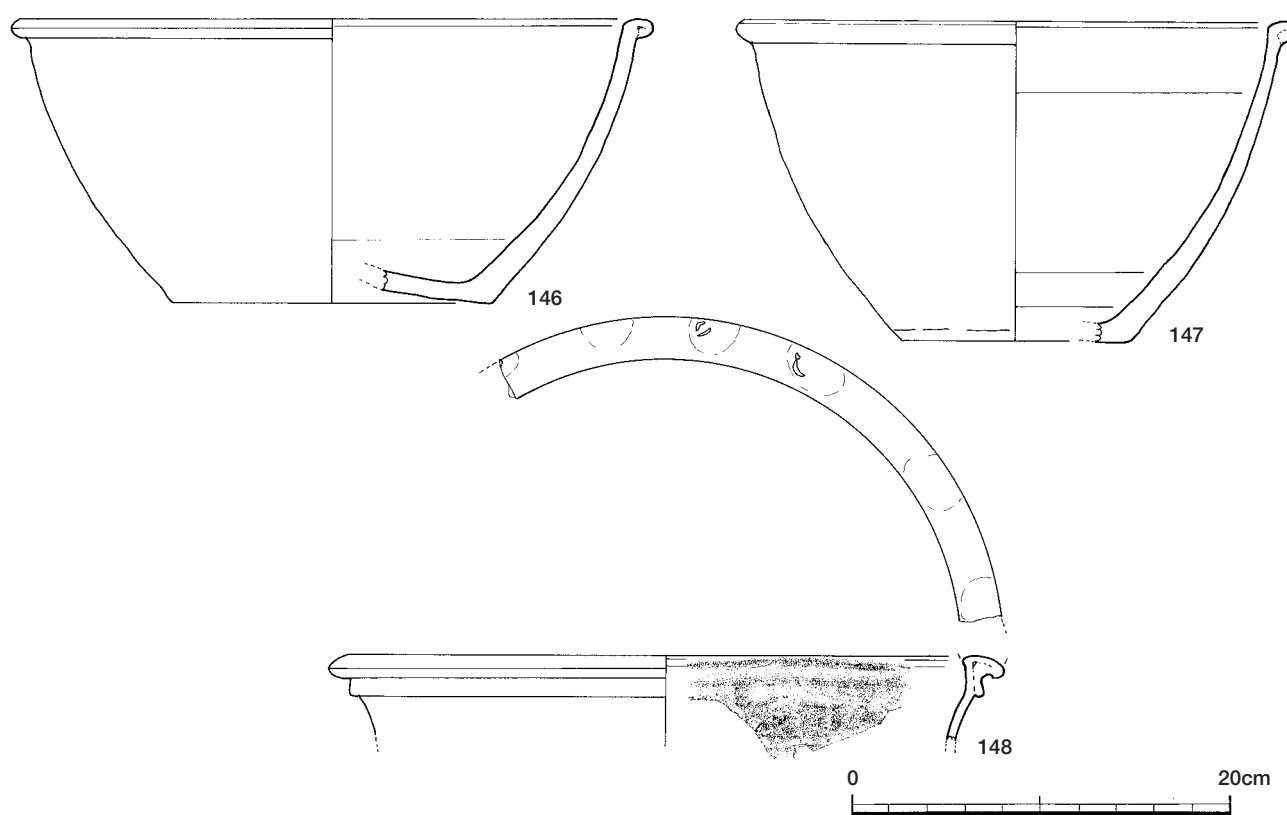
144・145は大形の製品の底部である。器種は不明である。145は底部に脚部が付くが、何か所付くのであるかは不明である。

第73表 物原Ⅱ 遺物観察表18

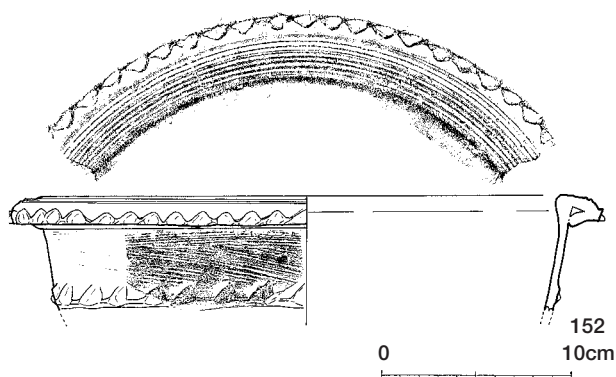
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
137	底部	物原Ⅱ下	—	15.2	—	茶褐色	鉄釉 黒褐色	残存部全面施釉	底部内面貝目 外底面にハマ付着・貝目 内面に同心円状のタタキ目
138	底部	物原Ⅱ下	—	18.0	—	灰褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	
139	底部	物原Ⅱ下	—	13.0	—	茶褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	外底面にハマ付着
140	底部	物原Ⅱ	—	—	—	黒褐色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	内・外底面に貝目
141	底部	物原Ⅱ下	—	—	—	灰褐色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	内底に白色砂粒付着・貝目 外底面にハマ付着
142	底部	物原Ⅱ	—	18.0	—	にぶい黄橙色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	底部にイタヤガイの貝目
143	底部	物原Ⅱ	—	—	—	灰白色	鉄釉 褐色	残存部全面施釉	外底面にハマ付着
144	不明	物原Ⅱ		59.6		にぶい橙色	無釉	—	
145	不明	物原Ⅱ 3 C		34.0		褐灰色	灰釉 褐色	外底面以外残存部施釉	



第135図 物原Ⅱ出土遺物(30)底部



第136図 物原Ⅱ出土遺物(31)鉢



鉢（第136図）

146～151は、素焼きの資料で、器形から鉢に分類したが本来の用途等は不明である。

146・147は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、丸くおさめる。内面に、同心円状のタタキ目は見られず、横ナデによる器面調整が施されている。

148は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、口縁部下位に突帯を1条つくる。口唇部には貝目が残る。内面には同心円状のタタキ目が残る。

149は、口縁部が肥厚するもので、外面口縁部下位には2条の沈線と波状文が施される。

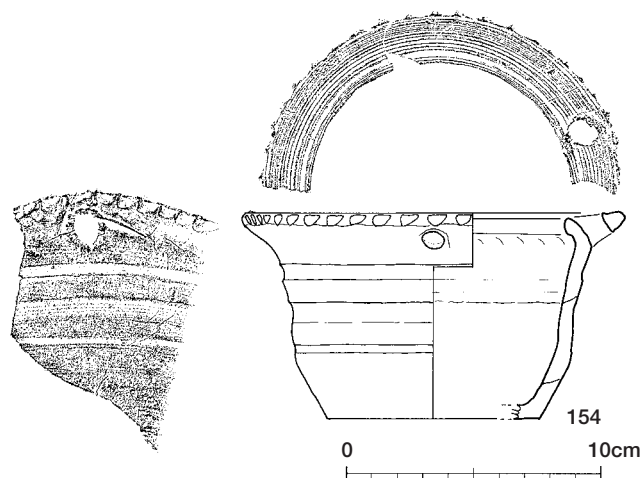
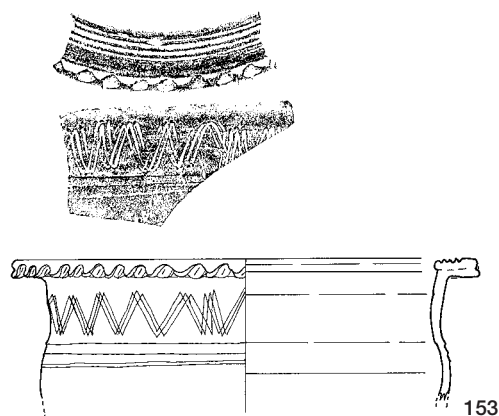
150は、口縁部が肥厚し、内湾するものである。鉢以外の器種の可能性がある。

151は、腰部が丸みを持ち、口縁部がやや内湾するものである。口唇部は平坦につくられ、外面胴部に5条の沈線が巡る。腰部は、削り調整により面取りが施されている。内面は、ヘラ状工具による調整痕が残る。

植木鉢（第137図）

152～154は底部が欠損しているものの、植木鉢と思われる資料である。

152は、大形のものである。口縁部は、外側に折り返して肥厚させ、先端に縄状の装飾が施される。口唇部には、ヘラ状工具により筋状の装飾が施され、外面胴部にも縄状の突帯が巡る。内面は、同心円状のタタキ目がナ



第137図 物原Ⅱ出土遺物(32)植木鉢

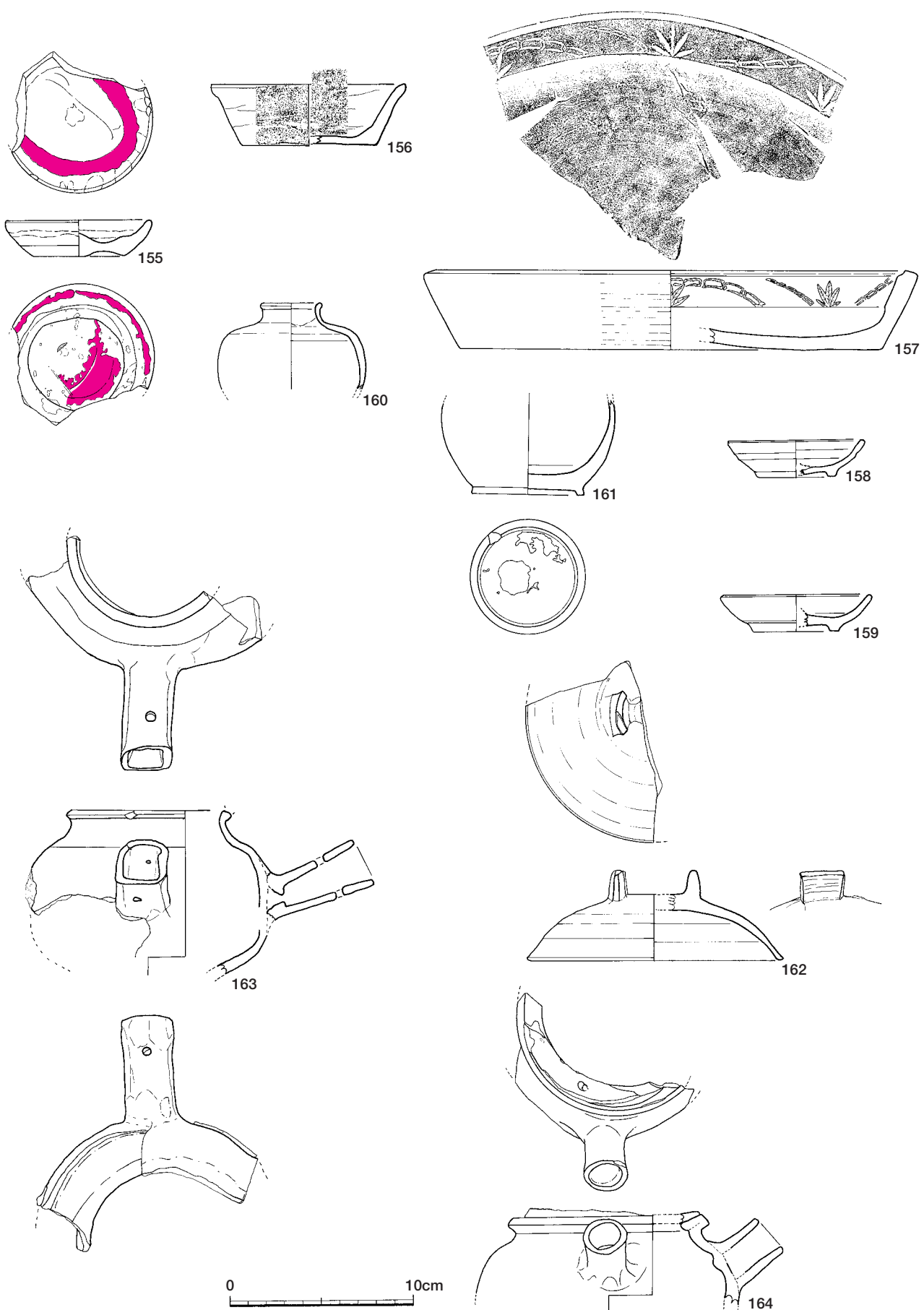
デ調整で消されており、外面は口縁部下位に平行タタキ目が看取される。

153・154は、小形の植木鉢である。外側に強く屈曲した口縁部の先端に、縄状の装飾が施され、口唇部には沈線が施される。

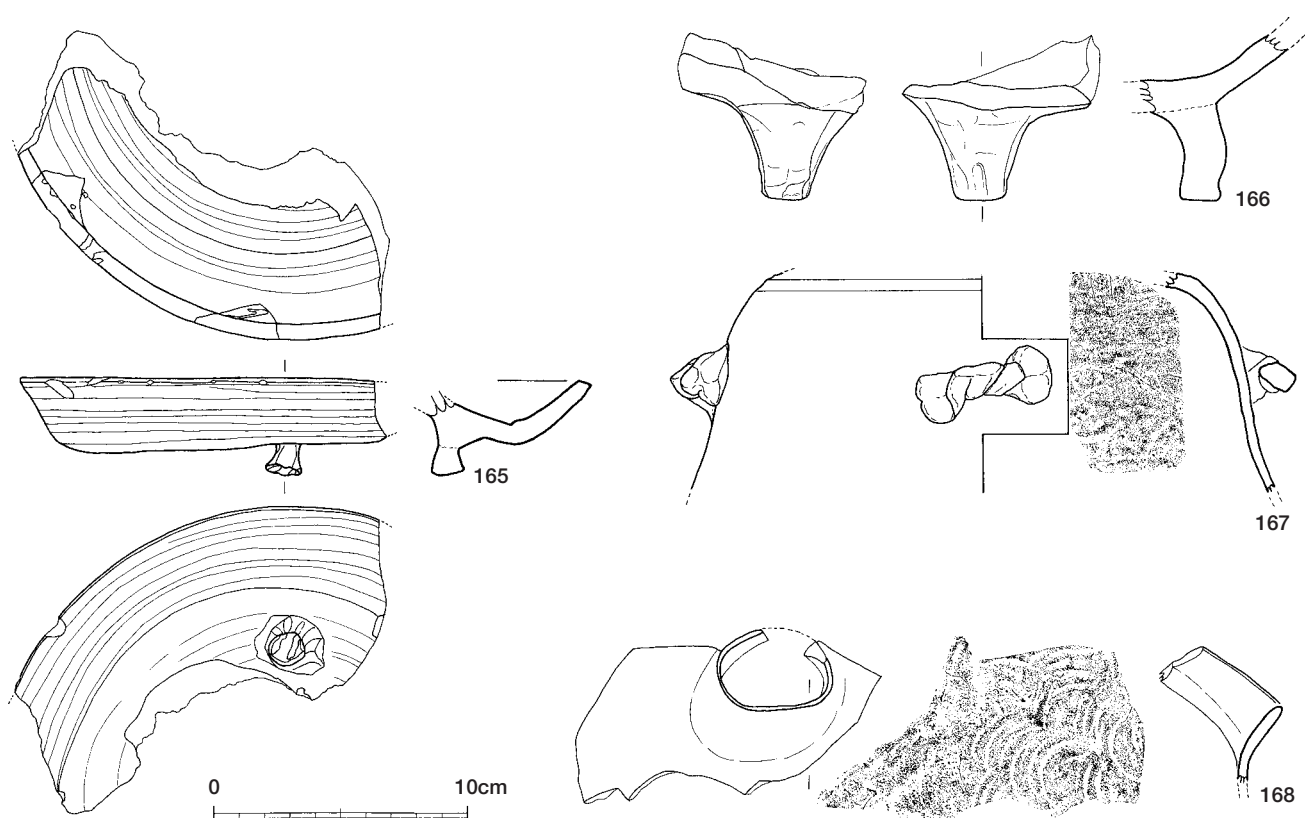
153は、頸部がくびれ、胴部が膨らむ形状を呈する。外面に波状文が施される。154は、外面胴部にヘラ状工具による凹線が3条巡る。口唇部には吊り下げ用の穿孔が2か所空けられる。

第74表 物原Ⅱ 遺物観察表19

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
146	鉢	物原Ⅱ	33.8	16.8	15.0	橙色	無釉	—	
147	鉢	物原Ⅱ	29.6	12.0	15.0	橙色	無釉	—	
148	鉢	物原Ⅱ下	35.6	—	—	にぶい橙色	灰釉 鈍い黄橙色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
149	鉢	物原Ⅱ 3.4DE	38.4	—	—	灰褐色	無釉	—	外面胴部に波状文
150	鉢	物原Ⅱ上	36.0	—	—	褐灰色	無釉	—	
151	鉢	物原Ⅱ下	22.0	8.1	8.05	淡橙色	無釉	—	外面胴部に沈線
152	植木鉢	物原Ⅱ 3.4DE	30.4	—	—	赤褐色	無釉	—	
153	植木鉢	物原Ⅱ 3.4DE	18.6	—	—	にぶい赤褐色	無釉	—	
154	植木鉢	物原Ⅱ	15.0	8.3	8.1	にぶい赤褐色	無釉	—	口唇部に穿孔



第138図 物原Ⅱ出土遺物(33)その他



第139図 物原Ⅱ出土遺物(34)その他

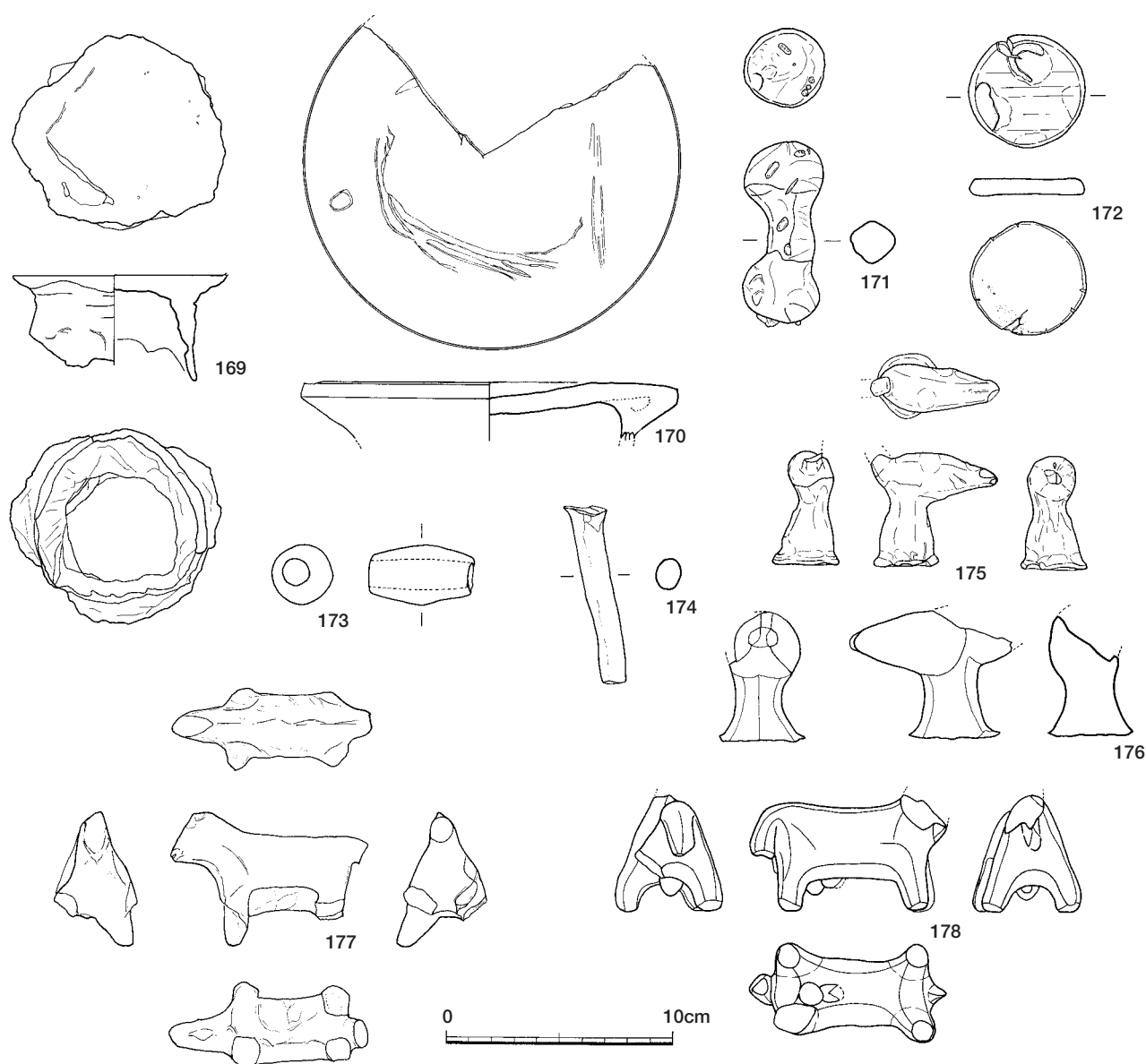
その他(第138～140図)

155・156は、皿状の形状をした素焼きの製品である。155は、黄褐色の目跡が残る。157は、内側胴部に竹文が描かれた素焼きの製品で、皿と思われる。158・159・161は、須恵器のような色調を呈するもので、胎土も非常に緻密である。158・159は、灯明皿で、161は、袋物と思われる。160は、茶入れと思われる資料である。緻密な胎土に灰釉がかかる。小壺の可能性もある。162は蓋とした。上面に側面を鋭い刃物で切り取ったつまみが付けら

れる。163・164は、胴部に中空の把手が付く水注である。棒などを差し込んで、把手を長くして使用したものと思われ、163には、把手の中央に釘止めの穿孔が空けられる。164は、口唇部に他製品の口縁部が熔着する。165は、素焼きで、外底面に円柱状の足が付けられる。用途不明である。166は、脚付きの底部である。167は、肩部やや下位に、ねじりの入った耳が付く。用途不明である。168は、甕瓶である。

第75表 物原Ⅱ 遺物観察表20

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
155	皿?	物原Ⅱ 3.4DE	8.0	5.0	2.0	灰黄褐色	無釉	—	両面に白色の目跡
156	皿?	物原Ⅱ 3.4DE	11.6	4.0	3.3	暗褐色	無釉	—	
157	皿	物原Ⅱ 3.4DE	27.0	23.0	4.3	橙色	無釉	—	内面に文様
158	灯明皿	物原Ⅱ 3.4DE	7.6	4.4	2.0	灰色	無釉	—	
159	灯明皿	物原Ⅱ 3.4DE	8.2	4.6	2.0	灰色	無釉	—	袋物と思われる
160	茶入	物原Ⅱ 3.4DE	3.4	—	—	灰色	灰釉 鈍い黄橙	外面全体と内面 上位施釉	
161	袋物	物原Ⅱ 3.4DE	—	5.9	—	にぶい橙色	無釉	—	
162	蓋	物原Ⅱ 3.4DE	底径 14.0	つまみ径 4.7	4.9	灰赤色	無釉	—	
163	水注	物原Ⅱ 3.4DE	9.0	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	外面全体と内面 上位施釉	
164	水注	物原Ⅱ 3.4DE	12.0	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 緑黒色	口唇部以外 全面施釉	
165	?	物原Ⅱ 3.4DE	—	—	—	黄褐色	無釉	—	脚部裏に貝目
166	?	物原Ⅱ 3.4DE	—	—	—	にぶい橙色	素焼き	—	
167	不明	物原Ⅱ 下	—	—	—	橙色	灰釉 灰緑色	外面のみ施釉	
168	甕瓶	物原Ⅱ 下	—	—	—	褐灰色	灰釉 灰褐色	内面一部釉なし	内面に同心円状 のタタキ目



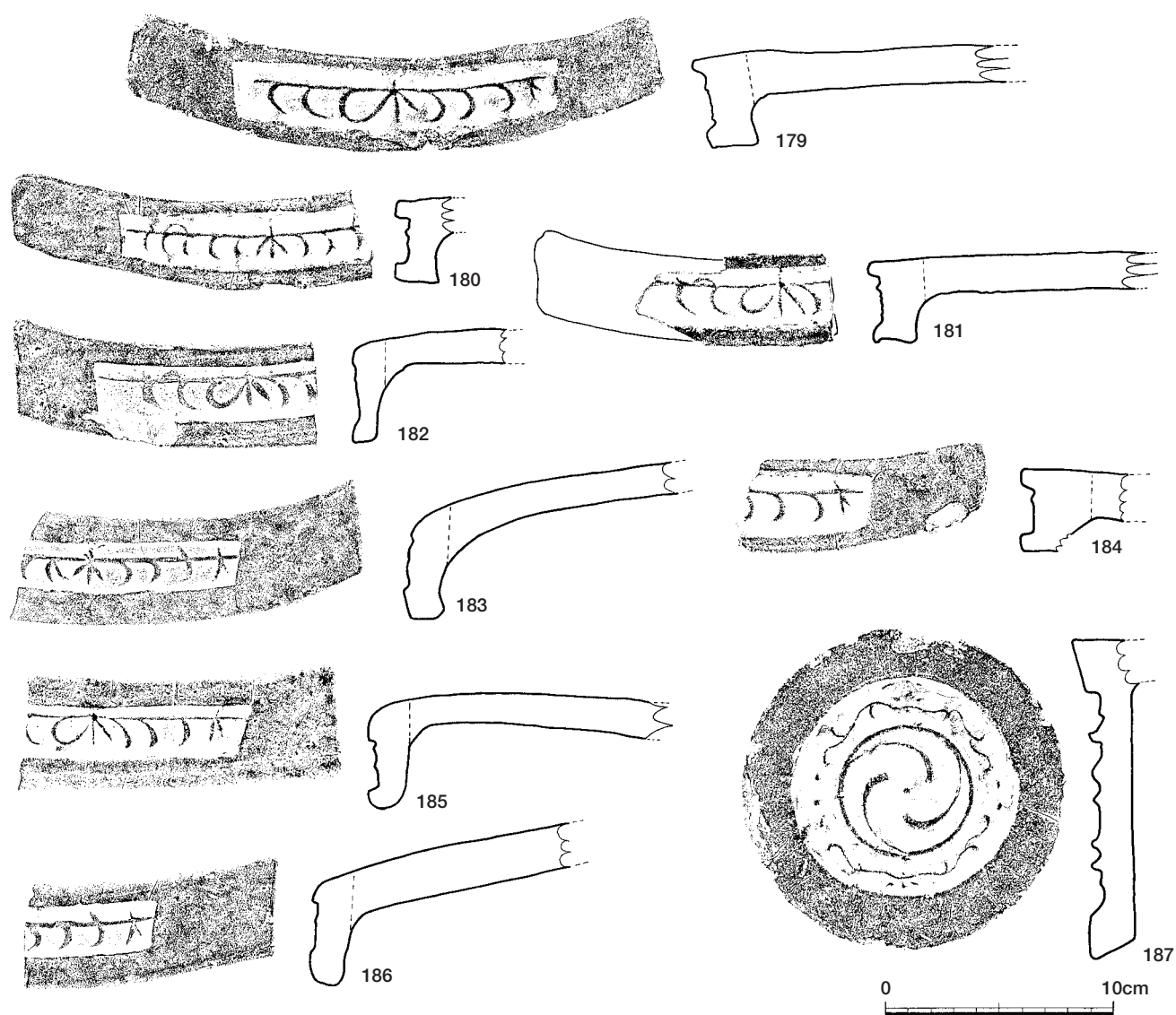
第140図 物原Ⅱ出土遺物(35)その他

169は、雑な作りのもので、用途不明である。170も用途不明の資料である。171は、土製品である。172は、円形の粘土板で、貝目が残ることからセンベイのような用途の窯道具の可能性も考えられる。173は土錘である。174は、上面が何かに付着していた痕跡が残るが、用途不

明である。釘のような形状をしたものである。175・176は、鳥形土製品である。製品に付けられていたものと思われる。頸部から上が欠損している。177・178は、動物型土製品である。馬のように牛のようにも見える。

第76表 物原Ⅱ 遺物観察表21

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
169	?	物原Ⅱ下	—	—	—	灰色	無釉	—	
170	?	物原Ⅱ中下	16.5	—	2.5	暗灰黄色	無釉	—	
171	?	物原Ⅱ3.4E	最大径3.5	最小径2.0	長さ8.0	褐灰色	無釉	—	
172	窯道具?	物原Ⅱ中	—	—	—	茶褐色	無釉	—	上面に貝目
173	土錘	物原Ⅱ3.4DE	2.6	—	4.6	灰色	無釉	—	
174	?	物原Ⅱ2D	—	—	—	にぶい赤褐色	無釉	—	
175	鳥型土製品	物原Ⅱ下	—	—	—	灰褐色	無釉	—	
176	鳥型土製品	物原Ⅱ4E	長さ5.7	幅3.0	5.0	にぶい橙色	無釉	—	
177	動物型土製品	物原Ⅱ3.4E	—	—	—	明赤褐色	無釉	—	
178	動物型土製品	物原Ⅱ4F	—	幅4.7	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	全面施釉	



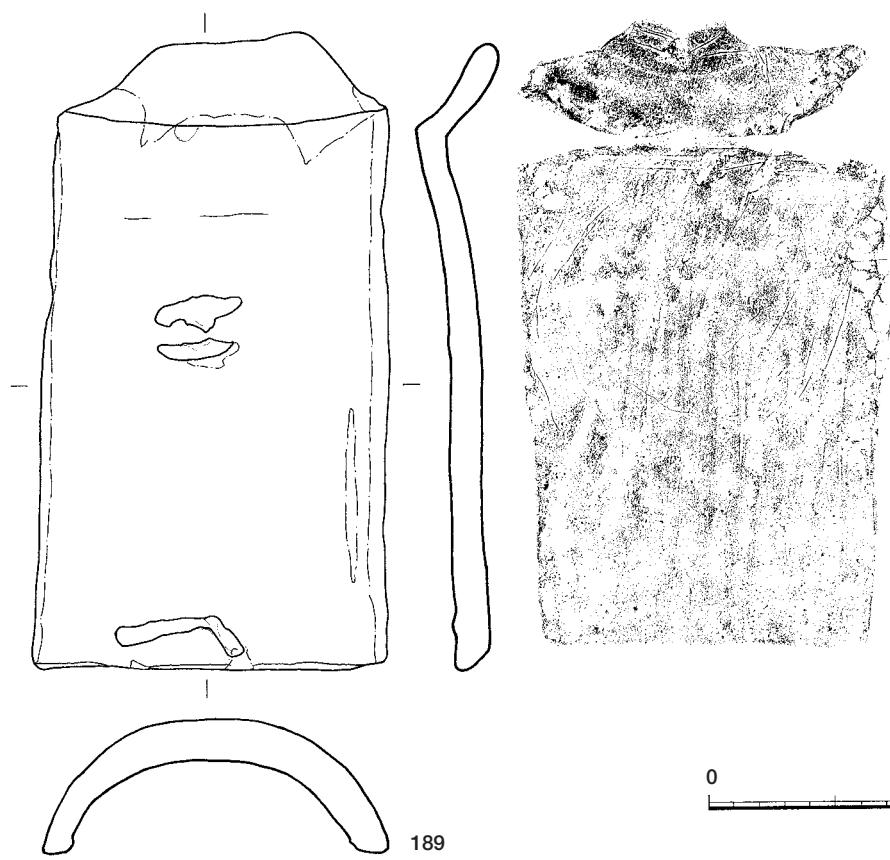
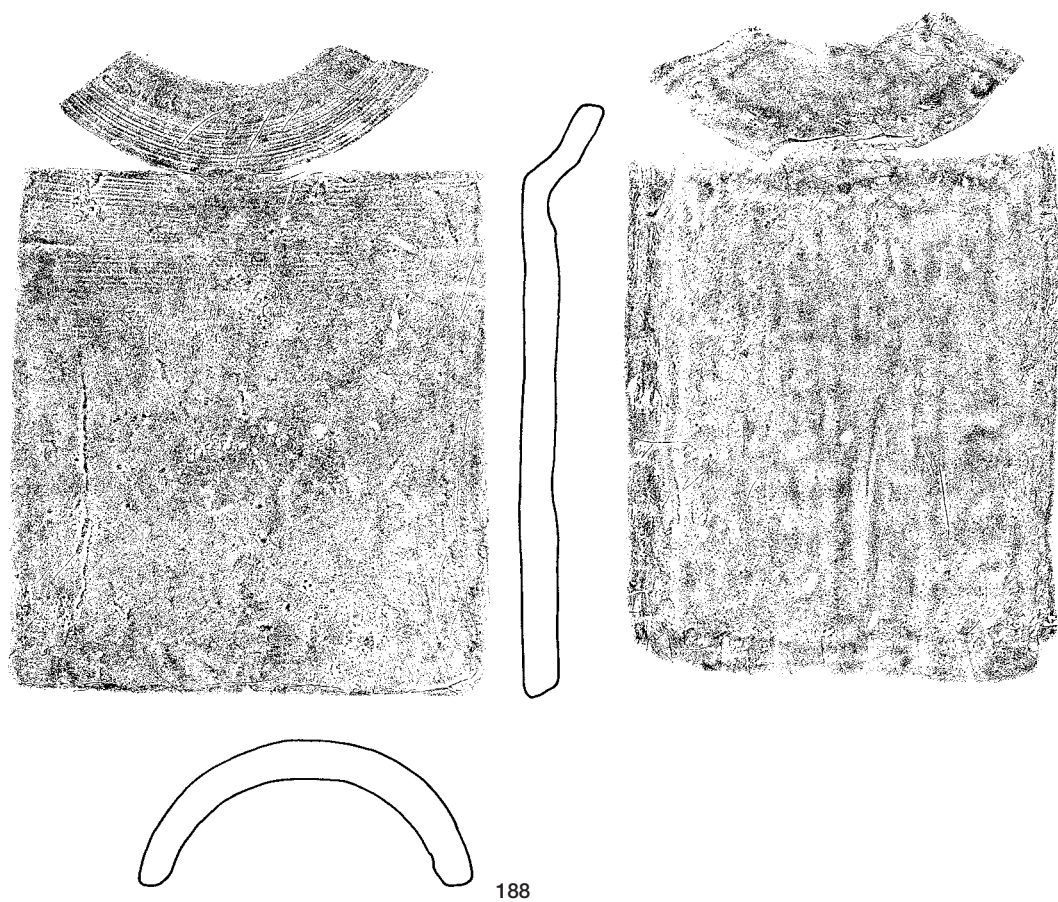
第141図 物原Ⅱ出土遺物(36)瓦

瓦（第141～143図）

瓦頭部分は型に粘土を入れて文様区を作り，平瓦や丸瓦と接合させる。179～186は，軒平瓦である。それぞれ瓦頭部の型が違っている。187は，軒丸瓦である。瓦頭部のみが完形で残る。

第77表 物原Ⅱ 遺物観察表22

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			瓦頭厚	顎厚	幅				
179	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	4.0	2.3	23.3	赤褐色	灰釉 浅黄色	上面と瓦頭部のみ施釉	
180	軒平瓦	物原Ⅱ3.4DE	3.8	1.9	—	褐色	灰釉 暗赤褐色	残存部全部施釉	
181	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	3.5	2.0	—	にぶい赤褐色	灰釉 暗褐色	上面と瓦頭部のみ施釉	
182	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	4.4	1.1	—	灰褐色	灰釉 褐色	上面と瓦頭部のみ施釉	
183	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	5.0	1.8	—	にぶい褐色	灰釉 暗褐色	上面と瓦頭部のみ施釉	
184	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	3.6	—	—	橙色	灰釉 浅黄色	上面と瓦頭部のみ施釉	
185	軒平瓦	物原Ⅱ3.4E	4.5	1.7	—	橙色	灰釉 暗褐色	上面と瓦頭部のみ施釉	
186	軒平瓦	物原Ⅱ3.4DE	4.8	1.6	—	赤褐色	灰釉 にぶい赤褐色	—	
187	軒丸瓦	物原Ⅱ3.4E	2.0	厚さ2.3	長さ2.5	赤褐色	灰釉 褐色	上面と瓦頭部のみ施釉	



0 10cm

第142図 物原Ⅱ出土遺物(37)瓦

188～191は、丸瓦である。

188は、上面にヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される。下面は、粘土紐を輪積みにして成形した痕跡を指でナデ消しているものと思われる。

189は、上面に他製品の一部が熔着する。下面は、削り調整が施される。

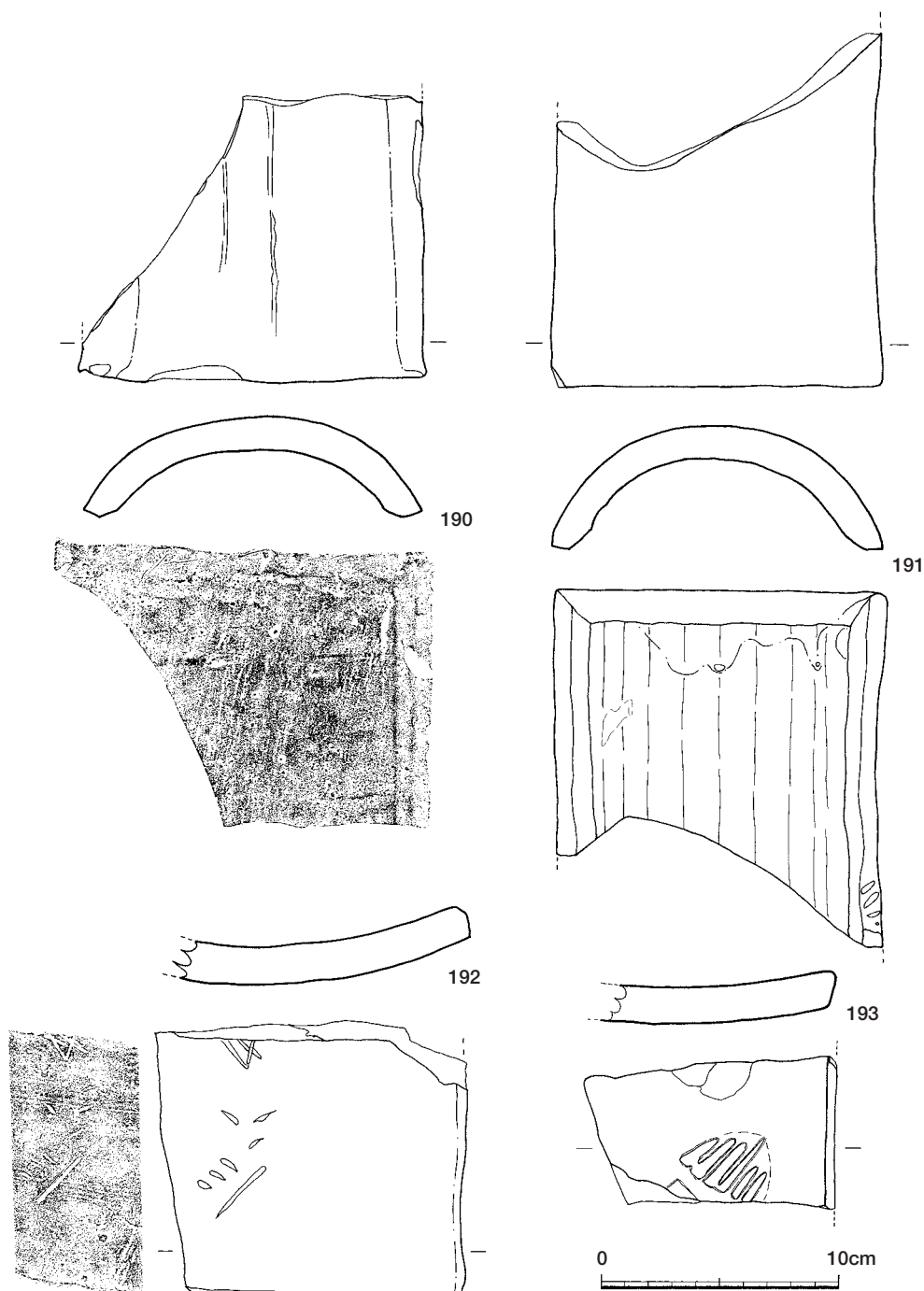
190は、上面に他の瓦の一部が熔着する資料である。内面はヘラ状工具により削り調整が施される。

191も下面はヘラ削り調整が施される。

192・193は、平瓦である。

192は、下面に釘彫りの文字が刻まれるが、判読不能である。

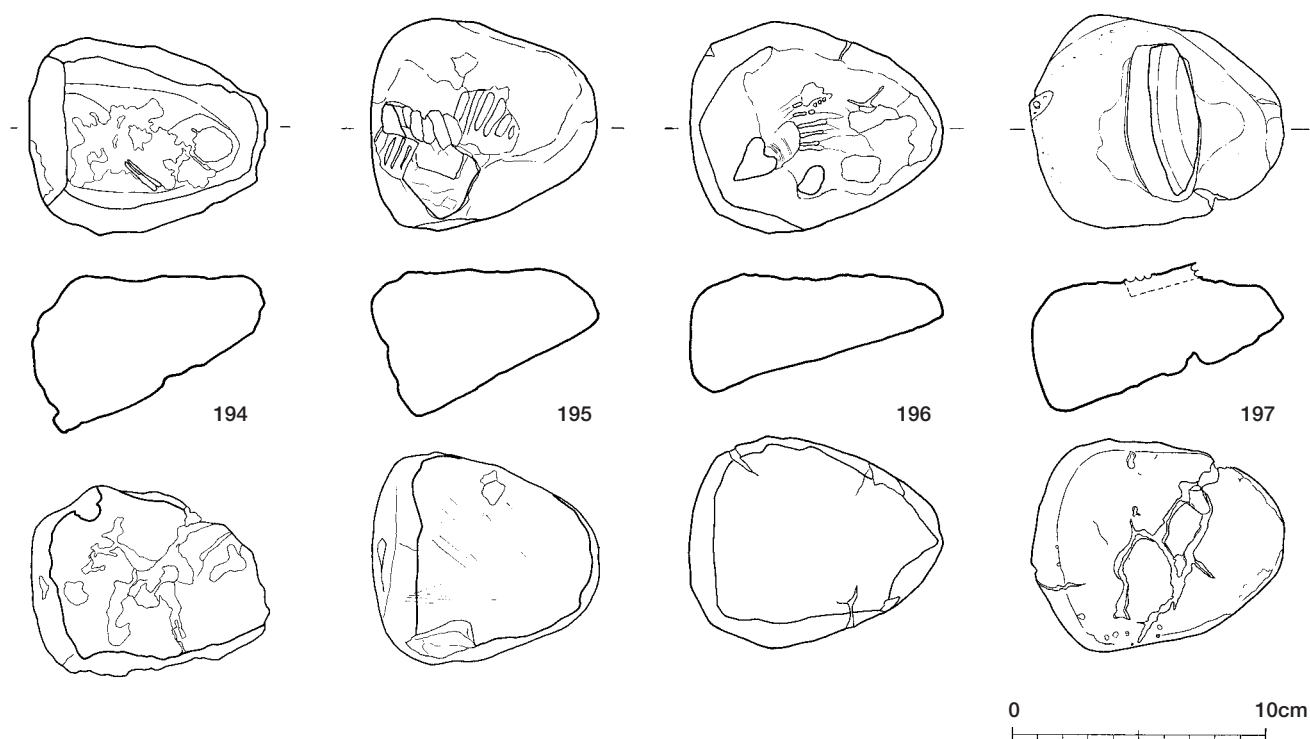
193は、下面の端にイタヤガイの貝目が残る資料である。



第143図 物原Ⅱ出土遺物(38)瓦

第78表 物原Ⅱ 遺物観察表23

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			厚さ	高さ	幅				
188	丸瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.5	4.2	13.3	橙色	灰釉 淡黄色	上面玉縁部以外施釉	
189	丸瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.6	3.7	13.7	褐灰色	灰釉 緑黒色	上面玉縁部以外施釉	上面に目跡
190	丸瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.3	2.8	16.3	褐灰色	鉄釉 暗緑褐色	上面のみ施釉	上面に目跡
191	丸瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.3	3.9	14.0	にぶい赤褐色	灰釉 灰黄褐色	上面のみ施釉	下面ヘラ削り調整
192	平瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.7	—	—	橙色	灰釉 にぶい黄褐色	上面のみ施釉	下面に釘彫り
193	平瓦	物原Ⅱ 3.4 D E	1.5	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 褐色	上面のみ施釉	下面に貝目



第144図 物原Ⅱ出土遺物(39)窯道具

窯道具（第144～150図）

窯道具は、大きく4つに分けることができ、それぞれでさらに細分化することができる。

そのうち、大部分を占めるものはハマである。その他、詳細な使用方法が不明であるが、窯道具であろうと考えられる資料や、瓦と瓦の間に挟んで使用したのではないかと考えられる窯道具も見られる。また、新しくトチンやサヤ鉢も出土している。

194～216は、ハマで、4つに細分化することができる。平面が三角形・円形・長形状で、断面が馬蹄形を呈するもの、粘土を棒状に握って使用したもの、窯壁や粘土塊を転用した大形のもの、本来は窯の内部の様子を

見るための色見孔の蓋として使用されたものを転用した平面ドーナツ型状のものである。

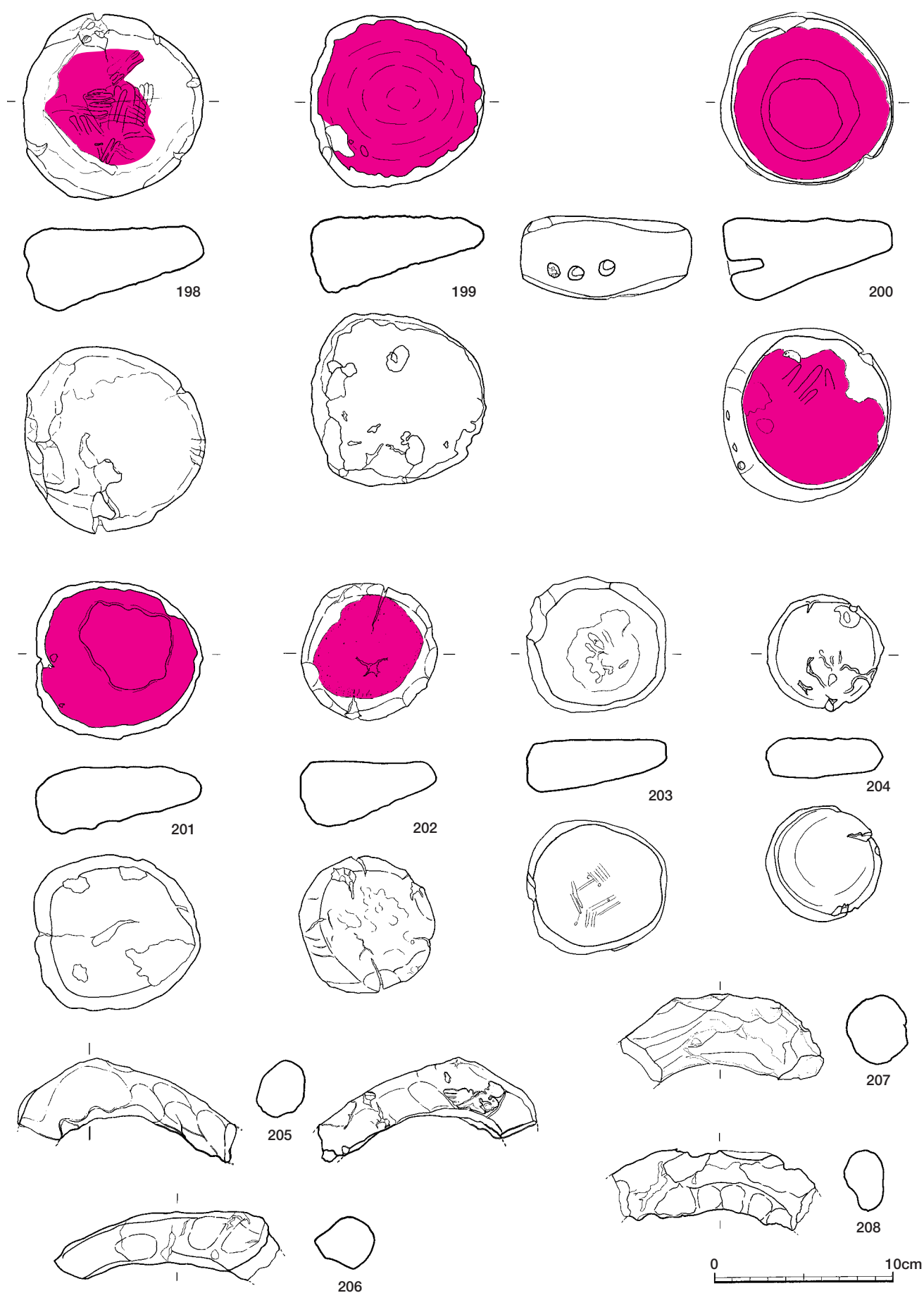
194～197は、平面が三角形、断面が馬蹄形を呈するものである。194～196は上面に貝目が残る、197は、上面に、製品の底部の一部が熔着する資料である。

198～204は、平面が円形で、断面が馬蹄形を呈するものである。上面や下面に、白色砂粒混じりの胎土が塗布され、貝目や高台痕が残る資料が多い。200・203は両面とも使用している。また、200は、後ろ側面に3か所穿孔が施される。

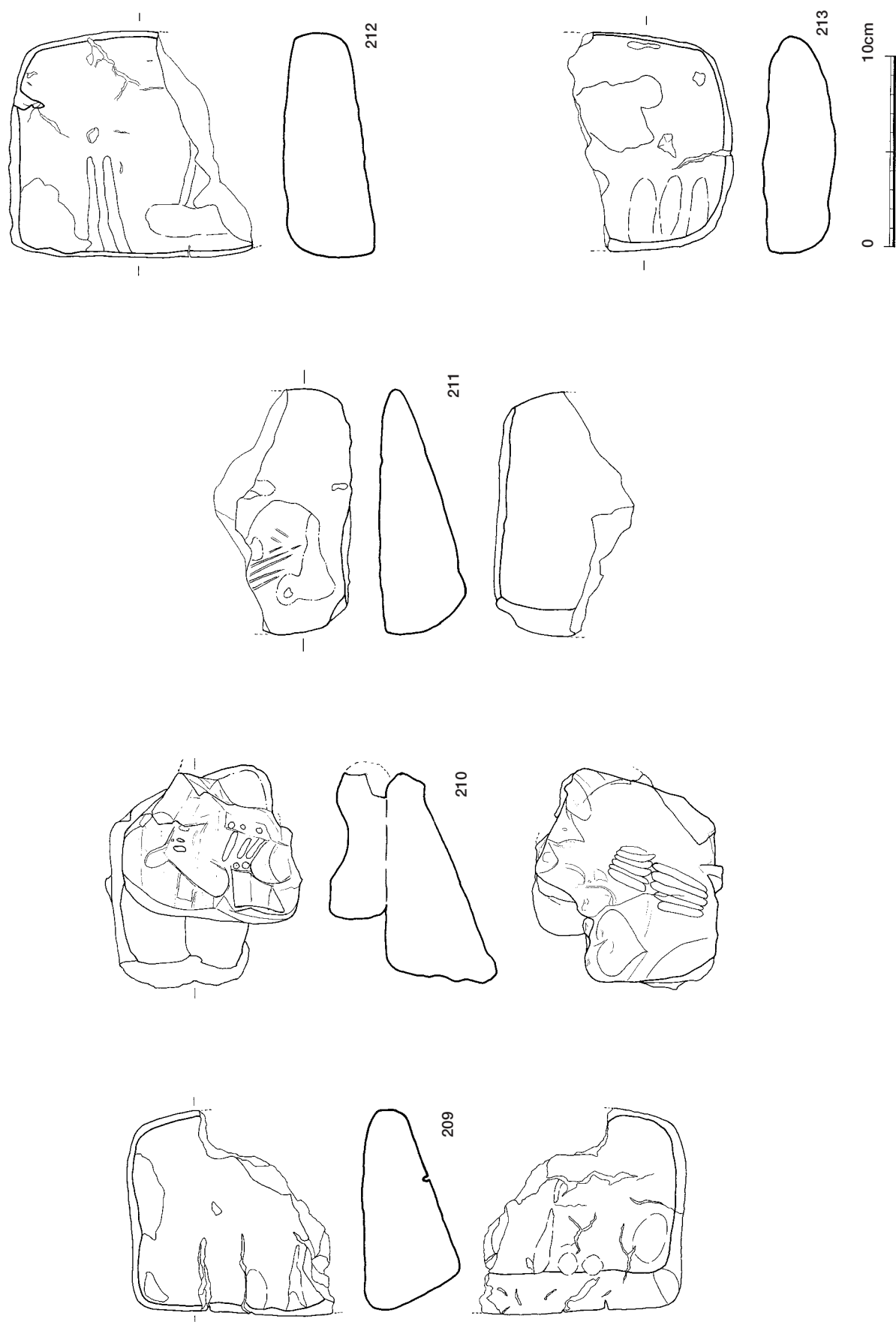
205～208は、粘土を棒状に握って使用したもので、表面に指跡が残る。205は、貝目が看取される。

第79表 物原Ⅱ 遺物観察表24

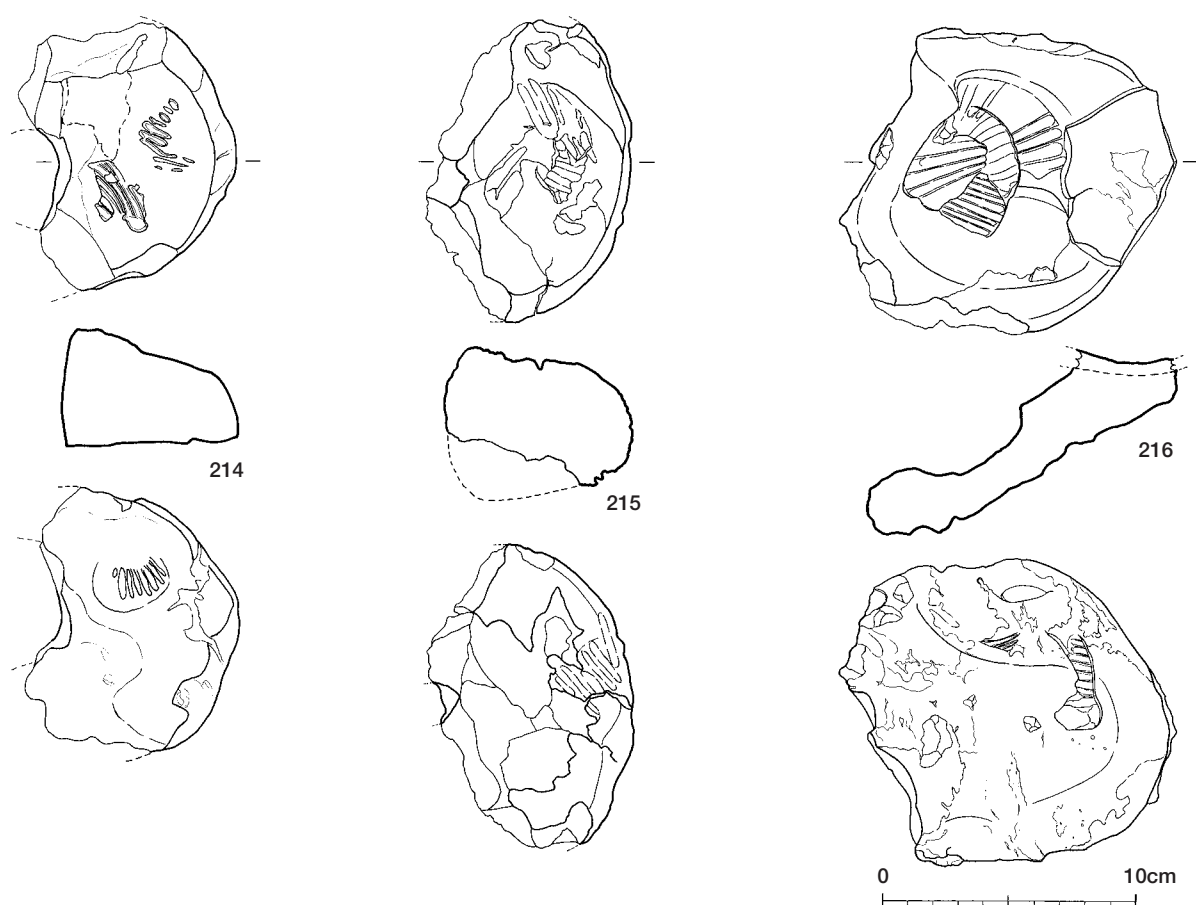
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)		胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	厚さ				
194	ハマ	物原Ⅱ	9.1	6.2	暗灰黄色	—	—	上面に貝目
195	ハマ	物原Ⅱ	8.9	5.7	灰褐色	—	—	上面に貝目
196	ハマ	物原Ⅱ	10.0	4.6	灰色	—	—	上面に貝目
197	ハマ	物原Ⅱ	9.8	5.0	暗赤褐色	—	—	上面に貝目 底部付着
198	ハマ	物原Ⅱ	10.0	4.2	黒色	—	—	上面に貝目
199	ハマ	物原Ⅱ	9.6	4.2	暗褐色	—	—	上面に砂粒を多く含む白土を塗布 高台痕
200	ハマ	物原Ⅱ	9.4	4.5	暗褐色	—	—	上面に砂粒を多く含む白土を塗布 高台痕 側面に3か所穿孔
201	ハマ	物原Ⅱ	9.3	3.6	暗赤褐色	—	—	上面に砂粒を多く含む白土を塗布 高台痕
202	ハマ	物原Ⅱ	7.5	3.7	黒褐色	—	—	上面に砂粒を多く含む白土を塗布
203	ハマ	物原Ⅱ	7.8	2.8	灰色	—	—	両面に貝目
204	ハマ	物原Ⅱ	6.5	2.2	褐色	—	—	上面に貝目・高台痕
205	ハマ	物原Ⅱ	—	3.2	黒褐色	—	—	貝目 指跡
206	ハマ	物原Ⅱ	—	2.8	褐灰色	—	—	指跡
207	ハマ	物原Ⅱ	—	3.9	灰色	—	—	指跡
208	ハマ	物原Ⅱ	—	3.4	褐灰色	—	—	指跡



第145図 物原Ⅱ出土遺物(40)窯道具



第146図 物原Ⅱ出土遺物(41)窯道具



第147図 物原Ⅱ出土遺物(42)窯道具

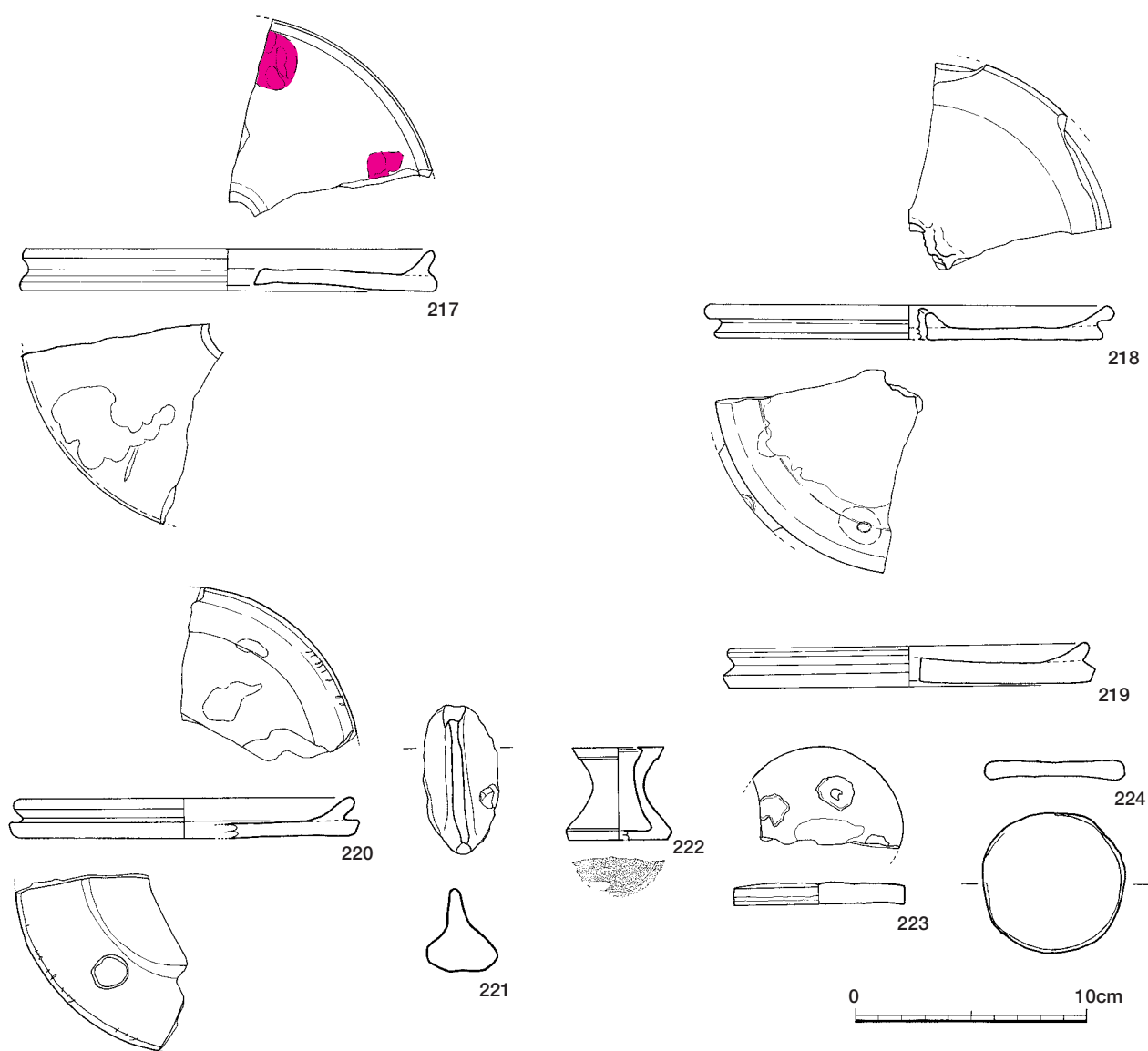
209～213は、平面が長方形、断面が馬蹄形を呈するものである。210は、上面に、平面が三角形をしたハマが熔着する。下面には貝目も残る。

214・215は、平面がドーナツ状の形状を呈する資料で、色見孔の蓋であるが、転用してハマとしても使用している資料が数多く確認されるため、ここではハマの中に分類して掲載した。本来の用途は窯体の一部で、窯体内の様子を観察するための色見孔をふさぐ蓋であり、中央の穴は、開閉するために棒状のものを差し込む穴である。214・215のどちらも、両面に貝目が残るが、216は、上面に釉垂れも看取される。

216は、不定型な粘土塊をハマとして代用したと考えられる資料である。上面には釉垂れが付着しており、イタヤガイの貝目が看取される。下面には、イタヤガイではない貝目が残る。

第80表 物原Ⅱ 遺物観察表25

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)		胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	厚さ				
209	ハマ	物原Ⅱ	10.4	4.9	明赤褐色	—	—	側面指跡
210	ハマ	物原Ⅱ	—	8.8	灰色	—	—	両面に貝目
211	ハマ	物原Ⅱ	12.8	4.4	黒褐色	—	—	上面に貝目
212	ハマ	物原Ⅱ	11.6	4.6	にぶい赤褐色	—	—	
213	ハマ	物原Ⅱ	11.3	3.8	赤灰色	—	—	指跡
214	ハマ	物原Ⅱ	—	4.6	明赤褐色	—	—	両面に貝目
215	ハマ	物原Ⅱ	—	—	灰褐色	—	—	両面に貝目
216	ハマ	物原Ⅱ 3.4DE	—	—	黒褐色	—	—	両面に貝目 底部付着



第148図 物原Ⅱ出土遺物(43)窯道具

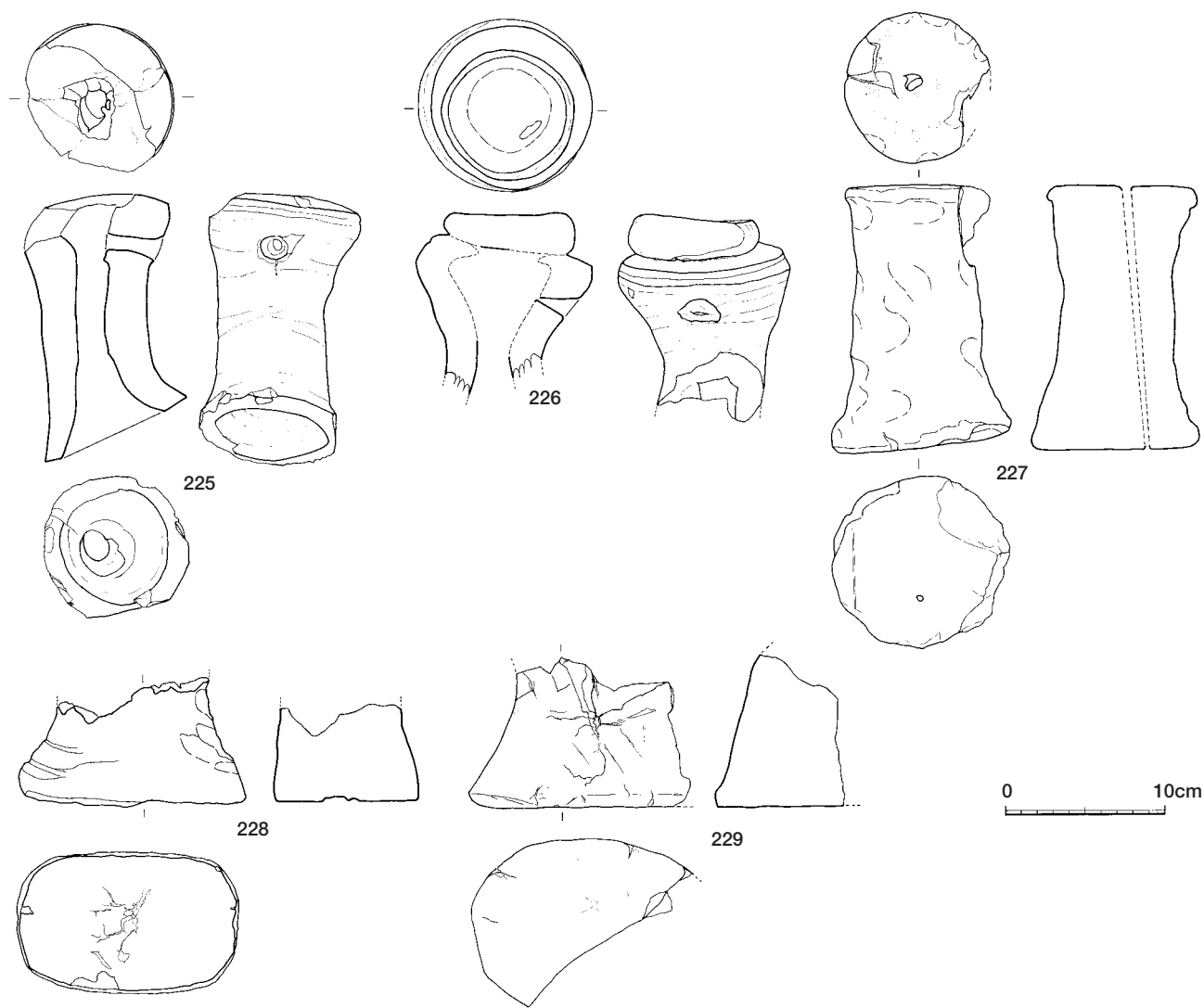
217～220は、窯道具に分類して掲載したが、本来の用途は不明である。資料からは詳細な形状は不明であるが、他の物原から出土した同種類の資料を参考によると、平面は円板状で、上面の縁に斜め上方に立ち上がるように粘土紐を貼り巡らす。中心には穴が穿孔され、その周囲に大豆粒大の大きさの突起が3か所付く。217は、上面に貝目残り、下面には、黄褐色の目跡が残る。218

は、下面に貝目と目跡が残る。220は、下面に目跡が残る。

221は、平面が楕円形を呈するもので、瓦を焼成する際に挟んで使用した窯道具と思われる。223は、窯道具としたが詳細は不明である。上面に貝目残り。222・224は、堂平窯で使用された窯道具ではないと考えられる資料で、222は糸巻き型を呈する磁製のもの、224は磁製のセンバイである。

第81表 物原Ⅱ 遺物観察表26

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			上径	底径	器高				
217	窯道具	物原Ⅱ3.4DE中	17.5	17.7	1.8	褐灰色	—	—	上面に貝目
218	窯道具	物原Ⅱ3.4DE中	17.1	16.5	1.5	暗褐色	—	—	下面に目跡
219	窯道具	物原Ⅱ3.4DE中	15.5	15.6	1.8	黄橙色	—	—	
220	窯道具	物原Ⅱ3.4DE中	14.7	14.7	1.7	褐灰色	—	—	下面に目跡
221	窯道具	物原Ⅱ3.4DE中	長さ6.4	幅3.2	3.1	灰褐色	—	—	
222	窯道具	物原Ⅱ4D	4.0	4.3	4.0	白色	—	—	糸切り底
223	窯道具	物原Ⅱ3.4DE上	7.3	7.3	1.0	褐灰色	—	—	上面に目跡
224	センバイ	物原Ⅱ3.4E	径6.1	厚さ0.7	—	灰黄色	—	—	



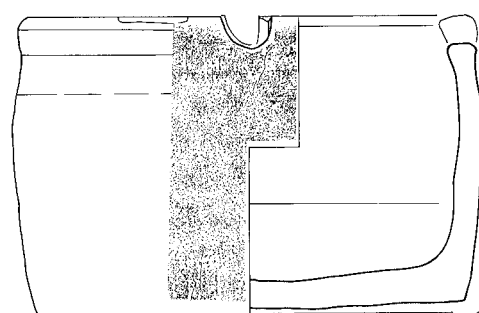
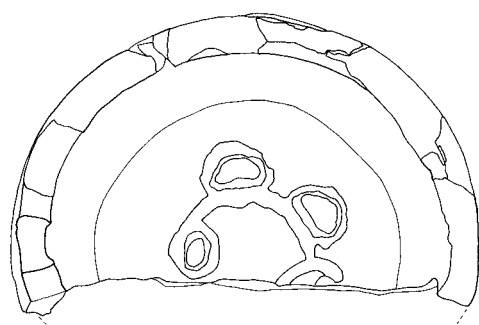
第149図 物原Ⅱ出土遺物(44)窯道具

225～229は、トチンである。225は、脚部が「ハ」の字に開く形状を呈し、底面は傾斜する床面に合わせて斜めにつくられる。中心は中空である。226は、225と同様の形状を呈するものと思われる。上面には、平面が円形で断面が馬蹄形を呈するハマが熔着しており、そのハマの上面には製品の痕跡が円形に残る。227は鼓型トチン状

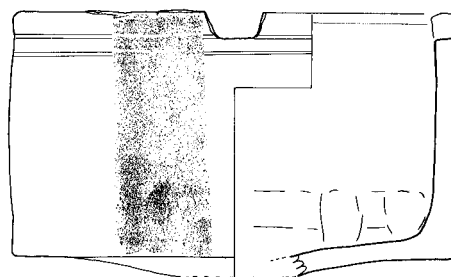
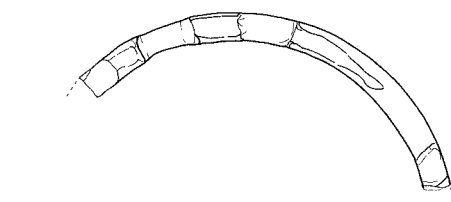
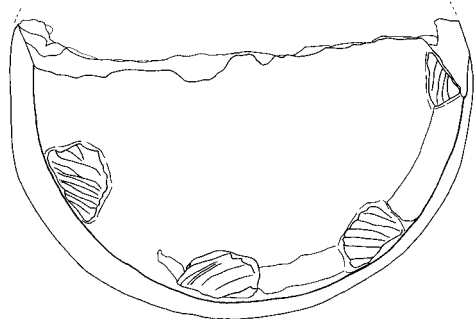
の形状を呈するが、脚部は「ハ」の字に開き、底面もやや斜めにつくられる。また、中心付近に上面から底面まで貫通する穿孔が施される。228・229は、底面が楕円形を呈するもので、上部が欠損しているため全体の形状は分からないが、トチンと思われる。

第82表 物原Ⅱ 遺物観察表27

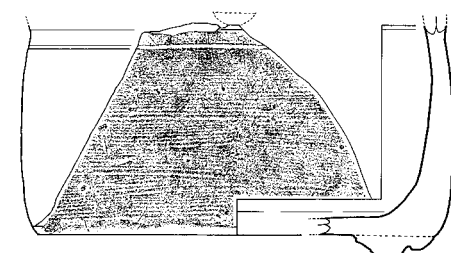
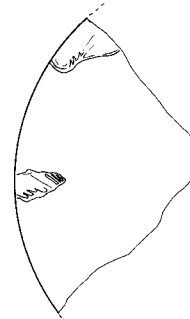
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			上径	底径	器高				
225	トチン	物原Ⅱ 3.4 E	—	9.7	16.8	にぶい黄橙色	—	—	側面に1か所穿孔
226	トチン	物原Ⅱ 3.4 E	10.0	—	—	にぶい橙色	—	—	上面に径8cmの円形くさび型ハマ熔着 側面に1か所穿孔
227	トチン	物原Ⅱ 3.4 E	9.1	11.1	16.8	褐色	—	—	
228	トチン	物原Ⅱ 3.4 E	—	13.5	—	にぶい褐色	—	—	
229	トチン	物原Ⅱ 3.4 E	—	—	—	黄橙色	—	—	



230



231



232



0 10cm

230～232はサヤ鉢で、堂平窯跡では、古い時期の物原からは出土しておらず、物原Ⅱで初めて出土する。

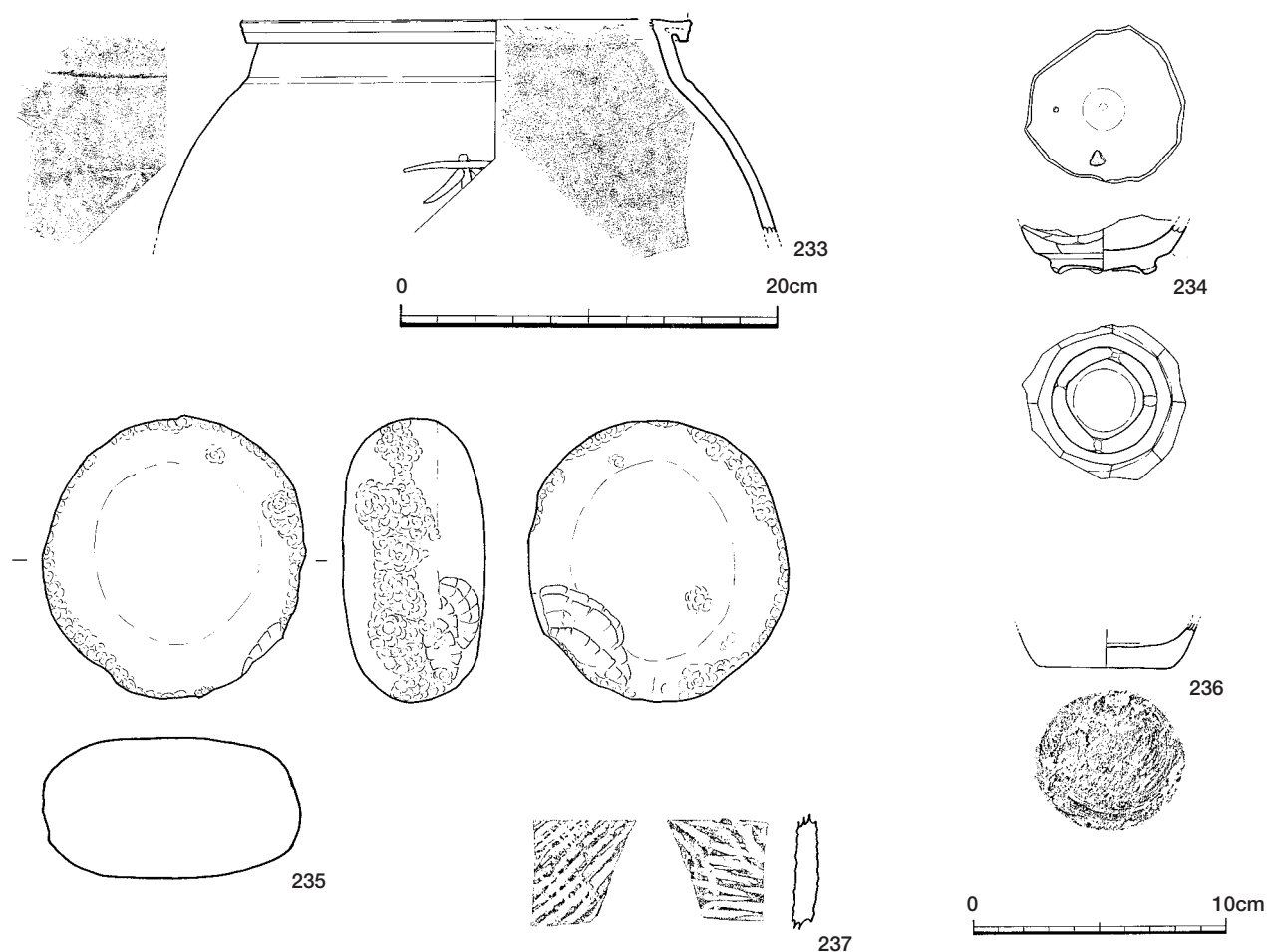
口唇部は、ヘラ状工具により、半円形や台形状に切り抜かれている。他の物原から出土した資料などからこの切り抜きは、1か所のみと思われる。内外面には、筋状の調整痕が見られるものが多い。

230は、内底面に貝目と白色陶胎碗の高台痕が残る資料である。また、口唇部には目跡が、外底面には貝目が残る。231は、外面口縁部下位に2条の沈線を有するものである。口唇部には目跡、外底面に貝目が残るが、内面には筋状の調整痕は見られない。底部が窪んだように歪んでいる。232は、口縁部先端が欠損しているが、半円形に切り抜かれた一部分が残る資料である。外底面には棒状のハマが、熔着しているものと思われる。

第150図 物原Ⅱ出土遺物(45)窯道具

第83表 物原Ⅱ 遺物観察表28

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
230	サヤ鉢	物原Ⅱ3.4DE中	18.0	16.8	11.7	にぶい褐色	—	—	口唇部・内底面・外底面に貝目
231	サヤ鉢	物原Ⅱ3.4DE中	17.5	17.5	9.6	褐灰色	—	—	口唇部・外底面に貝目
232	サヤ鉢	物原Ⅱ3.4DE中	—	15.5	—	灰褐色	—	—	外底面に粘土塊熔着



第151図 物原Ⅱ出土遺物(46)堂平窯製品以外

堂平窯製品以外（第151図）

233～237は、堂平窯製品ではない資料を掲載した。

233は、苗代川焼きの甕である。外面には掻き落とし紋が施される。釉は、灰釉が口唇部のみ拭い取られ、その他残存部は全面に施釉される。

234は、中国白磁の小坏である。高台は挟り高台を呈する。

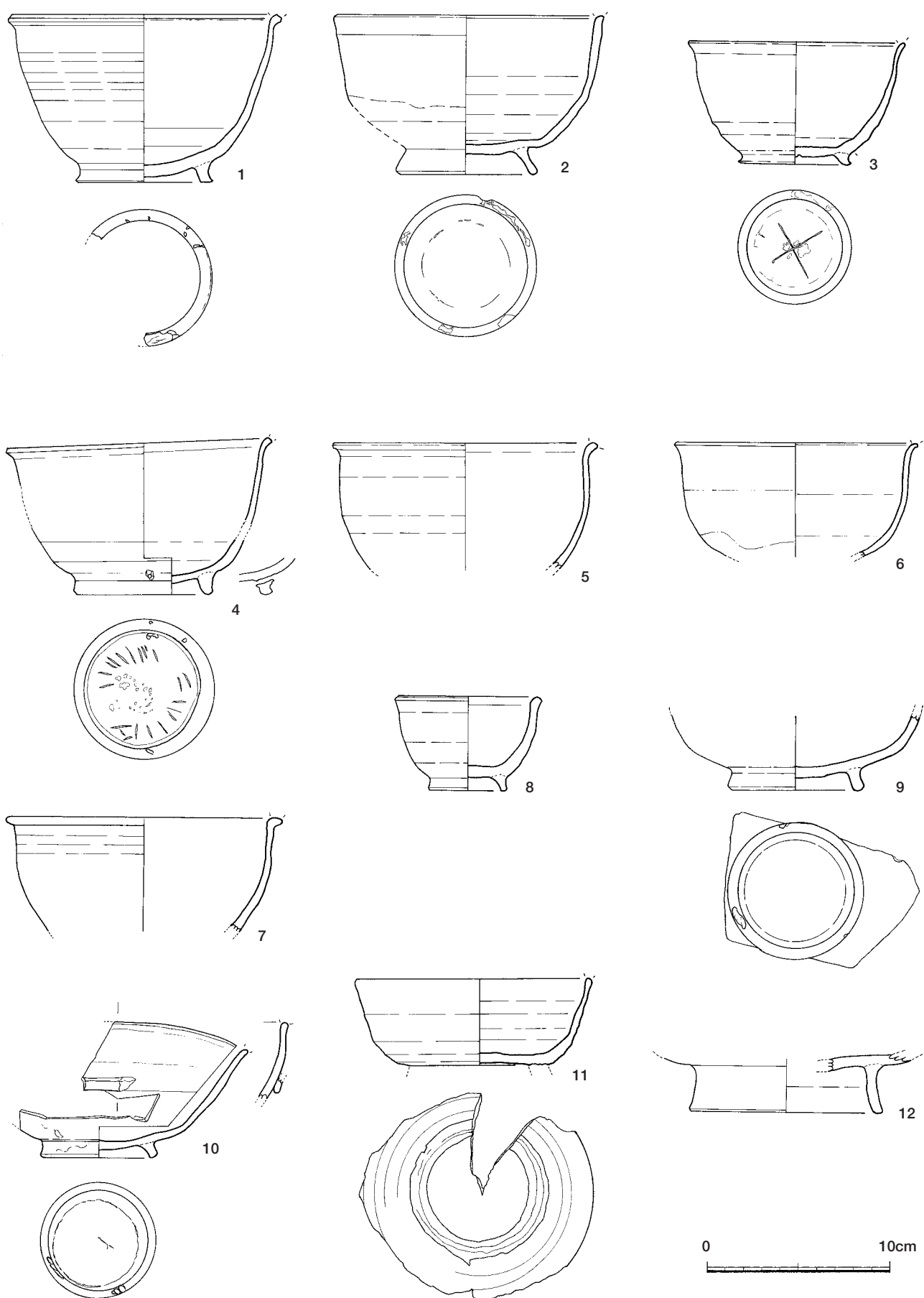
235は、敲石である。側面に敲打痕が看取される。

236は、土師器の坏である。外底面は糸切りである。

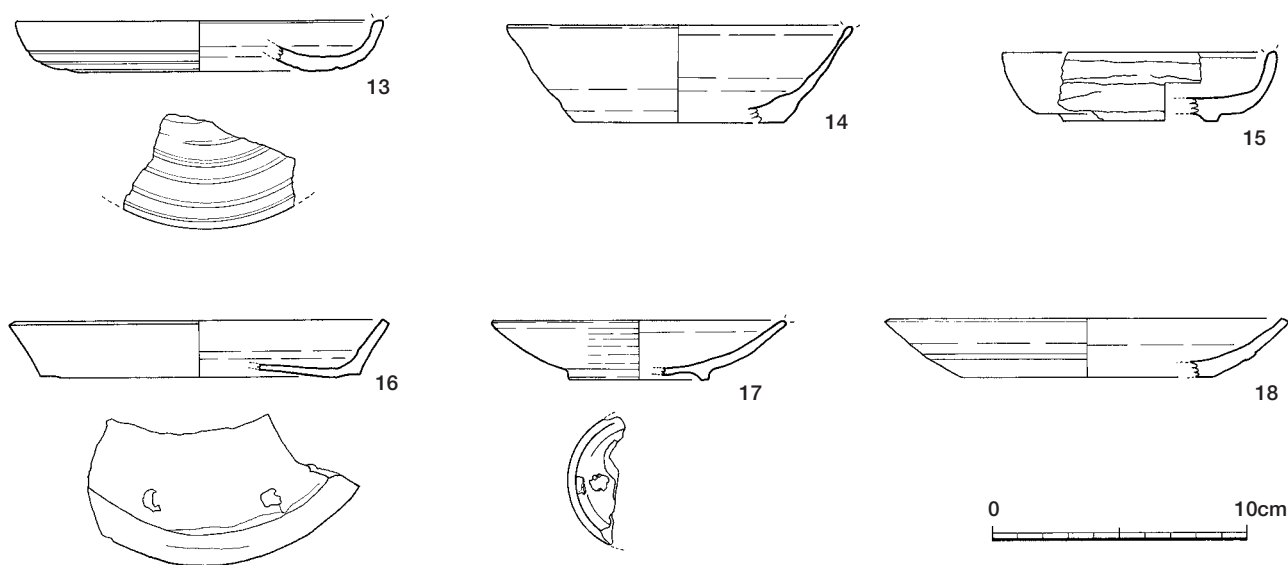
237は、須恵器である。小片のため器種は不明である。内面に平行タタキ、外面に格子目タタキが看取される。

第84表 物原Ⅱ 遺物観察表29

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
233	甕	物原Ⅱ	24.0	—	—	赤褐色	灰釉 緑灰色	口唇部のみ 釉剥ぎ	苗代川焼(19世紀代) 外面胴部に掻き落とし文
234	小坏	物原Ⅱ 3.4 D E	—	4.2	—	灰白色	透明釉	残存部の上面 のみ施釉	中国白磁 挟り高台
235	敲石	物原Ⅱ 3.4 E	長さ11.0	幅10.3	厚さ5.5	灰色	—	—	糸切り底
236	土師器	物原Ⅱ	—	5.4	—	にぶい黄橙色	—	—	土師器
237	須恵器	物原Ⅱ	—	—	—	褐色	—	—	須恵器



第152図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(1)碗



第153図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(2) 皿

物原Ⅲ～Ⅵ内出土遺物

物原Ⅲ～Ⅵについては、後世の開発により攪乱を受けているため、特徴的な資料を一括して掲載した。

碗（第152図）

高台は、付け高台でバチ状を呈する。1は、外面にヘラ状工具による調整痕が残る。2は、外面腰部に削り出し成形の痕跡が残る。3は、高台内面に釘彫りが施される。4は、高台内面にタタキ成形の痕跡が残る。高台脇には1か所穿孔が施される。5・7は、外面にヘラ状工具による調整痕が僅かに看取される。6は、外面腰部以下は露胎する。8は、小形の資料である。碗以外の用途が考えられる。9は大型で、腰部の張りが強い資料である。10は、焼き歪みが強く、合わせ口で焼成した際の他の碗の口縁部が熔着する資料である。11は、付け高台部

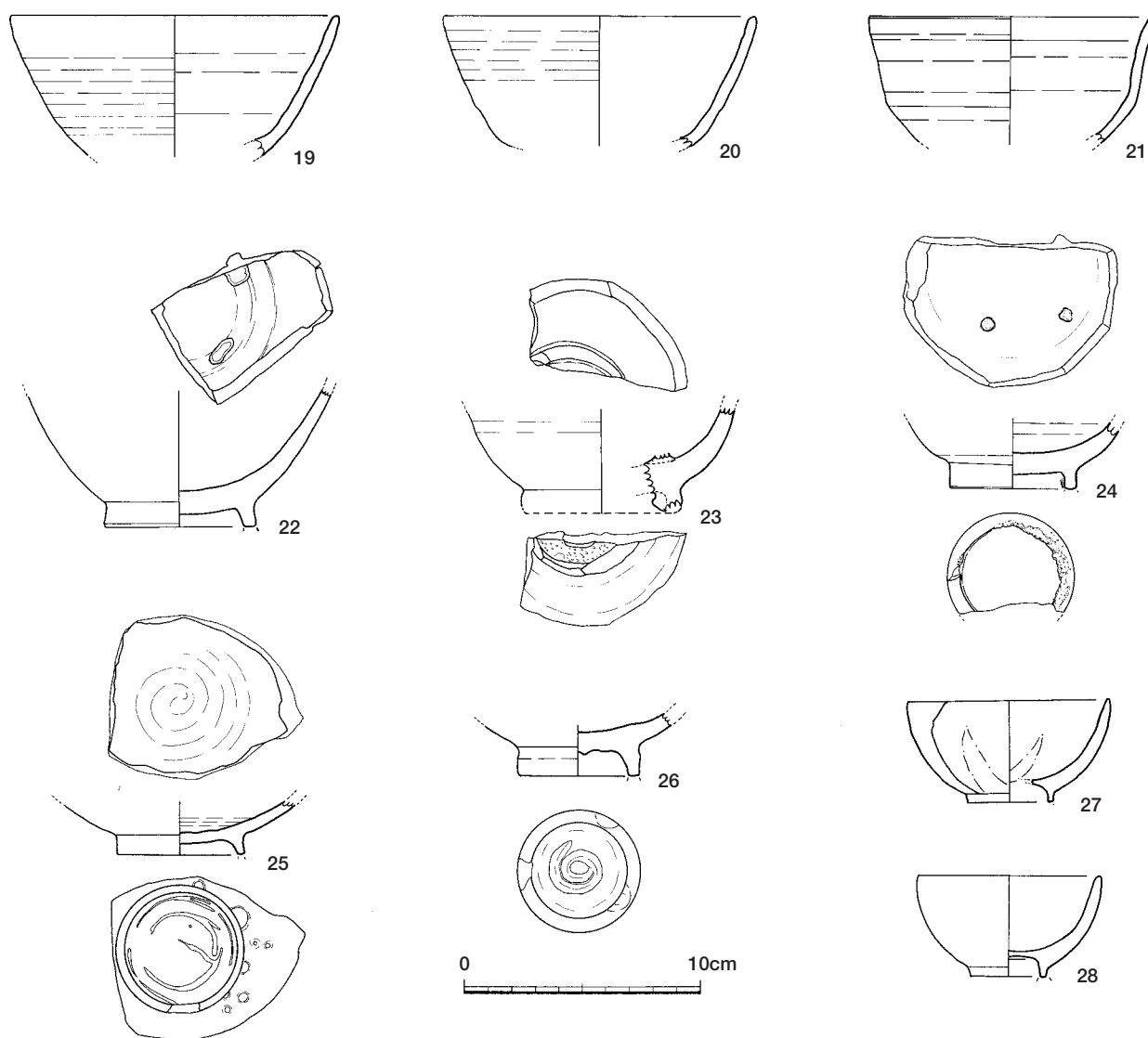
が外れて欠損しているもので、碗としたが皿の可能性も考えられる。12は、大型の高台のみの資料である。碗としたが、鉢もしくは皿の可能性も考えられる。

皿（第153図）

13～18は皿としたが、13・14・16は、皿以外の可能性も考えられる。13は外面に沈線が巡るもので、焼き歪みが見られる。14は、口唇部以外全面施釉される。15は、高台が削り出しでつくられる。16は、口唇部が平坦につくられ、外底面に貝目が残る。17・18は、非常に緻密な胎土でよく焼き締まっているものである。17は高台が削り出しでつくられ、貝目と思われる痕跡が残る。18は、高台が付かないタイプのもので、外面にはヘラ状工具による調整痕が看取される。

第85表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表1

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
1	碗	物原Ⅴ	15.0	7.4	9.2	褐灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	畳付に貝目
2	碗	物原Ⅴ	14.8	7.7	8.7	暗赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	畳付に貝目
3	碗	物原Ⅴ	12.0	6.2	6.7	灰色	灰釉 灰緑色	口唇部と高台脇から高台内面無釉	高台内面にタタキ目釘彫り
4	碗	物原Ⅴ	14.5	8.3	7.6	褐色	灰釉 暗褐色	口唇部と高台内面以外施釉	高台に穿孔・貝目 高台内面にタタキ目
5	碗	物原Ⅴ	14.6	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
6	碗	物原Ⅵ	13.3	—	—	褐灰色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
7	碗	物原Ⅵ	15.0	—	—	黄灰褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	
8	碗	物原Ⅳ	7.7	4.2	5.1	にぶい褐色	無釉?	—	高台内面にハマの痕跡
9	碗	物原Ⅴ6D下	—	7.0	—	暗灰黄色	灰釉 暗灰黄色	残存部全面施釉	畳付に貝目
10	碗	物原Ⅳ	—	6.4	—	褐灰色	灰釉 黄緑色	口唇部以外全面施釉	高台貝目
11	碗	物原Ⅵ	13.0	7.5	4.7	暗赤灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	
12	碗	物原Ⅵ	—	10.5	—	灰色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	
13	皿	物原Ⅲ	14.4	—	2.0	灰褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	
14	皿	物原Ⅵ	13.6	8.4	3.9	灰色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	
15	皿	物原Ⅵ	10.8	—	2.7	灰褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	
16	皿	物原Ⅲ	15.0	12.6	2.2	黒褐色	鉄釉 暗赤褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
17	皿	物原Ⅴ	11.5	5.5	2.4	褐灰色	無釉	—	高台内面に目跡
18	皿	物原Ⅲ	15.8	—	—	褐色	無釉	—	蓋の可能性



第154図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(3)白色陶胎 碗

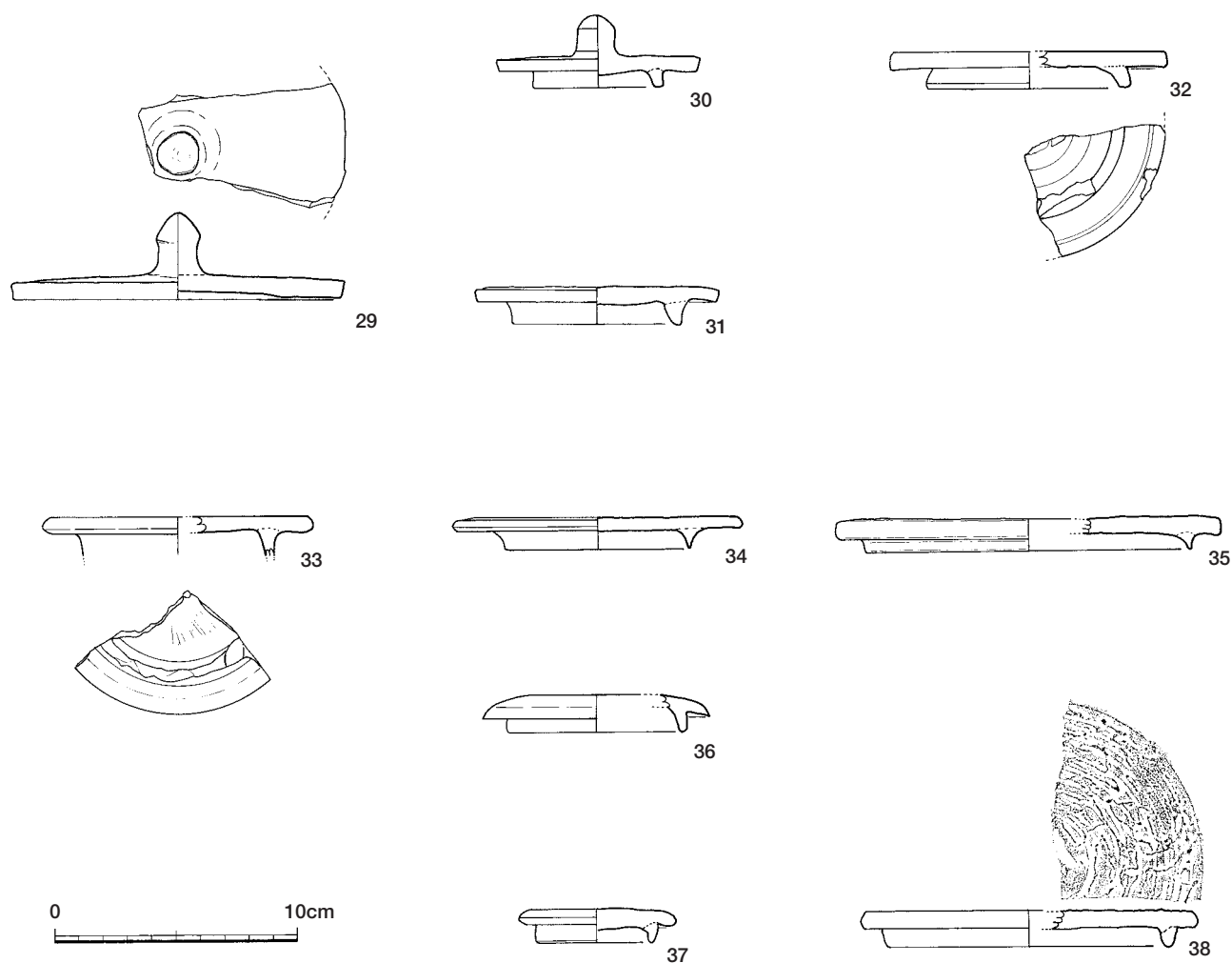
白色陶胎 碗(第154図)

19・20は、外面にヘラ状工具による調整痕が看取される。21は、胴部が中位で屈曲する形状のものである。22・24は、見込みに胎土目と思われる目跡が残るもので、24は、畳付にも白色の砂粒を含む胎土目が熔着する。23は、見込みに高台が熔着し、高台内面には白色の砂粒

を含む胎土目が熔着する。25は、高台内面に輪状の高台痕と思われる痕跡が残る。外面底部付近の透明釉が、黒色に変化している。26は、高台内面が巴状に削り出される。27・28は、ほぼ同型をした小形の資料である。碗としたが他の用途が考えられる。27は、外面に一部露胎する部分が見られる。

第86表 物原Ⅲ～Ⅳ 遺物観察表 2

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
19	碗	物原Ⅲ	14.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	
20	碗	物原Ⅲ	13.2	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	
21	碗	物原Ⅲ	12.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	
22	碗	物原Ⅴ	—	6.4	—	浅黄橙色	やや黄緑がかった透明釉	畳付き以外総釉	高台脇に指跡 見込みに目跡
23	碗	物原Ⅴ	—	—	—	白色	白濁した透明釉	残存部全面施釉	見込みに高台痕 高台内面に白色砂粒付着
24	碗	物原Ⅵ	—	5.4	—	灰白色	透明釉	残存部全面施釉	見込みに目跡 高台に白色砂粒付着
25	碗	物原Ⅴ5D	—	5.6	—	にぶい橙色	透明釉	畳付き以外総釉	高台内面に目跡
26	碗	物原Ⅵ	—	5.2	—	灰白色	透明釉	畳付き以外総釉	高台内面巴削り
27	碗	物原Ⅴ5D	8.4	3.6	4.3	灰白色	透明釉	高台脇～高台内面無釉	
28	碗	物原Ⅲ3C	8.0	3.3	4.3	灰白色	透明釉	畳付き以外総釉	



第155図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(4)蓋

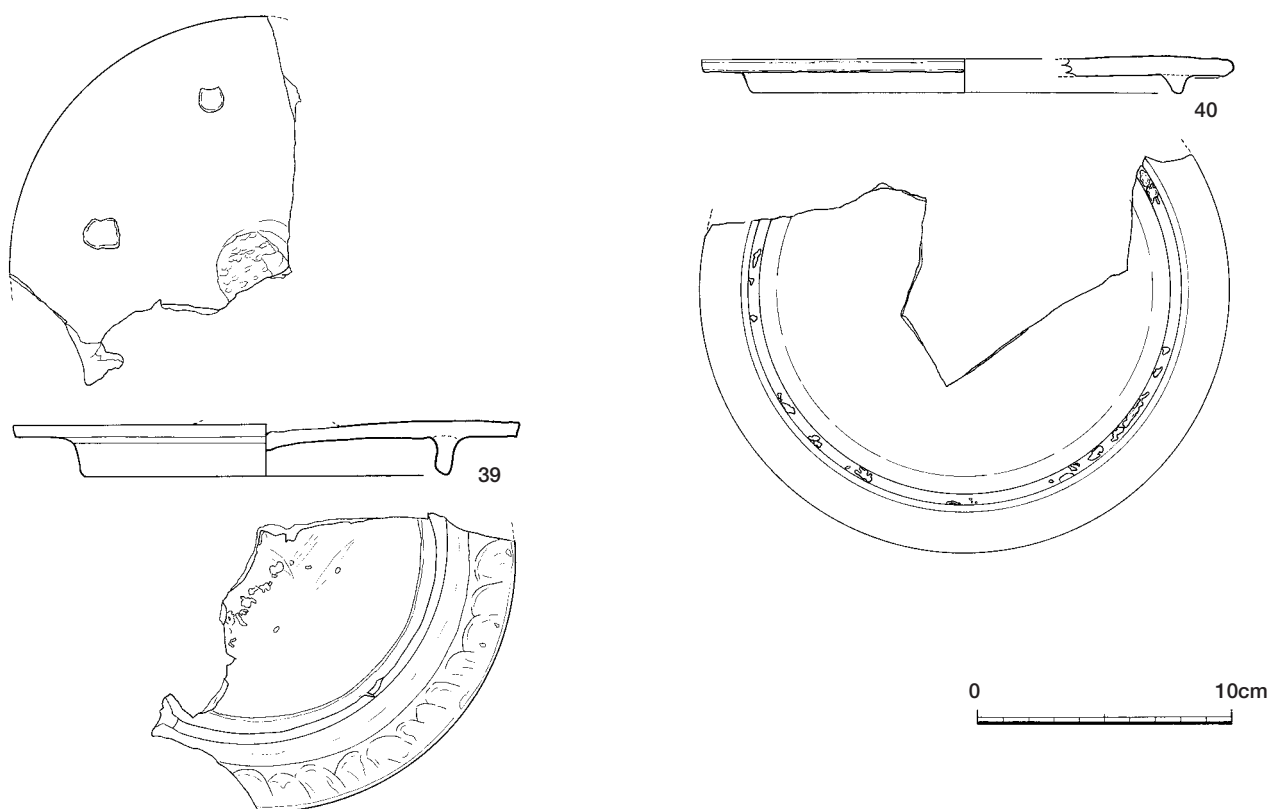
蓋 (第155・156図)

29は、円板状の体部の上面中央に宝珠状のつまみが付くものである。30も、上面中央に同様のつまみが付くが、下面には輪状の粘土紐を貼り付けて身受け部をつくる。31～40は、上面につまみが付かず、下面に輪状の粘土紐を貼り付けて見受け部をつくるものである。32は、下面に貼り付けられた粘土紐が、やや外側に開いた状態

の資料である。33は、下面に体部を製作する際のタタキ成形のあて具痕が看取される資料である。34・35は、下面に貼り付けられた粘土紐の先端が尖るようにつくられるものである。36・37は、上面がやや丸みを帯びる。38は、上面にヘラ状工具による筋状の調整が施される。

第87表 物原Ⅲ～Ⅳ 遺物観察表 3

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
29	蓋	物原Ⅴ	—	13.8	—	褐色	無釉	—	
30	蓋	物原Ⅴ	5.5	8.4	3.0	褐灰色	無釉	—	
31	蓋	物原Ⅵ	7.0	10.0	1.5	褐灰色	無釉	—	
32	蓋	物原Ⅵ	8.4	11.2	1.5	浅黄橙色	無釉	—	
33	蓋	物原Ⅴ	—	11.2	—	浅黄橙色	無釉	—	下面にタタキ目
34	蓋	物原Ⅵ	7.6	12.0	1.4	にぶい橙色	無釉	—	
35	蓋	物原Ⅵ	13.6	16.0	1.3	にぶい赤褐色	灰釉 明黄褐色	口唇部以外施釉	口唇部に貝目
36	蓋	物原Ⅵ	—	9.4	1.6	灰色	無釉	—	
37	蓋	物原Ⅵ	4.9	6.7	1.4	にぶい赤褐色	灰釉 緑黄色	—	
38	蓋	物原Ⅵ	11.6	14.0	1.5	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	上面のみ施釉	上面に沈線



第156図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(5)蓋

39・40は、大形のものである。

39は、見受け部の端部に指跡と思われる痕跡が看取される。下面に粘土紐を貼り付けた際、粘土紐と体部を密着させるため指でなでつけたものと思われる。上面には貝目も残る。

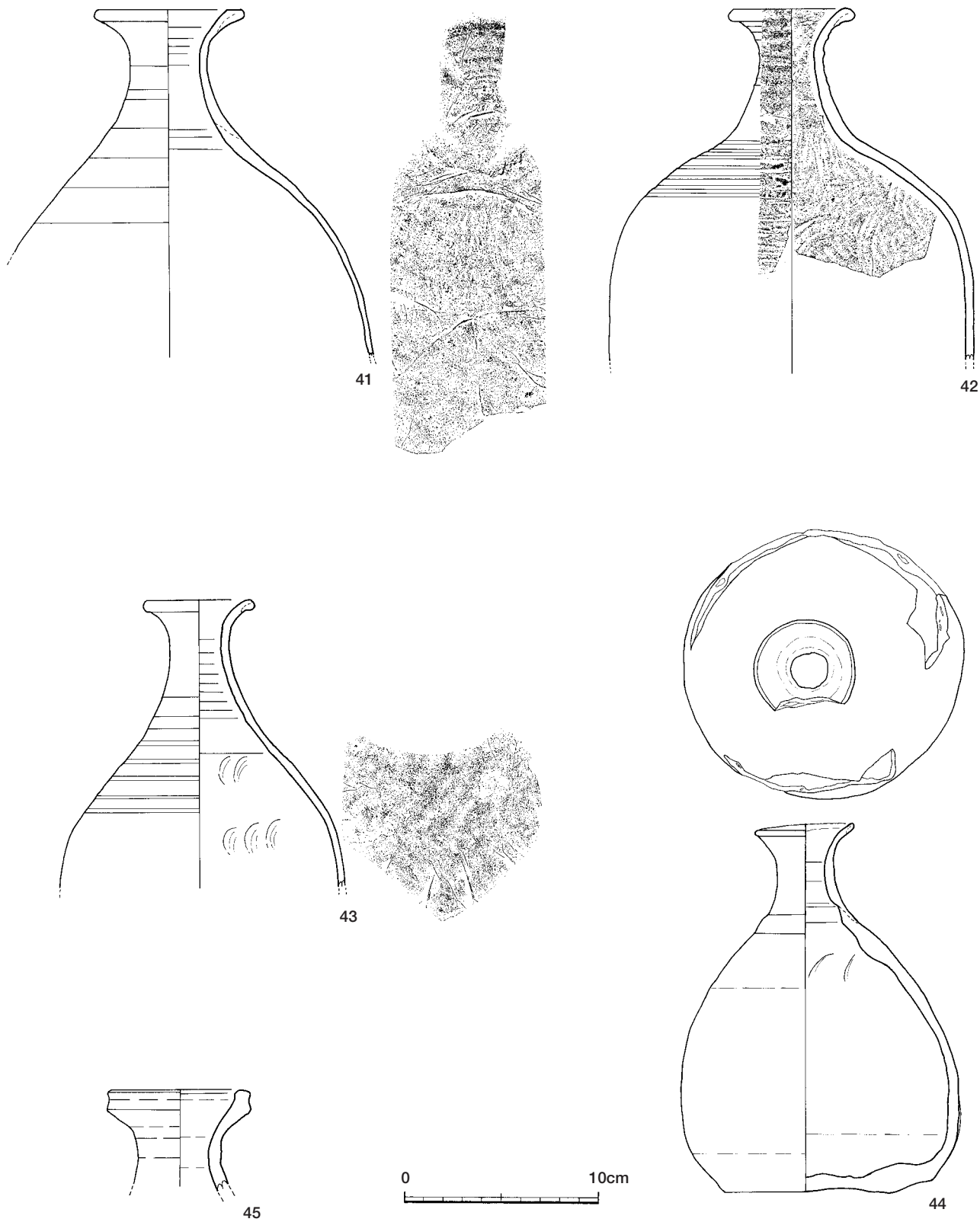
40は、下面に貼り付けた粘土紐の先端に、胎土詰貝目が残る資料である。

徳利（第157図）

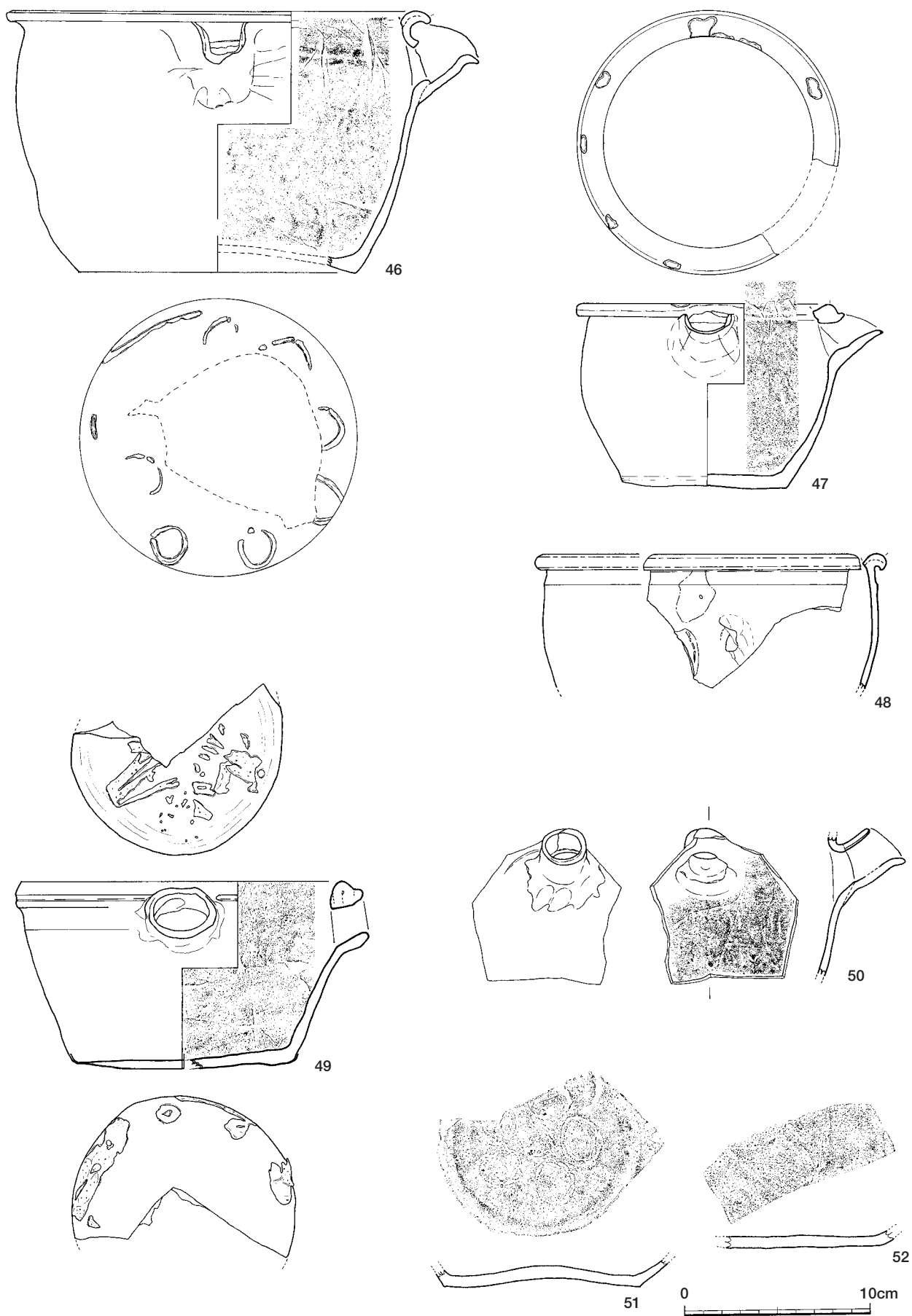
41は、外面に沈線を有しないもので、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。42は、肩部が張り、沈線を有するものである。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。43は、なで肩状の肩部に沈線が巡るものである。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。44は、なで肩で腰部に最大径を有する資料である。焼き歪みが見られる。45は、口縁部先端がやや肥厚し、「く」の字状につくられるものである。

第88表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 4

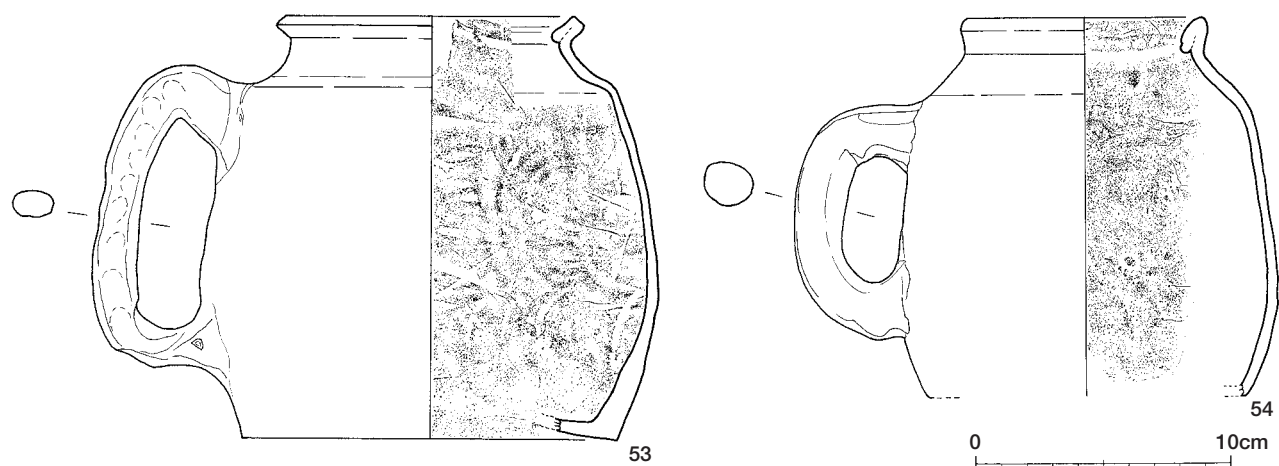
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
39	蓋	物原Ⅴ	15.2	20.0	2.1	褐灰色	無釉	—	上面に貝目
40	蓋	物原Ⅵ	17.2	21.0	1.3	灰褐色	無釉	—	口唇部に貝目
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
41	徳利	物原Ⅴ	7.4	—	—	灰褐色	鉄釉 緑黒色	内面頸部から 外面まで施釉	内面に同心円状タタ キ目
42	徳利	物原Ⅴ	6.5	—	—	黒褐色	灰釉 黒褐色	内面頸部から 外面まで施釉	肩部に沈線 内面に タタキ目
43	徳利	物原Ⅴ	5.8	—	—	灰褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	肩部に沈線 内面にタタキ目
44	徳利	物原Ⅵ	7.4	—	—	黒褐色	灰釉 緑褐色	全面施釉	内面にタタキ目
45	徳利	物原Ⅴ	5.2	10.6	19.0	灰褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	内面にタタキ目



第157図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(6)德利



第158図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(7)片口



第159図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(8) 把手付壺

片口（第158図）

46は、大形のものである。外底面には、貝目が残るが、口唇部には見られない。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。47は、小形のもので、口唇部には胎土詰貝目が残る。外面には、ヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される。48は、外面胴部中位に把手が付く資料であるが、把手部分は欠損している。49は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、1条の沈線を巡らす。片口部は、平面が楕円形で長さの短い注口状のものが付く。内底面と外底面にはイタヤガイの貝目が残る。50は、片口に分類したが、水注の可能性も考えられる。胴部に巻き口の短い注口状のものが付く。器壁が薄く、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。51は、底部である。内底面中央に貝殻が6枚置かれた痕跡が残る。52は、内底面に釘彫りの線が看取される資料である。

把手付壺（第159図）

把手付の壺として掲載するが、詳細な形状や用途等は不明である。残存部の状況から推測して、把手は一か所のみであると思われるが、把手の反対側に注口が付く可能性は考えられる。

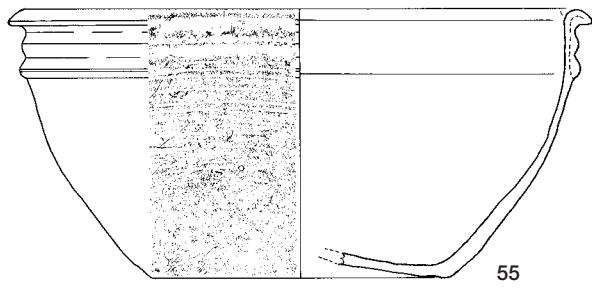
口縁部は内側に折り返して先端は丸くつくられる。口径と底径の差はあまりなく、肩部でやや張りを有する。

53は、把手部が扁平気味につくられ、口唇部には蓋受け部を設ける。釉は、蓋受け部を拭い取らず、全面にかけられる。内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。

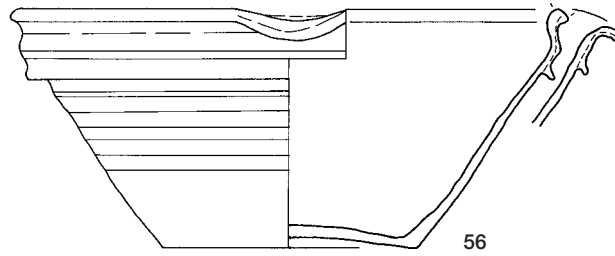
54は、53に比べやや小形で、把手部が丸みを帯びるものである。口唇部は蓋受け部を設けたものと思われるが、形状的に明瞭ではなく、蓋受け部を設けない可能性もある。釉は口唇部を含め全面に施釉され、内面にはタタキ成形時のあて具痕が同心円状に残る。

第89表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 5

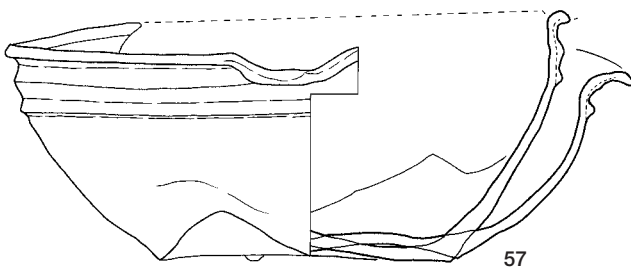
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
46	片口	物原Ⅲ	23.0	15.0	14.1	黒褐色	灰釉 黒褐色	口唇部以外 全面施釉	外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
47	片口	物原Ⅵ	14.1	9.0	9.8	—	灰釉 黄灰色	口唇部以外 全面施釉	口唇部に貝目 内面に同心円状タタキ目
48	片口	物原Ⅵ	25.4	—	—	黒褐色	灰釉 黄灰色	口唇部以外 全面施釉	
49	片口	物原Ⅴ	18.0	12.0	10.2	褐色	無釉	—	内底面・外底面に貝目 内面に同心円状タタキ目
50	土瓶	物原Ⅵ	—	—	—	黒褐色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
51	片口	物原Ⅴ	—	10.5	—	にぶい褐色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	内底面に貝目
52	片口	物原Ⅵ	—	—	—	灰赤色	灰釉 黄緑色	残存部全面施釉	外底面に貝目
53	壺?	物原Ⅵ	12.0	14.7	16.6	褐灰色	灰釉 浅黄色	全面施釉	内面に同心円状タタキ目
54	壺?	物原Ⅳ	9.7	—	—	灰褐色	灰釉 緑黒色	全面施釉	内面に同心円状タタキ目



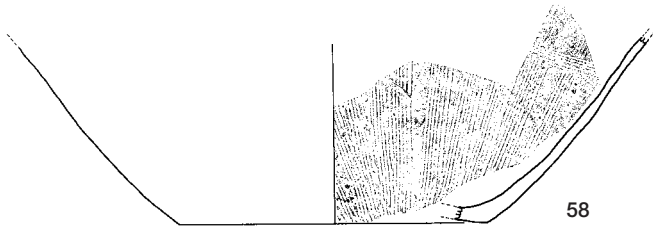
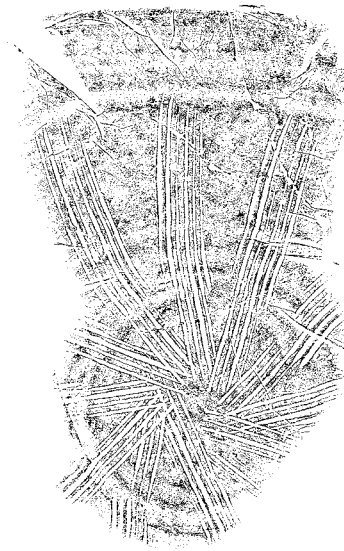
55



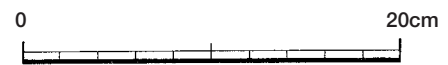
56



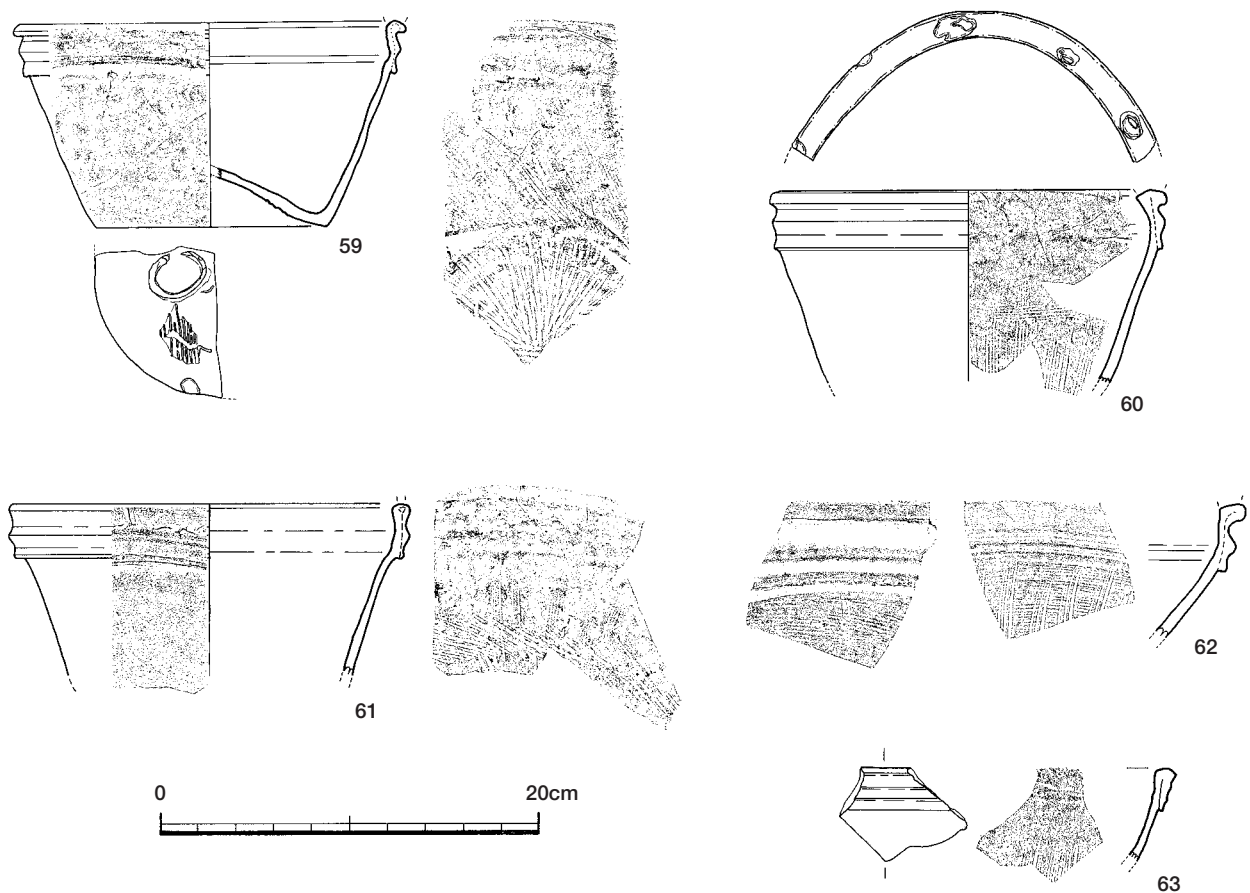
57



58



第160 図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(9)擂鉢



第161図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(10)擂鉢

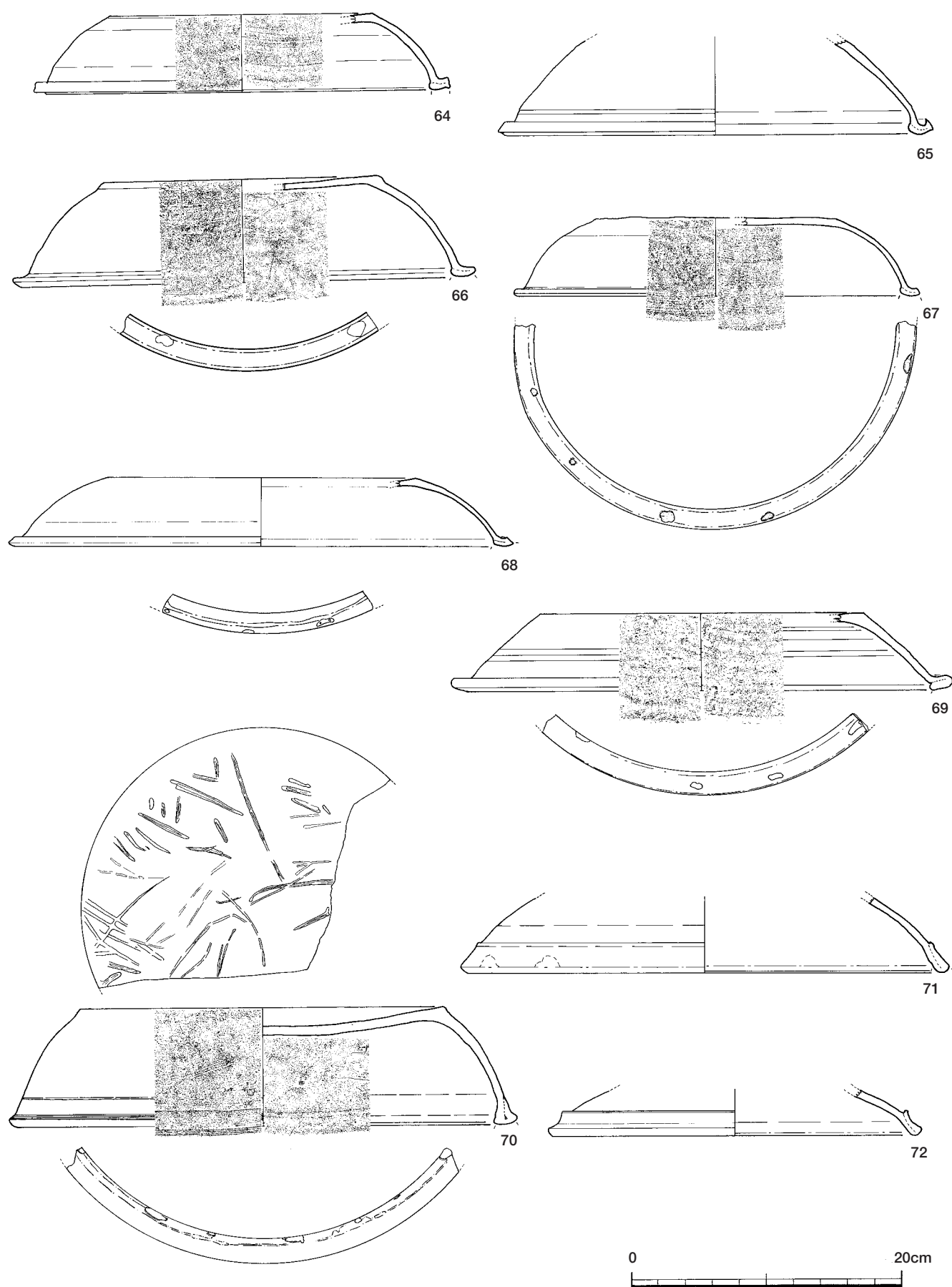
擂鉢（第160・161図）

55は、外面にヘラ状工具による横方向の調整が施されるものである。56は、外面口縁部下位に沈線を有する資料である。57は、焼き歪みの激しい資料で、内面には太い播り目が余白を空けて入れられる。58は、口縁部が欠損しているもので、内面には細くシャープな播り目が密に入る。59は、底部に歪みが見られる資料で、外底面には貝殻の腹縁と背面の両方の貝目が付く。60は、口唇部が幅広につくられ、貝目が残るものである。内面には細

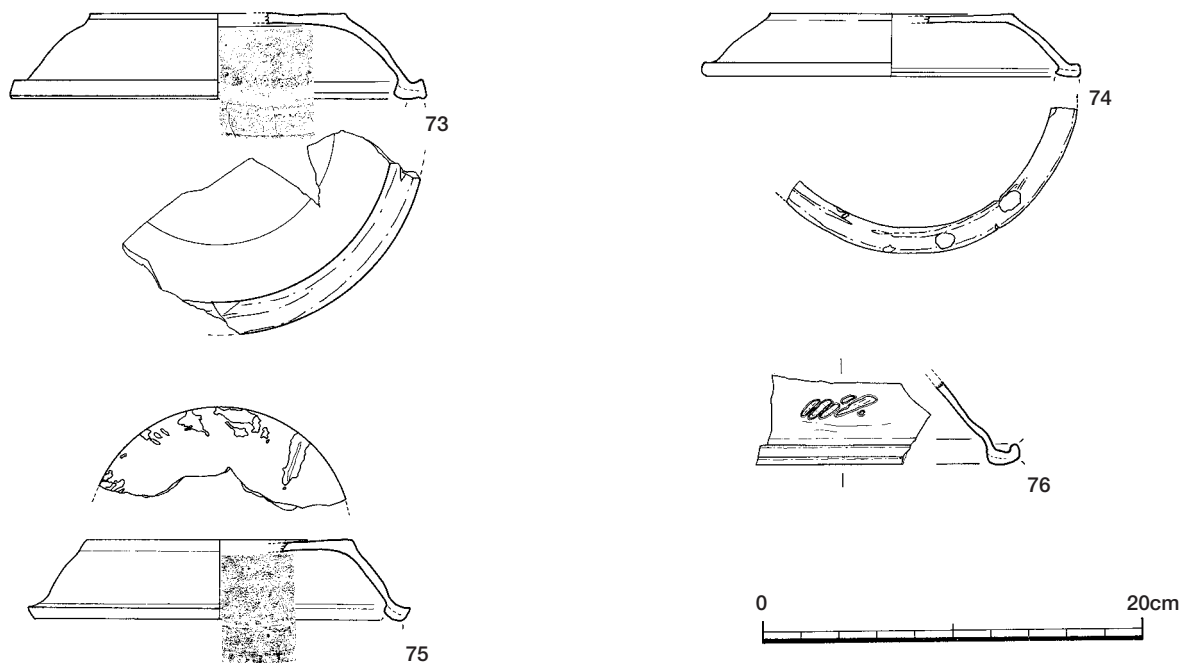
くシャープな播り目が縦方向に入り、さらに短い播り目が横方向に施される。61は、口唇部が丸くつくられるもので、内面には右斜め方向と左斜め方向の播り目が交差して施される。62は、口唇部が幅広につくられるもので、口縁部先端はやや外側に伸びる。外面は平行タタキ目が強く残り、内面はヘラ状工具による横方向の調整を施した後、細くシャープな播り目が入れられる。63は、外側に折り返して肥厚させた口縁部の外面に、2条の沈線を施した資料である。

第90表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 6

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
55	擂鉢	物原Ⅵ	34.0	16.3	14.1	暗褐色 白い砂粒入る	灰釉 緑灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
56	擂鉢	物原Ⅲ	30.6	13.5	12.6	灰褐色	灰釉 暗灰黄色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目 胴部に沈線
57	擂鉢	物原Ⅲ	—	15.0	—	黄灰色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	
58	擂鉢	物原Ⅵ	—	16.2	—	褐灰色	鉄釉 にぶい赤褐色	残存部全面施釉	
59	擂鉢	物原Ⅴ	20.8	12.0	10.8	黒褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	外底面に貝目
60	擂鉢	物原Ⅵ	21.0	—	—	褐灰色	鉄釉 にぶい赤褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
61	擂鉢	物原Ⅴ	20.9	—	—	黒褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	
62	擂鉢	物原Ⅴ	26.6	—	—	にぶい赤褐色 白い砂粒入る	鉄釉 にぶい橙色	口唇部以外全面施釉	
63	擂鉢	物原Ⅵ	—	—	—	灰色	鉄釉 灰色	残存部全面施釉	



第162図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(11)蓋



第163図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(12)蓋

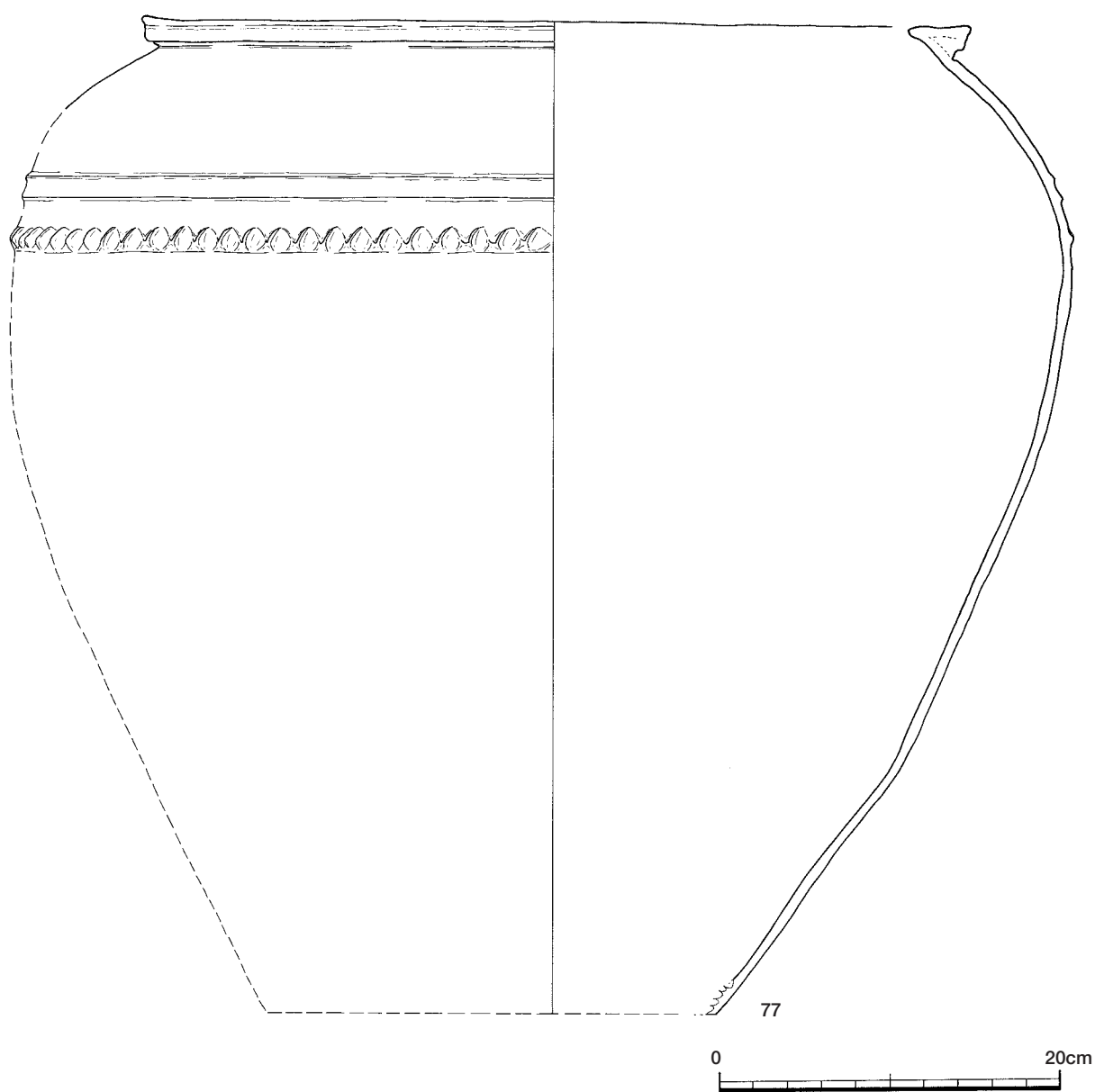
蓋 (第162・163図)

64～71は大形の資料で、72～76は小形の資料である。
64・65は、口唇部が内側は高く外側は溝縁状につくられるもので、胎土詰貝目が残る。64は、内外面にヘラ状工具による横方向の調整痕も看取される。66・67は、内外面にヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される。口唇部には胎土詰貝目が残る。68は、口唇部に胎土詰貝目と、他製品の口唇部の痕跡が残る。69は、胴部を粘土紐巻き上げで成形した後、轆轤によるナデ調整のみを施したものである。口唇部に胎土詰貝目が残る。70は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、断面を三角形状につくるものである。内外面ともにヘラ状工具による横方向の調整痕が看取される。上面には、施釉後、乾燥させ

るために製品を乗せたものの痕跡が付く。また、口唇部には、合わせ口で焼成した際の、他製品の口唇部が熔着する。71・72は、素焼きの資料で、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、1条の突帯をつくる。内面口唇部付近に他製品の釉薬が付着する。73は、口唇部が内側は高く外側は溝縁状につくられるもので、内面には横方向の調整痕が残る。74は、口唇部に胎土詰貝目が残る。75は、内面に横方向の調整痕が残る、施釉時に付いたと思われる指跡も看取される。76は、外面に貝目が付く資料である。

第91表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 7

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	上径	器高				
64	蓋	物原Ⅵ	30.8	—	5.7	黄褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
65	蓋	物原Ⅵ	32.0	—	—	明赤褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
66	蓋	物原Ⅵ	34.0	20.4	7.6	にぶい赤褐色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
67	蓋	物原Ⅵ	30.0	17.8	5.8	褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
68	蓋	物原Ⅵ	37.2	22.8	5.2	灰赤色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
69	蓋	物原Ⅲ	37.0	23.8	5.7	黄褐色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
70	蓋	物原Ⅵ	37.5	27.0	8.7	黄灰色	灰釉 黄灰色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
71	蓋	物原Ⅵ	35.9	—	—	灰褐色	灰釉 黄褐色	口唇部以外全面施釉	
72	蓋	物原Ⅵ	27.6	—	—	灰褐色	無釉	—	
73	蓋	物原Ⅵ	22.0	—	—	赤灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	上面に貝目
74	蓋	物原Ⅴ	19.0	12.8	3.3	褐灰色	鉄釉 黒褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目
75	蓋	物原Ⅴ	20.0	14.0	4.2	灰褐色	鉄釉 暗褐色	口唇部以外全面施釉	内面に指跡 上面に目跡
76	蓋	物原Ⅵ	—	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	外面に貝目



第164図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(13)甕

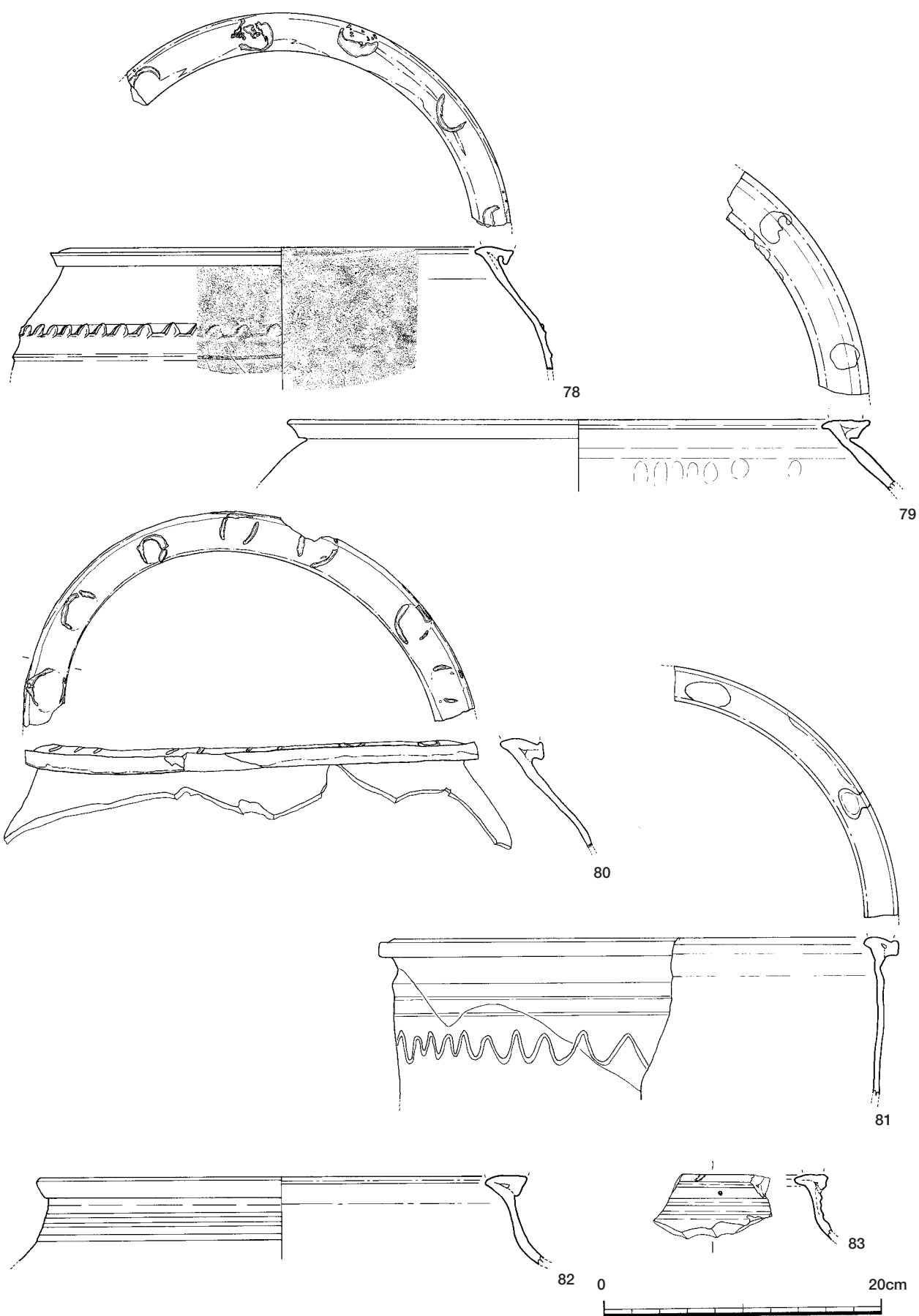
甕（第164・165図）

77～81は、口唇部が内側は高く外側は溝縁状につくられるもので、そのうち77～80は、肩部が膨らむ形状を呈し、81は、バケツ状の形状を呈する。77・78は、肩部に

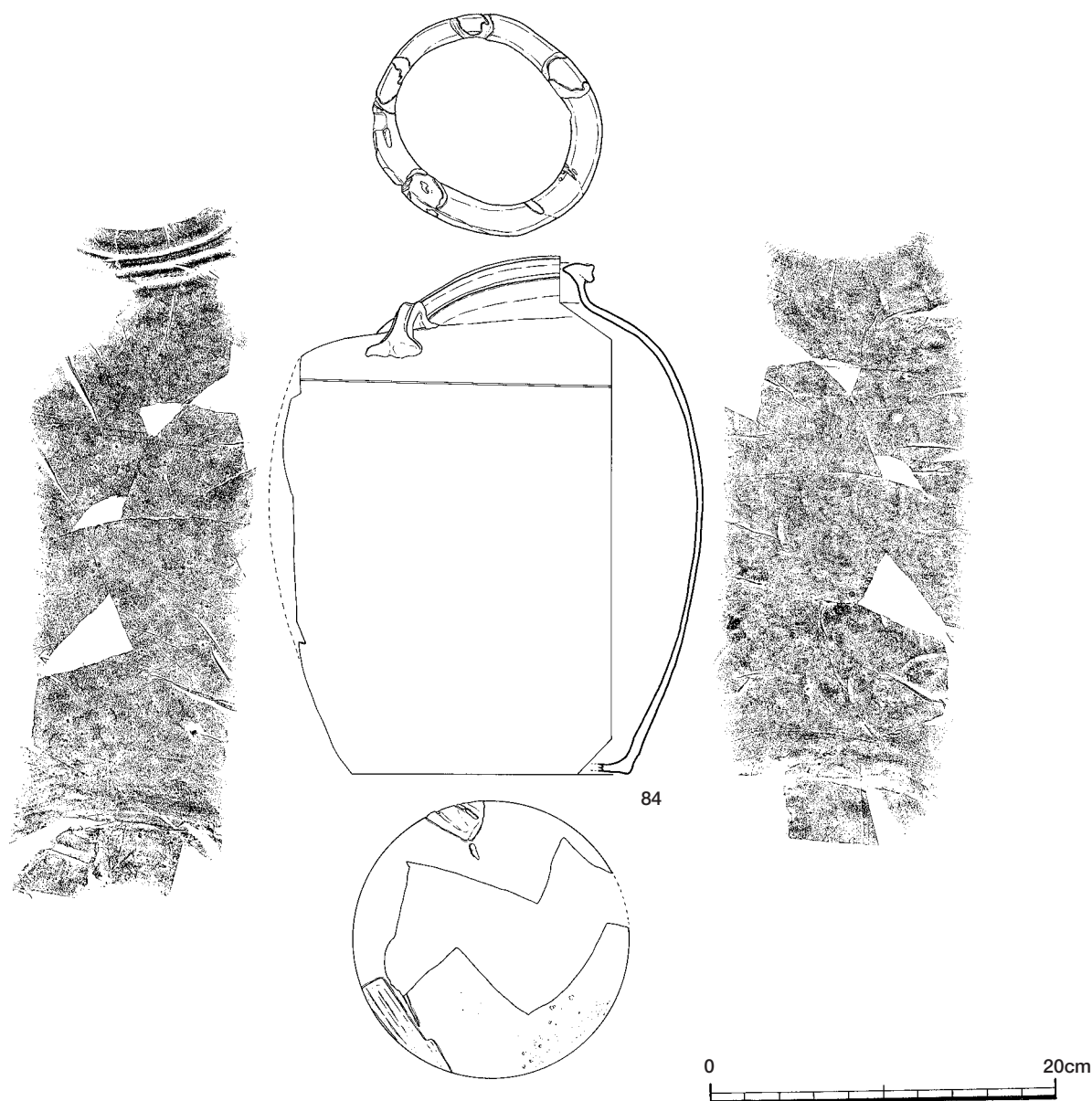
縄状の突帯が巡り、77は非常に大形で、焼き歪みも激しい。81は、器壁が薄手で、外面上位に波状文と沈線が施される。82・83は、口縁部を外側に折り返して断面を三角形につくるものである。

第92表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 8

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
77	甕	物原Ⅵ	47.5	26.0	58.0	暗赤褐色	鉄釉 暗赤褐色	残存部全面施釉	
78	甕	物原Ⅲ	13.9	—	—	灰褐色	灰釉 灰黄色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
79	甕	物原Ⅴ	42.2	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
80	甕	物原Ⅳ	—	—	—	褐灰色	灰釉 緑黒色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 内面タタキ目
81	甕	物原Ⅲ～Ⅵ	27.8	—	—	黄灰色	灰釉 灰黄褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 胴部沈線と波状文
82	甕	物原Ⅳ	35.4	—	—	にぶい赤褐色	灰釉 浅黄色	口唇部以外全面施釉	頸部に沈線
83	甕	物原Ⅳ	29.8	—	—	にぶい褐色	灰釉 緑褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目



第165図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(14)甕



第166図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(15)壺

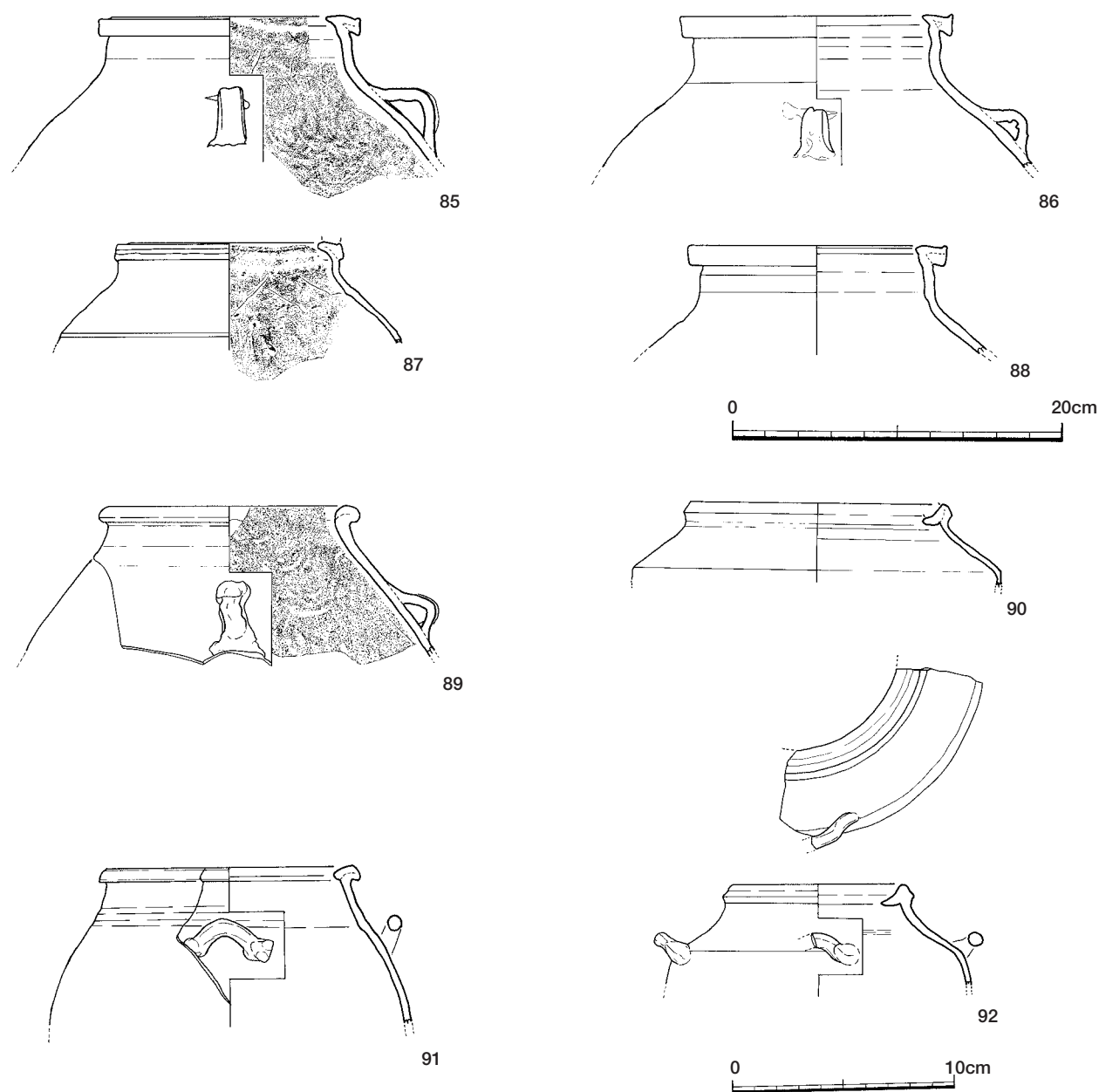
壺 (第166・167図)

84～88は、口縁部を外側に折り返して肥厚させるものである。84～86は、縦耳が付くが、全体の個数は不明である。84は、口縁部に焼き歪みの見られるもので、肩部に沈線が1条巡る。口唇部と外底面には貝目残り、外底面はイタヤガイを使用している。87・88は、耳の付かないものと思われ、87は肩部に沈線が巡る。

89～92は、口縁部を外側に折り、さらに内側に折り返しておさめるものである。90を除き、肩部に耳が付くが全体の個数は不明である。90・92は、蓋が伴うものと思われ、口縁部が蓋受け部状のつくりとなる。90は、水注の可能性も考えられる。

第93表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表 9

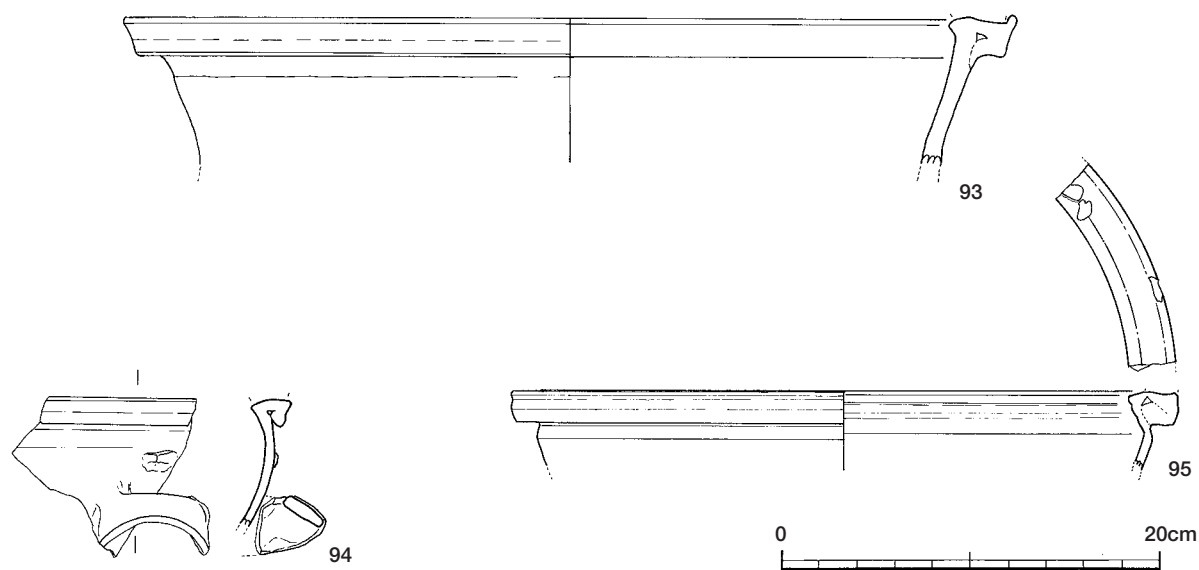
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
84	壺	物原Ⅳ	13.3	16.0	29.3	灰褐色	鉄釉 鈍い赤褐色	口唇部以外全面施釉	口唇部貝目 底部に目跡 内面に同心円状タキ目



第167図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(16)壺

第94表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表10

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
85	壺	物原Ⅳ	15.6	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	灰白色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
86	壺	物原Ⅴ	16.6	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	緑黒色	内面の一部以外 全面施釉	
87	壺	物原Ⅳ	13.8	—	—	灰赤色	灰釉	灰白色	口唇部以外全面施釉	
88	壺	物原Ⅳ	15.6	—	—	にぶい赤褐色	灰釉	灰緑色	内面の一部以外 全面施釉	口唇部に目跡
89	壺	物原Ⅵ	11.8	—	—	褐灰色	灰釉	暗赤褐色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
90	壺	物原Ⅵ	12.0	—	3.6	灰褐色	灰釉	浅黄色	口唇部以外全面施釉	
91	壺	物原Ⅵ	12.0	—	—	褐灰色	灰釉	暗赤色	残存部全面施釉	内面に同心円状タタキ目
92	壺	物原Ⅴ	8.0	—	—	灰黄褐色	灰釉	緑黒色	口唇部以外全面施釉	



第168図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(17)鉢・把手付甕

鉢・把手付甕（第168図）

93・95は、口縁部を外側に折り返して肥厚させ、「逆L」字状につづくもので、口唇部は、内側を高く外側を溝縁状に仕上げる。95は、口唇部に貝目が見られる。94は、把手付甕である。口縁部は外側に折り返して、断面を三角形につくる。

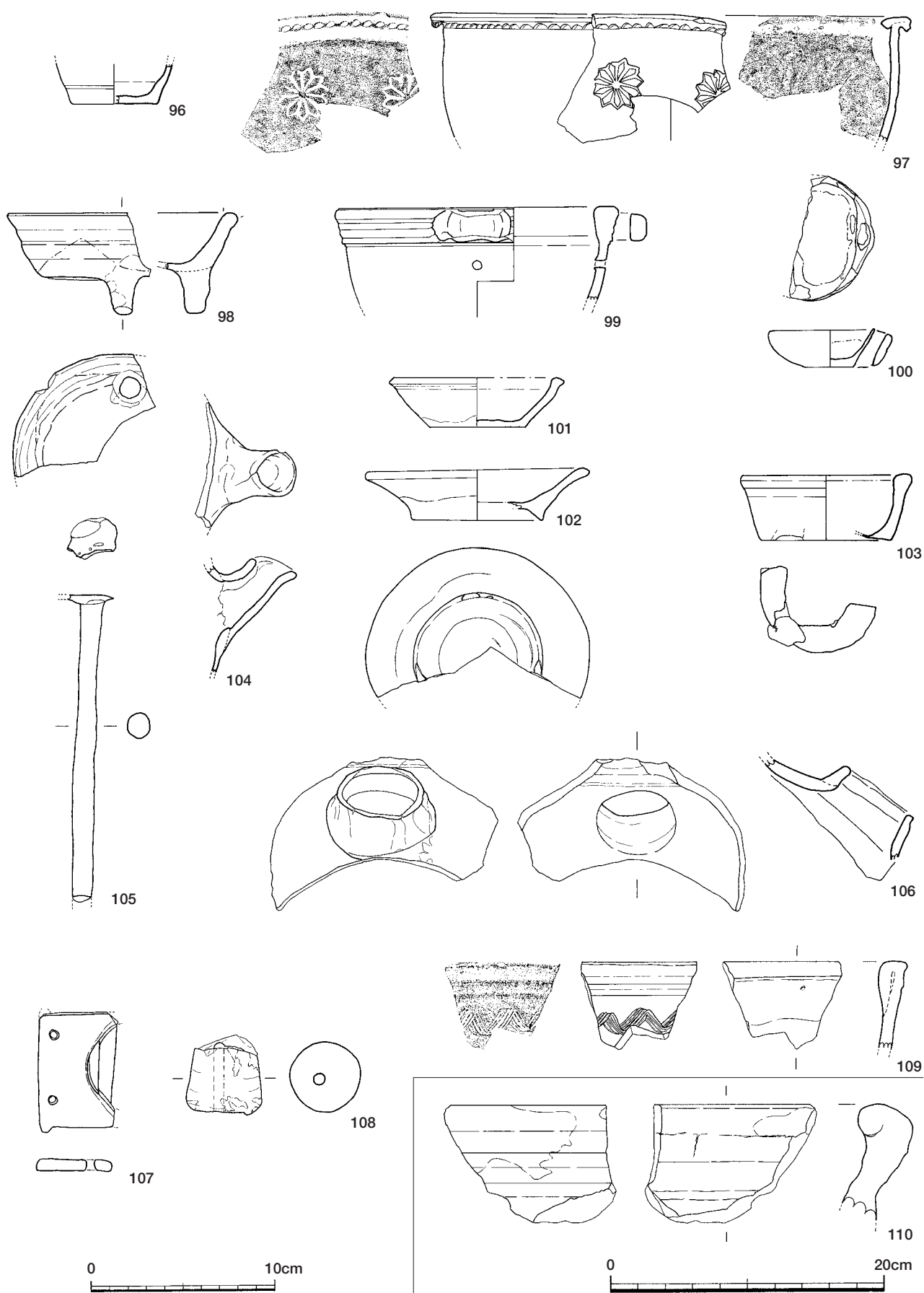
その他（第169・170図）

96は、粘土紐巻き上げで製作された素焼きの製品である。97は、素焼きの植木鉢である。外面にスタンプによる花文が刻印される。98は、香炉である。脚は3か所付くものと思われる。99・100は、鳥の餌入れであろうと

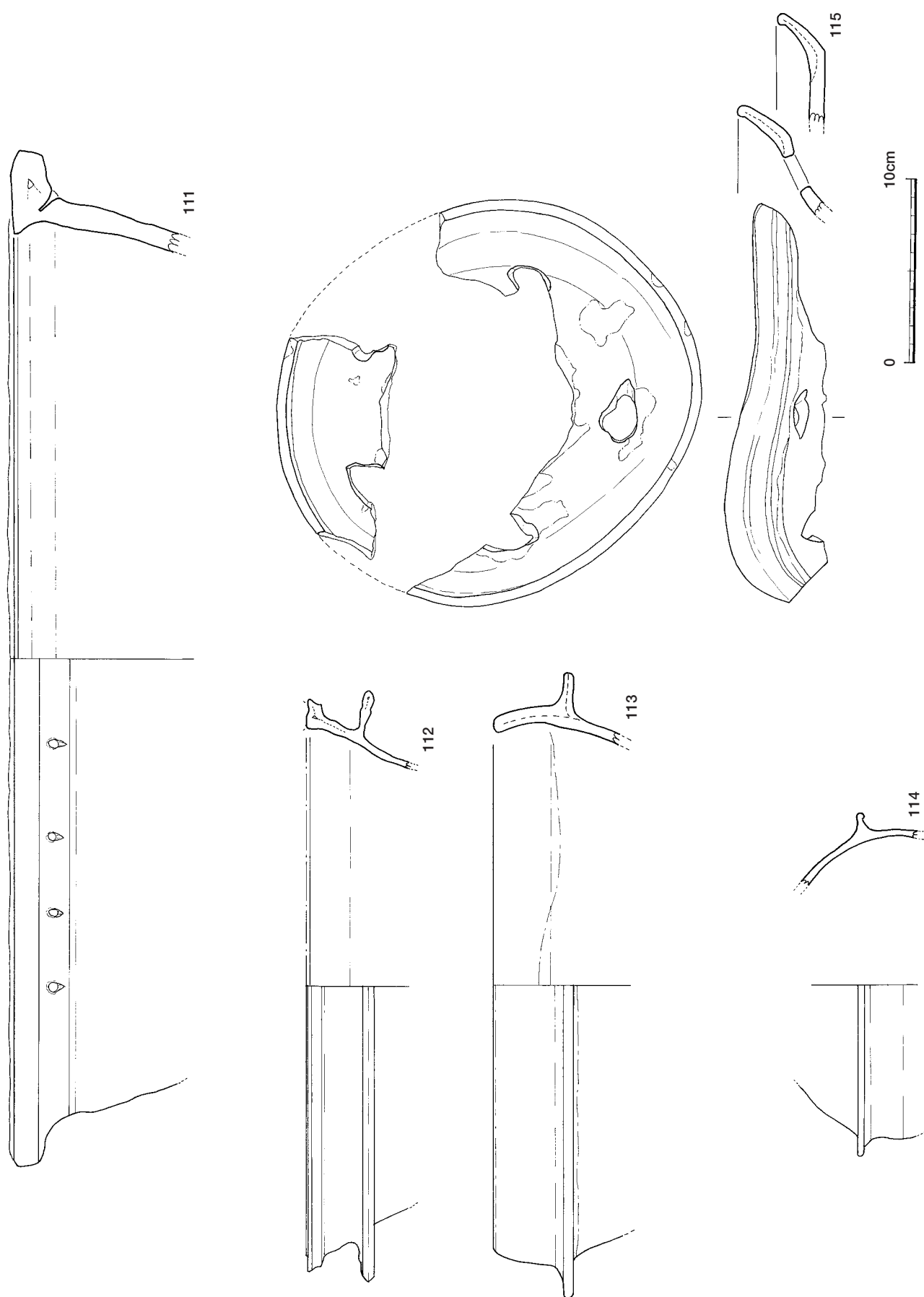
思われる。99は、他の用途も考えられる。101～103は、皿または小鉢のような形状であるが、用途不明である。102のみ施釉される。101・103は、外底面に目跡が残るため、窯道具の可能性もある。104は、水注の注口部分である。巻き口である。105は、釘状の形状を呈するもので、製品の一部分が外れたものと思われる。106は、甕瓶である。107は、用途不明の製品である。108は、トチンのような形状であるが施釉されている。中心には穴が通る。109は、外面に波状文が施された、素焼きの資料である。110は、素焼きの大形の製品になるものと思われる。口縁部は内側に折り曲げて丸くおさめる。

第95表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表11

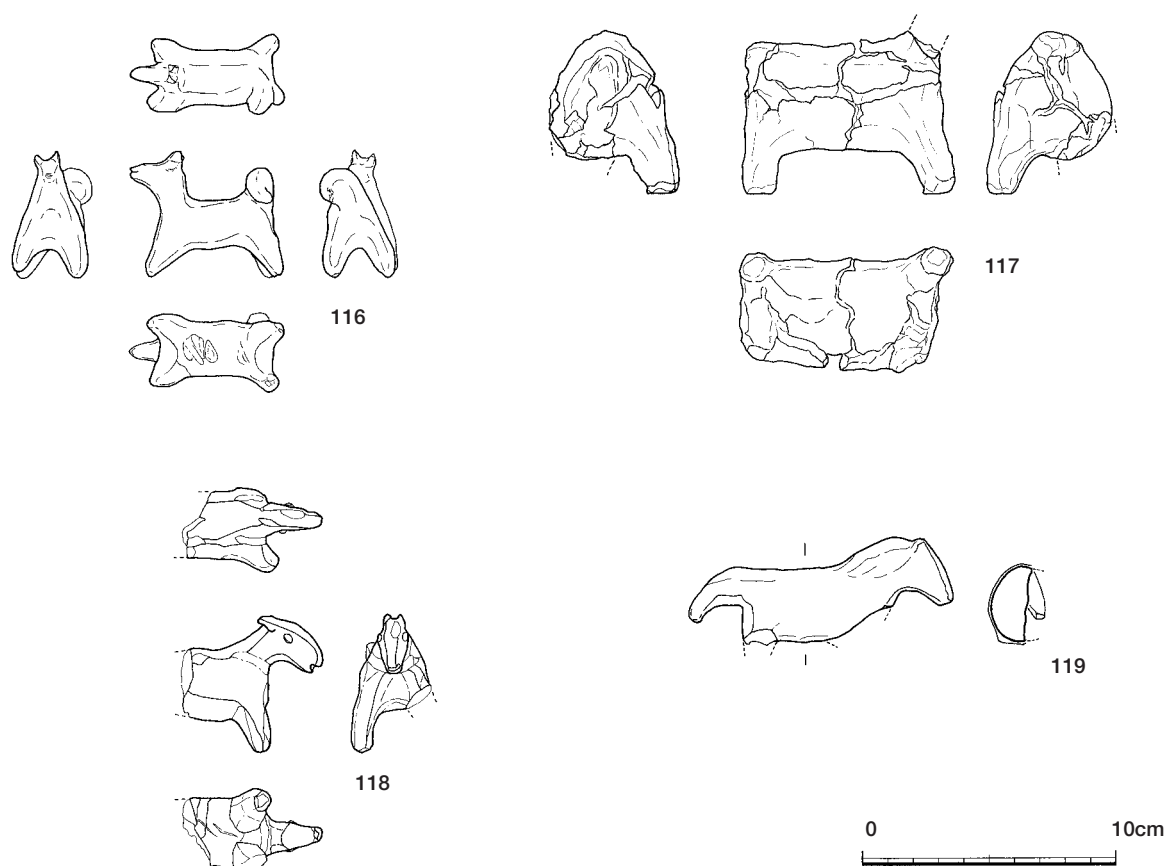
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
93	鉢	物原Ⅲ～Ⅵ	46.8	—	—	灰褐色	鉄釉？黒褐色	口唇部以外全面施釉	
94	甕	物原Ⅵ	32.0	—	—	暗赤褐色	灰釉 灰緑色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
95	鉢	物原Ⅲ	17.6	—	—	灰黄褐色	灰釉 黄橙色	口唇部以外全面施釉	口唇部に貝目
96	？	物原Ⅵ	—	4.7	—	黄灰色	無釉	—	
97	植木鉢	物原Ⅴ	35.2	—	—	褐色	無釉	—	内面に同心円状タキ目
98	香炉？	物原Ⅵ	12.0	—	5.5	灰黄褐色	灰釉 にぶい黄色	口唇部と内外底面以外全面施釉	
99	鳥餌入？	物原Ⅵ	15.2	—	—	褐灰色	無釉	—	
100	鳥餌入？	物原Ⅴ	6.8	4.2	2.0	褐灰色	灰釉 にぶい黄橙色	残存部全面施釉	口唇部に目跡
101	窯道具？	物原Ⅴ下	9.6	5.4	2.7	灰黄褐色	灰釉 褐色	残存部全面施釉	
102	皿？	物原Ⅲ	12.2	7.1	2.8	黒褐色	灰釉 黒褐色	残存部全面施釉	畳付に貝目
103	窯道具？	物原Ⅵ	9.2	7.2	3.6	褐灰色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	指跡
104	水注	物原Ⅴ	—	—	—	褐色	灰釉 灰緑色	残存部全面施釉	
105	不明	物原Ⅴ	—	—	—	灰色	無釉	—	
106	甕瓶	物原Ⅵ	—	—	—	褐色	灰釉 暗赤褐色	外面のみ施釉	内面に同心円状タキ目
107	不明	物原Ⅴ	厚さ0.6	—	—	にぶい赤褐色	無釉	—	
108	不明	物原Ⅲ	—	4.1	—	黒褐色	灰釉 浅黄色	残存部全面施釉	
109	鉢？	物原Ⅲ	—	—	—	暗灰黄色	無釉	—	外面に波状文
110	甕？	物原Ⅳ	—	—	—	灰色	無釉	—	



第169図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(18)その他



第170図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(19)その他



第171図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(20)動物型土製品

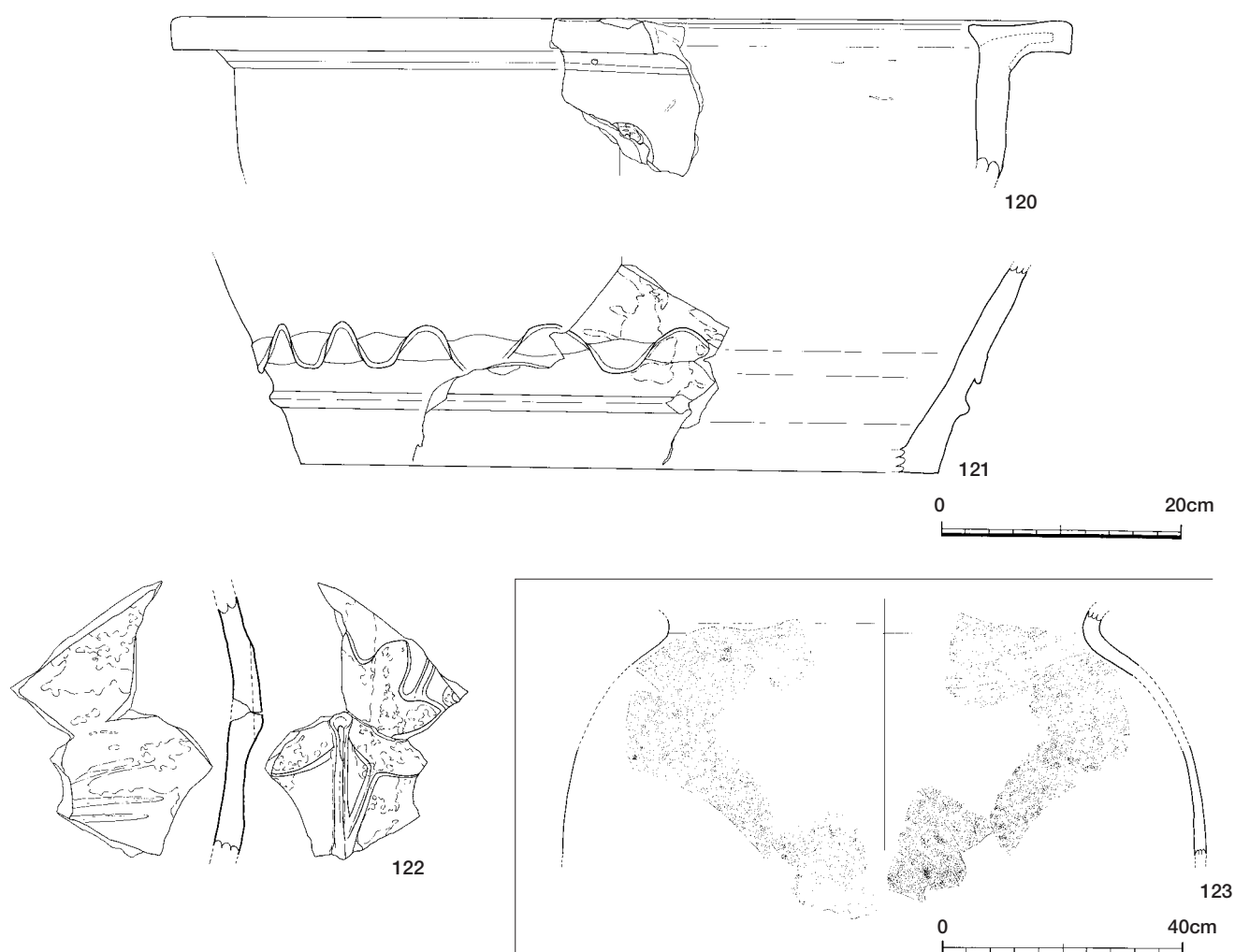
111は、素焼きで大形の製品になる資料である。外面口縁部下位には穿孔が施され、等間隔で巡るものと思われる。112～114は、羽釜と思われる資料で、羽部の下面以下底部にかけては施釉されず露胎となる。内面は、112は施釉されるが、113は口縁部の一部のみ掛かり、114は無釉である。また、112・113の口縁部から羽部は、外側に折り返した粘土でつくられており、その痕跡が断面に看取される。114は、胴部が口縁部にかけて窄まる形状を呈する。115は、用途不明の資料である。内底面には5か所穴が空くものと思われる。焼き歪みが激しい。

動物型土製品（第171図）

116は、犬型と思われる資料である。無釉と思われるが、焼成不良のため釉が熔けていない可能性も考えられる。117は、胴が太く、格部は貼り付けてつくられたものである。牛型の土製品と思われる。頭部と尾は欠損している。118・119は、馬型の土製品である。耳や鬣などの細部も表現されている。釉は全面に掛けられる。

第96表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表12

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬		施 釉	備 考
			口径	底径	器高					
111	甕?	物原Ⅵ	74.0	—	—	にぶい橙色	灰釉	灰緑色	残存部全面施釉	外面の口縁部下位に穿孔
112	羽釜	物原Ⅲ	32.2	—	—	緑黒色	灰釉	緑黒色	口唇部以外全面施釉	
113	羽釜	物原Ⅵ	28.8	—	—	褐灰色	灰釉	緑黒色	口唇部以外内面と外面上部施釉	
114	羽釜?	物原Ⅵ	最大径18.8	—	—	褐灰色	灰釉	灰緑色	内面と外面上部施釉	
115	不明	物原Ⅴ	23.2	19.4	—	暗灰色	鉄釉	緑黒色	外底面以外全面施釉	
116	動物型 土製品	物原Ⅲ	長さ6.2	幅3.2	5.0	橙色	無釉		—	
117	動物型 土製品	物原Ⅴ	—	—	—	暗褐色	灰釉	浅黄色	残存部全面施釉	
118	動物型 土製品	物原Ⅴ	—	—	5.4	褐色	灰釉	黒褐色	残存部全面施釉	
119	動物型 土製品	物原Ⅵ	長さ10.4	—	—	褐色	灰釉	黄橙色	残存部全面施釉	



第172図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(21)大型製品

大形製品（第172図）

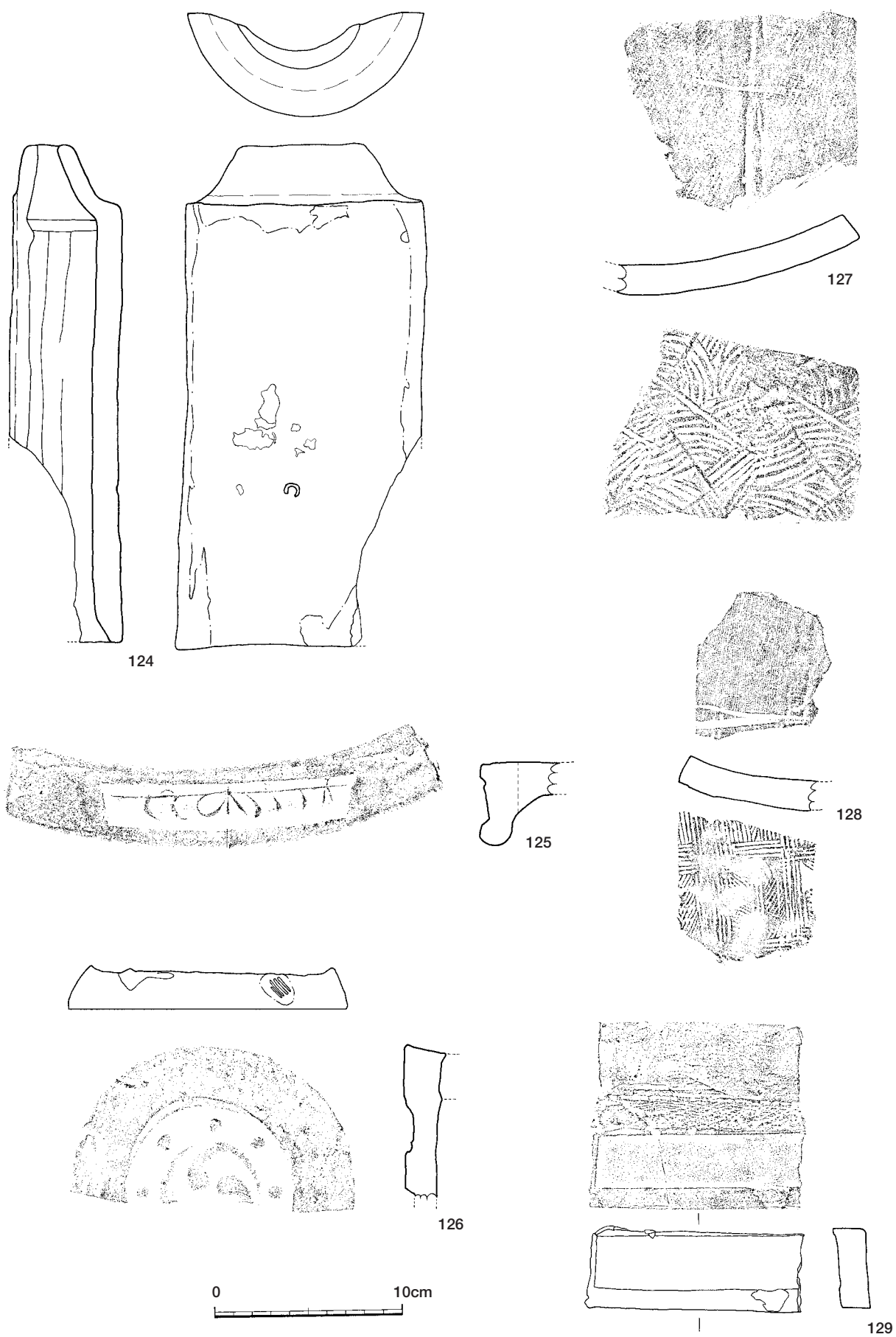
120～123は、器体が大きく器壁も厚い資料で、120～122は植木鉢や盆栽鉢と思われる。120は外面に貼り付け文の剥がれた痕跡が残る。121は、外面胴部下位に、縄状の貼り付け文を施す。122は、外面には植物と思われる貼り付け文が見られる。123は、壺型になるものと思われる、内外面はへら状工具により横方向の調整が施され、その痕跡が残る。

瓦（第173図）

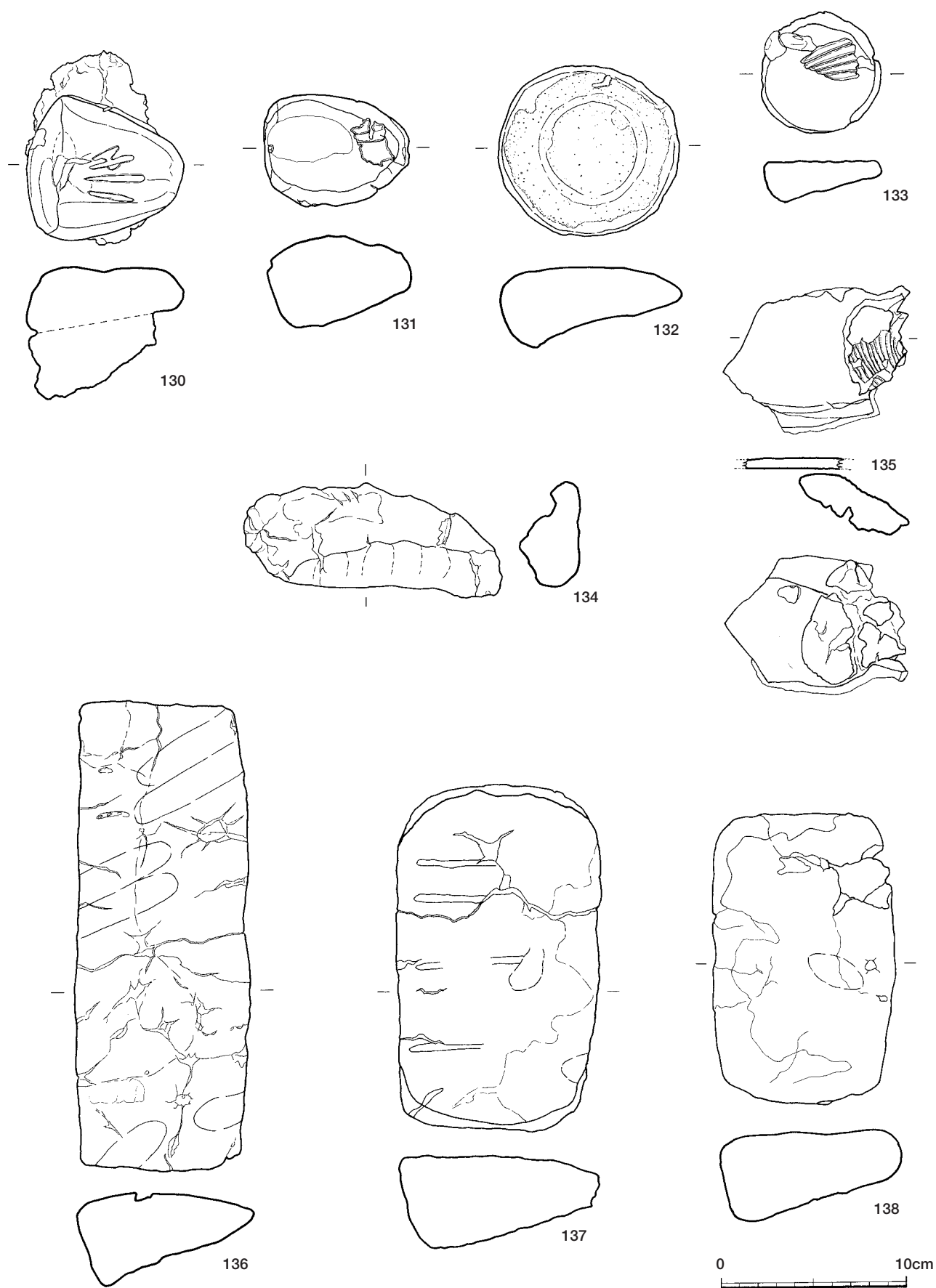
124は、丸瓦である。内面はへら削り調整が施される。125は、軒平瓦である。126は、軒丸瓦である。側面に貝目が残る。127・128は、下面にタタキ目の残る瓦である。朝鮮瓦に類似するが、胎土分析の結果堂平窯の製品であった。129は、瓦としたが、詳細は不明である。

第97表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表13

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
120	大型品	物原Ⅴ	74.8	—	—	にぶい黄橙色	灰釉 緑黒色	残存部全面施釉	
121	大型品	物原Ⅵ	—	52.6	—	にぶい黄橙色	灰釉	表面一部施釉	
122	大型品	物原Ⅳ	—	—	—	橙色	灰釉 にぶい黄橙色	残存部全面施釉	
123	大型品	物原Ⅳ	—	—	—	橙色	灰釉 にぶい黄橙色	残存部全面施釉	
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			長さ	幅	厚さ				
124	丸瓦	物原Ⅴ	26.5	12.7	3.5	にぶい赤褐色	灰釉 褐色	玉縁以外 上面のみ施釉	高さ5.7cm
125	軒平瓦	物原Ⅲ	28.5	21.1	1.5	にぶい橙色	灰釉 にぶい褐色	残存部全面施釉	
126	軒丸瓦	物原Ⅵ	2.2	—	2.4	にぶい褐色	灰釉 緑黄色	上面のみ施釉	
127	平瓦	物原Ⅲ	10.8	13.4	1.5	褐色	無釉	—	
128	平瓦	物原Ⅴ	—	7.5	1.5	褐色	無釉	—	
129	?	物原Ⅴ	11.1	4.2	1.7	明赤褐色	灰釉 暗灰黄色	残存部全面施釉	



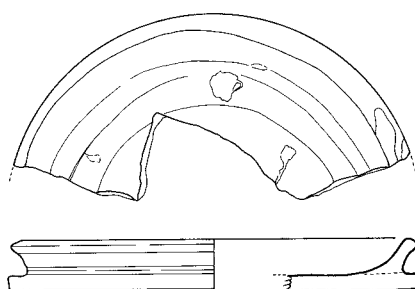
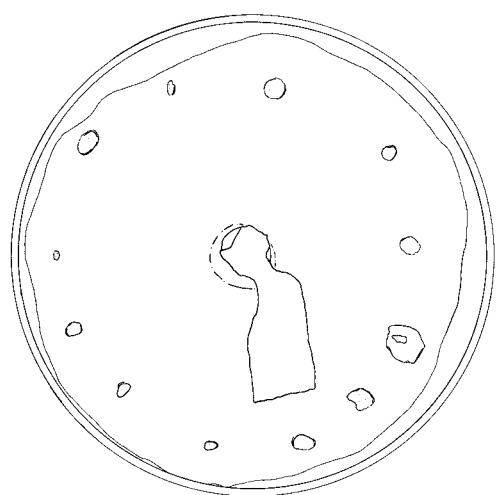
第173図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(22)瓦



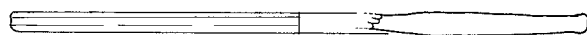
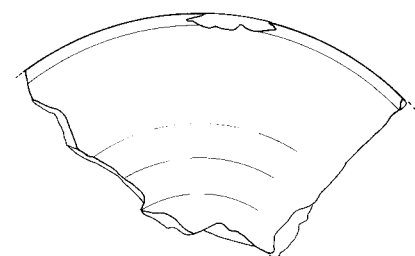
第174図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(23)窯道具



139



140



141



第175図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(24)窯道具

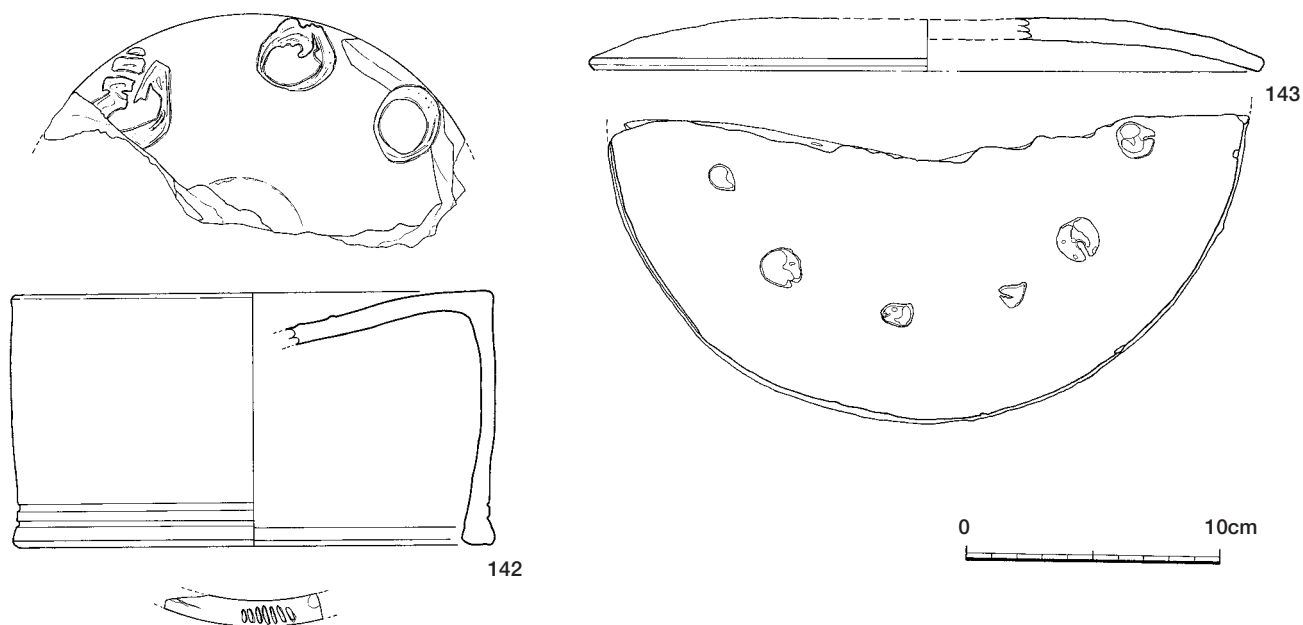
窯道具（第174～176図）

130～138は、ハマである。130は、上面にイタヤガイの貝目が残る。132は、上面に砂粒混じりの白色胎土が塗布され、高台痕が残る。134は、指跡が残る棒状のハマである。135は、製品の底部に平面が三角形で断面が馬

蹄形のハマが熔着した資料で、間に貝目が見られる。136～138は、平面が長方形で、断面が馬蹄形としたハマである。139・140は、窯道具と思われる資料であるが、使用方法等詳細は不明である。形状は、平面は円板状で中心に穴が穿孔され、その周囲に大豆粒大の大きさの突起が付く。上面の縁には、斜め上方に立ち上がるように粘土紐を貼り巡らす。139は上面にタタキ成形の痕跡が残り、下面に貝目が残る。141は挟み板と思われる。

第98表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表14

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			幅	長さ	高さ				
130	ハマ	物原Ⅵ	—	8.5	7.3	灰色	—	—	上面に貝目
131	ハマ	物原Ⅴ	—	7.7	5.0	褐色	—	—	上面に貝目
132	ハマ	物原Ⅴ	—	9.8	4.3	褐色	—	—	上面に白色砂粒と高台痕
133	ハマ	物原Ⅴ	—	6.3	2.2	にぶい赤褐色	—	—	上面に貝目
134	ハマ	物原Ⅲ	—	5.7	3.3	灰褐色	—	—	上面指跡 下面に貝目
135	ハマ	物原Ⅵ	—	—	—	灰褐色	—	—	上面に他製品付着 上面に貝目
136	ハマ	物原Ⅵ	9.5	—	5.1	明赤褐色	—	—	上面に指跡
137	ハマ	物原Ⅵ	10.8	—	5.0	赤橙色	—	—	上面に指跡
138	ハマ	物原Ⅵ	9.8	—	4.9	橙色	—	—	上面に指跡
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
139	窯道具	物原Ⅲ	19.2	18.8	1.9	にぶい橙色	無釉	—	上面目跡 下面貝目
140	窯道具	物原Ⅵ	16.0	16.4	2.1	灰黄色	無釉	—	
141	窯道具	物原Ⅳ	径22.8		厚さ0.8	浅黄色	無釉	—	



第176図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(25)窯道具

142は、サヤ鉢である。外底面に高台痕と貝目が残し、中央部が歪んでいることから、外底面を上向きにして、その上に製品を置き、さらに他のサヤ鉢を上から伏せて焼成したものと考えられる。堂平窯跡出土の他のサヤ鉢は、外底面を下にした状態で使用しているものがほとんどで、珍しい例であるが、状況に応じてサヤ鉢の向きを変えて使用していたものと思われる。143は、サヤ鉢の蓋と思われ、下面に目跡が残る。

堂平窯製品以外（第177図）

堂平窯の製品ではない資料を掲載した。144～154は、肥前系陶器である。147・149・150・152・153は、見込みに胎土目が見られる。151・154は、内面に鉄絵が描かれた資料である。

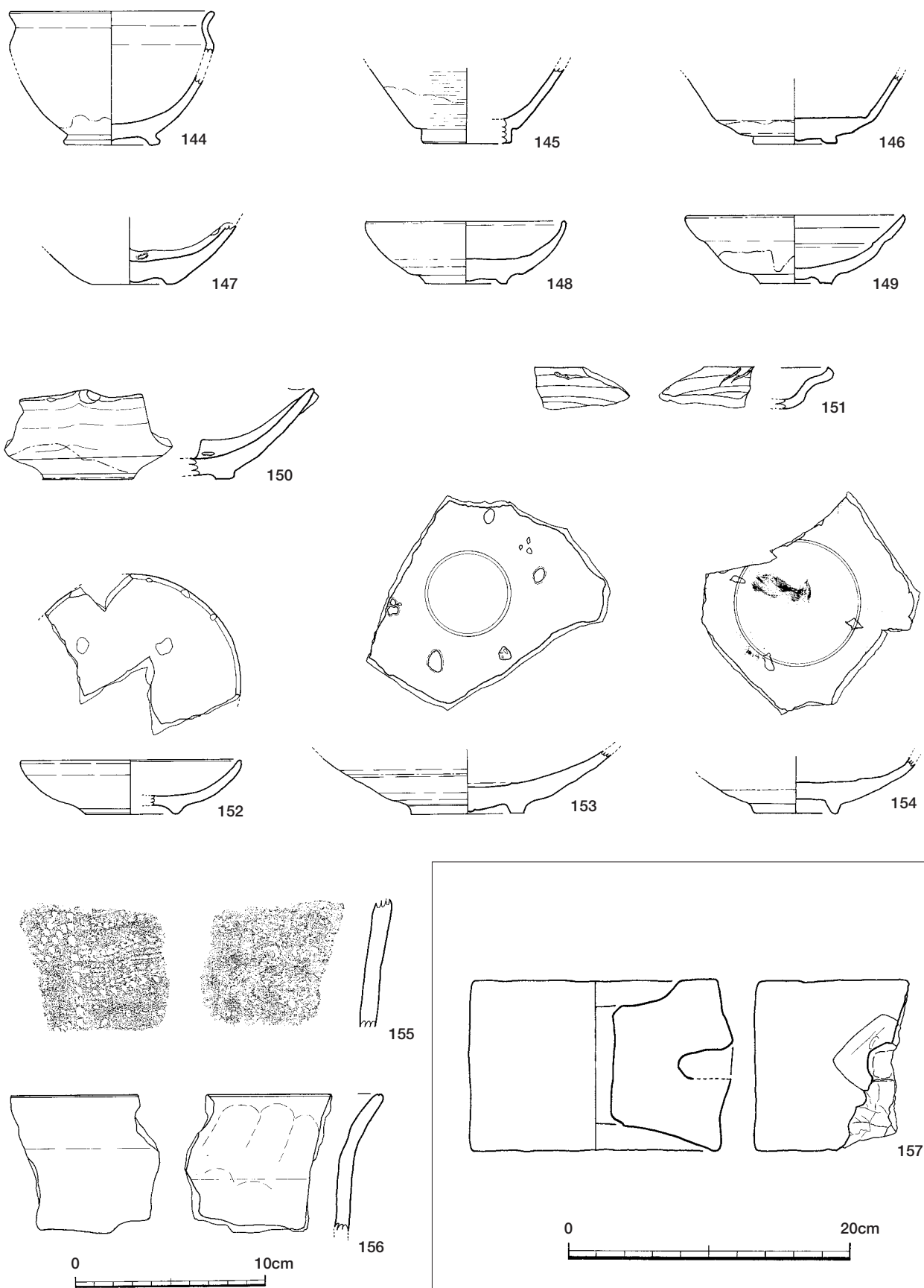
144は、図上復元を行ったもので、天目碗である。150は、口縁部が稜花となるものである。

155は縄文時代、156は古墳時代の遺物である。

157は石臼である。側面に取手を付けるための横穴が空けられる。

第99表 物原Ⅲ～Ⅵ 遺物観察表15

レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
142	サヤ鉢	物原Ⅴ	19.0	19.0	10.0	にぶい橙色	無釉		上面と口唇部に貝目
143	窯道具	物原Ⅳ	26.6	—	2.1	にぶい赤褐色 白い砂粒入る	灰釉 黒緑色	上面のみ施釉	下面に貝目
レイアウト 番号	器種	出土地点	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬	施 釉	備 考
			口径	底径	器高				
144	碗	物原Ⅴ・Ⅵ	10.8	4.8	6.9	黄灰色	鉄釉 黒褐色	内面と外面腰部まで施釉	
145	碗	物原Ⅴ	—	4.6	—	にぶい黄褐色	灰釉 黄褐色	内面と外面中位まで施釉	
146	碗	物原Ⅲ	—	4.5	—	黄灰色	灰釉 灰色	内面と外面腰部まで施釉	
147	碗	物原Ⅴ	—	4.3	—	明赤褐色	灰釉 灰白色	内面の全部と外面の一部に施釉	見込みに目跡
148	碗	物原Ⅴ	10.2	4.2	3.3	灰白色	灰釉 緑色	内面と外面腰部まで施釉	
149	碗	物原Ⅴ	11.6	3.8	3.6	にぶい赤褐色	灰釉 灰色	内面と外面腰部まで施釉	見込みに胎土目
150	皿	物原Ⅵ	14.0	5.6	4.7	褐灰色	灰釉 暗灰黄色	内面と外面腰部まで施釉	見込みに胎土目
151	皿	物原Ⅲ	22.0	—	—	にぶい褐色	灰釉 にぶい褐色	残存部全面施釉	
152	皿	物原Ⅳ	11.6	4.8	2.9	にぶい黄褐色	灰釉 灰白色	内面と外面腰部まで施釉	見込みに胎土目
153	皿	物原Ⅴ	—	6.0	—	にぶい橙色	灰釉 灰黄褐色	内面と外面上位まで施釉	見込みに胎土目
154	皿	物原Ⅲ	—	4.4	—	明褐色	灰釉 褐色	内面と外面中位まで施釉	見込みに鉄絵・胎土目
155	縄文式 土器	物原Ⅲ～Ⅵ	—	—	—	黒色	無釉	—	
156	甕	物原Ⅲ	—	—	—	黒褐色	無釉	—	外面ハケ目 内面ナデ
157	石臼	物原Ⅴ	上径17.5	17.7	12.0	赤色	無釉	—	



第177図 物原Ⅲ～Ⅵ出土遺物(26)堂平窯製品以外

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（106）
南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ
（伊集院 IC ～市来 IC）

堂 平 窯 跡

第 1 分冊（3 分冊中）

発行 平成18年12月
編集 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
印刷 株式会社朝日印刷
〒890-0055 鹿児島市上荒田町854－1